昭和五年十一月一日印刷
昭和五年十一月十日發行

國譯一切經 本緣部 八

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園七號地十番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所 大東出版社
東京市芝區芝公園地七號地十番
振替東京一九四七一番
電話芝（二）一一六番
（三）〇四〇番

製本所 兩角製本所

索　　引

(頁數は通頁を表す)

—ア—

阿育 63
阿修羅 10
阿耨多羅 Anuttara 101
阿毘曇 Abhidharma 135
阿輸迦王 Aśoka 82
阿羅漢 Arhat 22
阿練若處 Arāṇya-sthāna 107
惡行數 280
安穩 52

—イ—

伊羅鉢 Erāpattra 48
伊羅撥象 Erāpattra-nāga 259
伊蘭 Elaṇḍa 24
因陀羅 Indra 135
婬女 Goṇikā-dārikā 72

—ウ—

有爲法 53,303
有女想 77
有林 Bhava-vana 167
憂悅伽 272
優尸羅 230
優婆塞 Upāsaka 9
優婆毱多 Upagupta 167

—ヱ—

壞色 157
慧命 Ayuṣmany 87
衛世師論 Vaiśeṣika 14
演法 258
圓光 124
閻浮提 Jambu-dvipa 12
閻羅の羅刹 107

—オ—

王 Rājā 58
王耶陰 65
黄公 72

億耳 Koṭikaṇṇa 68
陰界 223
陰界入 98
陰身 Skandha kāya 57, 296

—カ—

可愛 61
伽翅 228
枷羅毘羅鬘 Karavira-mālā 226
迦葉 Kaśyapa 24, 82
迦葉佛 Kāśyapa 174
迦陀羅 Khadipa 29
迦蘭陀 Karaṇḍava 242
戒相 48
渇愛 Tṛṣṇā 45
餓鬼 Preta 32
甘露 Amṛta 9
甘露の城 135
漢地 Cina 137

—キ—

鬼神 303
鬼神村 Bhūta-grāma 50
敎戒 49
經行 68
脇 Pārśva 9

—ク—

功德天 Sokṣmī 74
苦際 Duḥkha-anta 57
拘沙種 Kuṣana 104
拘陳 Kaumudinī 259
鳩熱多羅 Kuajottarā 132
鳩盤荼 Kumbhaṇḍa 167
瞿曇 Gautama 92
瞿曇彌衣 25
瞿沙 Ghoṣa 129
具足戒 145
屈申 65
群生 Bahujana 42

—ケ—

華氏城 Pataliputra 14
華應 80
夏坐安居 Vaṣa-Vāsa 32
月光王本生 338
見諦 52
結使 14
乾陀羅 Gandhāra 9
健陀羅 13
揵椎 Ghaṇṭa 278
幻師 Māyākāra 97
眼匡 75

—コ—

五家の共有 88
五識 98
五熱 Paṃcatapās 31
五欲 Pañca-kamayuṇa 31, 311
牛王 9
功巧 197
恒沙 53
黒迦留陀夷 Kālodayin 161
金塗 135

—サ—

細滑 98
最後身 255
最勝業者 271
最勝尊 Anuttarya 9
薩婆室婆 Sarvāstivādin 9
三惡道 Trayôpāyah 34
三有 Trayo bhavāḥ 9
三界大眞濟 100
三危脆 65
三業 36
三種の神變 282
三十三天王 35
三十六種の物 66
三障 53
三藏 Tri-piṭakaṃ 52

三達智 Tisrovidyaḥ 53

—シ—

尸陀羅木 Śaivala-latā 97
四種結 106
四種人喩 153
四衆 Catvāri pariṣad 77
四諦 39
四顚倒 289
四縛 254
四兵 183, 312
四不壞 108
四不壞淨 139
四魔 312
四無所畏 134
四無量心 309
止觀 36
市易の法 108
至羅 Cirā 132
師子 Siṃhapura 28
師子吼 Siṃha-nāda 53
自恣 162
自然智 167
時衆 73
時施 Kāla-dana 308
色出要 90
色習 Rūpa-samudaya 90
色力 43
識之幻師 97
七覺 Sapta-bodhyaṅga 96
七覺意 254
七種財 284
七珍 17
七菩提分 308
出期 71
出世 Sokôttara 36
悉蹴 88
沙彌 Srāmaṇera 22
沙門 Śramaṇa 32
舍不 Sāpa 77
舍利 Sarīra 105
奢摩他 Śamatha 164
釋迦羅 Śākala 281
釋子 Śakya-putra 49
釋師子 Śakya-siṃha 49
釋天王 Śaka-indadeva-raja 43
石室國 Aśmakā 49
石密 145
手羅 Śura 172
須彌羅 Sumitra 295
須曼花 Sumanā 29
須鬘 Sumati 96
種子 182
衆惣 70
樹赤華 70
修多羅 Sūtra 43
修多羅說 164
十二因緣 15
十三法 282
十六波羅延 Pārāyana 131
十力 Daśabala 18
習 Samudaya 150
重擔 Bhāra 44
初禪 256
諸有 90
諸行 Sarva-saṃskarā 98
諸見の網 71
諸根 Sarva-indryāni 19
稱適 102
精進 Virya 54
聖種 Ārya-vaṃśa 45
辛頭 Sindhu 26
眞金 17

—セ—

世八法 245
世尊 36
生死逆順經 90
施戒論 99
施無畏者 Abhaga-dāta 37
栴檀廚尼吒 57
旃陀羅 Caṇḍāla 139
薝蔔 Campaka 24
瞻默 12

—ソ—

僧伽藍 Saṃgharāma 22
僧伽梨 Saṃghāti 177
僧佉論 Sāṅkhya 14
僧跋 Sampragata 247
造諂 312
相輪の手 157

—タ—

多子塔 Bahuputra-caitya 105
多羅 Tāla 69
多邏羅 271
墮落 249
帝釋 Śakra-indra 45
大會 314
大濟 84
大仙 Maharṣi 12
大地の忍び 171
大怖畏 52
達摩地那 Dharma-dinnā 132
痰癊 77
檀越 Danapati 22

—チ—

知事 Karmadāna 79
中陰 294
中道 187
晝闇山 tamasā-Vana 80
桴蒲 322
長壽王 Dirgāya 104, 159
調御 Sarathi 315
調御丈夫 Puruṣa-damya-sārathiḥ 101
調伏の法 107
塚間 76

—ツ—

頭然 52
月の初生 74

—テ—

鐵圍山 Cakravāḍa 168
天道 87
天の乘載 Deva-yāna 324
轉法輪 Dharma-cakravarti 123

—ト—

兜羅樹 Tūla 71
抖擻 Dhūta 241
塔廟 14
道 Gamin 52
道跡 52
獨 134
突羅闍 Bharadvāja 25

—ナ—

南無 Namaḥ 41
難有の想 116

—ニ—

二見 15
二六の法 282
尼犍陀 Nirgantha 106
尼陀伽 Nidāgha 106
如來 Tathāgata 12
任婆 Nimba 76
忍辱仙 Ksantideva 207

—ネ—

涅槃 Nirvāna 36

—ハ—

波曇花 Kadamba-puṣpa 171
波旬 Pāpiyas 150
破瓦 Kapāla 17
婆伽婆 Bhagavān 106
婆須 Vāsaki 138
縛韋 77
婆羅皷 62
八解脫 116
八正道 36
八部 127
八難處 Aṣṭa-akṣaṇa 118
八味 312
般涅槃 Parinirvāna 53
般遮于瑟 Pañcavārisika 79
半伽趺坐 255
攀緣 122

—ヒ—

比丘 Bhikṣu 33
毘沙門 Vaisramaṇa 45
毘闍延堂 179
毘紐天 Viṣṇu 10
毘陀羅 Vetāla 76
頻婆娑羅王 Bimbisāra 32
白四羯磨 145

—フ—

不應作 157
不語法 185
不請の親友 134
不淨觀 78
不淨匿 78
不淨と數息 123
富那 Puṇyayaśas 9
富那伽 207
富蘭那迦葉 Pūraṇa-kāśy-apa 106
福田 309
伏藏 42
弗羯羅犢 Puṣkaravasti 79
佛本行 124
分衞 Piṇḍapāta 124

—ヘ—

標相を說かず 108
編椽 84

—ホ—

菩薩 124
法眼淨 136
法身 Dharmakāya 187
法商主 96
放牛女 Gopikā 96
梵 Brahman 43
梵行 Brahma-cariya 24

—マ—

摩尼 Mani 28
摩竭魚 Makara 43
摩醯首羅 Maheśvara 10
摩突羅 Matkurā 9
摩羅 230
魔 Māva 44

—ミ—

彌織 Mahiśasakā 9

—ム—

牟尼 Muni 41
牟梨 Mṛga? 95
無害者 Ahimsaka 102
無礙辯 Pratisaṃvid 38
無畏を施せ 118
無生 116
無明 54
無餘涅槃 256
無漏 Anāśrava 56

—メ—

明行足 Vidyā-caraṇa-saṃ-panna 115
滅盡定 253

—モ—

盲龜 Kāṇa-kacckapa 47
網羅襁 34

—ヤ—

夜叉 Yakṣa 23
野干 Sṛgala 73
耶旬 258

—ユ—

維那 81
瓔珞 57

—ラ—

倮形尼乾 Acela Nir-gantha 32
羅睺 Rāhu 240
羅差 Lakṣa 282
羅刹 Rakṣasa 23
羅摩 60
羅摩延書、婆羅多書 85
藍婆 Lamhā 74

—ル—

歷劫 36

—ロ—

漏盡 āśrava-kṣaya 122

六瞿衆 9
六和敬王 160

—ワ—

和合衆 24
和上 Upādhyāya 121

—本緣部八索引終—

や。

菩薩本緣經（大尾）

時に諸の惡人、復た相謂ひて曰く。「我等山に入りて經歷すること多年、財利を求覓するも未だ曾て是の如き龍身を見るを得ず、文彩の莊嚴なること人目を悅可す、其の皮を剝取して以て我が王に獻ぜんには重賞を得べし」と。時に諸の惡人、尋で利刀を以て其の皮を剝取す。

龍王、爾の時、心常に一切世間を利樂す。卽ち是の人に於て慈愍の想を生じ、行慈を以ての故に三毒卽ち滅す。復た自ら勸喩して其の心を慰淚すらく。「汝今應に此の身を念惜すべからず、汝復た多年擁護せんと欲すと雖も、而も對至の時には免るゝを得べからず、是の如き諸人、今我身の爲に其の賞貨を貪り、當に地獄に墮すべし、我寧ろ自死して終に彼をして現身に受苦せしめざらん」と。諸人尋で前み刀を執りて剝剝す。龍復た思惟すらく。「若し人に罪なからんには、人あつて支*解すとも、默受して報ゐず、怨結を生ぜざらん。當に知るべし、是の人の大正士爲ることを。若し父母・兄弟・妻子に於て默忍を生ぜば、此れ貴しとするに足らず、若し怨中に於て默受の心を生ずれば、此を乃ち貴しと爲す。是の故に我今、衆生の爲の故に應當に默然として而も之を忍受すべし。若し我れ彼に於て忍受を生ずれば、乃ち眞の伴、我の知識と爲ん、是の故に我今應に是の人に於て、父母の想を生ずべし。我往昔に於て無量世に故らに身命を捨つると雖も、初て未だ曾て一衆生の爲にするを得ず。彼の人若し、此の皮を剝ぎ已つて當に無量の珍寶重貨を得べしと念はんには、願はく我、來世に常に是の人に、無量の法財を與へん」と。

爾の時龍王、既に剝がれ已りて遍體に血出で、苦痛忍び難く、身を擧げて戰動し自ら持する能はず。爾の時多くの無量の小蟲あり、其の血の香を聞ぎて悉く來り集聚し、其の肉を噉食す。龍王復た念ずらく。「今此の小蟲、我身を食せば、願はくは來世に於て當に法食を與ふべし」と。

（結　勸）

菩薩摩訶薩、尸羅波羅蜜を行ずるの時、乃至、剝皮食肉も都て怨を生ぜず、況や復た餘處にを

＊　支解。手足を切取ること。

け香を以て身に塗らず、八には倡伎樂を作さず往いて倡伎樂を觀聽せず、是の如き八事もて莊嚴しつ中を過ぎて食せざる、是を則ち名けて八戒齋法と爲す」と。

諸龍問ひて言く。「我等若し、當に王を離るゝこと少時なるべきも命を存するを得ず、今無上の正法を增長し法燈を熾燃せんと欲す、請ふ、所勅を奉ぜん、佛法の益は處として可らざるなし、何の故に此の中に於て受持せざらんや、亦曾て聞けり、在家の人の善法を修するを得ることあるを、若し在家中にして善法を行ずれば亦增長を得ん、何ぞ必要ずしも當に靜處を求むべけんや」と。龍王答へて言く。「諸欲に處せんと欲すれば心暫らくも停まる無けん、諸の妙色を見ては則ち過去愛欲の心を發す、譬へば濕地の雨は泥を成じ易きが如く、諸の妙色を見て過去の欲心を發すことも亦復た是の如し、若し深山に住すれば則ち色を見ず、若し色を見ざれば則ち欲心發らず」と。諸龍問ひて言く。「若し深山に處すれば則ち是の正法を增長するを得とせば、當に意に隨つて行ずべし」と。爾の時龍王、卽ち諸龍を將ゐて寂靜の處に至り、婬欲瞋恚の心を遠離して諸の衆生に於て大慈を增修し、忍辱を具足して以て自ら莊嚴す。菩提の道を開いて自ら八戒を受け、淸淨に持齋して多日を經歷したり。食を斷ちて身羸え、甚だ大いに飢渴し、疲れ極りて眠睡す。龍王、是の如く八戒を修行し忍辱を具足し、諸の衆生に於て心に害想なし。

時に惡人ありて龍の住處に至る。龍、眠睡中に行く聲あるを聞いて卽便ち驚いて寤む。時に諸の惡人、見已つて心驚喜し、相謂ひて言く。「是れ何の寶聚か地より湧出せる」と。龍諸人の心を見て卽ち念を生ずらく。「我德を修めんが爲に來つて此の間に在り、而も此の山間に復た惡逆にして修德を破る者あり、若し彼の人をして我が眞形を見せしめば則ち當に怖死すべし、怖死の後には我則ち正法を修行することを毀壞せん、我往昔に於て瞋の因緣を以て是の龍身を受け、三毒具足し、氣、見、觸の三毒は是の如し、諸人今此に來至す、必ず我が身を貪りて壽命を斷絕せん」と。

し、是の故に應に大慈の心を生ずべし、我の慈心を修集する因緣を以ての故に、怨憎をして其の本處に還らしめぬ、生死に流轉して恃怙すべき所は、慈心に過ぎたるはなし、夫れ慈心とは、重き煩惱を除くの妙藥なり、慈は是れ無量の生死の飢餓の妙食なり、我等往昔、慈心を失ふを以ての故に、今來つて此の畜生の中に墮しぬ、若し修慈を以て門戸と爲さば、一切の煩惱も入るを得る能はず、天人の中に生じて正しく解脫するに及ばん、慈を良き乘と爲し、更に過ぐる者なし」と。諸龍と婦女是の語を聞き已りて恚毒を遠離し、慈心を修集したり。

爾の時龍王、自ら同輩を見るに、悉く慈心を修めて歡喜自慶せり。「善き哉や我今所作已に辦ぜり、我業因もて畜生の中に生ると雖も、而も大士の業を修行するを得たり」と。

爾の時龍王、復た諸龍に向ひて是の言を作さく。「已に汝等の爲に善事を作し竟んぬ、爲に已に汝に正眞の道を示せり、復た汝等の爲に正法の炬を然し、諸の惡道を閉して人天の路を開けり、汝已に無量の惡毒を除棄して以て甘露に上れり、其の處を補置するに一事を請はんと欲す、汝等當に知るべし、十二月の前十五日に於て、閻浮提の人、八戒の水を以て其の身を洗浴し、心を清淨に作し、人天の道の爲に而も資糧を作し、憍慢・貢高・貪欲・瞋恚・愚癡を遠離す。我も亦是の如く、彼の人の八戒齋法を受くるを効さんと欲す。汝當に知るべし、若し能く是の如く八戒を受持すれば、妙服なしと雖も而も能く洗浴を得、墻壁なしと雖も能く怨賊を遮り、父母なしと雖も而も貴姓あり、諸の瓔珞を離るゝも身自ら莊嚴す。珍寶なしと雖も巨富量りなく、車馬なしと雖も亦大乘と名け、橋津に依らずして而も惡道を度る。八戒を受くる者の功德は是の如し。汝今當に知るべし。吾處々に於て常に之を受持す」と。

諸龍各言く。「云何名けて八戒齋法と爲すや」と。龍王答へて言く。「一には不殺、二には不盜、三には不婬、四には不妄語、五には不飲酒、六には高廣なる床上に坐臥せず、七には香華瓔珞を著

惡雹に遇ふを遠ざく。或は大身に變りて日月を遮蔽し、或は小身に變りて藕糸の孔に入り、亦大地を壞して江海を作り、亦山嶽を震はして能く動搖せしめ、亦能く避走遠去して汝をして我を見ざらしむ、今委去せざる所以は、多く諸龍あつて來つて我に依附すればなり、汝と戰諍せざる所以は、我汝に於て惡心を生ぜざるの故なり」と。金翅鳥言く。「我と汝と怨なり、何の故に我に於て惡心を生ぜざる」と。龍王答へて言く。「我獸身なりと雖も善く業報を解れり、審かに知れり少惡の報も、逐ひて置てざること猶形と影の相捨離せざるが如くなるを。我今汝と倶に是の如き惡＊家を生ぜる所以は、悉く先世に惡業を集めしに由る、故に我今常に、汝の所に於て慈愍の心を生ずるなり、汝應に深く如來の說きたまふ所を思ふべし。

　怨心を以ては　能く怨惱を息むべきに非ず　唯だ忍辱を以てのみ　然る後にぞ乃ち滅びん

と。譬へば大火の如し、之を乾ける薪に投ぜんに、其の炎轉た更に常に倍して增多ならん。瞋を以て瞋に報ゆるも亦復た是の如し」と。

　時に金翅鳥、是の語を聞き已りて怨心卽ち息み、復た龍王に向つて是の如き言を說かく。「我今汝に於て常に怨心を生ず、然るに汝我に於て乃ち慈心を生ぜるや」と。龍王答へて言く。「我先に汝と倶に佛語を受け、我常に憶持して抱いて心懷に在り、而も汝忘失して了に憶念せざるなり」と。金翅鳥言く。「唯だ願はくは仁者、我が和上と爲り、善く我が爲に無上の法を說け、我今より始めて一切諸龍に無畏を惠施せん」と。是の語を說き已るや龍宮を捨てゝ本住處に還れり。

　爾の時龍王、金翅鳥を遣りて本處に還らしめ已りて、諸龍及び諸の婦女を慰喩すらく。「汝、金翅を見て怖畏を生ずるや不や、其の餘の衆生の汝を覩見する時、亦復た是の如く大怖畏を生ず、汝諸龍の身命を愛惜するが如く、一切衆生も亦復た是の如し、當に自身を觀じて以て彼の身に喩ふべ

＊「惡」。恐らく「怨」の寫誤ならん。

我曾て聞ける如し、菩薩往昔恚の因縁を以て、龍中に墮し、三毒の身を受けたまひき。所謂、氣毒・見毒・觸毒なり。其の身の雜色にして七寶聚の如く、光明自ら照して日月を假らず。才貌長大にして氣は鞴風の如く、其の目の照朗たること雙日の出づるが如し。常に無量の諸龍の爲に遶られ、自ら其の身を化して而も人像と爲し、諸の龍女と共に相娛樂して毘陀山（Vidhâra）幽邃の處に住せり。諸の林木多く、華果茂盛し甚だ愛樂すべし。諸の池に水ありて八味具足し、常に其の中に在りて遊止す。樂を受けて經歷すること無量百千萬歲なり。時に金翅鳥、飮食の爲の故に空に乘じ身を束ねて飛び來り、取らんと欲す。其の來る時に當つて諸山碎壞し、泉池枯涸す。

爾の時諸龍及び諸の龍女、是の事を見聞して心大に恐怖し、服る所の瓔珞・華香・服飾、尋で悉く解け落ち、裂けて其の地に在り。諸の龍夫人、恐怖墮涙して而も是の言を作さく。「今此の大怨、已に來つて身に逼れり、其の業の金剛もて多く破壞する所、當に之を如何かすべき」と。龍便ち答へて曰く。「卿、我が後に依れ」と。時に諸の婦女、尋で卽ち相與に來つて龍に依附す。龍復た念言すらく。「今此の婦女、各恐怖を生ぜり、我若し擁護を作す能はずば、何ぞ是の如き姝大の身を用ひん、我が今此の身は諸の龍主爲り、若し護る能はずんば、何ぞ用つて王と爲ん、正法を行はんには、悉く身命を捨てゝ以て他を擁護す、是の金翅鳥の王に大威德あり、其の力に堪へ難く、我が一身を除いて餘に、能く禦ぐなし、我今要らず當に其の身命を捨てゝ、以て諸龍を救ふべし」と。

爾の時龍王、金翅鳥に語るらく。「汝、金翅鳥、小しく復た神を留めて我が說く所を聽け、汝我が所に於て常に怨害を生ず、然れども我汝に於て都て惡心なし、我れ宿業を以て是の大身を受け、三毒を稟得したり、是の力ありと雖も未だ曾て他に於て而も惡心を生ぜず、我今自ら其の氣力を忖察するに、能く汝と共に相抗禦するに足り、亦能く猛大火を乾草木に投じ、五穀の熟るに臨んで大

若し是の人を視ば卽亦我を視るなり、是の人愚癡にして知なく愍れむべし、命終の後必ず地獄に墮し、無量歲を經て備さに衆苦を受けん、是の故に應當に是の人の所に於て慈愍の心を生ずべし。大王よ、譬へば人ありて諸の子息多きに愛に偏黨なからんも、然も病者に於ては心則ち偏重するが如し。菩薩も亦爾り、惡衆生に於て偏へに悲愛を生ず、是の衆生の惡法を懷くを以ての故に、是の故に菩薩は諸の衆生の爲に菩提心を發す」と。

爾の時大王、復た更に容を斂めて而も是の言を作さく。「汝今眞に是れ調御の大師なり、正法を護持し危厄を救濟する歸依の處、能く衆生の一切の畏れを除く者なり、是の諸の衆生多く惡法を行じ、身は應に地獄に陷るべきを、沒せざる所以は諒に大士の護持に由るの故なり、今より以往、諸の鹿群に無所畏の樂を施さん、我今終身に願はくは弟子と爲らん、汝若し來世に無上道を成ぜば、願はくは先づ濟度せられん」と。

是に於て國王、是の語を說き已りて卽ち群臣に告ぐらく。「擧國の人民自今、始めて遊獵して殺害を業と爲すを得ず」と。

（結　勸）

菩薩摩訶薩、尸羅(Śīla,戒)波羅蜜を行ずるの時、獸身を受くと雖も諸の怨憎に於て乃至一念の惡心たりとも生ぜず。

龍　品　第八

（序　偈）

菩薩摩訶薩　瞋に處するも猶戒を持つ　況んや人中に生じて　而も當に堅持せざるべけんや

時に王聞き已りて心に安隱を得、即ち鹿王に向つて是の言を作さく。「是の人何に緣つてか兩手地に落つるや、然るに向に言ふ如くんば、能く我等に無所怖畏を施さんと、云何か是の人直ちに汝の身を示して是の如き報を得るや、汝向に自ら言へり、能く衆生に無所畏怖を施さんと、云何か乃ち是の人をして是の如からしむる、若し施さずと言はゞ、一切世間即ち當に火然すべし」と。

是の時鹿王、復た王に白して言く。「譬へば人あつて官の重罪を犯して、無諍清淨の比丘を觸惱するが如し、是の如きの人は大重罪を得ん、恩を知らざる者も亦復た是の如く大重罪を得、王よ、今當に知るべし、是の人自ら作して自ら其の報を受く、我が因緣には非ず」と。王即ち問ひて言く。「唯願はくは廣說したまへ、我樂しんで之を聞かん」と。鹿王答へて言く。「願はくは王よ、彼に問ひて我の說くを須たざれ」と。王即ち其の人に問ふ。「卿今何の故に二手地に落つるや」と。是の時溺人、即ち其の王の爲に廣く本緣を說く。王既に聞き已りて言く。「卿是の事を作し已りて云何か當に報を受けざるを得べけんや、若し困厄有りて他人に依恃せば、乃至一念たりとも尙應に恩に報ゆべし、況んや復た多時に斯の重恩を受けて、而も報ゆる能はずして反つて賊害を生ぜんや、豈に當に是の如きの報を受けざるべけんや、人の熱時に止息する涼樹の如し、是の人乃至應に是の樹の一葉たりとも侵損すべけんや、恩を受けて忘れざること亦復た是の如し」と。

爾の時國王、復た鹿王に向つて長跪叉手して而も是の言を作さく。「我今日より常に相歸依せん」と。鹿王答へて曰く。「審かに能く爾らば、敬つて來意を受けん」と。王復た言して曰く。「汝今我が願を受けて何等をか求むる」と。鹿王答へて曰く。「若し能く我に於て尊*想を生ぜば、今當に諦かに聽くべし、我は是れ獸身にして唯だ水草を賴み、以て自ら存活し、餘に求むる所なし、大王よ當に知るべし。是の人昔水の爲に漂はされて困しみ、救護する者なく餘命幾くもなし、我爾の時に於て猶能く之を救へり。王今若し慈悲の心あらば、當に是の人を視ること赤子の想の如かるべし、

＊「想」。三本に依る、麗本は「相」に作る。

「是の如き衆鳥に實に過咎なし、譬へ人あつて所尊の陷墜せんに、手を以て牽挽するが如し、豈に是れ過ならんや」と。復た是の念を作さく。「是の諸の衆生に慈悲心なく、世間の有らゆる師子虎狼は常に是れ我が怨なるも、我が說法を聞いて怨心卽ち息む、是の人理なくして人中に生るゝを得、恩を忘れ義に背き、我所に反きて而も毒害を生ぜり。妙香華の如し、之を死屍に置かんに卽時に惡むべく、人喜見せず。是の人も亦爾り、現世少許の樂分を得んが爲に將來無量の樂報を捨離せり」と。

爾の時鹿王、卽ち諸鹿に向ひて而も是の言を作さく。「汝等愁ふる莫れ、王の今此に來至せる所以は、正に我身の爲にして汝の爲ならず、我今能く逃避して遠くに去り、亦能く彼の軍衆を壞碎すと雖も、要らず當に畢命して自ら王所に往くべし、若し我是の如からんに、汝等便ち當に東西に波迸せんも、乃し命を喪はん、是の故に我今汝等の爲の故に當に王所に往くべし、但だ我が後に隨つて恐怖を生ずる莫れ、當に汝等をして安隱無患ならしめん、汝等當に知るべし、我若し發心して涅槃に入らんと欲せば、卽ち能く之を得ん、而も涅槃を取らざる所以は正しく汝等が爲なり、我れ王所に至つて設使命を喪はんも、但だ汝等をして安隱全濟ならしめん、吾に恨む所なし」と。是の語を作し已つて卽ち王所に至る。溺人見已つて尋で王に示して言く。「言ふ所の鹿王とは、此は卽ち是れなり」と。是の言を作し已るや兩手地に落つ。時に王見已つて卽便ち馬を下り、心驚き毛竪ちて而も是の言を作さく。「汝の手云何してか斷落すること是の如くなる」と。卽ち刀杖を捨てゝ獨り鹿所に往く。鹿、王を見るの時、心中に熱惱す。王是の念を作さく。「彼れ獸身たりと雖も實の鹿には非ず、卽ち是れ正法勇出*の王なり」と。

爾の時鹿王、卽ち王に白して言さく。「大王よ、何に緣つてか刀杖を放捨し、身體流汗して狀の恐怖せるに似たるや、若し使ひ我に於て恐怖を生ずとせば、我は是れ慈を修めて終に相害せず、月の火を生ずるや、是の處りあるなきが如し」と。

---

* 勇出＝涌出。

恩を知らざる者の得る所の過患の本復た量りたきことを。是の故に汝今應に善く口を護るべし」と。

爾の時溺人、是の語を聞き已りて悲喜交も集り、涕涙横流して即ち鹿足を禮し、而も是の言を作さく。「汝常に法を說いて諸の衆生に涅槃の正道を示せり、汝は良醫の如し、衆生の心熱病苦を除き斷つ。汝は是れ世間第一の慈父なり、是れ尊、是れ導、實に隨侍して朝夕に稟受せんを貪み、遠離して一念の頃を經るをも欲せず、必ず當に惡の爲に堪任する所なかるべし。我今設ひ去りて、形體は當に相ひ遠く離るべきありと雖も、而も心には未だ敢て捨離の想を生ぜず」と。是の語を說き已りて尋で便ち路に即く。鹿王之を望みて遠く見えざるに、即ち本處衆鹿の中に還れり。

是の時溺人、既に家に還り已りて恩を忘れ義に背き、法炬を破滅して自ら其の心を然し、法樹を破伐して乃ち毒林を殖え、心を惡の器と爲して衆怨の毒を盛り、現世の利の爲に即ち王所に至り、而も王に白して言さく。「大王、當に知りたまふべし、臣近ごろ山に入りて一鹿あるを見たり、身色の微妙なること七寶の貫の如し、衆鹿の中に在りて而も上首と爲ること、猶し滿月の衆星の中に處するが如し、其の皮雜色にして御乘を覆ふに任ふ、臣此の鹿の遊住せる處を知れり」と。

時に王、聞き已りて心に驚喜して曰く。「卿吾に處を示せ、吾自ら往いて取らん」と。溺人王に白さく。「敬つて所敕を奉ぜん」と。王即ち嚴駕して前に在つて導かしめ、千乘萬騎後に隨つて而も往く。

是の時鹿王、衆鹿の中に在りて疲極して而も眠れり。爾の時虛空に多く衆鳥あり、王の軍馬を見て各相謂ひて言く。「是の王必ず金色鹿の爲に來らん」と。時に一鳥あり、即ち鹿所に至つて鹿王の耳を啄む。鹿王、驚き悟めて心に即ち念言すらく。「此の鳥何に緣つてか來つて之を覺さるゝや、昔より已來、衆鳥等の類は、顧復闥遶して敢て近づく者なし、今日何の故に我身を觸犯するや」と。鹿即ち起立して遙かに王の軍の四方に雲集して已に來つて近至せるを望み、復た是の念を作さく。

是の時鹿王、身を踊らして河に投じ、彼の人の所に至り、卽ち溺人に命じて其の背に坐せしむ。溺人卽ち坐して安穩に處りなきこと、猶人あつて榻席に安坐するが如し。其の河に多く木石の屬あり、互に相ひ搪觸して身痛賴むなし。

是の時鹿王、溺人を擔負して死に至るも放たず、劣かに乃ち出づるを得て彼岸に至りぬ。溺人爾の時、卽ち救拔を得て安穩に出で已んぬ。卽ち鹿王に語ぐらく。「我が父母に長養せられし身は已に滅沒せりと爲す、今の身命は實に是れ汝の有なり、汝鹿王たりと雖も身命を相屬せり、勅使すべき所は唯だ告語を垂れたまへ」と。

爾の時鹿王、其の人に告げて言く。「汝今且らく聽け、我汝の所に於て功果を求めず、亦心に貢高の想を生ずること有るなし。我今是の如き身命を惜まず、但だ他の爲に而も利益を作さんことを欲するのみ。汝今當に知るべし、我獸身を受けて常に林野に處し、自在に意の隨に水草を求覓す、居民邑落を侵犯せずと雖も、然も是の我に罪ありて諸の怨憎多し。兼て復た師子虎狼、諸の惡走獸、射獵の徒を怖畏す。歸依する所なく守護する者なし。我鹿身にして雜色微妙なりと雖も、一切世間に悉く見る者なし。以て相救濟し、唯だ汝のみ之を見たり。昔我立誓すらく、『若し苦危を見ば要らず度脫せしめん』と。人、有力なりと雖も苦を見て救はず、當に知るべし、是の人に果報なしと爲ること、子を種ゑざれば果實を收めざるが如きを。若し我を念はゞ當に善く口を攝すべし、恩を知りて恩を念ふは、賢聖の讚ふる所なり。恩を知らざれば現世に惡名を外に流布し、復た智者の爲に呵責せられ、將來の世には多く惡報を受けん。知恩の人は二世安穩に、施の因緣に非ずして而も自在を得、多聞を修せずして大智慧を具へん。水浴なしと雖も清淨無垢に、諸の香熏を離るゝも無上の香を得、諸の瓔珞を離るゝも眞の莊嚴を得、所依を遠離するとも而も自ら護るを得、刀杖なしと雖も人として侵す者なからん。汝當に知るべし、知恩の人の得る所の功德は、說くとも盡すべからず、

の鳥獸の肯て近づく者なし。
時に一人ありて水の爲に漂はされ、恐怖惶慘して所至を知る莫し。身力轉た微かに餘命幾くもなし。聲を擧げて大いに喚ぶらく。「天神地祇に誰か慈悲あつて能く救濟せらるゝ、苦しい哉、我れ今室家と別る、今日困悴せり誰にか歸依すべき、我昔曾て聞く、世に一鹿あつて、仙法を修學し大慈慈ありと、唯だ是のみ當に、能く深く濟拔せらるべし」と。

是の時鹿王、群鹿の前に在りて是の如き聲を聞き、卽使ち驚き視るらく。「誰か苦危を受けて是の如き言を發するや、我れ是を聞き已りて其の心苦惱すること、彼の如く受苦等しくして差別なし」と。尋で諸鹿に告ぐらく。「汝當に意に隨つて各自に散去すべし、吾平整の處を觀覺して、自ら恣まゝに水を飮んで以て渴乏を充てんと欲す」と。諸鹿聞き已りて尋で卽ち四散す。鹿王卽使ち聲を尋ねて之を求め、一人ありて水の爲に漂はされ、亦木石の爲に榪觸せられて多く苦惱を受くるを見る。鹿王見已りて卽ち是の念を作さく。「水急にして駛疾す、假使大魚たりとも亦た度る能はず、我が今身は小力にして亦微末なり、竟に知らんや、當に能く是の人を度すべきや不やを、寧ろ我身をして彼と俱に死せしめん、實に彼のみ獨り苦を受くるを見るに忍びず」と。復た是の念を作さく。「若し是の人をして陸地に在らしめんには、象の爲に困しめらるゝとも、方便を爲作して救護するを得べし。今は此の水に在り漂疾急速なり、我當に云何してか而も救拔するを得べけん。我設ひ水に入りて濟ふ能はざらんには、一切聞知して當に嗤笑せらるべし、『自ら能はざるを知りつゝ何の故に水に入るや』と。我今慈悲の心ありと雖も、身力微末にして能く辦ぜざらんかを恐る。我今要らず當に倍加精進して以て休息せず、而も往いて之を救ふべし」と。卽ち是の言を作さく。「汝今應に怖畏心を生ずべからず、我今水に入ること猶草木の如からん、假使身滅ぶとも、要らず當に相救ふべし」と。

と爲る。而も是の鹿王多く慈悲を行ず。精進智慧具足して減なく、大勇猛あり、善く人語を知つて衆生を調へんが爲に鹿身を示受す。

爾の時鹿王、雪山に遊ぶ。其の山に多く叢林・華果・流泉・浴池あり、若し諸の禽獸共に相憎惡して賊害の心を生ぜば、是の菩薩の威德力を以ての故に悉く滅して餘りなし。空寂の處に在つて常に諸の鹿に敎へて、諸の惡を遠離して善法を修行せしむ。諸鹿に告げて言く。「汝等當に聽くべし、諸行の中に當に小惡を觀ずること、猶毒食の如かるべし、是の如き小惡は當に之を受くべからず、當に小善を觀じて善友の想を爲すべし、常に應に親近して精勤受持すべし。汝等諸鹿、身口意行の諸惡を以ての故に、畜生中に墮して所有善法を修行する能はず、愚癡もて覆ふの故に是の畜身を受け、無量世を經るも生死の中を解脫するを得ること難し。樂を受けんと欲さば要ず正法に因るを而も根本と爲す。夫れ正法とは、能く衆生を護つて惡趣に墮せず、煩惱苦海の人を度せんが爲に而も橋梁と作る。人の喩に處するや要ず机杖に因るが如く、亦炬を執りて諸器を覩見するが如し、正法を行ずる者も亦復た是の如し。夫れ正法とは最も親近すべく破壞すべからず、能く衆生に無上の大道を示す、是を能く樂を受くる者と爲す。是の法を聞き已りて能く心を喜ばしめ、心々斷ぜずして是の法を行ずれば、心無所畏なり。是の法は能く一切の諸惡を除く、譬へば良藥の衆病を療治するが如し。是の因緣を以て常に應に憶念して忘失せしめざるべし、若し忘失すれば此の生空しく過ぎん。一切世間は皆悉く虛誑たり、唯だ布施・忍辱・慚愧・智慧の法ありて、乃ち是れ眞實たるのみ。若し能く是の如き等の法を修行せば、是を則ち名けて正法を具足すと爲す」と。

諸の鳥獸の爲に常に是の法を說き、諸の聽者をして心に婬欲を離れしむ。是の時に當つてや、猶し賢聖の諸惡を遠離して侵害を加へざるが如し。復た後時に於て、諸の群鹿と一河に遊止す。其の水廣大に深きこと涯底なし。暴漲急疾にして多く漂沒せられ、諸の山岸を壞し大樹を吹拔す。一切

つ、貪惜する所なきこと大いに毫釐の如し、是の如き福報もて、願はくは諸の衆生、無上智を證せん」と。自ら慰喩し已つて身を火坑に投ず。

時に婆羅門、是の事を見已つて心驚いて毛竪ち、即ち火上に於て而も之を挽き出すに、無常の命は即便ち斷滅せり。諦觀して心悶え、抱いて膝上に置き、之に對つて嗚咽し、並びに是の言を作さく。「愛法の士、慈愍の大仙・調御・船師・衆生を利せんが爲に身命壽を捨てゝ今何所にか至れる、我今敬禮して歸依主と爲す、我れ此の山に處して長髮重擔、多年を經と雖も利益する所なし、我願はくは今より常に相頂戴せん、願はくは汝の功德の具足成就せんことを、我をして來世に常に弟子と爲らしめよ」と。

是の語を說き已つて還び兎身を持して之を地に置き、頭面もて禮を作し、復た還た掬捉すること猶赤子の如し、即ち死兎と共に倶に火坑に投ぜり。爾の時釋天(Śakra-deva-indra)是の事を知り已つて大いに供養を設け、骨を收めて塔(Stūpa)を起つ。

(結　勸)

菩薩摩訶薩、是の如き尸羅(Śīla＝戒)波羅蜜を修行し、世を誑さず。

§鹿　品　第七

(序　偈)

菩薩摩訶薩　*六波羅蜜を行じ　乃至上怨中にも　終に惡心を生ぜず

(本　文)

我昔曾て聞く。菩薩往世に畜生に墮在し、而して鹿(Mṛga)身と爲る。兩脇金色に脊は琉璃に似たり。餘の身の雜廁補潤なる名け難し。蹄は車渠の如く角は金精の如し。其の身の莊嚴なること七寶の藏の如く、常に一切衆生を利益す。所有の善法は具足成就し、身色の光炎は日の初て出づるが如し。諸天も敬重し、爲に名字を立てゝ金色鹿(Suvarṇa＝修凡)と號く。無量の鹿の爲に而も將導

§ この本生は六度集經卷六の內、單本九色鹿經。

* 「六」。三本、麗本「大」。

是の故に我今微供を設けんと欲す、汝今當に知るべし、人に四種あり、施に亦四あり、所謂、下者と、下中の下者と、智者と、智中の智者となり、云何か下者なる、施時に發心して諸有を求む、下中の下者とは畏怖を以ての故に布施を行ず、智者とは恭敬の心あつて而も布施を行ず、智中の智者とは大悲心あつて而も布施を行ず、我今是の四施の中に於て一施を趣行せん、唯だ願はくは明旦、必ず我が請を受けたまへ」と。

時に婆羅門、卽ち是の念を作さく。「此の兎、今日何を見る所と爲すや、死鹿を見たるや、或は死兎なるか」と。心卽ち歡喜し、火を然し呪を誦す。是の兎、其の夜多く乾ける薪を集めて諸兎に告げて言く。「汝等當に知るべし、是の婆羅門、今我を捨てゝ遠く他家に去らんと欲す、我れ甚だ愁惱し身體戰慄す、世法は是の如く無常にして別離す、虛誑にして實ならず、猶幻化の如し、合會には離のあること猶秋雨の如し、有爲の法には是の如き等の無量の過患あり、諸行は夢また熱時の炎の如く、衆生の命盡きて還るべき者なし、汝等今は世法の是の如くにして而も離る能はざるを知れ、是の故に汝等、要らず當に精勤して三有を壞すべし」と。

爾の時兎王、竟夜に眠らず、諸兎衆の爲に法を說くこと是の如し。夜旣に終り已つて淸旦地了きに、薪聚の邊に於て卽便ち火を吹き、火然ゆるの後、婆羅門に語げて言く。「我れ昨に汝を請じて微供を設けんと欲せり、今已に具辦す、願はくは必ず之を食したまへ、何を以ての故に、智人の財を集むるは以て布施せんと欲するなり、受者憐愍して要らず必らず受用せよ、若し凡人に多く財寶を畜ふるあり、以て人に施さんに、此を以て難しと爲さず、我今貧窮にして施乃ち難しと爲す、唯願はくは哀矜して必ず定んで之を受けたまへ、我今深心淸淨に啓請す、唯願はくは仁者よ、必ず受けて疑はざれ」と。

是の語を說き已りて復た自ら慰喩すらく。「我今他に安樂を受けしめんが爲の故に、自ら已身を捨

く是の中に處す」と。卽便ち隨逐して經歷すること多年、水を飲み果を噉ふこと兎と別なし。是の時世人多く惡法を行じ、是の因緣を以て天をして炎旱ならしめ、草木華果枯乾して出でず・海池井泉の諸水燋涸し、其の地の所有林木・蓬茹・蒿草を土地の人民收拾し去り盡す。

時に婆羅門、飢窮困苦し、和顏もて兎に向つて是の言を作さく。「我今去らんと欲す、願はくは責められざれ」と。兎是を聞き已つて卽ち念言を生ずらく。「今此の大仙、此處を樂しまず、故に相捨てんと欲す」と。卽ち前みて問ひて言く。「此の處何の過かあり、何ぞ相犯せるや、大仙よ、當に身に是の如く菼草の衣を服せることを觀ずべし、心をして愁惱せしむるは宜しき所に非る也、婆羅門の婬女の舍に入ることの、甚だ家法に非るが如し」と。

婆羅門言く。「汝の說く所、實に我が心に入れり、是の處淸淨にして實に過患なし、諸兎は自ら修め亦相犯さず、但だ我れ薄祐にして飲食に困乏せるのみ、是の故に俛仰ぐらく、相捨て去らんと欲す、汝今當に觀ずべし、一切衆生は食に因つて以て此の身を活かさざるはなし、汝の說く所の善妙の法要は、今遠く離ると雖も要らず當に終身に、之を心府に佩びて妄失せしめず、汝復た當に知るべし、我れ心に慈無く、穢食の爲の故に而も相捨離することを」と。

時に兎答へて言く。「汝の爲す所は蓋し是れ小事なり、云何か乃ち相捨離して去らんと欲する」と。婆羅門言く。「我空しく水を飲んで已に多日を經たり、恐らく命全からざらん、是の故に宜しきを置いて相捨離せんと欲す」と。兎、是を聞き已つて念言すらく。「善き哉や是の婆羅門、乃ち能く法の爲に水を飲むこと多日なり」と。卽便に說いて言く。「汝若し去らば、我則ち更に是の如きの福田なし、唯願はくは仁者よ、明に我が請を受けたまへ、菩薩は福田中に於て心に分別なきを知ると雖も、然も極苦飢渇の衆生に施さば其の福最も大なり、二日は是れ常に護る所と知ると雖も、然も當に先づ苦痛の處を救ふべし、汝今是れ我が親しき善知識なり、是れ我が尊ぶ所にして大功德あり、

言を作さく。「我今人中に生を得たりと雖も、愚癡無智なること、是の兎の兎中に生在して善法を曉了せるには如かず、譬へば日月の月光を障蔽するが如く、我も亦是の如し、人中に生ずと雖も彼の畜生の爲に障蔽せらる、彼畜生なりと雖も或は是れ正法の將なるか、或は是れ梵王か大自在天か、我今彼の說く所の法を聞いて心調ひ柔和すること、譬へば人の熱して清涼の水に入るが如し、怪しき哉、師子は多く惡業を行ひて是の獸身を受けんも、云何か復た當に是の如き兎を食ふべき、是の如き兎は、乃ち是れ純善なり、形は是の如くなりと雖も、乃ち能く仙聖の法を修行す、畜生に生ると雖も而も能く善惡の相を宣說す、我本より來た諮稟尊敬すべきの處なし、今之に遇ふを得たるは甚善無量なり」と。

是の時仙人卽ち起ちて合掌し、兎の所に往至し、兎所に至り已つて却いて一面に坐し、合掌して兎に向つて而も是の言を作さく。「汝は是れ正法の身なり、將に兎身を受けず、有する所の必定純善の法は、唯願はくは我が爲に具足して之を說きたまへ、我が修學する所の鬚髮を長養し草衣食果することと今實に之を厭へり、譬へば氷を鑽りて酥を求むること、是れ實に得難きが如し、我も亦是の如し、終身に長髮草衣食果して、苦行を修むと雖も正法は得難し、我今人中に生じて人の形體を受くるを得たりと雖も、善知識を遠ざつて惡法を修行す、士莖華の正に遠ざかりて瞻るべく親近するに中はざるが如し、我も亦是の如し、惡法を修行し、有智の人は之を視るに遠去して終に親近せず、汝は眞は梵王にして假りに兎身を受くるのみ」と。

兎時に答へて言く。「大婆羅門よ、若し我が言ふ所汝の心を悅可せば甚だ愛まず、所以は何ん、我久しく已に慳悋の結を離れ、往昔發心して便ちに當に涅槃すべきを、但だ衆生の爲の故に久しく生死に住まればなり」と。

時に婆羅門、是の語を聞き已つて心に歡喜を生ずらく。「汝は是れ大士なり、能く衆生の爲に久し

阿修羅の中に衆苦を受くる所なり、若し爲に故に盡く說かんと欲せんも、盡すを得べからず。愚癡の因縁を以て畜生中に墮し多く衆苦を受く、種々の形を受け種々の食を食ひ、種々に語言し行住同じからず、無足・二足・四足・多足・水陸空を行き、牛・羊・駝・驢・猪・豚・雞・狗・飛鳥・走獸、是の如き等の輩、常に愚癡の爲に覆蔽せられ、常に盲冥に處して智慧あるなし、各々相殺害の想を起し、互に相怖畏すること怨賊の如し、常に獵師の爲に屠膾して殺され、復た師子、虎・狼・豺・犬、無量の惡獸の爲に噉食せらる、常に坑坎・冒索・羅網に墮し、生くれば則ち重きを負ひ死すれば則ち劓剝さる、駕犁・挽車・鐵鉤・鉤斵・覊絆・拘執もて、常に苦しみ飢渴し、口乾き舌燥ぐ、所須ありと雖も口に宣ぶる能はず、稚小孤逆に父母を遠離し、水草無量なるも常に充ち足らず、畜生の惡報は世間に現見さる、是の故我今略して汝等の爲に而も之を解說せり。我が先業の如き惡因縁の故に、是の兎身を受けて、唯だ水草のみを食ひて恒に怖畏多し、是の故に汝等應に善法を修すべし、善法の因縁もて天人中に生ぜん。人道の中に諸の苦惱ありて諸天よりも劇しと雖も、猶當に發願して人中に生ぜんと願ふべし。譬へば官法の如し、犯罪者の爲に土窖を造作するに凡そ三重あり、重罪の人を最下に置在し、中罪の人を中間に置き、罪の極めて輕き者は上重に置く、惡業を行ずる者も亦復た是の如し、極重惡者は地獄に墮し、中品惡者は畜生身を受け、最下品者は餓鬼中に生る、是の如き三品の惡を遠離し已つて人中に生ずるを得、人中に生じ已つて善不善を行じ　上善を行ずる者は涅槃に入ること已が舍宅に入るが如し」と。是の時兎王、常に諸兎の爲に是の如き善妙の言を宣說す。

爾の時一婆羅門種あり、世を厭ひて出家し仙法を修習す。衆生を惱さず、欲を離れ愛を去り、和顏にして而も言ひ、身に麁穢なし、水を飲み果及び諸の根藥を食ひ、少欲知足して寂靜の行を修め、髮と爪を長養して梵行相と爲す。

是の時仙人、忽ち一時にして遙かに兎王の兎の爲に說法するを聞き、聞き已つて心悔いて而も是の

や、是の身患ふべし、夫れ惡道とは地獄・畜生・餓鬼・阿修羅、是の如き等を名けて惡道と爲す、汝等今當に至心に諦聽すべし、惡道の因緣は所謂十惡なり、我往昔に於て曾て諸仙の分別開示するを聞き、心にも亦思惟せり、今當に汝が爲に略して之を解說すべし、――四法の根本に諸の過患多し、所謂貪欲・瞋恚・愚癡・憍慢なり、貪欲心に因つて十惡を行ずれば餓鬼に墮し、瞋恚心に因つて十惡を行ずれば畜生に墮し、愚癡心に因つて十惡を行ずれば地獄に墮し、憍慢心に因つて十惡を行ずれば阿修羅に墮す、此の四法に因つて往く所の處は常に苦惱を受く、汝等當に觀ずべし、地獄の中に猛火あつて熾然し、利刀もて剗刹し、常に狗犬の爲に噉食せられ、鐵嘴の諸鳥の其の目を挑啄し、灰河の身を壞すること猶微塵の如く、復た諸椎の爲に打碎せられ、利斧刀劍もて其の手足を截ち、寒冷惡風もて其の身を吹變き、二山相拍ちて身を其の中に處するを、汝等當に知るべし、我れ盡壽百千世に至るも、是の如き地獄の衆生を解說して盡すを得る能はざるを、是の如く地獄に種々の苦あり。汝今復た當に餓鬼中の種々の諸苦を聽くべし、所謂、飢渴に逼られ身體乾枯し、無量歲に於て初より曾て漿水の名を聞かず、乃し穢糞に至るまで求めて得る能はず、頭髮長く利く其の身に纏繞す、故に身中の支節をして火然せしむ、遙かに望んで水を見るも、至れば則ち火坑なり、飢渴に逼られて往いて糞穢に趣く、復た惡鬼神あり、刀杖を持して固く遮る、今此の事を說くや、倍す我心をして驚畏怖懼せしむ。阿修羅とは五欲を受くること天と別なしと雖も、憍慢自ら高うして謙下の心なく、善知識を遠ざけ三寶を信ぜず、亦復た善友の爲に護られず、世間中に於て顚倒の想を起す、諸佛を見ると雖も心に敬信するなく、上の諸天に於て常に惡心を生じ、念を繫けて諸天の過失を伺求す、汝等當に知るべし、憍慢の結(=煩惱)に諸の過咎多く、利益する所の無きを、衆生の道果を成ぜざる所以は、此の憍慢の熾盛なるに由らざるなし、自らは是に彼を非とし、譏刺呵責す、世間の衆生、憍慢を以ての故に邪見を增長し、邪見の因緣にて三寶を誹謗す、三寶を謗るの故に阿修羅を受け、

首を見す。

爾の時樹神(Vṛkṣa-devatā)婆羅門に語げて言く。「何處にか當に婆羅門の人にして利刀を受畜して人命を殺害するあるべけんや、汝の手云何か地に墮せざる、地何で汝の身を裂陷せざるや、云何か此の清淨人の邊に於て是の惡心を生ずる、汝の身の地に陷らざる所以は、是の菩薩の汝を擁護するに賴るの故なり」と。

時に婆羅門、眞實に菩薩の頭を斷つを得たりと謂ひ、怨心解くるを得て卽便ち還去し、王亦宮に還りて身安く損なし。

(結　勸)

菩薩摩訶薩の檀波羅蜜を行ずるの時、能く是の如きを作し、捨てざる所なし。

―(卷の下)―

兎*品　第六

(序　偈)

菩薩摩訶薩　若し畜生に墮すれば　行ずる所の諸の善法　外道も及ぶ能はず

(本　文)

我曾て聞けるが如し。菩薩往昔、曾て兎(Śaśa)身と爲る。其の先世の餘業の因緣を以て兎身を受くると雖も人語を善くす。言常に至誠にして虛誑あるなく、智慧成就して瞋恚を遠離すること、人天中に於て最も第一と爲す。慈悲もて心を薰じ、調和軟善なり。悉く能く諸魔の因緣を消滅し、言行相副ひ眞實にして諂なし。殺害の心永く復たあるなく、不動に安住すること須彌山の如し。無量の兎と與にして而も上首と爲り、常に諸兎の爲に而も是の言を說かく。「汝等惡道に墮せるを知らず

※ この本生は雜寶藏經卷二生經四兎王品、撰集百緣經第四にも出づれど此に比して頗る簡且つ佛說とせり。又菩薩本生鬘論卷二に出で最も本經に近し。

すべし」と。時に婆羅門、王の語を聞き已つて卽便に遠去す。

爾の時大王、諸臣を遣り已つて卽便に彼に至り、婆羅門に語げて言く。「汝今若し我が怨の遣ふ所と爲りて我が頭を索むるならば、我亦汝に於て讎嫌の心なからん、若し自ら來つて索むるならば、何の因緣かある、汝、婆羅門よ、應に慈心を起すべし、設し慈心を起せば卽ち當に天に生るべし、怨心は火の如し、汝當に速かに滅すべし、瞋恚や心に在れば法の義を見ず、修忍の人は瞋恚を除去す、瞋恚の心を汚すや形端正ならず、猶雲霧の淨月を障蔽するが如し、出家の人の應に生ずべからざる所、瞋恚を生ずれば端正を得ざること、猶酒を飲める嗌氣の臭穢なるが如し」と。婆羅門言く。「汝の今說く所は妙善と爲すと雖も而も我の麤獷なる何で能く信受せんや、但だ我に頭を施せ、更に餘を言ふ無れ、我今汝の說く所を聞くに善しと雖も、聞き已つて更に瞋恚を增益すること、猶膏油もて之を猛火に投ぜるが如し」と。

時に王答へて言く。「我生れてより來た未だ曾て人に勸めて而も惡事を爲さしめず、今此の身は汝に隨つて自ら斫らん、是の身の惡むべきこと猶糞坑の如し、實に之を愛まず、但だ汝の地獄に墮せんを憐愍するのみ」と。婆羅門言く。「地獄と言ふは何處にか在ると爲す」と。

爾の時大王卽ち悲心を起して而も是の言を作さく。「怪しき哉衆生、咄なる哉世間、乃ち一人として善法を修行して已利の爲にする者なし、我れ種々に是の人を勸諫すと雖も而も其の本心は猶行惡を樂しむがごとし、譬へば蒼蠅の蜜器の中に在り、人あつて拔き出すも心猶樂着し、樂着を以ての故に乃し命を喪ふに至るが如し、是の婆羅門も亦復是の如し」と。

時に婆羅門、一利刀を持して鹿皮を以て覆ひ、卽便に之を出し、王の頭髮を捉へて之を樹上に繫ぎ、瞋恚の心を以て王の頭を斬らんと欲す。刀誤つて及ばず、樹枝を斫斷す。時に婆羅門、已に斫り竟れりと謂ひて卽ち歡喜を生ず。而も是の菩薩及び諸天神の威德力を以ての故に乃至其の王身に

時に諸大臣復た是の言を作さく。「王よ、今應に是の事――*堅牢の身を得と計すべからず」と。時に諸大臣復た是の言を作さく。「王よ今應に是の事を計すべからず、所以は何ん、大王は乃ち是れ臣等の所依なり、王よ、今此の身は一切の共有なり、共有の法を何ぞ獨り一婆羅門の爲に而も放捨せんと欲するを得んや、此の身を捨て已つて財施の事云何か能く辦ぜん、若し能く辦ぜざれば苦を受くる者衆からん、王身は一なりと雖も天下之を共有す、云何か今日獨り自在にせんと欲するや、譬へば多人の一妙寶を共有するが如し、人あつて獨り用ひんに、豈自在なるを得んや、王の身は今は亦復た是の如し」と。

爾の時大王、和顏悅色もて諸大臣に向つて復た是の言を作さく。「汝等先づ當に慈愍の心を起して婆羅門を觀ずべし、然る後に我當に頭を捨てゝ之に施すべし」と。爾の時大王、婆羅門に告ぐ。「汝小らく遠去して我の諸の臣民を慰喩し已つて當に相發遣すべきを聽せ」と。時に婆羅門卽便に小し却く。

爾の時大王、諸臣に告げて言く。「汝、我本の日に願へる所は常に諸の衆生を利益せんと欲せるを知らざるや、我已に汝が爲に所作成辦せり、復た當に此の婆羅門の願を滿すべし、此の婆羅門は、曾て往昔に於て我が與に怨あり、餘報未だ畢へず、常に以て心に繫く、更に餘の緣の以て之に償ふべきなし、要らず當に頭を捨てゝ而も永く畢らしむべし、我れ身を受けてより常に正法を行じ、今此の人の爲に亦正法を行ず、卿等速かに去れ」と。

婆羅門を喚んで本處に還らしめ、是の如き言を作さく。「汝に巧智なく、時宜を知らずして大衆中に於て我が頭を求索せり、何の故に僻靜の處に於て而も求索せざるや、我今汝の爲に諸臣を諫喩し、汝をして安隱に全性命を得しめたり、設ひ諫めざらんには、汝の身命は何で全濟を得ん、汝小らく遠去して彼の靜處に至つて、我が諸大臣を發遣し已るを須て、我當に汝に就て頭を斷つて相施

＊以下四十三字（原文十九字）は恐らく傳寫上の衍文ならん、今刪るを正しとす。

時に婆羅門、諸大臣に語ぐらく。「汝等癡人、何の故を呵せらるゝや、譬へば悪狗の彼に乞ふ者を吠ゆるが如し、汝今疑ふらく、我れ婆羅門に非ずして遠くより求むるや、是れ博學の出家人に非るかと、汝等の愚惡なる、亦諸の婆羅門の有する所の威力を知る能はず、汝知らずや、日月は虧盈し大海の鹹苦より、闍尭神仙(Jinu 耆尭?)は恒河を呑飮して十二年中斷絕して流れず、自在天王(Īśvara-deva-rāja)は面上に三目あり、瞿曇仙人(Gautama)は帝釋の身上に於て千の女根を化作し、婆私吒仙(Vasiṣṭha)は帝釋身を變じて羝羊形と爲し、毘仇大仙(?)は須彌山を食ふこと乳糜を食ふが如し、此の如きの事、盡く是れ我等婆羅門の力なり、我今此に來れるも亦卿の爲に空言綺飾せず、誰か當に君王自ら能く一切に施すと言ふに能はざるべけんや、我今從つて乞ふに何の可責かある」と。

時に月光王、卽ち諸臣に語ぐ。「卿等今は應に遮ぎらるゝべからず、我今當に此の婆羅門の願ふ所をして滿足せしむべし、汝當に、我の今國を治するに貪婬瞋恚愚癡あることなきを觀察すべし、得る所の果報は今已に成就す、捨身の時到れば蛇の皮を脫する如からん、汝等當に知るべし、我今此の不堅の身を以て彼の堅身に易へ、不堅の財を堅財に貿易し、不堅の命もて堅命に貿易せん、我が先時の如くんば、常に汝が爲に大人の法を說きぬ。今正しく是れ時なり、亦常に汝に正法に向ひて諸惡を閉塞し、諸善の門を開いて菩提の中に於て諸の善根を種ゑ、諸の煩惱を薄らげて家繫を漸解し、我が所得の如く是の如き功德を汝も亦當に得べきを勸めたり、是の故に我今身命を放捨せん、汝當に歡喜すべく、應に憂苦すべからず、若し我れ身を貪つて爲す能はずんば、猶當に苦言もて慰喩して作さしむべし、況んや我今日能く自ら開割するを、而も汝反て更に遮固して聽さざるや、譬へば人あつて草を以て麤に易へ毒を服みて病を癒すが如し、我も亦是の如し、不堅牢の身を捨てゝ堅牢の身を得ん」と。

生は、三毒に惱まされて生死に流轉し、脫期あるなく、老病死の法は常に衆生を害へり、唯我れ一人、能く獨り出離し、但だ衆生の爲の故に世に久住するのみ、汝の所愛に隨つて悉く當に之を與ふべし」と。

婆羅門言く。「王若し能く爾らば、先づ當に心を定めて傾動せしむること莫るべし」と。王卽ち答へて言く。「我昔より來た、常に誓願を立て心動くを得ること難し、我れ衆生の爲に菩提心を起せり、倘身命をも捨つ、況んや餘外の物をや、汝今當に知るべし、家に錢財あつて施す能はずば、當に知るべし、是の人則ち守奴爲るを、猶毒樹の華實を生ずと雖も人の受用するなきが如し、井深くして繩短かからんに、水の得るに由なきが如く、財あつて施さゞるも亦復た是の如し、若し乞を見なば面目を顰蹙する、當に是の人の餓鬼の門を開けるを知るべし」と。婆羅門言く。「善き哉や大王、之の虛言を構へんも復た何の益する所ぞ、若し能く爾らば頭を以て施されよ」と。

時に諸大臣、是の語を聞き已つて婆羅門に語げて言く。「怪しき哉大賊、何處より來れる、此の人の口を以て無義の言を宣ぶ」と。卽ち土石を以て競つて共に打ち坌す。復た共に唱へて言く。「此の如き人は婆羅門に非ず、何處にか當に、草鹿皮を衣、髮を長くし食を節する者にして、是の如き蒺刺の言を宣說する者あるべけん、身體被服は猶仙聖の如きも、口に發する所の言は旃陀羅よりも劇し、身行と口言と相副稱せず、當に知るべし、必ず定んで婆羅門には非ず、乃ち是れ羅刹(Rakṣa)弊惡の鬼神なるを、咄なる哉惡人、汝今此に來りて我等の正法の河を乾さんと欲するや、金翅鳥の如くして法龍を食ひ法雨を斷たんと欲するや、汝惡風の如くして法炬を吹滅するや、是の大惡象、法樹を拔かんと欲するや、成死の惡人に道理あるなし、口に發言するの時舌何ぞ縮まざる、如何か大地能く汝の形を載するや、日光赫炎として汝の身を燋さざる、云何か彼の河汝を漂はして去らざる」と。

き、是の語を聞き已つて往の本習に因つて卽ち惡念を生じ、猶猛火に膏油を投ずるに、膏油既に至つて倍す復た熾然するが如く、亦毒藥を生血中に投ずるに其の力則ち盛なるが如く、譬へば渴ける人の鹹水を飮むが如く、秋に熱を增し春に涕唾多きが如し。是の婆羅門の深山中に住して王の功德を聞いて瞋恚を增益するも亦復た是の如し。猶師子の唖りて麞鹿の聲を聞くごとく、是の婆羅門の瞋恚を增長するも亦復た是の如し。

復た是の念を作さく。「一切世間皆悉く愚癡にして智慧あるなし、而も是の王の爲に誑惑せらる、我今當に往いて一物を求索し、審かに是の王の能く捨離せるや不やを知るべし」と。復た是の念を作さく。「但だ人の從つて身命を乞ふことあらざるのみ、若し索むるあらば必ず當に退轉すべし」と。是の念を作し已つて卽ち深山を出づ。淨法を棄捨して瞋恚增長し、口は赤銅の如く脣を銜み齒を切り、揮攉角張す。譬へば惡龍の雹を放つて穀を殺すが如く、金剛杵もて大山を摧破するが如く、阿修羅王(Asura)の日月を遮捉するが如く、猶暴雨の村落を漂沒し猛盛の大火の乾草を焚燒するが如し、是の婆羅門も亦復た是の如く、是の惡心を持して迦尸城の月光王の所に往き、是の如き本習の惡相を示現し、身體戰動し口言謇吃し、行くこと直路ならず、手捲捩に眉髮迅麗、頭髮刺竪し翹手の五指は五龍頭の如し。心中に毒の盛るゝは猶惡蛇の如く、瞋氣烽欝して煙炎倶に起る。

詐りて言く。「大王よ、我雪山に在りて遙かに王の名を聞き、歡喜踊躍すること量りなし、我れ諸王を觀るに汝の比に如くなく、而も此の土地の功德や量り難し、復た是の如き法王に値遇するを得んや、大王よ今日、他を利益せんが爲に、應當に自ら有する所の身命を捨つべし、正法を修むる者は臥悟常に安し、我れ今大王に一事を請はんと欲す」と。王卽ち答へて言く。「大婆羅門よ、多語を須ゐざれ、請ふ、作す所を*列ねよ、其の所須に隨つて悉く當に奉施すべし、若しは象馬車牛、金銀琉璃、衣服珍寶、奴婢使人、悉く當に給與すべし、婆羅門よ、汝今當に知るべし、是の諸の衆

* 「列」。三本、麗本は「勅」。

爲に非ず、亦轉輪聖王と作るを求めず、我今此の城を莊嚴する所以は、唯だ諸の一切衆生をして、無量の樂を受けて地獄・畜生・餓鬼に墮せざらしめんと欲するのみ、卿等今日、宜しく應に我に於て父母兄弟の想、善知識の想を起すべし、若し我が宮に入らば當に己が舍の如かるべし、所須の物は意に隨つて自ら取れ、我今大いに施さん、自ら疑難する莫れ、物を取つての後には當に善法を行ふべし、身に供しての餘は復た當に諸人に轉施すべし、若し我が身命を須めんと欲せんも亦愛まざるなり、唯だ一切の皆安樂を受けんを願ふのみ」と。

時に月光王、是の言を說き已りて、宮中の所有微妙の寶物を、人をして負ひ出でて意の隨に布施せしめ、諸の人民を視ること猶父母兄弟赤子の如く、顏色和悅して猶秋月の如し。一切の人民の是の王を瞻戴すること、父の如く母の如く兄の如く弟の如く、善心もて王を視る目は青蓮の如し。

爾の時に當つて國中の人民に刀杖を持する者あるなく、悉く皆王に從つて十善を奉行すること、猶牛王に諸牛の隨從するが如く、亦衆星の月を隨逐するが如し。譬へば衆商の商主の後に隨ふが如く、亦衆兵の主將に隨逐するが如し。譬へば蒲桃の其の子の甘きが故に生果も亦甘きが如く、旃檀樹の根華倶に香るが如し。是の月光王の諸の人民をして等しく十善を行ぜしむることも亦復た是の如し。是の時に當つてや、其の國に乃至一人として、瞋嫉憍慢貢高剛強と、人の財物を盜み他の妻を奸犯し、兩舌惡口貪恚邪見なるあるなし。是の月光王、聖帝に非ずと雖も、而も其の人民悉く十善を行ず。是の時人民、草衣果蓏の食なしと雖も、而も其の體貌仙と異るなく、皆深山空閑の處を貪れど、王を愛するを以ての故に家を捨離する能はず。時に王、是の如く善法を行じ已るや。諸の沙門婆羅門等あつて其の德を稱傳し、諸方に偏滿せり。

爾の時一老婆羅門あり、家と愛欲を捨てゝ雪山に居在す。長き髮鬚爪を梵行相と爲し、草を結んで身を障ひ、水果もて飢を禦ぐ。人あつて、月光王なる者あり、施を好んで慳みなしと言ふを聞

（結　勸）

菩薩摩訶薩は是の如き檀波羅蜜を修行し、乃至天魔も留難する能はず。

*月光王品　第五

（序　偈）

菩薩摩訶薩　無上道を行ずるの時　諸の衆生の爲の故に　乃至頭目をも捨つ

（本　文）

我昔曾て聞く。是の迦尸（Kāśi）に過去に王あり、名を月光（Candraprabha）と曰ふ。菩提道を修め法利を求めんが爲に常に諸欲を呵す。其の王、形體端嚴姝好に、才智人に過ぎて天下に雙び少く、質實諂らずして言ふ所柔軟に、至誠欺くなくして瞋恚を遠離し、*同心もて歡樂す。沙門諸婆羅門を恭敬し、慈仁孝順に父母を供養し、隣國の諸王承服德敬し、而も之に重伏して遙かに揖りて友と爲る。名德流布して諸方に遍く、常に能く無量の衆生を利益し、國土の所有の人民を擁護すること猶慈母の其の赤子を愛するが如し。

復た後時に於て竊かに此の念を生ずらく。「我當に云何してか諸の衆生の心をして歡喜せしむべきや」と。即ち大臣に命じて而も是の言を作さく。「卿等今此の城を莊嚴すべし、諸の華蓋を懸け寶幢幡を竪て、悉く寶瓔珞を以て其の身を瓔珞し、衣服被飾は極めて鮮明ならしめよ」と。諸臣跪いて諾ひ、敬しみて王命を奉け、即ち宣告を擧城の人民に出すらく。「卿等各々城郭を莊嚴せよ、あらゆる里巷を極めて清淨ならしむること、三十三天（Trāyastriṁśa）の宮殿の如かれ」と。

時に月光王、一大象に乘じて宮殿を出で、即ち一臣に命ずらく。「卿我が聲を持て諸の人民に告げよ、我今此の如くに城郭を莊嚴すること、貪欲貢高憍慢や他の怨を畏怖して以て寇敵を禦がんが

---

* 月光王本生、諸經に出づ、賢愚經九、Divyāvadāna 等を見よ。又單本にては月光菩薩經あり。

* 三本には「同じく歡樂を止む」とあり。

復た何處にか在る」と。波旬答へて言く。「善き哉や菩薩、汝に深智あつて能く是の義を問へり、諦かに聽け、諦かに聽け、當に汝が爲に說くべし」と。

時に魔波旬、已が神力を以て卽時に諸天の色像を化作し、天の瓔珞、寶鬘、華香を以て其の身を莊嚴し、無量の伎樂を以て娛樂と爲し、諸の天の婇女左右に侍使す。種々の諸樹には常に甘果を出し、華樹、瓔珞、衣服、飮食等の樹、列羅して前に在り、衆量の衆鳥相和して而も鳴き、其の聲和雅にして甚だ愛樂すべし。處々に多く流泉浴池あり、金色の蓮華水上に彌布せり。老病死苦痛の音聲なく、身は七寶微妙の宮殿に處す。

魔、是を化し已つて卽ち菩薩に示すらく。「善男子よ、諸の受施者は悉く皆是の如し、無量の上樂を受く、是の故に汝今應に施心を捨つべし、是より以後、是の微妙の果報を受くるを得べし」と。

爾の時善吉卽ち是の念を作さく。「是の如き言は顚倒虛妄にして義理あることなし、所以は何ん、我未だ曾て呵梨勒樹（Harītaka）に能く甘蔗を生じ、厠糞の中に淨き蓮華を出し、純眞の妙金を變じて銅鐵と爲せるを見ず、信心の檀越の地獄の苦を受くるとは、是の如きの言虧損する所多し、此の言顚倒す、定んで是れ魔の語ならん」と。卽ち是の言を作さく。「善き哉、善き哉、善く能く是の如き功德を分別せり。汝則ち已に我を攝取すと爲す」と。復た魔に語げて言く。「汝今當に知るべし、蝗蟲の翅に有る所の風力もて須彌山（Sumeru）王を吹動する能はざる如く、汝の風力を以て我を動かしむることも亦復た是の如し、先に說いて、諸の施主は施の因緣を以て地獄に墮し、諸の受施人は天上に生ると言ふ如くんば、正に我が願に合へり、願はくは我今より獨り施主と爲つて常に地獄に墮し、諸の衆生をして悉く受者と爲りて天上に生ぜしめん、一身に苦を受けて多くをして樂を受けしむること、豈菩薩の本誓願に非ずや、我今定んで知んぬ、汝は是れ魔波旬なることを、汝亦我と戰に當る能はず、我昔より來た常に施心を集む、汝今云何か卒に我に捨てしめん」と。

慳惜の心を生ずべし」と。

爾の時波旬、卽ち地獄の中に罪人を滿せるを化作して以て善吉に示し、復た是の言を作さく。「是の如きの人等は、皆先世に好んで布施を行じ貪つて正法を求めしに由る、是の故に今日悉く是の中に墮して大苦惱を受く、大王當に知るべし、是の中の罪人は、唯だ刀斧を以て共に相斫截し、支節段々として悉く地に墮在せり、而も命猶存して肯て死せず、熱せる銅鍱を以て周匝して身に纒ひ、擧身に烟出でて命亦盡きず、千釘を以て其の身を釘霍すと雖も、猶牛皮を張るごとくして亦復た死せず、東西に馳走して常に熾火に遇ひ、冷熱の諸風其の身を逼切す、或は惡風あつて其の體を吹散し、或は椎(つち)もて打たれて塵末の如からしむ、飢えては鐵丸を呑み、渴いては洋銅を飮む、或は刀林に入つて劍樹に攀緣し、或は大鑊に在つて湯(たぎり)に隨つて上下し、糜亂すること猶熟豆の如し、是の諸の衆生、是の如き種々の苦惱を受くと雖も、然れども其の命根亦肯て盡きず、大王よ、當に知るべし、我今昔より、求欲する所なし、亦復た供養の具を求めず、王の邪僻の道を修行するを以て、是の故に我今爲に正道を說くなり」と。

時に善吉王、地獄中の是の如き衆生を見て、卽ち悲心を生じて而も是の念を作さく。「是の如き衆生、生死に流轉して出期あるなく、已に無量種々の苦惱を受く、今復た此の地獄に於て苦を受くること愍れむべく傷むべし、何の時にか當に諸の苦惱を斷つて餘りあるなきを得べけん、是の如き衆生、先に惡法を行じて今苦報を受く、自ら作して自ら受く、實に我が*咎に非ず、我今定んで知んぬ、是の諸の無量に苦を*受くる衆生は、皆先世に身口意の業もて多く不善を作せしに由つての故に、今日是の罪中に墮せしめぬ、定んで施に緣つて、而も苦を受けざることを」と。

時に善吉王、慈悲心を以て波旬に向ひて而も是の言を作さく。「善き哉や大士、汝は眞に慈悲なり、憐愍の心あつて善く道と非道の相を說けり、若し使施者是の如き苦を受けんには、諸の受施者

* 「咎」。三本、麗本は「苦」。
* 「受」。大正藏「著」に誤る。

力の能く諸仙を伏するあり、飲水食果して諸の苦行を行じ、善く能く諸の呪術を成辦せる者も、我華箭を射ること乃至一發ならんに、持戒者をして悉く皆破壞せしむること、譬へば風吹いて大樹を驅折するが如し、されど、我今波旬、射ること三發すと雖も、恐らく善吉菩薩の身心をして傾動せしむる能はざらん、何を以ての故に、外道の諸仙に智慧慈悲の心あるなく、利他を求めず正に自樂の爲にせり、是の故に箭を被りて尋で卽ち退散す、然るに善吉薩菩には大智慧あり、慈悲の心篤くして自らの樂を求めず常に一切の爲にせり、我今射ること乃至三發すと雖も、猶其をして退散せしむる能はざるを恐る、何を以ての故に、是の人必ず定んで諸の衆生の爲に無上道を求め、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきの故に、其の未だ成ぜざるに及んでは、我れ中間に於て或は留難して悉く破壞せしむべきこと、譬へば人あつて始めて患苦に遇ふに、或は醫師あつて少かに湯藥を給すれば則ち差えしむべきが如く、亦小樹の始めて生ゆる時、爪を以て能く斷たんも、其の長大するに及びては、百斧もて之を伐るありと雖も猶難きが如し、曼く此の菩薩未だ無上正眞の道を成ぜず、當に速かに之を壞すべし」と。

　時に善吉王、多く布施を行じ、疲極して獨處に靜坐して而も息へり。爾の時波旬、上空の中に在つて身より光明を出して日月を遏絕し、而も是の語を說かく。「善吉大王よ、善き哉善き哉、汝今眞に能く正法を推求し衆生を愛念せり、猶慈母の其の子を愛念するが如し、善男子よ、汝一切の善法を增長せんと欲して而も反つて一切の惡法を熾然たらしむること、猶人あつて甘露を食せんと欲して而も毒藥を食むが如し、安樂を求めんと欲して而も反つて賊に入り、安隱の身を欲して反つて非藥を服めり、渴を除斷せんと欲して反つて鹹水を飲み、婬欲を斷たんと欲して反つて衆女を樂しめり、善男子よ、汝知らずや、諸の檀越（Dānapati）あり、施の因緣を以て皆地獄に墮せり、是の故に我今汝を憐愍するの故に種々に分別せん、汝當に受持すべし、今より以往、當に施の想を斷つて

く、言常に笑を含み麤獷あるなし。父母を供養し師長を尊重し、沙門出家道士を恭敬す。自ら十善を行じ亦人にも行ぜんを勸め、常に布施を行じて斷絶あるなし。若し貧窮困乏の人、身體羸瘦し衣裳の障はざるあれば、菩薩見已つて卽ち憐愍を生じ、擧身戰動すること猶毒箭を被るが如く。心竊かに念言すらく。「是の諸の衆生、慳惜に因緣するも、癡人にして識へず、人形を受けて形相具足すと雖も福なきを以ての故に常に他に從つて乞へり、皆先世に布施を肯てせず、慳と嫉妬を以て而も自ら覆蔽せるに由つて、現世に報熟して而も是の苦を受く、猶田夫愚癡無智の遠く妻家の道路に至つて飢渴するが如し、既に其の舍に入るに復た値ふに人なし、卽ち粳米を盜みて口に滿し而も唵み、未だ之を咽まざる頃に家人卽ち至る、是の人慚愧して復た咽み得ず、惜みて吐棄せず、家人見已つて卽ち之に問ひて言く。『君何等を患ひて乃ち是の如くなるや』と、是の人聞き已つて默然として聲なし、爾の時妻家の眷屬大小、卽ち良醫に將ひて而も爲に之を*譾る、其の口頰を見るに堅きこと木石の如し、更に餘の計なければ卽ち刀を以て是の人の二頰を劃る、既に之を破つての後に亦膿汚なし、但だ生米の其の口中に滿つるを見るのみ、是の人是を以て覆藏せる盜事に現報を見すを得たり、猶女人の覆藏せる懷妊の臨產の日に大苦惱を受くるが如く、聲を發し大に喚び、乃ち一切をして悉く共に之を知らしめぬ、人も亦是の如し、覆藏せる諸の罪の報の熟するの時、苦惱に逼られて世に現露す、或は慳惜嫉妬に坐して心を居きて而も此の苦を受く、我今一切の諸路を杜塞して、堅妬をして心に來入せしめざらん、我今當に一切の施す所を集めて、衆生を布施の中に安止すべし』と。

時に善吉王、是の事を思ひ已つて常に布施を行じて休息あるなく、其の施す時に當つては心喜ぶこと量りなし。是の時に當るや、魔王波旬、愁憂して樂まず、而も是の言を作さく。「怪しき哉善吉、云何か一旦にして我に怨もて對へんと爲るや。而も我れが境界を朽虛せんと欲するぞ、我に大

＊譾＝診。

菩薩摩訶薩(Mahā-sattva)是の願を作し已つて、便ち木錐を以て目に向け挑らんと欲す。時に婆羅門、尋で前みて手を捉へて言く。「且く挑出すること莫れ、目は今我が有に屬す、更に餘に施す莫れ」と。菩薩答へて言く。「我今一身なり、云何か一日に連りて二の寄を受けんや、先の婆羅門は已に我に婦を寄せ、汝今眼を寄す、我當に云何か而も守護するを得ん」と。時に婆羅門、卽ち帝釋の身に復り、菩薩に語げて言く。「婦と目と二物は悉く是れ我が有なり、今相付囑す、復た餘に施す莫れ」と。

爾の時帝釋、卽ち飛んで而も去り、虛空中に於て四種の華を雨らし、空中に聲を出して諸天に宣告すらく。「汝等當に知るべし、此の人菩提(Bodhi)の道樹を增長す、久しからずして當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と。

(結　勸)

菩薩摩訶薩の檀波羅蜜を行ずるや、其の事是の如くして捨てざる所なし、一切衆生若し是の事を聞かば、應に菩薩に於て悉く歡喜を生ずべし。

善吉王品　第四

(序　偈)

菩薩施を行ずるの時　定心もて究竟して作す　乃し魔波旬(Māra-pāpimā)に至るまでも
斷絕を得る能はず

(本　文)

我昔曾て聞く。過去に王あり、名けて善吉(Sulakṣaṇa?)と曰ふ。菩提の道を成ぜんと欲する爲に、常に利益を行じ正法を修習し、諸の衆生に於て刀杖の想なし。面目の端正なること世中に雙び少

時に婆羅門、菩薩に語げて言く。「今此の婦人顏貌端正にして身體姝妙に、色像の第一なり、道路嶮難にして多く寇賊あり、我今單獨にして去らば必ず達せざらん、且らく還して相寄す、復た餘に施す莫れ」と。菩薩復た言く。「我今君に賴みて牢獄を破壞し繫縛を斷絕せるに、汝今復た我に牢獄を還し我を繫縛せんと欲するや」と。婆羅門言く。「若し憐愍せられて必ず得しめんには、願はくは之を還受したまへ」と。須臾の時を經て、菩薩憐愍するの故に言く。「少時還受す、竟に復た何ぞ苦しまん」と。婆羅門言く。「我若し期を失ひて還るを得ざらば、愼しみて更に以て餘人に施與する莫れ、已に是れ我が有なり、意に任かするを得ざれ」と。

是の語を說き已つて卽便ち還去し、此を去ること遠からず、復た更に化して餘の婆羅門と作り、菩薩の所に還りて而も是の言を作さく。「汝勝れて一切の衆生を利益す、譬へば果樹の常に甘果を出すが如し、我れ遠方に於て久しく風味を承く、是の故に裳を褰げて而も來つて相造れり、希むらくは所願を滿したまへ」と。菩薩答へて言く。「唯だ一妻あるのみ、先に已に人に施せり、今は唯だ身ありて猶自在を得、若し須めんには相給せん」と。婆羅門言く。「汝の身を須めず、唯だ二目をのみ須む、能く相給せんには深く至念を抱かん」と。

爾の時菩薩、卽ち是の念を作さく。「是の婆羅門我より目を乞ひて何等を作さんと爲すや」と。復た是の念を作さく。「我何をか計する所ぞ、是の身は猶塚間の死屍の如し不堅牢を以て堅牢に貿易すること、應當に歡喜すべし、何の思慮する所ぞ」と。

爾の時菩薩、佉陀羅（Khadira）木を捉つて而も誓言を作さく。「我今悉く一切衆生の爲に二目を捨てゝ貪惜する所なし、我先に婦を捨てゝ持用て人に施せり、願はくは此の功德の鍾もて衆生に及ぼし、永く貪欲を斷たん、施子の因緣もて愛習を離れしめ、「今二*目を施して悉く衆生をして清淨の法眼を得しめん」と。

＊「目」。大正藏に「日」。

猶果樹の多く人に摘まるゝが如し　譬へば坏器もて天の降雨に値らんに　悉く皆爛壞して遺餘あることなきが如し』　三界の衆生も亦復た是の如し　無常の雨に遇つて免るゝを得る者なし　今此に業を營み明に彼の事を造りて　樂著して死の至るを覩ず覺らず』と、是の如く二子必定して當に捨すべし、我今法の爲に而も以て人に施す、汝當に歡喜すべく應に愁苦すべからず、我れ子を捨つると雖も、子必ず安樂ならん、是の故に應に大苦惱を生ずべからず」と。

王子の菩薩是の語を說き已るや、其の妻寂默として更に陳ぶる所なし。爾の時釋提桓因、卽ち是の念を作さく。「怪しき哉、菩薩に更に愛惜する所なし」と。卽ち下つて身を化して婆羅門と爲り、菩薩の所に至つて而も偈を說いて言く。

大仙よ今當に知るべし　名聞は梵天に徹せるを　能く大施を行じ　正法を愛樂す』
今我が求索する所は　蓋し亦言ふに足らず　唯願はくは大いなる正法もて　我の所願を滿したまへ』

菩薩答へて言く。「我今身命は悉く一切の爲にして愛惜する所なし、況や餘の外物錢財珍寶をや、假使有らんには實に愛まず、我本と家に在るや多く庫藏、象馬、車乘、奴婢、僕使あり、悉く以て諸の婆羅門に給施して慳惜する所なかりき、但だ今現在は空しく所有なし、唯だ身と婦とのみ、若し必ず須めんには實に復た愛まず」と。婆羅門言く。「汝能く爾らば便ち妻を以て而も惠施せらるべし」と。菩薩答言く。「嫉妬惜の心は久しく以て遠離せり、汝小らく聽け、我れ其が爲に法を說かん」と。菩薩妻に報ゆらく。「是の婆羅門は我よ汝を乞へり、汝の意に云何」と。妻便ち答へて言く。「意の隨に自在なれ、我今君に屬す、何ぞ自らに從ふを得ん」と。卽ち妻の手を捉つて婆羅門に授く。

人に施せる』　我子既に稚小に　端正なること及ぶ者なし　面色は蓮華の如く　目は優鉢羅（Utpala）の如し』　自ら水果を食するも　亦た相煩累せず　如何か人の情なくして　一旦にして以て他に施せるや』　此の路石沙と　荊棘惡刺等多し　彼の人に慈慧なく　當に將ゐて何處にか至るべけん』　君今見ずや　[一〇]彼の諸の麞鹿等すら　猶來り求めて推覓するを　況や君は其の父と爲す』　此の山中に見えず　一切諸の樹木も我が子を失ふを以ての故に　悉く皆而も啼哭す』　一切諸の樹木に　悉く心識あること無きをすら　猶尙ほ能くぞ是の如くなる　況や復た心ある者をや』

爾の時、其の地に芭蕉樹あり、身を擧げて戰動す。妻尋で語りて言く。「汝の夫も亦、子息を以て人に施し、慈愍なきや、何の故に是の如く身を擧げて戰動する」と。

爾の時其の妻、子を念ひて悲しみ號び、東西に馳走して其の所を安かず。菩薩、復た言く。「甚だ善し、甚だ善し、已に山に入りて善法を修行するを得たり、云何か心をして是の如き苦を受けしむるや、空閑居して善妙の理を修む、怪しき哉や王女、深智あり勇猛精進なりと雖も、而も生死の過患を解する能はず、父母妻子兄弟も怨憎すること、誰か能く中に於て其の根原を識らんや、兒の過ぎ去れる見ること、或は汝が怨と爲らん、彼若し苦に遭はば、汝則ち歡喜せよ、今汝の子に別るゝ爲に便ち憂惱せるも、設使死亡して強ゐて將ゐ去らんには、復た我に於て瞋恚を起すべけんや、汝本と諸の仙聖の言を聞かずや。

若少なるも壯なるも老ゆるも皆死に歸すること　猶果の熟して自然地に落つるが如し　汝本と一切の生死の　猶夢中に邪まに事を見るが如くなるを觀ぜずや』　無常の生死は諸の衆生を將ゆ　父母ありと雖も誰か能く之を救はん　譬へば＊是れ師子の諸の鹿を摶撮するに彼に母ありと雖も亦た救ふ能はざるが如し』　是の老病死は常に衆生を害すること

【一〇】 二子山中にありて鹿と友となる、今二子なきを以て鹿の探せるをいふ。

＊ 「是」は「如」の誤傳か。

山の中に大王の子の一切持と名くあり、此の二子を以て我に施して奴と爲す」と。王、是の語を聞きて腕を掩して而も言く。「怪しき哉、我子の法を愛すること太だ過ぎたり、乃至愛する所の兒息をも惜まず、汝今我に還せり、當に汝に直を與ふべし」と。婆羅門言く。「敬みて王命の如からん」と。卽ち珍寶を受けて其の家に還歸す。

時に菩薩の妻、空林中に在つて左目瞤ぎ動き、心驚きて樂しまず、採る所の雜華、尋で卽ち萎枯し、器中の二果、迸出して地に墮ち、二乳驚動して汁自からに流出し、鳥の前に在りて連聲して鳴叫するあり。卽ち是の念を作さく。「今此の瑞應は必定して不祥ならん、將に我が夫の命根の斷てるに非ざるや、或は是れ虎狼師惡獸の我子を食噉せるか、復た遨戲して山に墮して死せるに非るか」と。是の事を念じ已りて便ち所止に還り、菩薩を尋ね見るに一石岸に近く草敷の上に在つて身を傾けて而も坐せり。卽ち是の念を作さく。「我夫此に在り、定んで他慮なからん」と。便ち前みて白言すらく。「二子今は安隱と爲すや不や」と。菩薩答へて言く。「二子安隱なり」。妻復た言ひて曰く。「我今耳中に實に安隱と聞けるも、但し未だ之を見ず、猶憂慼を懷く」。菩薩答へて言く。「汝但だ小らく坐して自ら當に之を見るべし」。妻便ち却いて坐るや、復た重ねて告げて言く。「汝知らずや、我が本誓願を、一切の所有は要ず當に人に施すべしと、汝朝出での後に、婆羅門ありて來り、我に乞ふに從つて尋で二子を以て而も之に布施せり」と。妻、是の語を聞きて其の心迷沒し、身を擧げて自ら撲ち、悶絕して地に躃る。

爾の時菩薩、水を以て之に灑ぎ、水灑ぎての後還び醒悟を得たり。身體戰動し、坐ろに偈を說いて言く。

怪しき哉正法の爲に　而も苦行を行じて　子を以て布施するの時　云何か心亂れざらん』

君が心は剛鐵に非ず　亦未だ永く愛を離れず　云何か能く子を以て　而も用て

爾るべからず、老小の懲れむべきは愚愚に之あり、父今何の爲にか、特に苦毒せらるゝや、假使法の爲に而も捨てられんには、慈惻を喪失す、豈是れ法ならんや、我幼稚なりと雖も亦曾て婆羅門法を説くを聞けり、卽ち若し妻子を擁護する因緣あれば梵天に生ずるを得と」と。

爾の時菩薩、是の語を聞き已つて身心戰動し、卽ち自ら呵責すらく。「何に緣つて乃ち爾るや、心よ、汝知らずや、昔より已來、生死に流轉す、一切衆生として、何者か怨に非ざる、何者か子に非ざる、汝今闇蔽し盲ゐて見なきや、何ぞ繫念し思惟し分別せざる、汝今彼が二子を將ゐんと爲るに直りて、便ち是の如くに動けるや、若し死の至らん時には、當に云何かすべけん」と。

爾の時菩薩、心を呵責し已つて卽ち定住を得、婆羅門に語るらく。「汝速かに將ゐ去れ」と。是の時二子、卽ち父に白して言く。「且らく、小らく住りて我が母の至るを須つを聽されよ」と。跪拜問訊して辭去晩らず。菩薩答へて言く。「汝等但だ去れよ、吾汝の母と當に汝の後に隨ふべし」と。

時に婆羅門、其の二子を將ゐて速疾に發引す。是の時二子、路に隨つて還た顧み、父の面迴視して悲號啼哭す。菩薩爾の時、更に復た心を呵すらく。「汝今應に復た更に戰動すべからず、當に受形して老死の熾然なるを觀ずべし」と。子去りて未だ遠からず、復た誓願を立つらく。「我今子を捨つること、實に是れ難行なり、願はくは此の因緣もて阿耨多羅三藐三菩提を成ずる得て、諸の衆生の一切の繫縛を除かん」と。

時に婆羅門、發脚して未だ遠からず、卽ち是の念を作さく。「甚だ奇し、王子は世間に希有なり、言の如く則ち行ひて、我に二子を施せり、修むる所の善法は具足成就す、今此の二子は當に何れにか賣るべけん、唯だ本の祖王の國に還至する有るのみ」と。

時に婆羅門、卽ち二子を將ゐて王宮に往詣す。是の時祖王、其の二孫を見て悲喜交も集り、婆羅門に問ふらく。「汝何處に於て此の二兒を得たるや」と。婆羅門言く。「且らく聽きたまへ、彼の雪

て二奴を給施せば、我當に國に還るべし、若し能はざれば我必ず此に死せん」と。
爾の時、王子卽ち是の念を作さく。「我今當に何等の方便を作してか、此の人を發遣すべき」と。爾の時二子、近く遠からざる山中に在りて遨戲せり。復た是の念を作さく。「我今當に一切衆生の爲に不空の因緣を作すべし」と。卽ち其の子を喚ぶ。子旣に至り已るや、菩薩之を抱いて復た是の念を作さく。「我が今二子は、生れて深宮に長じ、身體柔軟にして未だ寒苦を經ず、如何か一旦にして父母に違離して他の僮僕と爲らん」と。復た是の念を作さく。「我今何に緣つてか是の如き事を計するや、若し難行苦行を修行せざれば、何に緣つてか阿耨多羅三藐三菩提（Anuttara-saṁyak-saṁbodhi）を成ずるを得ん、是の因緣を以て我當に之を行ずべし、願はくは此の行を以て速かに阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得ん、我れ此の愛する所の二子を捨てず、天人中の果報、轉輪聖王（Ārya-cakra-varta-rāja）帝釋、梵、四天王を求めず、願はくは此の功德もて悉く衆生と與に無上道を成ぜん」と。

爾の時菩薩、手に二子を執つて婆羅門に授け、是の如き言を作さく。「汝婆羅門よ、我が此の二子は猶我が命の如し、幼稚にして智なく、未だ人の語を解せず、復た人に似たりと雖も未だ識つ所あらず、今持て相與へん、以て僕使と爲せよ、恐らく母來至せんには速かに將ゐ去るべし」と。

爾の時二子、父の衣を迴り捉へて而も父に白して言く。「父よ、今何に緣つてか我が兄弟を持て此の惡婆羅門に與ふるや、我等、今より永く父母に離る、年旣に幼小にして未だ識つ所あらず、覆なく護なし、云何か能く活きん、我等何の故に此の苦惱を受くるや、今他の手に墮ちんには命必ず全からず、王法を犯せる如くんば、則ち刑罰を受けんも、我等愚小にして未だ犯す所あらず、何に緣つてか今日、乃ち是の苦を見るや、假使實に犯さんも、猶恕放を望まん、況や犯す所なくして而も橫まに枉を見る、設し父にして我に於て愛心已に斷ち、但だ人と法の爲のみにせんには、復た應に

是の時、王子は常に衆生の爲に是の義を思惟し、妻は常に山に入つて果蓏を採つて以て自ら供給す。是の時、一老婆羅門あり、其の形醜惡にして惡み見る所なり、遠方より來る。王子見已つて卽ち命じて坐せしむ。水を行し果を施し、然る後に問訊すらく。「汝何に緣つてか此に至れるや、將に家の過患を厭へるに非ざるや、壯なれば應に家に在つて極めて五欲を情ふべけんも、今已に衰老して死の時將に至らんとせり、捨て來つて道を修むる、甚だ是れ快事なり、是の中、閑靜にして家過あるなし、汝若し此を樂しまば、我が有する所の甘果冷水は、常に相供給して乏くるあらしめず」と。婆羅門言く。「欲想なき者は應に此に住すべし、我今欲想猶未だ滅する能はず、是の故に此に住する能はず、大仙よ、汝且らく之を觀よ、我身、老いて頭白く、齒落ち行歩戰掉し、目視矇々たり、舌乾き口燥ぎて語言する能はず、頭重くして勝へ難きこと猶太山の如く、耳聽いて了らず、身體衰變すと雖も、而も欲想あること猶壯時の如し、大仙よ、當に知るべし、我年朽邁し身力羸損するも、家貧にして空乏し僕使に困しめることを、若し我が本と願ふ所を滿さんと欲せば、幸にして二の奴僕使を惠施すべし」と。

菩薩、之を聞いて卽ち是の念を作さく。「怪しき哉、今日、若し有ることなしと言へば則ち本誓に非ず、若し有りと言はゞ今實には空貧なり」と。婆羅門言く。「君今遲疑す、何の思慮する所ぞ、將に我の婆羅門として禁戒を受持する博學の人に非るを慮れるや、若し此の慮あらば、我實に是なり」と。菩薩答へて言く。「我本と家に在りて多く僕使あり、金銀珍寶は庫藏に盈溢したりき、爾の時に當つては、乞ふあるを見れば終に無しとは言はざりき、今此に在つて止まるに　悉く持ち來らず、何處にか當に以て相ひ副ひ稱ふを得べけん、遲疑する所以は是の事を思へるのみ」と。婆羅門言く。「我今衰老して氣力空竭し、遠方より來つて所須を乞求す、汝本より來た、凡そ乞ふ者を見て曾て我に所有なしと發言せず、今日何の故に是の如き言を發するや、大仙よ、若し能く憐愍し

し、云何か一旦にして驅擯すること乃し爾るや、君の愛形身色の柔軟なること瞻婆華(Campaka)の如し、云何か一旦にして當に棘刺土石の上に臥すべけん、今の如きは宮に在つて五樂もて自ら娯しむも、設ひ當に山に入らんには唯だ虎狼師子毒獸の諸の惡音聲を聞くのみなるべし、怪しき哉、大王の慈愛の心や、今日は安くにか在る、何れの親父の如きか、變じて離薄と成り、小かなる因縁を以て一旦にして怨と成らんや」と。

爾の時王子、卽ち妻に答へて言く。「善き哉や王女、汝に深智あり、精進勇猛なるは是れ我が善き伴たり、設ひ我是ならずして應當に呵責すべけんも、云何か乃ち是の如き麁言を出さん、諸の王は國の爲に共に相戰諍し、貪欲瞋癡の爲に惱まさる、是れ我が福緣なり、乃ち父王をして我が山に入つて正法を修行することを聽さしむるは――汝今應に不歡喜を生ずべからず、世中の常法は、王若し衰老せんに則ち太子を立てゝ國事を知らしむ、國事殷湊して諸の過咎多く、咎既に身に鍾れば逃避する處なし、王今未だ衰へず、便ち能く放捨し、我が山に入つて其の志を修學するを聽せり、世間の過咎永く及ばしめず、汝今何の故に歡喜せざるや、汝便好く住れ、我今去らんと欲す」と。答へて言く。「妾の父母の君に處與する時、日月大地及び四天王も悉く證知せり、初婚の日、君が自ら發言して相捨てずと誓ひしを――云何か今日、便ち獨り往かんと欲するや、當に知るべし、日月及以び猛火の明と質と俱に相捨離せざるを、君今云何か、而も捨てられんと欲するや」と。

爾の時王子、悉く家財を以て貧乏に布施し、卽ち兩肩を以て二子を荷負し、其の妻を携將して雪山(Himavant)中に往く。王子到り已つて果を食ひ水を飮んで以て性命を存し、晝夜に慈悲の心を修習す。復た是の念を作さく。「我れ本と家に在りて五欲を受くと雖も、未だ今日山に處して歡娯するに若かざりき、是の如きの樂は、釋提桓因の受くる所の欲樂も及ばざる所なり、是の諸の衆生、正法の微妙なる味を知らざること、烏の蓮華の味を知らざるが如し」と。

を得るなり、大王、當に知るべし、一切の餓鬼、飢の火に逼られて身心燋惱す、此の如きは皆是れ貪著の因緣なり、若し諸天中の七寶の宮殿に住し壽命の長遠なる、當に知るべし、皆是れ布施の因緣なり、大王よ、臣の今施す所は、火も燒く能はず水も漂はす能はず、王家、盜賊、怨家、債主も施す所の物を侵奪する能はず、諸の趣中に於て能く親友と作る、是れ[一九]天の乘載なり、是の所施の物の生死の中に在つて臣の身に隨逐すること、犢の母に隨ふが如し、王の勅する所は、臣をして布施の心を止まらしめんと欲し、「若し能く捨てざれば當に深山に徙すべきが如きも、深山に至ると雖も苟も施心を息めず、貧窮の人亦復當に來るべし、臣の本誓願は實は山林を樂ふも、未だ啓さゞる所以は、父の放ちたまはざるを慮ればなり、大王、今已に聽したまひて眞に本願を得たり、正に爾り、奉辭して涉路進發せん、所以は何ん、山中の中は是れ閑靜の處にして仙聖の樂しむ所、能く貪欲、瞋恚、愚癡を離るればなり、臣若し彼に至らば、必ず能く自ら利せん」と。

爾の時王子、卽ち王の足に禮して右に遶ること三匝、奉辭して出づ。次で母の所に至り、跪禮すること常の如く、右に遶ること三匝にして足に禮して而も出づ。復た妻の所に至りて而も是の言を作さく。「卿、好く此に住まりて父母を供養し、其の子を守護せよ、此は卽ち是れ、汝の修行正法なり、今我去つて遠く山林に至らんと欲す、何を以ての故に、我先に常に願へらく、深山に入つて修行せんと欲せるに、其の志、父王今聽したまへばなり、是の故に我れ當に速かに彼に往至して以て我が心に副ひ、諸の禽獸と共に等侶と爲り、水果を飲食して足りて自ら存活すべし、汝は是れ王女にて身體柔軟に、端正詳雅なり、何ぞ能く是の如き苦事に堪忍せん、故に應に此に住まりて我に隨ふべからず」と。其の妻、聞き已つて心悶え懊惱し、身體掉動すること芭蕉の葉の如し。悲號啼泣して胸を椎ち髮を拔き、聲を擧げて大いに哭いて唱言すらく。「奈何せん、君に何の罪ありて、乃ち父王をして之を深山に擯けしむるや、大王は寬慈にして正法もて治化し、民を愛すること子の如

【一九】天の乘載(deva-yāna)。天界に生るゝの道。

すべし」と。

爾の時父王、卽ち其の子を召して是の念言を作さく。「怪しき哉我今云何せん、一旦は諸の大臣の爲に、我が子をして隨意に施を行はしめざらんか、我今慚愧す、猶婦人の姑妐を怖畏するが如きを」と。卽ち其の子に向つて而も是の言を說かく。「卿、今より始めて、復び一切の功德に貪著する莫れ、離捨すべし、心に正法を行はば、應に草衣服を著け水と果を噉ひて、遠く深山に處すべし、卿今、應に其の右目を挑つて以て左眼を治すべからず、卿、今日に於て如何か一旦にして、我が心及び諸の大臣を惱亂するや、夫れ人たるの法は先づ其の親を安じて、然る後に乃ち當に餘他の人に及ぶべし、卿今云何か、我が白象を以て怨家に施與するや」と。

―(卷の中)―

爾の時王子、合掌長跪して父王を敬禮して言く。「臣の布施する所は、貪欲、瞋恚、愚癡の爲ならず、名聲の爲ならず、天人中の豪貴に生るゝを求めず、是れ顚狂錯亂の心もて作すに非ず、正法を求めんが爲に是の施を作すのみ、大王、當に知るべし、臣今、復た父母兄弟妻子を擁護すと雖も、其の死する時に及んでは、親族ありと雖も誰か能く隨ひ去らん、唯だ正法のみ之を逐ひて捨てざるを見る、臣若し、心に善法を行ずること無くんば、猶大王の苦言敎勅を望まん、如何か一旦にして邪言を信用して、臣の善を行ふを斷じたまふや、王は先に臣に捨心を*放捨せんを勅したまへり、捨心は是れ臣が本性の根原たり、云何か捨つべけん、猶地の性の堅なるを捨つべからず、乃至火の性の熱きを捨つべからざるが如し、如し魚を陸に投ぜんに、命何か能く存せんや、如し王の僮僕にして六情具足し身體完具すること天と異るなからんに、是の人云何か王の與に給使せん、又王家の所有の車乘、婇女、金銀、珍寶は何處より得るや、當に知るべし、皆是れ過去の施業もて、今是の報

*「放」。三本、麗本は「施」。

銀、琉璃、種々の車乘、奴婢の屬を須めんには、我悉く能く與へん、此の白象は既に我が有に非ずして、自在なるを得ず、復た是れ父王の乘らるゝ象なり、云何か輒ち當に以て相惠施すべけん、是の白象の價を計するに幾許に値するや、我當に直を與へて汝等をして貧乏あらしめざるべし、何ぞ必ずしも正しく此の白象を得るを欲せんや、汝婆羅門は、衆生を憐愍して出家受戒し、已に一切の物を遠離せり、何ぞ是の象を用ひん、汝若し得ば、或は更に患あらん」と。

諸の婆羅門、復た是の言を作さく。「我等、錢財珍寶を用ひず、唯だ是の象を須め、之に乘つて山に入り、好華を求覓して諸天に供養せんのみ、當に衆生をして若しは天上に生れ、或は涅槃に入らしむべし、王子の本願は他を利益せんと欲せり、我も亦是の如し、他を利益せんと欲す」と。

爾の時王子、是の語を聞き已つて卽ち悲心を生じ、便ち白象を下りて＊復た是の念を作さく。「此の象は是れ父王の所有なりと雖も、今以て布施せんに、大臣人民に必ず當に嫌はるべし、他を利益せんと欲して何ぞ是を計るを得んや、然れど我の施す所は、名聲もて天人中に生ずるを求めず、是の因緣を以て、諸の衆生をして諸の煩惱を斷たしめん」と。是の願を作し已つて便ち白象を持て婆羅門に施し、自ら一馬に乘りて還つて城に入らんと欲す。諸の婆羅門、旣に象を得已つて便ち共に騎を累ねて迴還して去り、忽爾の間にして已に本國に到れり。

時に諸の大臣、卽ち共に集聚し、疾かに王の所に至つて白して言く。「大王よ、今日快善なりや、重じたまふ所の白象を、王子已に持して婆羅門に施し、諸の婆羅門は得已つて乘り去り、今は敵國に到れり、王が先の時に、其の金銀珍寶を布施するを呵責したまはざるを以ての故に、今日復た、白象を以て怨家に施與せしむるを致せり、大王よ、世間の惡子に諸の過患多し、謂く酒を飲み、[一八]樗蒲し、色を貪るの費用なり、臣等敢て奏するも咎責したまはず、王子若し能く今より已往、更に財を以て人に惠施せざれば、則ち住するを聽すべし、若し止まざれば便ちに當に之を擯けて深山に遠著

＊「復」。元明二本、麗本は「覆」。

【一八】樗蒲。樗蒱に同じ、「ばくち」のこと。

爾時諸臣、此の王子に於て悉く嫌恨を生ぜり。

*咄なる哉我が王、愚癡にして智なし　財あれども食まず、　後世に安在す　見て用ふる能はず、亦子を呵せず　庫藏を分散して、功なき者に施すを』　庫藏盡き已つて、民當に逆散すべし　民既に散じ已つて、怨至らば誰か護らん　假設護なからんには、命當に全からざるべし　命既に全からず、國復た誰か居らん』

爾の時父王に一白象行蓮華上あり。力能く敵國怨讎を降伏す。此の象あるを以ての故に、他國をして侵陵する能はざらしむ。

爾の時大臣及び諸の人民、各是事を思へり。

時に邊方に怨敵の王あつて、常に是の念を作さく。「我當に云何してか方便を設けて彼の白象を得べき」と。即ち諸人を遣はし、詐つて苦行婆羅門の像を爲し、往詣して王子に白象を求索せしむ。

爾の時王子、諸の大臣の瞋恚の心を生ぜるを見るの故に、白象に乘りて出城遊觀し、一林に向はんと欲して即ち其の路に於て婆羅門を見る。既に王子を見て心に大いに歡喜し、呪願して且つ言く。「願はくは王子をして、大王無上の位を紹繼せしめ、壽命無量に、隣國德に歸して天下太平ならん、王子よ、我等悉く是れ婆羅門なり、遠方に居在して、常に王子の布施を好喜するを承はれり、故に遠きより來つて道路に飢渴し、備さに衆苦を受く、王子よ、當に知るべし、我等の清淨なる禁戒を受持し、多く讀誦する所、*書として綜べざるなきを、王子の功德は十方に流布し、風を聞いて稱讚し、愛樂せざるなし、能く衆生の願ふ所をして滿足せしむ、來つて乞ふ者あれば、一とて空しく還すなし、汝の乘る所の象を、願はくは施與せられよ」と。

爾の時王子、即ち是の念を作さく。「今若し與へざれば則ち本の要に違はん、設ひ當に與へんとせば、我が所有に非ず、復た是れ父王の愛重する所の者ぞ」と。即便ちに語げて言く。「君等若し金

＊以下の偈、原本に八字一句の八偈とするも、押韻より見るに最初には四字一句十六偈となりゐたるものと思はる。

＊「書」。三本、麗本は「有」。

少に在りて形容端正なること、猶滿月の衆星中に明く、衆生之を視て厭足あることなきが如し。威容の安諦なること須彌山の如く、智慧の甚深なること猶大海の如く、忍辱の成就せること猶大地の如く、心に變易なきこと閻浮檀金（Jambūnada 紫金）の如く、常に一切の人天の爲に愛せらるゝこと、猶八味清淨の水の如く、諸の世間に於て其の心の平等なること、猶日月の等しく物を照すが如く、衆生の願を滿すこと如意寶の如く、諸の乞者を見て心に歡喜を生ずること、猶慈母の愛する所の子を見るが如し。是の時王子、當に偈を說いて言く。

『我今自在を得　　有する所の無量の財を　　悉く衆生と共にすること　　日の皆等しく照すが如からん』　　乞求する者あるを見ては　　終に有るなきを言はず　　求索する所なき者にも亦復た之を施與せん』

王子菩薩、諸根の寂靜なること猶梵天の如く、財賂の具足すること毘沙門王（Vaiśramaṇa）の如く、諸の衆生の爲に供給走使すること、猶弟子の師の和尙に事ふるが如く、心常に一切衆生を愛念すること、猶父母の所生の子を念ふが如く、衆生を敎化する法則儀禮は大博士の如し。王子菩薩、悉く是の如き功德を成就するを得たり。心常に一切衆生に施すを樂しみ、是の如きの物は是の人に施與せん、是の如きの物は某甲に施與せん、是の人恐怖す、我當に安慰して正法を修行すること廢捨あるなかるべしと。施す所の物は、謂く、金、銀、瑠璃、頗梨、眞珠、車𤦲、馬瑙、珊瑚、璧玉、種種の器物、及び諸の衣服、床臥、敷具、車乘、舍宅、田地、穀米、奴婢、僕使、象馬、牛羊なり。所須あるに隨つて悉く能く*之を與ふること、譬へば、天の雨りて百穀滋長するが如く、恒に五指を以て人に財物を施すこと、猶五龍の大雨を降注するが如し。

王子菩薩、常に布施を行じて日々に絕えず。設使一日として人の來り乞ふこと無からんには、顏色憔悴し心爲に愁慼すること、猶初月の烟霧に覆はれて光明あることなきが如し。

---

* 「之」。三本、麗本は「足」。

戮せらるべし、先に開募する所は、是人に賞すべし、我今必ず定んで捨命して悔ゐず、是の因縁を以て、願はくは諸の衆生に能く一切施し、及び捨名を得ん」と。

爾の時怨王、是の語を聞き已つて御座より起ち、合掌して一切施王を敬禮して是の如き言を作さく。「唯願はくは大王よ、還び本座に坐したまへ、汝は是れ法王、正化の主なり、我は是れ羅刹、暴悪の人なり、汝は是れ世の燈、世の父母と爲し、我は是れ世間の弊悪なる大賊にして、專ら悪法を行ひて他の財を劫奪す、汝は是れ法に稱へる正法の明鏡、我は法に稱はず常に他を欺誑すること、猶盲人の自ら過を見ざるが如し、我等如きの輩は罪過深重にして、是の身已に久しく應に此の地に陥入すべきを、遷延して今日に至るを得たる所以は、實に仁者の執持に賴りし故のみ、今此の地及以び己身を捨てゝ、仁者に奉施せん」と。

一切施王、卽ち怨王の爲に廣く法要を說き、其をして正法中に安住せしめ、大いに財寶を以て婆羅門に與へ、本土に還らしめき。

(結　勸)

菩薩摩訶薩、是の如く檀波羅蜜を修行する時、尙是の如く重ずる所の身をも捨つ、況んや復た外物たる所有財寶をや。

＊一切持王子品　第三

(序　偈)

菩薩摩訶薩　諸の衆生の爲の故に　一切所重の物を　以て惠施せざるなし

(本　文)

我昔曾て聞けるが如し。過去に王あり、其の王に子ありて一切持(Sarva-dhara?)と名く。年幼

＊本品の物語、布施太子物語の簡古なるものとす。六度集經卷二、太子須大拏經、パーリ本生經終篇等に出づ。

敷(しきもの)と爲し、我と諍はず、然るに我が怨心猶未だ滅するを得ず、我今自在にして能く相誅戮す、何の因縁を以て此に來至するや」と。

爾の時一切施王、嬉怡として微笑し、畏懼あるなし、身心の容豫たること師子王の如し。而も是の言を作さく。「汝知らずや、我が身卽ち一切施王と名くるを、我、本誓願を成就せんと欲するの故に、今來つて此に在り、三の因縁あり、一には、婆羅門の爲に而も錢財を求む、二には、汝先に、若し我身を得て此に將ゐ來れば當に之を重賞すと募れるを以て、三には、我先に誓願すらく、當に一切に施すべしと、是の故に我來つて、身命を捨てんと欲す、汝今當に觀(かんが)むべし、若し我が此の身命終しなば、地に入つて何の益する所と爲るかを、我本より、山林に逃入する所以は、畏れを以ての故に非ず、但だ諸の衆生を愛護せんが爲のみ、汝今自在にして怨心未だ滅せず、我今此に來れり、意に隨つて屠割し、而して怨心を除くを得ば則ち安隱ならん、是の故に汝今、應に早く之を爲すべし」と。卽ち偈を說いて言く。

怨に於て瞋恨を生ずれば　則ち自ら其の心を燋すこと　譬へば灰の下の火の　猶能く萬物を燒くが如し』　心瞋恚に著するに因りて　命終して地獄に墮すること　猶惡毒箭に　中(あた)れば則ち身命の滅する如し』　若し怨憎に瞋れば　心に寂靜を得ず　譬へば目を痛む者の　正色を見る能はざるが如し』　此の身は肉と血もて成り　骨髓肪膏腦屎尿涕唾等あり　薄皮もて其の上を裹(つゝ)む』　是の身は行厠の如し　主なく我(が)あるなし王に於て何の怨かあつて　而も常に瞋恚を生ぜん』　生老病死の賊は　常に來つて王の身を侵せり　何の故に是の中に於て　返つて親友の想を生ずる』　我が身は四大もて成り　王の身も亦復た然り　今若し瞋を見(あらは)さば　是則ち自らを瞋ると爲す』

是の故に大王よ、應に瞋を生ずべからず、若故(ま)た瞋れば、今自在を得、幸にして意の隨(まゝ)に早く屠

時に婆羅門、是の語を聞き已つて心に怖畏を生じ、一切施を將ゐて疾く王所に至り、是の如きの言を作さく。「大王よ、當に知るべし、我今已に一切施王を得たり」と。怨王見已つて卽ち心に念を生ずらく。「是の王、年壯く身體姝好にして容貌端正に、其の力制する難し、是の婆羅門、年衰弊にあり、形容枯悴し顏貌醜惡に、其の力幾ばくもなし、云何して能く是の王を得て將ゐ來れる」と。竊かに復た念を生ずらく。「將に梵王、自在天王、那羅延天(Nārāyaṇa)、釋提桓因、四天王(Caturmahā-rājika)に非るや」と。怨王卽ち問はく。「誰か汝が爲に縛せるや」。婆羅門言く。「我自ら之を縛す」。怨王*詘けて言く。「遠く去れ、癡人」と。復た更に問ひて言く。「汝將に呪術の力を以て而も人を縛するに非ずや、汝の身は羸劣にして彼の身は端嚴なること猶帝釋の如し、云何か能く繫せんや、假使人あつて自ら、能く須彌山(Sumeru)王を吹いて碎末の如からしむと言はんに、是れ信ずべきや不や」と。

爾の時、怨王卽ち大臣に告ぐらく。「汝等當に知るべし、今此の難事を、是れ夢中と爲すや、是れ幻化なりや、將に我が心悶絕して志を失ひ、錯謬して見るに非ざるや、是の老獼猴、云何か能く帝釋の身を縛せんや、諸臣當に知るべし、豈藕根中の糸を以て須彌山に懸くべけんや、兎身を以て大海を渡るべけんや、蚊業を以て海底を盡くすべけんや」と。

時に婆羅門、是の語を聞き已つて、卽ち怨王に向つて而も偈を說いて言く。

大王よ、今當に知るべし　我實に縛る能はず　是の王慈悲の故に　我が爲に而も自ら來れり』
網を以て風を盛るが如し　是の事甚だ難と爲す　正に天帝釋ならしむるとも
亦復た爲す能はず』

爾の時怨王、卽ち一切施王に向つて是の如き言を說かく。「汝我を哀れむを以ての故に、深山谿谷、林木空曠の處に入つて、唯だ禽獸と共に相娛樂し、少欲知足もて水を飲み果を食ひ、草を以て

＊「詘」。麗本「詛(のろふ)」、三本「咄」に作るも、今私に「詘」に改む。

所有の怖畏を滅す、所作廣大にして相報を望まず、諸の衆生に於て常に憐愍を生じ、能く闇世に於て大錠燎と作る、我當に云何か正法を破滅して、汝の身を繫縛して怨王に送らんや、假使王を將ゐて彼怨の所に至つて金寶を得獲するとも、我復た何の心にてか手を舒べて之を受けん、假使受けなば、手當に地に落つべし、譬へば、男子が身を長養せしが爲に父母の肉を噉ふが如し、是の人、生命を存濟するを得たりと雖も怨と何ぞ異ならん、我亦是の如し、設ひ王身を縛して將ゐて彼の怨に送らんに、多く財を得て以て家居を贖ふと雖も、我の貴しとせざる所なり」と。

時に王、答へて言く。「此の如きの言、復た何ぞ計ふに足らんや、汝若し我に於て必ず憐愍を生ぜんには、我自ら束縛して汝の後に從ひ、彼の怨家に行詣せん、汝に罪咎なければ我れ福を得べし」と。婆羅門言く。「敬しんで王命に從はん、當に意の隨に作すべし」と。是の語を說き已るや、王、卽ち自ら縛して婆羅門と共に相隨つて城に至る。

其の王の舊臣及び諸の人民、王を見るの時に當つて悉く驚怪を生ずらく。「咄、婆羅門よ、汝は是れ羅刹(Rākṣa)にして婆羅門に非ず、汝は是れ羅刹にして婆羅門に非ず、汝は本、實に是れ暴惡なる鬼神にして、姧僞して詐つて婆羅門の像を現ぜるか、悲心あるなし、眞に是れ死魔にして常に殺人を求む、汝今此の王の身をして滅沒せしむること、猶月の蝕け、七日並びに照して大海の乾竭するが如し、無上の法燈今日盡滅す、旃陀羅(Caṇḍala 賤民)種よ、汝今云何か手は地に落ちざる、汝の身何の故に地に陷入せざる、師子王の如きも、已に死せるの後には誰か害する能はざらん、是の一切施王は、久しく已に國城、妻子、倉庫、珍寶、一切の諍競を遠離して、退いて深山に入り、寂滅の行を修む、汝に於て何の怨あつてか、而も將ゐて此に來れる」と。擧城の人民、聲を同じうして願つて言く。「諸の大仙聖、護世四天王よ、願はくは威神を加へて是の王を擁護し、生命を全からしめたまへ」と。

ず全からず、所以は何ん、本と願求する所、今悉く滅壞せり、我何んか能く起たんや、定んで當に捨命すべし」と。

一切施王、爾の時、卽ち慈悲の心を起し、是の如き念を作さく。「愍れむべし、道士の願ふ所は果されず、譬へば餓鬼の遠くより淸水を望んで、到り已つて獲ず、心悶えて地に躃るゝが如く、是の婆羅門も亦復た是の如し」と。復更に喚んで言く。「咄、婆羅門よ、汝坐を起て可し、汝坐を起て可し、一切施王は卽ち我身是なり、汝本見んと欲して今之に遇ふを得たるを、何の故に愁苦するや」と。

婆羅門、王に問ふ。「今、善言もて我を慰喩す、錢財ありや」。王卽ち答へて言く。「我に錢財なし、但だ方便して、能く汝をして大いに珍寶を得しむべきあるのみ」。婆羅門言く。「云何か方便するや」。王復た答へて言く。「我先に、彼の怨家の*王の我國に居し已るや、大衆中に於て是の如き言を唱ふるを聞けり、若し能く一切施王を得て、若しは其の命を斷ち、若しは擒繫して將ゐ來るあれば、吾當に意に隨つて所須を重賞すべしと。我昔より來た、未だ曾て人に教へて惡法を行はしめず、是の故に汝をして我が頭を斬らしめず、但だ繩を以て縛つて彼の王に送詣せよ、所以は何ん、身を除くの外に更に錢財なし、然れども我が此の身は今自在を得、幸にして財に易へて以て相救濟すべし。善き哉、善き哉、婆羅門よ、吾今利を得ぬ、不堅の身を以て堅牢の身に易ゆ、道士よ、且らく觀みよ、設使我が身此に在つて命終せんに、屍を曠野に棄つるも草木に異なく、禽獸あつて而も來つて食噉すと雖も何の利する所と爲さん、今、此の如き灰土の身を以て貿易して、乃ち眞金の寶物を得る、我復た何の情にか而も當に之を惜むべけん」と。

時に婆羅門、是の語を聞き已つて悲涕して而も言く。「何ぞ此の理あらん、所以は何ん、汝は今乃ち是れ、無上の[一七]調御、衆生の父母なり、善く愛護を爲す大歸依處にして、能く一切無量の衆生の

* 「王」。三本、麗本は「言」。

【一七】調御(sārathi)。荒馬を御する如く、一切衆生の狂惡の心を調御する人。

べし、日を尅ひ期に下りて當に金錢を輸るべしと。家貧苦に窮して能く辦ずるに由なし。曾て聞く、此の國の一切施王、好んで惠施を行ひ貧人を擁護し、行ふ所の惠施に斷絕あるなきこと、春夏の樹に華果相續くが如く、亦曠野の清冷の水に渴ける人過ぎ遇ひて自ら恣に之を飲むが如く、猶〔一六〕大會に人を遮止することなきが如しと、我今略して說けり、假使人あつて、その人に千頭あり、頭に千口あり、口に千舌あり、舌に千義を解して、是の王の所有の功德を歎へんと欲せんも、盡すを得る能はず、彼の王は是の如き名德を成就せりと。我今居家して王の暴虐に遇ひ、罪戾を橫に羅ねられて更に恃賴なし、故に造詣して陳べて所須を乞はんと欲す。然れども我心中に常に此の念を作さく、我今何の時にか當に其の所に到つて意に隨つて乞求すべけん、若し彼の大王、必ず憐愍して能く少多を給したまはらんには、我が家は其の生命を全うするを得べし、若し得ざれば、我亦久しからずして當に復た殞歿すべし」と。

爾の時菩薩、是の事を聞き已つて心悶えて地に躃るゝこと、猶惡風に大樹の崩倒するが如し。時に婆羅門、卽ち冷水を以て其の王身に灑ぎ、還ひ穌息するを得たり。時に婆羅門復た問ふらく「大仙よ、汝我家の是の苦惱を受くるを聞いて心迷悶するや、是の中清淨にして汝の愛樂する所、能く悲心を生ず、我の今之に遇ふすら尙愁苦なきに、汝今何に緣つてか是の苦惱を生ずるや」と。王卽ち答へて言く。「汝本と意を發して彼の王に造らんと欲せるも、是れ汝の薄相なり、正しく値てゝ在らず、汝今若往かば必ず見るを得ず、故に我を愁へしむ」と。

爾の時、婆羅門言く。「何處にか去ると爲す」。施王答へて言く。「敵國王の來つて其の國位を奪ふあり、今は逃命して空山林に在り、唯だ禽獸と而も等侶と爲れるのみ」。

時に婆羅門、是の語を聞き已つて尋で復た悶絕す。一切施王、復た冷水を以て之に灑いで悟らしめ、卽ち慰喩して言く。「汝今坐すべし、且らく愁苦する莫れ」。婆羅門言く。「我今日に於て命必

【一六】大會（[pañca-] vārṣika）。何人たるを問はず參加することを得る大施會、よつて義譯して無遮會といふ。

と欲し、卽ち中路に於て飢渴疲乏して步を林中に息め、卽便ち*讃言すらく。「是の處は寂靜なる聖人の住處なり、亦是れ神仙離欲の人、解脫を求むる者の、飮食を斷絕し、奴婢を畜へず車馬に乘ぜず、少欲知足にして稗子諸根藥草を食噉する、大悲心者の所住の處、亦是れ一切飛鳥走獸も怖畏なき處、自在天王(Īśvara)、衆生をして家の過患を見せしめんが爲の故に、是の處を化せり」と。

爾の時、一切施王是の語を聞き已つて心に歡喜を生じ、便ち往いて之を見、共に相問訊して便ち命じて坐せしむ。時に婆羅門卽便ち、坐に前みて坐し已る。一切施王、便ち所有の衆味甘果を以て而も之を奉上し既に飽滿し已つて王卽ち問ひて言く。「大婆羅門よ、是の處畏るべし、人民あるなく、是の中唯だ是れ閑靜修道の人の獨り住める處なり、仁何に緣つてか來る」と。婆羅門言く。「汝應に我に是の事を問ふべからず、汝は是れ、福德淸淨の人なり、家居の牢獄繫縛を遠離す、何に緣つてか我に、是の如きの事を問ふや、汝應に濁惡の聲を聞くべからず、若し他が我を犯せば、我則ち他を犯さん、若し他が我を奪へば、我則ち他を奪はん、財賄を喪失し、親族凋零すること、在家を以ての故に是の如き事を受く、大德よ、汝今已に一切の繫縛を斷ちて山林に安住すること、大龍象の自在無礙なるが如し」と。

一切施菩薩、卽ち是の言を作さく。「汝今發言すること淸淨柔軟なり、何の故に共に此に於て住止せざる」と。婆羅門言く。「若し聞かんと欲さば、我當に汝が爲に具さに陳べて之を說くべし。我が本生の處は此を去ること懸遠なり、薄祐の致す所、王の暴虐に遇ひ、猶師子の鹿群の中に在つて終一念の慈善の心の無きが如く、我が王の暴虐なるも亦復た是の如し、諸の人民に於て慈愍あるなく、有罪も無罪も唯だ貨にのみ是れ從ふ。我れ生來より小心にて畏れ愼しみ、曾て毫釐も王の憲制を犯すなきに、我家を橫收して之を囹圄に繫ぎ、我より金錢五十を責め索む、若し能く辦ぜば我當に汝の居家の罪戾を赦すべし、若し吾に輸るを肯ぜざれば終に捨てず、要らず當に繫縛幽執鞭撻す

* 「讃」。三本、麗本は「譖」。

爾の時諸臣、王教を受けずして卽ち各散出して[一二]四兵を莊嚴し、便ち逆へて共に戰ふ。軍に主將なく、尋で卽ち退散し、兵衆の命を喪ふもの稱計すべからず。

時に王、樓に登つて是の如き言を說かく。「惡欲に因つての故に人をして惡を行ぜしむ、是の如き諸欲は、猶死尸行厠の糞穢の如し、如何か此が爲に而も惡を行ずるや、愚人の國を貪つて諍競の心を興すこと、猶衆鳥の段肉を競ひ諍ふが如し、是の諸の衆生、常に怨憎あり、謂く老病死なり、云何か自ら是の怨を觀察せずして、反て更に他に於て而も諍競を生ずるや」と。

一切施王の是の義を思へる時、敵國の怨王卽ち宮中に入る。王爾の時に於て、便ち水竇より逃れて深山に入り、稠林の中に至りて怨賊を免るゝを得たり。其の地清淨にして林木種々の華果の無量なること稱計すべからず。水清く柔軟にして[一三]八味具足し、衆鳥鳧鴈禽獸計へ難し。

王是を見已つて心に歡喜を生じ、復た是の言を作さく。「吾今眞實に家の過患を離るゝを得たり、無量の衆生、常に老病死の怖の爲に逼惱さるゝに、今此の處を得て清淨安樂にして快きこと言ふべからず、此の林は乃ち是れ修悲の菩薩の所住の處にして、亦是れ[一四]四魔を破壞せる人の堅固の牢城なり、我已に清潔に洗浴して衆垢を離るゝを得たるの故に、我今此の麋鹿と伴と爲り、身心安穩に極めて上樂を受けん」と。

爾の時怨王、其の國を得已りて卽ち唱令して本の王を求覓すらく。「若し能く一切施王を得るあらば、若しは殺し、若しは縛して將ゐ來つて此に至れ、吾當に重賞して其の所須に從つて一切給與すべし、其の先時に、常に自らを能く正法を行ふと稱讚し、吾等を暴虐にして惡を行ふと皆毀せるを以て、是の故に吾今、之が其の善を修めて得る所の果報を見るを得んと欲するなり」と。

爾の時、他方に一婆羅門あり、貧窮孤悴にして唯だ仰乞して活き、兼て官事に遇ひて恃賴する所なし。王の名字と好んで惠施を行ふとを聞きて、卽ち其の國より來つて、[一五]造詣して所須を乞求せん

【一二】四兵(catur-aṅga-bala)。象(hasti-kāya)、馬(aśva-k.)、車(ratha-k.)、步兵(patti-k.)の四種の軍隊。

【一三】八味。一甘、二冷、三軟、四輕、五清淨、六不臭、七飲時不損喉、八飲已不傷腸なり(倶舍の說、稱讚淨土經には少異あり)。

【一四】四魔、生老病死をいふ。

【一五】造詣。二字共に「いたる」と讀む。

の如し」と。王卽ち告げて言く。卿等應に我が心を惱亂すべからず」と。卽ち偈を說いて言く。

隣國の　我國を來り討つ所以のものは　正に人民と　庫藏珍寶の爲なり　快き哉甚だ善し　當に相施與すべし』　我當に之を捨てゝ　出家して道を學ぶべし　多く國土を有すれば　[二]五欲の爲の故に　人民を侵奪し　貯聚するに厭くなし』　當に知るべし是の王　命終の後に　卽ち地獄　畜生、餓鬼に墮するを』

是の故に我今、身の爲に衆生を侵害し他の財物を奪ひて以て自ら免るゝ能はざる者なり」と。

爾の時、大臣及び諸の人民各是の言を作さく。「唯願はくは大王、便ちに捨去したまふ莫れ、臣等自ら能く當に此の敵を御ぐべし、王よ、且らく之を觀みたまへ、臣等今日、當に五兵の戟矛劍矟を以て此の賊を奮擊すること、暴風の雨雲を吹破する如かるべし」と。王卽ち答へて言く。「咄なる哉卿等、吾已に久しく、卿等の吾に於て大愛護を生じ尊重恭敬するを知れり、亦卿等の勇健難勝雄猛にして武略策謀の第一なるを知れり、但だ彼敵王の今此の擧と作すは、都て卿の爲ならず、正に吾が爲なるのみ、假使彼來つて卿等を損ぜずとせば、何ぞ乃ち是の如き惡心を生ずるを得ん、吾久しく此を知る、五盛陰身の衆箭の*的爲ることを、卿知らずや、吾久しく卿が爲に說けるを、諸の菩薩は應に衆生に於て一子の想を生ずべしと、汝應に他の衆生の所に於て瞋害の心を生ずべからず、畢定なること應に知るべし、地獄に墮せんを、是の故に應當に一心に善を修むべし」と。

是を說ける時に當つて、賊已に來至して高聲もて大いに叫べり。王、聲を聞き已つて卽ち群臣に問ふらく、「此は是れ何の聲ぞ」と。諸の群臣寮各悲感を懷いて聲を擧げて哀號し、咸な是の言を作さく。「惡賊、辜なきに多く人民を害す、譬へば惡雹の五穀を傷害する如く、亦猛火の乾草を燒くが如く、又暴風の大樹を吹拔くが如く、又師子の諸の禽獸を殺害するが如し、怨賊の殺害も亦復た是の如し」と。

【二】五欲(pañca-kāma-guṇa)。色・聲・香・味・觸の五材。

* 「的」。三本、麗本「鏑」に作る。

＊一切施品　第二

（序　偈）

一切の諸菩薩は　衆生を利せんが爲の故に　已の身命を捨棄すること　猶草芥穢の如し

（本　文）

我曾て聞けるが如し。過去に王あり、一切施(Sarvadatta薩婆達)と名く。是の王初て生るゝや、卽ち父母に向つて是の如き言を說けり。「我一切無量の衆生に於て、尙能く重ずる所の身命を棄捨せり、況や復た、其の餘外の物たる珍寶をや」と。是の故に父母、敬ひ而して之を重じ、爲に名字を立てゝ一切施と字く。其の初生より身と行施と漸々に增長すること、譬へば、初月より十五日に至るが如し。其の後久しからずして父王崩背し、卽ち洪業を承く。國土を覇治すること如法に、民を化するや萬姓を枉げず。自身を擁護して他事に豫ず、終に他餘の隣國を侵陵せず。隣國若し故らに來つて之を討罰すれば、能く擒獲せんを希へり。貧民を救攝して給施するに財を以てし、沙門婆羅門等を恭敬し、常に淨手を以て衆生に食を施す。口常に宣唱すらく、「是の人に衣を與へよ、是の人に食及與び財寶を與へよ、是の人を愛護せよ、是の人を瞻視せよ」と。

爾の時菩薩、常に是の如き善布施を行ぜり、時に隣國の人民、王の功德を聞いて悉く來つて歸化し、其の土充滿して間として空處なきこと、猶山頂より暴漲せる水の溝坑なる谿澗の深處に流注するが如く、亦半月に海水の潮出するが如し。其の國に外來歸化の民の充滿側塞することも亦復た是の如く、其の餘の隣國、漸く人民を失ひ、各瞋恨を生じて卽ち共に集りて議るらく、「當に共に往いて討つべし」と。是の議を作し已つて尋で四兵を嚴にし、其の國に來向す。

爾の時、邊方守禦の人、遠く來つて王に白さく。「隣國の怨賊今已に相逼れり、猶暴風黑雲惡雨

＊この本生は大莊嚴經論卷十五に出づ又智度論卷十二、西域記三にも出づ。

受くると受けざるとを觀ぜず、而も此の灌水何に緣つてか下らざる」と。

爾の時菩薩、諸の婆羅門を見るに、此の諸の女人の爲に貪嫉の心を生じて而も瞋恨を生じ、各々說言すらく「彼女は端正なり、我應に之を取るべし、汝應に取るべからず、彼の牛肥壯なり、我應に之を取るべし、汝應に取るべからず」と。金銀の盤と粟、乃至珍寶も亦復た是の如し。

爾の時菩薩、諸の婆羅門の貪心もて物を諍ひ、互に相瞋恚するを見て、卽ち是の言を作さく。「是の諸の受者、貪欲瞋恚愚癡亂心にして能く受くるに堪へず、是の如き供養は、車軸折れ輻輞破壞して、運載に任へざるが如し、我亦是の如し、種子良善なるも而も田薄惡なり、此の受者の心の不善なるを以ての故に、是の澳水をして肯て流下せざらしむ、我今、是の如き布施を作すと雖も、亦人あつて我に敎へて阿耨多羅三藐三菩提の心を發さしむるなし、而も我自ら一切衆生の爲の故に是の心を發せり、今當に自ら試むべし、若し我審かに能く衆生を愍れまば、灌水當に下るべし」と。卽ち左手を以て罐を執つて之を瀉すに、水卽ち菩薩の右手に流下す。

諸の婆羅門、是の事を見已つて各慚愧を生じ、所施物を離れて梵行を修行す。諸の婆羅門、尋で共に稽首し、菩薩に以て[八]和尙（Upādhyāya）と爲らんことを求請す。菩薩、憐愍して卽便ち之を受け、敎へて[九]四無量心を修學せしむ。是の因緣を以て命終して卽ち梵天上に生ずるを得て、無量の衆生をして阿耨多羅三藐三菩提心を發さしめき。

（結　勸）

菩薩摩訶薩、檀波羅蜜（Dāna-pāramitā 布施の極致）を行ずるの時、此は是れ[一〇]福田にして此は福田に非ずとは見ず、亦多親と少疑とを分別せず。是の故に菩薩、若し布施せん時には、或は多、或は少、或は好、或は惡ならんも、應に一心清淨を以て奉上し、受者に於て下劣の心を生ずること莫るべし。

【八】和尙は西域語に轉訛して khosha となれる梵語を音寫せるもの、親しく指導の任に當る人をいふ。

【九】四無量心（catvāry-aprа-māṇa-citrāṇi）。慈（maitram）、悲（karuṇī）・（muditā）、捨（upekṣā）の四を上下四維の一切に平等且つ無限に注ぐこと。捨は喜怒愛樂等の差別感情を捨てたる心象。

【一〇】福田（puṇya-kṣetra）。善根を種子に喩へてこれに對して善根を植えつける對象を福田といふ。

守つて而も慳貪なり』　或は自在を以ての故に　自ら貧苦に墜ち　或は復た縱逸を以て
久しく生死に在り』　輪轉して窮已なきこと　猶地を輪轉するが如し　我久遠來　汝
汝に隨順敬事して在り　是の如き事を作すと雖も　汝を喜ば*しむる能はず』
§今當に　不動寂靜の中に安住すべし　我今布施する所　悉く諸の衆生の爲にす』

爾の時毘羅摩菩薩、卽ち右手を以て*澡罐を執持し、大慈悲を以て其の心を熏修し、一切の諸衆生を憐愍するの故に涕泣流涙して、而も是の念を作さく。「我今施す所は、梵王（Brahma）摩醯首羅（Maheśvara, 大自在天）釋提桓因（Śakra-dev' indra 帝釋）の爲にせず、假使更に是の三に勝る者あらんも、亦悕求せず、唯だ佛道を求めて衆生を利して諸の煩惱を斷たんと欲す、我今當に、己身、妻子、奴婢、僕使、珍寶、舍宅を捨つべし、唯だ解脫を求めて生死を求めず、(1)我が今施す所の柔軟の女人もて、願はくは諸の衆生、未來世に於て悉く所有貪欲を斷除するを得ん、(2)今我が施す所の[五]五種の牛味もて、願はくは諸の衆生、未來世に於て常に能く他人に法味を惠施せん、(3)今我が施す所の是の如き敷具もて、願はくは諸の衆生、未來世に於て悉く如來の金剛坐の處を得ん、(4)我今施す所の種々の珍寶もて、願はくは諸の衆生、未來世に於て悉く如來の[六]七菩提の寶を得ん」と。

是の語を作し已つて上坐の所より循行して水を澡ぐに、而も水の下らざること猶慳人の布施を肯ぜざるが如し。爾の時菩薩、卽ち是の念を作さく。「今此の澡水、何に緣つてか下らざる」と。復た是の念を作さく。「將て我が願の未來世に成ずるを得ざるに非ずや、誰か遮制して水をして下らしめざる、將て此の中に大德あることなく、其の餘は應に我が供養を受くべからざるに非ずや、或は我が施す所の周普からざるか、或は是れ我が僕使の歡喜せざるか、將て此の中に殺生あるに非ざるや、我今定んで知んぬ、衆生に*因らざることを、我今施す所も亦是れ[七]時施なり、亦是を採つて

* 「しむる（令）」。三本に依る、麗本「今」に作る。
§ 「今」。三本、麗本「令」。
* 「罐」。三本、麗本「灌」。

【五】五種の牛味（pañca-go-rasā）。乳（kṣīra）、酪（dadhi）、生酥（tarka）、熟酥（navanīta）、醍醐（sarpis）の五。

【六】七菩提分（sapta-bodhyaṅga）。七覺支ともいふ。念（smṛti）、擇法（dharma-vicaya）、精進（vīrya）、喜（prīti）、輕安（praśrabdhi）、定（samādhi）、捨（upekṣā）の七。倶舍論等の國譯中に詳出する故その索引によつて檢さるべし。

* 「因」。三本、麗本「困」に作る。

【七】時施（kāla-dāna）。時を得たる布施。

諸の大德よ、汝等今身に安隱にして患――所謂、衰老、肺病、欬逆、頭痛なし。已に是の病なし。當に勤めて一切の善法を修行すべし」と。

是の毘羅摩菩薩摩訶薩、二攝法を以て衆生を攝取す。所謂、財（Āmiṣa 物的）と法（Dharma 心的）となり。九十日を滿ちて夏（安居）を過ぎ已り、訖つて施嚫の願を奉ぐ。所謂、金盤の具足することと八萬、盛るに銀粟を以てし、八萬の銀盤には盛るに金粟を以てし、八萬の小牛、八萬の乳牛に悉く一犢を從へ、是の一一の牛乳は日に一斛にして、純ら白*氎を以て其の身に纏覆し、金角、銀蹄もて莊嚴映飾せり。八萬の童女の形體端正なる、金寶の瓔珞もて以て自ら莊嚴し、一一の女人に一侍女あり、供給使令して皆淨潔ならしむ。是の諸の女人に各一床あり、或は金、或は銀、瑠璃、頗梨、象牙、香木にして、種々の茵蓐もて以て其の上に敷けり。牛車八萬、象馬八萬、及び諸の倉庫、錢財珍寶、稱計すべからず。是の如き等の物、悉く莊嚴し已つて而も是の念を作さく。「今是の施物、將て少きなきや」と。

爾の時菩薩、諸の婆羅門の爲に是の如きの言を說けり。「汝等當に知るべし、我今是の如き種々の金銀、女人、車乘、象馬、倉穀、珍寶と集聚して、正に汝等の爲にせることを、幸にして少時寂然無言に、我が所願を聽かるべし、然る後、意に隨つて共に分つて而して去れ」と。

爾の時一切の諸婆羅門、寂然として聲なし。是の時菩薩、諸の衆生の爲に自ら其の心を諫むらく。「汝心よ、所作常に果報を求むること、猶獼猴の稠林に入るが如し」と。而も偈を說いて言く。

我今布施する所　普く諸の衆生の爲にす　是の如き布施　實に其の報を望まず　願はくは悉く衆生に施して　等しく快樂を受けん』　汝が善を貪るを以ての故に　久しく天上に在り　亦惡を貪るを以ての故に　久しく地獄に住す　復た貪著を以ての故に　此の大施主と作れり』　或は貧窮人と作り　或は大施を行じ　或る時は自在を以て　財を

* 「氎」。三本に依る、麗本は「疊」。

「若し諸の衆生にして所須あらば、衣服、飲食、臥具、醫藥、象、馬、車乘、香華、瓔珞、末香、塗香、舍宅、燈明、悉く此に來集せよ、當に相奉給すべし」と。復た偈を説いて言く。

我、諸の世間を　利益せんが爲の故に　諸の衆生の　所須の物に隨はん』　乃し身體手足肉血に至るまでも　捨離するの時には　猶し草芥の如からん』　汝等若し是の供養を受くる時には　則ち當に一切に　善法を思惟すべし』　供養を受け已つては應に貪著すべからず　當に善法を以て　一切を利益すべし』　若し我が力を以て　能く速かに涅槃せば　以て衆生の爲に　生死に流轉せん　是の故に久住して　涅槃を取らず』　無量の衆生は　老死の獄に墮せり　我れ之を拔かんと欲して　永く離れて遠離す』

時に毗羅摩菩薩（Bodhisattva）摩訶薩（Mahā-sattva 大士）の設くる所の供具、無量百千萬億の衆生をして、意に隨つて所須を悉く充足するを得たり。善言もて説法すらく。

「諸の大德よ、我今身を忘れて以て汝の身を憂ふ。汝等今已に我が供養を受けぬ。自ら利益を好まば、當に正法を觀察すべし。若し死の至る時には、父母妻子親族無量の財寶ありと雖も、命をして一念の頃も住せしむる能はず。及び其の命盡きては、獨り他世に至らん。父母妻子親族財寶も、隨つて去る者なし。唯だ業行ありて捨離する能はず」と。

復た大衆の爲に而も偈を説いて言く。

父母親族の爲に　惡法を修行し　命終して三惡趣に墮するも　隨逐する者あるなし』

今現在世に於て　若し苦惱を受くる時　父母兄弟ありと雖も　少分をも受くる能はず』　況んや未來世に於て　而も當に代者あるべけんや　是の故に當に一心に　他の爲に惡を行ずる莫るべし』

時に毘羅摩、王の是の如くなるを見て心に歡喜を生じ、而も是の言を作さく。「我今已に國土を修治すと爲す、然れども我が善法に衰損する所なし」と。復た是の念を作さく。「我今當に何等の因緣を以て諸の衆生に勸めて、悉く阿耨多羅三藐三菩提の道に安住せしむべきか、然れども衆生の受性は同じからず、或は聞法を欲し、或は財貨を貪り、或は五欲を嗜み、或は愛語を樂む、或は憒鬧して多人の親附するを好み、或は善人の行に隨逐するを好み、或は多愛にして心に厭足なきを樂しむ、我今幸に大智の方便あり、悉く能く一切衆生を攝取して、安んじて阿耨多羅三藐三菩提に止住せしめん、我亦復た餘の方便あり、譬へば日出でゝ能く一切の天下を照了すと雖も、然も盲者の爲に明を作す能はざるが如し、我亦是の如し、復た能く一切衆生の爲に無上道を說くと雖も、然れども慧目なき者の爲に而も利益を作す能はず、我今復た當に衣服飮食を以て而も之に給足し、其をして信受せしむべし」と。

時に毘羅摩、是の義を思ひ已つて卽ち王の所に至り、是の如き言を作さく。「我今已に無量の衆生の爲に法事を作し已んぬ、三法、所謂、正法を修行することを聚集し、錢財を聚集して所願成就し、則ち一切國土をして安樂ならしめ、怨讎あるなし、正法の增長することは猶初月の如く、好名は八方上下に流布せり、唯願はくは大王、我の無上の正法を修行するを聽したまへ」と。

爾の時大王、是の語を聞き已つて心に驚喜を生じ、衣毛爲に堅てり。白して言く。「大師よ、諸の所作せんと欲す願はくは具さに告勅せん」と。毘羅摩言く。「我今一切に大施せんと欲す、施中に須ふる所、願はくは我が爲に辦じたまへ」と。

爾の時大王、卽ち城外安曠の處に於て施場を莊嚴す。毘羅摩言く。「唯願はくは大王よ、善言誘喩したまへ、諸の作使者をして我に於て而も瞋恨を生ぜしめたまふこと無かれ」と。爾の時、大王及び給使者、皆悉く歡喜し、敬意もて飮食所須を供辦し、尋で諸方に於て鼓を擊つて宣令すらく。

なし、汝今若し、垂顧矜哀を見さんには、願はくは先づ承嗣して家業を纂繼せよ、我當に誠心もて盡壽に歸依せん」と。

時に毘羅摩、卽ち是の念を作せり。「我今如何か一旦にして對へんや、今に至つて此の言を聞くとも、作す所を知る莫し、猶贏人の高人を步涉するが如し」と。復た是の念を作さく。「今は承嗣して國政を毘輔し、諸の人民に於て多く利益すと雖も、然も我が修むる所の純善の法は則ち虧損を爲さん、君の國土を治めて萬姓の心に稱はんには、當に無量の諸の過患の事あるべし、所謂刑罸——他の財を劫奪し、天下を威凌するを、或は擯け或は驅る、要ず當に王に從つて是の如き法を行ずべし、若し正法を行へば我が善は則ち損ぜん、今我若し故に善法を修行すれば、則ち大王の聖懷に上め稱はず、若し王法に稱へば善法日に衰へん」と。

是の念を作せる時、王復た白して言く。「大師今日、何の所をか思慮する」と。時に毘羅摩、卽ち王に答へて言く。「我今念ずる所、當に何の術を以て、王身及び國の人民をして悉く利益を得て諸の衰耗をかならむべきかなり、亦復た、王と國人との福德と過患を思惟す、若し先に善を行ひ、後に惡を行へば則ち人と名けず、大王よ、寧んぞ實語の爲して而も怨憎を作さんや。諂言を爲さずして而も親厚を作せ、寧んぞ正法を說いて地獄に墮せんや、邪諂を說かざれば天上に生れん、大王よ、我今是の事を思惟籌量す、大王よ、若し人あつて能く是の義を思惟すれば、當に知るべし、是の人則ち能く一切衆生を利益することを」と。王、是の語を聞きて心に歡喜を生じ、復た是の言を作せり。「大師よ、我等若し能く是の如く法を行ずれば、修むる所の善法は則ち損ぜずと爲す」と。

時に毘羅摩、卽ち王命を奉じて先父輔相の業を纂承し、然る後に漸々に勸化す。是の王及び八萬四千の小王、正法を修持し、亦其の國の所有人民をして惡を背捨し遠ざけて五欲を貪らざらしむ。時に王の無量の善法を修行すること、毘羅摩の如くして、等しくて差別なし。

き、歛容として而も踞し、是の如き言を說けり。「大王よ、今日何の因緣を以て而も顧命を見るや」と。王即ち答へて言く。「汝知らずや、我の薄祐なる、汝の父輔相、不幸にして薨殞するや、大地は傾喪し人民は擾動す、我之を憂と爲して其の心迷悶す」と。

時に毘羅摩、即ち王に白して言く。「夫れ愛別離は、王のみ獨り此の如くあるに非ず、皆是れ有[一]爲法の相なり、大王よ、昔より來た、曾て聞かずや、若しは天、龍・[二]鬼神・阿修羅(Asura)・乾闥婆(Gomdharva)・迦樓羅(Garuḍa)・緊那羅(Kimnara)・摩睺羅伽(Mahoraga)・沙門(Śrāmaṇa)・婆羅門(Brāhmaṇa)、若しは老、若しは少、悉く是の終歿を離るゝを得る者なし、大王よ、一切衆生は決定して之れあり、大王よ、譬へば火性の悉く能く一切の物を燒然するが如く、無常の法も亦復た是の如し、悉く能く一切衆生を壞滅す、王は知らずや、是の老病死の能く衆生を喪ふこと、四衢道頭の華果の樹の、常に多人の爲に[三]抖擻せらるゝが如きを、大王よ、譬へば駛河の常に流れて停らざるが如く、衆生の壽命も亦復た是の如し、大王よ、金翅鳥の龍宮中に投じて諸龍を搏撮して而して之を食噉するが如く、又師子の麞鹿群に在つて威猛きが如し。[四]一切衆生の三界中に在つて流迴するや、死法も亦復た是の如し、大王よ、是の如き死法は、親近を以てするも、財貨もて求贖するも、軟言もて誘恤するも、而も脫し得べきに非ず、亦、四兵の威力を以て逼迫して之を禦ぐとも、其をして退散せしむべからず、是の如き死法は決定して而もあり、是れ衆生の常法なり、是の義を以ての故に大王よ、此に於て應に憂を生ずべからず」と。

時に王、聞き已りて心に歡喜を生じ、復た諸臣に向つて是の如き言を說けり。「未曾有なり、是の如き童子、年幼稚なりと雖も、乃ち先宿耆舊の言を說けり」と。時に王、即ち毘羅摩に語げて言く。「汝知らずや、汝の先父は吾を愛護すること猶赤子の如かりしを、是の故に我今、其の恩の重きを感じて憂愁迷悶するなり、吾今、輕弱頑嚚にして智なし、汝の說く所の如くんば、吾に永く分

【一】有爲法(saṁskṛta-dharma)。因緣によつて造られたるものの意。
【二】鬼神。夜叉(yakṣa)の譯。
【三】抖擻。頭陀(dhuta)の譯、振り落すこと。
【四】宋元明の三本は、次に誤つて本經の第八龍品(下卷)の初部を混入せり。

を生じ、思慕忍び難し。

時に王、思念須臾を去らずして卽ち臣民の爲に而も偈を說いて言く。

如何せん此の大地　一旦にして人の治むる者なく　海に主船者なくして　風に隨つて而も東西するが如し』　我の尊敬する所の者　出家已に成就し　口善く言柔軟にして　常に能く世を利益しき』　如何か便ち終歿して　我が心を惱悶せしむるや　猶燈明なくして　而も闇室に入るが如し』

爾の時諸臣、卽ち王に白して言さく。「唯願はくは大王、意を寛うして愁ひたまふ莫れ、國中に更に、任じて輔相と爲す者あるなしと謂はるゝ勿れ、是の法婆羅門(Dharmika-brāhmaṇa)復た命終すと雖も、其の子年幼くして聰明黠慧に、顏貌の端正なること世に及ぶ者なし、發言柔軟にして衆心を悅可し、忍辱を修行して心常に寂靜に、憍慢貢高自大あるなし、博學多聞にして書として綜ねざるなく、衆生を利益すること梵王の如し、毘羅摩(Virama 遠離?)と名く、唯願はくは大王よ、卽ち此の人に命じて以て輔相と爲したまへ」と。

時に王答へて言く。「彼に若し子のあること、汝の說くが如くんば、我昔より來た未だ曾て聞かざる所ぞ」と。臣復た言く。「大王よ、是の婆羅門の子、常に正法を求めて邪法を離るゝも、已法を愛護して未だ他の爲にする能はざるなり」と。王卽ち答へて言く。「子若し是れ才人ならば、何ぞ先人の家法を違毀するを得ん、若し先業を離るれば則ち正法を求むる者と名くるを得ず、是の人の先父は、常に正法を以て吾を佐けて國を治め、能く吾等をして衆惡を遠離せしめき、是の如く治國治務を作すと雖も、遂に婆羅門の法を破失せず、如し其れ、彼の人にして汝の說くが如くんば、便ち召し來るべし」と。

諸臣、命を奉じて卽ち使者を遣はし、毘羅摩を召し、將ゐて王の所に詣る。到り已つて坐に就

菩薩本緣經

僧伽斯那（Saṃghasena）撰[イ]
呉月支優婆塞支謙字恭明[ロ] 譯

—（卷の上）—

毘羅摩品 第一＊

（序 偈）

若し心狹劣なれば　多く布施を行ずと雖も　受者清淨ならず　故に果報をして少からしむ

若し惠施を行ずるの時　福田不淨なりと雖も　能く廣大の心を生ずる故に　果報に量りあるなし

（本 文）

我昔曾て聞く。過去に王あり、地自在（Bhūmīśvara）と名く。受性暴惡にして好んで征伐を行ふ。時に小國八萬の諸王あり、首に寶冠を戴いて常に來つて朝侍す。其の王、口惡しく身行に善なし。常に非法を爲して他境を侵＊凌す。

王に輔相の大婆羅門あり、清淨の行を修めて智人に讃へられ、口言柔軟にして麤惡を宣べず。造作する所あれば能く速かに成辦す。面目端嚴にして世の敬ふ所と爲り、四毘陀典（Veda）に綜練せざるなく、諸の婆羅門の有ゆる經論に、通達解了して遺餘あるなし。是の時輔相、年已に衰邁し、病に遇ひて未だ久しからず、奄爾として卽ち亡べり、王及び人民、其の終歿を聞いて悉く憂惱

イ、宋元明三本に撰者の名を缺く。
ロ、宋元明三本に字恭明を缺く。
＊この物語は六度集經卷三（維藍）にも出づ。
＊「淩」。三本、麗本は「陵」。

僧伽斯那(Saṃghasena)の撰として居る(現流本にては宋元明の三本に著者名を缺き麗本のみ存す)。その傳記は全く不明であるが、東傳した彼の著書には、猶三法度論(山賢著、僧伽先釋)三卷、百喩經四卷が存するが、恐らく同名異人の撰であらう(後項參照)。別に坐禪三昧經の中にその親撰と信ぜらるゝ偈が若干引用されて居ること、僧叡の關中出禪經序(出三藏記集の中に收む)によつて知られる。而してこの序文中には、馬鳴、勒比丘、婆須蜜、鳩摩羅駄等の名出で、それら諸師の禪偈を抄集したのがこの禪經だといつてゐるから、右諸師と粗ぼ同時に屬する人と見れば、迦尼色迦王世より、鳩摩羅駄期までの人と解せられるが、鳩摩羅駄は別項(大莊嚴經論解題)に云へるが如く龍樹の同時先輩と見て西紀三世紀の初頭を下期とする在世であるから、本經著者は少くも彼に二三十年は先達つ人と見ても(前記本經第二の一切施に關する項參照)、西紀二世紀の終りまでの人となる。然るに本經の譯出は西紀二二三——二五三の間であるが、支謙は敬稱を用ひずして單に僧伽斯那といつてゐる點よりすれば、あまり年時を距てぬ在世と思はれる。よつて三十年を逆上らせれば原作年代は西紀二〇三年となるが、粗ぼ鳩摩羅駄との比較年代に一致する。よつてこゝでは、假りに西紀二世紀末葉の人と推定しておく。

猶開元錄(卷六)に百喩經の譯者求那毘地(Guṇaviddhi)の傳記を叙して大乘僧僧伽斯那の弟子とし、所譯の百喩經はその師の著書としてゐるが、求那毘地の渡支は建元初(西紀四七九)、在支二十四年にして中興二年(西紀五〇二)に示寂してゐるが、年齒不明なるも八十歲と假定し、師の斯那を三十歲の年長、同じく八十歲入滅と假定すれば、その生涯は西紀三九二——四七二となり、西紀五世紀の中葉に活躍したる人となるから、從つて西紀二百二十三年に既に譯經に從つてゐた支謙の譯經中に見ゆる僧伽斯那とは、全く同名異人とせねばならない。

三

本經の譯出年時は不明であるが、吳支謙の譯出たるを認めてよいとすれば、吳黃武二——建興二(西紀二二三——二五三)となる。支謙の傳に就ては、別に本國譯中に記述せらるゝ方があるであらうから略する。

昭和五年十月一日　譯者　美濃晃順　識

菩薩本緣經解題

一

本經古來三卷若しは四卷として流布せられ、現に宋元明三本は四卷に編し、麗本は三卷としてゐる。四卷とするは內容を本位に紙數を案配し、三卷とするは紙數を本位に分卷せるもので、爲に第三品が上中二卷に跨る不便を存する。今國譯では大正藏に基くも、內容を本位に見て且らく分卷に注意しなかつた。

本經は出三藏記集に見えずして法經錄(卷六)に初見せらるゝが、そこでは菩薩本緣集として經字を有たないが、恐らくこの方が原題に近いものであらう。即ち梵題は Bodhisattva-nidāna-saṃgrahā であつたと解せられるのである。而して本經の內容を檢する時は、いかにもその名にふさはしく、八篇の菩薩本緣譚を輯錄したもので、各篇はそれ〲他の類經(本緣系經典)中にも見られ、强ち珍奇なものとて存せぬが、しかし第二の一切施品が大莊嚴經論卷十五にも見え、而も彼に比して原始形を有することは、本經の成立年代並に著者の年代を決する上に有力なる資料となるべく、又第三の一切持王子品は、他の傳にては布施太子(Sudhāna)若しくは Vessantara 王子の物語として傳へらるゝものであるが、かく主人公の名に異傳を存するのみでなく、內容にも他傳の理想化を見るに比しては著しく現實性を帶ぶる點ありて、普通の聖典批判の立場よりすれば、同型物語中の原始形と見做すも支障ない點を保有してゐる點で、注目に價する。しかしこれは、或は部傳の相違に基くものかも知れない。何れにしても、愼重なる討究の結果に於ては、必ずや何ものかを將來すべき筈だと豫想する。(因みにこの物語は、有名な釋尊の檀特山修行說の生じた源流をなすもので、而も檀特山の位置より見て、北印に佛敎の盛行したる時機、即ち阿育王以後迦尼色迦王に至る約三百年間に成立したものと見てよいが、事實は恐らく迦王を餘り遠く逆上らぬ時代のものであらう)。

猶本經も亦、序偈、本文、結勸より成る點で全く大莊嚴經論(同解題參照)と規を一にするものあり、その間に或は思想的聯絡があるかも知れないが、しかし本經に於ては未だ經部的色彩(經句の引立證等)は現れてゐない。

二

本經には法經錄等皆著者の名を傳へ、

の衆生等我と共に語らず、況や復た供養せんや。是の故に當に知るべし、功德を供養して我を供養せざるを。復た廣く一切諸の天人等の供養する所を得と雖も、亦佛の功德に增減なし、觀察を以ての故に。

人天阿修羅　夜叉乾闥婆　是の如き等の諸の衆　亦廣く供養を設くとも　佛に歡喜する心無し　善く觀察するを以ての故に』　是れ諸の功德に供養するなり　我を供養せんが爲には非ず　稱伽拔吒の　諸の眷屬に指示して　已れの後に在りと稱する者の如し　其の喩も亦是の如し』

大莊嚴經論卷第十五（大尾）

我昔曾て聞く。竺叉尸羅（Takṣaśilā）國に博羅吁羅（?）村あり、一估客あり稱伽拔吒（Saṁkha-bhaṭṭa）と名く。僧伽藍（Saṁghārāma）を作り、如今現在す。

稱伽、拔吒は先に是れ長者の子にして居室素富、後に衰耗せるに因つて遂に貧窮に至る。其の宗親眷屬盡く皆輕慢りて以て人の爲にせず。心に憂惱を懷いて遂に家を棄てゝ去る。諸の伴黨と共に大秦國（原語缺 Mahācīna?）に至つて大いに財寶を得、本國に還歸す。時に諸の宗親、是の事を聞き已りて各飲食香華妓樂を設け、路に於て往迎す。時に稱伽拔吒、身に微服を著けて伴の前に在りて行く。先には貧賤を以てし年歲又少かりしに後には財寶を得て其の年も轉た老ゆ。諸親の迎ふる者並びに皆識らず。而も之に問ひて言く。「稱伽拔吒は何所にか在ると爲す」と。尋で即ち語げて言く。「今猶後に在り」と。大勢の伴の中ほどに至りて而も復た問ひて言く。「稱伽拔吒は何所に在りと爲すや」と。諸の伴語げて言く。「前に在て去れる者、即ち是れ其の人なり」と。時に宗親往いて其の所に到り、而も之に語げて言く。「汝は是れ稱伽拔吒なり、云何か我に語ぐるに乃ち後に在りと云ふや」と。稱伽拔吒、諸の宗親に語げて言く。「稱伽拔吒は我身に非ず、是れ乃ち伴中の駝驢の駄上に在り、然る所以は、我身頃來宗親に輕賤され、初め語を與にせず、財寶ありと聞くや乃ち復た迎えらる、是に由つての故に後の駄上に在りと云ふ」と。宗親語げて言く。「汝の道ふや何事なるか、汝の語を解せず」と。稱伽拔吒即ち之に答へて言く。「我貧窮の時に汝等と共に語るも酬對せられず、我に今は諸の財寶多きを見て乃ち供具を設け、來つて我を迎逆す、乃ち財の爲に來るなり、我身の爲ならず」と。

此の喩を發するは、喩は世尊の如し。稱伽拔吒は財物を得る爲に鄉の曲れる宗眷も供を設けて來り迎ふ。佛も亦是の如し。既に成佛を得たまふや人天鬼神諸の龍王等、悉く來つて供養す。來つて我を供養するに非ず、乃ち供養は佛の功德に作すなり。我未だ道を得ざる時、功德なき時には、諸

已に譬喩を說けり。相應の義は我今當に說くべし。須彌羅の地を取らんが爲の故に乏しと雖も止らざるが如く、佛も亦是の如し。一切衆生を救濟せんと欲する爲に、是の思惟を作さく。「云何か當に一切衆生をして人天の樂及以び解脫を得しむべき」と。須彌羅の走りて休息せざるが如く、佛婆伽婆も亦復た是の如し。優樓頻羅迦葉（Uruvilvā-kāśyapa）鴦掘摩羅（Aṅgulimālya）是の如き人の爲に悉く調伏せしめ、諸の衆生あつて化度すべき者は、如來爾の時に卽ち往いて化度したまふ。須彌羅の旣に疲乏し已りて卽便ち地に臥して宛轉するが如く、佛も亦是の如し。諸の衆生を度して旣に已に疲苦し、此の[二五]陰身を以て娑羅（Śāla）雙樹に於て倚息して而も臥したまふ。迦尸迦樹（Kāśika? 不明）の其の根を斬伐するに悉く皆墮落するが如く、唯だ雙樹に在りて身を倚せて而も臥するも、猶故に精進の心を捨てたまはず、拘尸羅（Kuśinagara）の諸の力士等及び須跋陀羅（Subhadra）を度したまふ。須彌羅の地を得んが爲の故に杖を擲つて去らしむるが如く、佛も亦是の如し。涅槃に入るの時、衆生を濟はんが爲の故に、碎身の舍利（Śarīra）八斛四斗もて衆生を利益したまふ。碎く所の舍利は復た微小なること芥子等の如しと雖も、所至の處の人に供養せらるゝこと佛と異るなく、能く衆生をして涅槃を得せしむ。卽ち偈を說いて言く。

如來躬自ら　優樓頻羅等の　眷屬及び徒黨　優伽（Ugrasena）鴦掘魔を度したまひ』
精進禪度の力もて　最後倚臥の時にも　猶諸の力士　須跋陀羅等を度したまふ』
濟拯を爲さんと欲する故に　諸の舍利を布散し　乃し遺法の滅するに至るまで　皆是れ
我を供養す　彼の須彌羅の　杖を擲つて遠く去らしむるが如し』

九〇・＊稱伽拔吒得財の喩

復た次に――

【二五】陰身（skandha-kāya）。五陰より成る身、卽ち肉體。

＊ 梵筴斷簡、第三〇八葉。

既に中陰に生るゝを得ば　始めて善の相貌を見ること　醫の家に到り已りて　方に大歡喜を生ずるが如し』

八八、二女菴羅果を食ふ喩*

復た次に――曾て聞く。二の女人あり、倶に菴羅果を得。其の一女人食ひて子を留めず、有る一女人は菓を食ひて子を留む。其の子を留むる者、彼の菓の美きを覺りて良好の田に於て種を下して中に著く。時を以て漑灌し、大いに好菓を得ること、彼の世人の善根の本の爲に多く善業を修めて後に果報を得るが如し。子を合せて食へる者は、亦復た人の善業を識らずして竟に修め造らず、獲得する所なくして方に悔恨を生ずるが如し。卽ち偈を說いて言く。

菓を得て食ふに　竟に種子を留めざるに如似たり　後に他の菓を食ふを見て　方に悔恨を生ぜん　亦彼の女人の　子種を種ゑて菓を得　復た大いに歡喜を生ずるが如し

八九、須彌羅比丘地を貪る喩*

復た次に――曾て聞く。往昔、比丘あり、須彌羅[二三]（Sumera?）と名く。善能く戲笑す。一國王と諠譁歡悦して王意に稱適す。爾の時比丘、卽ち乞へる地に從つて僧坊を建立せんと欲す。王、比丘に語ぐらく。「汝疾走すべし、休息するを得ず、盡きて極めらるゝ處、[二四]爾許の地を悉く當に相與ふべし」と。爾の時比丘、更に衣服を整へて卽便ち疾走す。復た疲乏すと雖も地を貪るを以ての故に猶止住せず。後、轉た疾極りて前進する能はず。卽便ち地に臥して宛轉して而も行き、須臾にして復た乏し。卽ち一杖を以て逆擲して去らしめ、是の如き言を作さく。「此の杖の到る處を盡して悉く是れ我地なり」と。

* 梵文斷簡、第三〇一、二、三葉。

* 梵缺。

【二三】須彌羅。佛譯はSumitraに還梵す。

【二四】爾許の地。走れる限り走りて得たる土地。

て備具せざるなし。造る所旣に辦ずるや、王便ち醫をして其の家に還らしむ。時に彼の遠醫、王の目前に初て遣る所なきを見て手を空しくして還歸し、甚だ恨々を懷けり。旣に將た家に至らんとするに、道に牛羊象馬に逢ひ、都て識らざる所なり。是れ誰の許なるやを問ふに、並びに皆、是れ彼の醫の名を稱し、是れ彼の醫の牛馬なりと答ふ。遂に家に到り已りて其の屋舍を見るに、莊麗嚴飾せる床張、氍毹、毾㲪、金銀の器物あり、其の婦は種々の衣服を瓔珞せり。時に醫見已りて甚だ驚愕を生ずらく。「猶天宮の如し」と。其の婦に問ひて言く。「此の盛事の如くんば、何をもて得る所と爲す」と。婦夫に答へて言く。「汝何ぞ知らざる、汝彼の國王の爲に病を治して差すに由つての故に、*王汝の恩を報ぜるなり」と。夫是を聞き已りて深く歡喜を生じて是の念言を作さく。「王に極めて德あり、恩を知つて恩に報ゆること、我が本の望に過ぎたり、我が意短きに由つて初て來る時には、所得なきを以て情は用て悵然たりき」と。

此を以て喩と爲し、義體は今當に說くべし、醫は諸の善業に喩へ、王の與ふる所無きは未だ現報を得ずして身に所得なきに喩ふ。彼の醫者の如きは初め物を見ずして所得なしと謂ひ心に恨々を生ぜり。彼の如きは今身に善を修めて未だ報を得ざるを見て心に恨々を生ずらく。「我に所得なし」と。旣に家に至るとは、猶身を捨てゝ後世に向ふが如く、牛羊象馬の群を見るとは〔三〕中陰に至るが如し。身に種々の好相を見るとは、是の念――我の善を修むるに由つて是の好報を見ぬ、必ず天に生るゝを得ん――を作すに方り、旣に天上に至れるは、家中に到つて種々の盛事を見るに喩へ、方に王所に於て敬重の心を生じ是の報恩を知るとは、檀越施主の生天を得已りて施戒に此の如き報を受くることを知るに方る。始めて知んぬ。佛語の誠實にして虛しからず、少かなる善業を修めて無量の報を獲ることを。即ち偈を說いて言く。

施の未だ報を見ざる時　心意に疑悔あり　以て徒らに疲勞して　終竟に所得なしと爲す

---

* 「王」。三本、麗本は「生」。

〔三〕中陰（antarābhava 又は antarāskandha）。輪迴思想上、此に死して彼に生るまでの中間の存在をいふ。而してその形態若しくは存在樣式を論ずるに就て部派によつて異說あり。

我昔曾て聞く。一國王あり、多く好馬を養ふ。會ま隣王あり、與共に鬪戰す。此の國王に良馬あるを知るの故に卽便ち退散す。爾の時國王是の思惟を作さく。「我先に馬を養ひて敵國に規擬せるに、今皆退散す、馬を養ふは何の爲ぞや、當に此の馬を以て用て人力に給すべし、馬をして損ぜざらしめんに人に於て益あり」と。是の念を作し已りて卽ち有司に勅して、諸の馬群を分布して人に與へしむ。常に用て磨せしめ多年を經歷したり。其の後隣國復た來つて境を侵す。卽ち勅して馬を取つて彼と共に鬪戰するに、馬は磨を用つての故に旋轉して肯て前進せず。設ひ杖捶を加ふるも亦肯て行かず。

衆生も亦爾り。若し解脫を得んには必ず心に由る。五欲を受けて後に解脫を得んと謂はんには、死の敵は旣に至らんも、心意五欲の樂に戀著して直進して解脫の果を得る能はず。卽ち偈を說いて言く。

智慧もて宜しく心を調ふべし　五欲に著せしむる勿れ　本と心を調へざる故に　臨終に愛戀を生ず　心旣に調順ならず　云何か寂靜を得ん』　心常に五欲に耽り　迷荒して覺る能はず　心旣に調順ならず　云何か寂靜を得ん』　心常に五欲に耽り　迷荒して覺る能はず　馬の戰を習はざるが如し　戰に對つて而も旋り行かん』

八七、*一國王醫師の爲に恩を報ゆる喩

復た次に――曾て聞く。一國王あり、身に疾患に遇ひ、國中の諸醫都て治する能はず。時に良醫あり、遠處より來つて王の病を治して差ゆ。王大いに歡喜して是の思惟を作さく。「我今醫の力を得る事、須らく厚く報ゆべし」と。是の念を作し已りて微かに侍臣を遣はし、多く財物を齎して彼の醫の所住の處に詣らしむ。爲に屋宅養生の具を造り、人民田宅象馬牛羊奴婢僕使、一切の資產とし

※梵筴斷簡、第三〇一葉。

信を以て纓綫と爲し　多聞及び持戒は　猶彼の麁縷の如し　戒定を小繩と爲し　智慧
を麁繩と爲して　生死の柱より來下す

八五、*敷臥具人王を諭す喩

復た次に――

我昔曾て聞く。有る一國中に王嗣絶えんと欲す。時に王種あり、先に山林に入つて道を學び仙を求めぬ。卽ち强ゐて將ゐ來つて立てゝ以て王と爲す。敷臥具人より衣服及以び飲食を索む。時に敷臥具人、而も王に白して言さく。「各典る所あり、王よ今は應に事々盡く我に隨つて索むべからず、我は唯だ臥具を敷く事を知れるのみ、洗浴衣食は悉く更に人あり、我の當る所に非ず」と。

此の喩を以て一切諸業を知るべし。王の敷臥具人の各所典ありといへるが如く、業も亦是の如し。各々同じからず。色と無病者と財物と可愛と智等、諸業に各々別異あり。有るは業もて無病を得、有るは業もて能く端正の色力を得。彼の仙人の敷臥具人に從つて種々の物を索むるも、終に得べからざるが如し。若し上族に生るとも必ずしも財富ならず、諸業の受報も各々差別あり、一業を以て種々の報を得ず、若し端正の業を作せば則ち端正の色力を得、財富は應に餘業に從つて索むべし。是の故に智者は應當に種々の淨業を修習して、種々の報を得べし。

無病と色と種族と　智は能く各因を異にす　彼の仙人の王の　備さに敷臥者に索むるが
如く　一業に諸報を索むべからず

八六、*國王養馬の喩

復た次に――

※ 梵筴斷簡、第二九七、二九八葉。

※ 梵缺。

し。道を解說せんと謂ひて、「云何か而も能く諸の衆生の爲に斯の如きの法を說かんか」と。諸の衆生に倒見の想あるを以て、觀察し知り已りて其の所應に隨つて爲に法要を說きたまふ。衆生に若干種の行あり、是の故に知んぬ、如來の對治法を說いて顚倒を破除したまふことの、猫兒の爲に肉酥乳を覆ふ如くなるを。

八四、*石匠石柱より下る喩

復た次に——

我昔曾て聞く。有る一國中に石柱を施設し極めて高大と爲す。梯隥、樚櫨、繩索を除去して彼の工匠を置いて柱頭に在り。何を以ての故に。彼若し存活せば、或は更に餘處に石柱を造立して此に勝れしめんを懼れてなり。時に彼の石匠の親族宗眷、其の夜中に於て柱邊に集聚し、而も之に語げて言く。「汝今云何か下るを得べきや」と。爾の時、石匠に諸の方便多し。即ち衣縷を擿ちて二すぢの縷綫を垂れ、柱下に至らしむ。其の諸の宗眷尋で麁綫を以て彼の衣縷に繫ぐ。匠即ち挽き取りて既に上に至るや、手に麁綫を捉りて諸の親族に語ぐらく。「汝等今は更に小麁なる繩索を繫著すべし」と。彼の諸の親族、即ち其の語に隨つて是の如く展轉し、最後に麁大なる繩索を繫ぐを得たり。爾の時石匠、繩を尋で來り下る。

石柱と言ふは生死に喩へ、梯隥樚櫨は過去佛の已に滅せる法に喩へ、親族と言ふは聲聞衆に喩へ、衣縷と言ふは過去佛の定と慧に喩へ、擿衣と言ふは欲の過*患味等の法を觀ずるに喩へ、縷の上より下るとは信心に喩へ、麁縷を繫ぐとは善友に近づきて多聞を得るに喩へ、細繩とは、多聞の縷もて復た持戒の縷に懸け、持戒の縷を禪定の縷に懸け、禪定の縷を智慧の繩に懸く。是の麁繩を以て堅牢に繫ぐとは生死を縛するに喩へ、上より下るとは生死の柱を下るに喩ふ。

* 梵莢斷簡、第二九七葉。

* 「患」。麗本に「去」、三本に「出」とするも、今文意に從つて私に「患」と正せり。

た頂を打つて破る。時に長者の婦、樹上に在つて斯の事を見已つて卽便ち微笑す。婢影の笑へるを見て卽ち自ら覺悟し、仰いで而も之を視、婦女あり、樹上に在つて微笑し、端正の女人にして衣服の已れに非るを見、方に慚恥を生ぜり。

何の因緣を以て而も此の喩を說くや。[二]倒見愚惑の衆の爲なり。譬へば蒼蔔(Campaka)の油香を用つて頂髮に塗るが如し。愚惑は解せずして我が頂より是の香を出すと謂へり。卽ち偈を說いて言く。

末香を以て身に塗り　幷びに衣と纓珞に熏ず　倒惑せる心も亦爾り　已の身より出づと
謂へること　彼の醜陋の婢の　影を見て已れの有と謂へるが如し

八三、*猫母その兒に食を敎ふる喩

復た次に猫の兒を生むや、小を以て漸に大なり。猫兒母に問ふ。「當に何の所をか食ふべき」。母兒に答へて言く。「人自ら汝に敎へん、夜他家に至りて甕器の間に隱れよ」と。猫兒卽ち夜他家に至るに、人あつて見已つて而も相約勅すらく。「酥乳肉等は極めて好く覆蓋せよ、雞雛は高くに擧げて猫に食はしむる莫れ」と。猫兒卽ち知んぬ。「雞酥乳酪は皆是れ我が食なり」と。

何の因緣を以て此の如き喩を說くや、佛の三藐三菩提の道を成じたまふや、十力具足し心願已に滿ち、大悲心を以て多く拯拔せらる。爾の時世尊是の如き念言を作したまはく。「當に何の法をか以て而も之を化度せん」と。大悲もて答へて言く。「一切衆生の心行に顯現す、他心智を以て煩惱を觀察するに、一切の諸行貪欲瞋恚愚癡の等しく長夜に增長し、常想樂想我想淨想もて展轉相承し、是の如き說を作せり『無常苦無我の法を增長する能はず』と」。是の故に如來、此の事を知り已つて衆生の爲に諸の倒見を對治するを說きたまふ。如來の說法は微妙甚深にして解し難く入り難

【二】倒見。前註を見よ。

* 梵缺。

の勢力已に盡き、取つて而して之を飮むに唯だ水味あるのみ、更に異味なし。卽ち親屬を聚めて咸な之を嘗めしむるに、皆言く。「是の水に朽ちて敗爛せる縄汁と遲の臭穢あり、極めて惡しとすべしと爲す、汝今何の故に持ち來つて此に至れる」と。既に斯の語を聞きて自ら取つて飮嘗するに深く悔恨を生ず。「我何を以ての故に、乃ち好酥を以て此の臭水に貿へたるや、一切衆生凡夫の人も亦復た是の如し、愚無智を以ての故に未來世の功德の酥項を以て、臭穢なる[二〇]四顚倒の項と貿易し、之を謂ひて好と爲し、後に於て乃ち是が眞實に非るを知つて深く悔恨を生ず、咄なる哉、何爲れぞ功德の酥項を以て、顚倒臭穢の水に貿易する」と。而して偈を說いて言く。

咄なる哉我何爲れぞ　三業の淨行を以て　貿易して諸有に著すること　淨き好酥を以て

彼の臭惡の水に貿ゆるが如くなる　菴摩勒を食せるを以て　舌倒になりて味を覺えず

臭水もて甘露と爲せり

八二、*婢倒想して己の面貌を誇る喩

復た次に――

我昔曾て聞く。一長者の婦あり。姑の爲に瞋られて走りて林中に入り、自ら刑戮せんと欲して既に得る能はず。尋での時樹に上りて以て自ら身を隱す。樹下に池あり、水中に影現はる。時に婢使あり、項を擔ひて水を取り、水中の影を見て是を己れの有と謂爲ひ、是の如き言を作さく。「我今面貌端正なること此の如し、何の故に他の爲に項を持して水を取らんや」と。卽ち項を打つて破り、還つて家中に至り、大家に語げて言く。「我今面貌は端正なること是の如し、何の故に我をして項を擔ひて水を取らしむるや」と。時に大家、是の如き言を作さく。「此の婢、或は鬼魅の著ける所と爲ん、故に是の事を作す」と。更に一項を與へて池に詣つて水を取らしむるに、猶其の影を見る。復

【二〇】四顚倒。凡夫、常樂我常ならざるものに常樂我常の想をなせり、よつて凡夫の迷想を概括して四顚倒といふ。

* 梵缺。

汝瞋恚を起す莫れ　此を現供養と名く　我を輕毀せんが爲には非ず』　吾が身自ら塔を負へり　況んや樹もて塔の椳を作るを　而も我能く此の樹を護惜せんや』　十力世尊の塔は　我當に云何か護るべき　此の林自らに樹を生ず　而も佛塔の爲の故に　是の如く自ら生ぜる樹を　云何か戀惜するを得ん』　更に餘の因緣あり　今當に說くべし善く聽け　我に亦勢力なし　德叉迦龍王(Takṣaka-nāga-rāja)　自ら來つて此の樹を取るも　我云何か能く護らん』　伊羅鉢龍王（Erāpattra-n.r.）　及以び毘沙門(Vaiśrāmaṇa)　躬自ら來つて此に至るも　我に何の勢力あつてか　而も能く彼の樹を　*拒ぎ捍らん』　威德ある天龍等と　如來の現在世　及以び滅度の後に　塔廟を造立せん者と　此の二等しくて異るなし』　諸有得道者は　人天及び夜叉に　名稱十方に遍くして　世界に倫匹なし』　此の如き名聞の故に　塔椳に寶鈴を懸けんに　其の音甚だ和雅にして　遠近悉く聞知す』

時に婆羅門、是の偈を聞くの故に睡眠より寤め、卽便ちに出家しぬ。

八一、*老母倒想もて水を飲める喩

復た次に——

我昔曾て聞く。一老母あり、背に酥瓨を負ひて路中に在つて行く。菴摩勒(Āmuraka)樹を見て、卽ち其の菓を食し、食し已りて患渴す。尋での時井に赴きて水を乞ひ、飲まんと欲す。時に汲水者卽便ち水を與ふ。先に菴摩勒菓を食せる勢力を以ての故　、水の甜美にして味石蜜の如しと謂ひ、彼の人に語げて言く。「我れ酥瓨を以て汝の瓨水と易へん」と。爾の時水を汲む人卽ち其の言に隨ひて一瓨の水を與ふ。老母得已りて負ひて家に還歸し、既に其の舍に至るに先に食する所の菴*摩羅

* 「拒」。三本、麗本は「距」。

* 梵缺。以下終に至る十章は上の文學と全然趣きを異にし、喩說(upamā)文學を作せり。

* 「摩羅勢」。三本、麗本は「羅摩勢」とす。

名けて首伽（?）樹と稱す。龍の護持する所、惡龍に近づくの故に人の敢て觸るゝなし。其の樹極めて大なり。若し復た人あつて枝葉を取らば、龍能く之を殺す。是を以て の故に人の敢て近づくなし。人あり、語りて言く。「彼に大樹あり」と。時に比丘、卽ち諸人を率ゐて斧器を齎持し、往いて斫伐せんと欲す。時に復た人あり、比丘に語げて言く。「此の龍極惡なり」と。比丘語げて言く。「我れ佛事を爲す、惡龍を畏れず」と。時に奉事の婆羅門あり、比丘に語げて言く。「彼の龍極惡にして若し此の樹を斫らば傷害する所多し、此の樹を斫破する莫れ」と。婆羅門卽ち偈を說いて言く。

汝彼の賊を聞かずや　慳貪の故に惡を作す*ことを　而も能く一切に於て　汝當に此の事を憶ふべし　常に應に自らを擁護し　此の樹の爲の故に　卽ち傷害を致すこと莫かるべしと。

比丘復た偈を說いて言く。

汝毒龍の爲の故に　而も自ら貢高を生ぜり　我は人中の龍に依り　彼を恃みて亦自ら高うす　汝の力を勸ずるに勝ると爲す』　是の如く我も勢を得ること　衆人をして見せしめん　我れ敬佛の爲の故に　今當に身命を捨つべし』　諸の毒龍の衆中に　汝爲に龍王と作り　大恭敬の想を生ぜり』　佛は柔調寂爲り　及び是れ衆中の王なり　我今亦如來婆伽婆を恭敬す』　誰か能く毒龍を降して　而も弟子と爲す者ぞ』

爾の時比丘、婆羅門と共に各道理を競ひ、遂に共に鬪諍す。時に比丘卽ち其の樹を伐るに、亦雲雷變異の相なし。時に婆羅門、斯の事を睹已りて而も偈を說いて言く。

先に若し枝葉を取らば　雲起り雷霹靂したらんを　汝の呪もて伏する所と爲る　死して後世に至ると爲ん

彼の時婆羅門、是の偈を說き已りて卽便に睡眠し、夢に毒龍の已れに向つて偈を說くを見たり。

＊「作惡」。三本、麗本は「皙作」とす。

に王是の念を作さく　「誰か此の塔を持し去れると」　即ち自ら往いて塔に詣づるに　其
の所在を知るなし』

爾の時彼の王、千餘人を遣はし、象に乘じ馬を馳せて四方に推覓す。時に老母あり、道の傍に在つて彼の諸人の行來すること速疾なるを見、即ち之に問ひて言く。「何爲れぞ乃ち爾るや」と。諸人答へて言く。「塔樹を推覓す」と。彼の老母言く。「我れ向に道に於て希有の事を見たり、塔と飛空人と并びに尼倶陀樹あり、其の井を憶へず、諸人等を見るに首に天冠を戴き、頭に花鬘を垂れ、身に諸の華を著け、塔を持して而も去れり、我れ去るを見し時希有の想を生じき」とて、去處を指示す。諸人聞き已りて具さに事の狀を以て還つて王に白す。王聞いて歡喜し、即ち偈を說いて言く、

彼の塔自ら飛去しぬ　天上に向はんと爲すや　我今心に信敬し　極めて大歡喜を生ぜり
若し我此の塔を破らば　當に地獄に墮すべし

爾の時王即ち、彼の塔處に向つて大いに供養を設く。此の塔即ち今名けて自移と曰ふ。塔及び樹井、毘伽城を離る〻三十里に住まる。

八〇、* 塔棖の材の爲に比丘と婆羅門と諍論する緣

復た次に、佛塔に大威神あり、是の故に宜しく應に佛塔を供養すべし。
我昔曾て聞く。竺叉尸羅(Takṣaśilā)國に、彼に塔寺あり、波斯匿王(Prasenajit)*薪火を以て之を燒く。佛復た一棖を安ずるに朽壞して之を却く。時に彼の國王を枸沙陀那(Kuśadhāna)と名く。一比丘あり、彼の王に求請すらく。「我今塔の爲に棖を作る、願はくは王よ聽取して、大樹あらば、王よ、護惜する莫れ」と。王即ち語げて言く。「我が宮內に有る所の樹木を除いて、餘樹悉く取れ」と。王教を得已つて諸の比丘等、處々に求覓す。一村邊に於て大池水あり、上に大樹あり、

＊ 梵缺。

＊ 「薪」。三本、麗本は「成」。

議正しく解了しぬ　名けて邊語と爲さず　汝の解する所の如く　即ち是れ貴種族なり』

七九、[*]毘伽城の佛塔自ら居處を移す緣

復た次に、若し觀察して佛の神變を知らんと欲せば、諸の塔寺を視て佛塔を供養せよ。

我昔曾て聞く。阿梨車毘伽（Aricchāvega?）國に、彼の城門に於て佛の髮爪の塔あり、近くに尼倶陀（Nygrodha）樹あり、邊りに井水あり。時に婆羅門あり、而して王に白して言さく。「若し遊行の時彼の塔を見ば、是れ沙門の塚、王の福德を破らん、王は是れ大地に一蓋の主と作す、宜しく此の塔を除くべし」と。時に王、婆羅門の語を信ずる故に即ち臣下に勅して速かに此の塔を却けしむらく。「明日我が出づるの時、復た見せしむる勿れ」と。時に彼の城神と諸の民衆と、皆悉く悲涕す。時に諸の優婆夷、供養を施設す。又燈を然す者、是の如き語を作さく。「我等今は是れ最後の供養なり」と。優婆塞ありて塔を抱いて悲泣し、即ち偈を說いて言く。

我今最後に　汝の基塔の足を抱く　猶須彌の倒るゝが如く　今日皆破傷す』　十力世尊の塔　今に於て遂に破滅す　我に若し過失あらば　我に聽して懺悔せしめよ　衆生更た　佛の所作業を見ず』

爾の時諸の優婆塞、是の如き言を作さく。「我等今は家に還歸すべし、能く人の此の塔を壞するを見るに忍びず」と。時に王、後に自ら人をして鍬を持たしめて除かんと欲し、往いて其の所に到るに塔樹盡くなし。即ち偈を說いて言く、

嗚呼甚だ怪とすべし　擧城大いに聲を出すこと　猶海の濤波の如くして　十力の塔を見ず　尼拘陀及び井　其の所在を知るなし』

[*]諸の婆羅門等　深く心に慚怪を生ず　彼の王是を聞き已りて　希有の想を生ず』　時

＊　梵缺。

＊　以下本來長行（散文）に入るべきもの丶如し。

除く』　餘食は牟尼（Muni, 聖者）の觸れしもの　應當に頂戴敬すべし　手づから殘食を捉り已つて　水もて洗ひ已れば過を除く』

附傭主、後日更に殘食を與へず。時に左右の人問ひて言く。「何の故に分食を二王子に與へざる」と。即ち偈を說いて答へて言く。

彼の、沙門所食の餘を　知解せず　自ら種族を恃むの故に　之に觸れて不淨と言ひ歡喜心を生ぜず　是の故に我與へず』　沙門の姓を識らず　故に彼の食を食はずば我の種姓を識らずして　應に我の食を食ふべからず』　沙門の處々より生るゝこと　我が種族の如かず　我沙門の如からず　復た我が食を食はざれ』　爲に沙門は種姓なく亦年歲あるなしと言ふ　馬に種族なきが如し』　内官も亦是の如し　内官は處々より來り　定れる方所あるなし』　唯だ我が富貴を睹て　我が種姓を見ず　但だ富貴を見るの故に　便ち我が殘食を食し　沙門の食を食はざる　是を名けて嬰愚と爲す』　沙門は心自在なり　[一八]七種財を具足す　沙門の食を食はずして　而も我が餘を食はば　猶[一九]半ば井を超ゆるが如し』　是の處あるを見ずして　我に勢力あるを見て　王者の念とする所　便ち我が餘食を食へり』　甘蔗種（Ikṣvāku）の中より生れし　輸頭（Śuddhodana）（淨飯）王の太子　沙門は是の如き種族より來る　我より勝れざるべけんや』　彼の勝智者なる　等なく倫匹なし　其の種姓を取らず　唯だ其の德行を取るのみ』　種族は諸の惡を作す　亦名けて下賤と爲す　具戒して智慧ある　是を名けて尊貴と爲す』

時に二王子、此の語を聞き已りて而も是の言を作さく。「汝正道を示せり、即ち是れ我が父なり、自今以往、敬つて誨ふる所を承けん」と。即ち偈を說いて言く。

汝今種姓を說いて　殊に非法語と爲せり　因行に定あるなく　知解に定方なし』　語

【一八】　七種財。七聖財（ārya sapta dhanāni）、信財（śraddhā-dh.）、戒財（śīla-dh.）、慚財（hrī-dh.）、愧財（apatrāpya-dh.）、聞財（śruta-dh.）、捨財（tyāga-dh.）、慧財（prajñā-dh.）の七。

【一九】　超半井。井戸を越えんとして井戸の半ばを飛超すこと、即ち井中に墮すること必然なり。

此は卽ち是れ愚癡　羅刹の標相なり　是の故に汝等を　顚狂の法を成就すと說く』
此は卽ち是れ酒と　飮酒との因果なり　瞋恚は是れ癡の因　瞋恚は而も黑濁にして
能く顏色を變ぜしむ』　是の因緣を以ての故に　瞋を瘦黑の因と爲す　飮酒すれば顏色
濁る　此の二倶に能く瘦す』　目連は餓鬼に見すらく　「汝先に自ら飮酒し　亦人に
飮酒せしめ　說いて罪報なしと言へり　是の故に今現在に　已に餓鬼の身を獲　花報
已に是の如し　果報は方に後に在り」と』

諸の婆羅門、是の語を聞ける時、多く外道に有りしも卽時に出家しぬ。

七八、*花氏城の二王子法に歸する緣

復た次に、善く分別して功德を敬ひ門族を期せざれ。

我昔曾て聞く。花氏城（Patali-putra）中に二王子あり、逃れ走りて末投羅國（Mathurā）に歸投す。時に彼の國中に一内官あり、拔羅婆若（Bharadvaja?）と字く。附傭國の主と爲り、衆僧を供養し、手自から施食を行ふ。衆僧食し已りて人を遣はし、草葉の上に殘食を斂めて持して宮中に詣らしむ。食に向つて禮を作し、然る後乃ち食し、餘は分ち張して親愛する所に與ふ。彼の殘食を食せんに能く我の患を破る。是の故に先づ取りて之を食し、二王子に授與す。王子食し已りて心惡賤の故に外に出して卽ち吐き、而も是の言を作さく。「出家の人は種々雜姓なり、我等今は其の殘食を食ひ、食し已つて吐棄す、然る後に過を除かん」と。時に附傭主、是の事を聞き已つて是の如き言を作さく。「此の二嬰愚極めて無知と爲す」と。卽ち偈を說いて言く。

此の餘食を得ば　智者は過患を除く　彼疑ひて譏嫌を生ぜり　是を名けて嬰愚と爲す』
佛法には觀察食あり　外道には都て悉くなし　沙門の觀察せる食は　能く煩惱の障を

＊ 梵缺。

大仙の辱しむる所なり』　其の禁限を出過して　顚狂先づ已に成れり　云何か我をして
　百千種の狂因を說かしむるや』　何の故に分別して說くや　淵に投じ及び火に赴り
自ら高巓より墜ち　施戒を捨棄すと』　迷邪狂倒を逐ひて　正行を修めず　狂惑し
て巓より火に墜つなり』　[11]鹽を賣れば淨行を壞すとし　飮みて恒河(Caṅgā)の水に觸るゝ
こと　是を立正行と名く　*淨を失して及び正行を得るとは　何の因と義趣ありや
又肉を賣らば衆惡集ると　三種の神變あり　此の[12]三種の神變を除きて　更に亦神變あ
らんや』　唯だ[13]二六の法あり　此を離れて別に我なし　仙の神變を現見するとも
更に[14]十三法を見はさんや』　是の如き顚狂の事　其の數乃ち百あり　現見に淵と火に
投じ　自ら高巓より墜ち　此を以て天に生れんと欲するは　此は但だ是れ邪見のみ』
　是れ生天の因には非ず　戒と施と善く心を調ふると　卽ち是れ生天の因なり』　賣鹽
は善行を壞し　觸河は諸惡を除くと　賣鹽に大惡あり　觸河に大善あること　是の如
きは何の義あつてか　名けて善惡と爲すを得るや』　婆羅門の肉を賣るは　卽ち[15]失法
に墮し　[16]刀を捉るも亦失法なり　若し復た肉を賣らば　三十六斤を滿として　婆羅門
の姓を敗壞す』　[17]羅差(Lakṣā)及び食蜜を賣るも　皆名けて失法と爲し　羅差と嘗蜜を
見ること　二俱に過患を成ずと』　秤を以て人を欺誑し　成ぜざるを名けて盜と爲す』
　賣肉は殺生と成ると　羊も稻も俱に命あるに　稻を食ふも殺生と成らずとせば　羊
稻俱に應に食ふべし　何の故に稻を食しつ　而も羊を食はざる』　汝諸ち言ふらく自殺
は　終に天に生ずるを得ずと　巖より墜ち淵水に投ずるを　復た生天すと言へり』
己を殺すを有罪と言はゞ　己の身を餧養する者　何の故に福を得ざる』　觀察するに理
に順はず　皆是れ愚癡顚倒なり　是の因緣を以ての故に　汝等を名けて狂と爲す』

【一一】　婆羅門の鹽を賣ることはマヌ法典にも禁ぜり(manu, X. 92)。
【一二】　三種神變(prātihārya)。神變は示現とも譯し、佛の敎化の樣式にて之に奇蹟的神通(ṛddhi, 如意卽ち意志の自由力を示すこと)、他心觀察(ādeśana, 洞察力)、敎訓勸誨(anuśāsani, 說法自由)の三あり。
【一三】　二六法。十二因緣のこと、十二緣は我の成立する條見を述べたるものなれば是以外には我なし。
【一四】　十三法。外道の仙敎に如何なる妙法ありとも、十二因緣以外に梵、我、壽等の一法を加へることは不可能なり。
【一五】　失法。婆羅門の階級を奪はるゝこと。肉を賣りて失法となること、manu, X. 92に出づ。
【一六】　manu, III. 161. に婆羅門が軍職を敎授することを禁ぜり。
【一七】　羅差。玄應音義に紫色とし、本書の佛譯にラック(漆)とす、この失法は manu, X. 92 に出で食蜜禁賣は同 X. 89 に出づ。

七七、*法師盧頭陀摩王の爲に飲酒狂癡を說く緣

復た次に、若し佛語を信ずれば諸の外論に於て、猶嬰愚顚狂の所說の如し。是の故に懃ろに佛法の語論を學べ。

我昔曾て聞く。一國あり 【10】釋伽羅(Sakala?)と名く。其の王を盧頭陀摩(Rudradāman?)と名く。彼の王數々寺に詣でて法を聽く。時に彼の法師、酒の過失を說く。爾の時王、高座の法師を難じて言く。「若し他に酒を施せば狂癡を得とは、今酒を飲むも亦多く狂癡の報なし」と。時に法師外道等を指示す。時に其の王見已つて「善き哉、善き哉」と。

時に外道あり、自ら相議りて言く。「彼の說法者知見する所なし、空しく指せる而已、王は法師の爲に已に又解せずして空しく善き哉と稱せり、開解する能はずして而も此の間に答へんや、然れども此の衆中にも亦大聰明の勝人あらん、何の故に答へざる」と、王、卽ち偈を說いて言く。

法師に聰辯ありて　善く能く此の義に答ふるも　汝等を憐愍するの故に　護惜して而も說かざるのみ

諸の外道言く。「王は此の法師の爲に橫さまに道理に通ずと爲すや」と。王言く。「我の解する所更に異趣あり」と。爾の時王、法師に語げて言く。「向に解する所の義もて今顯說すべし」と。法師答へて言く。「我向に外道を指せる所以は、諸の外道は各異見を生じて顚倒の心あるを以てなり、是の故に名けて癡狂の人と爲す」と。卽ち偈を說いて言く。

必ずしも鬼の身に入れるを　名けて顚狂者とは爲ず　邪見なる夜叉の心も　*是を說いて顚狂と爲す』　狂癡の人に過失あるも　其の事を解知せず　汝等に狂過あること　一切種智の說なり』　汝種智の語に違ひて　邪見に隨逐し　神變を現り見はす　彼の

＊ 梵本斷簡、第二八三、二八四。

【10】 釋伽羅。本論第八篇に除伽羅とせるも同一なるべし。今梵本に欠逸して不明。

＊ 原文「是爲說顚狂」は「是說爲顚狂」の誤傳なるべし。

て言く。「親愛の爲に非ず、乃ち是れ殘敗なり」と。卽ち偈を說いて言く。

我勝處に向はんと欲するに　戒を毀ちて墮墜せしむ　我を損ずること乃ち是の如し　云何か親愛と名けん』　我勤めて戒根を習へるを　乃ち劫奪せられんと欲するや　持つ所の五戒の中　酒戒を最も重しと爲すに　今强いて我を毀たんと欲するか　名けて親と爲すを得ず』

兄、弟に問ひて言く。「云何か酒を以て戒の根本と爲すや」と。弟卽ち偈を說いて以て兄に答へて言く。

若し禁戒中に於て　心を盡して護持せざれば　便ち大悲に違ふと爲す　草頭に酒滴あるも　尙ほ敢て振觸せず』　是を以ての故に我知んぬ　酒は是れ惡道の因なるを　在家の修多羅に　酒の惡報を說けり』　唯だ佛のみ能く別ち知りたまふ　誰か能く測量するあらんや　佛は身口意の　三業の惡行を說くに　唯だ酒もて根本と爲したまへり』　往昔の優婆夷は　酒の因緣を以ての故に　遂に餘の四戒を毀てり』　是を[九]惡行の數と名け　復た五大施と名く　亦是れ五無畏なり』　酒を放逸の根と爲す　飮まざれば惡道を閉ぢ　能く信樂の心を獲ん』　慳を去つて能く財を捨つること　*首羅は佛の說かるるを聞きて　能く無量の益を得たり　我に都て異意なし　而も毀犯を欲する者ぞ』　略說して而も之を言はんに　寧ろ百千の命を捨つるとも　佛の敎を毀犯せず　寧ろ身を乾枯ならしむるも　終に此の酒を飮まず』　假設戒を犯毀せんに　壽命百千年ならんも　禁戒を護つて　卽時に身命を滅するに如かず』　決定して能く差えしめんも　我猶故に飮まず　況や今定んで　差ゆると爲すや差えずと爲すやを知らざるおや』　是の決定心を作して　心に大歡喜を生じ　卽ち眞諦を見るを獲て　所患卽ち消除したり』

【九】惡行數。五大施、五無畏は、共に五戒の異名なり。「是」とは卽ち五戒を指すと見れば、前句との間に脫句あるやに思はる。

＊　第八卷の四八章に出づ。

はん　汝今自ら身を苦しむるも　終に大いに利樂を獲ん』
爾の時國主、此の偈を說き已りて彼の夫婦の衆僧を供養するを聽し、卽ち財物を以て彼の夫婦の爲に他の價直を酬ゐ、又夫婦に給して自ら產業を營ましむ。現に此の報を受けて乏少する所なし。

七六、*不飮酒戒を守りて病治する緣

復た次に、至心に持戒して乃し沒命に至らんに、現果報を得。

我昔曾て聞く。難提拔提（Nandivarti?）城に優婆塞あり、兄弟二人並に五戒を持す。其の弟爾の時卒かに脇痛を患ひ、氣將に絕えんと欲す。時に醫之を診るらく、「新殺の狗肉を食ひ幷びに酒を服ましめんに所患必ず除からん」と。病者白して言く。「其の狗肉とは市に於て買ひ索めて之を食すべしと爲すや、飮酒の事は願はくは身命を捨てんも終に戒を犯して而も酒を服まざらん」と。其の兄、弟の極めて困急と爲れるを見て酒を買ひて弟に語ぐらく、「戒を捨てゝ酒を服み、以て其の疾を療せよ」と。弟、兄に白して言く。「我病急なりと雖も願はくは身命を捨つるも終に戒を犯して而も此の酒を飮まざらん」と。卽ち偈を說いて言く。

怪しき哉命終に臨んで　我が戒の瓔珞を破らんや　戒を以て身を莊嚴す　殯葬の具を煩はさず』　人身既に得難く　戒に遭値するも復た難し　願はくは百千命を捨つるとも禁戒を毀破せざらん』　無量百千劫に　時に乃ち戒に値遇す　閻浮の世界の中に　人身は極めて得難し　復た人身を得たりと雖も　正法に値ふは倍す難し』　時に復た法寶に値ふとも　愚者は取るを知らず　善く能く分別する者　此の事亦復た難し』　戒寶は我が手に入れり　云何か復た奪はんと欲する　乃ち是れ怨憎者なり　我の親しむ所に非ず』

兄偈を聞き已りて其の弟に答へて言く。「我親しみを以ての故に沮壞を爲さず」と。弟、兄に白し

* 梵缺。

すべし』　後に他の策つ所と爲り　作用に自在ならず　徒らに衆の勞苦を受けて
毫釐の利あるなからん』

此の偈を說き已りて夫婦通夜して暫しも眠息せず。設くる所の餚饍明に至つて悉く辦ず。夫、婦に語げて言く。「善き哉や我曹、所作已に辦ぜり、心願滿足して是の好日を得たり、此の一身を賣つて百千の身に於て常に豐足を蒙らん」と。

時に小國主あり、飮食を施設して復た來つて寺に至り、而も是の言を作さく。「願はくは諸僧等、我が供養を受けよ」と。知事の人言く。「我等諸僧先に他の請を受く、更に餘日を覓めよ」と。時に彼の小王、慇懃に啓白すらく。「我今已に衆務に逼らる、願はくは我が請を受けよ」と。

爾の時諸僧默然として對ふるなし。爾の時國主、彼の夫婦に語げて言く。「我今自ら　揵椎(Ghaṇṭa)を打たん、汝の造る所の食は當に汝の直に酬ゆべし」と。時に夫婦已に此の語を聞きて彼の國主に向つて五體を地に投げ而も之に白して言く。「我が夫婦窮して所有なく、自ら己が身を賣りて以て供具を設けぬ、竟に宿りて供養を造り施設已に辦ぜり、唯だ今日に於て自在に供養さる、若し明日に至れば他に策使せられて自由なるを得ず、願はくは王よ、矜を垂れて我が日を奪ふ莫れ」と。即ち偈を說いて言く。

夫婦は鴛鴦の如し　供設既に已に辦ぜり　願はくは必ず憶念せられよ　明に當に他に屬して去るべきことを』　夫婦各策を異にすれば　更に修福の期なし　是の如く自ら身を賣ること　乃ち善を修めんが爲の故なり』

時に彼の國主、具さに斯の事を聞きて讃へて言く。「善き哉」と。即ち偈を說いて言く。

汝善く佛敎を解し　明了に因果を識れり　能く虛僞の身を用て　堅財の命に易ゆ』
汝恐怖を懷く勿れ　悉に汝の所願を聽さん　我汝を憐愍せん爲に　財を以て汝の價を償

【八】揵椎。衆を集むるに叩く板。

なし」

爾の時其の婦、是の偈を聞き已つて其の夫に語げて言く。「汝愁憂する莫れ、我は汝に屬す、汝は我が身に於て自在の力あり、若し我の身を賣らば錢財を得て汝の心願を滿すを得べし」と。爾の時其の夫、婦の此の言を聞きて心に歡喜を生じ、顏貌怡悅して其の婦に語げて言く。「若し汝を無くせば我れ活くる能はず」と。即ち偈を說いて言く。

我身と汝の身とは　猶し彼の鴛鴦の如し　共に俱に身を賣つて　財を得て用て福を修むべし

爾の時夫婦二人、長者の家に詣りて是の如きの言を作さく。「我に金を借すべし、一月の後若し得されば、我等二人當に汝に屬すべし、一月の後我必ず金を得て相償ふ能はされば、分れて奴婢と爲らん、一月の中に諸の比丘僧を供養すべし」と。爾の時長者、即便に金を與ふ。既に金を得已つて自ら相謂ひて言く。「我等離越寺(Revata-vihāra?)中に於て衆僧を供養すべし」と。婦、夫に問ひて言く。「何日を用ふと爲すや」と。答へて言く。「十五日」。又問ふ。「何の故に十五日なるや」。爾の時其の夫、偈を以て答へて言く。

世間に十五日は　拘毘(Kuvera)等の天王　世間に案行すと　是は佛の說きたまふ所*
人天をして知らしめんと欲し　是の故に十五日とす

爾の時夫婦二人、力を竭して營造し、十三日に至りて食具悉く備り寺上に送置す。知事の人に白して言く。「唯願はくは大德よ、明十五日、衆僧をして外に出づる者を有らしむる勿れ、當に我が請を受くべし」と。彼の知事の人答へて言く。「爾すべし」と。十四日に於て夫婦二人、寺中に在つて宿り、自ら相勸喩し、而も偈を說いて言く。

告喩す、自ら己身に　愼しみて疲勞を辭する勿れ　汝今自在を得　應當に力を盡して作

【七】雜寶藏經には寺名を出さず、單に「塔寺」とせり。
* 中阿、八關齋經等の說。

甘雨を降り注ぎ　善の芽悉く生ずるを得たり』　法雨甚だ閻浮に　我が心の埃塵に灑ぎぬ　埃塵既に起らず　眞實の法を見るを得たり』　是の故に世間に說かく　「怨に因つて財賄を得」と　自ら惟ふに大利を得て　卽ち三歸依を受けぬ　彼の婆羅門に於て大いに諸の餚饍を設けん』

七五、*罽賓國の夫婦自らを賣りて設會し現報を獲るの緣

復た次に、若し人精誠に財を以て布施せんに、[五]華の如く財業を獲ん。是の事を知るを以て應に至心もて施すべし。

我昔曾て聞く。[六]罽賓國(Kaśmira)の人、夫婦共に草敷の上に在つて臥し、天の明けんと欲するに於て善思して覺生ず。是の思惟を作さく。「此の國中の人、無量百千なり、皆悉く福を修め衆僧を供養するも、我等貧窮にして此の寶渚に値ひながら少寶を持せず、後世に至らば我等の衰苦は則ち無窮と爲らん、我に今福無く將來の苦や長し」と。是の念を作し已つて悲吟嘆息す。展轉哀泣して淚を婦の上に墮す。爾の時其の婦、夫に尋ね問ひて言く。「何事を以ての故に樂しまざること乃し爾るや」と。卽ち偈を說いて言く。

何の故に極めて悲慘し　數々而も嘆息し　淚を雨らして我が臂を沾らすこと　猶し水を以て澆ぐが如くなる

爾の時其の夫、偈を說いて答へて言く。

我に微末の善の　持して後世に至るべき無し　此の事を思惟し已りて　是の故に自ら悲嘆す』　世に良福田あれど　我に善種子なし　今身若しは後身に　飢窮の苦計り難し』　先身に子を種ゑず　今世に貧窮を極む　今若し善根を作さざれば　將來も亦果

＊　梵缺。本節は雜寶藏經卷四に同話を有す。

【五】　如華。現世に報あるを華報といひ、來世にあるを果報といふ。今はその意を含めて如華といふ。

【六】　雜寶藏經には國名を記さず夫の名として罽夷羅(Kāśira?)を出せり。國名と人名の轉訛ならん。

說く。此の婆羅門、已に過去に於て諸の善根を種ゆ、即ち坐上に於て四眞諦を見、須陀洹を得たり。而も偈を說いて言く。

咄なる哉愚癡の力　能く正見を害ふ　愚者は分別せずして　寶に非寶の想を作す』
我今勝利を得て　分別して三寶を識れり　眞實に是れ我が寶は　佛と法及び聖衆なり』
我已に諦かに睹了して　三惡道を閉づるを得たり　釋梵諸天等の　獲得する能はざる所を　我今具さに獲得したり』　今此の婆羅門を　即ち名けて梵天と爲す　今當に趣向するを得べし』　解脫不死の方を　我今始めて獲得したり　婆羅門の勝法として我が本姓は輸都(Śuddha? 清淨)　今日眞に輸都なり』　今日始めて　勝妙の比陀(ベーダ)(Veda)法を獲得したり　我今無漏を得て　諸の比陀にも出過せり』　我今眞實に是に　大福田を祠祀せん　我當に勤めて大祠すべし』　祠るべきと祠るべからざるとを　善く分別する能はず　今日より已往は　當に天中の天たる　多陀阿伽陀(Tathāgata)を供養すべし』　略說して而も之を言はんに　今日始めて利を得て　人身の果を獲得したり　今日より已往は　當に佛の敎へたまふ所に隨ふべし　終に更に請を　其の餘の諸天神に求めざらん』　我今學ぶ所の法もて　隨順して正道に向はん　[四]法及び隨順法は　我必ず其の果を得ん』　我今歸命禮す　宿世に厭惡の根もて　曾て法を修め法に向ひしに今其の果の利を獲たり』　善知識に親近し　法利自然に成じぬ　我若し　大悲の弟子に親近せずんば　永く當に邪見に墮して　三惡道に輪迴すべし』　若し彼の婆羅門の我に怨讎と爲る無くんば　亦、此の如きの聖衆に　親近するを得ず』　彼の瞋忿に由つての故に　我をして是の法を得しめぬ　外相は惡友に似たるも　實は是れ善知識なり恩は父母　及以(およ)び諸の親戚よりも過ぐ』　此の婆羅門に由つて　諸僧我家に至つて

【四】法。隨順法(dharma-anudharma)。大法と小法、即ち主要なる敎戒と並にそれに附隨せる敎戒とをいふ。

力を壞れり』　十方の佛世尊は　亦業力に隨つて說きたまふ　汝今業力に倚りて　用て自ら身を莊嚴し　我が力を割絕せり』

復た次に、智者と共に讎郄を爲すと雖も、猶能く利益す、是の故に智人は、與に讎を爲すと雖も常に應に親近すべし。

七四、婆羅門奸詐を被り反つて佛に歸する緣*

我昔曾て聞く。摩突羅國(Mathurā)に婆羅門あり、聰明智慧にして佛法を信ぜず。亦諸の比丘等に親近せず。餘の婆羅門と共に先に鬪諍するあり、瞋恚を以ての故に僧坊中に詣りて詐りて妄請を爲し、是の如き言を作さく。「某婆羅門、明日舍に於て諸の供具を設けて當に大會を作すべし、諸の比丘を請ず」と。比丘をして明晨其の家に往至して飮食を得ざらしめ、彼をして惡名を世界に遍からしめんと欲せり。

時に諸の比丘、其の晨朝に於て其の家に往詣し守門人に語ぐ。「汝の家の主人、我を飮食に請ず、汝往いて白すべし」と。時に守門者、入りて主人に白さく。「今は門外に諸の比丘あり、云く、大家請ずるの故に來つて相造れり」と。主人聞き已りて是の思惟を作さく。「何の因緣の故に是の如き事ある」と。復た是の念を作さく、「彼の婆羅門我と怨と爲る、故に此事を爲すか、今中に臨むと雖も城邑極めて大なり、人を市に遣はして具さに諸の比丘を供養せん」と。是の念を作し已りて即時に人を遣はして諸の比丘を喚んで舍に入つて坐に就かしめ、種々の食を設けて而も以て供養す。比丘食し訖つて檀越に告げて言く。「汝今小らく坐れ、比丘の法、食訖りて應に檀越の爲に法を說くべし、汝信ぜずと雖も佛法は應に爾るべし」と。時に彼の主人、即ち小床を取りて上座の前に坐す。爲に施論、戒論、生天の論と、欲を不淨と爲し世を出づるを樂と爲すを說き、乃至爲に四眞諦の法を

---

* 梵缺。

と爲すやを。

是の偈を說き已りて夫人の所に往き、夫人に語げて言く。「今當に人を遣はして汝の邊に來到せしむべし、汝好莊嚴すること帝釋幢（Indra-dhvaja）の如かれ」と。夫人答へて言く。「當に王教を奉ずべし」と。時に王、蒲萄漿を以て彼の王に依つて活くと稱する者に與へ、夫人に送與す。既に之を遣はし已つて是の思惟を作さく。「業力を稱する者、今應當に悔いて是の如き語を作すべし」と。是の念を作し已つて未だ久しからざるの間に、彼の業力者、好衣服を著けて王邊に來至す。王之を見已つて甚だ大いに怪を生じ、卽ち偈を說いて言く。

我自ら錯誤を爲して　彼に殘漿を與へしか　是れ彼の業力の爲に　此を强奪して將ち去れるか』　或は能く夫に親厚にして　彼に與へて將ち去らしめたるか　或は是れ夫人の瞋りて　此を奪ひて彼に與へしか』　或は能く我の迷誤して　而も彼に與へたるか　或は能く彼の我を幻して　我をして錯亂せしめたるか』

是の偈を說き已りて彼の人に問ひて言く。「好く實もて我に語れ、汝業力を恃めり、我故に遣はさず、汝云何にして得たるや」と。彼の人王に白さく。「業力を以て得たり」と。卽ち事狀を以て具さに王に向つて說きぬ。此の人、使を奉じて旣に門を出で已るや、卒爾として鼻衄し、卽ち此の漿を以て我に與へて送らしむ。夫人の邊に到りて是の衣服を得たり」と、王、是を聞き已りて卽ち偈を說いて言く。

業報は影と響の如く　亦彼の莊嚴の如し　彼自ら業力を言ふ　此の語信にして虛ならず　聽法力を以ての故に　言說理に合へり』　彼れ業力を稱する者　斯の言定んで驗あり　我れ已れに多くして負け　彼れ業力を憑みて勝てり』　佛は業力の强きを說きたまふ　此の語信に眞實なり　佛を善御の乘と爲し　業力者を善哉と爲す　能く王者の

ず』　若し善惡の業を知らば　云何か復た色に著せん　遠ざくと雖も尙視ず　況や當に染汚あるべけんや』　寧ろ當に飢渇して死すべけんも　非法の食を爲さず　寧ろ當に火聚に入るべけんも　姦邪の事を爲さず』　我に如し愛著あらば　今身若しは後身に苦を受くること極めて量りなからん』

七三、*憂悅伽王の二內官道理を諍ふ緣

復た次に、若し善業あれば自然の力の故に好き業報を受く。國王の黨援の力ありとも業力の獲る所の善報に如かず。是の故に應當に善業を修すべし。

我昔嘗て聞く。[三]憂悅伽王(?)晝に於て睡眠す。二內官あり、一は頭前に在り、一は脚底に在り、扇を持ち拂子を捉りつ共に論議を作せり。「我等今は王の念ずる所と爲る、何を以て事ふと爲すや」と。一は則ち自ら、是れ我が業力なりと稱し、一は則ち自ら、我れ王力に因ると稱し、「是れに由るの故に王に奉給す」と。時に彼の二人數ば法を聞聽し、並びに議論を解す。卽ち偈を說いて言く。

牛の厲みて水を渡るが如し　導正しければ從亦正し　人王正法に立たんに、　從者も亦是の如し

時に彼の二人、理を競ふに出つての故に其の聲轉た高し、一は是の言を作さく。「我は王に依つて活く」と。第二者言く。「我は業力に由る」と。王是の聲を聞きて卽便ち睡悟め、而も之に問ひて言く。「何の故に高聲するや」と。王又彼の二人の理を諍ふを聞くや、復た明知すと雖も未だ我見を斷たず、已れに黨する者を援く。王心に悅ばず、卽便ち彼の業力を稱する者に向つて偈を說いて問ひて言く。

我が國に依つて住しつ　自ら是れ業力なりと稱せり　我今汝を試看せん　是れを誰の力

---

* 梵本缺。雜寶藏經卷三に波斯匿王臣として此の緣出づ。

【三】憂悅伽。雜寶藏經に波斯匿王とあり、同人なりや否や不明、波斯匿に古來「和悅」の譯あり、今はその原語なるか、或は憂は優の誤り、伽は衍字とすれば和悅と同じく譯語となる、或は然らんか。

するを聽したまへ　我實に是れ愚癡に　輕躁にして智なき者なり　汝還び王と爲るべし
我此の國を捨て去らん』　汝能く衆生をして　一切に安樂を得しむ　餘人は設ひ王
と作らんも　諸の世間を逼惱せん』
卽ち彼の王を立てゝ所止に還歸せり。

七二、*烏越蘄王意と業を說く緣

復た次に、淨き福業を作さんには應に供養を設くべし。是の故に應當に福業を勤修すべし。
我昔曾て聞く。石室國（Takṣaśilā）の王を烏越蘄（Uvaskī?）と名く。擧國人民共に佛會を設く。一婦人あり、窓牖中に於て世尊を闚看す。爾の時彼の王、女の端正なるを見て卽ち珠瓔を解きて傍の侍臣をして彼の婦に送り與へしむ。時に王の左右卽ち王に白して言く。「彼の婦女は是れ國中の婦なり、王若し愛念せば直ちに往きて喚び取らん、*何ぞ與珠人を煩はして怪笑を貽るゝや」と。王是の語を聞いて手を以て耳を掩ひ、是の如き言を作さく。「咄なる哉大惡なり、云何か乃ち此の言を以て我が耳に聞かしむるや」と。卽ち偈を說いて言く。

是の呪誓言を作さん　設ひ我に異心ありて　我をして大惡を成ぜしめんも　我れ染著を
以て　珠を以て彼の女に與へず　我「意」を說けるを聽くの故なり　「業を自在主と爲す」
と』　[一]最勝業者說きたまはく　「*此に宰主の作なし　唯だ是れ業の造る所のみ　心をば
宰主と作す」と』　善業は佛の歎じたまふ所　是の如きの妙色は　更に宰主我なし　唯
だ是れ善業の作のみ』　善業は我應に敬すべく　惡業は我應に離るべし　過去に善業を
作し　果報今に於て現る』　我れ珠貫を以て　衆寶雜えて莊嚴し　額には　[二]多邏羅
（Tarala）を懸け　珠貫は白きこと雪の如し　我れ宿の功德の爲に　色欲に著するを爲さ

---

* 梵缺。

* 「何ぞ與取人…」の原文、何煩與取人貽怪笑」。難讀なるも今本文の如くに解せり。

【一】最勝業者。佛のこと。

* 佛語。

【二】多邏羅。寶石をちりばめた飾りの一種。

ゐて彼の王に詣る。王旣に見已りて婆羅門に向ひ而も偈を說いて言く。

此は是れ何人と爲すや　身色は金山の如く　威光甚だ赫奕として　猶日の世間を照すが如く』　面目極めて端嚴にして　睹る者悅ばざるなし　斯の如き福德は　應に大地の主と作るべし』　今日拘執せられて　苦厄すること乃ち是の如し　我師子座に坐すること　極めて慚耻すべしと爲す』　彼應に王位に處すべし　我の宜しき所に非ず　我の調順せざる　應に此の座に處すべからず』

時に婆羅門、是の偈を聞き已りて大王に白して言く。「此は是れ王の怨なり」。王婆羅門に問ふ。「誰か此の人を縛れる」。婆羅門言く。「此は實に我れ縛れり」。王言く。「斯の人應に汝の爲に縛らるべからず、汝妄語を爲す」と。卽ち偈を說いて言く。

彼の大逸象の如し　身力甚だ强壯なり　汝の今體羸劣にして　又兵馬の力なし』　云何か能く彼を縛せん　此の事信ずべからず　汝眞實を說くべし　虛妄の言を作す勿れ』

時に婆羅門、具さに上の事を陳べて而も偈を說いて言く。

我の所望を失へるを見て　彼の人便ち自ら縛せり　彼れ悲愍を以て縛し　以て我を救濟せんと欲せり』　是の如き善丈夫　名稱十方に遍く　猶庭燎を然すに　普く一切を照すが如し』　不善の人愚癡にも　彼を滅して餘なからしむ　庭燎の熾然する時　能く滅して遺なからしむるが如し』

爾の時大王、是の語を聞き已りて卽便ち驚いて起ち、合掌して而も言く。「善き哉や善き哉や、眞に善丈夫なり、汝他を救はんが爲に是の如き事を作せり」と。卽ち偈を說いて言く。

言ふ所の大王とは　號し名けて羅闍（Rāja）と曰ふ　世間を利益す　是の故に羅闍と名く　汝今應に王と爲りて　大地を護持すべし』　唯願はくは今我の　諸の罪咎を懺悔

是の念を作し已りて逃避して林に入る。一老婆羅門あり、道路を迷失して彼の林間に到る。菩薩問ひて言く。「何の故を以てか此の林に來至せる」。婆羅門言く。「我れ王に見えんと欲す」。菩薩問ひて言く。「何の故に王に見ゆる」。婆羅門言く。「我れ今窮困にして叉債負多し、王の施を好むを聞くの故に來つて乞索し、用以て債を償ひ貧苦を遠離せんとす、更に所歸なし、唯だ王の恩もて我を拯救せんを望むのみ」。菩薩語げて言く。「汝並びに歸り去れ、此の間に王になし、何の所にか誠を歸まん」。

婆羅門是の語を聞き已りて迷悶して地に躃る。爾の時菩薩、旣に之を見已りて深く愍を生じ、是の念を生じ已りぬ。卽ち偈を說いて言く。

我れ他を護るを以ての故に　捨て難きを盡く棄捨せり　我今棄捨し已れり　當に何物を以てか與ふべき　吾今斯の人の爲に　當に己が身命を捨つべし』

是の偈を說き已りて卽ちの時に婆羅門を扶け起し、而も之に告げて曰く。「汝愁怖する莫れ、吾當に汝をして財利を得しむべし」と。時に婆羅門是の語を聞き已りて心に喜悅を生ず。菩薩卽ちの時に草を用て索を作り、索を作り已り訖つて婆羅門に與へて曰く。「一切施とは我が身卽ち是なり」と。而も偈を說いて言く。

彼の王未だ我を得ず　心意終に安からず　汝應に此の繩を以て　我が肘を繫縛し　將ゐて彼の王の所に至つて　彼の王をして歡喜せしむべし』　當に汝に珍寶　金銀諸の財物を施すべし　汝は大富を得べく　彼の王復た歡喜せん』　生るれば必ず死あり　壽命は會ず當に盡くべし　危厄を救はんが爲の故に　復た身命を喪ふと雖も　智者は此れが爲に死す　之を名けて瓔珞と爲す』

爾の時婆羅門、是の語を聞き已りて甚だ大いに歡喜し、卽ちの時に索を以て此の菩薩を縛し、將

卷の第十五

七一、*一切施王本生

復た次に善く分別する者は乃至國土廣大に諸事備足し、諸の苦惱を如つては捨離して而も去る。

我昔曾て聞く。世尊昔菩薩爲りし時、大國王と作り、*一切施（Sarvadatta 薩婆達）と名く。貧窮乞匃にして來り索むるあれば一切皆與へ、苦危する者の爲に能く擁護と作る、一切衆生を利益せんと欲する爲なり。智慧聰猛にして又王位に處せり。

時に隣國の王、諸の軍衆を率ゐて來り交戰せんと欲す。時に菩薩王、是の思惟を作さく。「五欲の樂に著して心を調ふる能はず、六根滿し難く衆具既に多し、復た料理を須つて而も之を擁護し、此の衆具の爲に鬪諍を生ず、願はくは此の事を捨ん、應に鬪諍を生ずべからず、我應に更に身に隨ふ勝法を修集すべし」と。卽ち偈を說いて言く。

善く觀察する時に於て　智者應に分別すべし　事を爲すに思慮せざれば　後に悔ゆるも及ぶ所なし

是非を觀察せば必ず所在を知る。復た偈を說いて言く。

欲は草炬を執るが如く　亦衆の肉團の如し　欲に著せば必ず傷毀し　害は二世に及ばん』　智者は應に速かに　國土衆具等を離るべし　是の如き衆具等は　終歸必ず捨棄せん』　寧ろ今衆苦を受けんも　願はくは後世に於て　此の久長の苦を受く莫らん』

我が今の勢力を計するに　彼を摧伏するに堪任す　現在に證果を明かにせば　聲譽歎美善からんも　後に苦傷害を受けん　已れに能あるを知ると雖も　願はくは當に彼を護るべし　若し當に彼を護らずば　後に必ず身を傷害せん』

---

* 梵本缺。この本生は菩薩本緣經卷上（二）に出づ。本緣經のもの原始的なり。

* 後の文に照すに、此に「名一切施」の四字を加ふるを妥當とす。又智度論卷十二、西域記三にも出づ。

自ら厨に來詣せり」と。王是の語を聞きて身自ら出で來り、鹿王の所に向ふ。王之に告げて言く。「汝鹿は盡きたるや、云何か自ら來れる」。鹿王答へて言く。「王の擁護に由つて鹿は倍す衆多なり、來れる所以は、一妊身の牸鹿の爲に、其の命に代らんと欲して、身もて王の厨に詣れるなり」と。即ち偈を說いて言く。

　意に求むる所あらんと欲せば　其の心を滿たすに足らず　我が力もて能く辦ずる所　若し當に爲さざるべくんば　木石と何の異かあらん』　設ひ生死の中に於て　此の臭穢の形を捨つるとも　當に自ら空しく敗壞すべし』　毫釐の善を爲さず　此の身必ず壞に歸せん　己れを捨てゝ他の全きを得ば　我れ大利を得と爲す』

爾の時梵摩達王、是の語を聞き已りて身毛皆堅ち、即ち偈を說いて言く。

　我は是れ人形せる鹿　汝は是れ鹿形せる人なり　功德を具ふるを人と名け　殘惡なるは是れ畜生なり』　嗚呼有智者よ　嗚呼有勇猛者よ　嗚呼能く悲愍する者よ　衆生を救濟する者よ』　汝是の志と形を作して　即ち是に我に敎示す　汝今還び歸り去れ　及び諸の群鹿等　怖畏の想を生ずる莫れ』　我今誓願を發して　永く更に復た　一切諸鹿の肉を食はざらん』

爾の時鹿王、王に白して言く。「王若し矜を垂れんには應に自ら彼の群鹿の所に往詣し、躬自ら安慰して無畏を施與すべし」と。王是の語を聞いて身自ら林に詣り、鹿群の所に到りて無畏を施與し、即ち偈を說いて言く。

　是の我が國界內の　一切諸鹿群よ　我れ以て堅く擁護せん　愼しみて恐怖を生ずる莫れ』　我今此の林木　及以び諸の泉池もて　悉く以て諸鹿に施し　更た殺害するを聽さず　是の故に此の林を名けて　即ち施鹿林と名けよ』

菩薩鹿王、彼の鹿に語げて言く。「汝憂惱する莫れ、汝の意の隨に去れ、我自ら思惟せん」と。時に鹿聞き已りて踊躍歡喜し、還つて本群に詣る。菩薩鹿王、是の思惟を作さく。「若し餘の鹿を遣らば、當に是の語を作すべし、我未だ去るべからず、云何か我を遣るやと」と。是の念を作し已りて心卽ち開悟し、而も偈を說いて言く。

我今躬自ら當に　彼の王の厨に往詣すべし　我諸の衆生に於て　誓願すらく必ず當に救ふべしと』　我若し己が身を以て　用て蚊蟻の命に貿へんに　能く是の如きを作さば　尙大利益あり』　身を畜ふる所以は　正に救濟せんが爲の故なり　設ひ一命に代ゆるを得んに　身を捨つること猶草芥のごとからん』

是の偈を說き已りて卽ち所領の諸の群鹿等を集めて言く。「我汝等に於て諸の足らざるあり、我が懺悔を聽せ、我汝を捨てんと欲す、他命に代らんを以て王の厨に向はんと欲す」と。爾の時諸鹿、是の語を聞き已りて盡く各悲戀して而も是の言を作さく。「願はく王よ、往く莫れ、我等代りて去かん」。鹿王答へて言く。「我立誓するを以て自ら當に身を去るべし、若し汝等を遣らば必ず苦惱を生ぜん、今我れ歡喜す、不悅あるなし」と。卽ち偈を說いて言く。

離欲せざる捨身は　必ず當に生處あるべし　我今彼を救はんが爲に　捨身す、必ず勝に轉ぜん』　我今此の身を知る　必ず當に敗壞あるべきを　今救愍の爲の故に　便ち是の法もて捨身す　法因と爲るを得ば　云何か歡喜せざらん』

爾の時諸鹿、種々に諫喩し、遂に疲極まるに至りて彼をして止心あらしむ能はず。時に彼の鹿王、王の厨に往詣す。諸鹿の擧群幷に提婆達多の鹿群、盡く鹿王を逐ひて波羅㮈に向ふ。旣に林を出で已るや群鹿に報へ謝して所止に還らしめ、唯だ己れ一身もて王の厨所に詣る。

時に彼の厨典の先に鹿王を見し者、卽便ち之を識りて往いて王に白さく。「彼の鹿王と稱せる者

ば、鹿日に滋多に、王肉を乏かず」と。王卽ち然許す。
爾の時菩薩の鹿王、彼の鹿王提婆達多 Deva=datta に語げて言く。「我今爾と共に日に一鹿を出して彼の王の食に供せん、我今日に於て一鹿を出し送らん、汝明日に於て復た一鹿を送れ」と。共に言要を爲し、迭互に鹿を遣りて多時に至る。後一時に於て、提婆達多鹿王、一牸鹿を出す。懐妊して産に垂んとす。提婆達多に向ひて哀を求め命を請ひ、而も是の言を作さく。「我身今死せんこと敢て辭託せず、須らく我が産むを待つて厨に供せんには慢まざるべし」と。時に彼の鹿王、其の語を聽さず、汝今但だ去れ、誰か當に汝に代るべき」と。便ち瞋忿を生ず。時に彼の牸鹿、旣に瞋責を被りて是の思惟を作さく。「彼の鹿王は極めて慈愍と爲す、我當に歸請して兒の命を脫免すべし」と。是の思惟を作し已りて菩薩の所に往き、前膝もて地に跪きて菩薩鹿王に向ひて具さに上の事を以てす。彼の鹿王に向ひて而も偈を說いて言く。

我に今救護なし　唯願はくは我を濟拔したまへ　多く諸の衆生あるに　我今獨り怖れ迮む　願はくは哀憐の愍を垂れて　我が苦難を拔濟したまへ』　我更に恃む所なし　唯だ來つて汝に歸依す　汝常に利益を樂ひ　諸の衆生を安樂にす』　我今若し死に就かば　兩命俱に全からず　今願はくは我が胎を救ひたまへ　一たび全命を得しめよ』

菩薩鹿王、此の偈を聞き已りて彼の鹿に問ひて言く。「汝の王に向ひて自ら陳說を爲せるや、未だしや」。牸鹿答へて言く。「我歸向を以てするも我が語を聽さず、但だ瞋責せらるらく、誰か汝に代る者ぞやと」と。卽ち偈を說いて言く。

彼れ瞋りて呵責を見はし　救愍の心あるなし　勅せらるらく速かに彼に往け　*誰か汝に代る者あらんやと』　我今汝に歸依す　悲愍もて體と爲せばなり　是の故に應に我をして　一命を免るゝを得しむべし』

＊「誰」。大正藏「唯」に誤る。

是の偈を說き已りて卽便ちに牙を以て獵師に施與す。

何の因緣を以て而も此の喩を引くや。過去無量百千の身中、常に是の如き難捨の施を作し、本と誓願を作して願果を成ぜんと欲し、諸有衆生の受くる所の苦惱をして本道を得せしめんと欲し、人をして解りて自ら守り、清淨の心もて信敬を生ぜしめんと欲す。是の故に此の方喩を引く。

七〇、*鹿王本生

復た次に、菩薩大人、諸の衆生の爲に身命を惜まず。

我昔曾て聞く。雪山の中に二鹿王(Mṛga-rāja)あり、各群鹿を領して其の數五百、山に於て草を食ふ。

爾の時波羅㮈(Bārāṇasī)の城中に王あり、梵摩達(Brahmadatta)と名く。時に彼の國王雪山中に到り、人をして圍を張らしめ、彼の雪山を圍む。時に諸の鹿等盡く圍中に墮し、歸依して有脫を得べき處なく、乃至、一鹿として脫するを得べき者あるなし。

爾の時鹿王、其の色班駁ありて雜寶を塡むるが如し。是の思惟を作さく。「何の方便をか作して諸鹿等をして此の難を免るゝを得しめんか」と。復た是の念を作さく。「更に餘の計なし、唯だ直ちに王に趣かん」と。是の念を作し已りて逕ちに王所に詣る。

時に王見已りて其の左右に勅すらく。「愼しみて傷害する莫れ、恣に來らしむるを聽せ」と。時に彼の鹿王、既に王所に詣りて而も是の言を作さく。「大王よ、遊戲を以て諸の群鹿を殺す莫れ、用て歡樂の爲に此の事を爲す勿れ、願はくは王よ、哀愍して群鹿を放捨せよ、傷害せしむる莫れ」と。王鹿王に語ぐ。「我れ鹿肉の食を須ゆ」と。鹿王答へて言く。「王若し肉を須めば我當に日々に一鹿を奉送すべし、王若し頓かに殺せば、肉必ず臭敗して久しきに停むるを得ざらん、日に一鹿を取ら

* 梵筴、紙本斷簡、十一、十二、十三葉。又、六度集經卷三に出づ。mahāvastu, I (Nyagrodha-jātaka); Dhammapada aṭṭhakathā 及び Jātaka の中にもこの本生出づるも二鹿王の名稱何れも異れり。

くこと極めて大苦なり』　痛を當今に受くるも　內心は菩提に向ひ　最勝の果を求めて
　終に退轉の意なし」と』

復た天神あり、彼の天に語りて言く。「此の如き菩薩は終に退轉なし」と。復た偈を說いて言く。

　子の拔牙の苦を知つて　地獄を悲念す

時に彼の象王、旣に牙を拔き已つて默然として住す。爾の時獵師、是の思惟を作さく。「牙を拔いて地に著く、將て悔ゆるなきや、而も我に施さざるや」と。象王その念を知り安慰して共に語り、卽ち偈を說いて言く。

　牙は拘勿頭の如く　亦白き藕根に似たり　六牙盡く汝に施さん　諸牙中の最上なり
汝に施して安樂ならしめん』　小らく我の責心を待て　漸にして苦痛を息ましめ　我をして汝の所に於て　敬重の信心を得せしめよ』　假使汝の意に　我は是れ極惡人なり
　殺盜婬もて汝を欺き　僞詐不善具れりと謂はんも　我の汝の意に答ふるを聽けよ』
汝の作すべき衆惡と　害心と弓と利箭と　我皆忘れて憶えず　唯だ袈裟を敬ふことを憶ひて　之を見て心に敬信するのみ』　施者及び受者に　淨あり不淨あり　我今是れ施主として　悉く淸淨を具す』　我が理を料る心に待つて　果報を廣大ならしめて　乃ち當に汝に施すべし』

爾の時象王、獵師に語げて言く。「此の袈裟は是れ離欲の幢(相)なり、我れ尊重敬心もて之を視るに由つて、鼻を以て牙を擎げて獵師に授與す」と。卽ち偈を說いて言く。

　我今眞に實語す　毒箭もて我身を射るも　微かの恨心あるなし　惡を加へて汝に報ゐんや』　是の實語の因を以て　速疾に菩提を證し　諸の衆生の　是の如き苦惱を度脫せん』

與へん　悉に汝拔きて斷ち取れ』　我れ濟救を以ての故に　此に由つて是の形を受く
一切我皆捨せり　須むる所は意の隨に取れ』　我れ已れを利せんが爲には　速かに能
く涅槃を取り　諸の衆生の爲の故には　三有の中に身を受け　諸の種智の爲の故には
悲救もて以て因と爲す』

獵師慚恥して是の如き言を作さく。「王の爲に使はれて來つて汝の牙を取る」と。象王答へて言く。「汝の意に隨つて取れ、疑難を生ずる勿れ」と。獵師答へて言く。「我實に汝の牙を拔き取る能はず」と。即ち偈を說いて言く。

汝慈心盈滿す　我れ彼の慈父を畏る　若し汝の牙を拔かば　我が手必ず墮落せん

爾の時象王、獵師に語げて言く。「汝若し畏れなば、當に汝が爲に拔くべし」と。是の語を作し已つて鼻を以て牙を絞り、牙根極めて深ければ久しくして乃ち拔き出づ。時に彼の象王、血大いに流出す。即ち偈を說いて言く。

牙を拔く處に血出で　膊より而も流れ下る　象王に極めて福利あり　其の白きこと鉢頭
摩　拘勿頭花等の　積聚して大聚を爲せるが如し』　時に彼の諸花聚　白きこと象王
の身の如く　又大石山を　白雪もて其の上を覆へるに似たり　譬へば高山の頂より
赤朱の流れ來つて下るが如し』

爾の時象王、苦痛戰掉するも尙自ら安慰す。時に一天あり、即ち偈を說いて言く。

心當に堅く安住すべし　愚癡の悶を爲す莫れ　當に苦惱の衆を　云何か濟拔すべきかを
觀ずべし』　世界皆死あり　汝當に拯拔を爲すべし　當に堅牢の志を持すべし　憂惱
の心を生ずる莫れ』　天人阿修羅　乾闥婆夜叉　虛空中に滿ち　未曾有なりと歎說す』
天神是の言を作さく　「昔より來た極めて希有なり　能く難苦の事を爲す　牙を拔

かず」と。涕泣啼哭す。象王問ひて言く。「汝何の故に哭くや」。獵師答へて言く。「逼惱するの故に哭く」。象王語げて言く。「我れ諸象の汝を傷害せんを恐るゝの故に汝を腹下に喚べり、我が身體の汝を壓するに非るや」。答へて言く。「不とよ、身もて我を壓せるに非ず」。象王又復た語げて言く。「此の牸象の惡語を出して汝を觸惱し、汝をして哭かしむるに非るや」。答へて言く。「亦惡言の來りて我を惱ますなし、乃ち＊汝に今大慈悲の道德あるを以ての故なり、我れ惡心を以て毒箭もて汝を害せるに、汝乃ち慈心を以て諸象の而も傷害を見さんかを恐畏して我を腹下に覆へり、我此の事を以て我が心を逼惱す、畏の故に哭くのみ」と。卽ち偈を說いて言く。

我今毒箭を以て　象王の身を傷害せるに　汝慈の道德を以て　而も用て我心を傷めり
害心の傷は愈ゆべきも　今汝の道德を傷けたる　愚心の瘡は復し難し』　汝の德は大海の如し　誰か說いて能く盡さしめんや　汝の命を傷害せば　安慰して慈もて覆護す』
若し說いて而も之を言はんに　我が形は是れ人なりと雖も　都て慈仁の德なし　空しく是の屍骸あるも　畜生よりも劇しきあり　相貌は人に如似て　惡を作すこと畜生より劇し』　汝は獸身を受くと雖も　道德は人中の上なり　形相は人に非ずと雖も　道德は乃ち是れ人なり』

菩薩の象王、獵師に問ひて言く。「汝速かに我に答へよ、汝何事を以て而も來つて我を射しかを」と。獵師答へて言く。「王の爲に使はれ、汝の身分に於て少しく取る所あり、我自らの心にて、來つて汝を傷害するには非ず」と。象王答へて言く。「如し所須あらば、汝今疾かに取れ」と。爾の時象王、卽ち偈を說いて言く。

汝に所須あらんと欲さば　手を張つて速かに之を受けよ　諸の菩提＊心ある者は　一切に悋惜なし』　汝の所須の者に隨つて　悉く當に汝に捨與すべし　牙を須めば卽ち牙を

＊「汝」。三本によりて加ふ。

＊「提」。三本、麗本は「薩」。

に非ず』　銅に眞金の塗られしが如きは　陶練して始て雜なるを知る　諸の凡夫を誑惑
するに　愚者は眞と謂爲へり　智者は善く分別して　是が金もて銅に塗れるを知る』
惡心弓箭の故に　是に以て我を傷害す　袈裟は善寂の服にて　乃ち是は惡心の衆なり
若し善く觀察すれば　袈裟は恒に善服なり』

爾の時牸象、甚だ瞋忿を懷いて象王に語げて言く。「汝の言や大いに善きも、我忍ぶ能はず、爾の語に隨はず、彼の人を取つて以て支節を解かんと欲す」と。菩薩の象王、牸象に語げて言く。「結使を治せざれば心則ち是の如し、汝瞋恚もて是の如き語を作す莫れ、應に彼に於て忿怒を生ずべからず」と。卽ち偈を說いて言く。

如し人鬼心に入りて　癡狂して醫を毀罵せんに　醫師は鬼を治して　病苦の人を責めず』
結使も亦鬼の如し　無明に覆はるゝの故に　能く貪瞋癡を生ず　但だ當に煩惱を除くべし　何ぞ彼の人を責むるを須ひんや』　若し我れ菩提を成ぜんには　名稱三界に遍く　諂僞と諸の結使あらんも　念定勤精進もて　以て結使を滅ぼさん』　智錐の鋒利なるを以て　彼の諸結を斷絕し　必ず當に乾竭せしめ　燒滅して餘なからしむべし
我れ將來には必ず當に　苦惱之を殘滅すべし』

菩薩の象王、是の語を說ける時、牸象默然たり。時に諸の群象、咸な皆來り集る。菩薩の象王、是の思惟を作さく。「彼の諸象等、彼の人を傷害すること無きを得んや」と。是の念を作し已りて獵師の處に向ひ、彼の獵人に語ぐらく。「我が腹下に向へ、我汝を彼の諸象等より覆護して、傷害を加ふるより脫せしめん」と。卽ち諸象を遣りて各皆去らしめ、獵師に語げて言く。「汝の須むる所は今汝の取るに隨はん」と。

時に彼の獵師是の語を聞き已つて是の思惟を作さく。「我の如きは今は慈心あるなく、彼の象に如

復た次に僧功徳を憶ひて善く能く觀察せよ、乃し身命を捨つるとも、猶淨心を發せ。

我昔曾て聞く。釋迦牟尼の菩薩爲りし時、六牙（Saddantai）の白象と作りたまふ。時に王夫人、象に於て怨あり、卽ち募りて人を遣はし、象の處を指示して語げて牙を取らしむ。時に遣されし所の人、彼の象の所止する處に往至し、六牙の白象を見るに猶[一六]伊羅撥象（Erāpattra-nāga）の如し。諸の群輩と離れて一牸象と別に一處に住す。卽ち偈を說いて言く。

『蓮華優鉢羅　清水は大池に滿つ　是の如きの方所に　龍象を見るを得たり』

[一七]拘陳（Kaumudini）か白色の花か　其の狀乳か雪かの如く　皆白色に同じて　猶大白山の如し』

脚あり能く行動す　彼の大象王　其の色は猶月の如く　六牙は口より出づ』

照曜甚だ莊嚴に　白蓮華の聚の如し　近づきて彼の象の牙を看るに　猶白藕根の如し』

時に彼の獵師、身に袈裟を著け弓箭を掖挾して、屛ひ樹ち徐ろに步きて彼の象の所に向ふ。爾の時牸象、彼の獵師の弓箭を掖挾せるを見て象王に語げて言く。「彼と相害せんを脫れん」と。象王問ひて言く。「彼弓箭を挾むに何の服を著くると爲すや」と。牸象答へて言く。「身に袈裟を著く」。象王語げて言く。「身に袈裟を被る、何の怖畏する所ぞ」と。卽ち偈を說いて言く。

是の如きの幢相は　外物を害せず　內に慈悲心ありて　常に一切を救護す』　是の故に彼の人の所に　應に怖畏を生ずべからず　見る者安隱を得　寂然として勝妙を得ること　月に淸涼あるが如し　終に熱に變らず』

爾の時牸象、是の偈を聞き已りて更に驚き疑はず。時に彼の獵師、稠林の間に入りて其の便りを伺候し、卽ち毒箭を以て象王に射中す。時に彼の牸象、象王に語りて言く。「爾れ袈裟には必ず慈悲ありと稱さる、云何か今は此の如き事を作すや」と。爾の時象王、卽ち偈を說いて言く。

此は是れ解脫の服なり　煩惱の心もて作す所　慈悲を遠離するとも　悉くこの衣服の過

【一六】伊羅撥象。　伊羅鉢龍王に同じ、卷三第十一章の註を見よ。

【一七】拘陳。　月光。

に次す。一切の大地莊嚴映飾すること未曾有にして、波闍波提比丘尼の作す所の莊嚴の如し。瞿曇彌涅槃に入るの時、佛世尊法主、現在に諸の聖衆を集めたまふ。*舍利弗目連等の入涅槃(?)は佛の涅槃に在す時なり、佛身入涅槃の時には(?)既に舍利弗目連等なく、皆以て盡くなし。是に由つての故に其の莊嚴する所、波闍波提に及ぶ者なし。此の牀を寬博の處に安置し、諸の香薪を積みて用て以て積と爲し、此の五百比丘尼等の屍を以て以て上に置き、種々の牛頭栴檀と諸の雜香等を以て用て屍上を覆ひ、復た衆多の香油を以て以て其の上に澆ぐ。

爾の時尊者阿難、諸の比丘尼の既に然火せるを見已つて悲泣懊惱し、而も偈を說いて言く。

是の次第の如くんば　如來も亦久しからずして　將に寂滅に入りたまはん　火の林を焚燒するに　獨り一大樹在つて　火炎もて枝葉を燒く　勢として久しく住するを得ざるが如し』　世間皆苦惱に　[一四]演法三界に滿つるに　三界の尊滅盡す』　一の念法無くんば　無量劫に聚集したまへる　是の勝法の蜜を得んや　聲聞の蜂は食を集むるを　佛涅槃に入りたまはゞ　誰か當に法の蜜を與ふべき』　法盡く滅びんは久しからず　佛の形像も塔寺も盡きん　畫像人すら尙無し　況んや法服する者あらんや』　諸の欲を離れざる者　涕泣極めて懊惱し　離欲の者は法を觀じて　[一五]耶旬(Jhāpita)し燒き已り竟つて　骨を收めて用て塔を起し　衆生をして供養せしむ』

時に人あつて疑ふらく。「誰か應に塔を起して而も供養を修むべきや」と。爾の時世尊、疑を斷たんと欲するの故に、三種の人の應に塔を起てゝ供養すべきを說きたまふ。何をか三種といふや、佛と漏盡阿羅漢と轉輪聖王、是を三種と名く。

六九、*六牙白象本生

* 以下文のまゝに通讀したるも義意通じ難きものあり、恐らく「舍利弗目連等の(涅槃に入れる)は」の意にて「入涅槃」の三字を脫せるならん。次句又同じ。

【一四】演法。佛の口演せる法、卽ち三界は是れ無常・苦・無我なることが三界に滿ちつとなり。

【一五】耶旬。古音ジャピン、卽ち闍毗、茶毗に同じ、死屍を焚燒すること。

* 梵本紙片斷簡、第十、十一葉。大正藏に品次の番號を脫す。本品の物語は雜寶藏經卷二、六度集經卷四巴利本生卷一、有部藥事卷十五に出づ。

槃に入る」

爾の時、梵天王諸の梵衆を將ゐ、釋提桓因六欲諸天(saṭ kāmāvacara-deva)を將ゐ、諸大天神及び諸勝尊・龍・夜叉神・佛所に來詣し、悉く皆合掌して佛に白して言さく。「世尊、如來は愛結を離るゝを以て當に世間に順じたまふべし、我輩をして爲に何等をか作さしめんと欲したまふや、是れ、佛世尊の最後に親しみたまふ所なり」と。爾の時如來、時の宜しき所に隨つて各勅して作さしめたまふ。

佛阿難に告げたまはく。「遠近に唱語せよ、佛母を供養せんと爲ば、悉く皆來り集れと」と。時に尊者阿難、聲を擧げて悲號し、而も是の言を唱ふらく。「諸の是れ佛弟子たる者、遠近を問はず皆我が語を聽けよ、應に佛の教に隨つて悉く來り集聚し、佛の言教を聽くべし、彼の我を乳哺長養せる者、最後の身もて今涅槃に入ること油盡きて燈の滅するが如し、諸の信心ある者、是れ弟子として佛母の身を供養せんを知らば、速疾に來り集れ、人天の中に女身あるなく、是の如きの者、能く佛身を乳養せり、是の如くに【三】生佛を養へる者なし、是の故に諸の比丘、應に盡く來り集るべし」と。

時に四方遠近の諸比丘等、牛頭栴檀を齎して虛空の中に從ふこと、鷹鶻王の如く、日の照雲に入つて虛空に遍きが如し。諸の比丘尼の虛空に滿つるや、其の狀亦爾り。時に四天王は波闍波提に牀の四足なるを捧げ、帝釋、梵天等も亦五百比丘に*牀を捉る。爾の時諸牀各幢幡を竪て、天の曼陀羅華は猶華幕の如く、諸尼の上を覆ふや猶禪窟の如し。諸の幢幡を竪てゝ大地に遍滿し、天繒の旛蓋も亦空中に滿つ。色貌若*千種、天は諸の華臺を雨らし、亦復た末香を雨し、香烟は雲の如くして虛空に彌滿し。天の諸樂等其の音充塞す。佛は後に舍利弗・目連・難陀・羅睺羅・阿那律・阿難等を隨從したまひ、梵王等の諸天・阿修羅・緊那羅・摩睺羅伽・天・龍・夜叉は佛後に圍遶す。

爾の時世尊、行金山の如くして波闍波提比丘尼の牀前に在し、五百比丘尼の牀は波闍比丘尼の後

【三】生佛。肉身佛のこと。

* 「牀」字、大正藏に脫。

* 「千」。恐らく「干」の誤傳。

無常なり　無常の火は熾然して　三有を燒滅す」と』　我を愛する者極めて多く　我の愛する者も亦少からず　我今皆能く　此の如き愛著等を捨てん』　生死黑闇の處輪迴嶮阻の中に　親々として更に相戀ひ　惡見もて　*相乖離す』　無常に悲慼なく破壞して別離せしむ　恩愛に別離なくば　應に解脫を求むべからず』　展轉として相親愛し　相戀ひて轉た善く厚きも　畢竟じて必ず別離せん　是の因緣を以ての故に　智者は解脫を求め　都て遺戀する所なし』

爾の時瞿曇彌、種々の因緣もて涅槃を讃じ、已つて默然として而も住す。佛世尊を辭して涅槃に入ること、實に言に違はず、言、作に稱はんと欲す。諸の比丘尼は念を繫けて前に在りて[一〇]初禪に入り、是の如く次第して[一一]滅盡定に入り、逆順に緣起を觀じ已つて種々の神足を現じ、卽ち偈を說いて言く。

身は地上に處して　手を引いて日月を捫り　身を變じて隱沒せしめ　虛空の中に踊出す』

一身を多身と爲し　多身を一身と爲し　身に大光明を放ち　能く大地を動かす』

地に入ること水に赴くが如く　水に入ること地を履むが如し　身に大光明を出し　又復た大雨を注ぐ　如意神足の故に　能く斯の如き事を現はす』

餘の五百比丘尼も亦斯の如き諸の大神變を現じ、如來佛法力を顯さんが爲の故に悉く皆神變を現じて身を虛空に踊らす。猶頹雲の而も大雨を作すが如く、亦庭燎の虛空中に在つて風吹いて四散するが如くして、身上水を出し身下火を出し、身上火を出し身下水を出す。卽ち偈を說いて言く。

各千の火光を出し　圍遶して自ら莊嚴し　身上火光を出し　身下大雨を注ぐ』　虛空に諸の華の滿つること　猶瞻蔔の枝の如く　衆花を水上に積んで　種々に神變を現じ已るや』　諸の檀越等をして　歡喜心を發さしめ　薪盡きて火の滅するが如く　[一二]無餘涅

＊「相」三本、麗本は「於」。

【一〇】初禪(prathama-dhyāna)。四禪の第一。

【一一】滅盡定(nirodha-samāpatti)。一種の假死狀態に入る禪定で長きは七日に至るといふ。意識を滅盡せる定の謂。聖者の死に入る際は皆この定に入るといふ。

【一二】無餘涅槃(pāli anupādisesa-nibbāna)。苦報の依處たる肉體の約束までを捨てたる涅槃、一面より云へば肉體を超越せる完全なる煩惱の臭滅であるが、一面よりいへば佛陀の死を形容する言葉である。

猶電明の如く、亦眞金の如し、精進の鎧を被り、定を以て護りと爲し、智慧の箭を以て能く毛の百分の一のごとなるを射たまふに、射る所皆中る、魔の軍衆を壞りて勇健に畏れなく、人中の大龍、人中の眞濟たり、定の如意足は無量無邊にして色なく、八正の道を宣示し分別して愛欲瞋害の想を斷除し、誓願堅固に志意安住して終に輕躁ならず、優曇鉢花の甚だ値ふべきことの難きが如し、如來の功德は大地及以び微塵百千萬億よりも過ぎ、八正道を以て結使を洗除したまふ、諸の衆生を濟ひて生死の河を度し、彼岸に到りて能く方所を示す、三十二相八十種好は以て自ら莊嚴すること猶綵畫の如く、智の金剛杵もて一切の外道論を摧滅し、能く解脫涅槃の妙方を示したまふ、法の自在を得て世間に著せず、諸の[七]入處及び諸の煩惱に於て能く對治を說き、勝辯才を得て善く能く一切諸法を分別したまふ、諂僞幻惑の事を耘除し、布施・持戒・忍・進・定・慧皆彼岸に到りたまふ、阿私陀(Asita)仙の尊敬する所、名は十方に聞え、[八]最後身に住して既に自覺了して衆生を開悟したまふ、功德の伏藏、功德の須彌、功德の大海にして無量の名稱、無量の辯才あり、恩を知つて恩を報じたまふ」と。

佛を讃じ已り、竟つて佛を禮して退き、諸の五百比丘尼を將ゐて閑靜處に入り、命壽を捨して[九]半加趺坐す。時に優婆夷、最後に比丘尼の處に至つて比丘尼の足を禮し、聲を擧げて號び哭き、即ち偈を說いて言く。

我等に諸過あり　盛智もて我が悔を聽させたまへ　我等終に復た　更に相睹見するを得ず

波闍波提比丘尼、離欲を以ての故に心意勇悍、手を擧げて優婆夷を摩で、而も之に語げて言く。「汝等應に愛戀の心を遂ふべからず、恩愛の聚會には必ず離別あり」と。即ち偈を說いて言く。

佛說きたまはく、「*聚會する者に　必ず當に離別あるべし　一切有爲法は　悉く皆是れ

【七】入處。十二入なり。

【八】最後身。次生に佛となるべき菩薩をいふ。

【九】半加趺坐。兩足を兩髀上に載せて坐するを全跏坐といふに對し、一足のみを他の髀上に重ねて坐するを半跏趺坐といふ。

＊　佛語。

妙の道を示導する者・　又常に能く　諸法の眞實相を觀察して　大照明と作る者・　能く諸の黑暗を除き　能く忿諍を滅する者・　法庭に燎燭を然して　一切を照す者・　能く衆に燈明を與へ　又與明に從ふ者・　大丈夫を調御する者・　大解脫に歸する師・　十力を具足する者・　四無所畏を具する者・　成就して退轉せざる者・　說法又虛しからず　必定して利益する者　一切の諸衆生を・　釋中の師子吼者・　堅實にして精進の中に於ける　勝妙の精進者・　能く大悲を具する體・　世間の八法の　汚す能はざる所の者・

に

*釋梵四天王摩醯首羅王・閻王(Yama-rāja)　婆樓那(Varuṇa)・財富自在者・是の如き勝人等も、合掌して共に佛を讃ず、和合放捨美妙甚深に、畏なく衆に勝れ眞實を顯發し、能く爲に示導し種々に說法す、善く一切飛鳥の音聲を解し、名稱は虛空に滿つ、頂生(Mūrdha-jāta)憂鉢遮那(Upacāru)拔羅陀(Bharata)是の如き等の諸大王の種姓相續げる中に出でゝは、如來は日月の如く、天人阿須羅の爲に供養せらる、[五]七覺意を得て無明の闇を除く者、又能く三寶の勝幢を建立するあり、如來の面貌は猶金山の頂のごとく、光明照曜す、是の上丈夫を名けて蓮華と爲す、丈夫の中の拘物頭華(Kumuda)、丈夫の中の分陀利華(puṇḍarika)なり、能く貪欲・瞋恚・愚癡、諸有結使を斷ち、及以び[六]四縛・憂悲苦惱・縱逸・憍慢・鬪諍・忿怒・自貢高等、如來世尊は悉く永く斷ちたまふ、欺僞・博奕・競勝・欺他、共に相ひ言訟し忿惱し別離し、外道師の捲手祕法の如き、諸の惡結の習は悉く斷つて餘りなし、憍慢の幢を倒して法の勝幢を建て、能く法輪を轉じて淚乳血の海を悉く乾竭せしめたまふ、禪定の海を得ること深くして崖限なく、能く內外一切の財物を捨てゝ惜著する所なく、怨親の中に於て其の心平等なり、佛身の微妙なること融金聚の如く、舌相の廣長なることは蓮華葉の如し、垢穢あるなく淸淨鮮潔に、其の腹は平滿にして其の臍右旋し、猶香奩の如し、圓光一尋にして

---

* 以下「財富自在者」に至るまでを原本に偈に加へて四偈とするも、本來は次の散文に接續すべきものなるを以て、今私に之を訂せり。共に瞿曇彌の語なり。

【五】　七覺意(sapta-bodhyaṅga)。定慧均等して菩提(覺)を生ぜしむる法として七法を擧ぐるものこれ。擇法・精進・喜・輕安・念・定・捨の七覺支なり。詳しくは本國譯の俱舍論等の中に出づべし。その索引によつて檢すること。

【六】　四縛(catur-samyojana)。欲愛身縛・瞋恚身縛・戒盜身縛・我見身縛の四。

を獲たり』　佛の善知識に依つて　是の故に今獲得す　汝佛の法藏を守りて　極めて當に善く護持すべし』　今日は是れ最後なり　汝を見るを得る時　我今涅槃に入らん道に乘じて而も往至す』　佛は衆中に在つて噓したまひ　時に我れ老壽を唱ふ　佛は不敬禮を說きたまふこと　此の事上に說くが如し』　佛亦僧伽を擁護したまひ　闘滅せしめんと欲したまはず　我亦願樂せず　而も解脫處に入る』　無常の大風至つて　譬聞の樹を吹き　根拔けて而も地に倒る　無常の金剛風は　能く須彌山をも散ず』　多陀阿伽（Tatha-āgata＝如來）の日　則ち無明の闇を離る　曇佛世に在せば　妙勝の道と涅槃と　十力所說の法とは　法明金のごとく顯照し　異道の論を壞破せん』　日光の普く滿ち照るが如く　佛德も亦復た然り　今是の妙時に値へり　是の故に身を捨てんと欲す』

爾の時阿難、是の偈を聞き已りて尋で卽ち淚を收め、復た偈を說いて言く。

汝今意志大なり　我亦憂念せず　猶深林中に　蕀刺もて衆苦多きが如し』　又牸象の走りて　林を出でんに苦惱を離るゝが如し　汝今亦是の如し　諸の世間を走り離る』今憂愁すべきは　憍慢と及び愚癡と　諸惡結使の火の　三有を焚燒せる中に』　汝等先づ涅槃し　我疑ふ佛世尊も　猶大火聚の　焰盡くれば則ち火の滅する如からんことなり』

爾の時摩訶波闍波提（Mahāprajāpati＝瞿曇彌）比丘尼、合掌して佛に向ひ、尊顏を瞻仰して偈を以て讚じて曰く。

南無し歸命す佛・　如來・大世尊・　眞實語者・諦語者・　義語者・法語者・　利益不虛語者・　能眞寂滅語者・　無我々語者・　過一切語者・　圓滿足眼者・　將來せる　勝

若しは大若しは小なる　然も我悉く滿足しぬ　今は涅槃せんと欲して　佛に白して知らさしむ』　足は蓮華の葉の如く　相輪盡く炳著たり　願はくは我が心の足らんが爲に最後に以て頂禮せん　最後の恭敬　深信に而も頂禮せん』　頂禮する婆伽婆の　身は眞金聚の如し　願はくは欝多羅(上衣)を開いて　身を現して我に見せしめたまへ　善く如來の身を觀て　我今寂滅に趣かん』

爾の時如來の身に三十二相八十種好を具し、欝多羅僧を開きたまふ。時に瞿曇彌已に佛身を見て佛足に頂禮して白して言く。「世尊、我涅槃に入らん」と。佛瞿曇彌に告げたまはく。「汝涅槃せんと欲するか、我汝の意に隨はん、衆僧に減少なきも、月の盡きんと欲して漸々に沒する時に遺餘あることなきが如く、弟子先に去いて我最後に往かん、諸の商人の如し、商人の道に在るや商主後に隨ふ」と。

時に五百比丘尼佛世尊を遶ること須彌を遶るが如く、既に佛を遶り已りて如來の前に在りて立ち、尊顏を瞻仰して厭足あるなし。法聲を聽聞するも亦復た厭くなく、滿足を得已りぬ。法味を護るの故に、難陀・羅睺羅・阿難陀・三摩提拔陀(Samiddhi-bhadra?)に頂禮して懺謝を求む。一切の諸聖衆は猶掉がざるが如く、寂靜默然として住せり。唯*阿難・羅睺羅・三摩提拔陀、阿難のみ結未だ盡きず、心慈順の故に哀しみて止むる能はず。風無き樹の如く合掌して涙を墮す。

爾の時瞿曇彌、尊者に白して言く。「阿難よ、尊者は多聞にて見諦したまへり、云何か今は猶凡夫の如かる、如來常に一切の恩愛に皆別離あるを說きたまへり」と。復た尊者に白して言く。「汝我が爲に佛世尊に請はざりしなば、我今云何か而も此の法を得んや」と。而も偈を說いて言く。

汝の請求に由るの故に　我等出家を得たり　汝今實に空しからず　皆實の果報を獲ぬ』

一切外道の師は　未だ曾て是の處を得ざるに　女人の身中にして　能く甘露の迹

＊難陀の誤りならん。

【四】『阿難三摩陀　及與び阿難陀　是の如き等の世に在る中に　我當に涅槃に入るべし』
牟尼は安穩を得たまひ　比丘僧和合し　外道の翅を壞き　邪道亦退散して　一最種未だ絕えず　我今涅槃に入らん　正に是れ最も好時なり』　我れ心に解脫を願ひ　今以て滿足するを得たり　汝等今何の故に　悲泣して而も淚を墮すや』　歡喜の皷を擊てよ　其の音未だ斷絕せざるに　我れ解脫の坊に趣かん　今正に是其の時なり　汝等應に愁ふべからず』　汝等若し我を念ぜんには　應當に勤めて法を護るべし　法をして久しく住まらしめば　卽ち是れ我を念ずなり　是の故に應に精勤すべく　當に勤めて正法を護るべし』　佛は憐愍を以ての故に　女人の出家を聽したまへり　汝等宜しく戒を護るべし　人をして罵辱せしむること勿れ　乃し後世に至るまで　女人を罵らしむること莫れ』

爾の時諸の比丘尼、餘の比丘尼及び諸の優婆夷を安慰す。時に五百比丘尼、猶行める花樹の如く佛所に往詣し、瞿曇彌鬱多羅僧(Uttara-samghāti 上衣)を正して長跪合掌し、而も偈を說いて言く。

我今是れ佛の母　如來は是れ我が父なり　我れ法の流より生れ　我れ乳もて佛の色身を養へり』　佛は我が法の身を養ひたまひ　我は世尊に乳せり　渴を止むること須臾の間なるに　佛は法を以て我を乳したまひ　經常に飢渴なく　永く恩愛を斷ちたまへり』
我今以て略說す　我れ乳養を以てすと雖も　恩を報ずること以て極めて大なり　願はくは一切の女をして　子を得ること猶佛の如からしめん』　羅摩(Rāma)と　*阿純(Arjuna)と　婆須(Vasu)等の諸母は　有の海中に處して　輪廻して終始なきに　我が童子の緣に於て　生死の海を度するを得たり』　女人の極めて貴きは　名稱ある人帝の婦と一切種智の母となり　此の名は得べからざるに　我今已に獲得せり』　意に願へるは

【四】「阿難三摩陀」は後の文に照すに「三摩陀拔陀」の誤傳なるが如し。

＊　巴利本生經（卷四、七九頁以下）に出づる天胎妃(Devagabbhā)の子なるべし、次の婆須とは兄弟なり。

時に五百比丘尼、悉く皆瞿曇彌比丘尼の所に往詣す。時に瞿曇彌、諸の比丘尼に語げて言く。[三]「四大毒蛇の篋、久しく居るべき難し、是の故に我今涅槃に入らんと欲す、此の神に柔軟心あり、是の故に墮淚して汝の衣上に在けり」と。五百比丘尼言く。「我等同時に出家せり、我等を捨てゝ先に涅槃に入ること莫れ」と。卽ち偈を說いて言く。

我等共に出家し　倶に無明の闇を離る　我等今共に往かん　涅槃安*穩の城に』　生死苦惱の衆　有の稠林に處す　云何か而も獨り往いて　甘露の迹に趣く』　汝等しく今に於ては　云何か盡く涅槃する　汝若し涅槃を欲さば　我亦汝と共に去らん』

爾の時瞿曇彌、五百比丘尼と坐より而も起ちて本處を離れ、卽ち住處神と別るらく。「我今最後に於て屋と別れ去らん」と。天神言く。「汝何くにか去らんと欲する」。時に比丘尼言く。「我當に彼の老いず死せず病なく苦及び愛憎なき處に詣るべし、亦愛別離なし、我涅槃の處に往至せんと欲す」と。

時に諸の凡夫比丘尼、卽時に聲を發すらく。「嗚呼怪しき哉、一刹那（Kṣaṇa）の頃にして比丘尼の僧坊皆悉く空虛す、譬へば空中に星流れて四方を滅するが如し、瞿曇彌比丘尼と五百比丘尼と、倶に共に往去すること、恒伽河（Gaṅgā）と五百河と、倶に大海に入るが如し」と。爾の時諸の優婆夷、瞿曇彌の足を頂禮して言さく。「願はくは當に憐愍して我等を捨つること莫るべし」と。諸の比丘尼、諸の優婆夷を安慰して言く。「汝等今は、是憂ふるの時には非ず」と。卽ち偈を說いて言く。

我等已に苦を知り　集の繫縛を斷ち　以て八正道を修めて　滅諦を證するを得　所作の事已に辦じぬ　汝等憂苦する莫れ』　曇佛衆未だ闕けず　牟尼の法藏住まれり　世尊の世に在す間に　我當に涅槃に入るべし』　憍陳如比丘　及與び阿富(?)等　是の如き無垢人の　未だ墮落する者あらざる中に　我れ涅槃に入らんと欲す』　難陀・羅睺羅

【三】四大毒蛇の篋。肉體のこと、これ有名なる毒蛇喩に基く。

＊ 大正藏「隱」に作る。

巻の第十四

六八、*佛姨母般涅槃の縁

復た次に、佛の世に出でたまふと、最も是れ希有なり。是の女人の諸の重き結使のものと雖も、猶解脱を得。

我昔曾て聞く。佛の姨母、瞿曇彌（Gotamī）比丘尼、將に涅槃に入らんとするの時、種々に莊嚴して勝妙ならしめんと欲す。爾の時世尊、四衆に圍遶せられて大衆中に在りて*噓したまふ。時に瞿曇彌比丘尼、佛の噓聲を聞きて、其の養佛愛子の故を以て而も是の言を作さく。「長壽したまへ世尊」と。是の如きの聲、轉々して乃し梵天に至る。佛瞿曇彌に告げて言はく。「此れ敬佛呪願の法に非ず」と。即ち偈を說いて言はく。

應當に勤精進して　我が心を調伏すべし　「堅實の法を勤修し　苦ろに精進を行ひ
聲聞衆を見ては　悉く皆共に和合せん」と　佛を敬禮するの時には　應に是の如き願を
作すべし

爾の時、瞿曇彌比丘尼、是の念を作さく。「聲聞衆の和合するを名けて佛を禮すと爲すとは、世尊猶聲聞衆をして和合せしめたまはず、其の別離あるを見んと欲したまはざるの故なり、是を以ての故に、我れ佛の涅槃に入りたまふを見るを欲せず、曼佛世尊へ、聲聞の衆未だ[一]墮落する者あらず、是の義を以ての故に、我應に前に在つて涅槃に入るべし」。

爾の時[二]尼僧伽藍（Bhikṣuṇī-saṁghārāma）の神、瞿曇彌の涅槃に入らんと欲するを知り、悲泣涕涙して某比丘尼の衣上に墮す。時に比丘尼、此の神の何の因縁を以て涙を墮して衣に在くやを觀察し、是を觀察し已りて、瞿曇彌の涅槃に入らんと欲せるを知る。

* 梵本斷簡、紙本第九葉。本品は增一阿含五二品第一經（大愛道般泥洹、佛母般泥洹の二異譯あり）に取材せるも素材としては增阿本最も近し、而も增阿には起塔人を四種とするに今は三種とする點、その部傳を異にするを知るべし。

* 「噓」。三本に依る、麗本「嘘」に作る。

【一】墮落。死すこと。

【二】尼僧伽藍。比丘尼の住所。

作をか作すべき、[一]「我當に爲に煩惱の火を滅し邪見の毒を除くべし」と。佛は應の如く爲に四眞諦の法を說きたまひ、聞法信解し、見を斷じ結を諦かにし、身見の毒を除き、諸結の火を滅したまひき。時に尸利毱多、見諦を得るを以て即ち偈を說いて言く。

我れ愚癡　及以び邪見の海を度りぬ　惡道を畏れずして　我れ黑闇に入らんと欲せしに
佛に遇ひたてまつりて大明を得　大火に入らんと欲して　却つて凉冷の池を獲たり』
嗚呼佛は大人なり　嗚呼法は清淨なり　具さに廣說する能はず　我今但だ略して說くのみ』
我れ本毒を與へんと欲して　而も甘露の食を獲たり　鬪諍もて應に財を失ふべきに　反つて大利を得たり』
＊是の故に佛に親近すれば　衆生の慧眼開きて　而して正道を睹るを得ん

【一】本篇はこの一句の佛意を戯曲化したるものとす。

＊以下三句は、本論作者の語なり。

佛を請じ、不饒益の事を作せり」と。佛、尸利掬多に告げて言はく。「然れども我れ既に無利の事を斷てり、汝今何の不饒益をか作さんや」と。*爾の時尸利掬多、即ち偈を說いて言さく。

我今愚かもて造りし所にて　屠獵して造らざる所なるも　是の（屠獵の）惡所作よりも過ぎて　毒を以て食中に置きしに　傷くる所ある能はず　便ち爲に自ら已れを害へり

爾の時世尊、尸利掬多に告げて言はく。「汝今の施す所、宜しく應に是れ時なるべし」と。尸利掬多言さく。「世尊、我が施す所の食には悉く毒藥あり」と。世尊復た偈を說いて言はく。

婆須吉龍王（Vasuki-nāgarāja）は　瞋恚極めて盛んの時に　此の如き猛毒も　我を傷害する能はざりき』　我今慈心を修む　如何か施藥を唱へん　我大慈の果を以て　今當に用て汝に示すべし』

時に尸利掬多、即ち毒飯を持して佛前に往詣し、涕涙悲泣して、而も偈を說いて言さく。

我今毒飯を持しぬ　功德の伏藏よ　我が心極めて惡と爲し　毒飯は以て相を標せり』
佛は三毒を滅したまへるを以て　神足もて飯毒を除きたまひ　之を食して能く我をして不動の心を得しめたまふ』

佛、諸の比丘に告げたまはく。「汝等、[○]僧跋（Saṁprāgata）を唱ふるを待つて、然る後に食すべし」とて、即ち偈を說いて言はく。

上座の前に在りて　而も僧跋を唱へ畢んぬ　衆毒自ら消除すれば　汝今盡く食すべし

僧跋已に竟りて、佛及び衆僧盡く皆飲食しぬ。時に尸利掬多、上下を觀察して是の念を作さく。「今此の衆中に、毒の爲に中てらるゝ者なきや不や」と。諸の衆僧を見るに、皆悉く安穩にして、毒の爲に中てられず。倍增して信敬し、歡喜を生ず。

爾の時世尊、是の思惟を作したまはく。「尸利掬多、信敬の心を得て受緣の時至れり、當に何の所

* 次の偈、大正藏に佛の偈の如くするも、恐らく尸利掬多の偈とするを正しとすべし。よつて今「爾の時尸利掬多」の六字を加ふ（佛譯も爾り）。

【○】僧跋。食毒を消す密呪にて、僧衆の前に維那をして之を唱へしめて後に食すといふ。

遲として將に地に沒せんとするが如く、身を擧げて戰掉し、卑下低心極めて驚怖を爲せり。五體を地に投げて哀慟號泣して而も偈を說いて言く。

寧ろ熾火　幷及に瞋れる毒蛇を抱持するとも　終に惡友に近づかず』　我今惡友の毒蛇の爲に螫され　善良の醫に依歸して　毒害を除くを得んと望めり』　三界の眞濟願はくは重ねて哀愍を見はしたまへ　我れ重過惡を作しぬ　唯願はくは悲顧を垂れたまひて　今我が懺悔を聽させたまへ」

爾の時世尊の顏色和悅したまひ、尸利毱多に告げて言はく。「聖子よ、汝憂怖する勿れ」と。卽ち偈を說いて言はく。

起てよ、起てよ、我に瞋なし　久しく怨親の心を捨てぬ　右に栴檀を以て塗り　左に利刀を以て割る　此の二人の中に於て　其の心等しくして異るなし

我今の如くんば希有と爲す、已に結使を斷じて增減の心なければ。昔我れ白象たりし時毒螫の爲に中害せられしも、猶二脚を以て獵者を覆護して傷害せざらしむ。又龜身と作りて人の爲に分割されて支節悉く解けしも、瞋心を起さず。復た羆身と作りて彼の厄人を憐みし時、彼の厄人獵師に處を示せしも瞋心を起さず。忍辱仙人と作りし時、手足耳鼻を悉く劓毀されしも、猶尙毫氂許りの瞋も起さざりき。我れ昔時に於て一切施(Sarvadana?)婆羅門と爲り、項を斬られし時にも恚恨あるなし。況や今日一切の結を斷ぜるに於て、而も當に汝に於て嫌恨の心あるべけんや。譬へば、虛空の塵垢を受けざるが如く、猶蓮華の水の爲に著せざるが如し。我の八法を離るゝや、其の事亦爾り」と。時に尸利毱多、叉手合掌して佛に白して言さく。「世尊、若し憐愍を垂れたまはんには、且らく須臾を待たれよ、更に當に食を造るべし」と。佛、尸利毱多に告げて言はく。「汝、先に使を遣はして、我に食時の到れるを白さざるや」と。答へて言く。「實に爾り。我本、實は人を遣はして

威顏を睹るを得る者　世間皆信敬す　我今福あるに由つて　還び音聲を聞くを得たり』

面は淨き滿月の如し　我今睹見するを得たり　我今福ある故に　還び世尊を睹たてまつるを得たり』　相好莊嚴の身に　設し當に滅壞を見るべくんば　惡名遍く充滿し

我等の身を燒滅せん』

爾の時其の婦、供具を以て備へ、佛世尊及び比丘衆を請じ、請じて坐に就かしめ、其の夫に語げて言く。「聖子よ、汝來入して佛足を頂禮すべし」と。尸利毱多、涕泣目を盈して而も偈を說いて言く。

我今火坑を造つて　世尊の命を害はんと規れり　今當に何の面を以てか　復た相見ゆるを得べけんや

爾の時其の婦、其の夫に語げて言く。「聖子よ、疑惑を捨つべし、佛婆伽婆に終に嫌恨なし」と。即ち偈を說いて言く。

譬へば空中に手の　觸礙する處のあるなきが如く　諸佛の法も亦爾り』　佛は一切法に於て　染なく亦著なし　[九]世の八法を離れたまふこと　蓮華の水に處するが如し』　昔時は提婆達(Devadatta)　瞋恚に心を盲ゐられ　佛を害せんと欲する爲の故に　機關もて大石を轉ばし　上に當つて空中より下せるも　佛を傷害する能はざりき』　彼の羅睺羅の如し　即ち是れ如來の子なるも　佛は此の二人に於て　等心にして憎愛なし』　彼の怨と親とを視ること　左右の眼に異るなし　諸の衆生の所に於て　慈悲は一子にも過ぎたまふ』　終に汝の所に於て　而も憎惡の心を有ちたまはず　是の故に宜しく懼るべからず』

爾の時尸利毱多、慚愧を以ての故に體を曲げて婦に隨ひ、口脣乾燋して深く愧恥を生じ、行步㨥

【九】世八法。利・衰・毀・譽・稱・譏・苦・樂の八。又八風ともいふ。

善き哉や汝、眞に是れ　無上の妙法の器なり　汝に智慧あるに由つて　親近して世尊に奉へぬ』　我れ邪見に縁るの故に　諸の尼揵等に事へぬ　汝今速かに來り出でよ　汝と共に佛に供養しまつらん』

時に樹提伽の姉、是の偈を聞き已りて尋で卽ち思惟すらく。「尸利毱多は以て佛を傷害したてまつり、而して來つて我を誑かすか」と。涕泣して樂しまず。卽ち偈を說いて言く。

汝我が憂惱を知つて　故に來つて戲弄を見すや　我今當に云何して　而も往いて如來に見えんや』　尼揵等の集れる時　猶諸の蝗虫の如かりき　邪見の熾火もて　釋種の燈を滅しぬ』

尸利毱多、其の歸に語げて言く。「汝寧ぞ佛の神力を信ぜざるや、汝今何の故に是の如き語を作す」とて、卽ち偈を說いて言く。

世間の一切の火も　何ぞ能く佛を焚燒せん　誰か能く金剛を燒き　誰か能く大地を擧げんや』　汝十力尊の　諸の外道を摧破したまへるを觀よ　火坑の四畔邊に　蓮華皆開敷せり　鵝の花間に處するが如く　【八】花毦遶りて佛を遶れり』

爾の時其の婦、此の偈を聞き已りて遙かに世尊の蓮華中に在せるを見、踊躍歡喜して而も是の言を作さく。「佛故に火に燒けたまはず」と。尸利毱多、嗚噎し涙を垂れて而も偈を說いて言く。

世尊の金剛體を　能く燒く者あるなし　富蘭那に近づくに由つて　我今自ら燒かる』　少かに濕へる薪の　乾ける薪積に逼近して　火を以て焚燒さるゝ時　兩つ倶に同じく熾然するに如似たり』

爾の時其の婦、疾く重屋を出でて世尊の所に到り、佛足を頂禮して𨅖跪合掌し、尊顏を瞻仰して而も偈を說いて言く。

【八】花毦。毦は毛の飾り、卽ち旒の事。

尸利毱多、諸の尼犍子に語げて言く。「汝等、故に此の富蘭那を是れ一切智なりと謂ふや、富蘭那とは、之を名けて滿と爲す、諸の惡を造作して地獄に滿たすの故に、富蘭那と名く、汝等此の惡道を滿たす富蘭那の所に於て、一切智の＊想を生ずるや」と。尸利毱多、復た之に語げて言く。「釋種中の能く解脱に安んじたまへる婆伽婆三藐三佛陀の所に、一切種智の想を生ぜざるや」と。即ち偈を說いて言く。

叱、汝等方に去れ　極めて無心の人と爲す　汝に若し心あらば　假使金剛の如しとも
斯の希有の事を見て　倘應に信敬を生ずべきに　現に如來の　未曾有の事を爲したまふを見つゝも　信心を生ぜざるは　是を極愚癡と爲す

爾の時尼犍等、尋で各散走すること、善き呪師の鬼をして四散せしむるが如く、又日出でて衆闇の自らに除くが如し。時に尸利毱多、尼犍等の散走することの、亦復た是の如くなるを見て、即ち偈を說いて言く。

恐怖せる目視も速く　慞惶として競馳せんと欲す　佛の威神力を以て　驚怕して皆散走す』　尼犍の今退散するは　亦魔軍の壞るゝ如く　塵垢もて身體を坌すこと　猶重き鎧器を著くるがごとし』　時に諸の尼犍等　奔突極めて速疾なること　譬へば彼の犛牛の　林に在つて虻に螫され　宛轉して泥を身に塗り　狂走して自ら停らざるが如く
又黑雲の垂れ布けるに　風吹きて自然に散ずるが如し』

時に尼犍等、既に散走し已るや、尸利毱多、心に慚愧を懷き、即便ち思惟すらく。「誰か當に我を將ゐて往いて世尊に見えしむべき」と。復た是の念を作さく。「樹提伽の姉は先に更に佛に見ゆ、我今當に共に世尊の所に詣でん」と。是の念を作し已つて即ち先に閉づる所の婦の戶前に向ひ、門を扣きて婦を喚び、即ち偈を說いて言く。

【七】滿は富蘭那の語義。
＊「想」。三本に依る、麗本は「相」。

爾の時世尊、相輪の足を以て火坑の上を蹈みたまふや、即ち火坑を變じて淸涼の池と爲したまひ、中に蓮華を滿し、其の葉敷榮す。鮮明潤澤にして遍く池中に布けり。其の衆蓮華に開敷せる者あり、未だ開かざる者あり。尸利毱多、斯の事を睹已つて富蘭那に語げて言く。「汝先に佛と共に一切智を捔はんと欲せり、汝今は此の語を捨つべし」と。即ち偈を說いて言く。

善き哉や信解すべし　當に瞋恚の心を除くべし　嫌恨の意を捨てゝ　汝瞿曇を觀ずべし』　未曾有の威もて　猛火を變じて水と爲せり　土は悉く化して魚と成り　坑中の諸の火炭は　咸變じて黑蜂と爲れり』　復た池水の中に於て　化して衆蓮華を作り　具足して千葉あり　遍く池中に布けり』　其の鬚甚だ熾盛にて　秋の開敷せる花の如く　百葉甚だ柔軟に　莊嚴して此の池に滿てり』　諸の鶴は池中に在つて　皆和雅の音を出し　[六]迦蘭陀（Kāraṇḍava）鳥等　亦中に在つて遊戲し　翅を擧げて水に相灑べり』　諸の蜂は佛を圍繞して　妙音聲を出し　鴛鴦は相ひ隨逐して　復た自在に娯樂せり』

爾の時富蘭那、尸利毱多に語げて言く。「汝今瞿曇の幻術の爲に惑亂せらるゝ勿れ」と。尸利毱多、如來の所に於て深く敬信を生じ、富蘭那に語げて言く。「此は是れ幻なるや」と。答へて言く。「實に爾り、是れ幻の所作なり」。尸利毱多言く。「汝は是れ一切智なりや不や」。答へて言く。「我は是れ一切智の人なり」。尸利毱多復た之に語げて言く。「汝若し審かに是れ一切智ならば、我が說く所を聽け」と。即ち偈を說いて言く。

汝若し一切智ならば　亦應に是の幻術を知るべし　汝今何ぞ　此の如き幻化の事を作さざる　汝若し幻術を知らずば　是れ一切智に非ず

時に富蘭那、辭に窮し理に屈して報を加ふる能はず。諸の尼揵等、尸利毱多に語ぐらく。「是の語を作す莫れ、何を以ての故に、是の富蘭那は實に一切智にして、能く一切を示現すればなり」と。

【六】迦蘭陀、鴨の一種。

の念言を作さく。「如來今は已に火坑に到りたまへり、若し脚草に觸るれば火必ず熾然せん、嗚呼怪ふき哉」と。卽ち偈を說いて言く。

今當に烟中に沒すべし　謦咳して目に雨淚す　火然えて衣を燒くの時　應當に抖擻して却くべし』　眼に看ゆ、救護を索めて　宛轉而して反側し　燋然旣に以て訖り　威光復た消融し　身相都て焚滅し　頭髮燋けて墮落し　額廣く白毫相あるも　今以て盡く消滅せること　鵠の花上に在つて　火の爲に燒滅せらるゝが如し』　面は淨き滿月の如く　衆生は其の目を睹るに　猶美甘露の如かりしも　旣に焰火の中に墮す　驚懼して四方を視るに　猛火に悲愍なし　必ずや燒きて燋然せしめん』　練眞金色を成し見る者悅ばざるはなく　大人の相は炳著として　美妙に極殊特なり　是の如きの形容も

今は火の爲に燋縮せらるゝか』　略說して而も之を言はんに　金織＊納に如似たり　卷疊みて一處に在くに　漸を以て消滅を見ること　月の盡きんと欲する時の如し』

佛身甚だ微妙にて　見る者身心に悅ぶ　如來極めて奇特にて　世界に倫匹するなし』

爾の時世尊、第三門に入つて漸く火坑に近づきたまふ。諸の尼揵子は重閣の上に在つて、如來の轉た火坑に近づきたまふを見、心に踊悅を生ずること、塚間の樹に、群烏上に在りて死人の肉を望み、噉食するを得んと欲するが如し。諸の＊尼揵等の重閣の上に在るも亦復た是の如し。

時に富蘭那、心に歡喜を生じ、而して偈を說いて言く。

汝善く幻術を作して　諸の世間を迴轉せり　今日火坑に沒す　更た能く幻を爲すや不や

復た一尼揵あり　而も是の如き言を作さく。

一足は已に上を躡む　云何か陷墮せざる　我が目了かならずと爲すや　是れ夢幻と爲すや

【五】抖擻。dhūta の譯、振り捨てること。

＊「納」。三本に「綢」に作るも何れも意汲みがたし、或は衲（いろぎぬ）の誤傳にて、その金色の色のさめ行くに喩へしものか。但し喩としても次の月のものと重複するより見れば、或は缺文あらんか。

＊尼揵は富蘭那の徒と異るも本章にも誤錯す。

見已りて　心の中に喜樂せず　喜ばざる所以の者は　非法あるを以ての故なり』　相好莊嚴の身は　瞻仰するに厭足なし　此の如きの大人は　今當に灰聚と作るべし』

我れ是の事を憶ふの故に　身體は滲沒せんと欲す　誰か此の如き事を見て　而も當に苦惱せざるべけんや』　假使極惡猛にして　愚癡殘害の人なるも　設し如來の身を見ば　惡念を生ずるに忍びざらん　況や復た加害せんと欲せんや』　月の　[四]羅睺(Rāhu)の口に入る如し　世人皆忿惱す　善き哉や還歸し去りたまへ　火坑の深きこと七仭　中に盛熾の火を滿たせり』　願はくは此處に入りたまふこと莫れ　自ら護り及び我を護りたまへ　幷びに彼の主人　及餘び一切の衆を護りたまへ』

爾の時世尊、宅神に告げて言はく。「刀、毒、水、火も慈心を害せず」と。即ち偈を說いて言はく。

我れ諸の衆生を護ること　猶一子の想の如し　假使我を害せんと欲するも　我亦慈心を生ず』　煩惱の火熾盛なるも　擁護して惡を免れしめん　是の因緣を以ての故に　誰か火もて能く我を燒かん』

佛宅神に告げたまはく。「汝今應當に怖畏を捨つべし、我今師子吼して障の外道の羅睺羅の日月を呑食する如くなるを除かん、我今決定して尸利毱多の患害する所と爲らず、若し除く能はずんば、云何か乃ち能く魔を降伏せんや」と。宅神を安慰して即ち其の舍に入りたまふ。

時に外道等、佛の舍に入りたまふを見て甚だ大いに歡喜し、更に相語りて言く。「沙門瞿曇、今已に外門に入れり、復た中門に到れり」と。佛は無畏なるを以て威光潤澤し、直ちに入りたまふに疑なし。第三門の中に至つて轉た火坑に近づきたまふ。

爾の時彼の婦、空室中に於て、佛世尊の擬火の處に到りたまへるを聞いて、心に狂亂を懷いて是

【四】羅睺。阿修羅の名にて、印度神話に月蝕を以て此の神が月神を犯すものといへり。

に害を爲す莫し　尸利毱多の火に　何ぞ能く傷毀せられん』

復た一天あり、是の如き言を作さく。「若し火も如來を燒く能はずば、設ひ毒飯を食したまはんも、復た當に云何かすべけん、今尸利毱多は邪見の毒の爲に其の心を染汚され、此の毒害惡逆の心を以て、毒を以て飯に和え、相傷毀せんと欲せり、復た諂僞を懷いて柔軟の相を現じ、來つて世尊を請ず、而も其の內心には實に惡逆を懷けり、唯願はくは世尊、須らく彼に往きたまふべからず」と。佛、天に告げて曰はく。「我れ、慈悲の阿伽陀藥(Agada)を以て、用て身心に塗れり、貪愛の毒の最も消除し難きも、我れ久遠に於て已に其の本を拔けり、況や世間の毒にして而も能く我に中たらんや、汝憂愁する莫れ」と。

爾の時如來、竹林より出でゝ城門に往到したまふ。時に彼の林神、佛の直進したまふを見て而も是の言を作さく。「如來世尊は將に此の竹林に還返したまはざらんとす、佛今彼の解脫の方に向ひたまふこと、譬へば日の出でて必ず西方に向ふが如し、目視して捨てず、恐らく後時に於て更た佛を見たてまつらざらん、火若し燒かざれば定んで毒飯の傷害する所と爲らん、諸の因緣を以ては復た見るべき難し、福德ある人にして乃ち能く見たてまつるを得ん、他論を摧きたまふ者、大衆中に於て師子吼を作したまふに、有福の人は乃ち能く更た聞かん、福利ある者は足に接して禮するを得ん」と。

爾の時世尊、行める寶樓の如く、諸根寂定たり、諸の比丘等悉く皆隨從すること、猶明月の衆星に圍遶せらるるが如くして、尸利毱多の家に往く。時に尸利毱多の宅神、聲を擧げて哭かんと欲し、「咄なる哉、咄なる哉、佛此に來到したまへり、今此の尸利毱多、乃ち火坑と毒飯を作りて以て佛を害せんと欲せり」と。爾の時宅神、佛足を禮し已つて而も偈を說いて言く。

我れ未だ佛を睹ざるの時　大悲もて家に至りたまはんことを願ひき　佛の家に到りたまふを

多　今急かに教化を待てり』　我れ毒蛇の身に住す　衆生を度せんが爲の故に　我今是の怨を畜ふ　彼の衆生を益まん爲に』

爾の時如來、林樹間を出でたまふこと、猶雲散じて日の中より出づるが如し。時に彼の林神、天眼を以て尸利毱多の舍內に設くる所の火坑と毒飯を見、啼泣墮涙す。佛を敬愛するの故に佛足を頂禮して尊顏を瞻仰し、而して偈を說いて言く。

彼が意に殘惡を懷けり　利益の心あるなし　願はくは佛よ、須らく往くべからず　迴還して竹林に向ひたまへ』　世尊は甚だ値ひ難く　曠劫に時に一たび遇ふのみ　佛は身を愛したまはずと雖も　衆生を度せんが爲の故に　斯の如き勝妙身を　應當に勤めて擁護すべし』　未だ得度を得ざる者は　宜しく應に得度せしむべし　畏るゝ者には無畏を施し　疲るゝ者には止息を得しめ』　歸依なき者には　歸依處あるを得しめたまふ　略說して而も之を言はんに　無量の利益あり』　唯だ願はくは佛世尊よ　其の家に往詣したまふ莫れ　天阿修羅*等の爲に　而も歸依處と作りたまへ』

爾の時世尊、知つて而も故に問ひたまふ。彼の天神に問ひて曰はく。「何事の爲の故に、應に尸利毱多所止の處に往詣すべからざるや」と。時に一天あり、而も偈を說いて言さく。

尸利毱多の舍には　大なる深火坑を作り　熾焰を其の中に滿し　詐僞して其の上を覆へり

佛復た偈を說いて言はく。

貪欲愚癡の火は　極めて除滅し難しとなせど　我れ智水を以て澆ぐに　消滅して遺餘なし　況や復た世間の火おや　何ぞ能く我に害を爲さん』　地獄の猛火は　熾然して世界に滿ち　七日もて天地を焚かんに　世間皆融消せん』　此の如き之猛火も　能く我

＊梵本には、天阿修羅以外に、乾闥婆を加ふ、恐らく一切衆生の意なるべし、依つて今「等」の一字を補ふ。

彼の遣はされし所の人、竹林（Veṇuvana）に到りて白して言さく。「世尊、食具さに已に辦じぬ、宜しく是れ時なるを知りたまふべし」と。爾の時世尊、大悲もて心を熏じ、諸の衆生を利益せんと欲したまふ爲の故に、手を揮つて而も言はく。「咄なる哉、凡愚よ、汝今に於ては應に眞諦を見るべし、過去世に於て諸佛を供養し、解脱の緣あり善根已に熟せり、云何か乃ち此の如き使人をして顚倒の事を作さしむる、火坑と毒飯と、以て我を待てり、云何か是の極惡の事を作しつ、而も來つて喚ばはるや、此の所爲の事、甚だ非理と爲す」と。卽ち偈を說いて言はく。

我れ昔日の時に於ては　六年に苦行を行じ　諸の衆生の爲の故に　此の諸の難事を作しぬ』　衆生今云何か　反て毀害を見はさんと欲する　咄なる哉極愚癡　盲ゐて慧目無き者よ　是の非法の事を作し　横まに惱害を加へんと欲するや』　我れ諸の衆生を念ずること　慈父母にも過ぎだり　云何か我が所に於て　而も殘害の心を生ぜるや』　今日時は以て到れり　諸佛の常法　衆生の眞濟と爲ること　醫の病を救はんと欲する如し　種々に毀罵を加ふとも　猶故に忍心を生ず』　我今亦醫の如し　彼の家に往詣せん　何の故に而も彼に往くや　大悲の逼る所なり』　人の鬼病を得て　心意自在ならずして　呪師に毀罵を加ふるも　鬼病を治せんが爲の故に　呪師亦病者を責めざるが如し』　今此の諸の衆生　煩惱の鬼心に在れど　愚癡にして分別せず　横まに毀害を加へんと欲す』　我今亦是の如し　但だ煩惱の鬼を除かんのみ　應に彼の人を責むべからず』

爾の時世尊、坐より而も起ち、外に不悅を現じて復た偈を說いて言はく。

阿難よ、衣を持し來れ　羅睺羅（Rāhula）よ、鉢を取れ　難陀（Nanda）よ、汝亦去りて速疾に比丘を喚べ』　復た停止するを得ず　宜しく應に速疾に往くべし　彼の尸利毱

して深室中に在き、即時に人を遣はして諸の尼揵を喚ばしむ。「汝今來るべし、汝が爲に怨を除かん、我以て火坑毒飯を施設せり」と。此の諸の尼揵、五熱もて身を炙り、咸皆燋黑なること猶灰炭の如し。自ら相招集して即ち共に尸利毱多の所止する處に往詣す。

尸利毱多、舍宅を莊嚴し、白淨鮮潔なること貴吒迦樹（Kutaja）の如し。諸の尼犍等、既に其の家に至り、其の樓上に在ること烏群の如く、亦倶翅羅鳥（Kokila）の如く、黑蜂の圍遶して貴吒迦樹に在りて踊躍歡喜せる、諸の尼揵子も亦復た是の如し。而して是の言を作さく。「我今當に瞿曇沙門の正爾しく燋然するを觀るべし、若し火もて燒くも燋げずば、毒飯もて害するに足らん、畢定して當に死すべし」と。是の語を作し已つて歡喜微笑す。

時に尸利毱多、即ち一人を遣はして佛所に往詣して佛に白さしめて言く。「時到れり、飯食已に辦ず」と。自ら高樓に上つて富蘭那と共に此の事を議す。

時に尸利毱多の所住の宅神、愁憂啼泣して而も是の言を作さく。「如來世雄は三界の尊なり、佛婆伽婆を、云何か惡心もて乃ち毀害せんとは欲する、我今に於ては都て活路なし、所以は何ん、如來世尊は三界に上なし、此に在つて滅沒したまへば惡名流布して世間に遍滿し、一切の諸神咸な我を嗤笑せん、此は是れ惡人なり、我當に云何してか而も活くるを得べけんや、如來昔日菩薩たりし時、財物身體手足をも惜しみたまはず、憐愍の爲の故に斯の如き事を作したまへり、況や今日に於て而も當に身を愛したまふべけんや、云何か斯の如き人の邊に於て、惡逆の心を起さんと欲する、是の故に我當に必定して命を捨つべし、又佛世尊は現在の世に於ても、衆生の爲の故に六年苦行したまひ、日に一麻一米を食して、身體羸瘠し骨肉乾竭したまひき」と。即ち偈を說いて言く。

如來は苦行を行じて　六年自ら乾燋したまふ　是の難苦業を作したまふは　諸の衆生の爲の故なり　斯の如き悲愍者を　云何か加害せんと欲する

焰を無からしむ。又灰土を以て用て其上を覆ひ、上に又草を覆ふ。

時に婦、夫に問ふらく。「何等の事を造るに劬勞すること乃ち爾るや」。其の夫答へて曰く。「今我の爲す所は、怨家を害はんと欲するなり」。其の婦問ひて言く。「誰か是れ怨家なる」。尸利毱多、即ち偈を說いて言く。

好樂にして諸欲に著し　苦惱の事を怖畏して　諸の苦行を修めず　而も解脫を求めんと欲せり』　喜樂して飾饌に甘じ　又勇行もて辯說する　釋中の種族子こそ　此は是れ我が大怨なり』

時に尸利毱多の婦、叉手して其の夫に白して言く。「怨心を捨つべし、我昔曾て弟の舍に於て佛を見たり、此の如き大丈夫、何の故に怨を生ぜん」と。即ち偈を說いて言く。

彼の牟尼能仁(Śākyamuni)は　嫌恨の相を斷除し　又慢貢高を滅ぼし　鬪諍を捨離したまへり　彼に於て怨を生ぜば　誰か應に親と爲るべき』　彼の大人の相を觀ずるに瞋害の心あるなし　常に柔軟の音を出し　先づ善き慰問を言ふ』　其の鼻圓く且つ直に　諸の邪曲あるなし　直視して迴顧せず　亦左右に眄めず』　言又麤獷に　惡口し而して兩舌せず　和顏にて瞋の色なく　亦復た暴惡ならず』　言に傷觸する所なく亦憂惱ならしめず　云何か橫まに彼に於て　瞋毒の相を生ずる』　面は秋の滿月の如く　目は青蓮の敷く如く　行くこと師子王の如くにて　臂を垂るゝに膝を過ぎ　身は眞金山の如し』　汝是の如き怨に値ふ　惡道悉く空虛せん　若し此の怨なくんば　世間は極めて大に苦しく　三惡道もて充滿せん』

尸利毱多、是の思惟を作さく。「彼は親と弟との故に、心に已が黨を生ぜり、今當に守護すべし、若し爾らずんば、或は我が言を泄して以て傍人に告げん」と。是の念を作し已りて即ち其の婦を閉

諂曲なるも詐りて恭敬を設け、叉手合掌して世尊に向ひ、而も偈を說いて言さく。

我れ明日微供を設けん　願はくは屈して我家に臨みたまへ　三界の中の勝器よ　願はくは放捨を見せざれ

爾の時世尊、尸利毱多の心に諂曲を懷いて外に詐つて恭敬するを知りたまひ、即ち偈を說いて言はく。

心に二計を懷き　外に親軟の善を現はすこと　猶魚ある處に　水の必ず迴動することあるが如し』　譬へば瓔珞を作るに　內銅にして外に金を塗る如し　智者は觀察し已つて即ち眞金に非ざるを知る』　心に懷挾する所あれば　外色に必ず異あり　無心すら尙知るべし　況や復た有心者おや』　純金の色相は好し　觀る者即ち眞を知る　若し金を以て銅に塗らんに　善く別つて實に非るを知る』

爾の時世尊、深く尸利毱多の心に詐僞を懷くを知つて、如來世尊の大悲もて憐愍したまひ、又復た其の供養を觀ずるに善根熟しなんとす。世尊尋で即ち默して其の請を受けたまふ。

時に尸利毱多、是の念を作さく。「若し是れ一切智ならば、云何か我が心を知らずして、便ち我が請を受くるや」と。即ち偈を說いて言く。

何ぞ一切智を有ちて　而も苦行を修めざる　樂事に樂著して　我が心を知る能はず何ぞ一切智と名けん』　嗚呼、世の愚者　其の過短を知らずして　便ち功德の　想※を生ぜり』　實には智慧あるなし　橫まに其の德を讃歎す　相好に惑著して　稱譽を扇るや世界に遍ねし』

時に尸利毱多、是の偈を說き已つて即ち其の家に還り、供具を施設し、飯食の中に於て盡く毒藥を著け、中門の內に於て大いなる深坑を作り、中を滿する伽陀羅炭（Khadira-aṅgāra）を盛り、烟

※「想」原本に「相」とす。

を受くるを許す。其の後日に於て、富蘭那、諸の徒衆數百千人を將ゐ、又五百の弟子あつて以て自ら圍繞し、樹提伽の家に詣つて既に其の家に至る。

時に富蘭那微笑す。尸利毱多、富蘭那に問ひて言く。「婆伽婆、何の故に微笑するや」。富蘭那言く。「我れ遙かに彼の那摩陀（２）の河岸を見るに、一獼猴あつて水中に墮せり、是の故に笑ふのみ」と。尸利毱多復た之に白して言く。「婆伽婆は天眼清淨なり、此の城內に在つて遙かに千里の外なる那摩陀の河上に獼猴の水に墮せるを見たまふ」と。

時に彼の外道、諸の弟子を將ゐて樹提伽の家に入り、即時に坐に就く。衆既に定り已るや、時に樹提伽、飯を以て羹の上に覆ひ、富蘭那に授與す。富蘭那言く。「此の飯に羹なし、云何して食すべきや」と。樹提伽即ち、羹飯を攪して尸利毱多に言く。「今汝の師は、尙、鉢中の飯下に羹のあるをすら見る能はず、何ぞ能く遠く千里の外に獼猴の河に墮するを知らんや、事驗なり、知るべし、一切智に非ることを、但だ名聞を貪りて利養の爲にする故のみ、衆生は愍れむべし、自ら既に誑惑し、復た以て人に敎ふるなり」と、即ち偈を說いて言く。

汝の師富蘭那は　顚惑邪倒の見のみ　智慧の燈を失ひて　無明の闇中に住せり　迷謬は自ら相愛し　愚者は還て相重ぬ』　釋種の中の最勝　具相三十二のみ　唯だ此れ一切智にして　更に第一者なし』

時に富蘭那、慚愧を以ての故に食するも自ら飽かず、低頭して而も去れり。時に尸利毱多、愁慘して樂しまず、既に師徒の爲に、短陋ありと雖も猶勝たしめんと欲す。尸利毱多、富蘭那の所に詣つて而も之に語げて言く。「用て愁惱する莫れ、樹提伽、今は婆伽婆を毀辱するも、猶家に還るを得たり、未だ恥と爲るに足らず、我若し彼の樹提伽の師を請じて家に來至せば、正に入るを得べくして終に出づるを得ざらん」と。是の語を作し已りて便ち祇洹に詣で、往いて世尊を請ず。心實は

ん。是の故に應當に至心に聽法すべし。

我昔曾て聞く。富羅那(Pūraṇa-Kāśyapa)の弟子尸利毱多(Śrigupta)は、是れ樹提伽(Jyotiṣka)の姉の夫なり。時に樹提伽の父は、先に是れ尼乾陀の弟子にして、一切衆生の敎法を相習ふ。而して樹提伽の佛の恩化を蒙るや、其の父も亦信じて佛の弟子と爲り、更に六師の徒に諮稟せず。

時に樹提伽、彼の姉夫たる尸利毱多を化せんと欲する爲の故に、數々邊に到りて而も之に語げて言く。「佛婆伽婆は是れ一切智なり」と。彼の姉夫言く。「富羅那は亦是れ一切智なり」と。一切智を諍ふ故に遂に共に議論す。樹提伽、尸利毱多に語げて言く。「我今當に汝に一切智を示すべし、汝の富羅那は一切智に非ず、少智の相を以て世人を誑惑し、己に智ありと稱するも、實は一切智に非ず、但だ相貌を以て忖度する所あり、正に能く小々事を知るべきのみ、何に由つてか一切種智と名くるを得るや」と。即ち偈を說いて言く。

猶生盲者の　水精を以て眼と爲し　小兒等を誑惑して　自ら我に目ありと稱するが如
し』　彼に先に自ら目なくして　今我に目ありと稱す　此の語信ずべからず　正に癡
者を誑かすべし』　能く因相の論を解せば　方便して詐るも自から顯れん　此の相貌を
以ての故に　衆人を誑惑すのみ　相貌は是の事に近し竟に何の知曉する所ぞ』

尸利毱多、樹提伽に語げて言く。「汝は瞿曇の幻術の爲に惑はさる、富蘭那は是れ一切智なり、汝今識らずして便ち誹謗を生ずるも、富羅那は行住坐臥に三世の事を盡く能く明了す」と。樹提伽言く。「我今汝に富羅那の一切智に非る事を示さん」と。即ち富羅那を請ぜんとて、將に其の家に向はんとす。

時に富羅那、是の念を作さく。「樹提伽は、其の父は昔日是れ我が弟子にして、往きて瞿曇に事へしに、彼の過患を知りて還び來つて我に歸す、是れ我が福德なり」と。是の念を作し已りて其の請

獲るが如からん』

時に長者子の諸親、旣に身瘡の壞爛して臭穢なるを視て生死を厭惡し、卽ち華香塗香末香を以て、用て迦葉佛の塔に供養し、復た牛頭栴檀を以て以て佛身を謹くに、身瘡漸く差えて歡喜心を生じ、熱患盡く愈えたり。爾の時長者子、現報を得るを以て歡喜心を生じ、其の罪の滅べるを知りて、卽ち偈を說いて言く。

如來一切智は　諸の結使を解脫したまへり　迦葉三佛陀(Saṁbuddha)　能く諸の衆生を濟ひたまふ』　佛は是れ衆生の父なり　諸の世界の爲に　而も不請の友と作りたまふ』　唯だ佛世尊のみありて　能く此の悲心あり　我今佛の所に於て　大過惡を造作しぬ　願はくは我が懺悔を聽したまへ　內心に誓願を發せり　唯だ我が說くを垂聽せたまへ』　欲の爲に逼迫せられ　意を失つて諸惡を作しぬ　我をして愛欲　及以び結使の怨を離れしめよ』　諸根の調順せざること　猶懰戾なる馬の如し　願はくは惡行を造る莫く　常に寂滅の迹を獲ん』　牛頭栴檀を以て　佛塔に供養しまつり　身常に此の香を得て　諸の惡趣に墮する莫からん』

彼の長者子、後に於て命終して天上に生じ、或は人中に處し、身常に香あり、身體支節に皆相好あり、父母名を立てゝ、香身(Ghandha-kāya ?)と曰ふ。爾の時香身、陰界を厭惡して出家を求索し、辟支佛(Pratyeka-buddha)の道を得たり。此の骨は是の辟支佛の骨の出す所の香なり』と。是の故に衆人應に塔を供養して大功德を獲べし。

六七、＊尸利毱多歸佛の緣

復た次に、先に善根あらんに應に解脫を得べく、不聞法の因緣等に因つての故に還び地獄に墮せ

＊梵筴斷簡、二二七、二三一、二三二、二三三、二三五、二四〇、二四一葉、及び紙本第八葉。猶本篇の主人公尸利毱多を取扱ひたるものに德護長者經一卷あり、大いに本篇と趣きを同じうす。

ん　　猶腐朽せる樹を　火もて其の内より然すが如く　我今亦是の如し　心火内より發す』　冷水と　優尸羅（Uśira）と[二]　若し是の如き等を用て　青蓮と眞珠貫と　瞿麥と　摩羅（Malaya ?）[三]等及與び諸の栴檀』　外身體に塗るとも　終に差ゆるを得る能はず　憂熱は内より起る　應當に用て心に塗るべし　身に塗るとも將て何か益せん』　我を將ゐて塔中に詣で　我が爲に供養を設けよ　此の病必ず除愈せん』　父母及び兄弟即ち共に共の床を擧げて　佛の塔所に往詣す　身體轉た熱を增し　氣息垂ど絶えんと欲す』

爾の時父母兄弟諸親、床を擧げて到り已るや、彼の人專ら迦葉如來三藐三菩提を念じ、涕泣目に盈つ。已れの所持する栴檀の香を以て、悲哀もて塔に向け、而も偈を說いて言く。

大悲もて苦厄を救ひたまへ　常に衆の善事を說きたまふに　我れ欲の爲に迷惑し　盲冥にして見る所なく　我れ眞濟の所に於て　諸の過惡を造作しぬ』　塔は須彌山の如し　我れ癡の故に毀犯しぬ　現に惡名稱を得　後生に惡道に墮せん』　佛の功德を觀ぜず　今此の惡報を受けぬ　即ち以て現果を得　後に必ず熱惱を受けん』　明者は慧眼を以て　苦を離れ諸の欲を除く　我今憂愁を懷き　誠心もて佛に歸命す』　諸の造る所の過患　願はくは當に我を拔濟すべし　人の跌きて傾倒し　地に依つて而も起つを得るが如くに』

爾の時父母及び諸の眷屬讃言すらく。「善き哉、善き哉、汝今乃ち能く是の讃歎を作せり、唯だ佛世尊のみ、能く汝の病を除きたまはん」と。即ち偈を說いて言く。

汝今佛の所に於て　應に信解の心を生ずべし　唯だ佛の大功德のみ　乃ち能く汝を拔濟せん』　譬へば大海に入り　船破れて財寶を失ひ　身既に沈沒せず　復た還た財利を

【二】優尸羅。冷藥に用ふる學名 Andropogon Muricatu-日といへる草の芳香ある根、支那に香菜と譯せり。

【三】摩羅。恐らく摩羅度の略ならん、白檀油。

て空處あるなし。卽ち偈を説いて言く。

我今不善を作し　諸佛の敎に違犯せり　慚愧を捨離せば　是れ則ち敬心なし』　善逝の語に違ふ　是れ佛弟子に非ず　一切諸の人民　敢て王敎に違はず　然るに我獨り國制及び信法を毀犯す　我に今羞恥なし　實に彼の禽獸に同じ』　福田の中の最勝なるは　世尊の塔に過ぎず　然るに我れ愚癡の故に　花を盜みて鄙事を爲せり』　云何か此の手臂　卽時に墮落せざる　又復た此の大地　云何か陷沒せずして　而も能く我を載するや』　怪しき哉や欲に燒かれて　諸の善行を焚滅し　欲の爲に迷惑せられて闇き藪中に入り　結賊の爲に劫めらる』　今我れ欲使の爲に　其の果報を觀ぜず花を盜みて以て自ら嚴り　久しく地獄の苦を受く　倍す悔恨の心を生じて　其の身轉た燋然す』

爾の時、彼の人の身に生ずる所の瘡、尋で卽ち壞破して甚だ臭穢と爲す。是の時彼の人の父母兄弟皆來つて瞻視し、卽ち冷藥を與へて其の病を療治す。病更に增して劇し。復た良醫に命じて而して重ねて之を診るに、云く、「牛頭栴檀を須て用て身體に塗れ、爾れば乃ち愈ゆべし」と。時に彼の父母卽ち貴價を以て牛頭栴檀を買ひ、用て子の身に塗る。遂に增すも除くなし。爾の時彼の人、涕泣驚懼して父母に白して言さく。「徒に勤苦を作したまへど、然れども子の此の病は心より而も起れり」と。父、子に告げて言く。「云何が心の病なる」と。子卽ち偈を用て以て父に答へて言く。

鄙褻より成る、恥づべし　宜しく父に向つて說くべからず　然れども今病に困しめられて是を以て慚愧を離る』　尊塔の花を盜み取り　持ちて用て婬女に與へぬ　已に斯の惡事を作し　後に還て悔心を得たり』　晝は則ち日炙を欲し　夜は卽ち悟心を得　若し悔過を蒙らば　喩へば冷水の澆るが如からん』　我今身心熱り　後に地獄の苦を受け

卷の第十三

六六、*香身辟支佛の舍利芳香を放つ緣

復た次に、佛塔を供養する功德は甚だ大なり。是の故に應當に勤心して供養すべし。

我昔曾て聞く。波斯匿王(Prasenajit)佛所に往詣して佛足を頂禮し、異香あるを聞ぐに天香よりも殊る。此の香を聞ぐを以て、四向に顧視するも所在を知る莫し。卽ち世尊に白さく。「誰の香と爲すや」と。佛王に告げて曰はく。「汝今此の香の處を知らんと欲するや」と。王卽ち白して言さく。「唯だ然り、聞かんと欲す」と。

爾の時世尊、手を以て地を指したまふに卽ち骨の現はるゝあり、赤栴檀の如くして五丈よりも長し。如來王に語げたまはく。「聞ぐ所の香は此の骨より出づ」と。時に波斯匿王、卽ち佛に白して言さく。「何の因緣を以て此の骨に香あるや」と。佛、王に告げて曰はく。「宜しく善く諦聽すべし」とて、佛言はく。

過去に佛あり、迦葉(Kāśyapa)と號す。彼の佛世尊、化緣已に訖りて涅槃に入りたまふ。爾の時彼の王の名を[一]伽翅と曰ふ。佛舍利を取りて七寶の塔を造り、高廣二由旬(yojana)なり。又國內に勅して、諸有花は餘用ふるを聽さず、盡く皆持ち往きて彼の塔を供養す。

時に彼の國中に長者子あり、婬女と通じて專ら欲事を念ひ、情として離るべからず。一切の諸花盡く佛塔に在り、欲の爲に盲ゐられて卽ち迦葉佛の塔に入り、一花を盜み取つて持して婬女に與ふ。時に長者子、佛の功德を知るも欲の爲に狂はされて此の非法を造り、卽ち悔恨を生じて婬欲の情息む。既に明日に至るや厭惡を生じ、是の念言を作さく。「我れ不善を爲せり、佛花を盜取して彼の婬女に與ふ」と。卽時に悔熱もて身に遍く瘡を生じ、初は芥子の如かりしも後には轉た增長し

---

* 梵筴斷簡、二二二、二二三、二二六葉。

【一】伽翅。梵語にては kṛkī とするも巴利にては kikī となる。而して ṛ は他の俗語にては i となることあり、よつて今は kikī ならんか。

て是の言を作さく。「嗚呼、善き哉や知識、善方便を以て我を開解したまへり、我に過失あるも、夢を以て支持したまふ、佛は*善知識とは梵行全體なりと說きたまふ、此の言實に爾り、誰か解脫を得るあらんや、善知識に依らずして、――唯だ癡者ありて善友に依らざるのみ、――云何してか而も能く解脫を得んや」と。

尊者迦旃延、婆羅那を巴樹提の瞋恚の毒藥より拔濟し、消滅して遺餘なし。是の故に有智者は、應に善知識に近づくべし。

* 佛語。

して四兵を集め、巴樹提に往向す。時に巴樹提、亦四兵を集めて共れと共に鬪戰す。婆羅那の軍、悉く皆破壞す。婆羅那を擒として拘執して將ゐ去る。巴樹提言く。「此は是れ惡人なり、將に殺し去るべし」とて、其の頸上に於て伽羅毘羅鬘(Karavira-mālā)を繋け、魁膾として搖りて惡聲を作し、衆人をして待衞器仗して圍遶し、持して塚間に至らしむ。其の中路に於て迦旃延の衣鉢を執持して城に入つて乞食するを見、涕泣墮涙して和上に向ひ、而も偈を說いて言く。

師長の教を用ひず、瞋恚して濁體を惱まし　今當に樹下に至つて　佛法を毀破すべし』
我今死に趣いて去らん　衆刀は我を圍遶せり　鹿の圍中に在る如く　我今亦是の如し』
閻浮提を見ず　最後に和上に見ゆ　復た惡心の者ありと雖も　故に牛の犢を念ずるが如からん』

時に彼の魁膾として執持する所の刀は猶靑蓮の如し。而も之に語げて言く。「此の刀は汝を斬らん、和上ありと雖も何の能く爲る所ぞ」と。哀れみを和上に求めて聲を擧げて大いに哭き、「我今和上に歸依す」といひて卽ち睡より覺む。

驚き怖れて和上の足を禮し、「願はくは和上、我れ和上の語言に違へるを解れり、我本愚癡にして佛禁を捨てんと欲せり、聽したまへ、我が出家を、我れ怨に報ゐず、亦王を用ひず、所以は何ん、樂欲は味少くして苦患衆多なり、怨恚の過惡なること、我悉く證知せり、我今唯だ解脫の法を得んと欲す、我に志の定れるなし、輕躁の衆生は善く觀察せず、諸の智者に於て共に語言せず、一切衆生の爲に呵罵せらるゝの器なり、唯願はくは和上、我を度して出家せしめたまへ、苦惱の時に於て悲愍の相を現じたまへ、我れ苦惱の中に在り、和上よ、我を悲愍したまへ」と。

迦旃延言く。「汝は道を罷めず、我れ神力を以ての故に夢を現ぜしのみ」と。彼獨信ぜず。和上右臂に光を出し、而して之に語げて言く。「汝は道を罷めず、自ら汝の相を看よ」と。婆羅那、歡喜し

【八】伽羅毘羅は夾竹桃の一種なり、その花輪は特に謀叛者の章として頸に卷かる。

【九】魁膾の意味不明、元明二本に魁膾に作るより見れば、「カサカサ」として鳴る音を寫せしものかと思はる。今假に之を取る。

是の語を作し已りて和上の前に於て長跪して白して言く。「我をして戒を捨てしめたまへ」と。爾の時、同師及び諸の共學同梵行者、聲を擧げて大いに哭く。「汝今云何か佛法を捨つるや」とて、或は手を捉へ、或は抱持する者、五體を地に投じて爲に禮を作す者あり、而も之に語げて言く。「汝今愼しみて佛法を捨つる莫れ」と。卽ち偈を說いて言く。

云何か衆中に於て　獨り自ら而も捨て去つて　佛の禁戒を退くや　云何か是の惡を作して　云ふや、佛は我が師に非ずと』　比丘汝の家に至らば　云何か慚愧せざらん　汝初めて戒を受けし時　能く盡形に持戒せんを誓へるを』　云何か忠信なくして　而も梵行を捨てんとは欲する　鉢を執り袈裟を持し　乞食して以て久長なれ』　鎧を著けて刀杖を捉り　方に戰陣に入らんと欲する　王は、鞭もて汝の身を毀けしとて　沙門の法を棄捨するか』　忍辱仙の　手足を割截せるを憶はずや　彼獨りのみ是れ出家にて　汝は出家に非るや』　彼獨りのみ自ら法を知り　汝は法を知らざるや　彼は極めて截削せらるも　猶慈愍の心を生じ　堅持して心亂れず　汝今杖捶の爲に　而も便ち心を失ふや』

尊者迦旃延、衆人に語げて言く。「彼の心は以て定れり、汝等捨て去りて、當に汝の爲に治すべし」と。諸の比丘等旣に去れる後、尊者迦旃延、娑羅那の頂を摩でゝ而も是の言を作さく。「汝寧かに去るや」と。白して言く。「和上、我今必ず去らん」。迦旃延言く。「汝但だ一夜、此の間に在つて宿り、明日去るべし、急いで戒を捨つること莫れ」。答へて言く。「爾るべし、我今最後に和上の語を用ひ、今夜當に和上の邊に於て宿るべし、明日戒を捨して當に家居に還つて王位を取り、巴樹提と共に相ひ抗衡すべし」とて、和上の邊に草を以て敷と爲し、其の上に於て宿る。

時に迦旃延、神足力を以て其を重眠せしむるに、夢に本國に向ひて戒を捨てゝ家に還り、王位に居

を起さば、身心を逼惱せん、(8)我今汝の爲に是の如き法を說きぬ、當に是の喩を聽くべし、指に火を然して以て他を燒かんと欲せんに、未だ彼を害すること能はずして自ら苦惱を受くるが如し、瞋恚も亦爾り、他人を害せんと欲して自ら楚毒を受けん、(9)身は乾ける薪の如く、瞋恚は火の如し、未だ他を燒かずして自身燋然せん、(10)徒らに瞋心を起して彼を害せんと欲し、或は能くせんも能くせざらんも、共に自害の事、決定して成就せん」と。

爾の時婆羅那は、默然として而も和上の說く所の法要を聽き、同梵行者は咸な歡喜を生ず。各相謂ひて言く。「彼は和上の說かるゝ法要を聽いて、必ずや道を罷めざらん」と。婆羅那は心懷に忍ばず、高聲に而も言く。「無心の人すら猶斯の如きの事を忍ぶ能はず、況や我れ有心にして而も能く堪忍せんや」と。婆羅那、偈を說いて言く。

『電光は虛空に流れて　猶金の馬鞭の如く　虛空無情の物も　猶雷の音聲を出す』　我れ今是れ王子たり　彼と未だ異りあらず　云何か能く堪え忍びて　而も當に報を加へざるべけんや』

是の偈を說き已りて和上に白して言く。「所說は實に爾り、然れども我今は心堅きこと石の如く、滯水を入れず、我れ、皮破れ血流れて外に在るを見て、便ち瞋恚憍慢の心を生ぜり、我れ彼に請ひ求めず、亦彼の奴に非ず、亦庸作に非ず、是れ彼の民ならず、我れ賊を作さず、中に入つて陷れず、亂王と鬪はず、何の過を以てか而も加毀せらるゝと爲すや、彼れ王位に居して己れに力ありと謂ひ、我今窮下す、人各に相あり、我れ自ら乞食して空林中に坐せるを横まに毀害を加ふ、我當に己の比の如くならしめば敢て毀害せざるべし、我當に是に報ゐて安眠せしめざるべし、我は是れ善人なるに横まに毀辱を加ふ、我今彼に報ゐて當に苦を受けしむべし、我が今日を過ぎては凶横者をして敢て加惡せざらしめん」と。

除き　自ら卑しくして乞食を行じ　是の卑下の相を作しつ　憍慢を斷ぜず』　若し憍慢を省かんと欲せば　應に穢惡い心を棄つべし　速かに解脱を求めよ』　身は彼の射的の如し　的あれば箭則ち中り　身ありて衆苦加はる　身なければ則ち苦なし』　闘諍の門に如似たり　擊皷を其の側に著くるに　人あつて遠きより來り　疲極りて睡眠せんと欲するの時　門に至りて皆皷を打つ』　未だ曾て休息あらず　此の人眠るを得ずして皷を擊つ者に瞋り　彼れ多人と共に爭ふ』　後に其の根本を思ふに　此の本は乃ち是れ皷なり　都て衆人の過に非ず　即ち起ちて皷を斫り破り　乃ち安穩に眠るを得たり』　比丘の身は皷の如し　樂の爲の故に出家せんに　蚊虻蠅毒草　皆能く人を蜇螫せん　應に常に勤めて精進し　此の身を遠離すべし　久しく樂住するを得る勿れ』　應に其の元本を觀るべし　乃ち是れ[七]陰界の聚なり　陰界の苦を破壞せば　安隱の涅槃に眠らん』

時に彼の和上、是の偈を說き已りて而も之に語げて言く。「汝今に於ては宜しく瞋忿惱害の心を捨つべし、設ひ他を惱さんと欲せんに、當に我が說を聽くべし。(1)一切世間は悉く皆燒惱す、云何か方に衆生を惱害せんとは欲する、(2)一切衆生は皆死王に屬す、我及於び汝幷びに彼の國王も、久しからず當に死すべし、汝今何の故に怨家を殺めんとは欲する、(3)一切の有生は皆死に歸す、何ぞ汝の害を須ゐん、(4)生には必ず死あること、疑難あるなし、日の出でゝ必ず當に滅沒すべきに如似たり、體性は是れ死なり、何ぞ加害を須たん、汝設ひ彼を害せんも、何の利樂かはある、(5)汝を持戒と名く、人を加毀せんと欲さば、未來世に於て必ず重報を得て苦を受くること無量ならん、此の報も亦爾り、何ぞ毀を加ふるを須たん、(6)彼の王汝を毀け、汝大瞋を起す、瞋恚の法は現在に大苦に、未來世に於て復た苦報を獲ん、(7)先づ當に瞋を害むべし、云何か彼を傷はん、若し刹那に於て瞋恚

【七】陰界。五陰十八界。

惡馬を禁制する如からん　禁制は善乘と名け　制せざるを放逸と名く　居家を牢繫と名け　出家を解縛と爲す」と　汝既に解脱を得　返つて還び枷鎖　牢縛繫閉の處を求むるや　瞋は是れ內の怨賊なり　汝瞋に隨順する莫れ』　瞋は禁制する所たり　佛は是の緣を以ての故に　多聞者を讚じたまへり』　仙聖中の王　汝當に彼の語に隨ふべし　今當に多聞を憶すべし』　瞋恚を逐ふこと莫れ　*若し鐵鋸を以て　身體及び支節を解かんとも』　佛は六富那等の爲に　宣說すべき所なれば　汝宜しく多聞を念ずべし』　是の如き等の言語　當に憶すべし、舍利弗は　*五不惱法を說けり　汝當に善く觀察すべし』　世間の八法　汝宜しく深く校計すべし　瞋恚の過惡　應當に自ら觀察すべし』　出家の標相は　心と相と相應するや　相應せずと爲すや　比丘の法は　他より乞ひて自活す　云何か信施を食しつ　而も瞋恚を生ぜん』　他の食は腹中に在り　云何か瞋恚を生じて　而も信施の　消滅する所と爲んや』　汝法を行ぜんと欲せば　應に瞋恚を起すべからず　自ら行法の人と言ひ　衆の爲に法を作して則ち　而も瞋恚を起さば　是れ應に作すべからざる所なり』　瞋忿して其の心を惱し　而も口に惡言を出すは　智人の譏呵する所なり　是の故に應に爲すべからず』　諸有出家は　應當に三事を具して　比丘に調順なるべし　忍辱して瞋を起さざると　決定して禁戒を持すると　實語して妄說せざるとなり』　善く忍辱を修めて　宜しく瞋意を生ずべからず　沙門の種類は　應に惡言を出すべからず　應に柔和の衣を著くべし』　出家は應に　瞋りて麤惡の語を出すべからざる所なり　猶仙禪の坐に　劍を抽いて上に著抱するが如かれ』　比丘の器と衣服は　一切俗と異る　瞋忿して白衣に同ずる　是れ未だ應に作すべからざる所なり　麤言すること俗人に同じきを　云何か比丘と名けん』　剃髮して飾好を

* 以下「…舍利弗」に到るまで、句間の連絡に疑はしき點あり。

【六】 三本は富那奇とす。本梨破群那のこと。前卷註四及び六を見よ。

* 舍利弗の語。

婆羅那、心に苦惱を生じ、瞋相外に現れ、龍の闘ふに舌を吐いて光を現ずるが如く、亦雷電の如し。而も偈を說いて言く。

和上應當に知るべし　瞋慢もて我が心を燒けり　猶枯乾樹の　中空にして而も火を起すが如し』　出家して梵行を修め　已に爾の所に時を經たり　我が今に於ける如くば　共の家に還歸せんと欲す』　儜劣怯弱なる者　猶是の苦に堪えず　況や我能く　此の如き大苦の事を堪忍せり』　我今家に歸りて　還び王位を取り　諸の象軍衆を集めて　地を覆ひて皆黑色ならしめんと欲す』　瞋恚の心熾盛にて　晝夜に休息するなし　猶大猛火の　山野を梵燒するに　螢火の中に在つて燋るゝが如く　巴樹提も亦爾らん』

是の偈を說き已りて卽ち三衣を以て同梵行者に與へ、涕泣哽咽して和上の足を禮し、辭して家に還らんと欲す。復た偈を說いて言く。

和上當に我の　懺悔して罪過を除くを聽すべし　我今必ず家に向はん　心意に願樂たく　出家法の中に於て　此の怨を滅ぼすを得ず

時に彼の和上、修多羅義の中に於て善く能く分別することに最も第一爲り、辭辯樂說することも亦第一と爲す。而して之に告げて言く。「汝今應に斯の如き事を作すべからず、所以は何ん、此の身は堅からず、會ず盡滅に歸せん、是の故に汝今應に身の爲に佛法に違遠すべからず、應當に無常不淨を觀察すべし」と。卽ち偈を說いて言く。

此の身淸淨ならず　九孔恒に汚を流す　臭穢甚だ惡むべし　乃ち是れ衆苦の器なり』　是の身極めて鄙陋なり　癰瘡の聚まる所　若し少かに棖觸する時　大苦惱を生ぜん』　汝意に此に迷著せるは　殊に智慧の理に非ず　應に下劣の志を捨つべし』　如來所說の偈　汝今宜しく憶持すべし　*忿恚瞋惱の時　能く自ら禁制すれば　猶鞦勤を以て

* この偈の出典不明。

に免るべからず、設ひ還た口を出でて活を取らんも亦難きが如し。婆羅那の難より出づるを得ることとも亦復た是の如し。目を張りて恐怖し、又更に打たれんを懼れ、擧身に血流れて衣を著くる能はず。衣を抱いて而も走り、四望顧視すること、猶人あつて復た來つて己を捉へんかを恐るゝごとし。同梵行者是の事を見已つて、即ち偈を說いて言く。

誰か悲愍の心なくして　此の比丘を打毀せる　云何か出家の所に　而も勇健の想を生じ
云何か都て忍ばずして　此の殘害の心を生ぜる』　過なきに橫まに害を加ふ　實に是れ非理の人なり　出家は榮貴を捨て　單獨にして勢力なし』　衣と鉢と以て自ら隨へ盈長の物を畜へず　是れ何れの殘害人ぞや　毀打乃ち是の如くなる』

諸の同學等、扶接して手を捉り、尊者迦旃延の所に詣り、婆羅那を見て聲を擧げて涕哭し、厭惡を生じ、而も偈を說いて言く。

彼の閻浮(Jambū)の果の如し　赤白青の班駮あり　亦[五]赤淤處の如し*　血流處々に出づ　誰か汝の身體を取りて　是の如き色に作さしめし

爾の時比丘婆羅那、己が身の破れて血流せる處を以て、尊者に指示して即ち偈を說いて言く。

我に救護なきが如し　單孑として乞ひて自活す　自ら省するに過患なきも　輕欺の故に打たる』　巴樹提は自恣なる　豪貴の土地主として　暴縱逸の心を起して　惡鞭すること火を注ぐが如く　用て我身を燒毀す』　我に既に過惡なし　橫まに來つて打撲を見せ　傷害乃ち是に致せり

尊者迦旃延、婆羅那の其の心に忿恚せるを知つて而も之に告げて言く。「出家の法は己が身を護らず、心の苦を滅せんことを爲す」と。即ち偈を說いて言く。

汝の身は既に苦厄す　云何か怨恨を生ぜる　瞋恚の鞭を起す莫れ　狂心は用て自ら傷ふ

【五】赤淤處は赤き泥。
＊如は原本に「有」するも誤ならん。

に坐靜せり。
時に諸の宮人、性として華果を好み、林中に詣りて遍く行きて求覓す。婆羅那比丘、盛年に出家して極めて端正と爲す。爾の時、宮人彼の比丘の年既に少莊にして容貌殊特なるを見て、希有の想を生じ、而して是の言を作さく。「佛法の中に乃ち是の人ありて出家學道せり」と。卽ち邊に遶りて坐す。時に巴樹提王、既に眠寤め已りて宮人及び諸の左右を顧瞻するに、盡く各四散して求覓するも得ず。王卽ち自ら所在を求めて追尋し、諸の宮人の比丘を遶りて坐し、其の說法を聽けるを見て、卽ち偈を說いて言く。

鮮白の衣を著くと雖も　口に辯說する如からず　千女圍遶して坐し　其の容貌を愛敬せり。

爾の時彼の王、瞋忿を以ての故に比丘に語げて言く。「汝羅漢を得るや」。答へて言く。「得ず」。「汝阿那含を得るや」。答へて言く。「得ず」。「汝須陀洹を得るや」。答へて言く。「得ず」。「汝初禪二禪乃至四禪を得るや」。答へて言く。「得ず」。
爾の時彼の王、是の語を聞き已りて甚だ大いに忿怒し、尊者に語げて言く。「汝は離欲の人に非ず、何に緣つてか此の宮人と共に坐する」と。卽ち左右に勅して此の比丘を執へ、衣服を剝脫して唯だ內衣を留め、棘刺の杖を以て用て比丘を打つ。時に宮人等、涕泣して王に白さく。「彼の尊者に罪過あるなし、云何か撾打すること乃し是の如きに至るや」と。王是の語を聞きて倍す瞋忿を增し、撾打甚だしきに過ぐ。
爾の時、尊者、先に是れ王子にて、身體柔軟にして苦痛を更ず。擧體血流る。宮人之を覩て涕淚せざるなし。尊者婆羅那、是の撾打を受けて遺命幾ばくもなく、悶絕して地に躄え、良久しくして乃ち穌へる。身體遍く破れて狗の嚙嚙せる如く、譬へば人あつて蝰蛇に吸はれ、已に口に入りて實

戰掉して自ら寧からざるが如し』　諸天は音樂を作し　空中に香花を雨らす　鍾鼓等の衆音　同時に倶に聲を發し』　天人樂音等　一切皆唱を作す　衆生皆擾動し大海も亦聲を出す』　天は細末の香を雨らし　悉く皆諸道に滿つ　花は虛空の中に於て遲速して下ること同じからず』　虛空の諸天女　散花して地中に滿たし　若干種の綵色あり　金寶もて校飾せる衣は　天より雨の如く墜ち　天衣の諸の縷繢は　相觸れて而も聲を出す』　諸人の屋舍の中には　寶器自らに發出して　舍宅を莊嚴し　自然にして聲音を出すこと　猶天の伎樂の如し』　諸方に雲翳なく　四面皆清明たり微風は香氣を吹き　河流は靜かにして聲なし』　夜叉も法を渇仰し　增長培た慶仰すらく「久しからずして正覺を成ぜん」と　歌詠し而して讃譽し　內心極めて歡喜せり』　諸の勝れたる乾闥婆は　歌頌もて音樂を作し　美音輕重の聲もて　讃歎して是の言を出すらく』「久しからずして成佛を得　誓願の海を度つて　速疾に吉處に到り　願を果し已つて成就せん　憶念す、我を度脫したまへ」と』

時に彼の帝釋、毘首羯磨と共に菩薩を供養し已つて天宮に還りぬ。

六五、*迦旃延尊者娑羅那比丘の巴樹提王に忿恚せるを度せる緣

復た次に、應に善知識に近づくべし。善知識に近づけば、結使熾盛なるも能く消滅するを得。

我昔曾て聞く。素毘羅王(Suvira)の太子を娑羅那(Sāraṇa)と名く。時に王、崩背し、太子娑羅那肯て紹繼せず、位を捨てゝ弟と尊者*迦旃延(Kātyāyana)の所に詣り、出家を求索し、既に出家し已りて尊者迦旃延に隨ひて巴樹提王(Pradyota)の國に詣り、彼の林中に在りて住止す。巴樹提王、諸の宮人を將ゐて彼の林中に往詣し、樹下に眠息す。彼の尊者娑羅那、乞食し迴り還りて樹下

* 梵筴斷簡、二一三、二一四葉。

* 佛世の迦旃延に非ざるべし。時代不明。

諸有留難の苦も　應當に共に遮止して　其が與に伴黨と作り　修行久しく堅固ならしむべし』　大悲の地に安住する　一切種智の樹は　萠芽始めて現れんと欲す　智者應に擁護すべし』

毗首羯磨、釋提桓因に語げて言く。「今大王、一切衆生に於て體性もて悲愍す、當に彼の身をして還復して故の如からしむべし、願はくは一切衆生の智心動かざれ」と。爾の時帝釋、彼の王に問ひて言く。「一鴿の爲に能く此の身を捨つ、憂惱せざるや」と。爾の時大王、偈を以て答へて言く。

此の身は捨棄に歸すこと　猶彼の木石の如し　會ず捨して禽獸に與へ　火燒して地中に朽ちん』　此の無益の身を以て　而も大利益を求む　應當に極めて歡喜すべく　終に憂悔の心なし』　誰か智慧ある者にして　此の危脆の身を以て　堅牢の法に博貿して　而して當に欣慶せざるべけんや』

爾の時帝釋、大王に語げて言く。「此の語信じ難し、又此の如きの事は實に未曾有なり、誰か信ずべき者ぞや」と。大王答へて言く。「我自ら心を知る、世に大仙ありて能く觀察すれば、必ず我心を知ること實に返異なからん」と。帝釋語げて言く。「汝は實語を作せり」と。

爾の時大王、是の誓を作して言く。「若し我今心に悔恨なくんば、當に此の身をして還復して故の如からしむべし」と。爾の時大王、己が割く所の身肉の處を觀じて、即ち偈を說いて言く。

我れ身肉を割く時　心に苦樂を存せず　瞋なく亦憂なく　不喜の心あるなし』　此の事若し實ならば　身は當に復ること故の如かるべし　速かに菩提の道を成じて　衆生の苦を救はん』

是の偈を說き已る。爾の時大王の割く所の身肉還復して故の如し。即ち偈を說いて言く。

諸山及び大地　一切皆震動し　樹木及び大海　涌沒して自ら停らず　猶恐怖する者の

時に鷹、問ひて言く。「汝何の故に起つや、爲に悔いんと欲するや」と。大王答へて言く。「我れ悔いんとは欲せず、乃ち身を以て都て秤上に上らせて、此の鴿の命を救はんと欲す」と。

爾の時大王、秤に上らんと欲するの時、顏色怡悅す。左右の親近都て視るに忍びず。又諸人を驅りて見せしむるに忍びず。時に王、語げて言く。「意を恣にして看せしめよ」と。時に彼の大王、身肉を割き盡くし骨節相拄ること、猶し畫像の雨中に在つて毀滅して見難きが如し。爾の時大王、是の唱言を作さく。「我今身を捨つ、財寶の爲ならず、欲樂の爲ならず、妻子の爲ならず、亦宗親眷屬の爲ならず、乃ち一切種智を求めて衆生を救拔せん」と。卽ち偈を說いて言く。

天人阿修羅　乾闥婆夜叉　龍及び鬼神等　一切衆生の類にして　我が身を見る者あらば　皆退轉せざらしめん』　智慧を貪る爲の故に　苦毒して此の身を割く　種智を求めんと欲さば　應當に慈心を堅くすべし　若し堅實ならざれば　是れ則ち菩提を捨てん』

爾の時大王、身命を惜まずして卽ち秤上に登る。時に諸の大地六種に震動すること、猶草葉の波に隨つて震蕩するが如し。諸天は空中に未曾有と歎じて唱言すらく。「善き哉、善き哉、眞に精進にして志心堅固なりと名く」と。卽ち偈を說いて言く。

我彼の命を護るの故に　自ら己身の肉を割くと　純善にして悲愍を懷き　執志して動轉せず　一切諸の天人　皆希有の想を生ぜり

爾の時化鷹、未曾有を歎ずらく。「彼の心堅實なり、久しからず成佛せん、一切衆生に、將に恃怙あらんとす」と。釋、本形に復りて大王の前に在り、毗首羯磨に語ぐらく。「爾の身に還復せよ、我等今當に共に供養を設くべし、而して此の菩薩の志力堅固なること、須彌山の大海に處して終に動搖するなきがごとし、菩薩の心も亦復た是の如し」と。卽ち偈を說いて言く。

我等應に　勇猛精進者を供養すべし　今當に共に起發して　讃歎を增長せしむべし』

絕す。而も自ら勸喩し、卽ち偈を說いて言く。

咄、心應に堅住すべし　此の如きは微小の苦なり　何の故に乃ち迷悶する』　汝、諸の世間を觀ぜよ　百千の苦纏ひ逼り　歸なく救護なく　覆育する者あることなくして　悉く自在を得ず』　唯だ汝に心あらば　當に爲に救濟と作るべし　何の故に自ら責めずして　橫まに苦惱の想を生ずる』

釋提桓因、是の念を作さく。「今此の大王の所爲、甚だ苦し、心能く定まれるや不や」と。卽ち之を試みんと欲して是の如き言を作さく。「汝今苦痛甚だしく、忍ぶべき難し、何ぞ罷休せずして惱を受くること乃ち爾るや、汝今*以足、須らく是を作すべからずんば、鴿を放つて去らしめよ」と。菩薩微笑して而も之に答へて言く。「終に痛を以て我が誓の心に違はざらん、假設ひ痛の是に過ぐる者あらんも、終に退想なからん、今の小苦を以ては方に地獄に於て喩と爲すべからず、故に應に意を起して苦惱の衆に於て倍す慈悲を生ずべし」と。是の念を作し已りて卽ち偈を說いて言く。

我今身を割いて苦しむも　心意極めて廣大なり』　智小さく志弱き者の　地獄の苦を受くること　此の如きの苦長遠に　深廣にして崖畔なし　云何か堪忍すべけん』　我是の如き等を愍む　是の故に應に速疾に　急いで菩提を求むべし　是の如き等の諸の苦を救拔して解脫せしめん』

時に天帝釋、復た是の念を作さく。「大王の所作、故に未だ大苦ならず、復た苦惱の是より甚しき者あらば、心爲に動くや不や、我今當に試むべし」と。是の思惟を作して默然として語らず。時に彼の大王、割く所の肉を以て秤の一頭に著け、復た鴿の身を以て一頭に著くるに、鴿身轉た重し。復た兩髀及以び身肉を割きて用て秤頭に著くるに、猶鴿よりも輕し。時に彼の大王、深く疑怪を生ずらく。「何に緣つてか乃ち爾る」と。卽便ち身を擧げて秤上に上らんと欲す。

＊「以足」の二字通じ難し。恐らく「以是」の寫誤ならん。

ぐらく。「速かに秤を取り來れ、以て我が肉を割いて此の鴿の身に貿えん、今正に是れ我が大吉會の日なり、云何か是れ吉會なる」と。即ち偈を說いて言く。

老病の所住の處　危脆甚だ臭穢なり　久しく應に法の爲の故に　此の賤穢の肉を捨つべし

時に王の侍人、勅を奉じて秤を取る。爾の時大王、秤の來るを見ると雖も都て愁色なし。即ち其の股を出すに、脚の白くして滑澤なること、多羅葉の如し。一侍人を喚んで即ち偈を說いて言く。

汝今利刀を以て　我が股肉を割取せよ　汝は但だ我が語に順へ　疑畏の想を生ずる莫れ』

難苦の行を作さざれば　一切智を得ず　一切種智とは　三界中の最勝なり』　菩提は輕緣を以て　終に獲得すべからず　是の故に我今は　極めて應に堅固を作すべし』

爾の時侍人、悲淚を目に滿し、叉手合掌して是の如き言を作さく。「願はくは愍恕せられよ、我は作す能はず、我常に王の供給使令を受く、何ぞ刀を以て王の股肉を割くに忍びん」と。即ち偈を說いて言く。

王は是れ救濟者なり　我設ひ王の肉を割かんに　我が身及與び刀は　應疾に當に墮落すべし

爾の時大王、自ら刀を捉つて股肉を割かんと欲す。輔相大臣號泣して諫諍するも止まらしむ能はず。城內の諸人も亦各勸請するも其の語に隨はずして股肉を割く。親近の諸人も亦各返顧して之を見るに忍びず、婆羅門は各其の目を掩ひて能く觀るに忍びず、宮中の婇女聲を擧げて悲哭す。天・龍・夜叉・乾闥婆(Gandharva)・阿脩羅・緊那羅(Kimnara)・摩睺羅伽(Mahoraga)等は、虛空の中に在りて各相謂ひて言く。「此の如きの事、信に未だ曾てあらず」と。

爾の時大王の身體軟弱にして、王宮に生れ長じて未だ曾て苦に遭はず、身を擧げて毒痛し迷悶殯

一切に於て　即ち是を*客作人とし　要ず當に守護を作して　苦危を有らしめざるべし」

爾の時彼の鷹、復た王に白して言く。「大王よ、願はくは此の鴿を放ちたまへ、是れ我の食なり」。王鷹に答へて言く。「我久しく慈を得て、衆生の所に於て盡く應に救護すべし」。鷹王に問ひて言く。「云何か久しく得るや」。爾の時大王、即ち偈を說いて言く。

我初て菩提を發すや　爾の時即ち　諸の衆生等を攝護して　盡く慈愍の心を生じき

鷹復た偈を以て*答へて言く。

此の言若し眞實ならば　速かに應に我に鴿を還すべし　若し我れ飢餓もて死さば　汝は即ち慈心を捨せん

王、是を聞き已りて即便ち思惟すらく。「我が今の如くんば、身を處すること極めて難し、我當に云何か籌量して理を得べけんか」と。是の念を作し已りて即ち鷹に答へて言く。「頗し、餘肉もて汝の命を活かすこと有りや不や」と。鷹、王に答へて言く。「唯だ新しき肉と血もて、我が命を濟ふべし」と。爾の時、大王是の思惟を作さく。「當に何の方をか作すべき」と。即ち偈を說いて言く、

一切諸の衆生に　我れ常に護念を修む　此の如き熱血肉は　殺さずんば終に得ず

是の念を作し已りて、「唯だ己が身の肉もて、以て彼を濟ふべし、此れ極めて易しと爲す」とて、復た偈を說いて言く。

自己が肉を割きて　而して用て彼の鷹に與へん　乃至己が身を捨てゝ　當に恐怖せる命を護るべし

爾の時大王、是の偈を說き已りて便ち鷹に語げて言く。「汝我肉を食して、活くるを得ると爲すや不や」。鷹言く。「爾るべし、願はくは王よ、身肉を秤量して鴿と等しからしめ、而して以て我に與へよ、爾れば乃ち之を食せん」。爾の時大王、是の語を聞き已りて心に歡喜を生じ、即ち侍人に語

＊原文、「即是客作人」とあり、通じ難し、「即是作客人」の寫誤なりとせば「即ち是を客人と作し」と讀まる。

＊答は問の誤ならん。

ず堅固ならんを』

毘首羯磨言く。「我等今、當に而も往いて試看すべし、若し實に不動なれば當に供養を修むべし」と。爾の時帝釋、菩薩の心を觀察せんと欲する爲の故に、自ら化して鷹と作り、毘首羯磨に語ぐ。「汝化して鴿と作れ」と。時に毘首羯磨、卽ち化して鴿と作り、身は空の青きが如く、眼は赤珠の如くして、帝釋の所に向ふ。爾の時帝釋、憐愍の心を生じて毘首羯磨に語るらく。「我等云何か菩薩の所に於て而も逼側を生じて、彼の尸毘王の爲に苦惱の事を作さんや、復た苦を受くと雖も、好寶を鍊ふるが如し、數ば試みて眞を知らん、試寶の法は、斷截し屈折し火に燒き椎もて打つて、乃ち始めて眞を知る」と。

爾の時化鴿鷹の爲に逐はれ、鴿は恐怖を現はして大衆の前に於て來つて尸毗王の腋下に入る。其の色の青綠なること蓮華の葉の如く、其の光の赫奕たること黑雲中の虹の如く、嘴白くして嚴麗なり。諸人皆希有の想を生じ、卽ち偈を說いて言く。

實の慈悲心あり　衆生皆體信す　日の暗き時に　自己の巢に趣くに如似たり』

化鷹是の言を作さく　「願はくは王よ我が食を歸せ」と。

爾の時大王、鷹の語を聞き已り、又彼の鴿の極めて恐怖を懷けるを見て、卽ち偈を說いて言く。

彼の鴿鷹を畏るゝ故に　連翩し來つて我に歸る　口に言ふ能はずと雖も　怖れ泣いて淚は目に盈てり　是の故に今に於ては　宜しく應に救護を加ふべし

爾の時大王、鴿を安慰するの故に、復た偈を說いて言く。

汝驚怖を生ずる莫れ　終に汝をして死せしめて　但に吾身のみ存せしめざらん　必ず當に汝を救ふべし　豈に獨り汝を救護せんや　幷びに諸の衆生を護らん』　我れ一切の爲の故に　而も役力者と作りて　國人の雇を受け　六分して我に一を輸るが如く　我今

卷の第十二

六四、*尸毘王鴿命を救ふ緣

復た次に、佛法は聞き難し。如來往昔、菩薩爲りし時、身命を惜まず以て法を求めたまへり。是の故に應當に勤心して法を聽くべし。

我昔曾て『[一]鴿緣譬喩』を聞く。邪見師あり、釋提桓因の爲に顚倒の法を說けり。彼の外道師、眞智あるに非ずして、自ら稱して一切智と爲せり。說いて言く。「阿耨多羅三藐三菩提（Anuttara-samyaksambodhi 無上等正覺）はなし」と。爾の時帝釋、是の語を聞き已りて心に不悅を懷き、極めて憂愁を生ず。爾の時帝釋、諸の世間を見るに苦行者あり、盡く其の所に到りて一切智を推求せり。[二]帝釋問經の中の偈に說くが如し。

我今意に欲求して　滿足するを得る能はず　晝夜に疑惑を懷いて　是と非とを識るなし
我れ久遠より來た　恒に思ひて廣く推求するも　大眞濟の　今何くに所在と爲すや
を知らず』

[三]毘首羯磨（Viśvakarman）帝釋に白して言く。「天上に處して應に憂愁すべからず、世間の[四]拘尸國（Kāśi）の王、名を尸毘（Śibi）と曰ふ、精勤苦行して三藐三菩提を求む、智者觀じ已りて、是の王、久しからずして必ず當に成佛すべし、往いて親近すべしといふ」と。帝釋答へて言く。「彼の所作移動せざるや」と。卽ち偈を說いて言く。

猶魚の生子の如し　多なりと雖も成者少し　又菴羅果の如し　生と熟と亦別ち難し』
菩薩も亦是の如し　發心する者甚だ多きも　成就する者極めて少し』　若し難苦行を
作して　而も退轉せざれば　決定して得と說くべし　菩薩を知らんと欲せば　執心必

* 梵、殘斷簡、二〇六、二〇八、二一二、二一三葉。

【一】次註三を見よ。

【二】Sakra-paripṛcchā-sūtra, 長阿第十四經、中阿一三四經、巴利長部二一經の外、單本帝釋問經あり、又雜寶藏經の第七三經中に收む。但し偈句何れの本とも相違あり。

【三】以下尸毘王本生は智度論卷四、本生鬘論卷一、六度集經第一、賢愚經第一、撰集百緣經第四等に出づ。

【四】拘尸は迦尸の寫誤か、或は原典に Kośi と誤寫されてゐたものか、迦尸を正しとし、今のベナレスなり。但し梵本に缺く。

し』　少しく我が懺悔を聽したまへ　猶脚跌者の　地に扶れて還び起つを得る如く
我の少供を得るを待ちたまへ』

時に彼の珠師、叉手合掌して比丘に向ひ、重ねて偈を說いて言く。

南無淸淨行　南無堅持戒　是の極苦難に遭ふも　毀缺の行を作さず』　是の如き惡に
遇はずんば　持戒も希有に非ず　要ず當に此の苦に値ふべし』　能く禁戒を持すれば
是を則ち名けて難と爲す　鵝の爲に身に苦を受くるも　禁戒を犯さず　此の事實に有
り難し』

時に穿珠師、旣に懺悔し已り、即ち比丘をして所止に還歸せしむ。

と。比丘答へて言く。「我が願を滿さず、樂しまざる所以なり、我先に心を作して、鵝の命に代らんを望みしに、今此の鵝死して願は滿足せず」と。珠師問ひて言く。「何の願をか作さんと欲せる」。比丘答へて言く。「佛は菩薩と作りし時、衆生の爲の故に手足割截するも、身命を惜みたまはず、我彼を學ばんと欲せり」と。即ち偈を說いて言く。

[九]菩薩往昔の時　身を捨てゝ以て鴿に貿へたまふ　我亦是の意を作して　命を捨てゝ鵝に代らんと欲せり』　我れ最勝心を得て　此の鵝の命を全うせんと欲せるに　汝の鵝を殺すに由つての故に　心願は滿足せざりし』

珠師問ひて言く。「汝是の語を作すも、我猶解せず、汝當に我が爲に廣く所由を說くべし」と。爾の時比丘、偈を說いて答へて言く。

我れ赤色の衣を著け　珠に映ひて肉色に似たり　此の鵝は是を肉と謂ひて　即便ち之を呑食せり』　我れ此の苦惱を受くるは　彼の鵝を護らんが爲の故なり　逼切甚だ苦惱しつ　*彼をして命を全うするを得しめんと望めり』　一切諸の世間に　佛は皆子の想を生じたまひ　都て功德なき者にも　佛亦悲愍を生じたまへり』　瞿曇は是れ我が師　云何か物を害したまはん　我は是れ彼の弟子　云何か能く害を作さん』

時に彼の珠師、是の偈を聞き已りて即ち鵝の腹を開くに而も還び珠を得たり。即ち聲を擧げて哭き、比丘に語げて言く。「汝は鵝の命を護りて身を惜まず、我をして此の非法の事を造らしめぬ」と。即ち偈を說いて言く。

汝は功德の事を藏むること　灰を以て火を覆ふが如し　我は愚癡を以ての故に　數百の身を燒惱す』　汝は佛の標相に於て　極めて甚だ相稱へりと爲す　我が愚癡を以ての故に　善く觀察する能はず　癡火の燒く所と爲りぬ　願はくは當に暫し留住したまふべ

【九】戸毘本生、次巻第六十四章に出づ。その註三を參照。

* 「彼」三本による、麗本「使」に作る。

師、涕泣懊惱し、而も偈を說いて言く。

我汝を打撲すると雖も　極めて大いに苦惱を生ず　王の我に珠を責めん、憶ひて　復た汝を苦治せんと欲す』　今汝は是の苦を捨てんも　亦我をして惡を離れしめよ　汝は是れ出家の人なり　應に貪欲を斷つべし　宜しく貪愛の心を捨てかし　還た當に我に珠を與ふべし』

比丘微笑して而も偈を說いて言く。

我に貪心ありと雖も　終に此の珠を利せず　汝當に我が說くを聽くべし　我今名稱を貪りて　智者に歎羨せらる』　亦禁戒　及以び解脫の法を貪る　最も是れ我が貪る所は　甘露の道跡なり　汝の摩尼珠に於て　實に貪利の心なし』　我は糞掃衣を著け　乞食して以て業と爲し　樹下に住止し　此を以て我は足れりと爲せり』　何の因緣を以ての故に　乃ち當に偸賊を作すべけん　汝宜しく善く觀察すべし』

穿珠師、比丘に語げて言く。「何ぞ多語を用ひん」と。遂に繫縛を加へ、倍す更に撾打し、繩を以て急に絞る。耳眼口鼻、盡く皆血出づ。時に彼の鵝卽ち來つて血を飲む。珠師瞋忿して鵝を打ち、卽ち死す。比丘問ひて言く。「此の鵝は死せりや活けりや」と。珠師答へて言く。「鵝の今の死活は、何ぞ故に問ふに足らん」と。時に比丘、卽ち鵝の所に向ひ、鵝の旣に死せるを見て涕泣して樂しまず。卽ち偈を說いて言く。

我は諸の苦惱を受けて　此の鵝をして活かしめんと望む　今我が命は未だ絕えず　鵝は我が前に在つて死せり』　我れ汝の命を護らんと望んで　是の極辛苦を受けしに　何ぞ意はん汝の先に死せんとは　我が果報は成らず』

穿珠師、比丘に問ひて言く。「鵝は今汝に於て竟に何の親かありて、愁惱すること乃ち爾るや」

師復た言く。「此の比丘甚だ是れ堅靭なり、是の苦惱を受くるも猶取らずと言ふ」と。時に彼の珠師、貧の切なるを以ての故に珠を得るに由なし。更に復た瞋り打つ。時に彼の比丘、兩手並に頸を並に繫縛せられて、四向に顧望するも、告ぐる所を知るなし。必ず空しく死を受けん。時に彼の比丘、而も是の念を作さく。「生死に苦を受くること皆應に是の如くなるべし、應當に堅辭して戒律を犯すなかるべし、若し當に毀戒せば、地獄の罪を受けんこと今の苦に過ぐるものあるべし」と。即ち偈を說いて言く。

當に一切智を念ずべし　大悲もて體と爲したまふ者　是れ我が尊重の師なり　當に佛の[六]富那伽に告げたまふ所の言を憶ふべし』　又復た當に憶念すべし　林間に　[七]忍辱仙(Kṣāntideva)が　手脚を割截され　并びに其の耳鼻を劓がるゝも　瞋恚の心を生ぜざりしことを』　比丘應當に憶ふべし　修多羅の中に說かく　[八]佛比丘に告げたまはく「若し鐵鋸を以て　支節手足等を解かるとも　應に惡心を起すべからず」と』　但だ當に專ら佛を念ずべく　應當に出家を念じ　及び諸の禁戒を憶すべし』　我れ過去世に於て婬泆もて身命を捨つること　是の如きは數ふべからず　羊鹿及び六畜として　身を捨つることとも計るべからず』　彼の時は虛しく苦を受けぬ　戒の爲に身命を捨つるは禁を毀つて生くるよりも勝る』　假りに自ら擁護せんと欲するも　會ずや歸して終に當に滅ぶべし　如かず持戒を爲して他の爲に身命を護らんには』　此の危脆の身を捨てて以て解脫の命を求めん　俱に身命を捨つると雖も　功德を具する者あり　得る所なき者あり』　智者は身命を護り　命稱に功德を具し　愚者は身命を捨てゝ　徒らに喪ひて獲る所なし』

時に彼の比丘、穿珠師に語げて言く。「悲心を捨つること莫れ、極めて苦哉と爲す」と。時に穿珠

【六】　富那伽。次卷第十二(註六)より見るに前々註鋸齒喩を說かれし人牟梨破群那を指す如し。卽ち Moryia-phaggunaの後半を phaggunaと傳へたるを富伽那と寫し、更に倒寫したものであらう。
【七】　忍辱仙。この物語は、六度集經卷五、出曜經二三、智度論一四、及二六等に出で、巴利本生經(III. p. 39—)にもその異傳あり。
【八】　註四に同じ。

出家の法には解脫に至るまで常に身命を護り、嶮難に處すと雖も而も身命を全うす、今我決定して此の身を捨て、出家の衆をして我名を稱美せしめん」と。卽ち偈を說いて言く。

我れ身命を捨つるの時　地に墮すること乾ける薪の如からん　當に人をして稱美せしむべく　鵝のために能く身を捨てん』　亦後人の　皆憂苦惱を生ずる者をして　而も此の如き身を捨つるを　聞かば勤精進せしめん』　眞道を修行し　諸の禁戒を堅持して毀禁者をして　持戒を願樂せしむることあらん』

爾の時珠師、比丘に語げて言く。「汝、向に說く所諂曲にして實ならず、復た人をして其の美名を稱せしめんと欲せり」と。比丘答へて言く。「汝、我の今著くる染衣に虛妄ありと謂へりや、何の故にか美を現ぜん、諂曲の爲ならず、自ら歡喜せんのみ、亦人をして我が名を稱歎せしめず、世尊をして我が至心を知らしめまつらんと欲するのみ」と。卽ち偈を說いて言く。

大仙の弟子　禁戒を持せんが爲の故に　捨て難き命を捨てゝ　諸の世間人をして　諸の出家せる者に於て　未曾有の想を生ぜしめん　今未だ想を生ぜずと雖も　將來必ず當に生ずべし

時に珠師、比丘を執縛して而も打捧を加へ、比丘に問ひて言く。「珠は何處に在りや、我に珠を還し來れ」と。比丘答へて言く。「我珠を得ず」と。珠師涕泣して心に悔恨を生じ、又王珠を以て益ゝ以て苦惱し、卽ち偈を說いて言く。

咄なる哉や此の貧窮　我れ善惡の業を知りて　悔恨の心を生ぜり　咄なる哉や此の貧窮貧に由るの故に惡を造れり

時に穿珠師、卽便ち涕泣して比丘の足を頂禮し、而も之に白して言く。「我に歡喜を賜へ、我に珠を還し與へよ、汝自燋する莫れ、亦我を燋す莫れ」と。比丘答へて言く。「我れ實に取らず」。珠

破戒を稱讃せん　是の如き稱讃は輕し　猶能く我が心を燋さん』　是の因緣を以ての故に　應に禁戒を毀つべからず　今大苦中に入るも　我れ今應當に學すべし』　鵝の水乳を飲んで　能く其の乳をして盡さしめ　唯だ獨り其の水を留むるが如く　我今亦當に爾るべし　惡を去りて而も善を取らん』　[五]經に是の如き說を作さく　「智者は愚と共に　復た其の事を同じうすと雖も　終に彼の惡に從はず」と』　善人は能く惡を棄つること　鵝の水乳を飲むが如し　我今身命を捨てゝ　此の鵝の命の爲の故にし　我が護戒の因に緣つて　用て解脫道を成ぜん』

爾の時穿珠師、斯の偈を聞くの故に、比丘に語げて言く。「我が珠を還し來れ、若し還すを見ずんば、汝徒らに苦を受け、終に相置かざらん」と。比丘、答へて言く。「誰か汝の珠を得て、默然として而も立てるや」と。珠師語げて言く。「更に餘人なし、誰か此の珠を偸まん」と。時に彼の珠師、卽ち門戶を閉して比丘に語げて言く。「汝は今日に於て好んで自ら堅持するや」と。比丘尋で卽ち四向顧望するに、怙恃すべきなく、鹿の園に入りて所趣を知るなきが如く、比丘の救なきも亦復た是の如し。

爾の時比丘、卽ち自ら身を斂め衣服を端正す。彼の人又復た比丘に語げて言く。「汝今將に我と鬪はんと欲するや」と。比丘答へて言く。「汝と共に鬪はず、我れ自ら彼の結使の賊と共に鬪ふ、爾る所以は、打たるゝ時に身形の現はるゝを恐るゝの故なり、我等比丘は、設使ひ困苦臨終の時なりとも、猶常に衣を以て用て自ら覆護し、形體を露はさず」と。爾の時比丘、復た偈を說いて言く。

世尊よ、慚愧を具して　我今隨順して學せん　乃至命盡きん時にも　終に形體を露さざらん

時に彼の珠師、比丘に語げて言く。「頗し身命を惜まざる者ありや」と。比丘答へて言く。「我が

【五】經說。出處不明。

六三、*比丘鵝を救はんとして穿珠師に打捧せらるゝ縁

復た次に、禁戒を護持せんには寧ろ身命を捨つるとも終に毀犯せず。

我昔曾て聞く。一比丘あり、次第して乞食し穿珠家に至りて門外に立つ。時に彼の珠師（Maṇi-kāra）、國王の爲に摩尼珠を穿てり。比丘の衣色彼の珠に往映して其の色紅赤なり。彼の穿珠師、即ち其の舍に入りて比丘の爲に食を取る。時に一鵝あり、珠の赤色にして其の狀の肉に似たるを見、即便ち之を呑む。珠師食を持して以て比丘に施し、尋で即ち珠を覓むるに所在を知らず。此の珠價貴く、王の所有なり。時に彼の珠師の家既に貧窮にして王の貴珠を失ひ、心に急ぐを以ての故に比丘に語げて言く。「我が珠を歸し來れ」と。爾の時比丘、是の思惟を作さく。「今此の珠は鵝の呑食する所、若し彼の人に語げんには、將て必ず鵝を殺し以て其の珠を取らん、我が今の如きは苦惱の時至れり、當に何の計を設けてか、斯の患を免るゝを得べけん」と。即ち偈を說いて言く。

『我今他命を護りて　身分に苦惱を受けん　更に餘の方便なし　唯だ我命もて彼に代らんのみ』

『我れ若し彼の人に語げて　是れ鵝の呑む所と云はんも　彼の人未だ必ずしも信ぜざらん　復た當に彼の命を傷ふべし』

『云何か方便を作して　己が身もて全濟するを得ん　又彼の鵝を害はざらん』　若し他が持ち去れりと言はんに　此の言復た不可なり

『設ひ身に過つことなきを得るとも　應に妄語を作すべからず』　我れ聞く婆羅門は　命の爲に妄語を得ると　我れ先聖の說けるを聞けり　寧ろ身命を捨つるとも　終に虛誑を作さずと』

佛說に、「賊惡の人[四]　鋸を以て身を割截し　此の苦痛を受くると雖も　終に法を毀壞せざれ」と』

妄語して全活を得るとも　猶尙ほ應に作すべからず　寧ろ護戒の心を以て　而も身命を捨てん』　我若し妄語を作さば　諸の同梵行人　我が

※　梵筴斷簡、二〇一、二〇四、二〇五、二〇六葉。

【四】　鋸齒喩（Krakacopama-vavāda）。中阿含一九三經牟梨破群那經に出づ。

も　猶應當に來赴すべけん　況や今汝の身を見て　而も當に捨棄して去るべけんや』
我れ財利と　富貴及び名稱との爲にせず　汝の堅實の心を以て　我當に此に久住すべし』　汝の淸淨心を觀ずるに　猶し賢勝なる馬の　具さに鞍轡を莊嚴するが如し
誰か乘じて遊巡せざらん』　我れ衆多の人の爲に　解脫を作すの因と爲る　是の故に家を捨離せり　利養の繫の爲にせず』　猶大龍象を　系を以て用て之を繫ぐが如く　利養も亦是の如し　我を禁制する能はず』　我本胎に處せし時　彼の暗冥の中に在りてすら　猶衆生を益せんと思へり　況や今正覺を成ぜるを』　苦行積むこと無量にて　猶恒に自ら乾燋し　諸の衆生の爲に　我應に涅槃に入るべからず』　衆生を度せんと欲する爲に　是を以て世に住す　我れ諸の衆生の爲に　巖に投じ及び火に赴きぬ』　我れ彼を化せんが爲の故に　諸の苦惱を避けず　亦疲倦を辭せず　福利伽の願を滿さん爲に
　故に復た還た止住しぬ』　福梨伽應に知るべし　我今汝の願を滿さん　我れ衆生を化せんが爲に　是の毒蛇の聚を擔へり　我れ福伽の爲に住す』
舍衞城の衆生、皆希有の想を生じ、各是の如き言を唱言すらく。
嗚呼佛や希有なり　國王の語を受けず　亦大臣の爲にせず　國城人の爲にせず　亦女人の爲にしたまはず』　柔軟微妙の語もて　佛は敎化をせんが爲とて　此の善心を見るの故に　卽便に爲に止住したまへり』　一切の行住者　知んぬ佛の福伽の爲に　是の故に止住を爲したまひ　諸の利養と　名利及び財賄の爲にしたまはざるを』　佛に諸の結使なし　受化者の爲にせんとて　行住及び坐臥したまふ』　常に諸の衆生を觀じて
　衆生の爲の故に　應に行くべきは卽便に行き　應に住まるべきは尋で止住したまふ』

【三】毒蛇の聚。肉體をいふ。

衆中の堅勝者を敬信したてまつる』　大悲應に證知したまふべし　大地及び虚空
一切の世界の中を　皆悉く而も知見して　了ぜざる者あるなし』　唯だ佛の具足眼のみ
一切に知らざるなし　今我に供養なし　佛及び衆僧を請ずるに　唯だ信受の解ある
のみ』　此の身は已が所有にあらず　他に屬して自由ならず　佛に隨從するを得ず
唯願はくは我が請を受けたまへ』　佛若し遠去したまはば　我が心狂醉の如からん　色
身已に供養しぬ　佛若し此に住したまはゞ　我れ法身を敬ふを得ん――　佛の說きたまふ
所の法は　我悉く能く受行せん　善き哉唯願はくは住したまひて　速かに我が與に言敎し
たまへ』　・貴賤も等しくして異るなし　衆生中の堅實者　一切世間の共なる　不請の
親友よ』　網縵もて皆指を覆ひ　相輪もて莊嚴せる手　一切皆恐怖せるに　佛はその
手を以て安慰したまふ』　誰か上大悲ある　慈の稱は世間に滿つるも　皆是の賑濟の聲
なり』　*六師(外道)は種智を稱するも　先に已に之を調伏したまへり　誰か大衆の前に
して　畏れなく師子吼する』　名聞は三界に遍く　動搖し行住する者にして　世界の
盡く聞知するに　誰か缺失なからん』　唯だ佛世尊のみ能くしたまふ　善き哉や願はく
は和悅したまへ　三寶に歸依する心は　猶犢の母を念ふが如し』　諸の衆生の爲の故に
極めて難苦行を作したまひ　疲勞して此に來至し　八正路を說いて　甘露道を開示
したまふ　人雄として器と作すに堪へたり』

爾の時福梨伽、善根已に熟し、佛婆伽婆は梵音聲を出し、偈を以て福梨伽に告げて言はく。

汝既に善く方便して　能く我を還び住せしめぬ　汝は言辭の鉤を以て　能く諸の龍象を
制せり』　汝に堅固の志あり　度量極めて寬廣に　能く精勤の心を以て　求請して我
を住せしむ』　我今當に云何か　汝が請を受けざるべけん　若し遙かに汝が心を觀ぜん

に、汝今自ら言ふ、我能く佛に請ひて國に住せしめたてまつらんとは、汝の語を信ぜず」と。時に福梨伽答へて言く。「我今必ず能くせん」と。爾の時須達、福梨伽の所說を聞きて心に喜踊を生じ、卽ち姉に問ひて言く。「汝に何の力あるや」と。福梨伽言く。「我に餘の力なきも、世尊自らに大悲の心あり」と。卽ち偈を說いて言く。

種智に依止して住したまひ　悲は母牛の犢を念ふが如し　受化の子を求覓して　心に疲厭あるなし』　衆生*深有に處するを　如來は常に拔かんと欲したまふ　喩へば母牛の犢を失ひて　求覓して乃ち住するを得るが如し　我れ大悲の衣を捉へて　其れ必ず能く還らしめん』　佛は種族と　富貴及び端正と　財色と好惡とを取したまはず　唯だ信を增上せると　善根の成熟せる者とを觀たまふ』　若し此の衆生を見たまへば　悲愍して而も濟拔したまふ　我今若し佛を留まらしめたてまつれば　國內の諸人民　咸皆歡喜を生ぜん』

爾の時福梨伽、水を負ひて衣濕れ、猶未だ乾くを得ず。卽ち徒伴と祇洹に往詣す。時に彼の國王及び大衆等、悉く祇洹に在り。是の時大衆、道路を開き避けて、福梨伽をして佛所に至るを得しむ。本種ゑし善根の皆悉く開敷せるなり。高聲に佛に請ひたてまつり、而も偈を說いて言く。

國王及び大臣　刹利婆羅門　一切の諸の勝人　佛を供養せざるなし』　我今心に願樂し　亦復た供養せんと欲し　今佛に求請せんと欲す　世尊願はくは聽しを垂れたまへ』　諸の勝人の　世尊に勸請するを知ると雖も　如來の大慈悲なる　應當に我が請を受けたまふべし』　世尊の心平等にして　悉く高下あるなし　極賤卑下の人と　及び高勝なる帝釋とに』　我れ貧窮の海の　波浪なる諸苦の中に墮し　沈溺して窮已なく常に苦惱の聲を聞く』　世尊應に愍傷して　貧の惡燋を拯拔したまふべし　我今深く

＊深有。恐らく深憂ならん。

時世尊、各皆許したまはず。

爾の時須達多、佛の許したまはず、所願果さざるを以て還つて家中に詣り、憂惱涕泣す。如來往昔、菩薩たりし時、迦蘭（Ālālakālāma）と鬱頭藍弗（Udraka-rāmaputra）の所に詣で、彼の諸の徒衆の佛と別るゝの時、大苦惱を生じき。況んや須達多、眞諦を見、是れ佛の優婆塞として奉事已に久しく、世尊と別るゝに而も當に悲惱せざるべけんや。*本行中に廣く說くが如し。

時に須達多の姊あり、福梨伽（*Pāli* Puṇṇikā; *Skt.* Pūrṇikā?）と字く。外より水を持して來り入りて須達の所に至り、已れの持する水を以て大器の中に置き、倒水未だ訖らずして長者の悲涕するを見、瓶を以て地に置きて長者に白して言く。「何の因緣を以てか而も悲涕するや」と。時に長者須達多、姊に答へて言く。「世尊は餘方に詣らんと欲したまひ、諸の大長者、國王、大臣、各々求請するも、皆住せんと欲したまはざるの故に、我悲涕す」と。姊、長者に白して言く。「佛に請ひて國に住りたまふこと能はざるや」と。長者、語げて言く。「我等、力を盡して勸請し、及び城中の諸人、諸の勝婆羅門等、咸皆勸請するも、悉く亦受けたまはず、諸王、大臣、如來に勸請せるも皆悉く疲極りて住せしめたてまつること能はず、世間の眞濟、今必ず去らんと欲したまふ、戀慕を以ての故に、憂慘して樂しまず」と。更に長者福梨伽に語げて言く。「獨り我のみ憂苦を生ずるに非ず、舍衞國の人悉く亦樂しまず」と。即ち偈を說いて言く。

舍衞國內の人　老少及び男女　皆悉く憂惱を生ずること　喩へば月の蝕くる時の如し
人々皆憂懼し　咸應に共に求請すべし

爾の時福梨伽、斯の偈を聞き已りて顏色怡悅し、心に歡喜を懷きて長者に白して言く。「應に歡悅を作すべし、憂惱を生ずる莫れ、我能く佛に請ひて、國に住せしめたてまつらん」と。時に須達多、即ち姊に語げて言く。「此の國の王等及與び諸人、如來を勸請するも住せしめまつる能はざる

cāna 王の五子を守りたりといふ古仙 Kapila を誤りて加へしものか。

＊ 馬鳴の所行讃と見るよりは、或る佛傳と見るが正しと思はる。

して、牧牛法に於て牛を増長せしむるや」と。

佛、之に告げて曰はく。「十一法を成就せんに、牛群増長して損減するを得ず、(1)[*]若しは色を知らず、(2)又相を知らず、(3)早起及以び拂拭を知らず、(4)覆瘡を知らず、(5)作烟を知らず、(6)大道法を知らず、(7)牛の善く行來し歡喜する法を知らず、(8)濟度處を知らず、(9)好放牧處を知らず、(10)乳を聲るに遺餘を留むる法を知らず、(11)善く牛主として盜法を料理せず、若し善く是の如き法を知らざれば、名けて牧牛の法を解すと爲ず、若し是の法を知れば、名けて善く解すと爲す」と。

時に諸の牧人、斯の語を聞き已りて皆歡喜を生じ、而も是の言を作さく。「我等の宿老牧牛の人すら尚知らざる所、況や我等の輩にして而も能く此の十一法を知るを得んや、是の故に當に知るべし、如來世尊の一切智を具へたまふことを」と。諸の牧牛人、心に信解を生じ、佛に求めて出家す。佛即ち爲に說きたまはく。「十一法あり、比丘應に學ぶべし」と。[*]修多羅の中に廣く說くが如し。

六二、[*]福利伽佛を勸請したてまつる緣

復た次に、供養と及び恭敬とを求めず。是の如き大人は、唯だ持行を求むるのみ。

我昔曾て聞く。如來、舍衞國祇樹給孤獨園に在し、九十日中、夏安居し訖りて、世尊去らんと欲したまふ。須達多(Sudatta)即ち、世尊の此に在つて而も住まりたまはんことを請ふ。爾の時如來、其の請を受けたまはず。毘舍佉鹿子母（Viśākhā Mṛgāramātṛ）諸の優婆夷等も亦求めて佛に請ふも、如來許したまはず。舍衞國中の優婆塞等、并びに諸の宿舊大臣輔相も亦求めて佛に請ひ、[*]迦毘梨(Kaviryа?)王諸兄弟(?)等、并びに祇陀(Jeta)諸王子、波斯匿王等も亦求めて佛に請ふ。爾の

---

* 以下梵文次の如し。
Gopālako rūpan-na jānāti lakṣaṇan-na jānāty-āśātikā na śātayati, vraṇaṁ na praticchādayati, dhūmaṁ na karttā bhavati, vithiṁ na jānāti, pītaṁ na jānāti, tīrthan na jānāti, nirava-śeṣadohī bhavati, ye ca te ṛṣabhā gavāṁ……

* 註一を見よ。

* 梵筴斷簡、一九六葉。

* 迦毘梨王諸兄弟。不明。舍衞城の王は波斯匿王にて次に出せり。或は支提國の Upa-

に音聲を逐ふべからず』

爾の時牧人、是の如き言を作さく。「我等應當に用て決定して解すべし」と。復た是の念を作さく。「今我が牧牛に何の智力あつてか、而も用て決了せん、我等亦決定して解知すべくんば、云何か知るべき」と。又言く。「我等復た牧牛たりと雖も分別して知るべし、彼は王宮に生れて智能技術一切皆學ばんも、應に彼の牧牛の法を知るべからず、我今當に牧牛の事を問ふべし、其れ必ず知らざらん」と。卽ち偈を說いて言く。

韋陀と射術　醫方及び祠祀　天文並びに聲論　文筆根本論　立天祀の論　諸論の因本　辭辯巧言論　善學淫泆論　求覓財利論　淸淨種姓論　一切萬物論　十種名字論　算數計校論　圍棊博奕論　原本書學論　音樂倡伎論　吹貝歌法論　舞法笑法論　欺詐及び庠序の　擧動と花鬘論　是の如き等の諸論　悉く皆善く通達せん』

按摩して疲勞を除き　善く摩尼(Maṇi)の價を別ち　善く衣帛を別つ法　綵色及び臘印　機關と胡膠　※射術計合離と　又善く裁割を知り　刻雕もて衆像を成し　文章と書畵とに　悉く通達せざるなし』　又復た善能く　香を和すると華鬘を作ることとを知り　善く占夢の法を知り　善く飛鳥の音を知り　善く男女を相するを知り　善く象馬の法を知り　又善く皷音　及以び擊皷の法を知り　善く鬪戰の法を知り　善く不鬪戰の法を知り　調馬弄矟の法を知り　善く跳躑の法を知り　善く奔走の法を知り　善く濟度の法を知る　是の如き等の諸法に　事として明練せざるなし』

是の如き諸の勝れたる衆智技能は、盡く是の王子の通利する所なり。若し此の事を知らんには、是れ其の學ぶ所にして是れを奇と爲ず。若し淺近なる凡庶の學ぶ所の牧牛の法を知らんには、當に知るべし、眞に是れ一切智の人なるを。是に於て牧人卽ち佛に問ひて言さく。「幾ばくの法か成就

※　三本「射術針合離」とす、共に意味不明。

斯の林甚だ嚴麗なり　光色忽ち常に改まる　將に天の寶林を　此の園に移殖せるに非るや』　曄の赫たる金樓の如く　亦天帝の幢の如し　其の明は電光に過ぎ　熾炎は酥火にも踰ゆ　或は日月天子の　降つて此の林間に遊べるか』

時に牧牛者、此の偈を說き已りて祇陀林に向ひ、世尊の所に至つて佛の圓光を觀るに百千の日の如く、三十二種の大人の相は炳著明了なり。各皆歡喜して希有の想を生じ、各々讚歎して卽ち偈を說いて言く。

釋種の王子の身は　端嚴にして甚だ輝妙なり　威光極めて熾盛にして　之を觀て歡悅を生じ　身心皆快樂す』　善き哉や寂淡泊たり　湛然として畏懼なし　略して其の色相を說かん』　善く種智に稱へり　世間に皆傳へ說くこと　眞實にして虛妄ならず　咸言く是れ佛陀なりと』　佛を稱えざる者なく　憶持して心に著し　口亦是の如くに說く　粗ぼ其の旨要を略せり　具さに廣說すべからず　總じて其の旨要を說けるのみ』　是れ釋種の中の日なり　名は實に色像に稱へり　色像も亦名に稱ふ』　相好及び福利は　炳然として而も顯現すること　猶衆寶もて　羅列して自ら莊嚴する如し』　威德甚だ赫奕として　圓光の滿つること一尋なり　猶し金山の如く　能く衆人の目を奪ふ』　樂しみ觀じて捨離せず　衆人の愛する所　體是れ一切智なり』　人の大いに叫喚する如く　口に是の如き言を唱ふらく　「一切種智者　今此の身中に在り」と』　世間に種智を出すは　必ず此の中に在り　何の有功德智か　此の如き智を視ざる　此の如き妙身の器にして　眞實に能く堪受せん』　功巧[二]及び畫素にも　未だ曾て是の像を見ず　終に更に疑を生じて　一切智に非ずと言はされ』　此の如き妙形容は　功德必ず滿足せん　極めて此の妙形あり　終に空しく無德ならず　應に須らく決定して解すべく　應

【二】功巧。美術工藝の類の總稱。

卷の第十一

六一、佛放牛喩を以て放牛人を化度したまふ縁[一]

復た次に、少智の人、佛の相好を見て猶善心を發さん。況や復た智慧大德の人にして、而も當に善心を發さざるべけんや。

我昔曾て聞く。佛舍衞國に在し、時に波斯匿王、佛及び僧を九十日に於ける夏坐安居に請じ、諸の牛群を集めて佛の精舍に近づけ、乳を搆りて佛に供養す。時に千の婆羅門あり、牛乳を貪るの故に、牧牛人と行止相隨ふ。時に牧牛人、婆羅門の韋陀（Veda）の上典を誦するを聞くに、悉く皆通利善了して分別するあり、或は婆羅門の但だ空名のみあつて實には知曉するなきあり、又明かに呪術を知りて韋陀を解せざるあり、韋陀に明かなるも呪術を知らざるあり。

爾の時世尊、夏の四月に於て安居し已り、訖つて自恣の時に於て、王牧人に勅すらく。「今は乳を須ひず、水草を隨逐して汝の諸牛を放て」と。又之に勅して言く。「汝若し去るの時、必ず往いて佛に辭しまつれ、佛若し說法したまはゞ、汝好く諦かに聽けよ」と。時に彼の牧人、是の如きの念を作さく。「佛世尊は、是れ一切智なりや、是に非ずと爲すや」と。是の念を作し已つて祇陀林(Jetavana)に向ひ、世尊の所に詣でぬ。

爾の時世尊、大衆に圍遶せられて樹下に坐し、牧牛人の林中に來至せるを知りたまひて、即ち牧牛人の爲に身の毛孔に於て諸の光明を出したまふ。其の光照曜として林野を映蔽すること、融金聚の如く、又雨酥の火中に降注するが如し。牧人之を視て厭くことなく、即ち希有難見の想を生じて各相謂ひて言く。「此の光明は瞻蔔花の如く、林中に遍滿す、是を何の光と爲すや」と。即ち偈を說いて言く。

【一】梵筴斷簡、一九二、一九三、一九六葉。增阿四九・一。雜阿四七・九。放牛經。M. 33; A. XI. 18 等に出づる經說を應用潤色せるものなり。右諸經中にては、放牛十一法に就て雜阿傳最も近きも、第七法に少異あり。本經所傳の雜附に少異あるを知るべし。

黑初月と爲し　善業を白月と名く』　業を以て白月と名く　業の分別を以ての故に是の故に黑白あるなり』　諸の福業ある者は　不善も皆吉を成ず　猶須彌山の　黑白も皆金色なるが如し』　諸の福業なき者は　吉相も不吉と爲る　大海の水の　好も惡も皆鹹味なるに如似たり』　一切諸の世間は　皆業緣に從つてあり　是の故に有智者は皆應に惡業を離るべし　邪を遠離して吉と爲せかし』　善業を勤修するは　猶田に種ゆる者の　吉場の上に安置するが如し　若し種子を下さずして　而も果報を獲とせば是を則ち名けて吉と爲す』

何を以ての故に是を說くや。應に常に勤ろに法を聽くべし。聽法を以ての故に、能く愚癡を除き心に能く諸の善惡を別了せん。

往昔劫初の時　一切皆欲を離れしも　後に來つて欲の事興るや　欲を離れて深林に入り林に處して欲を樂ふ者は　還來して卽ち家に向ふ』　唱へて是の如き言を作さく「欲なく妻子なければ　天上に生るゝを得ず」と　多くの人は是の語を說き　此を實と爲すと謂へり』　是の語を信ずるに由つての故に　卽便ち婦を求索し　欲事既に已に廣くして　迭互に自ら＊莊嚴し　更に共に相誑惑せり』　遂に復た憍慢を生じ　憍慢の勇健なる者は　莊嚴を欲する爲の故に　此の吉書を造作せり』　人に譏呵せられて言く　云何か婦女に似て　而も是の莊嚴を作すやと』　彼人詐りて稱說すらく　我乃ち吉事を作すこと　自らを莊嚴せんが爲には非ずと』　牛黃貝果等は　皆是れ莊嚴の具なり是の因緣に由つての故に　吉事轉た增長す』　一々は因緣より起る　皆婦の莊嚴に由れるを　愚人心に憍慢して　實に是れ吉たりと謂へり』

爾の時檀越、此の偈を說くを聞いて身毛皆竪ち、卽ち偈を說いて言く。

人當に善友に近づくべし　勝丈夫を讃歎せよかし　彼の勝人に由るの故に　善く好醜を分別せん』　是の故に應に柔順なるべし　諸の世界の中に於て　佛語は皆眞實なり』　長短を求めず　亦勝負を存せず　所說には因緣あり　事々には原本ありと』　我今亦解了す　福業は皆是れ吉なり　惡業の中に吉なし　吉と不吉等とは　皆果して因緣に從へり』

爾の時比丘、檀越に告げて言く。「善き哉、善き哉、汝は是れ善丈夫なり、汝正道を知れり」と。卽ち偈を說いて言く。

一切諸の世間は　皆善惡の業に由る　善惡は五道を生じ　業は衆生の命を持す』　業緣もて日月と作す　[三]白月十五日あり　黑月十五日あり　惡業微細なりと雖も　名けて

＊ 莊嚴。ここには化粧の意。

【三】 白月(śukra-pakṣa)、黑月(kṛṣṇa-pakṣa)。一ヶ月を兩分し、月明期間を白分、月明なき期間を黑分といふ。

彼の蟲は貝と倶に生じ　其夜に貝中に在り　其の蟲の死時に及んでは　貝は救護する能はず　況や今汝暫し捉ふるに　而も能く吉事を爲さんや』　善き哉や此の如き事　汝今應に分別すべし　汝今何の故に爾して　癡の道路を行ずるや』

爾の時檀越、低頭默然として思惟し、答ふる能はず。比丘念言すらく。「彼の檀越は意に悟を欲せるに似たり、我今當に問ふべし」と。檀越に告げて言く。「世人の名けて歡喜丸の如しと爲すは、是れ何物と爲すや」。檀越答へて言く。「毘勒果と爲す」。比丘告げて言く。「毘勒果とは樹上の果なり、人の採取する時、石を以て之を打ち、枝と倶に墮つ、是の果に由つての故に、樹と枝葉と倶に共に毀落す、爾りと爲すや不や」。檀越答へて言く。「實に爾り」。比丘語げて言く。「若し其れ爾らば、云何か汝捉つて便ち吉を得んと望むや」と。即ち偈を說いて言く。

此の果は樹に依つて生ずるも　自ら全護する能はず　人あつて採取する時　枝葉隨つて殞落す』　又採つて用て薪に作るに　乾けば則ち用て火に然ゆ　彼れ自ら救ふ能はず　云何か能く汝を護らん

爾の時檀越、具さに問ふ所を聞いて而も對ふる能はず。比丘に白して言さく。「大德よ、上に問ふ所の如くんば、實に吉祥なし、我に疑ふ所あり、願はくは我が爲に說きたまへ」と。比丘答へて言く。「汝の問ふ所に隨つて、我當に之を說くべし」と。時に彼の檀越、偈を以て問ひて言く。

往古の諸の勝れし人は　合和して是の吉を說けり　然るに實に觀察する時　都て吉相あるなし』　云何か相傳へ習ひて　横まに是の吉ありと說けること　何の因緣を以ての故なりや　願はくは我が爲に解說したまへ』

爾の時比丘、彼の人に答へて言く。「一切の諸見は生に於て皆因緣本末あり」と。即ち偈を說いて言く。

我昔曾て聞く。一比丘あり、檀越の家に詣る。時に彼の檀越、既に楊子を嚼み以用て口を漱ぎ、又牛黄を取りて用て其の額に塗り、所吹貝を捉つて頂上に戴き、毘勒果(Vilhethaka)を捉つて手を以て擎擧し、以て額上に著け用て恭敬を爲せり。比丘、見已つて而も之に問ひて言く。「汝、何を以ての故に是の如き事を作すや」。檀越答へて言く。「我れ吉相を作す」。比丘問ひて言く。「汝吉相を作すに何の福利か有る」。檀越答へて言く。「是れ大功德なり、汝今試みに看よ、云ふ所の吉相とは、能く應に死すべき者をして死せざらしめ、應に鞭に繫けらるべき者をして皆解脫するを得しむ」と。比丘、微笑して而も是の言を作さく。「吉相にして若し爾らば、極めて善しと爲ん哉、是の如き吉相、何れより來ると爲ん、何處より出づると爲ん」と。檀越答へて言く。此の牛黄は乃ち牛の心肺の間より出づ」。比丘問ひて言く。「若し牛黄が能く吉事と爲らんには、云何か彼の牛の而も人等の爲に繩もて鼻を拘穿せられ、耕駕乘騎、鞭撻錐刺、種々に撾打せられて、飢渴疲乏しつ耕駕息まざるや」と。檀越答へて言く。實に是の事あり」。比丘問ひて言く。「彼の牛に黄あるも尙ほ自ら救はず、苦を受くること是の如し、云何か乃ち能く汝をして吉ならしむるや」と。即ち偈を說いて言く。

牛黄は全うして心に在るも　自ら救護する能はず　況や汝少許を磨して　以て額皮の上に塗るとも　云何か能く擁護せん　汝宜しく善く觀察すべし

時に彼の檀越、思惟良や久しくするも默して答ふる能はず。比丘又問ふ。「此を何物と名くるや、白きこと雪團の如し、何れより出づると爲すや、以て水に浸漬せり、吹けば乃ち聲を出す」と。檀越答へて言く。「名けて貝と爲す、海に因つて而も生ず」。比丘問ひて言く。「汝が貝と言ふは、海中より出でて陸地に置捨され、日に暴されて苦惱し、經ること久しくして乃ち死せるものなりや」。檀越答へて言く。「實に爾り」。比丘語げて言く。「此は吉と爲さず」と。即ち偈を說いて言く。

て收獲あるを望むことあらんや、是の事あることなし」と。卽ち偈を說いて言く。

四海大地の內　及以び一切處に　何ぞ種を下さずして　而も果實を獲る者あらんや

爾の時化弟、其の兄に質して言く。「世間に乃ち、種子を下さずして果を得ざることありや」と。兄弟に答へて言く。「實に爾り、種ゑざれば果なし」と。時に彼の天神、本形に還復して卽ち偈を說いて言く。

汝今自ら說言すらく　種ゑずして果實なしと　先身に施の因なくして　云何か今果を獲んや』　汝今辛苦して　斷食もて我を供養すと雖も　徒らに自ら勤苦を作し　又復た我を擾惱す　何に由つてか能く汝をして　現に饒益の事を有らしめんや』　若し財寶と妻子及び眷屬を得んと欲せば　應當に身口を淨めて　而も布施の業を作すべし』　種ゑずして福利を獲ば　日月及び星宿も　應に世界を照すべからず　世間を照すを以ての故に』　當に知るべし業緣に由つて　天上諸天の中に　亦各差別あり　福多く威德盛なると　福少かに威德尠きあることを』　是の故に知んぬ、世間は　一切皆業に由ることを　布施もて財富を得　持戒もて天上に生る』　若し布施の緣なければ　威德都て損減せん　定慧もて解脫を得　此の三所の獲報は　十力の說きたまふ所なり』　此の種は皆是れ因なり　應に我を擾亂すべからず　是の故に應に修業して　以て諸の吉果を求むべし』

六〇、* 比丘檀越の爲に呪力の無効なるを說く緣

復た次に、種子もて果を得るは是れ吉力 (Śrivṛddhi) に非ず。是の故に應に吉相 (Maṃgala) に疑著すべからず。

* 梵筴斷簡、一八八、一九二葉。梵本にも本章を六十章とするより見て章數また同似たるを知る。

諸の言辭を莊嚴す』　所說の辭は美妙なるも　多姦にして而も諂僞なり　世間を欺誑し
愚癡もて自ら纏縛す　善逝の言辭は廣く　照了して解かざるはなし』

何の故に是の事を說くや。五比丘の爲の故なり。二邊を除去し中道を修行し、見諦して道果を成ぜり。

五九、*天神貧人を化度する緣

復た次に、衆生は業を造つて各其の報を受く。

我昔曾て聞く。一貧人あつて是の思惟を作す。「當に天祠に詣でて現世に財寶を饒益せんことを求むべし」と。是の念を作し已つて其の弟に語げて言く。「汝、勤めて田を作るべし、作好にして生計を爲し、家中をして乏少する所あらしむる勿れ」と。便ち其の弟を將ゐて田中に往至し、此處胡麻を種ゆべし、此處大小麥を種ゆべし、此處禾を種ゑ幷びに大小豆を種ゑよと、種處を示し已りて天祠の中に向ひ、天祀の弟子と爲りて大齋會を作す。香華を供養し香泥を地に塗り、晝夜禮拜して恩を求め福を請ひ、現世に財産を增益せんことを悕望す。

爾の時天神、是の思惟を作さく。「彼の貧人を觀ずるに先世中に於て、頗し布施功德の因緣あるや不や、若し少かにても緣あらば、當に方便を設けて饒益あらしむべし」と。彼人を觀じ已るに了かに布施の少許の因緣もなし。復た是の念を作さく。「彼に既に因緣なし、而も今精勤して我に求請す、徒らに勤苦を作すとも將て益あるなし、復た當に我を怨むべし」と。便ち化して弟と爲り、來つて祠中に向ふ。時に兄、語りて言く。「汝何をか種ゆる所ぞ、來るや復た何の爲ぞ」と。化弟白して言く。「我亦來つて天神に求請し、神を歡喜せしめて衣食を求索せんと欲せり、我れ種ゑずと雖も天神の力を以て、田中の穀麥自然に足り得ん」と。兄、弟を責めて言く。「何ぞ田中に種子を下さずし

* 梵本斷簡、一八七、一八八葉。

佛即ち爲に轉法輪修多羅（Dharmacakra-pravartana-sūtra）を說いて、比丘に告げたまはく。「此は苦聖諦なり、昔より未だ曾て聞かざる所、我れ正觀して眼・智・明・覺を得たり」と。廣說すること*轉法輪經の中に說く所の如し。

§問て曰く。憍陳如の爲に說法するに、何の故に自ら佛の得たまふ所の法說きたまふや。

答て曰く。無師獨悟の法を顯さんが爲の故に。

問て曰く。何を以てか復た「先に未だ曾て聞かざる所の法」と言ふや。

答て言く。彼が阿蘭迦蘭（Ālāḍakalāma）、欝頭藍弗（Udraka-rāmaputra）等の邊に聞法得解したるやを疑ふを斷ぜんが爲の故なり。是の如き疑を斷ぜん爲の故に、是の故に說いて我れ先に未だ曾て聞かずと言ふは、今顯示したまへる如く、*己力の中道の說を現ぜんが爲の故なり。若し人あつて能く中道を修すれば、他より聞かずして而も能く眞諦の義を解するを得ん。

佛、爲に四諦を現じたまふや、阿若憍陳如、應の如く見諦し、中道に順つて四眞諦を見たり。即ち道果を得已つて、歡喜涕淚し、坐より而も起ちて佛足を頂禮し、卽ち偈を說いて言さく。

狗の頭瘡を患ふが如し　蛆虫に唼食せられ　良醫は油を用て治せんに　既に他の恩を識らずして　反つて更に醫に向つて吠ゆ』　佛は塗るに禪定の油を以てし　熱するに智の威德を以てし　我が結使の虫を除きたまふ』　我れ無明に盲いられ　己れを益まんがために　大悲の故に自ら來たまへるを知らず　反つて更に觸惱を生ぜり』　一切諸天等　倘應に法の自在者に　供養を生ずべし　今我が懺悔を聽させたまへ』　我先に謂へらく「苦行もて　一切種智を獲ん」と　愚癡盲瞑の故に　翳障されて是の心を生ぜり』　我今說きたまふ所を聞いて　無智の膜を發除し　今始めて眞實に知んぬ　自餓の眞法に非ざるを』　世尊は世間に　解脫の道に趣向するを示したまひ　外道の論は少義にして

* この經、雜阿含卷四十五に收む。
§ 以下、作者の語。
* 原文「現爲己力中道說故」とするも、恐らく「爲現……」の寫傳倒置なるべし。

二俱に應に將て息むべし　宜しく更た遠去すべからず』

時に憍陳如（Kauṇḍinya）、此の事を順解し、佛觀察し已りて讃言したまはく。「善き哉や」と。即ち偈を說いて言く。

飮食及び醫藥　房舍臥具等　身命を愛せんと欲せば　量を節して時宜を得よ』　此の衆の美饌に於て　染著を生ずべからず　亦全く捨離せざれ』　譬へば大火聚の　體性の是れ燒然たるを　智者は時に隨つて用ひんに　種々に利益を生じ　然も爲に燒かれざるが如し』

時に尊者憍陳如、聞慧を得已りて思慧に入らんと欲し、久しく思惟し已りて即ち佛に白して言さく。「世尊、飮食及び衆の樂具を捨つるも、乃ち更た是れ修道の法に非ざるや」と。爾の時世尊、即ち偈を說いて言はく。

佛憍陳如に告げたまはく　汝應に我を體信すべし　若し疑ふ所あらば　事に隨つて宜しく問ふべし　汝疑網の林を止めよ　我れ智火を以て焚かん

時に憍陳如、是を說くを聞き已りて極めて爲に歡喜し、顏色怡悅して即ち佛に白して言さく。「世尊、唯願はくは、我に所疑の事を說くを聽したまへ」と。即ち偈を說いて言く。

厭惡發足の處の　甚だしきは難苦行と爲す　是の難苦行を捨てゝ　而も五欲に著す比丘云何か　而も欲を離るゝを得ると爲すや

爾の時世尊、憍陳如に告げて言はく。「苦聖諦を觀ずれば、生死に背くを得」と。時に憍陳如、即ち坐より起ちて合掌して佛に向ひ、而も佛に白して言さく。「世尊、我猶未だ解せず、願はくは佛よ、我が爲に方便して解說したまへ、云何か、解脫せんと欲して而も苦聖諦を觀ずるや」と。佛、憍陳如の已に聞思の慧を得たるを觀たまひ、今當に時節に稱へり、爲に修慧の法を說くべしとて、

命あつて智慧を得　床褥衣服等　飲食及び湯藥　此を以て身命を存す』　若し上の如き事なければ　此に則ち身命壞せん　此を以て身命を護らんには　禁戒を堅持せよ　戒を持てば定と慧を得　苦行を修めては得ず』　自餓斷食の法は　必ずしも道を獲ず　身壞すれば卽ち命敗る　命壞するも亦身なし』　毀戒に禪定なし　禪なければ亦智なし　是の故に應に命を護るべし　亦禁戒を持てよ』　禁戒を持するに由つての故に　則ち禪と智慧とを獲　是の故に應に　苦惱の　[二]法身を壞するを遠離すべし』　亦諸の五欲を離れて　應に深く樂著すべからず　若し貪欲に樂著すれば　則ち禁戒を毀つと爲す』　復た欲愛を增長し　愚癡もて苦行に著し　自ら斷食法を樂しみ　或は草葉を食し』　灰と棘刺の上に臥す　是の如きは身命を損じて　定と慧を得る能はず　是の故に　*中道に處せよ』　是の如き法に依止して　欲の淤泥に沒する莫れ　亦身を苦惱する莫れ　有智は應に善く　此の如き二過患を分別すべし』　月の衆に愛せらるゝが如く　中に處するも亦是の如し　嗜欲は深き汚泥にて　人皆多く沈沒す』　苦行もて身心を燋すも　亦此の患を免れず　是の二邊を捨離して　中道もて涅槃に到る』

爾の時、慧命憍陳如等、佛語を解悟して結使を斷たんと欲し、佛所說の正直の善法を讃じ、卽ち偈を說いて言く。

若し智慧を以用てすれば　癡の縛自然に解けん　此の諸義等を以て　身を苦しむとも則ち益なし　若し戒定慧を以てすれば　道迹を獲べし』　譬へば身を持する者の　諸の過惡を滅せんと欲するが如く　應に是の如く心を持すべし』　是の義を以ての故に　應に衣服　飲食及び臥具を捨つべからず　亦此の物に於て　而も樂著心を生ずる莫れ』　火積及び雪聚は　汝應に悉く捨離すべし　火聚の所に在り　及び雪邊に安住せんは

【二】法身(dharmakāya)。此には智慧を生む依處、卽ち肉身をいふ。

＊ 中道 (madhyamika-pratipada)。ここには苦樂二邊の中道。

爾の時世尊、是の偈を聞き已りて尋で即ち微笑したまひ、而も之に告げて言はく。「汝等癡人、云何か即便ち汝の言要を破れる」と。佛、坐に就き已りたまふや恭敬して立侍し、而も是の言を作さく。「慧命[九]瞿曇(Gautama)」と。佛に憎愛の意なし。慈心もて而も偈を說いて言はく。

我今既に道を得て　諸の塵垢を遠離す　汝等常の如くなる莫れ　應當に恭敬を起すべし』　譬へば泥木を以て　而も佛像を作らんと爲るに　未だ成就を得ざる時には　脚もて蹋みて剗削するも　既に成就を得已るや　香花もて而も敬禮するが如し』　汝等も亦應當に　親友の意を除捨して　而して當に我を恭敬すべし　應に輕慢を生ずべからず』　讚歎するも喜びを生ぜず　毀罵するも亦瞋らず　我今汝を憐愍し　解脫するを得て　寂靜の樂を得しめ　諸の利益の事を獲しめんと欲す』　癡愛と瞋恚等は　各自らに相貌あり　譏刺に惡言を出すこと　灰を以て瘡を坌すが如し』　我今菩提(bodhi)に住す　我を稱んで瞿曇と爲す　我に愛憎なしと雖も　應に恭敬の相を生ずべし　復た此の言を出し、　謗毀もて他人に語ぐ勿れ』

時に彼の五人、此の語を聞くと雖も猶世尊の未だ菩提を得ざるを以てし、即ち偈を說いて言く。

汝先に苦行を修するも　猶菩提を證せず　汝愛欲の游泥に沒溺しつ　云何してか悟道を得んや』　譬へば大船を棄てゝ　而も山石を負ひ　河難を度らんと欲する者の如し　云何ぞ而も得べけんや』

爾の時世尊、彼の五人の心に苦行に著して以て正道と爲せるを知りたまひ、佛便ち爲に、五欲を離るゝの故に即ち正道と爲し、苦行を行ずることを離るゝを以て亦正道と爲し、二邊[一〇]を除くを爲に正道と說くと說きたまふ。佛は慈を以て首と爲し、偈を說いて告げて言はく。

唯だ智のみ能く除去す　無智愚癡は障なり　是の故に智慧を須て　以て身命を守れよ』

【九】慧命(ayusmant)。出家に對する敬稱。尊者と言ふが如し。

【一〇】二邊。苦樂の二極端。

時に諸人等、佛の來り近づきたまふを見て、乃ち相謂ひて言く。「此の人は乃ち是れ釋種の童子なり、苦行を毀敗して還び欲樂を以て恣に其の身を養へり、既に苦行を捨てゝ我等の邊に向へり」と。即ち偈を說いて言く。

我等皆起つこと莫れ　愼しみて敬禮を爲す莫れ　但だ當に遙かに指授もて　語げて彼處に坐せしむべし

佛既に到り已る。時に諸人等、覺えず自ら起ちて即ち偈を說いて言く。

面は淨き滿月の如し　之を見て覺えず起ちぬ　譬へば大海の　月滿つれば則ち潮の宗くに如似たり』　我等自然に起つこと　猶人の扶挽するが如し　此れ皆佛の威德の　自然に之を爾らしむなり』　亦帝釋幢(Indradhvaja)の　餘天は動かす能はず　帝釋の自ら至る時　自然に而も獨り立つが如し　我等も亦是の如く　佛至りて自然に起ちぬ』　又酥に火を注ぐに　火は則ち速かに熾盛するが如く　我等は佛の德を見て　速かに起つこと彼の火より疾し』　無數劫以來　憍慢を摧伏したまへるを　擧體もて尊び重んずる所なり』　師長及び父母　諸天及び世人　鬼龍夜叉等　諸有佛を見る者　敢て敬禮せざるなし』　智者は何ぞ疑ふに足らん　應當に善く分別すべし　佛若し足を擧下したまへば　地も亦上下に從ふ　諸山も輕草の如く　佛を見て皆傾動す』

時に彼の五人、佛を見て即ち起ち皆共に往き迎ふ。佛の爲に鉢を捉り、坐を敷き、水を取るの者、又佛の爲に足を洗ふ者あり、即ち偈を說いて言く。

五人善逝を見たてまつり　佛の威德の盛なるを覩て　其の心皆歡喜し　本の誓要を破壞す』　[七]三脚支の澡罐を　諦視して崩壞を恐るゝごとく　皆[*]不語法を受く　[八]十中に於て亦半ばなり』

【七】梵文。…… pādodaka-pr -tigraham-upā …… とあり。
＊　不語法。默して行ふこと。
【八】即ち五人を意味す。

ず』　獨り世界に遊ぶこと　轉輪王の　象・馬・車・兵の衆あり　天冠の極めて微妙に
帛蓋もて其の上を覆ふが如く』　大轉輪王の　福利衆悉く備はる如きも　未だ佛の
莊嚴には若かず　殊勝なること彼に過ぐ』　第一無等の相あり　威德は衆聖に踰ゆ
衆生は容儀を覩るに　超絕すること日光に過ぐ』　人獸諸飛鳥も　佛の身相を瞻仰し
行走するも皆止住す』

時に彼の五人、佛の光相を見るに、威德具足し智德成辦すること先に同じからず。五人識らず。

時に彼の一人卽ち四人に向ひて而も偈を說いて言く。

誰か妙光明を出して　林山谷を照曜すること　猶衆多の日の　地より出でて而も踊出す
る如くなるや』　光網の明は普く滿ち　照徹して周からざるはなし　猶し眞金の樓の如
く　袈裟もて其の上を覆へり　又融けたる眞金の　流散して地に布けるに似たり』
陸行の諸の畜獸　及以び牛王等　麞鹿及び雉兎　佛を見て皆停住し　草を食む者は吐
出して　諦視して暫くも捨てず』　孔雀の羽翼を舒すは　猶し青蓮の鬘の如し　放逸
を離るゝ時も　亦皆同じく喜舞し　歡娛して妙音を出す』　佛の道路に遊びたまふ時
所有衆生の類　心眼に樂著して觀　卽ち其の二根を奪はるゝも　覺らずして自ら往い
て看る』　佛の道路を行きたまふ時には　諸の佛脚に觸るゝ者　七日晝夜に樂しみ
最勝もて道行に順ふ』　湛然として輕躁ならず　身體極めて柔軟に　空を蹈んで地を履
まず　行步するに疲倦なし』

又一人あり、復た四人に向ひて而も偈を說いて言く。

我彼の相貌を見て　心に亦も疑惑を生ぜり　是れ誰が威光と爲すやと　照曜すること日
にも過ぎ　彼の光明を以ての故に　林木皆金と成れり

哉と爲す』　至心に佛に歸命すれば　必ず解脫に至るを得ん　是の相似の果を得ること
更に及ぶ者あるなし』

爾の時婆伽婆、卽ち彼の人を度して出家を得しむ、佛自ら敎化したまひ、比丘心悟して羅漢果を得たり。是の因緣を以ての故に世尊の所に於て、少善根を種ゆれば報を獲ること無量なり。況や復た形像塔廟を造立するおや。

五八、*佛五比丘の爲に法輪を轉じたまふ緣

復た次に、善根旣に熟して解脫の果を得。是に由つての故に宜しく應に善を修むべし。

我昔曾て聞く。世尊、學道して菩薩たりし時、苦行六年、日に一麻一米を食して成辦する所なく、又利益なし。時に彼の菩薩所得無きを以ての故に便ち百味の乳糜を食す。時に〔六〕五人等菩薩に問ひて言さく。「先に苦行を修してすら尙所得なかりき、況や乳糜を食して而も道を得んや」と。是の語を作し已りて卽便に捨て去り　*波羅捺（Bārāṇasī）に向ふ。

爾の時世尊、旣に成佛し已りて是の思惟を作したまはく。「何等の衆生か應に先づ得度すべき」と。復た是の念を作さく。「唯だ彼の五人のみ得道の緣あり、我に於て恩あり」と。是の念を作し已りて波羅捺に詣り、五人の所に至りて卽ち偈を說いて言く。

妙好の威光もて　擧體具さに莊嚴し　獨行に衆好備はり　智廣く相炳然たり』　晃曜として威德滿ち　目は牛王の眼に勝る　容儀端整を極め　行くこと大象の如し』　趍くこと詳く獨一にして行じ　所作已に成辦し　智行已に滿足す　深智もて天冠と爲し
解脫の帛を首に繫く』　二足人中の尊　法輪王の最上たり　諸天は伎樂を作して
前後に而も導從す』　復た諸の勝王の　*四兵の以て　嚴駕を圍遶すると雖も佛に如か

* 梵筴斷簡、一八一、一八三、四、五、一八七葉の五片。本篇は律藏の佛傳を題材として取扱ひたるものなり。

【六】五比丘とは憍陳如・阿說示・婆波・跋提耶・摩訶那摩なり。

* 今のベナレス。

* 四兵。次出の象馬車兵。

なし』

爾の時世尊、彼の人に告げて言はく。「我今汝に聽して、佛法中に於て汝をして出家せしめん、我れ法肆の上に於て汝の如き信樂の人を求め買ひ、如法に化度して時を失はしめず」と。佛、柔軟妙の相輪の手を以て彼の人の臂を牽き、僧坊中に入りたまふ。

佛、僧前に於て舍利弗に告げたまはく。「何の緣を以ての故に、此の子を聽して出家せしめざるや」と。舍利弗佛に白して言さく。「世尊、我れ彼に微の善根のあるを見ず」と。佛、即ち舍利弗に告げたまはく。「是の語を作す勿れ」とて、是の偈を說いて言はく。

我れ此が善根を觀ずるに　極めて甚だ微細と爲す　猶山の石沙の　融消すれば則ち金を出すが如し』　禪定と智慧とは　猶雙鞴囊の如し　我れ功力を以て吹かんには　必ず眞の砂金を出さん　此の人も亦復た爾り　微善なること彼の金の如し』

爾の時尊者舍利弗、欝多羅僧(Uttarāsaṅga 上着)を整へ偏へに右肩を袒きて、𨅖跪叉手して佛世尊に向ひまつり、而も偈を說いて言さく。

諸論の中の最勝　唯願はくは我が爲に說きたまへ　智慧の大明もて　諸の黑闇を除滅したまへ』　彼の人久近に於て　而も此の善根を種ゆ　何の福田を得るが爲にか　*種子極めて速疾なる』

佛、舍利弗に告げたまはく。「汝今諦かに聽け、當に汝が爲に說くべし、彼の因は極めて微にして辟支佛(Pralyekā-buddha)の所見の境界に非ず、乃往過去に一貧人あり、阿練若處に入りて薪柴を採取し、虎の爲に逼られ、怖畏を以ての故に南無佛と稱ふ、是の種子を以て解脫の因を得」と。即ち偈を說いて言はく。

唯だ此の稱佛を見るのみ　是を以て微細と爲す　是に因つて苦際を盡す　是の如きを善

※　福田に種えし種子の芽生ゆることの速かなるをいふ。

猶清淨なる水の　一切悉く飲むを得る如く　乃至旃陀羅までも　各皆出家するを得』
此の如き佛法の中に　而も我を容受せず　我是れ調順ならず　＊當に是の活を用て爲すべし』

是の偈を作し已る。爾の時世尊、慈悲心を以て之を教化せんと欲したまふこと、母の子を愛するが如し。金山の光の日を映蔽するが如く、僧坊の門に到つて卽ち偈を說いて言はく、

一切種智の身は　大悲を以て體と爲す　佛は三界の中に於て　諸の受化の子を覓むること　猶牛の犢を求むるが如く　愛念して休息するなし

爾の時世尊、清淨無垢なること花の開敷する如く、手光熾盛にして掌に相輪あり、網縵もて指を覆へる、是の妙手を以て彼の人の頭を摩で、而して之に告げて言はく。「汝何の故に哭くや」と。彼の人悲哀して世尊に白して言さく。「我れ出家を求むるに、諸の比丘等盡く皆聽さず、是に由りて涕泣す」と。世尊問ひて言はく。「諸の比丘聽さずとは、誰か汝を遮りて出家を聽さざる」と。卽ち偈を說いて言はく。

誰か一切智ありて　而も測豫せんと欲する者ぞ　業力は極めて微細なり　誰か能く深淺を知らん

時に彼の人は斯の偈を聞き已りて世尊に白して言さく。「佛法の大將舍利弗比丘、智慧第一者、我が出家を聽さず」と。爾の時世尊、深遠の雷音を以て彼の人を慰めて言はく。「舍利弗の智力の及ぶ所に非ず、我れ無量劫に於て難行苦行を作し、智慧を修習せり、我今汝が爲に卽ち偈を說かん」とて言はく。

『佛子舍利弗は　彼れ一切智に非ず　亦體性を解するに非ず　盡くは中下を知らず』
彼の識には限齊あり　深く解了すること能はず　智の能く　微細の業報を知ることある

＊原文「當用是活爲」、梵文缺、文意通じ難し、誤寫傳あるべきか。

何の因緣を以て而も是の事を說くや。智慧の人は施に順ふ福を明して、人をして勤めて福業を修めしめんと欲す。帝釋は人に勝れて猶尙ほ福を修む。何に況や世人おや、而も施を修めざる。聲聞の人に帝釋供養す。況や復た世尊おや。

五七、*一南無佛と稱して救拔せらるゝ緣

復た次に、少かに善を種ゆると雖も、必ず當に佛を求むべし。少善もて佛を求むる、猶甘露の如し。是を以て應當に心を盡して佛を求むべし。

我昔曾て聞く。一人あり、因緣力の故に發心出家し、解脫を求めて卽ち僧坊に詣で、佛の教化に値はんと欲するに僧坊に在らず。彼の人念言すらく。「世尊は無しと雖も我當に法の大將たる舍利弗の所に往詣すべし」と。時に舍利弗、彼が因緣を觀ずらく。「過去世の時、少しく厭惡するあるも、善根を修むるや不や」と。既に觀察し已りて乃ち少許の善根あるを見ず。一身に既に無し。乃至、百千身中にも都て善根なし。復ねて一劫を觀ずるに又善根なし。乃至、百千劫にも亦善根なし。尊者舍利弗彼の人に語げて言く。「我汝を度せず」と。

彼の人復た餘の比丘の所に至る。比丘問ひて言く。「汝誰に向つてか出家を求索すと爲すや」と。彼の人答へて言く。「我れ尊者舍利弗の所に詣りしに、我を度するを肯ぜず」と。諸比丘言く。「舍利弗、汝を度するを肯ぜず、必ず過患あらん、我等云何してか而も當に汝を度すべき」と。

是の如く展轉して諸比丘に詣るも都て肯て度せず。猶病者の大醫に治されず、其餘の小醫の能く治する者無きが如し。既に願稱はず。坊門の前に於て泣淚して而も言く。「我れ何の薄福にか我を度する者なき、四種姓の中、皆出家を得るに、我れ何の惡を造りてか、獨り度せられざる、若し度せられずんば、我必ず當に死すべし」と。卽ち偈を說いて言く。

---

* 梵筴斷簡、一七九、一八一葉。

能く尊勝の相を捨てゝ　貧賤人を現形す　羸悴極めて老劣に　衣は此の弊壊の衣なり
毘闍延堂[五](Vaijayanta)を捨てゝ　化して息道の邊に住せり
是の偈を說き已りて尊者微笑し、復た偈を說いて言く。
我れ無福をして　勝福業を成ずるを得しめんと欲す　汝の福已に成就せり　何の故に觸惱を作すや』　食を以て我に施すに　具さに五妙欲に勝る　世尊は久しく汝が爲に三惡道を斷除したまへるに　汝止足を知らず　方に復た福業を修むるや』
爾の時帝釋、釋身に還復し、衆人の前に在りて尊者の足を禮し。而も是の言を作さく。「尊者迦葉よ、何の所作をか爲すや」と。卽ち偈を說いて言く。
我れ施の報を獲るを見て　諸の勝利を獲得せり　資業已に廣大にして　倍す信心を生ず
大德よ何の爲の故に　而も乃ち我を遮止するや
爾の時帝釋、重ねて偈を說いて言く。
人施を說くを聞かば　猶尙ほ能く布施す　況や我れ施の報を見て　明了に自ら了知す』
父母及び親友を　拔濟して利益せんと欲するに　能く布施に及ぶなし　生死の苦を離れしむ』　施の報は形の影の如し　處々に安樂を與へつ　生死嶮難の中に　唯だ施のみ相隨逐す』　雨風寒雪に於て　唯だ施のみ能く安樂にして　嶮惡の路を行くが如きに　資嚴悉く具足す』　施は能く疲乏の爲に　安穩の善き乘なり　嶮惡なる賊難の處に　施は卽ち是れ善き伴なり』　施は諸の畏恐を除く　衆救の中に最も厚し　怨賊の中に處しては　施は卽ち是れ利劍なり』　施は最妙の藥爲り　能く重き病を除く　不平處を行くには　施を用つ以て杖と爲す』
爾の時帝釋、是の偈を說き已りて尊者を供養し、天宮に還昇す。

【五】毘闍延堂。勝利殿の意にて、帝釋天が阿修羅との戰に勝ちて建てたる紀念堂なりといふ。

り』

智慧を以て地を耕し　過惡の草を壞破す　是を善福田と名く　種ゆる所の果虚しからず』

爾の時舍之、敬重の心を以て仰いで帝釋を視、而も之に白して言く。「汝は最も尊貴にして放逸の處に居するも、猶善心ありて福德を修す」と。帝釋、偈を以て答へて言く。

施の因緣を以ての故に　我れ最も自在を得たり　天人阿修羅も　愛重して我を尊敬す』

晝夜に施を憶念す　故に我れ是の如きを得ること　多くの伏藏を得て　衆寶の盈滿して出づるが如し』

尊者迦葉、貧里の巷に到り樂しみて貧施を受く。爾の時帝釋、化して*織師の貧窮なる老人と作り、舍之亦化して老母と爲り、弊壞衣を著け、夫婦相隨ひて息道の邊に坐せり。爾の時尊者、彼の夫婦の弊衣下賤なるを見て、卽ち是の念を作す。「世の窮下も是等に過ぎず」と。卽ち其の所に至りて往いて安慰せんと欲す。織師疾く起ちて尊者の鉢を取り、天の須陀（Sudhā 甘露味）食を以て鉢に滿して之を奉る。爾の時尊者、是の食を得已りて内心疑を生じ、卽ち偈を說いて言く。

彼の人極めて貧賤なるに　飲食乃ち殊妙なり　此の事驚疑すべし　極めて是れ顚倒の相なり

是の偈を說き已りて而も是の念を作さく。「今當に誰なるかを問ふべし」と。須らく自ら觀察して卽ち偈を說いて言く。

我は是れ善き種子　他人の惑を斷除す　天人の爲す所あらんに　猶當に解釋すべし

況や我今疑あり　云何か當に他に問ふべき

是の偈を說き已つて卽ち慧眼を以て是の帝釋を見、而して是の言を作さく。「嗚呼、修福を樂ふ者は、方便して尊勝を求むよ」と。卽ち偈を說いて言く。

＊織師。布を織る職人。

五六、*摩訶迦葉貧母を度する緣

復た次に、大功德ありて猶修して倦むなし、況して福なき者にして而も當に懈慢すべけんや。

我昔曾て聞く。尊者摩訶迦葉、諸の禪定、解脫三昧に入り、修福の衆生をして善の種子を下して福を獲ること無量ならしめんと欲し、其の晨朝に於て佛の與ふる所の　[二]僧伽梨（Saṃghāṭi）衣を著け、而して往いて乞食す。時に覩る者あり、卽ち偈を說いて言く。

彼の勝者を讚歎し　如來の衣を著く　人天八部の前に　[三]佛座を分つて坐せしめたまへり

時に佛、復た迦葉を讚歎して卽ち偈を說いて言はく。

[四]汝今修行するや善し　月の漸に增長するが如く　空中に手を動かすに　障礙する者あるなきが如し　身は淸淨の水の如く　諸の塵翳あるなし』

*佛常に衆前に於て　其の功德を讚歎したまはく　乃し未來世　彌勒（Maitreya）成佛の時に至ると』

亦復た彼を讚歎し　而も大衆に告げて言はく

此は是れ牟尼尊　苦行の弟子にて　十二頭陀を具し　少欲知足の中に　最名ありて第一と爲す　此を名けて迦葉と爲すと　人天八部の前にて　其の功德を讚歎したまへり』

爾の時、帝釋彼の迦葉の行步の容裕なるを見て、遙かに宮殿に於て合掌恭敬す。其の婦の舍之(Śacī) 而も之に問ひて言く。「汝今誰を見て恭敬すること是の如きや」と。爾の時帝釋、卽ち偈を說いて答ふらく。

欲火の中に處して　念を繫けて常に前に在り　金色の婦と　同室すると雖も著心なし』

身は禪定に依り　心意亦快樂なり　城聚落の中に入りて　而も乞食を行ぜんと欲せ

---

* 梵、缺。本篇の文學的骨子を成す傳說としては、摩訶迦葉度貧母經一卷あり。

【二】僧伽梨。三衣の一、迦葉の佛より衣を與へらるること古傳としては雜阿含卷四一（大正藏、一一四經）に出づ。

【三】佛迦葉に半座を分たること古傳としては雜阿含卷四一（大正藏、一一四二經）に出づ。

【四】以下偈中に出づることの根本資料としては雜阿含四一卷（大正藏、一一三六—一一四二經）を見よ。但し彌勒成佛のことをゆうは增一阿含經卷四四等の傳にて新し。

* 以下は佛語に非ず。作者が佛語を引きて讚ずるなり。

由つての故に　顏色に威光あり　說法して苦を盡すを得』　彼の如來の所說は　諸の修善者の與に　樂の因緣と作るの故に　樂の果報を得』　云何か之を佛と名くる　說かく、十力あるを言ふ　諸有に此の法を得て　人の爲に輕んぜられず』　況んや諸の說法者　法座の上に昇りて　佛の功德を讃立せんに　諸の外道を降伏す　佛德を讃ずるを以ての故に　上妙の身を獲』　便ち諸人の爲に　可樂の正道を說かんに　是の因緣を以ての故に　猶し秋の滿月の如く　衆の愛する所と爲る』　佛の實德を讃歎せんに　劫を盡すも猶盡き難し　假使舌消澌せんも　終に中にして休廢せず』　常に是の如き心を作す　世々受生の處に　言說悉く辯了し　佛の自然の智を說きて　衆の智慧を增長せんと　是の因緣を以ての故に　所生に勝智を得』　一切世間は　皆是れ業緣の作なりと說きたまふ　聞き已りて諸善を獲』　諸惡を離るゝに由つての故に　生處に諸の過を離る　貪瞋我見等は　油を熱鐵に注ぐが如く　皆悉く消涸し盡す』　此の如き等の諸事　何處にか適意ならざる　我れ因緣の箭を以て　汝の諸網の弓を壞る　*復已は言辯の父　思惟は善說の父なり』

爾の時大王、斯の偈を聞き已りて卽ち起ちて合掌し、而も是の言を作さく。「說く所極めて妙にして善く我が心に入れり」と。王、偈を說いて言く。

說くを聞きて我が意解けり　佛の功德を歎ずる果は　略して而も之を言說せり　常に應に佛を讃歎すべし

何の因緣を以て而も此の事を說くや。說法者が大果報を得るが爲なり。諸有說法に應に喜心を生ずべし。

* 「復已」の二字誤傳あらん。

王言く。「大徳よ、久近に此の香を得るや」。比丘答へて言く。「久しく已に之を得、王今善く聽け、往昔過去に佛あり、名を迦葉と曰ふ、我れ彼の時に於て精勤修集して而して此の香を得たり」と。時に王、聞き已りて希有の心を生じ、而も比丘に問はく。「我猶悟らず、唯願はくは解說せよ」と。比丘而して王に白して言く。「大王よ、至心に善く聽きたまへ、我れ迦葉佛の時に於て說法比丘と作り、大衆の前に在りて歡喜心を生じ、彼の佛を讃歎しまつりぬ」と。即ち偈を說いて言く。

『金色の身晃曜たるに　歡喜して讃歎を生ぜり　此の福德の力に因りて　在々受生の處
身々此の業に隨ひて　常に此の如き香あり』　優鉢羅(Utpala)　及以び瞻蔔(Campaka)
の香より勝る　香氣既に充塞すれば　聞ぐ者皆欣悅すること　甘露味を飮むが如く
之を服むに厭足するなし』

爾の時大王、斯の語を聞き已りて身毛皆竪ち、而も是の言を作さく。「嗚呼、佛の功德を讃じて乃ち是の報を獲たり」と。比丘答へて言く。「大王よ、是の果の報を受くること此の如しと謂ふ勿れ」と。復た偈を說いて言く。

『名稱と福德と　色力及び安樂と　已に此の功德あり　人として輕賤する者なし』
威光は愛樂すべく　意志深く弘廣なり　能く諸の過惡を離るゝは　皆佛を讃ずるに由る
の故なり』　斯の如きの福報は　賢智にして乃ち能く說かん　受身既に盡くせるを以て
甘露の迹を獲』

爾の時大王、復た比丘に問はく。「佛の功德を讃ずる、其の事云何」と。爾の時比丘偈を說いて答へて言く。

『我れ大衆の中に於て　佛の實の功德を讃じ　是の因緣に由るの故に　名稱十方に滿ちぬ』
佛の諸の善業を說かんに　大衆聞いて歡喜し　形貌皆熙怡たり　前に佛を讃ずるに

卷の第十

五五、*阿輸迦王法師の異香の因縁を問ふ縁

復た次に、若し人、佛を讃ぜんには大果報を得、諸の衆人の爲に恭敬せられん。是の故に應當に勤心して讃歎すべし。

我昔曾て聞く。[一]迦葉佛（Kāśyapa）の時に一法師あり、衆の爲に説法し、大衆中に於て迦葉佛を讃ず。是の縁を以ての故に命終りて天に生れ、人天中に於て常に快樂を受けたり。釋迦文佛の般涅槃の後百年、阿育王の時に於て、大法師と爲りて羅漢果を得、三明六通あり八解脱を具す。常に妙香ありて其の口より出づ。時に彼の法師、阿輸伽王を去ること遠からず、衆の爲に法を説く。口中の香氣王所に達す。王香氣を聞ぎて心に疑惑を生じ、是の思惟を作さく。「彼の比丘は妙香を和して口に含むと爲すや、香氣乃ち爾り」と。是の念を作し已りて比丘に語げて言く。「口を開け」と。時に比丘、口を開くも都て所有なし。復た語ぐ。「口を漱げ」と。既に口を漱ぎ已るも猶香氣あり。比丘、王に白さく。「何の故に我に口を張れ、口を漱げと語ぐるや」と。時に王答へて言く。「我れ香氣を聞ぎて心に疑を生ずるの故に、汝をして口を張り及以び口を漱がしめぬ」と。香氣踰よ盛にして、唯此の香あるのみ、口に所有なし。王比丘に語ぐ。「願はくは我が爲に説け」と。比丘、微笑して即ち偈を説いて言く。

大地の自在者　今當に汝が爲に説くべし　此れ沈水香に非ず　復た花葉莖の
梅檀等の諸香を　和合して能く是を出すに非ず』　我れ希有の心を生じて　而も是の如き言を
作せり　昔迦葉佛を讃ずるに由り　便ち是の如き香を獲と』　彼の佛の時已に合し
新香と異るなし　晝夜常に香あり　未だ曾て斷絶あらず』

---

* 梵筴、缺。

【一】過去七佛中の第六。釋尊の前佛といふ。

子王に過ぐ　　眼瞬は牛王の如く　　色は眞金よりも殊る』

爾の時尊者、倍す喜敬を生じ、大喜充滿して轉た歡喜を增す。卽ち偈を說いて言く。

嗚呼清淨の業や　　是の美妙の報を獲たり　　業緣の得る所　　是れ現世の作業に非ず』
百千億劫中に　　身口に淨行――　　修施及び戒と忍と　　幷びに禪と智慧とを作し』　決定して正行を作し　　是を以て自ら莊嚴す　　衆人の眼に愛する所　　清淨にして垢穢なし』
是の形相を現ずるの時　　怨家も皆歡喜す　　況や我れ今日に於て　　而も當に愛敬せざるべけんや』

是の如く思憶し、唯だ佛の想を作して魔を念はず。卽ち坐より起ちて五體を地に投げ、而も爲に禮を作しぬ。魔、時に卽ち驚いて是の如き言を作さく。「大德よ、何の故に要に違ふや」と。尊者言く。「何をか言要と作すや」。魔言く。「先に要ふらく、禮する莫れと、今何の故に禮するや」。尊者地より起ちて卽ち偈を說いて言く。

眼もて愛樂して見る所　　心を擬して佛を禮せり　　我今實に　　恭敬して汝の足を禮せず

爾の時魔王言く。「汝、五體を地に投げて我が爲に禮を作せり、云何か說いて、我れ汝を敬はずと言ふや」と。尊者魔に語げて言く。「我れ汝を敬禮せず、亦言誓に違はず、喩へば、泥木を以て佛像を造作するに、世間の人天皆共に禮敬するが如し、爾の時、泥木を敬はず、佛を敬禮せんと欲するの故なり、我れ佛の色像を禮して魔形を禮すとは爲ず」と。是の語を聞き已りて魔本形に還復し、尊者の足を禮して還つて天上に昇れり。

何の因緣を以て而も是の事を說くや。諸の大聲聞等、諸の檀越をして普く衆僧を供養して不所乏ならしめ、又比丘をして亦聞法奉行せしめんと欲す。是を以ての故に應に四衆の爲に說法すべし。若し佛を讚ぜんと欲さば、應當に是の說を作すべし。「欲結使を斷ずと雖も覺らざれば爲に禮を作せ」と。

破壞して任ふる所なきが如し　我若し敬を受くれば　其の事亦是の如し』

尊者答へて言く。「我れ歸命せず、汝亦言要を負はず」と。魔復た尊者に語げて言く。「我を待つこと須臾の間なれ」と。卽ち空林中に入りて而も偈を說いて言く。

我先に[二三]手羅(Sūra)を惑はし　金の熾盛身を現ぜり　佛身の不思議なるも　我れ是の如き形を作せり』　身に熾んなる光明を現はすこと　日月よりも踰過し　衆人の目を悅樂す　明きこと甘露を飮むが如し』

尊者答へて言く。「汝今我が爲に先の如く好く作せ」と。魔答へて言く。「諾し、我今當に作すべし、卽ち爲に屍を却けよ」と。爾の時魔王、卽ち空林に入りて現りに佛形(Buddha-rūpa)を作すこと[二四]作伎家の如し。種々に自ら莊嚴し、如來の色貌もて大人の相を現じ、能く寂滅の眼を生ずること、喩へば新畫像の當に開發を作すべきの時の如く、此の林を莊嚴し、看視するに厭足なく、圓光一尋あり、佛形を化作す。舍利弗右に侍し、目連左に處し、阿難後に隨つて佛鉢を所持せり。尊者摩訶迦葉、阿尼盧頭(Anuruddha)、須菩提(Subhūti) 是の如き諸大聲聞千二百五十人、佛の左右に侍し、猶し半月の如き佛の相貌を現じて、尊者優波毱多の所に向へり。

尊者、佛の相貌を見て極めて歡喜を生じ、卽ち坐より起ちて佛の形相を觀ずらく。「咄なる哉、惡無常や、悲愍の心あるなく、妙色の金山王、云何してか牟尼の身を破壞せる、是の如く、無常の爲に摧滅せらる」と。爾の時尊者、觀心を作すに其の意擾亂せんと欲す。「我今實に、佛掌の蓮華の如くなるを見たり」と。而して是の如き言を作さく。「嗚呼、盛妙の色や、具さに廣く說くべからず」と。卽ち偈を說いて言く。

面は蓮華の敷くにも過ぎ　目は青蓮の葉の如し　身形は華林にも殊ぎ　相好は月よりも過ぐ』　甚深なること海のごと　安住すること須彌のごと　威德は日に過ぎ　行は師

【二三】手羅。偉人、ここにては佛弟子を指すならん。

【二四】作伎家。役者。

是の如き因縁の故に　佛を知つて長遠に　未だ曾て汝の所に於て　不愛心を生じたまはざるを見たり』　彼の第一智の尊は　汝の信心を成ぜんと欲して　常に親愛の語を發したまふ　智者少しく信を生ぜんに　便ち涅槃の樂を得ん』　今我略して汝が爲に　說法せり、愚癡の冥　黑闇の過患は　汝今信を生ずる故に　則ち洗除し盡すと爲す』

爾の時魔王、身毛皆竪ち、*波曇花(Kadamba-puṣpa)の種々に觸惱を起すが如し。謂へらく。「猶子の過を作すに父の猶愛の心の　[二]大地の忍びにも過ぎて曾て過責を見はさざるが如し、是れ彼の仙中の勝なり、若し少かに佛を信ぜば前過を洗除す」と。時に彼の魔王、尊者の前に在りて佛の功德を念じ、尊者の足を禮して是の如き言を作して言く。「尊者よ、我を救ひたまへ、我が敬心の與に、當に發心して我が頸に懸れるを却くべし、我、觸惱すと雖も、願はくは慈心を起して、我が爲に除捨したまへ」と。尊者答へて言く。「汝と共に要を作して後、乃ち當に脫すべし」と。魔言く。「何等か、是れ言要なりや」。尊者答へて言く。「汝今日より比丘を惱ます莫れ」。魔卽ち白して言く。「我更た惱觸せず」。尊者言く。「汝の知る所、佛去りたまひて[三]百年、始めて我の出づるあり」と。卽ち偈を說いて言く。

三界の眞濟　我れ彼の法身を見るに　金色身を見ず　無惱にして我が爲に現じ　我に佛の形相を示したまふ　我今極めて希望して　如來の形を愛す

爾の時魔王、尊者に語げて言く。「我亦要誓を作さん、言く、汝若し形を見て[三]卒禮を爲す莫れ、一切種智を以て愼しみて我を禮する莫れ、我が佛相を作せるを、愼しみて禮を爲す莫れ』と。卽ち偈を說いて言く。

謙敬を以て佛を念ぜよ　我が爲に禮を作さば　則ち我を燒滅すと爲す　我に何の勢力あつてか　能く離欲者の敬を受けんや』　喩へば伊蘭の芽の　象の鼻の爲に押されて

* 波曇は、迦曇波の誤寫傳なり、橙色の芳花をつく、譯梵語に白花とするは誤りならん、學名 Nauclea cordifolia.

【二】 大地の忍び。大地諸の物を戴せて重しといはず。

【三】 本論の作者は、阿育王の出生年代を佛滅百年に置くものとして注意すべし、Divy. 又同じ、卽ち、varṣa-śata-parinirvṛte とあり。

【三】 卒禮。あはてて禮す。

mūla）に於て、乃至、百種の諸惱を造作して、以て佛を亂し、猶我を苦しめず」と。卽ち偈を說いて言く。

婆羅(Bārāṇasi)聚落の中　婆羅門村邑(Brahmaṇagrama)に　瞿曇(Gautama)來りて乞食す　我れ空鉢にして去らしめぬ　卽日に食するを得ず　然れども我に加毀せず』　我曾て惡牛　幷及び毒蛇の身と作り　[一八]五百車もて水を濁し　佛をして飮むを得ざらしむ』　皆是れ我が作なるを知るも　曾て惡言を出さず　「我が所作旣に少きに　汝極めて我を毀辱す」と』　人天阿修羅も　一切皆輕蔑し　我を毀り名稱を壞り　屍を以て我を苦惱せり』

爾の時尊者、魔王に告げて言く。「汝今は不善、惡物なり、云何が[一九]聲聞もて世尊に比するや」と。卽ち偈を說いて言く。

云何か葶藶を以て　用て須彌に比し　螢火の微明もて　以て日光に比し　一掬の少水もて　方に大海に比せんや』　佛に大悲心あるも　聲聞に大悲なし　如來は大悲を以て　汝の種々の過を恕したまへり　我亦佛意に隨ひて　汝の善根を生ぜんと欲す』

爾の時魔王、斯の語を聞き已りて復た偈を說いて言く。

我の佛德を說くを聽せ　福利の威光盛なる　*彼は之れ所有分者　斷諸愛欲者にて　忍辱して嫌を起さず　我れ愚癡を以ての故に　日々常に觸惱するも　母の一子を愛するが如し』

優波毱多、波旬に語げて言く。「汝、我が語を聽きて、如來の所に於て數は諸惡を作せりといふ、洗除するを得て諸の善根を生ぜんと欲さば念佛するに過ぎたるはなし、世尊は最上なり」と。卽ち偈を說いて言く。

【一九】 長阿遊行經に出づ。

【二〇】 聲聞……。弟子と比較するか。

* 以下三句の梵文(Divy.)は次の如し。saṃgaṇ cheṭtuṃ kṣānti-guptavratasya.

十力の弟子　己が神通力を以て　汝の輕拃に出るの故に　今故らに汝を毀辱す』　誰か當に此の力もて　而して汝の爲に解く者あるべき　猶大海潮あらんに　能く波浪を制する無きがごとし』　譬へば藕糸を以て　用以て雪山に懸けんがごとし　我が神力を盡すと雖も　汝が爲に脱する能はず』　我に大力ありと雖も　彼の沙門に及ばず　燈燭の明の　大火聚に如かず　火聚復た明るしと雖も　日の光に及ばざるに如似たり』

魔王、斯の偈を聞き已りて梵天に語げて言く。「我當に誰に依つてか此の患を脱すべき」と。梵天偈を說きて以て魔に答へて言く。

汝速疾に彼に向つて　哀みを求め而して歸依せよ　神通と名聞を樂ふと　汝盡く敗れ壞失す　人の跌き倒れて　地に扶りて還び起つを得るに如似たり

魔、是の念を作さく。「如來の弟子は梵等の勝天の力も及ぶ者なし、乃つて諸の梵の推敬する所と爲る」と。魔、偈を說いて言く。

佛の弟子等　梵王に尊敬せらる　況んや復た如來の德をや　云何か格量すべけん』
我極めて惱亂を作すに　猶故に忍んで悲愍し　而も故に我が爲に　諸の衰惱の事を作さず　能く忍んで我を護惜す　何ぞ稱說するを得べけん』　我今始めて佛を知りぬ　眞實の大悲者　體性極めて悲愍に　怨憎の心を生じたまはず　身は金山王の如く　光明は日に踰ゆ』　愚癡もて我心を冥まし　皆惱亂の事を作せるに　彼は精進堅實にして
未だ曾て麁語あらず　恒に常に悲愍を見はし　我が心をして悦ばざらしむ』

爾の時欲界の自在魔王(Adhipati-mala)　而も是の言を作さく。「遍く三界を觀するに能く解く者なし、我今唯だ還つて尊者に歸依せんのみ、乃ち脱するを得べし」と。是の語を作し已りて尊者の所に向ひ、五體を地に投げて足下に頂禮し、是の如き語を作さく。「大德よ、我れ菩提樹下(Bodhi-

【一八】 藕糸。蓮根の糸。

るかを觀じ、是れ、魔王波旬の所作なるを知り、卽ち神力を以て三種の死屍を以て魔王の頸に繋く。時に魔王、屍の頸に著けるを知り、遙かに尊者見て是れが所作なるを知る。爾の時尊者、卽ち偈を說いて言く。

花鬘嚴飾の具は　比丘の捨離する所　死屍は極めて臭穢にして　愛欲者は厭惡す』
佛子と共に捔力し　戰諍するも誰か能く勝つ　我今是れ佛子なり　汝の花鬘を捨棄す
汝若し力あらば　汝の死屍を除去せよ』　大海の濤波の流は　能く禁制する者なし
唯だ[一七]鐵圍山ありて　水觸るれば則ち迴返す』

爾の時魔王、是の語を聞き已りて死屍を去らんと欲し、神力を盡すと雖も去らしむ能はざること、蚊蟻子の須彌山王を動かさんと欲する如く、復び力を竭すと雖も亦動かす能はず。時に魔波旬、屍を却く能はず、尋で卽ち飛び去る。而して偈を說いて言く。

若し我解く能はずば　餘の諸の勝れし天の　威德自在を使はんに　其は亦必ず能く解かん。

爾の時、尊者復た偈を說いて言く。

帝釋及び梵天も　能く是を解く者なし　設ひ熾然の火に入り　及び大海の中に在らんも
燋れず亦爛れず　此の如き屍汝に著けり』　乾かず朽壞せず　所在に汝に隨逐し
能く救脫する者なし　摩醯首羅天(Maheśvara)　及以び三天王と　毘沙門天王(Vaiśramaṇa)』　乃至梵天に到るまで　是の如き等の諸天等　復た神力を盡すと雖も　能く爲に解く者なし』

爾を時梵天王、魔の力を盡すも屍を却く能はざるを見て、而して之に告げて言く。「汝憍慢を生ずる莫れ」と。卽ち偈を說いて言く。

【一七】 鐵圍山(Cakravāḍa)。印度の神話的地理學の說に須彌山を中心としてこれを圍るに八山八海ありとし、その最外圍を鐵圍山と名く。

て修道すべし』　或は五欲を恣にするあり　言道自ら斷つに足る　若干種の作行もて
欲を遠離するを得んと望めり』　是の如き等の處々もて　欲の根本を拔かんを望むも　欲
林は拔くべからず』　人天阿修羅　夜叉　【一二】鳩槃荼(Kumbhaṇḍa)　一切有生の類の
微細の心欲の羂は　諸の衆生を繫縛し　【一三】有林の中を迴轉して　能く自ら拔くに由なし』

王、貪欲の拔くべからざるを聞くの故に、甚だ怪惑を生じ、卽ち偈を說いて言く。

能く、此の如き欲の怨を　斷滅する者あるなし　乃ち一人の　能く貪欲を滅する有るな
きや　人天の中に乃ち　能く此の欲を滅する無き乎

爾の時、象師而も王に答へて言く。「轉じて他より聞けり、唯だ佛世尊世界の大師のみ大慈心あり、一切衆生悉く皆子の如し、身は眞金の如く、大人の相を以て自ら莊嚴したまひ、【一四】自然智ありて、欲の生起、滅欲の因緣を知りたまふ、無礙心ありて一切を悲愍したまふと」。時に王、佛大人の聲を聞きて卽ち起ちて合掌すること、華の未だ敷かざるが如し。大衆の前に於て大誓願を起すらく。「我れ正法を以て國土を護り、及び財施を【一五】捨せん、此の功德を以て、願はくは我れ未來に、必ず成佛するを得て衆生の貪欲の患を斷除せん」と。

何の因緣を以て而も此の事を說くや。衆生、欲の因緣及び對治を知らざる故に、是の修多羅を說く。

五四、*優波毱多尊者魔王を化する緣

復た次に、佛、觀ずること久しくして信心を得しめたまふの故に、卒に事を爲さず。

我昔曾て聞く。尊者【一六】優波毱多(Upagupta)、林下に坐禪す。時に魔波旬、諸の華鬘を以て其の頂上に著く。爾の時尊者、禪定より起ちて其の華鬘の頂上に在るを見、卽ち定に入りて、誰の所爲な

【一二】鳩槃荼。天鬼の一種、人の精魂を噉ふといふ。
【一三】有林(bhava-vana)。衆生界、卽ち迷の世。
【一四】自然智。自然に備はる智慧、修行によつて得るに非ず、又人に傳ふる能はず。
【一五】捨す。喜捨すること。
＊本篇は阿育王經卷八、付法藏傳第三にも出で、Divyāvadāna p. 358－363 に出づるもの最も近し。梵筴斷簡、一七二葉。
【一六】優婆毱多は阿育王時の人、王師となりし高德といひ、付法藏の第五師に擧げらる。

爾の時大王、象師に語げて言く。「我等今は是處に墮せり、當に何の計をか作すべき」。象師王に白く。「更に餘の方便なし、唯だ當に樹に攀づべし」。王、是の語を聞き、手を以て樹に攀づ。象即ち奔走して牸象を逐ふ。象既に去るの後、導從の諸人始めて王の所に到る。王即ち徐歩して還た軍中に向ふ。爾の時象師、象跡を尋跡して多日を經、象を得て軍に歸る。時に王、大衆中に在り、象師、象に乘りて王所に向ふ。時に王、瞋忿して而も是の言を作さく。「汝先に象は調順して乘るべしと言へり、云何か此の狂象を以て而も我を欺けるや」。象師、合掌して而も王に白して言く。「此れ實に調順せり、王若し信ぜざれば、我今當に象の調順せる相を現じて、王をして知るを得しむべし」。爾の時象師、即ち鐵丸を燒きて以て其の前に著く。爾の時彼の人、象の丸を呑むことを語る。時に王聽さずして彼の人に語げて言く。「汝調順を說くに云何か狂逸なる」と。象師、長跪合掌して而も王に白して言く。「此の如し、狂逸は我の調ふ所に非ず」。王、之に語げて曰く。「是に何の過ありてか汝の調ふる所に非ずと爲すや」。彼即ち王に白さく。「象に貪欲あり、以て其の心を病む、我の治する所に非ず、大王當に知るべし、此の如きの病は、杖捶鉤鄧も治する能はざる所なり、貪欲に心壞らるゝも亦復た是の如し」。即ち偈を說いて言く。

欲を心の毒箭と爲す　何れより生ずるやを知らず　何に因つてか增廣を得　云何か滅するを得べけん

王、貪欲の治療すべからざるを聞いて、象師に語げて言く。「此の貪欲の病は能く治すること無きや」。象師答へて言く。「此の貪欲の病は擁護すべからず、捨てゝ而も治さず」。即ち偈を說いて言く。

當に諸の方便を作して　斷欲の法を勤求すべし　其の至趣を知らず　精勤の退還するを懷む』　五所欲を棄捨し　出家して苦行を修め　欲結を斷ぜん爲の故に　應に精勤し

狂逸すること、風の雲を吹く如く、往奔して赴かんと欲し、嶮岨を避けず。時に調象師、種々鉤もて斲るも住まらしむる能はず。時に光明王甚だ大いに驚怖し、語げて鉤斲せしむるも禁制する能はざること、惡弟子の師に隨順せざるが如く、象の去逐すること疾し。王大いに驚迫して心に苦惱を生じ、意に謂へらく必ず死せんと。卽ち偈を說いて言く。

　虛空の動くを見るがごと　迅速にして諸方を撓かし　皆悉く而も來り聚る　普見するに輪の動くが如し』　大地皆迴轉し　其の象の走逐の疾きこと　譬へば山の急行するが如く　諸山は之に隨ふが如し』　嚴しき谷澗中の河あり　諸樹は身體を傷つく　王は怖れ極つて苦惱し　發願して山神に求むらく　「我をして安全を得しめたまへ」と』　鉤斲もて身體を傷くるも　欲盛なれば苦を覺えず　象の走轉すること更に疾きは　喩へば暴風の如し』　棘刺の鉤もて身を斲り　幷に山石に傷はれ　頭髮皆蓬亂す』　塵土極めて坌汚に　衣服復た散解し　瓔珞及び環玔　破落して悉く地に墮つ』

爾の時大王、調象師に語げて言く。「我の今の如くんば、命恐らくは全からざらん」と。復た偈を說いて言く。

　汝好く勤めて方便し　禁制して住まらしめよ　我今秤に在る如く　低昂して死處に墮す

爾の時、象師力を盡して鉤斲するも、禁制する能はず。數々歎息し顏色慚恥あり、涙下つて目に盈つ。頫面して王を避け、相見るに忍びず。復た王に語げて言く。「大王よ、我今當に何の計をか作すべき」と。卽ち偈を說いて言く。

　力を盡しく象呪を誦せん　古仙の說く所なり　鉤鄧の勢力盡きて　都て禁制すべからず』
　人の死を欲する時の如し　呪術及び妙藥も　度を越さば必ず死に至らん　良藥も救はざる所なり』

如來は善く時と非時等を知りたまひ、及び苦責の數を悉く皆通達したまふ。佛、婆多梨に告げたまはく。「設ひ阿羅漢ありて糞穢汚埿の中に臥せり、我その背上を行かんに、意に於て云何、彼の阿羅漢に苦惱ありや不や」。婆多梨言さく。「不とよ、世尊」。「汝若し阿羅漢・阿那含・斯陀含・須陀洹を得んには、終に教に違はざらん、汝の凡夫愚癡にして空無所有に由ること、喩へば芭蕉の中に實あること無きが如し、廣く說くこと、[〇]修多羅の如し」。

時に人婆多梨は阿羅漢を得と謂へり。佛說を聞き已りて婆多梨の是れ具縛の凡夫なるを知り、諸比丘、不信を生ずらく。「彼の阿羅漢を得ざるを聞けり、此の如き貴族の出家にして若し阿羅漢を獲得せざらんには、云何か卑賤なる種姓の尼提が出家して、阿羅漢を得るや」と。佛は漏盡せしめんと欲せば便ち漏盡するを得、若し漏盡せしめんと欲せざれば、便ち漏盡するを得ず。佛、諸比丘の心念を知りたまひて諸比丘に告げたまはく。「若し[一]奢摩他(Śamatha)毘婆舍那(Vipaśyanā)を修めば、必ず能く漏を盡さん、若し修めずば漏盡を得る能はず、若しくは知り、若しくは見おはれば、卑賤に生ると雖も羅漢果を得ん、婆多梨の如きは知らず見ず、勝族に生ると雖も而も阿羅漢を得ず、是の故に如來は平等に說法して偏黨なし」と。

五三、* 光明王乘象の牸象を追ふ難にあひて貪欲の斷つべきを知る緣

復た次に、狂逸の甚しきは貪欲に過ぐる莫し。是の故に應當に勤めて貪欲を斷つべし。

我昔曾て聞く。世尊、往昔菩薩道を修行したまひし時、時世空虛にして佛賢聖の世に出現するなし。爾の時王あり、名を光明(Prabhāsa?)と曰ふ。調順せる象に乘りて出行遊觀す。前後導從するに歌舞唱妓あり、往きて山所嶮難の處に至り、王の乘る所の象、遙かに牸象を見て欲心熾盛に哮吼

[〇] 修多羅說。雜阿含の十卷第十經を參照。されど一切空無所有とするは頗る般若の說に近し。

[一] 奢摩他は雜念粗心等を去ること、毘婆舍那は觀察すること、卽ち禪定の二面である。

* 梵筴、斷簡一六五、一六六、一六七葉。

言く。

我今殷重の心もて　哀願を求めて懺悔を得ん　慚愧す當に何んしてか　口を擧げて世尊を視まつるを忍ぶべけん

諸比丘等、婆多梨に語げて言く。「世尊に若し煩惱の漏あらんには汝怖畏すべし、今佛世尊は久しく諸漏を斷じたまへり、汝今何の故に畏難を去らざる」と。婆多梨、復た偈を說いて言く。

我自らの罪過を疑ふ　淨き滿月を見る如き　無瞋の容貌の勝れたまへる　三界の慈尊の哀顏を　我今觀見したてまつらんと欲す』　慈悲もて我が爲に說きたまふを　愚癡の爲に盲ゐられて　而も佛語を受けず』　譬へば人の死を欲して　隨病の藥を服まざるが如し　慈愍の敎に違失して　今悔恨の惱を受く』

諸の同梵行者、而も之に語げて言く。「我等と共に世尊の所に詣るべし」と。勸めて共に佛に見え、佛に向つて過を說く。時に諸比丘、復た之に問ひて言く。「汝今決定して懺悔するや」と。時に婆多梨即ち偈を說いて言く。

若し我今佛を禮せんに　寧ろ身を散壞せしむとも　佛は我を起たしめたまはず　我亦終に起たざらん　若し佛我が爲に語りたまはゞ　身心皆滿足せん

爾の時婆多梨、諸比丘と佛所に往詣す。時に佛世尊、大衆の中に在せり。時に婆多梨、佛前に在りて身を擧げて地に投じ、而も偈を說いて言く。

我が過を懺悔するを聽させたまへ　人の調御師　體性の悲愍者よ　我が弾戾の馬の如きを　調順の道に越度したまへ』　假設食を得ずして　眼陷ち頰骨現れ　枯竭して死に至るとも　寧ろ此の如き苦を受けて　聖教に違はざらんや』　釋・梵の尊勝なる天も　敬ひ戴きて所說を奉ずるを　我の愚癡なる故に　佛語に順はざりき』

を聽さん」と。時に婆多梨、猶故に肯ぜず。爾の時に當つて佛、一食戒を制したまふ。第二、第三も亦是の如く佛に請ひ、佛猶ほ肯じたまはず、即ち制戒したまふ。婆多梨即ち佛を離れて去り、極めて悔心を生じ、而も偈を說いて言く。

我れ佛の所說に違ふ　云何か舌斷たざらん　云何してか地に陷ちざらん　故に復た能く我を載せんや』　羅刹・毘舍闍(Piśāca)　惡龍及び賊と　敢て語に違ふ者なし　飮食せんが爲の故に　頑嚚にして佛語に違ふ』　寧ろ刀を以て腹を開き　蛔虫を呑噉し土食して以て腹を滿すとも　云何か食の爲の故に　乃ち十力の教に違はん』　我今自ら悔責すること　喩へば「[八]無心者の如し』

爾の時婆多梨、是の偈を說き已りて慚愧自責し、三月の中恥ぢて佛に見えず。[九]自恣の時近づき、晝夜愁惱して而して自ら燒然たり。羸瘦毀悴して威德を失へり。時に諸比丘の慈心ある者、深く悲愍を生じ、即ち偈を說いて言く。

今諸比丘等　衣を縫ひ而して洗染す　久しからず當に散去すべし　汝後に恨を生ずる莫れ』　汝今速かに佛に向つて　蓮華足を敬禮し　應に尊重の處に向ふべし　力を盡して哀請を求め　當に勤んでゝ功力を用ふべし　乃ち懺謝するを得べけん』

婆多梨、是の偈を聞き已りて哽噎して涙を墮し、復た偈を說いて言く。

世尊に所說あり　世に皆違ふ者なし　我が愚癡に由る故に　敢て佛語に違へり』　我の極めて輕躁なる　衆中に慚愧するなく　後時の笑を見ず　衆の爲に惡賤せらる』此の過惡を思はずして　輒ち是の如き說を作せり　此の事僧伽の應作にして　及び我が所請に非ず　我が無定心に由つて　卒に是の如き語を發せり』

同梵行者、此の偈を聞き已るや、即ち佛に請ひて求哀懺悔をせんと欲し、婆多梨復た偈を說いて

【八】無心者。失神者のこと。

【九】自恣。安居の終りに行はるゝ行事。四分律自恣犍度等に詳し。

復た次に、應當に食を觀ずべし。世尊も亦正に食を觀ぜよと說きたまへり。

我昔曾て聞く。尊者　黑迦留陀夷(Kālodāyin)の食の因緣の爲の故に、佛制戒を爲したまへり。佛種々の因緣を說いて戒を讃じ持戒を讃じ、少欲知足にして頭陀(dhūta)の事を行じたまふ。佛、比丘僧を集めて一食の法を讃へ、乃至一食の戒法を制せんと欲したまふ。時に比丘僧咸な各默然たり。猶し大海の寂默として聲なきが如し。時に諸僧中に一比丘あり、婆多利(Bhaddāli)と名く。佛に白して白さく。「世尊、是の戒を制したまふこと莫れ、我持すること能はず」と。佛比丘に告げたまはく。「過去の生死に於て是の飲食を爲し、生死の中に無窮の苦を受け、流轉して今に至り、乃往過去無量世の時、*四禽獸仙人あり、第五爾時鳥者、是の如き言を作せり。『諸苦の中飢渴最も苦し』と。劫初の時光陰天(Ābhāsvara)下る、時に一天あり、最初に指を以て地味を嘗め、旣に其の味を嘗むるや遂に取つて之を食らふ、爾の時の彼の天は、今彼の婆多梨是なり、即ち彼の時に於て彼の婆多梨先づ地味を嘗め、今亦復た爾り、但だ飲食の爲にす」と。彼の婆多梨法の爲にせざるが故に坐より起つて更に衣服を整へ、佛に白して言さく。「世尊、一食の法を制したまふこと莫れ」と。即ち偈を說いて言さく。

我今　世尊の一食の戒を持する能はず　若し一人に善からざれば　應に此の戒を制すべからず

一切の比丘、是の偈を聞き已つて皆悉く低頭し、思惟久しうして而も是の言を作さく。「咄なる哉、揣食の過患を見ず、揣食の爲の故に大衆の中に於て而も毀辱せらる」と。即ち偈を說いて言く。

寧ろ鹿と共に草を食へ　蛇の風を呼吸する如かれ　佛僧の前に於て　飲食の爲の故に
佛に違ひて是の說を作さざれ

佛婆多梨に告げたまはく。「汝に檀越の舍に半分の食を食し、餘は持來つて寺に在つて而も食する

【七】迦留陀夷因緣のこと、中阿含一九二經迦樓烏陀夷經に出づ。

＊ 文に誤脫あるべし。

恨熾猛の火は　意林を焚燒す　善き哉や悲愍者　願はくは還び我が爲に說きたまへ』
我今上願を發せり　必ず當に解脫を求むべし　今日より已往　寧ろ身肉を捨つるとも
終に佛敎に違はざらん』

佛、諸の比丘の心の念ずる所を知りたまひて、卽ち偈を說いて言はく。

欲の瞋恚は禁ずる所　惱亂は隨順せざれ　我今應に悲愍して　還び其の苦難を救ふべし』
嬰愚過惡を作すとも　智者は應に忍受すべし　譬へば人の兒を抱くが如し　懷ろの
中種々に穢るも　糞臭を以ては　便ち其の子を棄捨すべからず』

是の偈を說き已つて草敷より起ち、僧坊に還らんと欲したまふ。爾の時天・龍・夜叉・阿修羅等合掌して佛に向ひ、而も偈を說いて言さく。

嗚呼、大悲あるかな　大仙正導者よ　彼の諸比丘等　放逸に盲ゐられ　競ひ忿るの心
息まず　世尊を觸惱したてまつる』　如來の大悲心なる　猶故に背捨したまはず　悲
哀して瞋嫌なく　意に調順ならしめんと欲したまへり　强惡の馬の　捶策して而も調は
しむるに如似たり』

爾の時如來、旣に僧坊に至りたまひ、光明照曜たり諸の比丘等佛の還來したまへるを知りて尋で卽ち出で迎ふ。頭頂もて敬禮し而も佛に白して言さく。「我等鬪諍して多くの衆生をして瞋忿の心を起さしめぬ、極めて衆人の輕賤する所と爲れり、我等今は皆破僧伽の罪に墮せり、唯や願はくは世尊、還び說法を爲して、和合を得しめたまへ」と。時に如來、諸の比丘の爲に[六]六和敬法を說いて、諸の比丘をして還び和合を得しめたまひき。是の故に佛は、瞋恚を斷てよと說きたまふ。

五二、*佛一食戒を制したまひ婆多梨敎勅に違して悔ゆる緣

【六】六和敬法とは、一－三、身口意の三業に慈を以て友に接す、四、施食を公平に友と分つて食す、五、友と共に聖戒中に住すること、六、友と共に聖見中に住すること（增一阿含三七品一經）。

＊　梵筴斷簡、一六四、一六五葉。本篇は中阿含一九四經跋陀和利經を引くものなるも漢巴兩傳共に四禽獸仙の本緣譚を欠く等の少異あり。

是の因緣を以て諸天善神も皆瞋恚を生じ、而も偈を說いて言く。

猶ほ濁水の中に　若し摩尼珠を置くが如し　水即ち澄清と爲り　更に濁穢の相なし』
如來の人寶　諸の比丘の爲に　隨順方便して　種々の妙好法を說きたまふ』　斯の諸の比丘等　心濁りて猶ほ不淨なり　寧ろ不清の水と作す　珠力もて清からしむべし』
此の比丘　佛所說の法を聞いて　而も其の內心意は　猶ほ故のごとく濁りて清からずとは作さず』　日の世間を照すが如き　諸の黑闇を除滅す　佛日汝に近きに　黑闇の心過甚だし』

如來世尊、諸の比丘を呵したまひ、斯の如きの重擔にも悲愍の心あり、猶ほ更に爲に長壽王(Dirgāyu)緣を說きたまふ。而も此の比丘眉を蹙め頞を聚め猶故に休まず。而して是の言を作さく。「佛は是れ法主、且つ須臾待たれよ、我等自ら知らん」と。時に如來斯の語を聞き已つて即ち此の處を捨てゝ十二由旬(Yojana)を離れ、婆羅林(Sāla-vana)に在つて一樹下の坐に是の思惟を作したまはく。「我今拘睒彌の鬪諍比丘を離れん」と。爾の時一象王あり、諸の群象を避けて來つて樹下に在り、佛を去ること遠からず、目を合せて而も住まる。彼も亦念言を生ずらく。「我、群象を離るゝを得たり、極めて清淨と爲す」と。佛彼の象の心の念ふ所を知ろしめして、即ち偈を說いて言はく。

彼象と此象と　牙極めて長し　群衆を遠離して　寂靜を樂しむ　彼れ獨一を樂しみ我亦然り
鬪諍群會の處を遠離す

是の偈を說き已つて深き禪定に入りたまふ。爾の時諸比丘、佛說を受けずして後に悔恨を生じ、天神又忿る。國を擧げて聞く者咸な瞋恚を生じ、唱言叱叱す。時に諸の比丘各相謂ひて言く。「我等云何か還び佛に見ゆるを得ん、當に共に合掌して佛を求請すべし」と。即ち偈を說いて言く。

我等、佛の教　三界の世尊の說に違へり　瞋恚の惡罪咎は　我が心中に住在す』　悔

【五】長壽王緣は中阿含七二經十壽王本起經、五分律四三卷、増一阿含二四品の八經等に出づ。

益隆盛なり』　惡に於て毀を加へんと欲すること　猶し斧もて石を斫るが如し　彼の人に毀を加へらるれば　我れ亦必ず當に報ゆべし』

爾の時世尊、猶ほ慈父の如くして是の如き言を作したまはく。「出家の人、應に勤めて方便して瞋恚を斷つべし、設し瞋に隨順したらんに極めて理に違はん、瞋恚に過多し」と。卽ち偈を說いて言はく。

瞋は彼の利刀の如し　割斷して親厚を離る　瞋は能く彼の　如法に律に順ふ者を殺害す』
恚瞋は出家を捨て　所住の處に應はず　嫌恨は屠棚の如し　瞋は乃ち是れ恐怖なり』
輕賤の屋宅　醜陋の種子　麤惡語の伴なり　意林を燒くの猛火なれ』　惡道を示すの導き　鬪諍怨害の門なり　惡しき名稱の床褥　暴速にして惡の本と作る』

「諸の瞋恚者は他の譏嫌の爲に呵毀せらる、汝今且らく當に是の如きの過を觀ずべし」と。卽ち偈を說いて言はく。

瞋は暴虎よりも劇し　惡瘡の觸れ難きが如し　毒蛇は喜見し難く　瞋恚者は是の如し』
瞋者の唾も亦苦し　善き名稱を毀壞す　瞋恚熾盛なれば　己れの所作と　及び他の所作とを覺らず』　財利を分つの時に於ては　其の數中に入らず　若し戲笑の處に於ては　衆人の容れざる所ならん　是の如き諸の利處に　瞋に由つて都て入らず』　瞋者は愛樂し叵し　其の事極めて衆多なり　常に慚恥の恨を懷き　百千を以て說くと雖も說いて猶ほ盡すべからず　略して擧げて而して之を說くのみ』　地獄の中に苦を受くることは　具論も盡すに足らず　瞋恚して惡を造り已り　悔恨して身心熱る　是の故に有智者は　應當に瞋競を斷つべし』

爾の時如來、諸の比丘の爲に種々に說法したまふ。而も其の瞋忿は猶ほ故のごとくして息まず。

巻の第九

五一、[*]佛、拘睒彌鬪諍比丘を化したまふ縁

復た次に、瞋恚の因縁は佛も諫むる能はず。是の故に智者は應に瞋恚を斷つべし。

我昔曾て聞く。拘睒彌比丘(Kauśambī)鬪諍を以ての故に分れて二部と爲る。其の鬪諍に緣りて各道理を競ひて多時を經歷す。爾の時世尊の無上大悲なる、[一]相輪の手を以て諸の比丘を制したまひ、即ち偈を說いて言はく。

比丘よ鬪諍する莫れ　鬪諍すれば破敗多し　勝負を競ひて息まず　次いで續いて諍ひ絕えず　世の譏呵する所と爲り　不饒益を增長す』　比丘は勝れたる利を求め　愛欲を遠離し　家と妻子を棄捨して　意に解脫を求む』　宜しく出家の法に依るべし　[二]不應作を作す莫れ　應當に智の鉤を以て　傲慢の意を廻らすべし』　[三]不適は鬪諍を生む　怨害の根本なり　出家の法に依止して　應に不適を起すべからず　譬へば淸冷なる水の　中に於て熾火を出すが如し』　既に[四]壞色の衣を著く　應當に善法を修すべし　斯の服宜しく善寂なるべし　恒に自ら調柔を思へ』　云何か是の服を著けつ　眼を竪て其の目を張り　眉を蹙め復た頞を聚め　而も瞋恚の想を起さんや』　應當に被服を念ずべし　剃頭もて標相と作し　一切皆棄捨せるを　云何か復た諍ひ競はん　此の如きの標相は　宜しく應に鬪諍を斷つべし』

時に彼の比丘、合掌して佛に向ひ、佛に白して言さく。「世尊、願はくは佛、恕亮したまへ、彼の諸比丘は我を輕蔑せり、云何か報ゐざる」と。即ち偈を說いて言く。

彼の難詛者　之を忍ばんに倍す輕んぜられん　忍を生じて謙下せんと欲せど　彼が怒は

＊ 梵筴斷簡、一六一葉。本篇は五分律卷四三、巴利律大品憍賞彌品等に出づる傳說を依用したるものなるも、著者の粉飾する所多きため直ちに原素材を想定し難し。

【一】 相輪の手。佛の手指極めて纖長にして美はしく、人仰望して瞻視するを以て相輪の手といふ。

【二】 不應作。出家としてふさはしからぬ行。

【三】 不適。意にかなはぬこと。

【四】 壞色。美に對する執着を避くる爲に、青、黃、赤、白、黑の五正色を避けて他の雜色を用ふ、之を壞色といふ。

羅を分別すべからず」と。王復た偈を說いて言く。

「但だ當に德を供養すべし　應に生處を觀ずべからず　婆羅門は喩を說いて　「淤泥より蓮華生ず」と』　天と阿修羅と　敬戴して頂上に著く　婆羅門に過あらんに　智者皆棄捨せん　彼れ若し惡を造作せんに　無過と說くべけんや』　然れども實に是れ過罪なり　旃陀に德あれば　豈に取らざるべけんや　實に復た功德あり　此の如き旃陀羅我應に供養を生ずべし』　是の如き旃陀羅　山林に苦行を修む　此を名けて仙聖と爲す　是れ旃陀羅に非ず』　旃陀羅は鹿を殺し　王者は其の肉を食む　彼の造る所の箭も　亦復た取つて射に用ふ』　是の因緣を以ての故に　我應に隨順して行ずべし　旃陀の有德者　云何か採取せざらん』

此の偈を說き已つて王其の家に入り、長跪合掌して是の思惟を作さく。「先に老母を禮せんか、應に先に佛を禮すべけんか、如來世尊は旃陀羅に此の如き正道を示し、能く一切衆生の安隱の正道を示したまへり、應に先に佛を禮すべし」と。卽ち偈を說いて言く。

「苦行仙　醫王中の最上に南無したてまつる　我今佛を以ての故に　下賤に敬禮す』　須彌山に依つて　烏も鹿も同じく金色なる如く　他より此の事を聞いて　我今現りに證知せり　佛の須彌山に依つて　賤者も皆貴むべし』　一切種智の海　淨意もて彼岸に度す　唯だ佛のみ世間を救ひたまひ　慈等しくして惡意なし』　諸の衆生に於て等しく　能く最も親厚と爲す　*能く一解脫に於て　分別して多種を說きたまふ　外道は狂顚倒して　橫まに種姓を分別す』

爾の時大王、是の偈を說き已り禮を作して而も去りき。

＊これ大衆部系の佛身觀にて本論作者の部派所屬を見るに便。

に我が鉢を得んと欲するや」と。卽ち禪定に入つて觀じて、王の用て大臣を調伏せんと欲するの故に、是を以て鉢を索むるを知り、卽ち偈を說いて言く。

凡夫愚癡人　須彌山を動かさんと欲す　我今當に鉢を與ふべし　以て其の心意を護らん』

當に毀譽あらんを欲せんも　我が心都て異ぞなき　我に於て不信を生ぜば　衆多の人を損滅せん』

是の偈を說き已つて鉢を捨てゝ王に與ふ。王尋で鉢を捉ること、猶ほ象の鼻もて靑蓮華を取る如し。比丘を逐ひて去り、旃陀羅の家に到る。時に彼の比丘、王に命じて舍に入らしむ。王肯て入らず、門前に於て住まる。比丘の老母、先に阿那含果を得、天眼を具足し能く他心を知り又他人の善根の因緣を知る。時に彼の老母、卽ち王に白して言く。「王よ、怯弱する勿れ、來つて我が舍に入れ」と。卽ち偈を說いて言く。

汝應に疑を生ずべからず　此は首陀の會舍なり　旃陀羅の家に非ず　首子は阿羅漢を得』

第三は須陀洹なり　我は是れ一切智なる　佛の優婆夷(Upāsikā)にて　阿那含に住せり』

汝但だ戒行を觀じて　出生の處を問ふ莫れ　但だ我が道德を取りて　家の眷屬を觀る莫れ』

最後に此の家に生れ　功德に殊勝あり　沙石の間に　能く好き眞金を出し

伊蘭の能く火を出し　淤泥に蓮花を生ずるに如似たり』　人を觀て道德を取れ

何ぞ其の族姓を必せん　伊蘭と栴檀と　共に火を然やし皆物を熟す　而も二倶に所成あり　〻功德等しくして異なし』

王、老母の是の偈を說くを聞き已つて歎ずらく。「嗚呼乃ち是れ法の中の大人なり、佛大悲を體として旃陀羅をして不死の處を獲しめ、種姓を擇びたまはず、佛所說の法は旃陀羅の中に師子吼を作せり」と。王又思惟すらく。「若し種族を供養すれば功德を失はん、若し功德を供養すれば應に旃陀

らず』　譬へば伏藏の中に　土を以て其の上を覆へるが如し　誰か下に寶あるを知らんや』　汝住まりて須らく去るべからず　自ら當に往いて觀察すべし　我今より已往躬ら當に僧を供養すべし　愚癡は好藥を服みて　便ち變じて毒と成す』

爾の時、大王躬ら僧中に詣でて衆僧を供養し、手もて自ら斟酌す。爾の時上座、前の如く食を留めて呪願し已り、訖つて卽便ちに持ち去る。王卽ち上座の後を逐ひ、上座に語げて言く。「上座年老へり、鉢盂を以て我に與へて捉らしむべし」と。時に上座、難みて鉢を與へず。强ゐて隨ひて鉢を索む、乃し眞陀羅村(Caṇḍala)に至るも、鉢を與ふるを欲せず。時に彼の上座卽ち偈を說いて言く。

我汝の淨信を知れり　悲愍能く拔濟す　王は濁世に生ると雖も　威儀甚だ嚴整なり』

上世の諸の勝王も　猶ほ故らに及ぶ能はず　我が戒行を知らず　但だ其の出家なるを見るのみ』　未だ曾て往來あらず　亦返報あるなし　而も能く深く愛敬す　恩は慈父にも過ぎたり』　汝の心を見ずと雖も　諸根皆和悅せり　日は空中に出でて　密雲もて覆はれて現れず』　此の翳障ありと雖も　花敷びて日の出づるを知らん　王に深信あるを知るに　奇特未曾有なり』　能く卑下自ら屈して　我が爲に鉢を執らんと欲す　榮貴と福利具はり　然も能く憍逸ならず』　諸の王は自在を得て　憍慢して其の目を盲ゐ用て諸の惡業を造れり　顚墜し多く缺失す』　勇捍にして智力あり　善解し用て財施す

身を觀ずること幻炎の如く　堅實の法を知り取る』　略說して而も之を言はんに一切は皆增長して　汝の如く自ら調順するは　敎化中の最上なり　賢勝の所行道もて

衆と共に隨順して行ぜん』

我今旣に王の供養を受く。王は下心を以て我に從ひ鉢を索む。供養已に足れり、須らく鉢を取るべからず。爾の時彼の王、遂に更に慇懃に、重ねて隨つて鉢を索む。比丘念言すらく。「今王何の故

我昔曾て聞く。阿越提國(Avanti) 其の王を因提拔摩 (Indravarman) と名く。弟あり須利拔摩(Sūrya-varman) と名く。國を諍ふ爲の故に二人共に鬪ふ。須利拔摩羂を擲げて因提拔摩の頭を羂け、羂け已つて急かに挽く。因提拔摩極めて大いに恐怖し是の願を作して言く。「今若し脫するを得んに、當に佛法中に於て般遮于瑟會 (Pañcavārṣika) を作すべし」と。是の願を作すの時、羂索即ち絕つ。佛法僧に於て深く信敬を生じ、即ち大臣の浮者延蜜多 (Bhujayamitra) に勅して般遮于瑟を營む。時に大臣即ち王敎を奉じて般遮于瑟を設け人をして𩜁食せしむ。時に彼の大臣、上座の頭に處して坐し、上座の比丘を見るに、半分の食を留めて呪願し已り、訖つて此の餘食を以て鉢中に盛著し、坐より起ちて去る。是の如きこと再三なり。大臣見已つて不信の心を生じ、是の思惟を作さく。「此の如きの比丘必ずや清淨ならざらん」と。是の念を作し已つて具さに此の事を以て王に上白す。王大臣に問ふ。「卿極めて信心を得るや」。臣王に答へて言く。「信心を得ず、何を以ての故に、上座比丘半分の食を留めて坐より起つて去れり、必ず此の食を以て他の婦女に與ふるならん、我れ疑惑を生ず」。王是の語を聞いて兩手もて耳を覆ひ、大臣に告げて曰く。「斯の語を作す莫れ、汝今妄りに人を稱量する莫れ、汝に智力なし、云何か而も能く前人を分別せんや、佛の言へるが如し、曰く、「*若し妄りに衆生を稱量せんに、必ず自ら傷ふと爲す』と、汝是の顚倒の邪見を作す莫れ」と。即ち偈を說いて言く。

戒定慧もて寂滅し　多聞の覺慧を得　此は是れ善逝の子なり　功德を隱藏す』　猶し灰の火を覆へるが如し　久しく智戒行に處せり　世尊の說きたまふ所　汝と共に住止せず』　云何か其の行を知る　*佛菴羅果を說いて　四種人に喩へたまへり　唯だ善丈夫者のみ　善く能く知つて分別す』　佛世尊の說あると　及び佛と等しき者にして　乃ち人を稱量すべし』　是の故に汝應に　佛弟子を輕蔑して　橫まに分別の想を生ずべか

＊ 佛語。

＊ 四種人喩、第一卷第三經の下に出づ、其註參照。

つて諸趣を取る　今我が心躁擾す　持して住まらしむる能はず』　我昔より來た愚淺にて　五欲の樂に貪著し　內心を觀じて　善處に繫念すること能はず』　何れの山林に依止してか　端坐して而も繫念せん　此の如き上妙の事　今方に願羨を生ず』　彼に伏藏たる禪を得るは　安樂寂靜の故なり　我れ牟尼の說きたまへる　*三偈の句義を念ず』　放逸にして非法を行ひ　非所作を修行し　義利を棄捨して　所愛の處に貪著す』　方に修善の處を欲へ　死の卒かに至るを覺らず　彼の平正の道を離れて　此の邪嶮の徑を逐へり』　軸の折れて頓かに住まる如く　坐守して極めて愁惱す　如實の法を越えて　非理の事を修行す　愚凡夫の死の至るや　軸折れて守つて愁惱す」と』

*何に緣つての故に是を說くや。先に善く觀察せずして而も死想を作し、臨終に驚怖して方に禪觀を習ふ。五欲を破せざるを以ての故に至る所を知る莫く、悔恨驚怖す。卽ち偈を說いて言く。

智者は應に　五欲の想を除破することを繫念すべし　精勤して心を執ずれば　終時に悔恨なし』　心意既に專ら至り　錯亂の念有るなし　智者は勤んでて心を捉へ　臨終に意散ぜず』　專精して境界に於て　心の專ら至るを習はずば　臨終に必ず散亂せん』、

心若し散亂せば　馬を調ふるに磴を用ふるが如かれ　若し其れ鬪戰の時には　廻旋して直行せざれ』

善く觀ぜざれば五根を攝めず。設し臨終の時には心の禁制し難きこと、庫藏の中に鎧鉀の朽故し敵に臨んで將に戰はんとして器鉀の散壞するが如からん。檢心を習はざる命終も亦爾り。

五〇、*阿越提國王因提拔摩、旃陀羅母を禮する緣

復た次に、實の功德あらんに應當に供養すべし。智者は宜しく應に有德を恭敬すべし。

※ 三偈とは、恐らく次下の三偈を指すものならん。

※ 以下、編者の語なり。

※ 梵本斷簡、一五三、一五四葉の內、極く少部のみ。猶此の傳說の序說は史實を含むべし。

の相を有らしむ能はず　況んや汝の一魔身もて　而も能く我を動搖せんや』
*首羅種々に說いて　苦功に波旬を責む　猶し勇健の人の　陣に入つて侮者を擊つが如し』　時に魔卽ち恐怖して　速かに疾く天宮に還る　師子王の住處に　象の到つて尋で突走する　波旬も亦是の如し　見諦所住の處には　諸魔も敢て停らず』

四九、*婆須王の侍人多翅那迦王の爲に殺されんとして定心を求むる緣

復た次に、禪定を得ずんば命終の時に於て決定を得ず。

我昔曾て聞く。婆須王（Vasu?）の時一侍人あり、多翅那迦(Dakṣiṇaka?) と名く。王の親愛する所、讒謗の爲の故に、獄中に繫がる。又讚毀あり、王大いに忿怒して人を遣はして之を殺す。時に諸の眷屬、皆來り圍繞し、而も之に語げて言く。「汝聰明知見にて人の表を過ぐ、汝今云何か其の心擾動せる、今死の時至れり、何事か最も苦なる」と。那迦答へて言く。「死を畏れて恐怖し、心定まる能はず」と。卽ち偈を說いて言く。

我先に父母　諸親及び眷屬に於て　離別して憂惱を生じ　以て苦中の極と爲せり』
今死の時の苦に方つては　彼の苦は皆輕微なり　衆苦を思計する中に　死の苦も亦大ならず』　所生の處を知る莫く　心身燋熱して惱む　今去るや極めて速疾なり　而も所趣の處を知らず』　身旣に欲を離れず　誰か能く驚懼せざらん　精神甚だ荒擾し　盲の長路を涉るが如し』　竟に何の所に向うかを知つては　心意極めて頹捨す　猶し沙聚の散るが如く　遮制すべき處なし』　佛の說きたまふ所の如し　「*心の存するは心使に由る」と　我今倒に錯亂し　善處に生ずるを得難し』　心の自在に由るの故に　意に隨

* 以下、作者の語にて、長行となすを可とす。

* 梵筴斷簡第百四十九葉。

* 法句經の初偈を參照。

爾の時魔王、極めて自ら莊嚴し、首羅の前に在り、首羅に告げて言く。「我先に說かく、五受陰の苦は[一]習によつて而も生ず、八正道を修めて五受陰を滅ぼすと、此は是れ邪說なり」。時に彼の首羅是の說を聞き已つて甚だ疑怪を生ず。「貌相は佛に似たるも說く所は乃ち非なり、我れ是を夢と爲んか、心の顚倒と爲んか、其の所說を聽くに甚だ貪嫉と爲す、是れ何の惡人の化して佛形を作せるや、華聚の中に黑毒蛇のあるが如し、我今審かに知んぬ、此は定んで是れ魔ならん、賣針人の針師の家に至つて針を賣らんと求欲するが如し、汝今[二]波旬(Pāpiyas)我が佛子の宣說する所を聽けよ、偈に言く。

鵝翅もて須彌を扇いで　倘ほ傾動せしむべきも　見諦せる心を　傾動して汝に隨はしめんと欲せんには　終に是の處あるなし』　汝肉眼を惑はすべけんも　法眼を惑はす能はず　佛此の事を知ろしめすの故に　而も是の如き說を作したまへり』　肉眼は甚だ微劣なり　眞僞を別つこと能はず　若し法眼を得んには　即ち牟尼尊を見たてまつらんと』

我れ法眼淨を得たり　滅結者を見て　終に汝の語に隨はず　汝徒らに自ら疲勞し　惑亂を見はす能はず』　吾れ今諦かに知んぬ汝の　實に是れ惡波旬なるを　四眞諦を見るの人　終に移動すべからず』　金を以て錢に塗し　賣金の家を誑かさんと欲するが如し　此の事亦成し難し　外に其の金相を現ずるも　其の內は實に是れ銅なり』　猶ほ虎皮を以て　用て驢上を覆はん如し　形色は肉眼を惑はすも　出づる言もて汝の虛を知る』　火に冷相あり　風相恒常に住まる如く　或は假使日光を闇に　月を熱相に作すべけんも　見諦の人をして　而も動轉の心を有らしむ能はず』　設使世界に滿てらん草木及び瓦石　麋鹿禽獸等の　悉く皆佛像を作さんも』　我が意を動かして　變異

【一】習(samudaya)。集に同じ、原因たるべきものをいふ。

【二】波旬。惡魔の呼稱。

を破つて髭を捉んで佛に施す。佛首羅の至心に歡喜するを知ろしめして應の如くに法を說きたまひ、首羅の二十億の我見の根を破したまひ、須陀洹を得たり。爾の時世尊、卽ち坐より起ちて其の止まりたまふ所に還りたまふ。首羅歡喜して佛を送り、其の家に歸つて心に欣慶を生ず。爾の時、魔王、首羅の歡喜を見て是の念言を作さく。「我今當に首羅の所に往詣して其の善心を破すべし」と。是の念を作し已つて化して佛身の三十二相八十種好と作り、首羅の家に到つて卽ち偈を說いて言く。

『身は淨金山の如く　圓光極めて熾盛なり　自在に化變して現れ　庠步すること象王の如し』
『來つて首羅の門に入ること　日の白雲に入るが如し　覩る者厭足なく　明けきこと百千日の如し』

爾の時、光は首羅の家を照す。首羅は驚き疑ふらく。「是れ何人と爲すや」と。卽ち偈を說いて言く。

融けたる眞金の聚の如し　我が家中に充滿す　猶ほ日の地より出づるが如く　其の光常明に倍せり

是の偈を說き已つて極めて歡喜を生ずること、彼の甘露の其の身に灑ぐが如し。而して是の言を作さく。「我に大福あり、如來今は再び我家に入りたまへり、復た再來したまふと雖も希有とせず、何を以ての故に、如來世尊は、常に慈悲を以て濟度するを業と爲たまへばなり」と。復た偈を說いて言く。

頭は摩尼*(Maṇi)果の如く　膚は淨き眞金の如し　眉間に白毫相あり　其の目は淨うして脩廣なり』
開敷せる青蓮の如く　寂定上の調伏　無畏にして徐庠と步む　容貌殊特に妙なり』
圓光の滿つること一尋　用て自ら莊嚴せるが如し　勇猛にして自ら唱言すらく　我今眞に是れ佛なりと』

＊「尼」三本に依る、麗本は「陀」に作る、何れが是なるを知らず、且らく三本に依る。

若し乞食せば宜しく應に時に及ぶべし」と。迦葉即ち去る。是の如く舍利弗、目連等の諸の大弟子、次第して家に至るに都て承侍せず。爾の時世尊、其の家に往到したまひ、首羅に語げて言はく。「汝今應に五大施を修すべし」と。首羅聞き已つて心大いに愁惱し、是の思惟を作さく。「我尙小施をすら修むる能はず、云何か我に五大施を作せと語げたまふや、如來の法中豈に餘法なからんや、諸の弟子等我に布施を敎へ、世尊今は亦布施を敎へたまふ」と。是の念を作し已りて佛に白して言さく。「世尊、微細なる小施すら尙作す能はず、況して當に五大施すべけんや」と。佛長者に告げたまはく。「不殺を名けて大施と爲し、不盜、不邪婬、不妄語、不飮酒、是の如き等を名けて五大施と爲す」と。是の語を聞き已つて心大いに歡喜し、是の思惟を作さく。「此の如き五事、毫釐を損ぜずして大施の名を得、何ぞ作さずと爲んや」と。是の念を作し已つて世尊の所に於て深く歡喜信敬の心を生じ、而も是の言を作さく。「佛は是れ調御丈夫とは、此れ實にして虛ならず、世尊に非ざるよりんば、誰か當に能く解して是の如きの說を作すべけんや、誰か敬從せざる、敢て違ふ者無からん」と。即ち偈を說いて言く。

色貌に等倫なく　才辯は世の有に非ず　世尊時を知ろしめして說きたまひ　梵音辭美妙なり　所說終に虛しからず　聞く者盡く果を獲

是の偈を說き已つて深く佛の所に於て歡喜心を生じ、即ち庫藏に二張の氎を取り、用て佛に施さんと欲す。又自ら思惟すらく。「猶ほ以て多しと爲す、一張を與へんと欲す」と。又復た更に思へらく。「其の少きを嫌ふの故に還び二張を與へん」と。佛心念を知ろしめして即ち偈を說いて言はく。

施時と鬪諍時と　二俱に同等と說く　二德は都て住まらず　儜劣なる丈夫の所には
施時も鬪諍時なり　所作の緣を等同にす

爾の時首羅、是の偈を聞き已り、「如來世尊は我が念ふ所を知りたまへり」とて歡喜踊躍し、慳悋

數竹林の如し』　多聞の婆羅門　貴族刹利等　是の如きの名德の衆　牟尼の法に入れり』　莊嚴せる諸の聖衆　星の月を圍繞して　羅列して空中に在るが如く　嗚呼、法の熾盛なるかな』　如來の大海に　最上の功德の水　湛然として其の中に溢れ　衆河の歸する所なり』　世間の衆の勝智　佛法に歸せざるはなし　人天の衆增長し　苦は是れ出要の道なり』　如來善く分別して　法を說いて憍慢を滅ぼしたまふ　弟子の衆の一味なること　海の等しく一味なるが如し』

何の因緣を以て而も此の事を說くや。佛法の世に出づるは憍慢を斷ぜんが爲の故なればなり。

四八、*佛慳貪の周羅居士を度したまふ緣

復た次に、見諦を得る者、天魔諸の外道等の欺誑する所と爲らず。是の故に應に勤めて方便して、必ず見諦を求むべし。

我昔曾て聞く。首羅(Cūlaka ?)居士甚だ大いに慳恪なり。舍利弗等、其の家に往返して而も偈を說いて言く。

『惡道の深きこと海の如く　亂心は濁水の如し　慳しみの流に漂はさるゝ爲に　言へば則ち物なしと稱ふ』　嫉妬の大河には　邪見の魚鼈衆あり　是の如きの處に充滿し　漂流して止息せず』　今當に慳の根を拔いて　施の果報を成就すべし　大悲の世尊　無畏の釋子は　諸の苦危に沒するを見る　我等應に救濟すべし』

爾の時尊者摩訶迦葉、早きに起きて衣を著け鉢を持して首羅長者の家に向ひ、而して布施を讚じぬ。時に彼の長者、喜ばざるを以ての故に稍の心を刺すが如し。迦葉に語げて言く。「汝、請を受けんと爲るや、乞食を欲すと爲るや」と。迦葉答へて言く。「我れ常に乞食す」。長者語げて言く。「汝

※梵缺。この物語は增一阿含第二十八品第一經に出づるも、首羅居士を跋提長者とし、聖弟子中に舍利弗を加へず、經尊又出でず、更に魔王出現の一段を缺く等の異あり、從つて本經作者の傳統が今の增阿系(傳大衆部)とも異るを知る。猶この傳說、巴利傳法句經註(卷一)及び漢譯出曜經(卷十二)の中にも出づれば、元來阿含外の傳と見るべきか。

離の所も亦敬禮するや」と。佛釋種に告げたまはく。「今は我が種なり、此の法は憍慢を斷てる處」と。時に諸釋種、佛に白して言さく。「此れ首陀羅種なり」と。佛之に告げて曰はく。「一切は無常なり、種姓も不定なり、無常は一味、種姓も亦爾り、何の差別かあらん」と。時に諸釋種、復た佛に白して言さく。「世尊、此は剃髮の種、我等は日姓中の出なり」。佛釋等に告げたまはく。「一切世間は夢の如く幻の如し、種姓の中に何の差別かあらん」。「諸の釋種等、佛に白して言さく。「世尊、此は是れ僕使にして我等は是れ主なり」。佛釋に答へて言はく。「一切世間は皆恩愛の爲に而も奴僕と作り、未だ生死を脫れず、貴も賤も異るなし、汝の憍慢を捨てよ」。時に諸釋等、端嚴殊特なること華の敷榮する如く、合掌して佛に向ひ、疑を懷いて猶豫しつ而も是の言を作さく。「必ず我等をして優波離の足を禮せしめたまふや」。佛釋種に告げたまはく。「獨り我のみに非ず、一切諸佛の出家の法は悉く皆是の如し」。時に諸釋等、佛の重ねて出家の法を說きたまふを聞き已つて、儼然として而も住まること樹の風無きが如し。心意愁惱して皆聲を同じうして言さく。「我等云何か佛の教勅に違はん、宜しく佛の教に順ふべし」と。先舊の智人は是の如き語を作さく。「如來の先づ優波離を度したまふ所以は、諸の釋種等の憍慢心を摧破せんと欲したまふが爲の故なり」と。諸釋是に於て憍慢を棄捨して出家の法に順ふ。亦未來貴族の出家の順ふ所の法の爲の故に、拔陀釋(Bhadrika)(Śākya-rāja)等、久しく憍慢を習ふ、今其の根を拔き、優波離の爲に足に接して禮を作す。之を禮するの時に當つて大地城郭山林河海、悉く皆震動す。諸天唱言すらく。「釋種今日、憍慢の山崩けたり」と。卽ち偈を說いて言く。

嗚呼、憍慢と　種族の色と力と財とを捨てゝ　佛の教に隨順す　樹の風に隨つて傾くが如し』　日種(Sūrya-vaṃśa)刹利の姓　優波離を頂禮せり　我慢の心を除捨して　諸根皆寂定たり』　諸の大勝人等　眞實にして諂僞なし　福利と衆德備はり　其の

の義を得ざる』

佛法は普く平等にして　譬へば石蜜を食するが如し　貴賤等しく陰を除く　刹利婆羅門も三種の藥の　風冷の熱を對治するが如し　諸姓等しくして異なし』　譬へば三有を盡すを得るの時　藥は種姓を擇ばず　貴賤皆能く治す』　法藥も亦是の如し　能く貪恚癡を治するに　四姓悉く皆能く除くこと　高下に差別なし』

又火の物を燒くが如し　好惡の薪を擇ばず　毒螫も亦火の如し　貴と賤とを擇ばず』

猶し水に洗浴するが如し　四姓皆垢を除く　盡苦の邊際　諸種も普く離るゝを得』

爾の時世尊、猶し晴天に諸の雲翳の無きが如く、深遠の聲を出すこと猶し雷音の如く、大龍王の如く、亦牛王の如く、迦陵頻伽(Kalaviṅka)の聲の如く、亦蜂王の如く、又人王の如く、天の伎樂の如き、梵音聲を出して優波離に告げたまはく。「出家を樂ふや不や」と。優波離是の聲を聞き已つて心に歡喜を生じ、又手して佛に白さく。「願樂す、出家せんことを」と。佛之に告げて曰はく。「優波離よ、善く來れり、比丘よ、汝今此に於て善く梵行を修せよ」と。是の語を聞き已つて鬚髮自らに落ち袈裟を身に着く。威儀齊整たり、諸根寂定たり、舊りの比丘の如し。五百の釋種皆白四羯磨して[九]具足戒を受く[一〇]。佛言はく。「我今當に方便を以て諸釋種の憍慢の心を除くべし」と。爾の時、世尊諸釋種に語げたまはく。「汝等今は應當に敬禮すべし、諸の舊比丘、上座、憍陳如(Ājñāta-kauṇḍinya)阿毘馬師比丘(Aśvajit)等次第して禮を爲せ」と。優波離は最も下坐に在り、釋賢王(Bhadrika Śākya-rāja) は諸釋の中に於て最も導首と爲す。爾の時諸釋、佛の敎を敬順し、次第して足に禮して優波離に至り、其の足の異るを見て尋で卽ち仰いで優波離の面を觀見す。時に諸釋等甚だ用て驚怪す。猶し山頂の暴水流注して崖に觸れて廻波するが如し。而して是の言を作さく。「我等は日種、刹利の姓なり、世の尊重する所、云何か今は已れの僕使卑下の姓剃髮の種に於て、而も禮敬を爲ん、我等今當に佛世尊に向つて具さに上の事を說くべし」と。佛に白さく。「世尊、優波

【八】石蜜。氷砂糖。

【九】白四羯磨。佛門に歸する際に受くる受戒作法。こゝに詳說しがたければ、四分律受戒犍度等の記事を調査さるべし。

【一〇】具足戒。比丘の受くる二百五十戒等をいふ。これ、この內に一切の戒法を具足すればなり。

刹利、二姓倶に貴し、然るに我は首陀なり、其の姓卑下、復た賤役を爲す、彼の勝中に於て出家を求索すること、得べしと爲すや不や、我れ今に於ては何の勢力かあらん、云何か、此の中にして而も出家を得んか」と。即ち偈を説いて言く。

刹利の姓は純淨　婆羅門は多學　生處は摩尼(Maṇi)の如し　皆共に此に聚集せり』、
我が身は首陀種　云何か參豫を得ん　破碎せる鐵を　眞金に間錯するに如似たり』
婆伽婆佛陀は　我れ一切種智を具したまふと聞く　今我當に彼の　悲愍一切者に往くべし』　應に淨むべきと應に淨むべからざると　應に出づべきと應に出づべからざると
一切の外道衆は　解脱の處を知らず　唯だ滅結者ありて　能く解脱を知るのみ』

時に優波離、是の偈を説き已りて世尊の所に到り、胡跪合掌して右膝を地に著け、而も偈を説いて言さく。

四種姓の中より　倶に出家するを得るや不や　涅槃解脱の樂は　我等も得べきや』
善き哉や救世者　大悲普く平等なる　哀愍して願はくは我に聽したまへ　出家の次に及ぶを得んことを』

爾の時世尊、優波離の心意の調順し善根の淳熟して應可に化度すべきを知ろしめして、即ち相好莊嚴せる右手を擧げて以て其の頂を摩で、而して之に告げて言はく。「汝の出家するを聽さん、外道の祕法は弟子に示さず、如來は爾らず、大悲平等にして而も偏黨なく等同に説法し、其の勝道を示して而して之を濟拔す、猶し市に物を賣るに貴賤を選ばざるがごとし、佛法も亦爾なり、貧富及以び種姓を擇ばず」と。即ち偈を説いて言はく。

誰か渴して清流を飮み　而も虚乏を充さざらん　誰か熾然する燈を秉つて　而も黑闇を滅せざる』　一切種智の法は　普く一切の有と共なり　誰か修行する者あつて　勝妙

釋種の家をして一人を遣たしめ、其れをして出家せしめよ」と。即ち王勅を奉じて家ごとに一人を遣ち、度して出家せしむ。時に優波離(Upāli)諸釋等の爲に鬚髮を剃るの時、涕泣して樂します。釋等語げて言く。「何故に涕泣するや」と。優波離言く。「今汝釋子盡く皆出家す、我何に由つてか活きん」と。時に諸釋等、優波離の語を聞き已つて出家す。諸釋盡く著くる所の衣服瓔珞嚴身の具を以て一寶聚を成じ、盡く優波離に與へ、優波離に語げて言く。「此の雜物を以て汝終身の自供に用給するに足らん」と。優波離是の語を聞き已つて卽ち厭離を生じ、而も是の言を作さく。「汝等今皆珍寶嚴身の具を厭患して而も皆散棄せり、我今何爲れぞ而も之を收取せんや」と。卽ち偈を說いて言く。

是の諸の釋種等　諸の珍寶を棄捨すること　惡しき糞掃　幷及に諸の草葉を捐つるが如し』　彼は愛著を捨つ　云何か方に貪取せん　我設ひ寶聚を取らんに　內心に必ず貪著せん』　計して我が所有と爲す　是を則ち大患と爲す　諸釋は患ふ所を捨てたり　我今設し取らんには　是れ大過患と爲らん』　譬へば人の吐食の如し　狗來つて之を噉食す　我れ他の棄つる所を收めんに　狗と何の異かあらん』　我今寶聚を畏る　四種の毒を離るゝが如し　善根內に觸發し　寶聚に貪戀せず』　我今必ず棄捨し　世尊の所に向つて　出家の法を求索せんと欲す』

時に優波離、此の偈を說き已つて復た偈を說いて言く。

他の勝法を得るを見て　始めて欣倚の心を生ず　願はくは我が己身をして　彼に同じく勝事を獲しめん　我今自ら出家せんと欲す　當に勤めて方便を作すべし

時に優婆離、復た念言を作さく。「我今決定して必ず當に出家すべし、但だ當に勤求すべし、千の婆羅門は先に佛の所に於て已に出家を得、釋種剎利の姓、其の數五百も亦出家を得たり、婆羅門

爾の時大王、旃陀羅の身に近づき、法を敬仰するの故に、屍を遶ること三匝、長跪合掌して而も偈を說いて言く。

南無歸命法　善能觀察者　短促の命を捨てゝ　而も法を捨てず』　假設火林に入らんも　見諦して禁戒を毀たんに　終に是の處あるなし　此れ卽ち是の明證なり』　此の人佛語を持して　終に二志あるなし　泥血中に臥せり　佛戒を護るを以ての故に』　此の屍を火を以て焚せん　卽ち變じて灰土と爲らん　持戒善法の名は　世界の盡くるに同じうせん』

*何の因緣を以て而も此の事を說くや。證道を示さんと欲するに變異あるなし。佛の見諦を說きたまふや終に毀破なし。四大破すべきも、四不壞淨は終に壞すべからず。

四七、*優波離出家緣

復た次に心に憍慢あらんに、惡として造らざるなし。慢にして自ら高うすと雖も名は自ら卑下なり。是の故に應當に憍慢を斷ずべし。

我昔曾て聞く。佛道を成じたまひて久しからず、優樓頻螺迦葉の兄弟眷屬千人を度したまふや、煩惱旣に斷じ、鬚髮自ら落して世尊に隨從し、迦毘羅衞(Kapilavastu)國に往詣せり。*佛本行中に廣く說くが如し。閱頭檀王(Suddhodana)化を受けて調順し、諸の釋種等、其の族姓を恃みて憍慢を生ずらく。「佛婆伽婆は、一身もて觀る者、厭足あるなし。身體豐滿にして肥ならず瘦ならず、婆羅門等の苦行し來る久しきや、身形羸弊し、內に道を懷くと雖も外貌極めて惡し、佛行を隨逐すると甚だ相稱はず」と。爾の時父王、是の念を作して言く。「若し釋種をして出家して以て佛に隨從したらんには相稱副するを得しめん」と。是の念を作し已つて鼓を擊つて唱言すらく。「仰せつく、

---

* 以下本論編者の語なり。

* 梵筴斷簡、第百四十六、七葉。本章は優波離の出家事情に關するもので、直接には律傳等を素材にすべきも、出家事情等大いに一般と異るものあり。恐らく本典作者の創案になるものならん。

* 佛本行。前に出でたり、佛傳書をいふ。

況んや△應の諸親屬おや、戒を護ること財を護るよりも劇し、身命及以び眷屬を顧みず唯だ禁戒を持てり」と。卽ち偈を說いて言く。

世の人種族を觀て　內なる禁戒を觀ず　護戒は種族の爲にす　設ひ護戒せざらんには
種族も當に滅壞すべし』　我は是れ旃陀羅なり　彼は是れ淨戒者なり　彼れ旃陀羅に
生るゝも　作業は實に清淨なり　我は王種に生ると雖も　實に是れ旃陀羅なり』　我
に悲愍の心なく　極惡にして賢人を殺せり　我は實に旃陀羅なり』

爾の時大王諸の眷屬を率ゐて塚間に詣で、其の屍を供養す。王復た偈を說いて言く。

此に善功德を覆へり　灰の而も火を覆へるが如し　口に自ら說かずと雖も　作業は已に
顯現せり』　帝釋も常に供養せん　是の如きの堅行者の　己が身命を惜まず　而も戒
行を護れるを』

爾の時彼の王、諸の群臣數千億の婆羅門等を將ゐて、步して塚間に詣でゝ而も是の言を作さく。「是の如きの大士、旃陀羅と名くと雖も實には是れ大仙人なり」と。死屍を積聚して其の爲に淚を墮せり。王復た偈を說いて言く。

勇健なる持戒者　刀を以て身を分解し　尸骸は委ねて地に在り　血泥を以て身に塗れ
り』　禁戒を持するを以ての故に　今日此の身を捨つ　堅心もて惡を犯さず　戒を守
つて而も死に至れり　佛法の味を得る者　智者皆應に爾るべし』

王復た偈を說いて言く。

愚癡の盲ゆる所　貪欲の垢汚　我所の諸根に著して　掉動して而も定まらず』　惡業
を計せず　但だ現在の樂を取す　結使の垢の塗汚は　智者常に觀察せり』　身財の危
脆の想は　亦河岸の樹の如し　終に惡業を造らず　智水もて心垢を洗ふ』

△「應」三本に「戀」に作る。

禁戒を受持して　乃し蚊蟻子に至るまでも　猶ほ害心を起さず　何に況んや人に於ておや

我が三毒の垢を除いて　寂滅の因を獲得せり　無上の大悲なる　十力世尊の所に

時に王語げて言く。「汝若し殺さざれば自命全からず」と。此の優婆塞、見諦せる氣勢もて、便ち王所に於て杭對すること難からず、而も是の言を作さく。「此の身は王に隨へり、王は我身に於て極めて自在を得たり、如れど我が意は、帝釋の教と雖も我れ猶ほ隨はず」と。王、此の語を聞いて極めて大いに瞋忿し、勅令して殺さしむ。彼の旃陀羅の父兄弟七人も盡く殺すを肯ぜず。王遂に之を殺して二人の在まるあり、第六者に至りて勅して之を殺さしむるも亦殺すを肯ぜず。王又之を殺す。第七者に至りて又殺すを肯ぜず。王復た之を殺す。老母王に啓すらく。「第七の小者は、我が爲に寛放したまへ」と。王言く。「今此の人は是れ汝の何物ぞ」と。老母答へて言く。「皆是れ我が兒なり」。王復た問ひて言く。「前の六者は汝の子に非るや」と。答へて言く。「亦是なり」。王言く。「汝何を以てか獨り第七子の爲にするや」と。爾の時老母、卽ち偈を說いて言く。

大王應當に知るべし　六子は皆見諦せり　悉く是れ佛の眞子なり　決定して惡を作さず

是の故に我畏れず』　今此の第七子は　猶ほ是れ凡夫人なり　*旣に身命逼れる爲に

諸の惡業を造作せり』　是の故に我れ今は　王に求めて其の命を請ふ　人王は自在

を得たまへり　唯や願はくは此の子を活かしたまへ』　臨終の時恐怖して　或は能く諸

惡を造らん　凡夫は死に臨む時　但だ其の現身を覩て　後事を見ず　能く後世の報を

覩るは　凡夫の境界に非ず』

爾の時大王、而も是の言を作さく。「我れ外道に於て未だ是の語を聞かず、今因果を說いて了すること明燈の如し、旃陀羅の口もて是の如き說を作せり、*王、決定意を生まんに名けて賢聖村と爲す、是れ旃陀羅に非ず、旃陀羅と名くと雖も實には苦行を修する者なり、自命すら尙ほ惜まず、

* 三本に依る、麗本「脫」に作る。

* 「王……賢聖村」の句義明かならず、恐らく、王の前に「令」の一字を脫するならん。

誰か敬信せざる者ぞや』　若し設ひ少智あらんに　云何か信を生ぜざる　釋迦牟尼尊は衆生の慈父なり』　言說甚だ美妙に　柔和にして愛樂すべし　濟拔の事已に畢つて彼岸に達するを得』　意根の法微細に　作意當に解了すべし　乃し邊地の人に至るまでも　亦能く開悟を得』

四六、*旃陀羅の六子佛戒を守りて遂に刑殺さるる緣

復た次に、若し[五]四不壞淨を得たらんに、寧ろ身命を捨つるも終に前物を毀害せず。是の故に應に四不壞淨を勤修すべし。

我昔曾て聞く。一罪人あり、應に刑法に就くべし。時に[六]旃陀羅(Caṇḍāla)次で當に人を刑すべし。然るに彼の旃陀羅は是れ[七]有學の優婆塞にして見諦の道を得たり、敢て人を殺さず。典刑戮者極めて瞋忿を生じて而して之に語げて言く。「汝今王の憲法に違はんと欲するや」と。優婆塞、典刑戮者に語げて言く。「汝甚だ無智なり、王今何ぞ必ずしも我が殺人を苦とせん、復た色身は王に屬して旃陀羅と作ると雖も、聖種中に生れて名けて法身と曰ふ、王に屬せず、制する所に非ざる也」と。即ち偈を說いて言く。

釋迦牟尼尊　一切種智を具したまひ　因の時に能く教化して　一切の過を滅除したまふ』　閻羅王の法は　果の時に始めて教化し　苦に臨んで爲に苦を說く　*易り壞し亦可ぞ違はん

時に典刑戮者、此の人の王禁に違犯するを以て卽ち將ゐて王に詣つて言く。「此の旃陀羅、王教を用ひず」と。王之に語げて言く。「汝何の故に王教を用ひざる」と。白して言く。「大王よ、今應に信を生じて歡喜心を生ずべし」と。而も偈を說いて言く。

* 梵筴斷簡、第百四十一葉。

【五】四不壞淨。三寶並に佛制の戒に對して不壞の淨信を懷くこと。

【六】旃陀羅。主として屠殺を業とする賤民なり。

【七】有學(Śaikṣa)。戒定慧の三學に於て未だ進趣の境にある者の義で、四果中の阿羅漢を無學とし、他の三果を有學とす。

* 此の一句、麗本「易壞亦可違」とし、三本は「易懷亦可違」とす、共に訓義了せず、今本文の如く解せり。

佛法極めて眞實にして　能く速かに翳障を除く　此の淚も亦能く除くこと　日の氷雪を消するが如し

是に諸の大衆是の事を見已つて、合掌恭敬して倍す信心を生じ、未曾有なるを得て身毛驚竪し、卽ち偈を說いて言く。

汝の所作の希有なること　猶し神通を現ずるが如し　醫藥も療せざる所　淚洗して能く患を除けり

時に諸の比丘、法を聞いて悽感し、悲泣雨淚す。尊者瞿沙、諸の衆會に告ぐらく。「是の事を爲すと雖も、此は難しと爲さず、如來往昔、億千劫の中に、苦行を修行したまひ、是の功德を以て、此の十二因緣の法藥を集めて、能く聞く者をして悲感して淚を垂れしめたまへり、婆須（Vāsuki）の龍の大惡毒を吐くも、夜叉惡鬼の舍宅に遍滿するも、*吉毘埵陀羅（?）の根本厭道も、此の淚悉く能く消滅して遺すなし。是を乃ち難しと爲す。況や斯の翳障をや、猶し蚊翅の如く而も之を除滅す、何ぞ難しと爲るに足らんや。§設ひ大雲霧の幽闇晦冥に惡風暴雨ならんも、此の淚亦能く消滅せん、*是れ時には、狂醉せる象軍及以び步兵の鎧仗もて自ら嚴しくせるも、淚を以て之に灑がんに、軍陣退散せん、一切種智の修集したまふ所の法、其れ誰か聞く者にして淚を雨らさざらん、然るに此の淚を以て能く災患を禳はんに、唯だ宿業を除かんのみ」と。彼の時、王子旣に眼を得已つて歡喜踊躍し、又說法を聞いて生死を厭患し、須陀洹果を得たり。希有の想を生じて卽ち偈を說いて言く。

誰か說法を聞くを得て　而も歡喜を生ぜざる　我れ已に深く敬信し　至心に說法を聽く』　耳に希有の事を聞き　目患亦消除せり　慧眼と肉眼と　俱に悉く清淨を得たり』　治眼中の最上なるは　大仙に過ぎたるはなし　我れ今稽首して　衆醫中の最勝を禮したてまつる』　一智の寶藥を以て　我が二眼を開くに淨し　世間の心ある人

【四】 法華經序品に八大龍王の一とせる和修吉龍王に同じ、九頭ありといはる。

＊ 不明。或は吉祥明呪（Śrī-vdyadkara）か。

§ 般若經にその功德を廣讃すると比較せよ。

＊ 「是時」の二字原文に錯傳あるべきか。

卷の第八

四五、[一]瞿沙尊者漢地の王子の疾眼を治する緣

復た次に、身心の病を治するは唯だ佛語あるのみ。是の故に應に勤めて說法を聽くべし。

我昔曾て聞く。[二]漢地(Cina)の王子、眼中に瞙を生じ、遍く其の目を覆ひ、遂に闇冥なるに至り、覩見する所なし。種々療治するも瘳除する能はず。時に竺叉尸羅(Takṣailā)國に諸の商估あり、漢地に來詣す。時に漢國王、估客に問ひて言く。「我が子目を患ふ、爾等遠來す、頗し能く治する不や」と。估客答へて言く。「外國に一比丘あり、名を[三]瞿沙(Ghoṣa)と曰ふ。唯だ彼のみ能く治せん」と。時に王、聞き已つて卽ち大資嚴かに、便ちに其の子を送つて竺叉尸羅國に向はしむ。彼の國に到り已つて尊者瞿沙の所に至り、而も是の言を作さく。「吾遠方より故らに來つて目を療す、唯願はくは哀愍して我が爲に眼を治したまへ」と。爾の時尊者、爲に眼を治することを許し、多く銅盞を作りて大衆に賦與し、諸人に語げて言く。「我が說法を聞いて涙を流す者有らば此の椀中に置け」と。因つて卽ち十二緣經を說く。衆會聞き已つて啼泣流涙し、椀を以て承け取つて衆涙を聚集し、王子の所に向く。尊者瞿沙卽ち衆涙を取つて右掌中に置き、而も偈を說いて言く。

　我今已に　甚深なる十二緣を宣說しぬ　能く無明の闇を除き　聞く者皆涙を流せり』
　此の語若し實ならば　當に衆人の涙を集めて　人天夜叉(Yakṣa)の中の　諸の水も及ばざる所　以て王子の眼を洗はんに　障を離れて明淨を得べけん　尋で卽ち涙を以て洗ふに　膚翳消除するを得たり』

爾の時、尊者瞿沙、涙を以て王子の眼を洗ひ、明淨を得已つて、大衆の信心を增長せんと欲する爲に、而も偈を說いて言く。

[一] 梵本斷簡、第百四十一葉。

[二] 本經の成立當時、既に支印の交通ありしを知られる。而して梵本には「漢地王子」の原語が Cinarājakumārasya と判讀し得ること注意すべし。

[三] 瞿沙。譯して妙音といふ。甘露味阿毘曇の著者、婆沙論中の高僧等あるも、今は西域記に引く阿育王の盲王子を救ひたりといふ名醫ならんか、然れば年代は西紀前三世紀のことゝなり、支那にては秦始皇の代となる。さりながら兩者共に傳說に屬すれば直ちに史的實證を求むるは不可なり。恐らくは瞿沙の傳說を基として創作されたるものならん。

時に化比丘、本身に還復し、深く歡喜を生ずらく。「嗚呼、佛法や極めて精妙なり、能く是の如く決定依つてして我を分別するを聞けり」と。卽ち偈を說いて言く。

[三二]首羅(Cūlaka(?))居士等　已に[三三]法眼淨を得たり　動搖するを得べからず　此の事奇とすべからず』　己れの智力を以ての故に　汝今見諦せず　心堅く動かすべからず　此の事實に希有なり』　聖智力あるなくて　而も我を動かす能はず　是の事を希有と爲す　佛の涅槃に歸依しまつらん』　彼の言眞實の故に　智者は動搖せず　佛一切種智は　說いて羅漢を觀察したまへり　能く壞する者あるなく　猶し大海の潮の如し　終に其の限りを過ぎらず』　假令火を冷やか作らしむるも　風性確然として住まるも　如來所說の語は　都て變異あるなし』　是を以ての故に佛の語は　諸論に於て最上に日の光明の　一切の闇を除滅するに如似たり』　應供は極眞實に　機辯の顯はるゝこと分明　善察すれば分別し　觀察する能はざれば　此の如きの理を見ず』　實語と妄語と　此の二相違うこと遠し　佛語及び外論も　其の事亦是の如し』

【三二】次卷第四十八章に首羅居士の因緣あり。
【三三】法眼淨。一切萬法の實相を信ずるに至りたるをいふ。

四四、[二七]魔化して比丘となり說法し法師に看破せらるる緣

復た次に見諦に入らずと雖も、修學多聞の力は、諸魔も動かす能はず、應に學問を勤修すべし。

我昔曾て聞く。一魔あり、化して比丘と作り僧坊に來至す。一法師あり。衆中に在つて說法す。化比丘言く。「我れ羅漢道を得たり、若し所疑あらば今悉く問ふ可し」と。時に衆僧、法師に語げて言く。「其の所說を疏せ」と。時に彼法師、化比丘に問はく。「云何か斷結、云何か入定なるや」と。化比丘顚倒して說法す。時に法師、衆僧に語げて言く。「此れ羅漢に非ず、其の語疏すべからず」と。時に化比丘、身を虛空に踊らして十八變を作す。時に會の大衆法師を譏呵すらく。「此の如きの人、師今云何か羅漢に非ずと說くや」と。爾の時法師、譏呵せらると雖も多聞力を以ての故に猶ほ說いて非と言ひ、「若し是をし羅漢ならんに、云何か所說顚倒せん、然るに復た能く飛踊せり、我今に於ては知んぬ、復た云何せんかを」と。卽ち偈を說いて言く。

我れ功德所に於て　都て嫉怨の心なし　[二八]阿毘曇(Abhidharma)の石を以て　磨試して是非を知るのみ
[二九]金塗を被れるは　磨する時色の顯れざるに如似たり　金若し眞ならざれば　石を以て磨して則ち知らん
佛は*智慧の印を以てしたまへるに　印と相應せず
[三〇]甘露の城は極深にして　印なくしては入るを得ず　欲もて甘露の城に入らんとす
我れ彼を笑はんと欲す

諸人問ひて言く。「若し羅漢に非ずんば、云何か能く飛踊するや」と。時に法師、復た偈を說いて言く。

或は是れ[三一]因陀羅(Indra)か　或は是れ幻師の所作ならん　佛法中の棘刺なり　必ず是れ魔の所爲ならん

【二七】梵本缺失。

【二八】阿毘曇。教法を研究する學問。

【二九】金塗。金をメッキせるをいふ。

＊ 三本に依る、麗本「智印」とす。

【三〇】甘露の城。涅槃のこと。

【三一】因陀羅。帝釋天のこと。帝釋はよく求道者を試練すといはるゝを以てこのことをいふ。

成就して道果を得んに　等同にして差別なし　一切の種姓同じく　證果に都て異りなし』

爾の時世尊、波斯匿王の淳信心を增長せんと欲する爲の故に、四種姓の可淨を說きたまふ。若し婚娶の時四種姓を取るに、此の四種姓は皆淨を得べし。佛大王に告げたまはく。「若し婦を取り女を嫁せんには應に種姓を擇ぶべし、此佛法の中には唯だ宿世の善惡の因緣を觀じて種姓を擇ばず、唯だ信施を觀じて珍寶を觀ぜず、戒の淸淨を索めて家門の淸淨を索めず、禪定の自在を索めて種姓の端嚴を索めず、其の智慧を觀じて所生を觀ぜず」と。卽ち偈を說いて曰はく。

山石を鍊るの中　而も眞金を取るが如し　譬へば伊蘭木の　相搓りて便ち火の出づるが如く　又淤泥の中より　靑蓮華を出生するが如し　所生の處を觀ぜず　唯だ德行を觀ず

若し上族に生れて德行ある者、應當に供養すべし。若し下賤種に生れて德行ある者ある者も亦、應に供養すべし。諸の有智者は應當に供養すべし。有德の人は種姓に別あるも德行に異りなし。猶し伊蘭及び栴檀木の、俱に能く火熱と光明とを出すに別異あることなきが如し。佛の語は眞實にして過失あるなし、深く人心に入る」と。王をして解を得しむ。波斯匿王、佛の足を頂禮し、五體を地に投げて言さく。「南無歸命調御丈夫一切種智、一切義に於て障礙あるなし、十力勇猛[二四]四無所畏、婆伽婆三藐三佛陀、一切衆生に於て[二五]不請の親友と作りたまひ、四種姓に於て都て偏黨なし」と。略說すること是の如し。卽ち偈を說いて言さく。

一切種智の海に　淨意もて彼岸に度りたまへり　世界に佛獨り悲れみたまひ　心意に穢惡なし』　一切衆生の爲に　最親友と作り　[二六]獨一にして解脫を說き　然も種々の道を示したまふ』　智に依つて方便多し　外道は狂顚倒して　飢渴の苦行もて　專ら種姓に迷著せり』

波斯匿王、佛及び尼提の足を禮し已つて、舍衞城に還りぬ。

【二四】四無所畏。佛四所に於て恐れなし。詳しくは俱舍論卷二七等を見よ。
【二五】不請の親友。佛の大慈悲なる、求むと求めざるとにかゝはらず救ひたまふ。
【二六】獨一。人天共に說かざる法を說かる。

歸命來して　彼岸に度れる者を敬禮せり』

時に波斯匿王、尼提を識らず、而も之に語げて曰く。「汝今我が爲に往いて世尊に白せ、波斯匿王今門外に在り、來つて佛に見えんと欲す」と。時に彼の尼提、聞き已つて卽ち石より沒すること水に入るが如し、身を佛前に*涌かせて而も佛に白して言さく。「波斯匿王、今門外に在り、世尊に見えんと欲す」と。世尊語げて言はく。「還つて本道より往く可し、前に喚ばへ」と。尼提命を奉じて還つて石より出で、波斯匿王を喚ぶ。時に波斯匿王、頂禮問訊して世尊に白して言さく。「向の彼の比丘は、是れ何の大德なりや、諸天に供養せられ、左右に奉侍し、又能く石に於て出入すること無礙なるや」と。偈を說いて問ひて言く。

佛智は淨うして無礙なり　事として通達せざるなし　我所問を欲すれば　佛已に先に之を知りたまふ』

*先の事且小く住め　我れ所問あらんと欲す　向に見し一比丘　石上にして而も出入すること　鷗の水中に在りて　浮沈するに自在を得たるが如し』

爾の時世尊、波斯匿王に告げて言はく。「向なる比丘、若し知らんと欲せば、是れ王の疑ふ所の鄙賤の尼提、卽ち其の人なり」と。王是を聞き已つて悶絕して地に躃れ、卽ち自ら悔責して而も是の言を作さく。「我自ら燒せりとたす、云何か乃ち是の如きの大德に於て譏嫌を生ぜる」と。是の事を見已つて佛法所に於て未曾有を得、倍す信心を生ぜり。卽ち佛の足を禮して而も偈を說いて言く。

譬へば須彌山の如し　衆寶もて合成せらる　飛鳥及び走獸も　山に至れば皆金色なり』

昔より來た曾て聞くと雖も　今始めて方に證知せり　佛は須彌山の如く　無量の功德の聚なり　來つて佛に歸依する者あれば　變じて貴き種族となる』

佛は種姓と　富貴及び名聞を觀たまはず　猶し醫の病を占ふ如し　亦種姓を觀ぜず　但だ諸の良藥を投けて　其の病をして愈ゆるを得しむるのみ』

貴賤は資氣同じ　皆不淨を出だす

＊　三本に依る、麗本「踊」とす。

＊　原文「先事且小住」訓方明かならず、三本は「且」を「具」とするも、今はかりに本文の如く訓じたり。

滿願子（Pūrṇa-maitrāyaṇī-putra）等の大論する牛王の如き辯才無盡の者の爲に說かず、亦淺智なる[二一]達摩地那（Dharma-dinnā）比丘尼の爲に說いて、深智を得て能く大丈夫の所有の問難を解せしめたり。我齊しく富貴なる大王の夫人彌拔提（? Kṣemavatī）等の爲に說いて道果を得しめず、亦下賤なる僮使の[二二]鳩熟多羅（Kubjottarā）等の爲に說いて道跡を得しめたり。我齊しく貞婦毘舍佉（Viśākhā）の爲に說かず、亦婬女蓮華（Utpala-varṇikā）の爲に說けり。我齊しく大德辯才ある女人瞿曇彌（Gotamī [Mahā-prajapatī]）の爲に說かず、亦七才の沙彌尼（Śrāmaṇerikā）[二三]至羅（Cirā）といえる能く外道を摧伏する者の爲に說けり。爾の時世尊、卽ち偈を說いて言く。

我が佛法の中に依りて　速疾に應に出家すべし　智に因つて甘露を得　種族姓に由らず
四大及以空　貴賤も等同に有てり　無智なれば則ち得ず　必ずしも種姓に在らず』

爾の時爾提、卽ち佛の敎を奉じて尋で便ち出家し、阿羅漢を得たり。時に舍衞城の中の長者婆羅門、尼提の出家するを得たるを聞いて皆譏論を生じ、瞋忿嫌恨して而も是の言を作さく。「彼の尼提は鄙穢下賤にして今出家するを得たり、會を設くるの時尼提來らば、我が舍宅の床蓐を汚さん」と。國を擧げて紛紜す。遂に上りて波斯匿王（Prasenajit）に徹するに至る。時に王、聞き已つて諸臣に告げて言く。「汝等今は、紛紜を用ふる勿れ、我今當に世尊の所に往詣して如來に啓白すべし、更に斯の下賤者をして出家するを得しむるを聽さざらん」と。時に王、侍從を將ゐて祇洹（Jetavana）に往詣し、一比丘の大石の上に坐して糞掃衣を縫へるを見る。七百の梵天ありて其の左右に在り、合掌禮敬する者あり、縷を取る者あり、針を貫く者あり、修多羅の中に廣く說ける如し。時に諸天等偈を說いて讚言すらく。

諸根を觀察するに寂なり　容儀威德盛んに　三明を具するを得　利根にして退轉せず
衆の善悉く備はり滿ち　糞掃衣を容納せり』　七百の威德天　上梵天より來つて

【二一】達摩地那の問難を解すること、巴利上座尼偈註に出づ。

【二二】鳩熟多羅の身分に就ては巴利法句經註に出づ。

【二三】至羅が七才にして外道を摧伏せることの記事上註に同じ。

り飲まん　我が法も亦是の如し』　我今亦　比丘比丘尼を齊はず　普く世間に　人天の大醫と爲る』

我、必ずしも貴きが爲に賢王等を撰擇せず、亦下賤なる優波離（Upāli）等を度せり。我齊しく大富長者の須達多（Sudatta）等の爲にせず、亦貧窮なる須賴多（Sūrata? or Surādha?）等を度せり。我齊しく大智なる舍利弗の爲にせず、亦鈍根なる周利槃特（Kṣudrapanthaka）等の爲にせり。我齊しく少欲知足なる摩訶迦葉の爲にせず、亦多欲なる婆難陀（Upananda）等の爲にせり。我齊しく耆舊宿德なる優樓頻螺迦葉（Uruvera-kāśyapa）の爲にせず、亦幼稚なる須陀耶（Sudāya）等の爲にせり。我齊しく憍慢なる婆迦賴等の爲にせず、極惡なる鴦掘摩羅（Aṅgulimāla）——手に劍を捉る者の爲にせり。我齊しく多智の男子の爲に而も說法を爲さず、亦淺智の女人の爲に而も說法を爲せり。我齊しく出家の衆の爲に而も眞濟と作らず、亦極惡の在家の人の爲に而も說法を爲せり。我齊しく少欲の人の爲に而も說法を爲さず、亦在家の幼子、五欲自恣なるものの爲に四眞諦を說けり。我齊しく衆務を放捨せる逋多梨（Potalya）の爲に說かず、亦國事を經理し諸の世務多き頻婆娑羅王（Bimbisāra）等の爲に說けり。我齊しく斷酒の人の爲に說かず、亦極醉せる郁伽（Ugravati）等の爲に說いて道跡を得しめたり。我齊しく修定を樂しむ離越（Revata）等の爲に生死を離るゝの法を說かず、亦子を失ひて心を狂亂せる[18]婆私吒（Vasiṣṭha）の爲に說けり。我齊しく賢德（?）等の優婆塞種中の生者の爲に法を說かず、亦邪見の弟子阿須拔提（Aśvajit）等の爲に說けり。我齊しく盛壯の羅吒和羅（Rāṣṭhapāla）の爲に法を說かず、亦衰老せる羅拘羅（? Rāhula）等の爲に說けり。我齊しく宿舊の婆拘羅（Vakkula）の爲に羅漢を得ることを說かず、亦七才の沙彌（Śrāmanera）須陀延（Sudāyana）の爲に說いて羅漢を得しめたり。我齊しく[19]十六波羅延（Pārāyana）の心中の難の爲に所疑を問答せず、亦[20]六十人の聚落の嬰愚貪欲にして女人を求むる者の爲に說けり。我齊しく

【一八】雜阿卷三十四、婆沙卷百二十六等に出づ。

【一九】經集（Suttanipāta）の波羅延品の化儀を指す。

【二〇】恐らく成道間もなく優留毘羅村の劫波尸耶林に於て三十人の公子が三十人の女と遊樂せるを化度されしを指すものならん。

に滅しぬ　善相具足して生じ　自在者濟拔したまへり』　我をして快樂を受けしむ　世尊の足上の塵を　帝釋は以て頂戴するも　猶ほ福の護る所と名けん』　況んや我の極めて鄙劣なる　佛の音教を親承して　而も自ら我名を稱したまへり　當に欣慶を生ぜるべけんや』

佛、尼提に告げたまはく。「汝今に於ては能く出家するや不や」と。時に尼提、是の語を聞き已つて心に歡喜を生じ、卽ち偈を說いて言さく。

我の如き賤種の類　頗し出家に任ふるや不や　世尊哀愍を垂れて　設し出家を得るとせば　地獄の人を取つて　安置して天上に著くるが如し』

佛、尼提に告げたまはく。「汝今應に是の思惟を作すべからず」と。卽ち偈を說いて言はく。

如來は　種族及び貴富を觀察せず　唯だ衆生の業の　過去の善種子を觀るのみ』　一切煩惱の縛は　盡く解脫を得ず　生老病死等の　苦樂も悉く皆同じ　云何か婆羅門のみ　獨り能く解脫を得　餘人得る能はざらんや』　文字及び　音聲は　豈に唯だ婆羅門のみかは　餘の姓も亦復た知れや』　譬へば渡河の津の如し　但だに婆羅門のみならず　餘の姓も亦復た能くす　一切の諸の所作も　唯だ婆羅門のみ能くして　餘人に能はざらんや』　汝今但だ應當に　我を信ずるの故に出家すべし　我が佛法中の如きは　悲心ありて偏黨なし』　諸の外道の　隱藏する所の法の有ると同じからず　濟度悉く平等にして　佛法に損減なし』　說法に偏黨なし　平等にして正道を示し　一切衆生の爲に　安隱の正路と作る』　譬へば大市の中に　一切の物を市買するが如し　我が法の市も亦爾り　其の種姓と　富貴及び貧賤を擇ばず』　譬へば淸流水の如し　刹利と婆羅門と　毘舍及び首陀と　遮護あるなき者と　人と非人とを限らず　一切皆來

如來今に於ては　轉た來つて我に逼近したまへり　我身甚だ臭穢にて　世尊に近づきまつるを得ず　善き哉少分を開け　願はくは我身を容受せよ』

爾の時如來、大悲もて心を薫じ、一切衆生を安樂利益し、和顏悅色して尼提の邊りに到りたまふ。世尊、柔軟なる雷音を以て而も之を安慰し、彼の身心をして怡悅快樂ならしめたまふ。佛命せたまはく、「尼提よ」と。尼提聞き已つて周慞し四顧して念ずらく。「佛の命せたまふ所の如し、さはれ三界の至尊にして豈に我の鄙賤の人を喚びますべけんや、將に人の我と同字なるありて彼を喚びたまふこと無からんや」と。佛心平等にして愛憎なし。世尊手を擧げて彼の尼提に向けたまふ。其の[一七]指纖長にして爪は赤銅の如し。指間の網縵は以て其の上を覆へり。掌は蓮花の如く、柔軟淨潔相輪の手なり。尼提をして勇悍の心を生ぜしめんと欲して、卽ち尼提の與に而も偈を說いて言はく。

汝に善根の緣あり　故に我汝の所に至る　我今既に來至せり　汝何の故にか逃避する』
應當に此に住すべし　汝は今身穢なりと雖も　心に上善の法あり　殊勝の妙香
今汝の身外に在り　宜しく自ら鄙賤すべからず』

時に尼提、佛の喚びたまふを聞き已つて目を擧げて佛を視たてまつり、其心勇悍なり、合掌して佛に向ひ、而も是の言を作さく。「歸依する無ければ爲に歸依と作り、諸の衆生に於て因緣あることなくして而も子の想をなす、其心の平等なる、實に是れ眞濟なり、今佛世尊、我と共に語りたまふこと、甘露を以て我が身心に灑ぐが如し」と。卽ち偈を說いて言く。

假使大梵王と　我と共に談議せんに　天帝の尊重なる　屈臨して携抱せられん』　轉
輪大聖王と　同坐して一器に食するも　三界の尊の　哀を垂れて一言を賜ふに如かず』
今我慈容を蒙り　歡喜すること彼にも過ぎたり　簡練して穢惡を去り　不善の相已

【一七】以下三十二相中の手に關するもの三を擧ぐ。

に入る。爾の時、世尊先んじて彼に在つて立ちたまへり。既に佛を覩已つて慚恥して却行するに、糞餅壁を撞いて尋で即ち碎壞し、糞汁流れ灌いで衣服を澆汚す。自ら穢汚を見て慚愧懊惱し、顏色變異す。而も自ら念じて言く。「先に臭穢なりと雖も尚ほ餅の遮ゆるあり、今は餅破壞して穢惡露現す、甚だ慚恥すべし」と。甚だ自ら鄙しめ責めて而も偈を說いて言く。

歎言す、咄、怪なる哉　我今死に趣く如し　臭穢身體に遍し　云何か當に自ら處すべき』
三界の最勝尊は　而も來趣して我に近づき　我が前路を塞遮したまふ　遂に逃避するの處なし』　怪なる哉極めて惡むべし　內外皆不淨なり　慚恥大いに苦惱すること衰老の至るに如似たり』

爾の時大衆咸な世尊の尼提の後に隨ふを見る。時に彼の衆中に一比丘あり、是の念を作して言く。「如來城に入りたまひ、[一五]豪貴幷びに卑賤の家に於て而も從つて乞食したまはず、但だ尼提のみに隨ひたまふ、何の故にか是の如くなる、此れ必ず緣あらん」と。復た自ら念じて言く。「此の事解すべし」と。即ち偈を說いて言く。

此れ必ず功德の器ならん　佛の爲に追隨せらる　珠の糞穢に落つるが如きは　撓攪して而も覓め取る』　如來其の心に錄したまふこと　貴と賤とを擇ばず　種姓の眞を求めず妙勝にして是の說を作したまふ』　「*譬へば醫の病を占ふが如し　病腹の鞕軟を看て患に隨つて藥を投下す　亦種族を觀ず　如來は平等を以て　心の堅軟を觀察す　亦種姓を擇ばず　藥を與へて煩惱を下す」と』

爾の時尼提、隘巷の中に於て世尊に遇値し、慚愧踧縮して藏避する處なし。合掌して地に向ひて是の如きの言を作さく。[一六]「汝今能く一切衆生を持てり、願はくは少處を開いて我身を容受せよ」と。即ち偈を說いて言く。

【一五】貴賤を問はず軒並に順位に從つて次第行乞をせらるるが佛の常法なり、今は是に反すといふ。

＊　佛語。

【一六】「汝」とは大地を指す、此の言即ち、俗に「穴あらば入りたし」といふ心情を寫せるものなり。

と。卽ち偈を說いて言く。

佛の世に出でたまふこと甚だ難し　値遇を得べきこと難し　人天阿修羅　八部[一四]咸な圍遶せり』　我れ今遭ひ値ふと雖も　臭穢もて近づくを得ず　明了に惡業あり　罪報もて我を棄捨せん』

是を思惟し已つて更に異巷より捨てゝ而も遠避す。然るに佛世尊の大慈平等なる、隨逐して捨てたまはず。卽ち彼の巷の尼提の前に現はれて立ちたまふ。尼提見たてまつり已つて復た驚怖を生ずらく。「我向に佛を避けしに今復た覩見しまつる、當に何處にか避くべき」と。驚怖憂惱して而も自ら責めて言く。「我甚だ薄福に諸佛は香潔なり、我當に云何か此の極穢を以て佛に逼近すべけんや、若し當に逼近すべくんば、罪益深重ならん、先世の惡業、我をして乃ち爾らしむ」と。卽ち偈を說いて言く。

天は栴檀香と　上妙の曼陀花と　種々の衆の供具を以て　持ち來つて世尊に奉る』佛來つて城に入りたまふの時　香水以て地に灑ぎ　人天皆供養せり　眞に是れ應供者云何か糞缾を執つて　而も佛の前に在らんや』

復た自ら念じて言く。「當に何方の念を設けてか而も合所を得べけん」と。又更に佛を捨てゝ異巷に入るに、如來前の如くして復た彼の巷に在せり。尼提見已つて倍す復た怪しみ惱む。而も偈を說いて言く。

圓光の周ること一尋　色炎若干種なり　城中の諸人等　合掌し而も圍遶す』　帝釋は拂を執持し　人天皆供養せり　我向に異巷に避くるに　復た此の道より來たまへり』

此の偈を作し已つて復た自ら念じて言く。「今の世尊は人天の中の上なり、我の鄙穢なる衆生の中の下なり、我今云何か此の臭穢を以て而も世尊に近づきたてまつらん」と。卽便に迴避して異巷

[一四] 八部。天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅迦の八部、共に佛法の守護者。

滿月の如し』　人の爲に愛樂せられ　妙相以て莊嚴せる　善調伏の威德　衆德の備足者　誰か能く具さに稱歎せん　諸の過惡は已に壞れり』　譬へば生死の中に　衆伎もて形を變現するが如し　永く能く變現すること　髣髴として佛に似たる者なし』　衆の妙像を作すと雖も　佛の儀相には及ばず　佛の妙容相は　天人の中に比なし』

又復た世尊は相好を齊しうしたまはず、殊妙なること數ずべし。衆行皆備はり、功德悉く具へたまふ。偈を說いて讃へて言く。

如來の言說したまふ所は　智者の欽仰する所　威儀及び擧止　終に過失あるなし』
牟尼中の最勝　事に觸るゝこと未曾有なり　覺慧は動搖するなく　讃毀にも意異らず』
十力あるを以ての故に　標相極めて寂靜なり　滿足して而も正直に　功德利益衆る』　行步甚だ詳雅に　人の爲に愛樂せらる　言說の義は深廣に　視瞻極めて審諦なり』　詳雅に次叙あり　一切皆捨離したまふ　食飮に貪著なく　要を擧げて而も之を言ふ　不可愛あることなし』

爾の時尼提、無上の調御の諸根寂靜なると、及び比丘等の根の散亂せざるものの圍遶侍從せるを見て、心倍す愛敬し、復た偈を說いて言く。

諸根悉く寂靜に　調根者圍遶せり　新色衣を著して　前後隨導して從へり』　衆の釋中の勝導　金色にして動ぜず　四衆常に圍遶すること　赤雲の日を繞るが如し』

爾の時尼提、既に佛を見たてまつり已つて自ら鄙しむらく、「臭穢なり、背に糞瓨を負つて云何か佛を見たてまつらん」と。異道に迴趣いて以て佛を見たてまつらず。心に愁惱を懷くらく。「我れ先世に於て福業を造らず、惡の索く所と爲つて今に此の苦を受く、我今斯の下賤業を愁へず、衆の人皆佛の前に到るを得るに、我今臭穢を見るの故に往くを得ず、是を以ての故に懊惱して心を燋つ』

裟(Kaṣāya)は赤栴檀の如く、亦寶樓の如くにて之を觀たてまつるに厭くなし。即ち偈を說いて言く。

金色なること華敷の如し　衣は赤栴檀の如く　衣服の儀齊整し　淸淨なること銅鏡の如し』　如似たり秋月の時　日の虛空中に處するに　世尊の大衆に處したまふこと　嚴淨にして秋月の如し』

爾の時衆生、佛世尊を見たてまつつて大いに歡喜を生ず。畜生の佛を見たてまつるや眼根悅樂するを、況して復た人をや。即ち偈を說いて言く。

色を見るに比類なし　深心もて極めて愛敬す　禪定の器たるに堪え　威光倍す赫奕たり』　邪見惡毒の心もて　佛を視たてまつるに猶ほ悅豫す　其の諸の形體を觀たてまつるに目に觸れて視ゆるに厭くことなし』　覩見して心悅豫し　身體悉く照曜す　之を瞻るに轉た熾盛に　形體圓かに滿足す』　嫌呵すべきの處なし　種姓は歎美すべく　能く議論する者なし　明智の善丈夫　相續いで是の種より出づ』　世の人寶もて嚴飾し以て形容の好しきを助くるも　佛の身は相好具はり　外の莊嚴を假らず』　相好は衆に愛樂せられ　顯好は常に身に隨ふ　世の人自ら瓔珞するも　常に好と爲すを得ず』　蓮華の悉く開敷し　阿輸伽(Aśoka)の敷榮して　大地を嚴飾するも　顯好なること佛には如かじ』　目を淨うする衆の相好もて　熾然にして身を莊嚴すること　喩へば摩尼(Maṇi)の鎧の如し』　衆寶もて而も校飾すること　亦猶ほ池水の中の　衆華以て莊嚴するが如し』　是の如き等の比類も　如來の身には及ばず　善逝の形體は　相好炳然として著はるゝこと　猶し虛空の中の　淨くして雲翳無きの時　衆星の月を莊嚴するが如し』　善行の微妙の器　瞻仰するに厭足する無く　甘露味を飲むが如く　猶ほ淨き

復た次に善根熟すれば復び逃避すと雖も如來の大悲なる終に放捨したまはず。

四三、[九]佛尼提を度したまふ縁

我昔曾て聞く。如來は無上良厚の福田なり。行來進止常に福利を爲したまふ。世間の所有の田の如きには非るたり。福田を示行せんと欲するに、世間の田と異る。福田を行ぜんには、檀越下種の人の所に往至し、舍衞城に入つて[一〇]分衞す。乃至、[一一]菩薩爲りし時、王舍城に入つて乞食したまへり。城中の老少男女大小、其の容儀を見て心に皆愛敬す。餘は[一二]佛本行經の中に說くが如し。

昔佛在せしの時、衆生厭惡して善根の種子極めて芽を生じ易かりき。佛の應化したまふ所、人を度せんが爲の故に、城に入つて乞食したまひき。卽ち偈を說いて言く。

若し深信の心を以て　佛の足を禮敬すれば　是の人生死に於て　便ち久しく住らずと爲す』
能く善福田を行ぜんには　供養もて因緣と作し　必ず大なる果報を獲ん　能く信敬の心を以て
土を以て佛鉢に著けんに　終に果報無からずや』

如來、城に入つて神足を現ずるの時、一切の人民各々相語るらく。「佛來つて城に入りたまへり」と。餘は諸の經の中に說くが如し。

佛來つて城に入るの時、所有る嚴麗もて種々に具足し、男女大小、佛の城に入りたまへるを聞いて一切擾動す。猶し大海の風皺濤波の大音聲を出すが如し。閻浮提界も亦未だ曾て是の如きの形相あらず。爾の時、城中の除糞穢人あり、名を尼提(Nithi)と曰ふ。髮長く蓬亂し垢膩不淨に、著くる所の衣裳悉く皆弊壞す。若し道中に於て弊納を得れば便ち用て衣を補ふ。宿世の不善業を示さんと欲するの故に背に糞瓨を負ひ、遠く棄去せんと欲す。路に於て佛に見え、尊顏を瞻仰するに大海を視るが如く、[一三]圓光一尋以て身を莊嚴すること眞金聚の如くにて諸の垢穢なし。著けたまふ所の袈

【九】本物語は賢愚經尼提度緣品にも出づ。梵筴斷簡、第百三十、一、二の三葉。
【一〇】分衞(piṇḍapāta)。行乞のこと。
【一一】正覺を得られなかつた修行時代を菩薩といふ。
【一二】佛本行。佛傳書を指すも、その何本なるかは明かならず。固より馬鳴の佛所行讚ではなからう。
【一三】圓光。佛の頂上より放たるゝ圓輪の光明。

我昔曾て聞く。尊者目連（Maudgalyāyana）二弟子に敎ふ。精專に禪定を學するに而も證する所なし。時に尊者舍利弗（Śāradvatiputra）目連に問ひて言く。「彼の二弟子勝法を得るや不や」と。目連答へて言く。「未だ得ず」と。舍利弗又問ひて言く。「汝何の法をか敎ふる」と。目連答へて言く。「一に〔六〕不淨を敎へ、二に數息を敎ふ、然るに其の心意滯りて而も悟らず」と。時に舍利弗、目連に問ひて言く。「彼の二弟子は何の種姓よりして而も來つて出家せるや」と。答へて言く。「一は是れ浣衣、二は是れ鍛金師なり」と。時に舍利弗、目連に語げて言く。「金師子には應に〔七〕安般（Ānāpāna）を授くべく、浣衣人には宜しく不淨を敎ふべし」と。目連法の如くに以て弟子を敎ふるに、弟子尋で即ち精勤修習して阿羅漢果を得たり。既に阿羅漢を成じ、歡喜踊躍して即便に偈を說いて舍利弗を讃ずらく。

第二の〔八〕轉法輪　佛法の大將なり　諸の聲聞の中に於て　最上の智を得』　勝覺の慧力あり　嗚呼舍利弗や　指導して解脫を示すに　本の習ふ所に隨順せり』　指導して我を開悟し　二り共に速かに解脫す　自らの境界中に行じて　應に得べき所を獲得したり』　他の境界を行ずれば　魚の陸地に墮するが如けん　我は常に河側に在つて　浣衣白淨を習ひき』　心を白骨に安きて　相類はすは開解し易し　大いに功力を加へずして速疾に我が意に入れり』　金師は常に槖を吹けり　出入の氣は是れ風なり　樂つて安般に入り易し』　衆生の翫習する所　各自ら勝力あり　今は舍利弗　佛法の鞅鞁なり』　佛說きたまはく「舍利弗は　第二の轉法輪なり」と　眞實に是れ所應す』　心に自在を得れば　能く我が二人をして　善く禪定の徑路を知らしめぬ』　我は不調の象の如し　法の中の大將　言敎もて我を調順し　安穩處に到らしめぬ　故に我大いに歡喜す』

〔六〕不淨と數息。禪定に於ける觀方の種類。不淨觀は人身を觀じ汚漏不淨にして執ずべきなきを知ること。數息觀は出入の息を數へ神心の統一を計る法。

〔七〕安般。前註數息觀の原語。

〔八〕轉法輪（dharma-cakra-varti）。佛陀の敎法は人の心の邪惡を退じて正道につかしむること、彼の轉輪王の輪寶轉じてよく國を治むるが如きの故に、その敎化を轉法輪といふ。今は舍利弗の德を讃へて佛の轉法輪を繼ぐ人とするなり。但しこれ。

衆の中に師子吼し　而も是の如き言を唱へたまはく　「*利養は我に近づくこと莫れ　我も亦彼より遠ざからん」と』　有心明智の人は　誰か當に利養を貪るべき　利養は定心を亂し　害を爲すこと怨よりも劇し』　毛繩を以て戮すが如し　皮斷れ肉と骨壞れ髓斷れて爾して乃ち止まん　利養は毛繩よりも過ぎたり』　持戒の皮を絶ち　能く禪定の肉を破り　智慧の骨を折り　妙善心の髓を滅す』　譬へば嬰孩者の　火を捉へて之を食はんと欲するが如き　魚の鉤餌を呑まんとするが如き　鳥の網もて覆はるゝが如き』

諸の獸の穽陷に墜つるが如き　皆味を貪るに由るが故なり　比丘の利養を貪るも　彼と亦異るなし』　其の味極めて尠少なるも　患と爲ること甚だ深重なり　詐つて諂佞を爲す者は　利養の中に止住す』　憒鬧の亂に親近するは　妨患の種子なり　疥の瘡を搔くに如似たり　之を搔くに痒さ轉た增す　矜高放逸の欲は　皆利養因り生ず』

此の人は我等の爲に　利養の怨を遮れり　我れ此の義を以ての故に　應に心を盡して供養すべし　是の如きの善知識を　云何か名けて怨と爲ん』　利養を貪るに由るの故に　閑靜處を樂はず　心常に利養を緣として　晝夜に休息せず』　「彼の處に衣食あり　某は是れ我が親厚　必ず來つて我を請　命せん」と　心意常に　[三]攀緣多し』　寂靜の心を敗壞し　空閑處を樂はず　常に樂つて人間に在り　利養に*由つて毀敗せるの故に』

寂定の法を樂はず　寂定を捨つるを以ての故に　名けて比丘と爲ず　亦白衣と名けず』

四二、[四]目連、舍利弗より二弟子の教育を聞く縁

復た次に、俱に　[五]漏盡を得るに教學差別あり。

---

* 佛語。

【三】攀緣。煩惱の起る手がかり。

* 「由」三本に依る、麗本は「田」に作る。

【四】梵筴斷簡、第百二十七、八葉。

【五】漏盡(āsrava-kṣaya)。煩惱の盡きたること。

四一、[一]和上誹謗者を喚んで善言もて慰諭し衣を與ふる緣

復た次に、利養は行道を亂る。若し利養を斷ぜば、善く瞋を觀察せん。

我昔曾て聞く。一比丘あり、一園中に在りき。城邑聚落競つて共に供養す。同じく出家する者、憎嫉誹謗す。比丘の弟子、是の誹謗を聞いて其の師に白して言さく。「某甲比丘、和上[二](Upādhyāya)を誹謗す」と。時に彼の和上是の語を聞き已り、卽ち謗者を喚んで善言もて慰喩し、衣を以て之に與ふ。諸の弟子等、其の師に白して言さく。「彼の誹謗の人は是れ我の怨なり、云何か和上、慰喩して衣を與ふるや」と。師之に答へて言く。彼の誹謗者は、我に於て恩あり、應當に供養すべし」と。卽ち偈を說いて言く。

雹の禾穀を害ふが如し　人あつて能く庶斷せんに　田主甚だ歡喜して　之に報ゆるに財帛を以てせん』　彼の謗は是れ親厚なり　名けて怨家と爲さず　我が利養の雹を遮る　我應に其の恩に報ゆべし』　雹の害は一世に及べど　利養は多身を害ふ　雹は唯だ財を害ふのみ　利養は修道を毀つ』　雹の爲に害はれし田は　必ず少しの遺餘あり　利養の害ふ所は　功德皆消盡す』　彼の提婆達(Devadatta)の如し　利養の雹に害はる　彼の貪著に由るの故に　善法は毫釐もなし』　衆惡極めて熾盛に　死すれば則ち惡道に墮す　利養は猛火よりも劇し　亦惡毒　師子及び虎狼よりも過ぎたり』　智者は觀察し已りて　寧ろ彼の爲に傷はるゝとも　利養に害はれず』　愚者は利養を貪つて　其の過惡を見ず　利養は聖道を遠ざかり　善行は滅んで生ぜず』　佛は已に諸の結を斷じたまひ　三有の結都て解く　功德已に具滿したまへど　猶ほ倘ほ利養を避けたまふ』

【一】梵筴斷簡、第二十六、七葉。

【二】和上。西域の方言化せる kkojha より寫せる音、天台にクワシヤウ、法相宗律宗にワジヤウ、禪家にオシヤウと讀む。親教せる師をいふ。

と。賊、畏れを以ての故に卽便に語に隨つて佛に歸依す。復た打つこと二下し已つて語げて言く。「法に歸依せよ」と。賊、死を畏るゝの故に復た言く。「法に歸依す」と。第三打の時、復た之に語げて言く。「僧に歸依せよ」と。賊時に畏るゝの故に言く。「僧に歸依す」と。卽ち自ら思惟すらく。「今此の道人、幾ばくの歸依かある、若し多くあらば必ず更に此の閻浮提を見ざらん、必ず當に命終すべし」と。爾の時比丘、卽ち放つて去らしむ。打を被るを以ての故に、身體疼痛し、久しくして而も起つことを得、卽ち出家を求む。人有つて問ひて言く。「汝先に賊を作し、諸の惡行を造れり、何事を以ての故に、出家修道するや」と。彼人に答へて言く。「我も亦佛法の利を觀察し、然る後に出家せり、我今日に於て善知識に遇へり、杖を以て我を打つこと三下、唯だ少許の命の在るありて絕せず、如來世尊は實に一切智者なり、若し弟子に四歸依を教へたまはゞ、我が命は卽ち絕えたらん、佛或は遠く斯の事を見て、「*出家比丘賊を打つこと三下なれ」と教へたまひ、我をして死せざらしめたまひしか、是の故に世尊は唯だ三歸を說いて四歸を說きたまはず、佛我を愍れみたまふの故に、三歸依を說いて四歸を說きたまはず」と。卽ち偈を說いて言く。

決定せる一切智　我を憐愍するを以ての故に　是を以て三歸を說いて　第四のあるを說きたまはず』　三有の爲の故に　而も三歸依を說けり　若し當に第四なるべくんば
我則ち歸依する無けん』　我今憐愍すべし　身命は彼に於て盡きぬ　我れ佛世尊の
遠く斯の如き事を覩たまへるを見て　未曾有を生じたり　是の故に賊心を捨てぬ』　麤
事に因つて解するあり　或は細事に因つて悟る　麤者は麤事を悟り　細者は細事を解す』
我が心の麤なるに由つての故に　麤事に因つて解悟しぬ　我れ斯の事を解するの故に
是を以て出家を求む』

＊出家。三本に依る、麗本は出の一字なり。

て劫掠して賊を作せり、一人を捉へ得たるに急かに其の手を拳れり、我即ち思惟すらく、「此の人の拳手必ず金錢あらん」と。語げて手を開かしむるに其の人肯ぜず、我弓箭を捉つて用て彼人を恐かし、語げて言ふ、「手を放て」と。而も故の猶くして肯ぜず、我即ち弓を挽いて之に向ひ、貪寶を以ての故に即便に射殺しぬ、殺し已つて即ち一銅錢を取得したり、寧んぞ一錢を惜しんで身命を惜しまざる、今の如きは大王、逼惱する者なきに能く五錢を持して用て佛塔に施せり、是の故に我今歎じて善き哉と言へり」と。即ち偈を說いて言く。

弓を挽くこと圓かに輪の如し　將て彼命を害せんと欲す　彼寧ろ身命を喪ふとも　一錢を輸るを肯ぜず』　我此の如き人を見る　命を捨つるも錢を捨てざるを　是の故に我今は　錢を捨つる者有るを見て　希有の想を生じ　歎言すらく作すべき難しと』　弓刀もて　大王を强逼する者あるを見ず　亦畏忌あるなきに　意を開いて捨し難きを捨せり』　苦しみ求めて乃ち錢を得　是の故我今日　捨財する者あるを見て　心に未曾有を生ぜり』　我自ら其の證を見るに　極苦するも肯て捨てず　大王今當に知るべし　慳心の捨すべき難きを』

四〇、[三六]比丘方便して盜賊を改悟出家せしむる緣

復た次に、善く所作を觀察せんに、時に當つて過ありと雖も、後必ず大益あらん。

我昔曾て聞く。一比丘あり、常に盜賊を被る。一日の中、堅く門戶を閉せり。賊復た來至して門を扣いて而も喚べり、比丘答へて言く。「我汝を見るの時、極めて大いに驚き怖る、汝手を彼の向の中に內るべし、當に汝に物を與ふべし」と。賊即ち手を內れて向の中に置く。比丘繩を以て之を柱に繫ぐ。比丘杖を執つて門を開いて之を打つ。打つこと一下し已つて語げて言く。「佛に歸依せよ」

【三六】梵筴斷簡、第百二十五、六葉。

巨海極めて廣大なり　浮木の孔復た小さし　百年にして而も一たび出づる　値ふを得ること甚だ難しと爲ん』　我今池水小にして　浮木の孔極めて大なり　數々自ら頭を出すも　木孔に値ふこと能はず』　盲龜の浮木に遇ふこと　相値ふ甚だ難しと爲す　惡道に復び人身の　値ひ難きも亦是の如し　我今人身に値へり　應當に放逸ならざるべし』　恒沙等の諸佛あるも　未だ曾て値遇するを得ず　今日　十力世尊の言を諮受するを得たり』　佛の說きたまふ所の妙法は　我必ず當に修行すべし　若し能く善く修習せんに　濟拔極めて大と爲ん』　他の作を已れに得るに非ず　是の故に自ら精勤せん　若し[三三]八難處に墮せんに　云何か離るゝを得べけん』　世間の業は隨逐して　惡道に墜墮す　我今當に逃避して　三有の獄を出づるを得べし』　若し此の獄を出でずんば　云何か解脫を得ん　畜生道は若干あり　劫を歷ること極めて長久なり』　地獄及び餓鬼は黑闇にして苦惱深し　我若し勤修せずんば　云何か而も離るゝを得ん』　嶮難なる諸の惡道に　今日人身を得たり　苦の邊際を盡さず　三有の獄を離れず』　應當に勤めて方便して　必ず三有の獄を離るべし　我今出家を求む　必ず解脫を得しめん』

三九、[三四]劫賊薩多浮王の布施するを見て咏嘆する緣

復た次に、財錢は捨て難し、智者若し能く小施を修めんに輕想を起す莫れ。

我昔曾て聞く。*須和多(Suvastu)國に昔日王あり、薩多浮と名く。時に王遊獵して偶ま一塔に値ひ、即ち五錢を以て彼塔に布施す。一旃陀羅あり、遙かに唱ふらく、善き哉と。即ち使を遣はして捉へ將ゐて王所に至らしむ。時に王語げて言く。「汝今我の布施の小なるを見るの故に我を譏笑せるや」と。彼人王に白さく。「我に[三五]無畏を施せ、然る後に當に語ぐべし、我昔日に於て嶮道中に於

[三三] 八難處(aṣṭa-akṣaṇa)。見佛聞法のしがたき所、一地獄、二餓鬼、三畜生、四欝單越(樂報殊勝にて苦なき故)、五長壽天(死を知らざる故)、六聾盲瘖啞、七世智辯聰、八佛前佛後。

[三四] 梵筴斷簡、第百二十五葉。

* 第九章の修婆多國と同じからん。

[三五] 無畏を施せ。何事にても自由にいふ許せの意。

せりと」。卽ち偈を說いて言く。

施者所生の處　財寶極めて廣大なり　財寶を恃むを以ての故に　能く憍慢を起さしむ』
憍慢は法度を越ゆ　盲冥なる凡夫の失なり　法度を越ゆるを以ての故に　則ち三惡道に墮す』　三惡道に處すること　猶し已が舍宅の如し　若し人天中に生ぜんに　暫し寄る客に如似たり』　是の故に戒と施の伴ふは　倶に涅槃を受く　戒は能く生天を得
施は能く衆具を備ふ』　作す所解脫の爲ならんに　必ず苦際を盡さん　譬へば藕根を種ゆるに　花葉悉く具さに得　其の根も亦食すべきが如し』　施戒を修行し　解脫の林に親近するに　快樂なるは花葉に喩へ　根は解脫に喩ふ』　是の故に戒施を修めんには　必ず當に解脫の爲にすべし　應に世利の爲にすべからず』

三八、[三二]小兒盲龜浮木に會ふの佛說に感じて發心する緣

復た次に、諸難を離るゝも亦難し、人身を得ること難し、旣に諸難を離るゝを得ば、應當に常に精勤すべし。

我昔曾て聞く。一小兒あり、[三三]經中に「盲龜の浮木の孔に値ふ、其の事甚だ難し」と。說くを聞く。時に此の小兒、故に一板を穿ち孔を作つて頭に受け、池中に擲著して、自ら池中に入り、頭を低げ頭を擧げて望んで孔に入らんと欲す。水板を漂はすの故に値ふことを得べからず。卽ち自ら思惟して極めて厭惡を生ずらく。「人身は得難し、佛は大海を以て喩と爲し、浮木の孔小さく盲龜に眼なし、百年に一たび出づ、極めて値ふべきこと難しと、我今の池は小さく其の板孔は大なり、復た兩眼あり、日に百たび頭を出すも猶ほ値ふこと能はず、況んや彼の盲龜にして而も當に値ふを得べけんや」と。卽ち偈を說いて言く。

【三二】梵筴斷簡、第百二十三葉。

【三三】雜阿含卷十五の終經。

で起たず　都て患相あるなきに似たり』　欲は毒樹の根の如し　拔かざれば芽還び生ぜん　人の白髮を耻ぢて　幷びに其の黑きを剃る者の如し　之を剃るとも未だ久しからざる間に　白髮尋で還び生ぜん』　永く結使を斷ぜざる　其の事も亦是の如し　欲結及び瞋恚は　戒行の機關に逼るも　對治せば隱れて起らず』　身口の業を造らざれば便ち　[26]難有の想を生ぜんも　結使は後還び起らん』　戒行を毀犯し　貪嗜して五欲に著すること　蛇の隱れて穴に入るが如し　還び出づれば則ち人を螫す』

三七、[27]上座比丘檀越に施食は解脫の爲にすべきを說く緣

復た次に、施は解脫の爲にし、財物の爲にせざれ。若し財物の爲にせば名けて施と爲さず。若し解脫の爲にすれば則ち[28]無生と及び涅槃の樂を得ん。是の故に智者は應に解脫の爲に而も布施を行ずべし。

我昔曾て聞く。一檀越あり、僧房に詣でて會を設く。檀越の知識の道人、上座に語げて言く。「今日、檀越の飲食は精細なり、好んで檀越の爲に耐心に法を說かん」と。是の時、上座、已に三明六通を得、[29]八解脫を具して善く他心を知る。深く之を觀察すらく、「何事の爲の故に而も此の會を設くるや」と。乃ち此の會の財利の爲の故なるを知れり。爾の時上座、此の檀越の爲に三惡道の苦を說いて而も是の言を作さく。「善き哉、善き哉、檀越よ、汝今設くる所の供養は、極めて是れ[30]時施、色香美味皆悉く具足し、極めて清淨と爲す、三惡道の中に乏少する所なし」と。時に知識の道人上座に語げて言く。「何を以てか他の爲に呪願するや、三惡道の中に都て乏くる所無しと」。時に僧上座彼の道人の子に語ぐらく。「我年老ゆと雖も、倒錯して法を說かんや、然るに此の檀越、戒を習はず、結使に使はる、我彼の心を觀ずるの故に是の說を作す、此の檀越は五欲樂及び財寶畜生の爲に

【二六】難有の想。もう再び起らぬと思うこと。
【二七】梵文斷簡、第百二十三葉。
【二八】無生。生死なきこと。
【二九】八解脫。八背捨ともいふ、俱舍論二九等に詳說さる、參見のこと。
【三〇】時施。時に叶へる施。

はざりき』　我今極めて歡喜す　汝を用て輔相と爲さん　須らく觀察を覆すべからず
我已に汝の行を見るに　心堅く志勇健なり　兼て復た智能を有てり』　我今自ら見知す斯の事實に有り難し　才業倍す父に勝れり　心の眞に善なるを以ての故に』

是の故に智者は、當に眞實を作すべし。應に虛僞なるべからず。

三六、[二三]師弟子に斷結せざれば再び煩惱の生ずることを說く緣

復た次に、現在の結使は、復た起らずと雖も、若し未だ結を斷ぜざらんには、結使の得ること猶し故のごとくして成就すること、冷水を以て熱湯中に投ずるが如けん。

我昔曾て聞く。一師あり、一弟子と共に其の冬日に於て煖室の中に在り。火聚あるを見るも烟焰あるなし。師弟子に語ぐらく。「汝是の火に烟焰なきを見るや不や」と。弟子言く。「見る」と。師弟子に語ぐ。「汝乾ける薪を著けよ、烟卽時に起らん」。復た言く「口もて火を吹け、焰乃ち出でん」と。師弟子の爲に而も偈を說いて言く。

先に火に烟焰なし　慈心と不淨觀もて　現在に結の生ぜざること　火に烟焰のなきが如し』　火の乾薪を得んに　烟焰俱時に起るが如く　心火も因緣に遇ひ　惡知識に値ふの時　瞋恚の烟便ち起らん　若し好色を覩るの時　貪欲の火は熾んに然えん』　是の故に應に斷じて　三明を成就し具ふることを得べし　貪瞋癡を斷ぜんが爲には　應に勤めて精進を修むべし』　[二四]明行足の斷心には　結使の草は生ぜず　喩へば常行の道の衆卉皆出でざるが如し』　貪欲及び瞋恚は　未だ緣に遇はずして起らず　根本の未だ斷ぜざるの故に　緣に遇へば還び復た發らん』　喩へば瘧病を得るが如し　四日定んで發現し　三二日時に於て　緣に遇ひて還び復た發る』　又世俗の禪定の　[二五]掩按して結ん

【二三】梵本缺失。

【二四】明行足(Vidyā-caraṇa-sampanna)。智と行と二つが完全にしとげらるゝこと。

【二五】よく身心をおさへ足を結んで居る狀態が、いかにも解脫したかに見ゆること。

是の偈を說き已つて是の思惟を作さく。「設ひ餘處を劫めんに或は他をして貧ならしめん、我當に王を劫むべし」と。是の念を作し已つて王宮中に至り、王の臥處に詣る。王賊あるを覺つて怖れて敢て語げず。王の衣服幷びに諸の瓔珞を持して取つて一處に安く。時に王の頭邊に一器あり、水邊に復た灰あり、飢渴に逼られて灰を是れ麨なりと謂ひ、水に和えて而も飲み、飲み已つて飽滿し、乃ち是を灰と知る。卽ち自ら思惟すらく。「灰猶ほ食すべし、況んや其の餘の物をや、我寧ろ草を食はん、何を用てか賊を作さんや、先父以來此の業を作さず」と。卽ち諸物を棄てゝ還來して家に歸る。王、空しく出づるを見て歎じて言く。「善き哉」と。卽ち其の人を喚んで而も之に語げて言く。「汝今何の故に旣に此物を取り還び地に置いて而も便ち空しく去れるや」と。白して言く。「大王よ、我が說く所を聽きたまへ」と。卽ち偈を說いて言く。

何の故に非理を作せるや　飢渴の爲を以ての故なり　灰と水もて飢渴を止む　是の故に賊心息みぬ』　今知る是の飢渴の　止息を得べきことの易きを　我灰水を飲み已つて器を擲つて地中に著けたり　慚愧して悔恨を生ず　復び更に惡を作らじ』　大王應當に知るべし　我は凡庶の子に非ず　乃ち是れ輔相の子なり　家の窮困に由るの故に故に來つて王宮に至り　非法の事を造作せり』　今日より已去　常に灰水を飲み　草を食みて而も自活せんと欲す　偸盜の業を爲さず』　我家は昔先人より　自らに家禮の敎あり　寧ろ當に自ら身を滅すべけんも　舊法訓を毀たざらん』

王、此の事を見て歎ずらく「未曾有なり、種姓子を稱ふること眞實にして虛しからず、僣過ありと雖も、尋で能く改悔せり」と。卽ち偈を說いて言く。

貧窮は志耐を壞き　幷びに慚愧を棄てしむ　凡下鄙惡の人は　速疾に惡業を造る』
己れの家法の鉤を以て　能く非法の象を制せり　汝能く自ら心を抑へて　家敎の法に違

修羅(Vadisa-asura)　天王及び帝釋　我等と諸王と　城中の諸の豪族　婆羅門、利
利は　勝智見の人を尊んで　信敬せざる者なし』　能く*信を同じうするの故に　現
りに花報を得　今の信は最信の處なり　應に第一果を得べし』

三五、[三]輔相子王宮を犯し灰水を飲みて頓悟する緣

復た次に、諸の利を求めんと欲する者は、或は得、或は得ず。眞の善心ある者、求めずして自らに利實を得、眞の善心なき者は、貪利を得と爲す。故に應に眞の善心を作すべし。

我昔曾て聞く。一國王あり。時に輔相の子あり。其の父早喪す。其の子幼稚にして未だ紹繼に任ぜず。錢財已に盡く。人の通致して王に見ゆるを得べきなし。窮苦して自活す。遂に漸く長じて大いに輔相の才あり、民を理め事を斷くこと、一切善く知る。年成立に向ひ、盛壯の時、形體姝大に勇猛にして大力あり、才藝備具す。是の思惟を作さく。「我今貧窮なり、當に何をか所作すべき、又復た諸の賤業を作す能はず、今我れ福なし、所有の才藝も施行するを得ず。復び下賤の家に生れず、又他の是の偈を說くを聞けり、言く、

業來つて我を變化す　窮困乃し是の如し　父母の家業は　今や施用の處なし』　下賤の所作する業は　我の作すべき所に非ず　若し我れ福業なくんば　應に下賤の家に生るべし』　生處復た貴しと雖も　困苦は乃し是の如からん　賤業は極めて知り易し　然も我の能はざる所』　當に私竊の業を作すべし　人をして都て知らざらしめん　正に作賊の業ありて　覆隱せんに人覺らず』　腰に二箭の筒を繫ぎ　幷びに鋼の利劍を持ち　蹀を縛つて手に弓を秉り　種々に自ら莊嚴すること　喩へば師子兒の如し　都て畏るゝ所あるなし』

* 三本に依る、麗本「我信を同」云々。

【三】梵、狹斷簡、第百二十葉。

人先には貧にして衣食も供はらず、金を得るを以ての故に轉た富饒を得、衣食自恣せり。王家衆伺して其の卒富を知り、而も之を糺擧して獄中に繫在す。先に得る所の金は旣に已に用ゐ盡せるも、猶ほ免るゝを得ず。將に刑戮を加へんとす。其の人唱言すらく。「毒蛇なり阿難、惡毒蛇なり世尊」と。傍らの人之を聞いて狀を以て王に白せり。王彼の人を喚んで而も之に問ひて曰く。「何の故に唱言するや、毒蛇なり阿難、惡毒蛇なり世尊と」と。其の人王に白さく。「我往日に於て、田に在つて耕種するに、佛と阿難の說いて毒蛇、是れ惡毒蛇なりと言へるを聞けり、我今に於ては方に乃ち實に是れ毒蛇なることを悟解せり」と。卽ち偈を說いて言く。

諸佛の語に二なし　說いて大毒蛇と爲したまへり　阿難は世尊に白さく　實に是れ惡毒蛇と』　惡毒蛇の勢力　我今始めて證知す　佛世尊の所に於て　倍す信敬の心を增せり　我今危難に臨む』　是の故に佛語を稱せり　毒蛇の螫す所は　正しく一身に及ぶのみ　親戚及び妻子　奴婢僮僕等　一切悉く　而も苦惱を受くる者有るなし　されど財寶の毒蛇の　螫は　盡く家眷屬に及ぶ』　我今財寶　及與び親戚等に於て視ること惡毒蛇の如し　瞋恚の發作する時　智者は宜しく速かに離るゝことと　惡毒蛇を捨つるが如かるべし』　應に速かに出家を求めて　山林に行詣すべし　誰か智慧ある者此の如きの事を見聞して　而も當に財寶に著して　封惑して其の心を迷はすべけんや　我大利を得んと謂ひて　而も反つて衰惱を獲たり』

王偈を聞き已つて深く是の人の佛語の中に於て信解の心を生ぜるを知り、卽ち偈を說いて言く。

汝今能く　悲愍の大仙を信敬せり　說きたまふ所の語は眞實にして　未だ曾て二言あらず』　先に伏藏する所の財は　盡く用て汝に還さん　更に復た財寶を以て　而も以て汝を供養せん』　能く調御　善逝の實語を敬信するの故に　大梵の信ずる所　拔梨阿

く眷屬あり　端正にて威德を有し　財富みて侍從多く　衆事もて嫌ふべからず　世の爲に尊敬せられ　今日の身の如くなる莫からしめん　自ら悔ゆるも及ぶ所なし』　惡心は我が怨と爲す　我を欺いて貧賤を致せり　心能く自ら悔責し　善を修めて快樂を得ん』　設ひ惡業を造るの時には　衆善は都て生ぜず　心を制して善を修めば　榮樂として具はらざるなし』　世間の語は虛ならず　善惡は報に差別あり　佛は八正道もて能く涅槃に至ると說きたまへり』　若し心財利と　富貴及び榮勝に著して　後有を求めば　衰老患を免れず』　我當に勤精して專ら　無畏の方に趣向せん　譬へば醉書師の如し　諸の形像を書作し　醒め已つて其の惡しきを知り　除滅して勝れし者を作る』　先世愚癡の故に　今の惡身を造作せり　今當に惡業を滅して　將來に勝報を求むべし　惡しき果報を見已つて　智者は深く自ら責めん』

三四[三二]、田夫伏藏を得て王に捉へられ財寶の惡毒蛇なるを解悟する緣

復た次に、若し善說を聞かば應當に思惟すべし、必ず義利を得ん。是の故に智者は常に應に善妙の法を聽受すべし。

我昔曾て聞く。舍衞國中に佛と阿難（Ānanda）と曠野の中を行く。一田畔に於て伏藏あるを見て、佛阿難に告ぐらく。「是れ大毒蛇なり」と。阿難佛に白さく。「是れ惡毒蛇なり」と。爾の時田中に一耕人あり、佛と阿難の毒蛇ありと說くを聞いて、是の念言を作さく。「我當に之を視るべし、沙門何を以てか惡毒蛇と爲せるや」と。即ち其所に往くに眞金聚を見る。而も是の言を作さく。「沙門言ふ所の是れ毒蛇なりとは、乃ち是れ好金なり」と。即ち此の金を取つて還つて家中に置く。其の

【三二】梵本缺失。この物語、巴利傳にては法句經註卷二、三八頁に出で、漢譯にては十誦律卷十五、有部毘奈耶卷四〇等に出づ。

聞を修めんに　必ず無畏力に至らん』　結の爲に漂はされんに　當に修定力に依るべし　禪定を修めて勝力を得んに　明了に結使を見ん』　汝の常に修集するに由りて　故に出家の法を樂しみ　心は善功德に近づき　爲に結使は壞らる』　正道を修集し　是の意もて結使を捉へ　象の羇靽を絕つ如く　自恣にして意の隨に去れ』

時に罷道比丘、卽ち惡業を捨てゝ出家し、精勤して阿羅漢果を得たり。

三三、[二〇] 聰慧の田夫福德の人を見て修善の心を發す緣

復た次に、若し無過の善根を莊嚴せんと欲せば、是の故に應當に諸善を勤修すべし。

我昔曾て聞く。一田夫あり、聰明黠慧、諸の徒伴と共に來つて城に入る。時に、一人の容貌端正にして衣服を莊嚴し、種々の瓔珞もて服乘嚴麗し、多く侍從を將ゐ、悉く皆嚴飾瓌瑋なること觀るべきを見る。彼の聰明者、諸の行伴に語ぐらく。「好からず、好からず」と。同伴語げて言く。「此の如きの人、威德端正にして深く愛敬すべし、何の好からざるありや」と。聰明者言く。「我自ら好からず、亦彼を以て用て好からずと爲さず、我前身に功德を造らざるに由り、今者をして此の賤身を受けしむることを致せり、威勢あること無く、人の敬はざる所なり、若し先に福を修したらんに、豈でか當に此の如きの人に及ばざるべけんや、是の故に我今應に勤めて善を修すべし、必ず將來をして彼よりも勝るゝ有らしめん」と。卽ち偈を說いて言く。

彼は放逸を捨て　善を修めて福利を獲たり　我は放逸に由ての故に　功德の業を修めず』　是を以て今貧賤に　下劣にて威勢なし　我今自ら愧責す　故に自ら「好からず」と稱へき』　我今自ら觀察するに　窮賤極めて愍れむべく　結使に欺誑せられ　放逸に壞らる』　自ら今より以後　施と戒と禪定を勤修し　必ず將來の生をして　種姓好

【二〇】梵本缺失。

の如きの事を思量するに　心已に通達を得たり　其の利あるを見ず　純ら欲の衰患を見る』　是を以ての故に我今　宜しく應に欲を捨離すべし　僧坊に往詣して　復た還び出家を求めむ』　我今欲作を爲し　身苦極めて下賤なり　是の現在の身と雖も　即ち惡道に墮せるが如し』　我昔出家せる時　水を濾して而して後飮み　悲愍して他の命を護れり　傷害の心有るなし』　今日は惡鬼の　人の精血を食ふ者の如し　我今殺害を樂ひ　習として而も捨つる能はず』　善き哉や佛の說きたまふ所　「欲に親近すれば　惡として造らざるなし」と　我今欲の爲に使はれ　衰苦して乃し此に至れり』　一切種智の說きたまへる　四諦は我未だ證せず　今日より已去　終に更に放逸ならざらん』

十力尊の說きたまふ所　「前に放逸爲りし者　後止みて更に作さず　月の雲翳を離るゝ如く　明かに世間を照す」と　是の故に我今當に　專心として禁戒を持つべし』　設ひ頭上に火然え　衣服も亦焚燒せんも　我當に堅く精進して　調順の法を修行すべし』　伏し難き結使を斷じて　必ず寂滅を得しめん　假へ筋脈を毀絕し　形體皆枯乾するとも　四諦を見ずんば　我終に休息せず　先づ結使の怨を滅し　勝を得て施恩に報ゐん』

爾の時比丘、其の心を知り、彼の智慧の火の方に始めて然えんと欲するを念ひて、即ち偈を說いて言く。

汝今若し出家せば　必ず應に解脫を得べし　*迦梨と僧鉗と　及以び質多羅(Citra と』)

此の如き等の比丘　皆七返道を罷め　後復た還び出家して　阿羅漢を獲得したり』

十力世尊の戒は　汝も亦毀犯せず　汝邪見を起さず　汝多聞の智あり　厭離の善を生じ　寂靜の樂を修習す』　汝に多聞の燈あるも　結使の風に滅せらる　汝還び多

---

* 佛語。

* 佛語。

* 以下三比丘の名、梵本に缺いて不明。第三の質多羅は詳しくは Citra-hastiroha-putra といひ、還俗せることと中阿含二八經の支離彌黎經、增阿含四九品の第四經等に出づるも、正しく七返歸俗のことは巴利本生經（卷一、三一一頁）及び法句經註に出づ。

ず』　行は蟻子を傷ふを恐れ　慈は衆生を哀愍す　是の如き悲愍の心　今安くにか在
る所と爲すや』

凡夫の人は其の心定まらず、正に名けて沙門婆羅門の數と爲す可し。是の故に如來は【一七】標相を說きたまはず、若し見諦を得ば眞實に是れを名けて沙門及び婆羅門と爲したまへり。復た偈を說いて言く。

勇捍にして而も自ら稱して　謂く己れは眞に沙門なりと　此の不調心の爲に　忽ち斯の
大惡を作せり』

是の偈を說き已りて尋で即ち思惟すらく。「我今に於ては何の方便を作してか其れをして開悟せしめん、佛言に曰へるが如し、若し人に教へん時には先づ當に其れをして【一八】四不壞に於て淸淨の信を生ぜしむべし、此の四不壞は能く衆生をして四諦を見るを得しむ、今當に爲に作業の根本を說くべし」と。是の念を作し已りて而も之に語げて言く。「汝今に於ては極めて善く稱量せよ」と。時に賣肉者、是の念言を作さく。「此の比丘は既に肉を買はず、何の故に我に極めて善く稱量せよと語ぐるや」と。是の念を作し已りて即ち偈を說いて言く。

此れ必ず悲愍あらん　而して來り見て濟拔す　斯の如きの比丘は　久しく【一九】市易の法を
離る』　吾の惡業を作すを見て　故に來つて救度せんと欲す　實に是れ賢聖の人　我
が爲に利益をば作す』

是の偈を說き已り、昔者比丘爲りし時諸の行を造作せることを尋ね憶ひ、先に誦せる所の經の名を念じて曰く。「苦聚、欲過、欲味」と。此を思憶し已つて即ち肉秤を以て遠く地に投げ、生死中に於て深く厭患を生ぜり。彼の比丘に*語ぐらく、「大德よ、大德よ」と。而も偈を說いて言く。

欲味及び欲過　何者か最多と爲す　我れ慚愧の鞦を以て　智慧の秤を捉持せり』　此

【一七】標相を說かず。身の外面的裝を以て眞とせざること、即ち鬚髮剃除着服袈裟が必ずしも佛弟子ならずとなり。

【一八】四不壞。佛法僧の三寶、及び制戒に就て金剛の信を持つこと。

【一九】市易の法。賣買利害の考。

＊此の訓讀は梵本に從へり。

【二】三二、罷道賣肉比丘再び厭離發心する緣

復た次に、若し人學問して毀行に復ると雖も、學問の力を以て尋で能く道を得。是の義を以ての故に應に學問に勤むべし。

我昔曾て聞く。一多聞比丘ありて【三】阿練若處(Āraṇya-sthāna)に住す。時に寡婦あり、數々此の比丘の所に往來して其の說法を聽く。時に學問比丘此の寡婦に於て心染著を生じ、染著を以ての故に所有の善法漸々に劣弱す。凡夫心の結使の使役する所と爲り、此の婦女と共に言要を爲す。婦女言く。「汝今若し能く道を罷めて俗に還らば我當に相從ふべし」と。彼の時、比丘即便に道を罷めぬ。既に道を罷め已るに世間の苦惱に堪任する能はず、身體羸痩して生業を解せず、未だ少かに作きて而も大に財を得ることを知らず、即ち自ら思惟すらく。「我今に於ては何の方計をか作して生活を得んや」と。復た是の念を作さく。「唯だ羊を客殺せんに用て功極輕にして兼て多利を得んか」と。是の念を作し已りて是の處を求覓す。凡夫心の朽敗し易きを以ての故に斯の業を造作し、遂に屠兒と共に親友と爲りぬ。賣肉の時に於て一相識の乞食道人あり、道路上に於て偶値して見るを得、見已つて便ち識くに頭髮蓬亂し青色衣を著し身上に血あり、猶し【四】閻羅(Yama-rāja)の羅刹(Rakṣa)の如し。執る所の【五】肉秤は悉く血の爲に汚る。其の肉を秤りて人に賣與せんと欲するを見る。比丘見已りて即ち長歎息して是の思惟を作さく。「佛語は眞實なり、*凡夫の心は輕躁して停まらず、極めて廻轉し易し、先に此の人を見るに、學問を勤修し禁戒を護持す、何の意か今日忽ち斯の事を爲す」と。是の念を作し已りて即ち偈を說いて說く。

汝は調されざる馬の若し　放逸にして衆惡を造る　云何か慚と愧を離れ　【六】調伏の法を捨棄せる』
威儀及び進止は　人の樂見する所と爲す　飛鳥及び走獸も　之を覩て驚畏せ

【二】梵本、一一三葉終より一一四—五葉。
【三】阿練若。森林中の靜なる處をいひ、佛弟子修禪の場處の名。
【四】閻羅の羅刹。いはゆる地獄の獄卒のこと。
【五】肉秤。宋、元、明三本に作る、麗本「肉稱」。
*佛語。
【六】調伏の法。戒律のこと。

ひ　迦葉御足を禮して　是れ我が　婆伽婆（Bhagavān）　是れ我が佛世尊といへり』
佛迦葉に告げて曰く　若し阿羅漢に非ずして　而も汝の禮を受けんには　頭破れて七分と作らんと』　我今此の塔に因りて　佛語の眞實なるを驗ぜり』

此の如く、木石に心識あることなけれども、而も尼犍の爲に明證を作せり。驗知す、一切智に非ざることを」と。王是れを見已りて大衆の前に於て歡喜踊躍し、倍す信心を生じ容顏怡悅せり。而も是の言を作さく。「南無婆伽婆、一切の尊ぶ所、解脫の師たる、釋迦牟尼佛師子吼して言く。『*此の法の外に更に沙門及び婆羅門なし』と。佛語は眞實にして錯謬あるなし。諸有衆生——一足二足無足多足、有色無色有想無想、乃至非想非々想——此の衆中に於て唯だ如來有りて最も尊勝と爲すのみ。要を擧げて之を言はんに、佛の說きたまふ所の者は、今日皆現ぜり。一切の外道は草芥にも如かず、況んや復た尼犍師、富蘭那迦葉（Pūraṇa-kāśyapa）おや。卽ち偈を說いて言く。

我れは是れ人中の王なり　我が禮を受くるに堪へず　況んや復た轉輪王　阿修羅王等の禮おや　此の塔今日に於ては　大象王の　牙足の威力の爲に　摧破されて碎壞するが如し』　身に[九]四種の結を具せり　故に[一〇]尼揵陀（Nirgantha）と名く』　猶し大熱の時に　能く彼の熱を除く者をば　名けて　[一一]尼陀伽（Nidāgha）と爲すが如く如來佛世尊は能く一切の結を斷じたまへり　眞に是れ尼陀伽なり』　是れを以て今に於ては　尼犍の諸弟子　及び諸の餘の天人は　皆應に佛を供養すべし』　佛の種族と智慧と名稱とは甚だ廣大なり　此の如きの塔廟は　天と人と阿修羅の　若し其の禮敬する時傾動の相あるなし』　猶し蚊子の翅もて　須彌山を扇ぐが如し　其の勢力を盡すと雖も　動搖せしむる能はず』

是の故に若し人、福德を得んと欲せば、*宜しく應に佛の塔廟を禮拜すべし。

【七】婆伽婆。有德者の義、普通世尊と譯し、佛を敬稱する語。

＊ 佛語。

【八】富蘭那迦葉。尼犍子と共に六師外道の一人。

【九】四種結。不明なるも恐らく巴利長部沙門果經にいふ四戒のことを佛敎から貶稱したものであらう。而してこの四戒は漢譯では見えず、巴利にてもその內容を傳へない。

【一〇】尼犍陀の語義「無結」を利用した解釋。

【一一】尼陀伽。巴利語では暑熱の義とするも今は反對の意味に解せり。尼犍陀の敎にては衆生に煩熱ありて苦しむといふに對して、今は佛を眞の除熱者と呼んで彼に勝る所以を明せるもの。

＊ 大正藏「宜」に誤植す。

の力　厭道の所作爲らん』

王、偈を說き已り、塔の碎壞を以て心猶ほ驚怖す。而も是の言を作さく。「願はく此の變異もて災患と作す莫れ、當に吉祥と爲して、諸の衆生をして皆安穩を得しむべし、我昔より來た、五體を地に投じて百千の塔を禮するも、未だ曾て斷損して一塵も墮落せず、今は何の故の變異か是の如くなる、斯の如きの相は、我れ未だ曾て見ず」と。卽ち偈を說いて言く。

天と阿修羅（Asura）と　而も共に大戰鬪を爲し　爲に是の國の壞せんと欲するか　我が命も將て盡きざるか』　將に怨敵ありて　我が國を毀たんと欲するに非ざるか　穀貴[四]と刀兵あるに非ざるか　疾病あらざるや』　一切世間の　災患あらんと欲するに非ざるか　此は極めて是れ惡相なり　將た法の滅せんと欲するに非ざるか』

爾の時塔に近き村人、王の疑怪を見て卽便に王に向ひて是の如き言を作さく。「大王、當に知るべし、此れ佛塔には非ず」と。卽ち偈を說いて言く。

尼犍甚だ愚癡にして　邪見もて其の意を燒けり　斯は卽ち是れ彼れの塔なり　王の佛心もて禮を作すに　此の塔の德力薄く　又復た舍利[五](śarīra)なし　王の敬を受くるに堪へず　是の故に今碎壞す』

伽膩吒王、倍す佛法に於て信敬の心を生じ、身毛皆竪ち、悲喜雨淚す。而も偈を說いて言く。

此の事實に應に爾るべし　我れ佛の想を以て禮するに　此の塔必ず散壞せん　龍象の載重する所は　驢の堪ふる所に非ず』　佛は三種の人を說きて*　應に爲に塔廟を起すべしと　釋迦牛王尊　正に應に爲に塔を作るべし』　尼犍の邪道は滅びん　應に是の供養を受くべからず　不淨なる尼犍子　應に我が禮を受くべからず』　此の塔崩壞する時大音聲を出せり　喩ふるに多子塔[六]の如し　佛迦葉（Mahā-kaśyapa）の所に往きたま

【四】穀貴。飢饉のこと。

【五】舍利。身分と譯す。塔に奉祀する佛骨。

＊　佛說三種人。長阿含遊行經に出づ。佛、阿羅漢、轉輪聖王の三。

【六】多子塔(Bahuputra-caitya)。王舍城の城外にありし鬼神祠なり、大迦葉此に在りて佛に遭ひ、其の眞の師父なるを知つて出家入門せり、雜阿含卷四一の終經の記事今と一致する外、本行集經第四六、過去現在因果經第四、有部苾芻尼毘奈耶第一、大迦葉本經等に出づ。

卷の第六

三一、迦膩吒王尼犍陀の塔を拜せしにその塔の碎壞せし縁

復た次に實功德有らんに供養を受くるに堪え、實功德無ければ人の信心の供養を受くるに堪えず。

我昔曾て聞く。拘沙種(Kuṣana)の中に王あり、眞檀迦膩吒と名く。東天竺を討ち、既に平定し已つて威勢赫振福利具足す。本國に還向し其の中路に於て平博處あり、中に於て止宿す。爾の時彼の王心に愛樂する所は唯だ佛法を以て而も瓔珞と爲すのみ。卽ち息處に在つて遙かに一塔を見、以て佛塔と爲す。侍從千人もて塔所に往詣し、塔を去ること遠からず馬を下りて步進す。寶天冠を著けて其の首を嚴飾す。既に塔所に到り歸命頂禮して是の偈を說いて言く。

欲と諸の結の障りを離れ　一切智を具足し諸の仙聖中に於て　最上にして倫疋なし」
能く諸の衆生の爲に　不請の親友と作り　名稱世に普く聞え　三界の尊重する所」
三有を棄捨したまへる　如來の所說の法は　諸論の中の最上　諸の邪論を摧滅したまへり　我今　眞實の阿羅漢を歸命禮す」

爾の時彼の王、如來の功德を念ずるを以ての故に、稽首敬禮し、禮を作すの時に當りて塔卽ち碎壞す。猶し暴風に吹散せらるるが如し。爾の時彼の王、是の事を見已りて甚だ大いに驚き疑ふ。而も是の言を作さく。「今者此の塔觸近する者なきに云何か卒爾として事なきに散壞するや、斯の如き變異は必ず因緣あらん」と。卽ち偈を說いて言く。

帝釋と　長壽大(Dirg'āya)と　是の如きの尊重者も　合掌して佛塔を禮するに　都べて異相あるなし」
十力の大威德あり　尊重高勝の人なる　梵天の來つて敬禮するも　佛に亦異相なし」
我が身は彼よりも輕きに　應に我れを以て壞すべからず　是れ呪術

【一】梵本、百十一葉と百十三葉。

【二】拘沙。月氏の原語。支那の史書に見ゆる貴霜に同じ。

【三】長壽天。天人の長壽なるもの、色界にては無想天、無色界にては非想非々想處天を指すを常とす。

へて是の語を宣說す　今日より已去　諸の釋子等の　經常に我が後宮に入るを聽さん』
今日より信を體して　沙門釋子等の　自ら恣まに後宮に入るを聽さん　能く甘露の法を以て　女人の心を滿足なしたまへ』　女の心旣に寂靜なり　解脫處に趣く　是の故に常に應に　甚深の四諦の義を聽くべし』

て　而も復た善く調順し　諸の矜高を解脱すと雖も　然も復た鄙劣ならず』　說法久しく流布して　能く譏呵する者なし　四〇無害者の說きたまふ所は　種々にして差別多きも　然も諸の一切の人　能く其の過を說くなし』　言說は豐廣なりと雖も　厭患する者あるなし　所說は俗に同ずと雖も　而も理は世間を出づ』　四一善逝の說きたまふ所は文字として世に流布す　然も常に未曾有にて　化度恒に新異なり』　是の如きの妙言論は　合掌禮せざるなし　誰れか世尊の　善論する大師子なるを讚へざらん』　譬へば春夏の時に　陰と晴と皆物を益むが如し　佛語も亦是の如く　多種にして衆生を利む』　能く衆人の疑を去り　對治して能く宣釋し　能く三有を離れしめ　安穩の處を顯示す』　亦能く衆生をして　或は喜び或は驚き怖れしめ　亦能く　四二稱適せしめ亦能く悲感せしめ　亦能く利悅を得しむ』　滅結の說きたまふ所の法は　眞實に是れ神變なり　應に說くべき者は必ず說き　人の情意を惜まず　說きたまふ所剛麤なりと雖も然も法相に違はず』　最勝の智慧者は　大海水の　初中及び邊際に　一味に等同するが如し　佛法も亦是の如し　初中後皆善く　之を聽くに悉く清淨なり』　明智もて彼の語を聽くに　勇捍にして意滿足し　是の語を聽聞し已つて　外典籍を樂しまず』言辭悉く具足し　才辯甚だ美妙なり　亦自ら矜高ならず　說く所怯弱ならず』一切中の最勝にして　顯著せる義の具足するは　實に是れ一切智なり　外道の體義は少かにて　智を以て辭を莊嚴すれば　言辭極めて美妙なるも　然も義味あることなし諂僞邪媚の說なり』　世間の大愚闇よ　汝之の法炬を執りて　眞諦の處に入れかし己が舍宅に入るが如けん』　善逝の諸弟子　我能く擁護するを得ん　諸の大弟子等　善く諸根を調伏せり』　彼の說く所の弟子よ　我今言は深信に　諸の大衆の前に於て　稱

【四〇】無害者(ahimsaka)。佛の德名、佛は一切衆生を損ふなくして救ふの故に。
【四一】善逝(Sugata)。佛の德名、よく涅槃に趣く故に。
【四二】稱適。心にかなふこと。

今は覆藏せざるの時なり　我宜しく當に實を說くべし　已に須陀洹を證せり　應に歡喜心を生ずべし』　至心にして而も善く聽き　我今自ら法を見る　終に他に隨つて信ぜず心に疑網あるなし』　已に三惡趣を閉ぢ　生死に邊際を作す　我已に有の獄を離れ六十二見に於て　牢縛今已に解けたり　久しからず當に遠離すべく　甘露の城に趣向し　十力の坊に道かれん』　陰界及び諸入は　我悉く是の如く見ん　身を觀ずることは蛇篋の如く　陰は拔刀の賊の如く　欲は怨の詐り親しむ如く　諸根は空聚の如く六塵は破村の賊にて　陷下は之れ愛の河なりと　已に斯の如き事を悟りて　彼の安穩の處を求めん』

王、是れを聞き已つて佛法中に於て倍す敬心を生じ、而も是の言を作さく。「嗚呼佛法や、大力世尊は生死の道を厭ひたまへり、嗚呼佛法や、信向する有らんに皆解脫を得、何を以てか之を知る、女人の淺智なるすら尙ほ能く解悟すること、六師にも過ぐるの故に。我今 [三八]阿耨多羅（Anuttara） [三九]調御丈夫の坊處に向ひて歸依心を生ぜん、南無（Namaḥ）救一切衆生大悲者、甘露の法を開きたまひて男女長幼も等同に修行す」と。卽ち偈を說いて言く。

『若んぞ謂はんや女人の解を　名けて淺近者と爲すと　諸餘の深智の人も　敬ひ仰びて方に能く悟るを』　是の如き甚深の義は　智者の爲に敬はるゝ者なれ　乃ち是れ牟尼尊の最勝正導の說なり』　說く所の妙法　聞く者極めて欣樂し　專念にして而も心を攝め　能く不放逸ならしむ』　說く所は論ぜんが爲めならず　亦摧滅せんが爲ならざるも外道の諸の語言は　一切自ら破壞す』　嘗て自らを稱譽せざるも　名聞は世間に遍し　實の功德を說くと雖も　自ら稱譽すと名けず』　威德は熾盛にして　湛然として寂滅を具し　旣に一切智を具すと雖も　恃みて而も自ら高からず』　所作は勇健にし

【三八】阿耨多羅。無上。

【三九】調御丈夫（Puruṣa-damya-sārathiḥ）、佛は一切人天の剛强難化なるをもよく制御して善法に立たしむること、善御者の惡象馬を調ふるが如くなる故調御丈夫といはる。

る。時に此の伎女、是の事を見已つて手に自ら刀を執り、王の前に到つて五體を地に投げ、罪に伏して死を請ひ、復た偈を說いて言く。

『王制は極めて嚴峻なり　敢て違犯する者なし　我れ法を聽かんが爲めの故に　犯分を冒せり死を受けん』

我今法に渴して　冒突して僧所に至ること　春熱に渴ける牛の水を求めて杖を避けず　淸流の中に突入して　飮み足りて乃ち還歸するが如し』　大王よ應に當に知りたまふべし　佛法の聞値し難きは　譬へば優曇花(Udumbaram)の　値遇を得可き難きが如し』　『[三六]三界の大眞濟の　說きたまふ所の諸の妙法　我斯の說を聞くを得て　云何か欣樂せざらん』　其の說きたまふ所の法は　乃ち實に是れ燈炬なり　結を滅ぼす大鼓聲　天と人の橋津ぞかし　又聞解脫の鈴　歡喜娛樂の音なれや』　菩薩昔日に於て　苦行して法を勤求したまふ　身を巖に投じ及び肉を割き　以て無上道を求めたまへり』　既に得て人の爲に說きたまふ　甚だ値遇すべきこと難し　我斯の法に値ふを得ぬ　云何か聽受せざらん』　此の身は聚沫　芭蕉及び泡と焰との如く　四大の毒蛇纏擾す　今斯の法施の會は　聞値を得べきこと難し　何んぞ鄙穢の身を惜みて而も當に法を聽かざるべけんや』　而して此の危き幻の身は　復た能く進止し　顧視し諸の威儀あり　來去及び坐臥と　看示及び語言すと雖も　實には是れ衆生に非ず而も衆生の想を作せり』　種々諸の威儀は　一切皆幻の如し　久しからず當に散毀すべく　塚間に捨棄されては　死骸も木石と同じく　烏鳥の殘食する所　雨漬して腐貶せしむること　猶し[三七]泥人の毀壞するごとけん』

爾の時、彼の王斯の偈を聞き已つて而も之に告げて言く。「汝能く意を至して是の如き法をば聽けり、今何事をか證せる」と。妓女卽ち偈を說いて言く。

【三六】三界大眞濟。梵本には Trilokamahita(三界の尊)とあり、佛の異名。

【三七】泥人。泥人形。

彼の幻師の說く所の事の如し、眞實にして異る無し。時に諸の比丘、其の說くを聞き已つて皆見諦を得たり。是の故に當に知るべし、諸法は幻の如し、能く是れを知れば則便に能く諸行の源を斷つことを。

三〇、[三四]阿育王の宮女聽法して須陀洹を證する緣

復次に[三五]施と戒と及び論は、其の事淺近なり、善根熟すれば能く深法を樂ふ。

我昔嘗て聞く。阿育王あり、初めて信心を得、數ば衆僧を請じて宮に入れ、供養して日々に法を聽くに、帳幕を施張して諸の婦女を遮り、而して婦女等にも聽法せしむ。時に說法の比丘、諸の婦女の多く世樂に著するを以て、但だ爲に施戒の法を讃歎せり。時に一妓女あり、宿根淳熟す。王法の其の罪を分受するを避けずして卽便に幕を撥ねて比丘の所に到り、比丘に白して言さく。「佛の說きたまふ所は唯だ施と戒とあるのみなりや、更に餘ありや」と。比丘答へて言く。「姉妹よ、我意乃ち是の如き利根の人あるを謂はざるの故に、此の說を作せり、若し聽かんと欲さば當に更に汝が爲に諸の深法を說くべし」と。女人に告げて言く。「佛は一切世間の未だ聞かざる所の法を說きたまへり、謂はゆる四諦なり』と。卽ち女人の爲に分別して之を說けり。女人聞き已つて須陀洹道を得たり。爾の時女人、是の如きの言を作さく。「王法に違ふと雖も大いなる義利を得たり」と。卽ち偈を說いて言く。

四眞諦を說くを聞いて　法眼淨まりて垢なし　此の危脆の命を以て　佛法の堅命に貿ゆ』
假設し人王に於て　今來つて我を害さば　我れ慧命を得るを以て　終に悔恨の心なし』

時に諸の宮人、此の伎女の王法を干冒せるを見て心に戰懼を懷き、其の罪を同じうせんことを恐

【三四】　六本、百七、八、九葉及び百十一葉初部。

【三五】　施、戒、論……深法とは、次第說法と稱して佛が初心の人を敎化するに用ひたる敎化の順次なり、この中、施、戒、論（天界に生る法）とは通俗の人間欲を基本として說くものにして先づ之によつて佛の敎に興味を持たしめんとする手段（方便）に過ぎず、故に淺近と稱す、而してこの手段はやがて三界を厭離して涅槃を欣求せしむる前提たるが故に、善根熟すれば後に深法（四諦の法）を樂ふといへるなり。

我なるを知る」と。卽ち偈を說いて言く。
先づ彼の相貌を觀ずるに　像を想つて倒惑を起し　横さまに女の情想を生じて　欲の網羂に入る』『深く實に觀察すれば　身の都べて無我なるを知る　彼の善幻師の　木を以て女人を爲るが如し』『意に顚倒を行じて　愚かしくも衆生なりと謂爲ひ　此の幻僞の中に於て　妄りに男女の想を起せり』『智者は善く觀察すらく　[30]陰と界と及び諸入の緣りて假りに衆生を生ずるも　分々各別異なり　和合の衆分の故に　能く諸の業を作すも　[31]諸行に男女なく　亦壽命有る無し』『色欲及び　[32]細滑　威儀幷びに處所此の如きの四種欲　嬰愚の心を廻轉すと』『一切智亦說きたまはく*「幻僞は世間を欺く彼の幻網の中に　諸の色像を化作するが如く　生死の網も亦然り　五道の差別を現ず」と』『憂喜と瞋忿と　愁惱と及び鬪諍もて　彼の衆生の擾亂する如きは　猶し鬼の身を遍くする如し』『心の諸の作業を起すは　彼の鬼と同じくして異ることなし　心より風を起し　風に因つて作業を造る』『此の業行の中に於て　威儀形色を起すを其の容止を解せずして　便ち横さまに我の想を計するなり』『此の身を機關と名く　脂と髓と皮と肉と髮などの　三十六物等　和合して以て身と爲る』『愚者は衆生なりと計するも　而も實には宰主なし　但だ風力を以ての故に　俯仰し而して屈伸す』『心に依るを以ての故に　則ち能く　[33]五識を起す　然るに此の心識は　念々に皆遷滅す』『愚者は癡覺を起して　計すらく、此身に我あり　口業に若干種あり　身業も亦復た然りと』『されど言笑と及び威儀と　皆幻の所作の如し　此の中に我あること無し　宰主を離るゝを用ての故に』『而も斯の虛僞の法は　壽なく知見なきに　妄りに想の像を起して　諸の凡夫に陷沒せり』

【三〇】陰界入。五陰（色・受・想・行・識）、十八界（次の十二入と眼・耳・鼻・舌・身・意の六識）、及び十二入（眼・耳・鼻・舌・身・意の六根を六內入とし、色・聲・香・味・觸・法の六境を六外入とす）となり。
【三一】諸行（Sarva-saṃskāra）。すべての生命現象、卽ち業に同じ、分てば身口意三行（業）となる。
【三二】細滑。肉體の軟部に接觸して起る快感。
＊佛語。
【三三】五識。眼耳鼻舌身の五識は意識（心）を本とす。

二九、幻師幻女と欲事を作すを現じて諸法の如幻なるを説く縁

復た次に、譬へば[二七]幻師の如し。此の陰身を以て種々の戲を作し、能く智者をして見て卽ち解悟せしむ。

我昔嘗て聞く。一幻師あり、信樂の心あり、耆闍山に至り僧の爲に食を設け供養已に訖りぬ。幻師[二八]尸陀羅木(Saivāla-latā)にて一女人を作る、端正奇特なり。大衆の前に於て此の女を抱捉し而も之に嗚唼し共に欲事を爲す。時に諸の比丘此事を見已つて咸な皆嫌忿し而も是の言を作す。「此の無慚人の所爲鄙褻なり、其の是の如くなるを知つて其の供養を受けず」と。時に彼の幻師既に欲を行じ已つて諸の比丘の譏呵嫌責するを聞き、卽便に刀を以て是の女を斫り刺し、支節を分解し目を挑り鼻を截ち、種々に苦毒して而も此の女を殺す。諸の比丘等又此の事を見て倍す復た嫌忿すらく。「我等若し汝の是の如くなるを知るべくんば、寧ろ毒藥を飲むとも其の供養を受けず」と。時に彼の幻師而も是の言を作さく。「爾り衆の比丘よ、我の行欲するを見て便ち瞋忿を致し、我の斷欲して彼の女人を殺すを見て又嫌責を致せり、我當に云何か衆僧に奉事すべけんや」と。時に諸比丘、其の是の如くなるを見て紛紜として稱說し擾動して安からず。爾の時幻師卽ち尸陀羅木を捉つて用て衆僧に示し、合掌して白して言さく。「我向に作す所は是れ此の木なり、彼の木中に於て何の欲と殺とあらん、我れ衆僧の身を安んぜんと欲するの故に是の飮食を設け、衆僧の心をして安を得しめんと欲するの故に此の幻を作すのみ、願はくは諸の比丘よ、我が所說を聽したまへ、豈に聞かざるべけんや、佛*修多羅の中に於て說きたまはく、『一切法は猶し幻化の如し』と、我今彼の語を成ぜんと欲する爲の故に、故に斯の幻を作せり、斯の如き幻身に壽なく命なし、[二九]識の幻師機關を運轉し、其れをして視眴俯仰顧眄行步進止或語或笑せしむ、此の事を以ての故に深く此身の眞實に無

【二七】幻師(Māyākāra)。手品師のこと。

【二八】尸陀羅木。梵本に Śo-vāla-latī, Śaivāla-latī の二様に出づ、後者は正形なり。Śaivāla は八雄蘂の蘚苔類、latā は蔓草なるも此に木と譯せるものならん。

* 佛語。

【二九】識之幻師。一切の人事は心によつて作らるるを喩ふ。

隨順の語を生ず。

我昔曾て聞く。一人あり、其の家中に於て客會を施設し、多く花鬘を作りて以て集會に與ふ。衆人鬘を得て皆頂上に戴く。一賢者あり、極めて貧悴と爲す。客會中に詣り、次で花鬘を得るも頭上に著けず、以て傍邊に置く。衆人皆言く。「此の人貧窮にして此の鬘を賣らんと欲し是れを以て著けず」と。時に優婆塞是の語を聞き已つて答へて言く。「實に爾り、我若し賣るの時極めて貴價を得、然る後に當に與ふべし」と。即ち偈を說いて言く。

昔日の　須鬘[二二](Sumati)の如し　本曾て一花を賣りて　九十一劫の中に　天上に快樂を受けつ　今日　最後の身にて[二三]　涅槃の樂を得たり』　また　放牛女[二四](Gopika)に如似たり　臭惡の草花――　衆人の喜ばざる所を以て　女人此の花を賣つて　忉利天に生ずるを得たり』　彼女の賣る所の如く　我今佛に向はんと欲して　亦此の花を賣らんと欲す』　能く是の如き心を發すは　希有にして極めて値ひ難し　此の如く花を賣る者　三界の中に比るなし』

爾の時諸人、優婆塞に問はく。「誰か能く少かに施して大いなる福報を得るや」。時に優婆塞衆人に語げて言く。「今當に汝の爲に善堅の法を說くべし、花鬘萎乾すれば便即に棄捨せん、佛の王位を捨つること萎花を棄つるが如し」と。即ち偈を說いて言く。

佛の轉輪位を捨つること　萎びたる花鬘を棄つるが如し　七覺[二五]もて其の心を嚴り　清淨にして垢穢なし』　莊嚴悉く已に備はる　安んぞ此の花を用て爲ん　但だ我れ專精の心もて　鬘を以て佛塔に施すのみ』　今我れ賣りて佛に上る　世間に倫疋なき　是の如き[二六]法の商主に　終に貧窮の時なし』　此の賣るゝとは最も勝と爲す　名稱に功德あり　我今此の花を持して　以て塔に供養せんと欲す』

【二二】須鬘。儒童子に花を賣りたる女、然燈佛本生に出づ。

【二三】最後身。これを迷の最後とせる受生。

【二四】放牛女。釋種の姬、長阿十四經釋提桓因問經、中阿一三四經釋問經、等にその故事出づるも、古傳は共に賣花のことをいはず。

【二五】七覺(Sapta-bodhyaṅgāni)。擇法・精進・喜・輕安・念・定・捨の七覺支、雜阿含卷二十六、七等に詳說さる。

【二六】法商主。佛を隊商の主に喩へしもの。弟子及び信者を從へて涅槃への道を步む人として。

失ひぬ』　日の如く沒せんと欲するに臨みて　信心もて禮敬を致す　又此の半果を以て
用て衆僧に奉施し　以て無常の相を表はし　豪貴の遷動するを示さん』

爾の時諸の上座、是の偈を聞き已つて慘惻して樂します、悲愍の心を生じて其の半果を受け、以て大衆に示して而も是の言を作さく。「我等今厭離の心を生ずべし、佛婆伽婆(Bhagavan)は修多羅に於て、是の如きの說を作したまへり、*他の衰滅するを見ば應に當に深心もて厭離を生ずべし」と。諸の有心者は此の如きの事を見て、誰か憐愍して厭患の心を生ぜざらん。卽ち偈を說いて言く。

勇猛にして能く施す者　諸王中の最勝　[三〇]牟梨(Mrga ?)中の大衆　名けて阿輸伽と曰ふ』
富みて閻浮提を有し　一切皆自由なるに　今諸の群臣の爲に　遮制して自ら從はず
一切皆制止して　唯だ半菴摩勒のみありて　此れに於て自在を得　用て衆僧に施す』
富有極めて廣大に　一切に自在を得て　自高の心を生ぜるも　今日は安所にかある』
凡愚應に此を觀るべし　速かに疾く心を改易せよ　富利は都て敗失して　唯だ此の半果のみあり
諸の比丘僧をして　皆厭患の心を生ぜしむ』

時に僧上座言く。「此の半果を末にして僧羹中に著け、而して是の言を作せ、こはこれ大檀越阿育王の最後の供養なりと」。

何の故に、此の一切の財富は悉く堅牢ならずと說くや。是れを以ての故に佛婆伽婆說きたまはく。「不堅の財を堅財に易へ、不堅の身を堅身に易へ、不堅の命を堅命に易へよ」と。檀越應に歡喜を生ずべし。不堅の財を以て己を隨逐して後世に至る。宜しく常に施を修むべし、斷絕せしむること莫れ。

二八、[三一]貧優婆塞賣花の故事を說く緣

復た次に、凡愚の人、若し彼の賢人を輕毀するとも、賢人終に瞋恚を生ぜず。他の毀罵を得て却て

* 佛語。中阿含第六四天使經參照。

【三〇】牟梨。らく mrga の音略なるべし、鹿の通稱なるも亦獸類の總稱にも用ひらる、邦語のシシに同じ、食獸の通稱たりし關係ならん。今は「獸」の義と解すべし。

【三一】梵篋斷簡、第百五葉。

爾の時阿育王、剃髪時過ぎて垢膩衣を著くるに、參差して整はず、羸瘦戰掉し喘息麤かに上る。如來の涅槃したまへる方處に向ひて自らの力もて合掌し、佛の功德を憶ひて悌涙交も流れ、而も偈を說いて言く。

今合掌して佛に向ひたてまつる　是れ我が最後の時なり　*佛は三不堅を　堅法に貿易すと說きたまへり』　我今合指掌して　用て堅牢の法に易ゆること　石山を融して　眞金を求取するに如似たり』　不堅の財物の中に　日夜堅法を取りたり　我今餘の福利は　持ちて用つて最上に奉らん』　今我が此の福業は　帝釋の處　及與び梵天の果報を求めず　況んや復た閻浮の王をや』　此の布施の果　及び恭敬信の向を以て　願はく心の自在を得て　能く割截する者なく　聖淨無垢を得て　永く衆の苦患を離れん』

阿輸伽王、半菴摩勒を以て衆僧に捨施す。一親近を喚んで而も之に語げて言く。「汝頗し我れの先の蓄養を憶ゆるや不や、我が今者の最後の敎を取れよ、此の半果を持して雞頭末寺（Kurkuṭārāma）の衆僧に奉り我が名字を稱へて白せ、阿輸伽王最後に比丘僧の足を頂禮すと。我が辭の如く曰へ、閻浮提に於て自在を得る者、果報衰敗して自在力を失ひ、唯だ半果に於て而も自在を得るのみ、願はくは僧よ、憐愍して我が最後の半果の供養を受けて、我をして來世に報の廣大なるを得せしめたまへ、願はくは餘人等をして、我の如く最後の時に於て自在を得ざらしむること莫れ」と。爾の時侍人卽ち王命を奉け、此の半果を齎して僧坊中に詣り、一切の僧を集めて僧の足に禮し、已つて叉手合掌して衆僧に白して言さく。「阿輸伽王衆僧の足を禮す」と。是の語を作し已つて涕泣して目を盈らせ、哽噎して氣塞がる。此の半果を持して衆僧に示し已つて卽ち偈を說いて言く。

一蓋もて天地を覆ひ　率土に言敎行はる　譬へば日の中する時に　遍く大地を炙るが如し』　福業旣に已に消え　崩落忽ちに來至す　業の爲に欺弄せられ　敗壞して榮貴を

＊佛語、增一阿含卷十二、第十經（三不牢要）に出づ。

從せざるなし』　設い違教者あらんに　我悉く能く摧伏し　諸の苦難ある者　安慰して之を救濟しぬ　病苦及び貧窮の　療治せざる者なし』　我今福德盡きて　貧窮忽然として至りぬ　困厄すること乃ち斯の如し　我は是れ阿育王なり　云何か此の苦に遭ふや』　阿輸伽樹（Aśoka）の　根を斫りて斷絶せしめ　花葉及び枝莖の　一切皆萎乾するが如く　我も今亦是の如し』

富貴は幻化にして久しく停まるを得ず、傍らの醫を顧見して而も是の言を作さく。「咄、惡賤すべし、富貴の暫有なること猶し電光の如く焰の速かに滅するが如く、又象の耳の動搖して停まらざるが如く、亦蛇の舌の鼓動して息まざるが如く、又朝露の日に見えて則ち乾くが如し、曾て他より是の如きの偈を說くを聞けり。

富貴の利は止まり難く　輕躁にして暫くも停らず　智者は應に善知すべし　憍放逸を得るなきを』　此の身及び後世に　宜しく當に自利を求むべし　若し富貴を得れば　復た慳みて守護すと雖も　百方に皆毀敗せん』　富貴は猶ほ行に在り　蛇行の直からざるが如し　若し能く觀察すれば　其の强健の時に於て　宜しく速かに福德を作すべし』

若し復た病苦に遭はゞ　心に應に修福すべし　必ずしも形骸に在らず』　其の家の親屬等の　若し必ず死するを知らば　已れに財物ありと雖も　自在に施すを得ず　利に安んじ錢財を獲て　福田の處に值遇せば　便ち速かに施與すべし』　若し身の强健なると　及び已れの病苦する時とに於て　宜しく常に布施を修むべし　等しくて別異あるなし』　然るに此の諸の財物は　唯だ過患あるのみ　若し死に臨むの時に當れば　親戚及び婦兒は　是已れの財物なりと雖も　若し用て惠施せんと欲せんに　護遮して肯て與へず　[19]危惙は須臾に在り　所願は自由ならず』

【一九】危惙。命危きこと。

我昔曾て聞く。法王阿育、身に重患に遇い、諸の財物を得て盡く用て僧に施しき。又諸臣より種々の寶を索む。時に諸臣等、肯て復た與へず、唯だ半ばの菴摩勒（āmalaka）を得たるのみ。以て僧に奉ぜんと欲し、便ちに臣相を集めて而も之に告げて言く。「卽ち今日に於て誰か王たる者ぞ、誰の言教か行はるゝ」と、諸臣答へて言く。「唯だ大王ありて威德の領する所閻浮提（Jambu-dvipa）に遍く、言教行ふを得るのみ」と。王偈を說いて言く。

汝我を稱して王と爲すも　敎令行ふを得るとせば　將て我が意に順ふ　故に是の如き說を作せり』　汝等の斯の言を作すは　悉く皆是れ妄語なり　我が言教は已に壞れぬ　一切自由ならず　唯だ此の半果ありて　中に於て自在を得るのみ』　富貴は是凡鄙なり　咄なる哉呵責すべし　譬えば山頂の河の如し　瀑すること疾くして　暫くも停まらず』　吾れ人帝と爲ると雖も　貧窮忽ちにして我に至れり　貧窮は世の畏るゝ所　而も速疾に我が所に至りぬ』

是の偈を說き已りて又復た世尊の說きたまふ所の眞實にして虛しからざるを讚歎し、復た偈を說いて言く。

富貴熾盛なりと雖も　會ず必ず衰滅あり　富貴は人に希み樂はれ　衰滅は世に憎惡さる　此の言虛妄ならず　瞿曇（Gautama）の說きたまふ所なり』　我れ往にし日の時に於て　設ひ諸の言教あらんに　心に念じて而して發言せんに　言必ず墜落せず』　鬼神も命を奉承して　四海の内に遍し　聞く者咸な受用して　違逆する者あるなし』　河の大山を衝かんに　激水還つて迴流するが如し　衰敗すること大山の如くにて　吾を遮つて都て行はれず』　我昔言教するあらんに　敢て逆ある者なく　未だ曾て姦惡あらず　怨讎も拒違せらる』　大地を覆蓋して　能く違逆する者なし　男女と大小と　敢て撽

【一八】瞿曇。釋尊の俗姓。

思惟し、憶持して忘れず讀誦通利す。時に王人を遣はして其の繫縛を解けり。所親、知識、眷屬、將從、其の脫るゝを得たるを悅んで皆來り問訊す。時に縛せられし者卽ち偈を說いて言く。

汝我の縛の解かれしを見て　慰問して歡喜を生ぜり　凡夫愚癡者は　常縛あるも未だ曾て解かず』　色は凡夫を縛す　五陰は悉く羈繫なり　生は能く物を縛し　死の縛も亦復た然り』　今身は後世に至るも　未だ始めて繫縛されざるにあらず　羈縛の中を輪廻して　數々生死を受く』　我れ彼の師の所に從つて　是の如きの言を說くをば聞けり　此の語は我が耳もて聞けり　*一切種智の說かく　一切諸の結使の　我が心を繫縛すること　牛の軛に縛せらるゝが如しと』　我に斯の如きの縛あり　中に於て未だ解脫せず　云何か汝等の輩にして　我を縛より解けりといふや』　汝等我が所に於て　若し實に愛念あらば　當に爲に王に啓せらるべし　我をして出家するを得しめよと』　正見の跡の在前すると　寂滅の彼岸と　若し是の如き事を獲ば　乃ち解脫と名くべし』　若し出家するを得ば　便ちに是れを離縛と爲し　眞實に解脫を得ん』

爾の時眷屬是の語を聞き已つて王に啓白す。彼れ便ちに出家するを得、既に出家し已つて精勤修道し、阿羅漢を得たり。

而り彼の罪人は僧坊に閉繫して以て法を聽くの故に、尙ほ解脫を得たり。況んや故らに法を聽くをや。是の故に行人は塔寺の所に於て宜しく往いて法を聽くべし。

二七、[一七]阿育王衆僧に半果を施す緣

復た次に、病苦の篤き時に言教は行はれず、漫りに強健を現ぜんや、作すべき所の事は、宜しく應に速かに作すべし。

＊　佛語。

【一七】　梵本斷簡、第一〇三葉及第一〇四葉初部。本章 Divyâ=vadāna p. 430 ff. 阿育王傳卷三、阿育王經卷四、雜阿含卷二十五の內に存す。

ば臨終に　歡樂にして悔恨なし』　慳嫉は智者の譏り　施者は貧なるも富なるも　恒に常に快樂を受けん』　慳者は塚間の如し　人皆避けて遠離す　慳貪者は存すと雖も其の實餓鬼に同じ』　施者には名稱あり　一切の欽仰する所　智者の愛する所にて命終つて天上に生ぜん』　[一二]諸有已れを愛すれば　云何か施を修めざる　施は善好の伴爲り　勝妙之資糧にして　車馬乘を用ゐざるも　一切の衆侍衞せり』　施は行の寶藏たり　後世を渡るの津梁と爲す　布施は衆難を離れ　五家も侵す能はず　何でか已れを愛する者ありて　而も當に施を修めざるべけんや』　若し施すこと百千萬にして　後身に得ること少許なりとも　倘ほ應に布施を修すべし　況んや少かに惠施を修めて　大いに福報を獲るをや　是の故に有智者は　應に當に布施を修むべし』

二六、[一三]德叉尸羅の人僧坊に繫閉されて聽法し解脫を得る緣

復た次に、若し正說を聞かば能く縛を解かん。

我昔曾て聞く。德叉尸羅國（Takṣaśilā）に有罪の人ありて僧坊の中に閉づ。其の夜中に於て衆僧說法す。其の閉ぢらるる者、來つて僧中に至り、次に坐して法を聽く。一比丘あり、[一四]生死逆順の經を說く。說言すらく。「佛諸比丘に告げたまはく、凡愚の人法を聞かざる者は色を知らず、[一五]色習を知らず、色味を知らず、色過患を知らず、[一六]色出要を知らず、色の脈を知らず、一切衆生は如實に是の如きの過患を知らず。若し色に縛せらるれば是れを眞縛と名く。何をか色縛と謂ふや、端正を視見する、是れを色縛と名く。色に縛せらるれば內盡く縛せらる。而して此の色とは生死の中に於て其の根を知らず、生死の大河に濟渡する處なし、生死の出要を知らず、生死の中に於て諸の繫縛を被り、此の身縛に從つて乃し後身に至る」と。時に閉ぢらるゝ者、是の法を說くを聞いて其の義を

【一二】諸有。すべての迷執されたる存在、迷の世。三有、又は二十五有界等に分たる。

【一三】梵本、紙本斷簡第八葉。本章の首部に相當す。

【一四】生死逆順經。梵本には……ankrānti-sūtram とあり、雜阿含卷三・二四經(往詣)に一致し、同巴利本とは稍異る。

【一五】色習(rūpa-samudaya)。色の原因、習は集諦の集に同じ。

【一六】色出要。色の過患を離るる道。

王、是の語を聞いて心に歡喜を生じ、讃言すらく。「汝は是れ福勝の人なり、我今汝の所有の物を用いざらん、汝の說く所の如し、施は是れ汝の財なり、餘財は悉く五家共有の物なり」と。爾の時國王、卽ち偈を說いて言く。

若し惠施を行ぜんとせば　自ら手にして而も遇れて與へよ　應に歡喜心をば發すべし　悔恨の想を生ずる勿れ　是の故に未來の世には　人天となりて快樂を受けん』　所有資財物と　眼見する己れの財寶は　分散して諸家に屬し　速疾に施す能はず　能く侵奪する者なし』　若し人慳みて施さざれば　終に他の爲に奪はれん　現在には惡名聞え　來生には多く貧乏ならん　是れを最愚癡と爲す』　他人の屋宅　及以び衆の財寶を見るに　死して後衆家用ゐて　毫釐も己れを逐はず』　目に此の如き事を覩るも　厭惡を生ずる能はず　速疾に財物を捨てよ　財は五家に共ならず』　唯だ惠施を修むる有るのみ　死時には一切捨てゝ　己れに隨ふ者あるなく　決定して必ず捨離せん』　然れども施の報を得ざれ　是の事を見るを以ての故に　智者は必ず應に施すべし　二事俱に施と名く』　應に當に自ら施與すべし　檀越は大象の如し　津膩の香は常に流る　是の如き智と檀越は　功德利充滿して　世人の讃歎する所なり』　饒財なるも慳みて施さざれば　世の爲に嗤笑せらる　設ひ復た財錢ありとも　乞ふを見て方に背去せば　復た財寶に饒かなりと雖も　名けて貧衰の患と名く』　施す者は貧窮なりと雖も　常に有財富と名け　慳貪なれば多財なりと雖も　貧衰の患を脫れず』　檀越は水を以て施すも　心の貪垢を洗除す　慳には善樂の報なくして　死の徑路に趣き　必ず深坑の穽に墜ちなん』　種々衆の寶物と　象馬と牛羊とは　神逝き氣絕ゆるの時　一切悉く捨去し　臨終に苦惱を生ぜん　是れを以て眷戀を生じ　怖畏に大熱惱す』　施を修むれ

つて醍醐を求む　勞すと雖も永く得難し』

復た次に、夫れ施を修むれば當に八危を離るべし。若し財寶を積まんに危難甚だ多し。智人は施を修むること、是れ乃ち堅牢なり。

二五、[九]一商賈所施を牒して己財と稱し國王より讃へらるゝ緣

我昔曾て聞く。一國王あり、商賈を謫罸して而して之に告げて言く。「汝の有する所の財を[一〇]悉疏して我に示せ」と。估客家に至り、先來より施す所の物を思惟し、諸の乞兒に施せる一飡の食より乃至幷びに鳥獸に施せる所有穀草までを悉疏して王に示せり。王是れを見已つて問ひて言く。「此の如きの事、何の故に疏して來るや」と。估客答へて言く。「王先に約して所有財物を悉疏して我に示せと勅せり、我が有する所の財の疏牒は是れなり」と。卽ち偈を說いて言く。

[一一]五家共に有する者　今悉く家中に在り　我の今牒する所は　能く侵奪するあるなし』

此の如き所牒は　王と賊及び水と火の　皆能く侵さざる所　假設七日の出でて　須彌及び巨海も　一切悉く融消せんとも　此の如き所施の物は　一毫たりとも燒く能はず』　錢財を父母　兄弟及び姉妹　一切諸の親友に寄せて　悉く皆敗失する有りとも

唯だ所施の物のみありて　終に敗衰すべからず』　施は行の寶藏爲り　世世恒に人に隨ふ　施を極親友と爲す　能く壞る者あるなし』　貧窮の巨海は　極めて大いに怖畏すべし　施は是れ堅牢なる船　唯だ惠施者のみありて　能く彼岸に度るを得』　我れ施の果報を知れり　是の故に畏無くして說かく　牒する所は是れ我が財なり　家中に財寶ありとも　五家の共にする所と』　是の故に敢て牒して　是れを我が所有なりとは言はず』

【九】此分、梵本缺失。

【一〇】悉疏、細かに箇條書にすること。

【一一】五家の共有。以下の偈意は、家門の財は父母、兄弟、姉妹、一切親族、眷屬等五家の共有財なるも、我によつて行はれたる施のみは、眞に自己の財にして五家も別たず盜火王水等の八危も奪はずとなり。

讃言すらく。「善き哉善き哉、慧命や、汝今に於ては始めて[八]天道に在り」と。卽ち偈を說いて言く。

佛の語に、天道　及以び解脫の道に至ると　此の語決定して至り　中間に終に錯なし』　一切智の道を說きたまふや　廣略の別相あり　無害の實語等あり　施あり及び諸根を伏す』　是の道と天道と　斯れ諸の苦行して　淵に投じ火に赴く等の之れ能く獲得する所に非ず　此れ死の緣を作すべく　天解脫の因に非ず』　往古人の壽長く諸仙の壽も亦長かりき　此の身を厭患する故に　久しく世に住まるを欲せず』　先に諸の禪定を習ひ、欲界の結を斷じて　自ら是の身を捨てんに　必ず梵天に生ぜんことを知りき』　而も喪命を得るに由なく　淵に投じ而して火に赴き　此に由つて命を喪ふの故に　梵天の中に生ずるを得たり』　禪定もて結を斷ずるの故に　而も梵天に生ずるを得　巖火に投ずるに由らずして　天上に生ずるを得』　彼れに同伴の仙あり　天眼を以て　此に死して何處に生ずるやを觀察し　梵天中に生ずるを見たり』　先には淵に投じて死せるを見て　此れを生天なりと謂以へり　餘者は愚かにも見ずして　淵と火とに投じて　梵天上に生ずるを得ると謂爲へり　是の故に倒見を生ず』　諸餘の婆羅門は愚癡にして智慧なし　禪定を修し　諸の結使を斷除するを觀ぜず　但だ淵と火とに投ずるのみ視て　天上に生ずるを得と謂ふ』　是の倒惑に由るの故に　遂に諸の經論を生じ　愚者皆信受して　淵に投じ而して火に赴く』　智人は善く觀察して　捨棄して而も爲さず　諸の善法を修行して　以て天道の因と爲す』　淵に投じ火に赴く等は　是れ善法を修して　死緣を脫するを得べきに非ず　亦生天の因に非ず』　身心佛法に依る是れを寂滅道と名く　是を用て外道の爲は　果なく徒らに苦を受くるのみ　水を鑽

【七】慧命。智慧の命、普通に法身の異名とすれど、此には單に智慧の力を呼びたるものと見るべし。
【八】天道を物的存在と見るは外道の迷信とす、佛法には是れを止揚して精神上の價値的存在となす。

羅門等は但だ錢財の爲に會所に來至せるのみなればなり。時に聚落主、婆羅門の火に入るを欲せざるを見て、卽ち偈を說いて言く。

聞く所の如くんば上天せば　衆樂計るべからずと　物に觸れて貪著を生じ　東を視ては而も西を忘る』　其の家に有する所の　一切衆樂の具を計つて　方に天上に比せんに猶し芥子を以て　以て太山に方らんとするが如し』　若し其れ必ず少欲なれば　而も貪著する者なからん　我今汝を觀察するに　貪欲は熾火より劇し　若し婦女を用ひずんば　云何か醜老妻を看守する　而も此の會に來至して　錢財を貪求し　用て其の家に供給せり』　若し其の子を愛戀して　生天を欲せずとせば　彼の生天の力を計るは足りて汝の子を護るに過ぎん』　若し天道を知らずとせば　何の故に我をして往かしむる設し天道を知るとせば　何の故に格みて去かざる』　云何か憙んで人に教へて　我をして火に投ぜしめんと欲し　或は我が財物を貪つて　取用を得分せんと欲する』　云何か悲愍無くして　苦酷なること乃し是の如きや　或は是れ先生の怨ならんか　必ず是れ大欺誑ならむ』　死の典に伴黨を作し　勸めて我をして生天せしめ　我に勸獎して死なしめ　我を强逼して火に入る』　人に敎へて家居を遠ざかり　苦行法を修め　淵に投じ及び火に赴き　自ら餓え亦食を斷てり』　其の敎の旨意を觀るに　門を斷絕せんと欲せり　斯の諸の婆羅門は　樂つて殺害の事を爲すなり』　是の故に我捨離して　當に佛法に入るべし　佛法は大慈悲にて　終に物を傷害せず』　大火山野を焚きて　麋鹿皆避走す　其の性命を愛するに由つて　淸凉の處を求覓す　我今亦應に爾るべし　歸誠して救護を求めん』

爾の時比丘、婆迦利の心の旣に諸の婆羅門を厭患せるを見て、三寶の處に於て深く信敬を生じ、

生ずることを得。

我昔曾て聞く。*婆迦利の人あり、中天竺に至る。時に天竺國王、卽ち彼の人を用ひて聚落主と爲す。時に聚落中の多くの諸婆羅門の親近する者あり、聚落主の爲に【五】羅摩延書(Rāmāyaṇa)又、【六】婆羅他書(Mahābhārata)を說き、陣戰死者命終して天に生れ、投火死者も亦天上に生ずと說き、又天上の種々の快樂を說くこと、辭章巧妙なり。而も是の說を作さく。「聚落主の心意をして駭動せしめ、必ず有是と謂はしめん」と。卽ち火坑を作り、香薪積を聚めて婆羅門會を作す。諸人雲集して會所に來至す。時に聚落主、將に火に投ぜんと欲す。此の聚落主、一釋種比丘と先に共に相識る。爾の時比丘其の家に來至し、聚落主の其の家中に種々莊嚴せるを見て、比丘問ひて言く。「何等を作さんと欲するか」。聚落主言く。「我れ天に生れんと欲す」。比丘問ひて言く。「汝云何して去く」。尋で卽ち答へて言く。「我れ火坑に投じて便ちに生天を得ん。」比丘問ひて言く。「汝頗し天道を知るや不や」。答へて言く。「知らず」。比丘問ひて言く。「汝若し知らずば云何してか去くを得る、汝今行く時には一聚落より一聚落に至るすら、尙ほ引導を須ゐて而も途路を知る、況して彼の天上の道路は長遠なり、忉利天(Trayastriṁśa)上は此を去ること三百三十六萬里なるに、人の引導する無くして何に由つてか能く彼の天上に至るを得るや、若し天上樂しとならば、彼の上座婆羅門、年旣に老大に財物に貧し、其の婦又老いて面首醜惡なり、何の所をか愛樂せんや、何ぞ將ゐ去つて天上に向はざる」と。時に彼の聚落主、旣に語るを聞き已つて是の思惟を作さく。「若し火坑に投じて生天を得とせば、彼の婆羅門應に我と共に去るべし、所以は何ん、彼の婆羅門貧窮困苦して愛戀すべきなし、應に當に苦を捨てて彼の天樂に就くべければなり、若し其れ去らざれば徒らに欺誑を作して我を殺さんと欲するのみ」と。是の念を作し已つて卽便に前みて上座婆羅門の手を捉へ、共に火に投じて俱に天上に向はんと欲す。時に婆羅門、捨めて去くを肯んぜず。何を以ての故に、婆

* 婆迦利、後文に照すに人名なりや地名なりや不明。

【五】【六】羅摩延、婆羅他の兩書は古代印度の史實を詩化したる兩大文學である。

に　功德を吸ふ夜叉を驅遣し　諸見の羅刹を除く　惑の盜を以て瓮と爲し　身見の水盈滿するを　今は已に破壞し　癡の乳牛は奔走して　無明の靮を挽絕せり』　向に見る所の如きは　悉く我が身中に在り　諸の色は猶し鏡の如く　影像中に在つて現ず』

無始の生死の中に　未だ曾て斯の事を見ず　我今汝に因つて　始めて四聖諦を見る』

今善知識に値ふ　緣會るの故に相遇して　我が心の貪恚を除き　我が家中の鬼を去る』　世間に久しく已に傳はる　四圍陀(Veda)の說く所は　應に大祀を作すべし　種々の物を莊嚴して　備さに祀場の上に具へ　恒河(Gaṅgā)等の[二]大濟に　洗浴して罪過を除き　速疾に生天を得るとなり』　我昔より來た修行すれど　未だ曾て果報を得ず

然るに我未だ知る能はず　爲に定んで得るや得ざるやを』　祀祠及び洗浴も　善友に近づくには如かず　我今善友に近づき　已に其の果證を得たり』　生ぜず又死せず解脫して涅槃に趣き　永く怖畏の處を離れたり　是れ財寶の求には非ず』　假りに王の威勢力もて　嚴に投じ焰火に赴き　嚴切なる寒冬月に　凍冰に其の體を黴け　盛夏欝蒸の時に　五熱を以て身を炙り　[三]編椽及び棘刺もて　其の上に寢臥し　山を越え大海を渡り　火を祀りて而も呪說する　是の如き苦行等も　涅槃を得る能はず』　唯だ修禪と智と　戒と聞と及び專精　是の如き法事等のあるのみ　何に從つて而も獲ると爲す

必ず善知識に因り　然る後能く具得す』

二四、[四]婆迦利聚落主婆羅門に欺かれて火に投ぜんとして却て佛道に入る緣

復た次に、若し人惡を爲せば應に地獄に墮すべし。善知識に遇ひて能く其の罪を滅ぼし、人天に

【二】大濟。大いなる渡し場。

【三】編椽。椽木を編みたるもの。

【四】此章、梵本缺失。

二三、[一]比丘婆羅門家に至るに屋棟摧折し、此因緣に依て法に入る緣

復た次に、若し人有智の善友に親近すれば、能く身心をして內外倶に淨からしむ。斯れを則ち名けて眞の善丈夫と爲す。

我昔曾て聞く。一比丘あり、次第に乞食して大婆羅門家に至る。時に彼の家中比丘に遇ひ已るや、屋棟摧折して水瓮を打破し、牸牛靷を絕ちて四向に馳走す。時に婆羅門卽ち是の言を作さく。「斯れ何の不祥ぞ、不吉の人來つて吾が家に入り、此の變怪あり」と。比丘聞き已つて卽ち之に答へて言く。「汝頗し、汝の家內の諸小兒等の瘠瘦せ腹脹れ面目の腫るるを見るや不や」と。婆羅門言く。「我先に之を見る」。比丘復た言く。「汝の舍の中に夜叉鬼あり、汝の舍に依つて住ひ人の精氣を吸ふ、故に汝の家の諸小兒等をして斯の疹疾をあらしむ、今此の夜叉、我を畏るるを以て恐怖して逃避す、是れを以て汝の樑折れ瓮破れ牸牛をして靷を絕たしむ」と。婆羅門言く。「汝に何の力ありや」。比丘答へて言く。「我れ如來の法教に親近するを以て此の威力あり、故に夜叉をして我を畏れしむること是の如し」。婆羅門復た是の言を作さく。「云何か名けて如來の法教と爲すや」。時に比丘、次第して爲に佛法の教誡を說き、婆羅門の夫婦をして聞き已つて心意解悟し、倶に須陀洹果を得しめき。

時に婆羅門、卽ち偈を說いて言く。

善き哉や上德者　善く眞實の法を說けり　佛の教耳より聞いて　我が心の屋宅に入る
我が家をして安穩ならしめ　我が爲に擁護と作れり』　唯願はくは今より　少しく
我が說く所を聽いて　我が心意の舍を破り　我が愚癡の樑を折りたまへ』　善く我が爲

【一】本章、梵本缺落。

上座衆僧に語げて言く。「我れ先に彼の爲に呪願せる時は財物の爲ならず、乃ち童女の心意の錯亂せんことを恐るの故に呪願を爲せり」と。卽ち偈を說いて言く。

錢財の多きを以て　而も大果報を獲ず　唯だ勝善心ありて　乃ち大*果報を得るなり』　彼の女の先に施すの時　一切悉く捨施せり　佛智能く分別したまへど　我の能く知る所に非ず』　今財寶多しと雖も　彼の時の心の　十六分中の一にも如かず　若し心擾げば施を濁さん　譬へば諸の商賈の　諸の財物を少かにして　心に大報を期するが如し』　所施の物小なりと雖も　心意勝れて廣大なれば　是れを以ての故に未來は　報を得ること無量ならん』　[四三]阿輸迦王(Aśoka)の如きは　淨心に土を用て施し　亦舍衞城(Śrāvasti)の　窮下の女人の如きは　飯漿もて　[四四]迦葉(Mahā-kāśyapa)に施しき』　土を施して大地を得　飯漿もて天中の勝となる　施少くとも心淨く廣ければ　報を得ることも亦弘大なり』　譬へば白淨衣の　油を以て其の上に漬くするに　垢膩遂に增長するが如し』　亦猶し油を水に滴くするが如し　油滴微小なりと雖も　池水の上に遍し　是れを以ての故に當に知るべし　心勝るる故に報の大なることを』

---

* 正倉院本に依る、麗本は「畏」。

【四三】前世に阿育王童子たりし時佛に遊ぶ所の土を獻ぜし因緣にて佛より將來世に轉輪王となることを懸記さる（阿育王經卷一）。

【四四】大迦葉貧母より米汁の供養を受け之を服して次の世忉利天に生れしむ（摩訶迦葉度貧母經、有部毘奈耶藥事卷十二）。

も彼の上座、常に自ら珍重す。彼の女人の深信心あるを見て彼の功德を增長せんと欲する爲の故に、[四二]維那を待たず躬自ら慇懃に起ちて呪願を爲し、即ち右手を擧げて高聲に唱言すらく。「大德僧聽け」と。即ち偈を說いて言く。

大地及び大海の　所有諸の寶物も　此の如き童女の意は　悉く能く僧に施與せん』
心を留めて善く觀察するに　道を行ひて修福を爲し　解脫の道を得て　貧窮の棘刺を離れしめん』

時に彼の童女極めて大心を生ずらく。「師の所說の如し、我の難作を作せる、便ち一切の資財珍寶を捨てたると等しくて異るあるなし」と。悲欣交も集り、五體を地に投じて諸僧に歸命し、此の兩錢を以て上座の前に置き、涕泣して樂しまず。即ち偈を說いて言く。

願はくは我れ生死の中に　永く貧窮を離れて　常に歡慶の集まるを得　親戚と別離すること莫らん』　我れ今僧に施すの果は　唯だ佛のみ能く分別したまふ　此の功德に由るの故に　速かに所願の果を成じ　種ゆる所の微善心もて　身根願はくは速かに出でかし』

時に彼の女人、彼の山を出で已りて一樹下に坐するに、樹蔭移らずして上に雲蓋あり。時に彼の國の王、適ま夫人を喪ひ外に出でて遊行し、彼の雲蓋を見て樹下に往至す。此の童女を見て心に染著を生じ、將ゐて宮內に還り、用て第一最大夫人と爲す。童女即ち是の念を作さく。「我先に發願し今已に心に稱へり」と。即ち國王に白さく。「多く寶物を齎し供具を施設して耆闍山に詣で、衆僧に供養せん」と。即ち寶珠瓔珞種々の財物を持して用て奉施す。彼の時、上座呪願を爲さず。爾の時大衆所以を疑怪し、而も是の言を作さく。「先には貧賤にして兩錢を施せる時、起ちて呪願を爲せり、今は王の夫人と爲りて珍寶瓔珞種々の財物もて而も用て布施するに呪願せず」と。時に彼の

【四二】維那。前項の知事と同義。

に還る。時に彼の家人、盛服を著け馬に乘じて門に至るを見て是れを貴人なりと謂ひ、心に畏懼を懷きて門を閉して藏避す。畫師語げて言く。「我は他人に非ず、是れ汝の夫主なり」。其の婦語げて言く。「汝は是れ貧人なり、何れに於て是の鞍馬服乘を得たる」。爾の時其の夫偈を以て答へて言く。

善女よ、汝今聽け　我當に實に隨つて說くべし　今僧に捨施すると雖も　施設猶ほ未だ食せず』　譬へば未だ種を下さずして　芽莖今已に生ずる如し　福田は極めて良美なり　果報は方に後に在り』　此の僧の淨福田に　誰れか中に於て種ゑざる　意方に下種せんと欲す　芽の生ずるは衆の見る所』

時に婦聞き已つて淨信心を得、即ち偈を說いて言く。

[三九]佛の說きたまふ所の如し　「僧に施して大果を得と」　今布施する所の如きは　眞に施の處所を得たり』　敬心に少水を施すとも　果報は大海にも過ぐ　一切諸衆の中　佛僧は最第一なり　意を開いて方に施を欲す　[四〇]華應已に前に在り』

二二、*貧女兩錢を捨施して現報に王妃となる緣

復た次に、夫れ施を修する者に勝れたる信心あり、兩錢の布施も果報量り難し。

我昔曾て聞く。一女人あり、[四一]耆闍山に至りて衆人等の彼の山中に於て般遮于瑟を作すを見る。時に彼の女人、會に於て乞食し、既に衆僧を覩て心に歡喜を懷き、而も讃歎して言く。「善き哉や聖僧、譬へば大海の衆寶の窟宅の如し、衆人供養す、我獨り貧窮にして物の用て施すなし」と。是の語を作し已つて遍身に搜求し了るも所有なし。復た自ら思惟すらく。「先に糞中に於て二銅錢を得たり、即ち此の錢を持して衆僧に奉施せん」と。時に僧の上座、羅漢果を得て豫め人心を知る。而

【三九】佛說。中阿含第一八〇「瞿曇彌經」參照。又雜阿含卷四の第二經及三經を參照。

【四〇】華應。又華報ともいふ、未來の報果を果報といふに對し、その現世に於て受くるものを華報といふ。

* 梵本斷簡第八十六葉、本分の初部に相當す。

【四一】耆闍山。Tamasā-vana (黑闇林)。

し、應に恪着すべからず。

我昔會て聞く。[三四]弗羯羅衞(Puṣkaravasti)國に一書師あり、名を[三五]羯那(Karṇa (or Kaṇa)?)と曰ふ。有る因緣を作して[三六]石室國(aśmakā?)に詣り、既に彼に至り已つて諸塔寺に詣で、一精舍を書くが爲に三十兩金を得、本國に還歸して會ま諸人の[三七]般遮于瑟(Pañcavārṣika)を造るに値ひ、信敬の心を生じて[三八]知事の比丘に問ふらく。「明日誰れか飮食を作すや」と。答へて言く。「作者あることなし」。復た問ふ。「彼の比丘の一日の食は幾許の物を須ふるや」。答へて言く。「三十兩金を須ゆ」。時に彼の畫師、卽ち知事比丘に三十兩金を與へ、彼の金を與へ已つて家に還歸す。其の婦問ひて言く。「汝今客作して何の所得と爲すや」と。夫婦に答へて言く。「我三十兩金を得、用て福會に施せり」と。其の婦聞き已つて甚だ用つて忿恚し、便ちに諸親に語げて夫の過ちを稱說すらく。「得作する所の金は盡く施會に用ひ、遺餘の用て家業を營むあるなし」と。爾の時諸親卽ち彼の人を將ゐて斷事處に詣り、而も之に告げて曰く。「錢財は得回く役力して得らる、然るに營家及び諸親里に用いずして盡く用て諸福會を營設せり」と。時に斷事官是の事を聞き已つて彼の人に問ひて言く。「竟して爾りと爲すや不や」。答へて言く。「實に爾り」。時に斷事官、是の事を聞き已つて希有の想を生じ、卽便に讚へて言く。「善き哉や丈夫」と。己れの衣服幷びに諸の瓔珞及以び鞍馬を脫して盡く彼の人に賜ひ、而も偈を說いて言く。

久しく貧窮の苦に處し　傭作して錢財を得　用て生業を營まずして、　以て施すこと甚だ難しと爲す』　復た財富あり　資生極めて豐廣なりと雖も　若し善く觀察せざれば　速かに施與する能はず』　遠く後身を觀察し　施に果報あるを知り　勇猛に能く財を捨て　慳みの塵垢を離る　是の行法を有てる人　施を持して沒せざらしむ』

時に彼の畫師、此の偈を聞き已つて歡喜踊躍し、其の衣服を著け此の鞍馬に乘りて便ちに其の家

【三四】 弗羯羅衞。雜寶藏經に弗迦羅城とし、玄奘は布色羯邏伐底とす、乾陀羅國の一都邑なり、此に國とするは誤り、現今の Hashtnagar.

【三五】 羯那。雜寶藏經は「罽那」。

【三六】 石室國。阿育王子法益壞目因緣經に揵叉尸羅國を石室國とせるによる。

【三七】 般遮于瑟。五年會と譯す、五年每に修する大齋會にて、又何人を選ばずその申込を容るるを以て無遮會とも義譯す、阿育王の創始するところなりと傳ふ。

【三八】 知事(Karmadāna)。寺中の事務を取る役、維那(禪家にヰノと讀み一般にはユヰナと讀む)と稱するものこれである。

爾の時法師、卽便に微笑して而も偈を說いて言く。

善女よ、汝但だ起てかし　我に瞋恚の心なし　剃頭して袈裟を著くるものに　終に舍不の法なし』　欲愛ありて彼に著し　彼を損じて苦惱を生じ　好を作し惡を作す者　便ち能く瞋恚を生ず』　瞋恚は舍不を作せど　我は瞋恚の結を滅せり　無明を斷除し體性是れ結なし　我れ衆生を救はんと欲す　云何か舍不を作さん』　生老病死等　諸の衆生を苦惱す　云何か有智の人　而も當に舍不を作すべき』　猶し惡毒瘡に　復た燥惡灰を加ふるが如し　薄皮もて機關を覆へるに　凡愚愛惑を生ず　我れ神足力を以て汝の[三一]不淨篋を開かん』

是の偈を說き已り、還び神足を攝むるに女本形に服る。爾の時法師衆會に告げて言く。「汝等宜しく修善を勸むべし」と。卽ち偈を說いて言く。

顚倒せる欲想の行は　喩ふるに風の塵を起すが如し　正しく離欲の面を觀じて　欲の塵埃を洗濯せよ』　有欲及び離欲は　處所未だ必定ならず　善く觀ずれば解脫を得　貪惑すれば而も欲を增す』　是の故に應に常に　專精して離欲の想を修むべし　離欲の衆善は寂かにて　諸の禪樂を獲尅す』

[三二]時に彼の聽法衆。或は[三三]不淨觀を得て。須陀洹（Srota-āpanna）（豫流果）を得るあり。又離欲想を修するに於て。或は阿那含（Anāgāmin）（不還果）を得。復た出家する者ありて。勤修して懈怠せず。阿羅漢を逮得するありき。

二一、*弗羯羅衞城の畫師罽那設食して報を獲る緣

復た次に、無戀着の心は一切に能く施し、大名稱を得て現世に報を獲ん。是の故に應に施すべ

【三一】不淨篋とは、肉體を篋に喩へ、これに生老病死の四毒蛇を藏るが如しと誡しむるなり。

【三二】以下原本は偈文として前偈に直接するも、今私に訂して散文とせり。（。）はその偈切の位置を示す。

【三三】不淨觀。この肉體は臭穢にして取着すべきものなしと觀ずること、四念處の一、身念住なり。

＊此物語は雜寶藏經卷四に乾陀衞國畫師罽那設食獲報緣として出づ。梵本又後半に當る斷簡あり（第八十六葉）。

爾の時大衆、彼の女人の諸骨相拄ふること猶し葦舍の如くなるを見て、甚だ怪愕を生じて言く。「彼の骨聚の中に云何してか能く是の如きの說を作すや。」又、五藏悉く皆露現するを見る、譬へば屠架に懸くる所の五藏の蠢々蠕動するが如く、猶し狗肉の如し、諸藏の臭穢なること厠溷よりも劇し、我等云何か乃ち此の事を見るや」と。即ち偈を說いて言く。

今女人の身を觀ずるに　唯だ筋の枯骨に連るのみ　但だ空しき骨聚のみを見るに　和合して言音を出せり
女中に骨あるや　骨中に女あるや』　譬へば曠澤中に蘆葦の叢林あり
風に因つて共に相鼓し　便ち大音聲を出すが如し』　斯の如き假法に因つては
女の自體を見ず　若し自體なければ　女相安んぞ所在せん　遍く諸法中を推すに　昔より來た未だ曾て有らず』
我身相を諦觀するに　去來及び進止　屈伸と俯仰と　顧視並びに語言は
諸節相支拄し　骨肋甚だ稀疎に　筋纏りて機關と爲り　之を假りて而も動轉せるなり』
是の如き一々の中　都て宰主あるなし　而も今此の法は　有と爲んか無と爲んか』
我れ狂癡惑の爲に　[二五]痰癊亂目と爲り　云何か是の如き中にして　妄りに[二六]有女の想を生ずる』
[二七]葦を縛つて機關と作すに　多く綖縷を用ふる如く　又譬へば融けたる眞金に　水を注げば則ち聲を發すが如し』

爾の時法師、諸の[二八]四衆の皆厭惡を生ぜるを知り、婬女に告げて言く。「汝今に於ては何を所作せんと欲する」と。女法師に[二九]白さく。「願はくは[三〇]舍不(śāpa)を除きたまへ」と。即ち偈を說いて言く。

大頭仙(Sthūlaśirasaḥ)は舍不もて　天女藍婆を變じて　其れをして草馬を作さしめ　世間に具さに滿つること十二年なりき』
汝今舍不を作し　我をして塚間と作らしむ　未だ曾て是の如きの舍不を見ず　善く自在なる大德よ　我を愍み願はくは除却したまへ』

【二五】痰癊。胸の塞がる病、麗本「淡陰」に作り、今三本に依る、恐らく同義なるべし。
【二六】有女想。既に萬法實體なきに云何か此の醜穢中に美女の存在を認むべけんとなり。
【二七】縛葦の喩は筋骨等の集合して人體と動作あるを現はし、眞金の喩は女の骨形中より聲の出でしを喩解せしもの。
【二八】四衆(Catvāri pariṣad)。在家出家の男女の弟子と信者、即ち比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷なり。
【二九】白。三本に依る、麗本「日」。
【三〇】舍不。呪詛。

だ人を誑惑するのみ、向には女人の所有美色容止觀ずべく、今は但だ忽然として骨聚を見るのみ、儀容端正に諸の姿態を作すは、狀蠱道の若し、是の如き事、今何所にか在る」と。一優婆塞あり、指を以て頰を支へ、此の女を諦觀して而も偈を說いて言く。

牟尼の說きたまはく、衆生　欲愛の爲に盲ゐらる　盲にして慧目なきの故に　涅槃に趣くを得ず』　譬へば[二二]任婆(Nimba)の葉の　密着せる虫に唼はるるが如し　貪の爲に惑はされて　死に至るも而も捨てず』　諸の不放逸の人　諦實に身相を觀じて　而も欲覺を起さず　喩へば白鶴王の　常に清池に處するが如く　[二三]塚間を樂はず』

復た優婆塞あり、而も是の言を作さく。「此の姿容を見るに便ち欲想を生じ、彼の白骨を觀るに卽ち用て欲想を除滅す」と。而も偈を說いて言く。

彼の骸骨の聚を觀て　能く人の怖畏を生ずること　[二四]毘陀羅(Vetala)の　呪術の機關に如似たり　愚者は之を實なりと謂ひ　便ち樂着の心を生ず』　道に深き坑穽ありて　革を以て其の上を覆へるが如く　此の身も亦是の如し　當に是の如きの觀を作すべし　諦實に是れを知り已れば　誰れか當に欲想を起すべき』

爾の時、惑着せる愚かしき無智の者、是の偈を聞き已つて低頭して之を避け、遂に聞くを喜ばず。時に彼の女人、自ら其の身の人の患ふ所と爲れるを見て五體を地に投じ、卽ち偈を說いて言く。

我先に愚かにて識なく　自ら己れの力を量らず　聽法衆を廻らして　一切將ゐて家に歸らんことを願ひしに　今始めて知んぬ釋子の　勢力甚だ奇特なることを』　我が妙なる姿貌を變じ　觀る者厭患を生ず　我は瞾愚者の如し　所爲極めて輕躁なりき』　敢て牛跡の水を以て　大海に比せんと欲せしか　唯願はくは哀矜を垂れて　我をして歸依し誠懺するを聽したまへ』

【二二】任婆。學名、azadirachta Indica. 苦葉をつく、煎じて藥用とし頭痛を治するに用ふといふ、又樹質堅しといふ。

【二三】塚間。塚間の死屍の如き肉體に執着せざること。

【二四】毘陀羅。外道の一呪法にて鐃鈸を打ちて死屍を起たしめ、之に害事を行はしむる呪術といはれる。

自ら力を量らず、敢て佛所に於て現り逼嬈を作す、世尊神力もて乃ち死尸を以て而も其の頸に繋ぎたまふに、慚耻して顏なく、人天に笑はれぬ。汝の意は便ち、佛法の教學以て滅さんと謂爲へるや、專精なる聲聞、豈に無かるべけんや、諸の勝丈夫都べて滲盡せんや。汝若し是の如くんば、宜しく堅く自らを持すべし」と。時に彼の法師即ち神通を以て此の婬女を變ずるに、膚肉墮落して唯だ白骨のみあり、五内諸藏悉く皆露現す。即ち衆前に於て此の婬女を喚ぶらく。「汝向には惡心を興起し敢て佛法と而も共に諍競せり」と。時に此の婬女、此の骨身を以て衆前に在つて立てり。爾の時法師、即ち偈を說いて言く。

汝の向の妙容色は　挺んでて特れ衆に觀らる　今膚肉盡く變じて　唯だ空しき骸骨のみあり』
汝先には素白を悅び　今始めて實相を見る　頂骨白珂に類し　形色藕根の如し』
[二〇]眼匡の骨は　[二一]陷頑し　兩頰は深溝の如し　機關悉く解落し　筋脉粗に相綴る』
内に在る諸藏等は　空に懸つて而も露現し　其の將從せらる者　自ら見て厭惡を生ず
況して復た餘の大衆をや　而も當に之を樂見すべけんや』

爾の時骨人、彼の法師の爲に其の形を變ぜられ已つて、身心倶に困しみて自ら申ぶる能はず。即ち骨手を叉へて法師に歸向す。爾の時法師、骨人に告げて言く。「汝の容色と瓔珞嚴身する種々の校飾は、但だ凡人を惑はし、其れをして深く着して三有の池に沒せしむるのみ、汝今若し能く姿態を除去し莊嚴の具を捨てんに、吾當に汝の寂淨なる妙身を示して、汝をして不淨の市肆を知るを得しむべし、而して此の身は薄肉上を覆ひ、穢惡充溢す、外に脂粉を假りて以て愚目を惑はし、凡夫耽惑して欲に盲ゐられんとす、故に染着を生ず、何ぞ有智者は、諦かに觀察し已りて當に之を愛翫すべけんや」と。時に諸會者、斯の事を覩已つて咸な厭惡を生じ、各相謂ひて言く。「世尊の說きたまふ所は信實にして虛りならず、一切諸法は幻の如く化人の如く水聚沫の如く、金塗錢の如し、但

【二〇】眼匡。原本「服匡」に作るも恐らく眼匡の古誤寫なるべし、眼匡は「まぶた」のこと。
【二一】麗本「頤」、今三本に依る。

奪ふ』　吾が敎を敬ふを用ての故に　遮り制めて還止せしめん　如何か彼の妖媚　衆人の目を惑亂するや』　譬へば靑蓮の蔓の　漂皷して波に隨つて動くが如く　衆の心も亦是の如し　熠耀して暫しも停まらず』

爾の時、衆人の情旣に耽惑し、此の妙色を觀て慚愧の心を失ひ、更に相指示して而も偈を說いて言く。

斯の女の美しき姿容の　今來ること甚だ吉と爲す　彼の[一七]月の初生の　墜落して地に在るが如し』　容貌は時倫に超え　淨目極めて美妙なり　將に[一八]藍婆（Lambā）女には非ず　帝釋の遣はす所爲らん　或は是れ[一九]功德天か　然れども手に花を執らず』

復た一人あり、而も偈を說いて言く。

咄なる哉此の女人　儀容甚だ奇妙じくて　目は靑蓮花の如く　鼻膅しく眉畫の如く　兩頰悉く平滿に　丹脣にて齒齊密　凝膚極めて軟懦に　莊麗甚だ殊特なり　威相悅樂すべく　熣耀金山の如し

時に優婆塞其の容貌を愛して心意錯亂す。時に彼の婬女と左右の侍從、斯の事を見已つて深く自ら慶幸とし、叱叱して言く。「我等今は所作甚だ善し、能く衆會をして意を注がしむること乃ち爾り」と。彼の時法師、諸の四衆の搔擾常と改まれるを怪しみ、手を以て眉を搴げ時會を顧瞻し、是の婬女の儀容端正なると、及び其の侍從皆悉く莊嚴し、婬女中に處し皦かなること明星の若く、愚人の心を奪つて正念を失はしむるを見たり。時に彼の法師、女人の意を觀ずらく、何事を以て此に來ると爲すやと。卽ち默して入定し、其の邪惡にして聽法の爲ならざるを知る。然るに此の法師、瞋恚を斷ずと雖も外に忿りの色を現はし、聲を發して高唱に婬女に語げて言く。「汝、蟻封にして而も彼の須彌山王と其の高下を比せんと欲するか、豈に聞かざるべけんや。昔佛の在世に、第六天王

【一七】月初生。新月のこと。卽ち淫女の美しきこと、新月の化身の地に下りしかと覺ゆとなり。

【一八】藍婆。法華經に十羅刹女の第一として此の名を出す、神格不明なるも恐らく羅刹女中の固有名詞なるべきか、正法華經には結縛と譯せり。

【一九】功德天（Lakṣmī）。吉祥天とも譯す、婆羅門敎の神にて毘紐笯の配偶とせらる。

無數千人皆來聚し集る。爾の時法師、頭髮極めて白く秀眉目を覆ひ、善く諸根を調へて其の心の無畏なること師子王の如し。卽ち高座に昇つて而も偈を說いて言く。

[一四]「我淺智の者を觀ずるに　此の座に昇るに由莫し　怯弱なること　野干[一五]の如く　戰き懼れて自ら寧からず』　我今此の座に昇るに　衆に處して畏るる所なし　喩へば＊獸中の王の如く　哮吼して邪論を摧く』

爾の時法師、卽ち大衆の爲に次第して說法す。時に彼の婬女、[一六]時衆の心を擾動せんと欲する爲の故に、卽ち門中に於て而も其の身を現はす。其の將從する所の人々人の間に散入して、各婬女を指して衆人に語げて言く。「此の女の端嚴なる姿容愛すべし、汝等且らく觀て用て聽法爲せ」と。時に彼の諸人是の語を聞き已つて卽便に顧眄して心意安からず。爾の時法師、未だ其の意を解せず、其の所以を怪しみて卽ち衆人に問ふ。「汝等何の故に視瞻常と改まり心意錯亂するや、汝豈知らずや、死の來ること迅速にして猶ほ奔馬の如くなるを、是の故に宜しく勤めて諸の善行を修すべし」と。卽ち偈を說いて言く。

十力の大法炬　善く世界を照し　慧明未だ潛隱せず　宜しく速かに善業を修すべし』
意を堅くして善行を集め　晝夜に懈倦する勿れ　一切智の語燈は　久しからず當に隱沒すべし』　若し其れ隱沒の後には　衆生盡く黑闇にして　日光の照るありと雖も
猶ほ名けて大冥と爲ん』

爾の時衆會、是の偈を聞き已り、法教を敬奉し意を攝めて法を聽く。時に彼の婬女、衆人等の心を攝め意を斂むるを見て復た姿態を作せり。衆會覩已つて心還び散亂す。爾の時法師、復た偈を說いて言く。

彼の女の姿態を作すや　會んで渴愛を生ぜしむ　欲情の爲に牽かれて　其の專念の心を

【一四】此の類偈 Divyāvdāna p. 363, l. 23–26 に出づ。
【一五】野干(Sṛgāla)。狐の一種、豺狼。
＊ 三本に依る、麗本「狩」。
【一六】時衆。その法會に集れる人々。

復た次に、善く觀察すれば好色を見るとも欲意あるなく、多く厭惡を生じ、好色を見る時愛と瞋を起さず。

我昔曾て聞く。一寺廟あり、諸の比丘多し。中に法師あり、三明六通ありて言辭巧妙に、辯才を具足す。自他の論を知つて善く能く問答し、機に應じて法を説き、衆心を悅適せしむ。能く法燈を然して愚冥を照除す。城の内外の所有人民をして日々の中に於て皆來つて聽法せしめ、既に聽受し已つて乃し少年に至るまでも皆放逸ならず。時に彼の城中に舊き[1]婬女あり、咸皆歎息して是の如き言を作さく。「我等今は人の往返するなきに斯の若きの苦を受く、當に久しく彼の婬女に近づくべしと爲す」と。女、盛年にして端正に、聰慧非凡にして善く世論を知り、女人の有する所の六十四藝は悉く皆明達せり。母の憂慘するを見て卽ち母に問ひて言く。「今は何の故に憂苦すること乃ち爾るや」と。母女に告げて言く。「今此の城中の一切の人民は悉く樂つて法を聽き、更に往返に我が邊に至る者なし、資財空しく置きて出つて而も得るなし、我此の事を以て、是の故に愁ふるのみ」と。女是れを聞き已つて自ら端正を恃み、其の母に語げて言く。「我今自ら嚴つて彼の會に往至し、能く彼の會の一切の衆人をして悉く我に隨つて來らしめん」と。是の語を作し已つて尋で自ら沐浴し、衆香もて身に塗り、瓔珞の上服に首に華鬘を戴き、足に著くる所の履は衆寶もて莊校せり。右手に杖を執り行歩・妖嬈・透迤として弄姿種々に莊嚴すること華樹の行くが如し。猶し天人の諸の侍從を將ゆるが如く、華鬘瓔珞もて身を嚴り、上服亦皆殊妙なる此の諸の從者は、或は金餅を執り、或は拂扇を持ち、或は香花を捉りて彼女に侍衞す。諸の妓人を將ゐて而も自から圍繞し、並びに語り並びに笑へり。或は右手を擧げて道徑を指麾す。復た[2]黃公あり、耳に衆華を挿み、玄黃朱紫に其の身を綵畫し、歡笑戲虐種々に巧嘲す。亦復た手を擧げ前を指し後を指す。其の中路に於て香氣四塞し鼓樂弦歌して寺所に往至し、一空室に處して衆の集會して説法の時の到るを待てり。

【一】婬女　Gaṇikā dārikā (梵本)。

【二】黃公。幇間のこと。

復た次に、若し自らに過ち無ければ人を譏呵することを得。若し自らに過ちありて彼を呵せば、他は反つて蚩笑せん。

我昔曾て聞く。倮形婆羅門と諸の沙門と同道して行きしに、一年少比丘ありて彼の倮形を笑ふに慚愧なきを以てす。時に彼の倮形の衆中に婆羅門あり、少しく佛法を解す。比丘に語げて言く。「長老よ、汝の出家の幖幟を以て輕慢して人を欺くべからず、汝の出家の形貌を以て能く煩惱を斷ずべからず。若し未だ生死流轉を斷ずる能はずんば未だ出期あらず、汝後身に於て未だ倮形を脫せず、何の故に見て笑ふや。汝、今よりは生死の中に兜羅樹(Tūla)の華の風に隨つて東西し未だ定止するの時あらざるが如けん、汝應に自らを笑ふべし、應に他を笑ふべからず。汝、後時に何の道に趣くと爲すやを知るか、灰の火を覆へるが如し、結使の心に在ること未だ必ずしも保すべからず。汝、今は自らを有慚愧と謂ふこと莫れ、汝の所爲を覩るに、未だ諸見の網を脫する能はず。夫れ慚愧とは定んで[10]諸見の網に入らず、若し惡覺を起さざれば是れを慚愧と名く。汝自ら決定の數中に入らずして云何か他を笑ふや」と。時に諸の比丘、倮形婆羅門の如法にして說けるを聞いて默して答ふ所なし。餘の比丘聞き已つて歎言すらく。「正しき說かな、能く結を斷ずれば有慚愧と名く、若し結を斷ぜざるを比丘と名くんば、伎人の剃髮せるも應に是れ比丘なるべし、然るに諸の伎人は復た剃髮すると雖も比丘と名けず、當に知るべし、四眞諦の法を見るを得たるを眞の沙門と名くることを、何を以ての故に、[11]經中に說くが如し、『四諦を見ざるは邪正不定なり、邪正不定の所見は錯謬す』と、是の故に應に當に勤めて四諦を修むべし、若し見諦すれば所見眞正にして永く邪趣を離る」と。

二〇、*法師婬女を化して骸骨と作し衆人を化する緣

【八】出期。生死流轉を脫出するの時期なり。
【九】兜羅樹。綿の木。
【一〇】諸見の網。諸の誤れる學說や宗教を諸見といひ、このために人々邪道に捕へらるるを以て網に喩ふ。
【一一】經句。增一阿含卷十三の第九經。
＊梵莢斷簡、第八十葉及び同紙本斷簡、第五、六葉。

造業既に同じからず　報を受くるも亦復た異る』　富貴は財寶を饒かにし　貧者は來つて請ひ求む　『[四]諸天は器食を同じうするも　飯色各異りあり』　若し畜生中に墮すれば業報も亦同じからず　福樂を得受するあり　苦惱を受くる者あり』　此の貪の毒を以ての故に　人天及び畜生も　慳嫉の爲に挊ばれて　所在皆損減す』　餓鬼は熾然の苦あり　支節に煙焔起ること　[五]樹赤華の　醉象の鼻端を以て　遠く虛空中に擲つに華下りて身を赤からしむるに如似たり』　貪嫉は最苦の器なり　乞求する者を見るに　其の心則ち惱濁せり　賢聖是の說を作さく　惱濁の刹那の中に　則ち能く鄙漏を作す　愚癡慳しみて施さず　以て貧窮の本を種ゑ　貪心而も積聚して　即ち惡道に墮すと』　此の如く慳貪は　衆の苦惱の根本なり　是の故に有智者は　應に慳貪を斷除すべし』　誰か自ら樂つて　名稱恭敬等を欲するありて　而も正道を捨てて　曲惡の徑を隨逐せんや』　今身に苦惱を得　來世にも亦復た然り　世界の結使の業は　能く淨施の報を遮ぎる　所謂是の慳貪は　[六]衆怨の中の最大なり』　是の身は大癰腫なり　衣食及び湯藥　一切衆の樂具も　貪嫉に遮斷せらる　貪嫉は極めて微細にて　細入すれば遮制し難し』　當に施の牢門を以て　心屋を緻密ならしむべし　彼の貪嫉をして　而も中に進入を得ることを聽す莫れ』　貪嫉設し心に入らば　渠河及び大海たりとも　能く遮つて飲まざらしむ』。

[七]億耳、放逸に。乃ち是の過惡あるを見て。即ち生死を厭惡し。還歸して出家を求め。既に出家するを得已つて。精勤して定慧を修め。羅漢果を逮證したり。

一九、*少年比丘倶形婆羅門より呵せらるゝ緣

【四】維摩經に「諸天寶器を共にするも食は其の福德に隨ふ、飲食異あり」といふに同じ。即ち諸天は食器と食物は等同なるも、その福德によつて食物の色異なるといふ、勝者は白淨、中者は稍赤、下者は稍黑とす。而して其の食は諸天一樣に須陀(Sudha)と稱するものなり。甘露味と意譯す。

【五】樹赤華(Mañjūsaka)。語頭のマンを略したる音寫にて普通に曼珠沙華といふに同じ、大和本草に此の花を金灯花(ナツズキセン)とせるは當らず、印度にては神話的樹木であつて草ではない、固より本邦には此木なし。

【六】衆怨。怨は魔と同義、即ち煩惱のこと。

【七】以下、終りまでを原本偈頌に接入して七句とするも今私に長行に改む。句點(。)を附せる所即ち句の切點である。

＊ 梵本紙本斷簡第五葉。

各長歎して、是の如き言を作さく。「汝は是の餓鬼城を知らざるべし、云何か此の中にして而も水を索むるや」と。即ち偈を說いて言く。

我等此の城に處すること　百千萬歲の中なるも　尙水の名をすら聞かず　況んや復た飲むを得る者をや』　譬へば　多羅[三](Tala)の林の　熾燃として火に焚かるるが如し　我等も亦是の如く　支節皆火に然ゆ』　頭髮悉く蓬亂し　形體皆毀破す　晝夜に飲食を念じて　慞惶として十方に走す』　飢渴に逼切せられ　口を張らせ馳せて求索するに人あつて杖を執つて隨ひ　尋逐して楚撻を加ふ』　耳には常に惡音を聞き　未だ曾て善語あらず　況んや一滴の水を與へて　我が喉舌を潰ほす者をや』　若し山谷の間に於て天龍甘露を降さんに　皆變じて沸火と成り　而も我が身の上に注ぐ』　若し諸の渠河を見んに　皆變じて流火と成り　池沼及び河泉も　悉く皆其をして乾竭せしむ　或は變じて膿血と成り　臭穢極めて惡むべし』　設ひ往き馳せ趣かんと欲するも　夜叉は鐵捶を捉つて　撾打して近づくを得ず　我等は此の苦を受く　云何か能く水を得て以用て汝に惠施せんや』

我等先身の時　慳貪にして極めて嫉妬し　曾て一人に施すに　水及び飲食を將てせざりき』　自物を他に與へず　彼れを抑へて施さざらしむ　是の重業を以ての故に　今是の苦惱を受くるなり』　施に大いなる果報を得　春種ゑて秋に子を獲るを　我等子を種ゑずして　今日是の苦を受くるなり』　放逸にして慳貪に惜しまば　是の苦を受くること窮りなし　一切の苦の種子は　貪嫉よりも過ぎたるはなし　應に當に勤方便して是の如きの患を除去すべし』　施は善の種子爲り　能く諸の利樂を生ず　是の故に應に修施すべし　我の如く受苦する莫れ』　等同に人中に在りて　身形に差別は無きも

【三】多羅。學名 Borassus flabelliformis. 棕櫚の類。

王是の偈を聞き已つて身毛皆竪ち、三寶の所に於て信敬の心を生ず。涙を流して而も言く。「此の如き老母は宜しく供養を加ふべし、況して其の物を稅せんや」と。王偈を說いて言く。

今より已後　斯の如き老母の比ゐ　生子は三有を度り　器は供養を受くるに堪ゆるもの
財物を稅するを聽さず　咸な應に恭敬を加ふべし』　設ひ同伴侶ありて　駝驢及び
車乘に　多く衆の珍寶を載すると雖も　此の老母の爲の故に　應に彼れを格稅すべから
ず　況んや此の一母人をや』　單に己ら樹葉を賣るのみ　更に餘の錢物なし　而も當
に稅奪することあるべけんや』　設ひ我が山窟中の　[一]經行修道の處　人の彼の中を行き
て　結を滅ぼし諸漏を斷ぜんに　尙ほ應に彼の處を敬ひ　尊重して供養すべし』　況
んや此の老母の如く　能く聖子を生める者　而も當に修敬せざるべけんや』

一八、*億耳比丘餓鬼道に至りて布施道を聞く緣

復た次に、放逸の果を示さん。衆生をして不放逸ならしめんが爲の故に。

我昔會て聞く。大商主の子あり、名を[二]億耳(Koṭikaṇṇa?)と曰ふ。海に入りて寶を採り、旣に得て廻還し、伴と別に宿し、伴を失ひて憧惶す。飢渴に逼められ、遙かに一城を見て水ありと謂爲ひ、城邊に往至して水を求めて飮まんと欲す。然るに此の城は是れ餓鬼の城なり。彼の城中に到るに四衢の道頭の衆人の集處は、空しくして見る所なし。飢渴に逼められて唱言すらく、水、水と。諸の餓鬼輩、是の水なる聲を聞いて皆來り雲集し、「誰の慈悲者か我に水を與へんとは欲する」と。此の諸の餓鬼の身は燋柱の如く、髮を以て自ら纏へり。皆來り合掌して是の如き言を作さく。「願はくは我に水を乞へよ」と。億耳語げて言はく。「我れ渴に逼めらるゝの故に來つて水を求むるなり」と。爾の時餓鬼、億耳の渴の爲に逼められて自ら行みて水を求むといふを聞いて、希望都べて息み、皆

【一】經行。
＊　梵本缺。
【二】億耳。滅後の人ならん。

卷の第四

一七、國王*、三羅漢を生める老母を恭敬する緣

復た次に、若し諍競する者斷結者の名を聞かんに、所諍の事解けん。若し人供養恭敬を得んと欲すれば應に諸の使を斷ずべし。

我昔曾て聞く。差りたる老母あり、林中に入つて波羅(Pala)樹の葉を採り、賣りて以て自活す。路に關邏に由ふるに邏人之に税す。時に老母税せしむるを欲せずして此れに語げて言く。「汝能く我を將ゐて王邊に至らば、税すること乃ち得べし、若し爾らざれば終に汝に與へず」と。是に於て邏人遂に共に紛紜しつつ王所に往至す。王老母に問はく。「汝今何の故に關税を輸らざる」。老母王に白さく。「王頗し彼の某比丘を識るや不や」。王言く「我識る、是れ大阿羅漢なり」。又問ふ。「第二の比丘、王復た識るや不や」。王言く。「我識る、彼亦羅漢なり」。又問ふ。「第三の比丘、王復た識るや不や」。王答へて言く。「識れり、彼亦羅漢なり」。老母聲を抗ひて而も王に白して言さく。「是の三羅漢は皆是れ我が子なり、此の諸子等王の供養を受けて能く大王をして無量の福を受けしむ、是れを卽ち名けて王に税物を與ふと爲す、云何が更に我より税奪せんと欲するや」と。王是れを聞き已つて未曾有なりと歎じ、「善き哉老母、能く聖子を生めり、我實に知らず、もし彼の羅漢は是れ汝の子なりと知らば、應に供養を加へて汝を恭敬すべし」と。是に於て老母卽ち偈を說いて言く。

吾れ三子を生育し　勇健なること三界に超えたり　皆悉く羅漢を證し　世の爲に福田と作る

王若し供養するの時　福を得んには税物に當る　云何か而も方便して　我が所有を税奪するや

* 梵筴斷簡第七十一葉(sa-kleśa の一語あるのみ)、Divyāvadāna の前出續文參照。

し』　智者の財物を出づるは　水の伏藏を沒するも　亦應に速かに寶を出すべきが如し
此の身終に敗壞す　宜しく堅法に貿易すべし』　愚人は　堅と不堅の法とを分別せず　死軍の卒かに來至すること　[五八]摩竭の口に入るが如けん　是の如き時に當りて　驚き恐れ大いに怖畏す』　酪より生酥　及以び醍醐を取り　取り已つて酪缾破するも
大苦惱を生ぜざる如く　此の身も亦是の如し　其の堅實の善を取り　後に於て命終する時　終に悔恨を生ぜず』　諸の善行を修せず　憍慢にして縱逸なる　死法卒かに來至して　身の缾器を破せんに　其の心極めて燋熱すること　猶し火の爲に燒かるる如けん　憂結を火の如しと喩へ　酪瓶は身の如しと喩ふ』　汝應に我の　善を修めて堅法を取らんとするを遮ぎるべからず　愚癡黑暗なる者　自ら我の尊貴を言ふのみ』　我れ十力尊の　言說の燈炬を執つて　己身の中を照察するに　貴と賤と差別なし』　皮肉筋骨等　[五九]三十六種の物　貴賤悉く同等にして　何の差別相やある　名衣及び上服と衆具に別異あるのみ』　智者は宜しく身を勤んで　恭敬禮拜を作すべし　[六〇]設使諸の善を行ぜんに　是れを堅法を取ると名く』　何の故に斯れを說くとならば　此の身は電遄泡沫及び沙聚　芭蕉の如く堅實なければなり』　此の如き危脆の身も　修善百劫に住まらば　須彌山　及以び大地よりも堅からん　智者は應に是の如く　堅實の法を貿易すべし』

【五八】　卷二の註四一を見よ。

【五九】　肉體構成の三十六要素にて、一に外相の十二物、髮・毛・爪・齒・眵・淚・涎・涕・尿・溺・垢・汗。二に身器の十二物、皮・膚・血・肉・筋・脈・骨・髓・肪・膏・腦・膜。三に內含の十二物、肝・膽・腸・胃・脾・腎・心・肺・生臟・熟臟・赤痰・白痰。

【六〇】　「設」三本による、麗本「役」。

唯だ此の人頭のみあり　見る者咸な譏呵す　之を賣るに直する所なく　虚與するも惡んで近かず　遙かに見て皆瞋を生じ　不祥鄙惡なりと言ふ』　此の頭膿血に汚れ　鄙賤甚だ惡むべし　斯の下賤の頭を以て　功德の首に貿易し　彼に向つて[五五]屈申すると雖も　毫釐も損減するなし』

[五六]王耶賖に告げて言く。

汝比丘の　雜種にして卑賤なるを見ると雖も　其の內に眞實に道德あるを觀る能はず』　汝愚癡邪見にして　迷惑して心を錯亂し　己れの婆羅門にして　獨り解脫の分あり　自餘の諸の種姓　解脫を得る者なしと計せり』　若し婚姻せんと欲すれば　當に種族を求むべきも　若し善法を求めんとせば　安んぞ種族を用うとせん』　若し其れ法を求めんには　應に種姓を觀るべからず　上族中に生ると雖も　極惡の行を造作せば　衆人皆呵嘖す　是れを則ち下賤と名く』　種族卑微なりと雖も　內に實道の行あれば　人の爲に尊奉せられん　是れを則ち尊貴と名く』　德行旣に充滿せる　云何か禮敬せざらん　心惡しければ形を賤しかしめ　意善なれば身を貴からしむ』　沙門の諸の善を修し　信戒施聞の具はれる　是の故に尊尙すべく　宜しく應に深く恭敬すべし』　惡行を造作する者　汝今寧んぞ　釋種にして大悲を具へたまへる　牛王正道者の　說きたまふ所の法を聞かざるや』　[五七]三危脆の法を以て　三堅法に貿易すと　佛に異語あるなし　故に我敢て違はず　若し世尊の敎に違へば　名けて親善とはせず』　譬へば甘蔗を壓するに　汁を取つて其の滓を棄つるが如し　人身も亦是の如し　死の爲に壓せられ　屍骸は委ねて地に在り　復び進止する能はず』　*恭敬して諸善を修む　是の故に應に當に知るべし　此の敗壞の身を以て　堅牢の法に貿易すること　猶し火の舍を燒く如

[五五] 屈申とは此に釋子沙門に禮敬するをいふ。

[五六] 此の一句原本には頌中に加ふるも、今私に偈外に揭ぐ。

[五七] この肉身は老病死を免れざるの故に三危脆法といひ、法身は是を免るる故に三堅法といふ。

* 三本による、麗本「供」。

せつく、自死せる人の頭を取れ」と。各々皆市中に於てその頭を賣らしむ。是の如き頭等の中餘の頭皆售れたるも唯だ人頭ありて見る者惡賤し遠く避けて而も肯て買ふ者なし。衆人之を見るや咸な皆罵辱して而も之に語げて言く。「汝旃陀羅にも夜叉にも羅刹にも非ず、云何か乃ち死人の頭を捉へて行くや」と。罵辱せられ已つて還つて王邊に詣り、而して王に白して言さく。「我人頭を賣るに售らしむ能はず、返つて呵罵せらる」と。王復た語げて言く。「若し價を得ざれ、但に當に虛與すべし」と。時に彼の耶舍、尋で王敎を奉じ、市に入りて唱告すらく、人に虛與せんと欲す」と。市人見已つて復た罵辱を加へ肯て取る者なし。耶舍慚愧して還つて王所に至り、王に向ひて合掌して而も偈を說いて曰く。

牛驢及び象馬　猪羊など諸の畜頭は　一切悉く價を獲　競つて共に諍ひ買取す　諸頭盡く用あるも　唯人頭のみ穢惡にて　一として用ふべきあるなし　虛與すとも肯て取らず　而も返つて呵罵せらる　況して復たもや買ふ者あらんや

王耶舍に問ふ。『汝人頭を賣る、何の故に售がざる」。耶舍王に白さく。「人の惡賤する所、肯て買ふ者なし」。王復た問ひて言く。「唯此の一頭のみ憎惡すべしと爲るや、一切の人頭悉く惡むべきや」。耶舍王に答ふ。「一切の人頭悉く惡賤すべし、獨り是の一に非ず」。王復た問ひて言く。「是の如し、我が頭も亦復た是の如く人に惡まるるや」。耶舍聞き已つて懼れて敢て對へず、默然として住す。王復た語げて言く。「我今は汝に[五四]無畏を施さん、實を以て而して說けよ、我今此頭も亦惡むべきや」。耶舍對へて曰く。「王の頭も亦爾り」。王復た語げて言く。「審かに爾りと爲すや不や」。耶舍復た言く。「審かに爾り、大王」。王耶舍に告ぐ。「若し此の人頭貴賤等同に皆惡むべくんば、汝今云何が自ら豪貴の種姓色智を恃んで以て自ら矜高するや、而も我の沙門諸釋種子を禮敬するを遮らんとは欲する」と。即ち偈を說いて言く。

【五四】無畏を施す。自由に何事たりとも述ぶるを許すの意。

定相なく　地主も亦常存に非ず　此の如きは最も難事なるを　今悉く具足し得たり』
目青蓮の如くなる者　應に具さに諸善を修すべし　已れをして快樂を受けしめ　宜しく勸めて戒施を行ずべし』
勁勇なる有力者　能く大海を越渡し　專念する健丈夫　能く諸山を超度せん』
設ひ斯の如きの事を作すとも　未だ名けて難しと爲すには足らず
能く後世を利益する　是の事乃ち難と爲す』

復た次に、此の身堅からず、是の故に智者は應に當に分別して尊長を供養すべし。是を則ち名けて「不堅の法を以て堅固の法に易ゆ」と爲す。

一六、*阿育王大臣耶賒の無信を化する緣

我昔曾て聞く。牟尼(Muni)種中に王あり、名を[五二]阿育(Aśoka)と曰ふ。三寶を信樂し、若し靜處に於て佛弟子を見んに、長幼を問はず必ず下馬を爲して足に接して而も禮す。爾の時彼の王に一大臣あり、號して耶賒(Yaśas)と名く。邪見不信にして王の諸の比丘等を禮敬するを見て深く謗毀を生じ、而も王に白して言さく。「此の諸の沙門は皆是れ雜種にして而も出家するを得たり、諸の[五三]刹利(Kṣatrya)婆羅門には非ず、亦毘舍(Veśa)首陀羅(Śūdra)等を雜ふ。又諸の皮作及び能織者、巧作塼瓦、剃鬚髮師あり、亦下賤なる旃陀羅(Caṇḍāla)等もあり、大王何の故に而も爲に禮を作すや」と。王是の語を聞いて默然として報へず、別に後時に於て諸の大臣を集め、諸人に勅して言く。「我今は種々の生あるものの頭を須ゐん、殺害を聽さず、汝等輩に自死せる者の頭を得んことを仰せつく」と。卽ち諸臣に告ぐらく。「汝今某甲に仰せつく、是の生類の頭を得よ」と。復た某甲に告ぐ。「仰せつく、彼の生類の頭を得よ」と。是の如くにして展轉して遍く諸臣に勅し、仰せつけて各々異れる生類の頭を得しめ共に同じきを聽さず。別して耶賒に告ぐらく。「今又汝に仰

＊ 梵本斷簡、第七十一葉。本章は Divyāvadāna p. 382, 4 以下に出で、本經に比して詳し。この物語は普達王に關するものとして普達王經の中に出づ。彼此參看すべし。

[五二] 阿育、西紀前三世紀(佛滅後二世紀)頃印度大陸を統一したる有名なる帝王。牟尼種中とは、佛の信者たるをいふならん。

[五三] 刹利乃至首陀羅の四は印度の社會階級で四姓といふ。又皮作以下は賤民の種類を擧ぐ。旃陀羅を最下とす。

ならば宜しく速かに福を修むべし」と。即ち偈を說いて言く。

若し人命終の時　獨り往いて伴黨なし　畢定して當に　愛する所の諸の親友を捨離すべし』　獨り黑闇の中の　畏るべき恐怖の處に遊んで　親愛も皆別離し　孤煢にして徒伴なし　是の故に應に　善法の資糧を莊嚴すべし』

更に此の義を滿てんが爲の故に　[48]婆羅留支（Vararuci）六偈を以て以て王を讃へ、即ち偈を說いて言く。

諸の珍寶の　積聚すること　[49]雪山（Himavant）の如く　象馬と衆寶の車と　謀臣及び呪術ありと雖も　專ら死の時の至るを念ぜば　以て救免すべからず』　宜しく諸の善業を修すべし　己れの利樂を得んが爲に　[50]目青蓮の如くなる者　應に勤めて戒施を行ずべし』　死は大恐畏爲り　聞く者皆恐懼す　一切諸の世間に　終に沒せざる者なし』

是れを以ての故に大王よ　宜しく應に死の苦を觀ずべし　目青蓮の如くなる者　應に當に善業を修すべし　己れの利樂を得んが爲には　宜しく勤めて戒施を行ずべし』

人命の壽終する時　財寶も隨逐せず　壯色及び盛年も　終に還び重ねて至らず』　目青蓮の如くなる者　應に當に善業を修すべし　己れの利樂を得んが爲に　宜しく勤めて戒施を行ずべし』　[51]彌力・那侯沙（Nahusha）耶耶帝（Yayāti）大王　及び屯豆摩羅(Dhundumāra?)　婆〔三本婆〕加・跌〔三本跌〕利不（Dilipa?）　翹離李勢夫　踰越頻世波

是の如きの人中の上にして　衆勝の大王等も　軍衆及び群宮も　悉く皆滅沒し去り　欣びと感しみと相續ぎて生じ　意念次第して起りぬ』　目青蓮の如くなる者　應に當に善業を修すべし　己れをして快樂を受けしめ　宜しく勤めて戒施を行ずべし』　財寶及び榮貴は　此の事遇ふべきこと難し　福祿も恒有に非ず　身力も增損あり』　一切に

【四八】　婆羅留支。今の文勢よりすれば輔相の名の如く思はるゝも確實ならず。同名を求むれば、阿闍世王の異名にこの名あり、又、入大乘論には「婆羅留枝比丘佛本行」なる引用偈あり。若し今後者に當るとすれば、本論にいふ所の「佛本行」とは婆羅留枝の著を指すことゝなるも、急かに速斷しがたし。

【四九】　雪山。ヒマラヤ山のこと。

【五〇】　目の青蓮の如くなる者、智慧の淸く開けたる者の意。普通には佛を形容するに用う。

【五一】　以下の諸王、梵本に缺くると手許に材料を缺くを以て一々原名推定しがたきも印度王統の二大元の一たる月統(Candra vaṃsa)の人王の祖とせらるる壽命王(āyu)の直系七八代を出せるものなること疑なし、印度神話辭書(J. Dowson: — a classical dictionary of Hindu mythology etc. 1879)を參照。

ふ所は正に是れ其の理なり、若し後身を受けんに必ず財寶を須ゐん、然るに今珍寶及以び象馬も、齎持して後世に至るべからず、何を以ての故に、王よ、今此の身すら尙ほ自ら後世に至る能はず、況んや復た財寶象馬なる者をや。當に何の方便を設けてか、此の珍寶をして後身に至るを得しむべけん、唯だ沙門、婆羅門、貧窮の乞兒に施與するあらんに、福報の人を資けて必ず後世に至らんのみ」と。卽ち偈を說いて言く。

莊嚴なる面目ある者　水に臨んで勝好の影を見ん　好醜は其の面に隨ひて　影じて悉く水中に現る』　莊嚴なれば則ち影好く　垢穢なれば則ち影醜し　今身は面貌の如く　後受の形は影の如し』　莊嚴なる形の戒と慧は　後に[四七]可愛の果を得ん　若し惡行を作さば　後に報を受くること甚だ苦し』　信心ありて財物を以て　父母と師と　沙門と婆羅門と　貧窮困厄に供養せば　卽ち是れ後に水ありて　中に於て面像を見ん　施戒慧の業の影も　亦復た彼の中に現ぜん』　王に衆營の從者と　宮人と諸の婇女と　臣佐及び吏民と　音樂等の倡妓あり』　其の命終の時の如きは　悲戀しつつ塚間に送らんも　到り已れば便ちに家に還つて　一として隨從する者なし』　後宮の侍直等も　庫藏する衆の珍寶も　象馬も寶の輦輿も　一切娛樂の具も　國邑も諸の人民も　苑園も遊戲の處も　悉く捨てて而も獨り逝き　亦隨去する者なし　唯だ善惡の業ありて　隨逐して終に放たざるのみ』

更に云く。「若し人臨終に喘氣麤く出で、喉舌乾燋して水を下す能はずは、言語了ぜず瞻視端しからず、筋脈斷絕し、刀風形を解いて支節舒緩し、機關止廢して動轉する能はず、擧體酸痛すること針に刺さるるが如く、命盡き終るの時大なる黑闇を見ること深坑に墮するが如し、獨り曠野に遊んで黨侶あるなし、唯だ福を修むるありて爲に親伴と作り、而して之を擁護するのみ、若し後世の爲と

【四七】可愛。意に叶ふこと。

なし、何處にか寶を得ん」と。復た更に思惟すらく。「汝の父の死する時、口中に一金錢ありき、汝若し塚を發かば彼の錢を得べく、以用て自ら通ぜよ」と。卽ち母の言に隨ひて往いて父の塚を發き、口を開いて錢を取り、既に錢を得已つて王女の邊に至る。爾の時王女、此の人幷びに與ふる所の錢を送らしめ以て王に示す。王之を見已つて此の人に語げて言く。「國內の金寶は一切蕩盡せり、我が庫中を除いて汝何處にか是の錢を得來るや、汝今に於ては必ず伏藏を得たらん、種々に栲楚して錢を得たる處を徵せん」と。此の人王に白さく。「我れ實に地中の伏藏を得ず、我が母我に示すらく、亡父の死する時錢を口中に置くと、我塚を發きて取るの故に是の錢を得たり」と。時に王、人をして往いて虛實を檢せしむ。使人既に到るに果して死父口中の錢處を見たり。然る後に方に信とす。王是れを聞き已つて自ら思忖すらく。「我先に一切の寶物を聚集し、此の寶を持ちて後世に至らんと望めり、彼の父の一錢すら尙ほ齎持して去ることを得る能はず、況んや復た多くをや」と。卽ち偈を說いて言く。

我先に勸めて　一切の衆の珍寶を聚集し　諸の錢物を齎して　己れに隨へて後世に至らんことを望めり』　今塚を發く者の　還つて金錢を奪ひて取るを觀るに　一錢すら尙ほ隨はず　況や復た多くの珍寶をや』　復た是の思惟を作さく　當に何の方便をか設けて　諸の珍寶をして　我に隨つて後世に至らしむるを得べけんかと』　昔は[四五]頂生王(Mūrdhajātaḥ)　諸の軍衆と　幷びに象馬等の七寶とを將き從へて　悉く天上に到り　或は[四六]羅摩(Rāma)は草橋を造りて　楞伽城(Laṅkā-nagara)に至るを得たり』　吾れ今天上に昇らんと欲して　諸の梯隥あるなし　楞伽上に詣らんと欲するも　又復た津梁なし　我今方計して　寶を持して後世に至るなし』

時に輔相あり、聰慧にして機を知る。已に王の意を知りて而も是の言を作さく。「王の說きたま

【四五】頂生王の故事、頂生王故事經、頂生王因緣經、文陀竭王經、賢愚經、涅槃經等其他大小乘を通じて各種の經論中に散說せらる。

【四六】羅摩。詩史 Rāmāyaṇa に出づる故事、楞伽城とは今の錫崙島の古城。我が桃太郎の昔語はこの說話に母型を有するか。

眼目已に上眄し　將に死毒に中てられんとす」　親屬其の側らに在り　之を視て咸な悲しみ泣いて　手を以て其の身に觸れ　安慰して言く懼るる勿れと』　既に親しく慰喩せられ　益更に悲感を增し　決定して知んぬ已に去りて　死の長途を涉れることを』衆の財物ありと雖も　資糧とは爲すべからず　諸脈斷絶するの時　顏色皆變異し命來つて催促し已ること　油の盡きて燈の滅する如けん』　斯の如きの時に當つて誰れか能く「四」布施と　持戒と及び忍辱と　精進と禪定と智慧等を修めん　斯の如きの時の未だ至らざるに　宜しく應に勤めて心を用うべし』

一五。*難陀王後世の安穩を計る緣

復た次に、若し命終の時財寶を齎して後世に至らんと欲せんに、是の處りあることなし、唯だ、布施して諸の功德を作すをば除く。若し後世に貧窮を得るを懼るれば、應に惠施を修むべし。

我昔曾て聞く。一國王あり、名を§難陀(Nanda ?)と曰ふ。是の時、此の王珍寶を聚積して後世に至らんことを規る。嘿かに自ら思惟すらく。「我今當に一國の珍寶を集めて外に餘り無からしむべし」と。財を貪聚する故に自己の女を以て婬女樓の上に置き、侍人に勅して言く。「若し人あつて寶を齎し、來つて女を求むれば、其の人并びに寶を將つて我が邊に至れ」と。是の如くして一國の錢寶を集斂し、悉く皆蕩盡して王庫に聚む。時に寡婦あり、唯一子あるのみにて心甚だ敬愛せり。而して其れ、此の子、王女の儀容瓌瑋にして姿貌の非凡なるを見て心甚だ耽著するも、家に財物無く以て自ら通ずる無ければ、遂に病を結ぶに至り、身體羸瘦し氣息微惙せり。母子に問ひて言く。「何を患つて乃し爾るや」。子具さに狀を以て母に啓白すらく。「我若し彼と交往するを得ざれば、定んで死すること疑はず」と。母子に語げて言く。「國の內の所有一切の錢寶は、盡きて遺餘

【四】以下、布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧の六つを六度と稱す、本經作者の部派に六度を認めたるを知るべし。

* 梵本紙本斷簡、第四葉。

§ Candragupta の祖先なるべし。

得しむ』　自ら言く此の身を受くるは　慳にして惠施せざるが故と　放逸の欺誑する所是の苦惱の形を受くるなり　愚劣なる諸の乞兒　我に此の如きの義をば示せり』

自ら言く曾て王爲り　猶し星中の月の如かりき　寶蓋もて頂上を覆ひ　左右に衆妓直し侍從悉く莊嚴し　聞く者皆路を避けたり』　此の如き等の　種々衆妙の事ありと雖も　布施せざるの故に　今貧賤の苦を受く』　福樂に汝の心を迷はし　後有の苦を覺らず　人帝應に當に知るべし　我今甚毒の苦あり　宜しく當に布施を修すべし　後世をして我の如からしむ莫れ』

輔相天法是の偈を聞き已つて深く歡喜を生じ、合掌して王に白さく。「佛の言へるが如し、曰く、他の苦を受くるを見ては當に自ら觀察すべし、王よ、今よりは實に佛意に合へり、彼の乞兒を見て則ち能く覺寤したまへり、善き哉や大王、意細やかなること乃ち爾り、能く是の事を覺つて佛の說きたまふ所の義を善く解し分別したまへり、[四二]大王とは實に能く大地を持するに稱す、眞に是れ地主として虛妄ならず、所以は何ん、能く善く佛法の深義を分別し、聰慧明達したまへばなり、是の故に王を稱して大地主と爲ん』。卽ち偈を說いて言く。

地主常に應に爾るべし　此の意を無上と爲ん　此の意恒とすべきこと難く　能く自ら利するも亦難し』　人身極めて得ること難く　信心も亦生ずる難し　財寶は足るべきこと難く　福田は復た遇ひ難し』　是の如きの一々の事　極めて衆會するを得難し　譬へば大海の中に　盲龜ありて浮孔に値はんとするが如し』　斯の如きの難事を　大王悉く具有したまへり　是の故に今よりは　應に心意を恣にすべからず』　人身は電光の如く　暫しに發れど久しく停まらず　復た人身を得ると雖も　危脆にして保つべからず』

終りに臨んで兩肩垂れ　諸の骨節皆舒緩し　[四三]四威儀ありと雖も　進止に自由ならず

【四二】王(Rāja)を地主と解することは刹帝利(Kṣatriya)の語義に基く、蓋し刹帝利とは占有權を有する者の義にて土地の支配權を意味するからである、長阿含第五經小緣經の巴利傳(D. 27 Aggañña S.)には田を保護する故に刹帝利と稱すとせり。

【四三】行住坐臥の四威儀。坐作進退に威德あり儀則あるを威儀といふ。

人中に死もて苦と爲すこと　少かに喩と爲るを得べけんか　彼の苦は恒に此れにも過ぎたり」

火を乾ける薪に著くるが如く　暫しの冷むる時もあるなし　地獄の苦も亦爾なり

暫しの憩息もあるなし」　地獄の中の[37]陰身は　皆融けたる鐵の聚りの如し　熱惱の燒然する苦は　稱計するを得べからず」

宜しく應に懈怠を除くべし　晝夜に休息せず　正道を勤修して　必ず[38]苦際を盡くさしめん」

是の故に先づ道を修め　克く解脫の果を獲て　然る後に以て多聞し　而して妙[39]瓔珞を作せ」

一四、*罽尼吒王、乞兒を見て布施心を發せる緣

復た次に、此の事を見已つて應に驚悟を生ずべし。尊豪なる榮位も、常なるを得る者なし。我昔曾て聞く。[40]栴檀罽尼吒王(Candra Kaṇiṣka)將に罽尼吒城に往詣せんと欲し、其の中路に於て五百の乞兒を見る。聲を同じうして乞匃して言く。「施したまへ、我の如きに」と。王是の語を聞いて便ちに悟解を生じ、即ち是の念を作さく。『彼れ我を覺寤せり、我往日に於ては曾て更に貧苦なりき、今若し施さずんば後亦彼の如からん」と。即ち偈を說いて言く。

其の先世の時　多饒の錢財寶ありて　說いて施すべき無しと言ひしに由り　今斯の貧賤を得たり

設ひ我れ今無しと言はんに　後世亦彼に同じからん

時に輔相あり、名を[41]天法と曰ふ。馬を下りて合掌し、而も王に白して言さく。「此の諸の乞兒咸な言はく、我の如しと」。王臣に答へて言く。「我も其の語を聞けり、然れども我の解する所と汝と異あり、汝の解する所は、錢財雜物を乞ひ索むと謂爲へり、我の解する所は、當に汝の爲に說くべし、汝今善く聽けよ」と。即ち偈を說いて言く。

此の諸の乞兒等　故らに來つて我を覺寤す　斯の貧賤の形を以て　我に示して見るをば

【三七】陰身(skandha-kāya)。五陰よりなる身、即ち肉體のこと。

【三八】苦際(duḥkha-anta)。迷の限り。

【三九】瓔珞。莊飾、頸かざり。

＊ 梵本紙本斷簡第四葉。

【四〇】栴檀罽尼吒、迦膩色迦王のことなるも、本典の原語は kaṇiṭa or kaṇiṣṭa なりしか、憾むらくは梵本に缺けて明かならず、僅かに一一一葉に……latilak……ṣi. e. とあり、リューダースはこれを kula-tilaka-kaṇiṣkena の脫落と解せり。

【四一】梵本缺けて原語不明。或は Devadharmika？

時に病比丘、此の偈を說き已りて心悼悸を懷けり。其の兄之を見て大いに憂慼を生じ、而も是の言を作さく。『善き哉、善き哉、子今乃ち能く深く悔恨を生じて、誓願を發せり、但だ先に汝に教へしに、我が語を用ゐずして後に驚き悔ゆるは、これ將來に及ぶ所なり」と。而も偈を說いて言く。

疾病以て困篤に　大命云遠ならず　支節皆舒緩し　[三五]刀風は其の形を解く』　湯藥も療せざる所　醫師も之れを捨てて去る　左右皆稱言すらく　怪しき哉や決定して死せんと』　諸親婦女等は　對して而も悲しみ啼哭す　臨終に大いに恐怖し　驚畏して苦しむこと喩へ難し』　設ひ平健の時に當りて　死に斯の苦あるを知らんに　誰れか道意を發さざらん　克く解脫の果獲ん』　盛年患ひ無きの時に　懈怠して精進ならず　但だ諸の事務を營んで　施と戒と禪とを修めず』　後に重き病疾に遭ひて　諸根は火の然ゆるが如く　死の爲めに呑まるるに臨んで　方に悔ゐて修善を求むなり』

彼の病比丘卽便に命終つて還つて人中に生る。時に阿羅漢天眼を以て觀じ、其の生處を知つて數ば其の家に到る。此の兒漸に大きくなり、乳母抱持して僧坊に詣し羅漢の所に至る。兒を捉ふるに堅からず、手を失して地に撲ち、頭を石上に打てり、兒大いに瞋恚し、身を捨し命終つて地獄の中に墮せり。時に阿羅漢復た天眼を以て而も之れを觀察するに、地獄に在つて苦難の處に生ぜるを見たり。卽ち偈を說いて言く。

嗚呼大いなる毀敗かな　生處救ふべきこと難し　佛力すら尙ほ拔き難きを　況して我能く救濟せんや』　心慧を　[三六]無漏に繫ぐは　苦の能く修する所に非ず　地獄の中の苦惱は　暫しの樂心も有る無し』　尙ほ暫しの樂心すらなし　云何ぞ　繫念するを得ん　繫念なきを以ての故に　慧の無漏なるを得ず　是の如きの難處を　云何か救拔すべけん』　地獄に大苦を受くるは　方に喩を以てすべからず　設ひ復た強いて譬を爲さんに

【三五】身命の壞する時に風氣あり、支節を解緩すること利刀の如しといふ。

【三六】無漏(Anāśrava)。煩惱を皮囊より汚水の漏るゝに例へて漏といひ、煩惱を斷盡したるを無漏といふ。

ば譬愚者の如くなり　彼の六道の中に於て　何の道に趣くかを知らず』　未だ知らず將來の世　佛の語を聞き得るや不やを　三有の中を周廻して　何等の人にか遇ふと爲す』亦知らず未來に　何の事業を作さんと爲るやを　或は能く本心を喪ひて　三毒を興起せり』　諸の善事を修せずして　但だ諸の惡のみ造る　嗚呼大苦なる哉　我自らを欺誑爲せしか』　已に諸の難を離るゝを得んに　應に出世の道を得べし　云何か癡惽の爲に放逸に而も自恣せん』

時に諸の同學、偈を說くを聞き已つて重ねて安慰して言く。「汝既に多聞なり、又堅く戒を持す、宜しく應に自ら寛なるべし、何ぞ憂怖爲ること乃し是の如きに至るや」と。病比丘言く。「我今病困し、諸賢捨てられよ、必ず死すること疑無けん」。涕泣流淚して兄に白して言さく、「願はくは少しく我に近づきたまへ、我の愚惑に由つて兄の敎を奉ぜず、今は病篤くして必ず後世に就かん、願くは兄よ、愍みを垂れて當に拔濟せられ、大苦を離れしめたまへ」と。卽ち偈を說いて言く。

同じく佛法の中に處し　汝は沙門の寶と稱して　數々我を敎誡せしを　愚劣にして承け順はず　我斯の事を以ての故に　倍す復た悔熱を生ぜり』　盛夏欝蒸せる氣は　猛く焰燒して燋然たり　我の恩敎に背きし　悔熱復た彼にも過ぎたり』　我今恃む所なし唯だ當に汝に歸依すべし　[三四]後の受身の時に於て　觀察して我を忘るゝ莫れ』　令後の世佛法に値はんに　復た還つて出家するを得　虛しく法服を著せざらん　願つて心に道果を得ん』　學問と諸の餘業と　之れを捨てゝ復た爲さず　專ら精んで解脫を求め　更に餘の志求無からん』　假令將來の世　見諦を求めなば　皮肉及び筋骨　髓脈消乾し竭すとも　身命は自在に趣みて　終に解脫を捨てざらん』　又願はくは未來の身は常に勤めて善法を修め　晝夜六時の中　精進初めより廢せざらん』

【三四】死後轉生受身なり。

名字も亦隨つて滅びたまへり』　是の故に汝今は　應に勤めて精進[三一]を修むべし　名稱を捨て離れて　專ら解脫を求めかし』

三藏答へて言く。「正に爾り當に作すべし」と。未だ久しからざるの間にして身に重病に遇ひ、恐るらく命は將に終らんとすと。深く悔恨を生じて偈を說いて言く。

怪しき哉や我れ今日　佛の聖法中に於て　戒と聞と具足すと雖も　而も見諦を得ず』　我今若し死せば　狗と亦別ち無からん　洄流して生死に沒すること　彼の陶家の輪の如からん』　我今哀愍すべし　未だ道跡を證するを得ず　師長慈矜を垂れたまひて　我に勸めて禪思を樂はしむ』　我法敎を奉ぜず　都て少分たりと習はず　是の故に今は眞諦を見るを得ず』　我釋迦文の　大明の法燈を執つて　而も　無明[三二]の首と爲し　自らを照了すること能はず　照す能はざるを以ての故に　永く生死の苦に沒せん』

其の諸の同學、其の病患を聞いて咸來つて瞻視し、其の恐懼するを見て皆悉く驚愕せり。各是の言を作さく。「汝寧んぞ佛の說きたまふ所を聞かざる、多聞の人は智慧力ありて能く無常を知ると、是の故に汝、今應に憂怖すべからず」と。時に病比丘卽便ち偈を說いて同學に答へて言く。

我先に敎誨を蒙れり　當に坐禪の法を習ふべしと　今日は明日に至り　窳惰として自ら欺誑し　此の一生中をして　空しく過ぎて獲る所を無からしめぬ』　是の身や聚沫の如きを　我深く觀察せず　橫さまに計して堅實と爲し　死の卒かに至るを覺らざりき』　專ら多聞の法に著して　最勝の想を生じ　忽ちにして死の蟒の爲に呑まれて　悔恨するも及ぶ所なし』　修多羅[三三]に言ふが如し　應に當に坐禪を習ふべし　專ら精んで懈倦すること莫れ　結を滅ぼせしものの說く所と』　佛に是の如きの敎あるに　隨順して行ふ能はず　悔熱の火の燒く所　我心をして燋惱せしむ』　我今甚だ闇劣にして　譬へ

【三一】　精進(Virya)。純心に努め進むこと。

【三二】　無明(Avidya)。明に對す、心に迷悟の理を見る智慧なきを光なきに喩へしなり、古經には四諦に明かならざること等と註せり。

【三三】　何經なるや不明。Dhamma-pada 第二十三偈、S.17. 10 Sagāthakaṃ 中の偈等類似す。

り到れど　待てば明朝に至らず　死の王は多く殘害ぞ　汝應に怖畏を生ずべし』　當に知るべし身は危脆にて　命の速かなるは保すべき難きを　應に勤めて內身を觀ずべく　多聞の業を捨棄せかし』　離世の解脫を求め　生死の根を超拔せよ　死若し卒かに至るの時には　悔熱するとも及ぶ所なし』　今若し道跡を見んに　後に悔熱の患なからん　佛法中に堅實なるは　所謂道跡を得ることぞ』　多聞の業は虛僞なり　應に捨つべく愛惜する莫れ　多聞にて博達と雖も　道跡を獲ざらんに　譬へば盲の燈を執るに　彼を照せど自ら覩ざるが如し　若し自利を求めんと欲すれば　必ず須らく道跡を見るべし』　衆に處して[二五]師子吼するに　言辭善巧に妙じく　諸法の相を敷演し　分別して疑難を釋き　能く聽法の衆をして　皆歡喜心を發さしめ　又一切の人をして　悉く調順なるを得しめん』　是の如きの事ありと雖も　臨時に心錯亂し　惡道の中に墮して　智者に嗤笑せられん』　汝の法を說く所　言詞字句滿ち　次第して因果を說き　美味なること心意を悅ばしむ』　甜むるに甘蔗の糵の如し　能く斯の事を作すと雖も　自ら調順すること能はず　未だ三惡趣を斷ぜざるなり』　自ら*未だ解脫を得ずして　空しく用て是の事を爲すは　凡夫信ずべからず　宜しく速かに見諦を求むべし』　汝大名稱あり　咸云ふ、能く說法すと　空なる名譽ありと雖も　汝に於て將て何か益する　當に內身を觀察すべし　嘿然として禪定を修めよ』　昔より來た多聞する者　其の數甚だ衆多なるも　無常にて遷謝する所　存する者極めて尠少なり』　勤苦して名譽を求むるは　得ると雖も復た散失せん　佛は[二六]有爲法を說きたまひて　一切悉く無常としたまへり』　過去の[二七]恒沙の佛は　[二八]三達智を成就したまひ　[二九]三障を除滅して　一念もて三世を觀はす』　斯れ等諸の世尊の　名聞は十方に滿つれど　今皆[三〇]般涅槃したまひて

【二五】師子吼(Siṁha-nāda)。佛衆中に說法するに諸の外道の皆默して聲なきこと、群獸の中に師子王の吼ゆるが如しとなり、よつて說法のことを師子吼といふ。

※　三本に依る、麗本は「求」。

【二六】有爲法(Saṁskṛta-dharma)。語義、作られたるものの意。卽ち因緣によつて成れるものにて、凡夫認識する所の現象界の一切をいふ。

【二七】恒沙。恒河の沙の意、無限の數をいふ場合に形容する語。

【二八】三達智(Tisrovidyāḥ)。三明に同じ、因(過去)を明知する宿命通、果(未來)を明審する天眼通、及び現在の苦因と之を滅することの因果を證悟する漏盡通にて、佛の證道は之によつて成るといふ。

【二九】三障。本經以後の說なる煩惱障、業障、報障(涅槃經十一の說)と同じきか、或は三毒(貪瞋癡)のことなるべきか。

【三〇】般涅槃(Parinirvāṇa)。般(Pari)は入の義、卽ち佛の死は死といふべからざる、入涅槃といふなり。

へり』　汝の德力に由るの故に　衆の伴及び財寶は　大艱難を免るるを得　一切の安穩出でぬ』　汝の言誓は堅固に　佛の說きたまふ所を敬順せり　汝は是れ大勝の人　能く衆の患難を除けり　我今當に云何してか　而も擁護を加へざるべけんや』　見諦して能く[一八]戒を持する　斯の事未だ難しと爲さず　凡夫にして禁を毀たざる　此をし乃ち希有と名けめ』　比丘[一九]安穩に處して　淸淨に自ら謹愼し　能く禁戒を毀たざる　此れ亦難しと爲さず』　未だ[二〇]道跡を獲ずして　[二一]大怖畏に處し己が愛する所の命を捨てて　佛の敎戒を護持し　爲し難きを而も能く爲すこそ　此れ最も希有と爲す』

一三、*多聞比丘禪思を怠りて地獄に墮する緣

復た次に、若し道跡を見ざれば、復た多聞なりと雖も、生死の苦を拔くを得る能はず。是の故に智者は應に見諦を求むべし。

我昔曾て聞く。兄弟二人倶に共に出家せり。兄は羅漢を得、弟は[二二]三藏を誦す。時に彼の羅漢三藏に語げて言く。「汝坐禪すべし」。三藏報へて曰く。「我當に坐禪すべし」。羅漢比丘復た之に語げて言く。「汝寧んぞ佛の說きたまふ所を聞かざるや、夫れ行道とは、[二三]頭然を救ふが如し」と。卽ち偈を說いて言く。

今日此の事を造るも　未だ必ずしも明旦に到らず　人命は保つべからず　宜しく速かに善業を修すべし』　死の大軍來り至るも　求請すべきの處なし　若し其れ命終の時　何れの[二四]道に從ふやを知らず』　冥冥として業緣に隨ひ　路の遠近を知ることもなく　命は風中の燈の如く　滅するに時節を知らず』　汝の言ふ明日當に作すべしとは　斯の言甚だ虛妄なり　死の虎は極めて暴急にして　都て容縱あるなし』　一旦は卒かに來

【一八】見諦。四諦の理を明かにすること。卽ち學證するなり。
【一九】安穩。生死の怖畏なき處。
【二〇】道跡（Mārga-prātipadah）。八正道を行ずること。
【二一】大怖畏。生死の中にあること。
*梵本紙本斷簡第三葉。
【二二】三藏(Tri-piṭakam)。經律論の三藏にて佛敎聖典の汎稱。藏は入物の義。
【二三】頭然。頭髮に火の附きたるを拂ふの意。
【二四】道(Gāmin)。六道のこと。

爾の時一少年比丘あり、一枚の板を捉ふ。上座比丘板を得ざるが故に將に水中に沒せんとせり。時に上座恐怖惶悸して水の爲に漂はされんを懼れ、年少に語げて言く。「汝寧ぞ佛の制したまふ所の戒を憶せざるか、當に上座を敬すべし、汝の得る所の板は應に以て我に與ふべし」と。爾の時年少、即便ちに思惟すらく。「如來世尊に實に斯の語あり、*諸有利樂は應に上座を先とすべし」と。復た是の念を作さく。「我若し板を以て用て上座に與へんに、必ず水中に沒して波浪を洞澓せん、大海の難は極めて深廣と爲す、我今にしては命將に全からざらんとす、又我年少にして初始て出家せるも未だ道果を得ず、此れを以て憂と爲す、我今身を捨てて用て上座を濟はんは、正に是れ其の時なり」と。是の念を作し已つて而も偈を說いて言く。

我自の全濟の爲に　佛語の勝に隨ふを爲す　無量の功德聚り　名稱十方に遍からん
軀命極めて鄙賤なるを　云何か聖敎に違はなん』　我今佛戒を受くるに　死に至るとも
必ず堅持せん　佛語に順はんが爲の故に　板を奉じて身命を遺てん』　若し難事を爲さずんば　終に難果を獲られず　我若ち此の板を持せんに　必ず大海の難を渡らんも
若し聖旨に順はざれば　將に生死の海に沒せんとす』　我今水に沒して死せんも　死すと雖も猶勝ると名けん　若し佛の敎へたまふ所を捨つれば　人天の利　及以び大涅槃の
無上の第一樂を失はん』

是の偈を說き已つて即便ち板を捨てて持ちて上座に與ふ。上座既に板を受け已るに、時に海神其の精誠に感じて即ち少年比丘を接けて岸上に置き、海神合掌して比丘に白して言さく。「我今堅き持戒者に歸依す、汝今是の危難の事に遭ひて能く佛戒を持せり」と。海神偈を說いて比丘を讚へて曰く。

汝は眞に是れ比丘　實に是れ苦行者なり　爾を號して沙門とせん　汝は實に斯の名に稱ふ

＊佛語。

是に於て比丘、偈を以て答へて曰く。

此の草甚だ脆弱にして　頓みに絶つこと亦難からず　但だ佛世尊の　金剛の戒の縛しむる所と爲つて　諸の法禁を守るの故　敢て挽きて頓みに絶たざるのみ』　佛說きたまはく、諸の草木は　悉く是れ[一七]鬼神村なりと　我等敢て違はざらんとて　是れを以て絶つこと能はず』　呪場の中に　蛇の爲に境界を畫るに　神呪の力を以ての故に　毒蛇の度る能はざるに如似たり』　牟尼尊の畫りたまひし界は　我等敢て越えず　我等命を護ると雖も　會ず磨滅に歸せん　願はくは持戒を以て死し　終に戒を犯して生れざらん』　有德及び無德も　倶に共に壽命を捨てんに　有德は慧命存し　幷びに復た名稱あり　無德は慧命を喪ひ　亦復た名譽を失ふ』　我等諸の沙門は　持戒を以て力と爲せり　持戒は良田爲り　能く諸の功德を生ず』　生天の梯隥　名稱の種子　聖を得るの橋津　諸の利の首目なり　誰か智慧ある者にして　戒德の缾を壞せんと欲せんや』

爾の時、國王心に甚だ歡喜し、卽ち比丘の爲に草の繫縛を解いて而も偈を說いて言く。

善き哉や能く　釋師子の說きたまふ所を堅持し　寧ろ己が身命を捨つるとも　法を護つて毀犯せず』　我今亦　是の如く　顯き大法に歸命し　熱惱を離れたまへる　牟尼解脫の尊に歸依したてまつり　禁戒を堅持する者に　我今亦歸命せん』

一二、*年少比丘上座に板を與へて溺死を救ふ緣

復た次に、若し人內心に賢善なれば則ち安隱多く、一切を利益せん。是の故に智者は應に其の心を修めて、恒に賢善ならしむべし。

我昔曾て聞く。諸の比丘あり、諸の估客と海に入つて寶を採る。既に海中に至るに船舫破壞す。

【一七】鬼神村(Bhūta-grāma)。樹木には鬼神住めり、或は草木には精靈ありて草木は住所となるとする印度の一般的俗信に順じて、草木を鬼神村と稱し之を害することは直ちに鬼神を損ずるなりとの意味から、佛は波逸提第十一條に「若し比丘、鬼神の村を壞するは波逸提なり」と制したりと傳へる、但しこは後世の訛說なるべく、佛陀に是の如き信仰ありしとは信ぜられない、惟ふに原語 Bhūta には生物(有情)と鬼神の兩義あり、その後義によりて譯したるを支那律家の附會したるに止まるべし、巴利傳に是の如き說なく、卒直に有情聚落と解して、草木とてもすべて生あるものなれば損ずべからずの意に見た方が、佛陀の眞意に近いものと思はれる。

※　梵本紙本斷簡第二葉。

*惡獸の　我が手足を摑み裂かんも　終に敢て　一〇釋師子の禁戒を毀犯せざらん　我寧ろ戒を持つて死すとも　禁を犯すことの生ずるを願はず』

諸比丘等、老比丘の是の偈を說くを聞き已つて各其の身を正しくし、動かず搖がざること、譬へば大樹の無風の時に枝葉の動ぜざるが如し。時に彼の一一國の王、遇ま出でて田獵し、漸漸に遊行して諸比丘の繫がるる處に至る。王遙かに之を見て心に疑惑を生じ、是の思惟を作さく。「彼の裸形の者は是れ一二尼揵(Nirgantha)と爲すや、是れ沙門と爲すや」と。是の念を作し已つて人を遣はして往いて看せしむ。諸比丘等深く慚愧を生じ、其の身を障蔽す。使人審かに一三釋子の沙門なるを知る。何の故に之を知るや、一四右肩黑きの故に。使卽ち還つて返り白して言く。「大王よ、彼れは是れ沙門にして尼揵爲るに非ず」と。卽ち偈を說いて言く。

王今應に當に知るべし　彼れ賊の爲に劫められ　慚愧すらく草繫と爲れるを　鉤もて大象を制むるが如し

時に大王、是の事を聞き已つて深く疑怪を生じ、默して是の念を作さく。「我今宜しく彼の比丘の所に往くべし」と。是の念を作し已つて卽ち偈を說いて言く。

青草もて繫がるる手は　猶し鸚鵡の翅の如し　又一五祠天の羊の如く　動かず亦搖がず』

危難に處するを知ると雖も　默住して草を傷めざること　林の火の爲に焚かれ　一六犛牛の尾の爲に死するが如し』

是の偈を說き已つて其の所に往至し、偈を以て問ひて曰く。

身體極めて丁壯に　無病にて有力なるに似たり　何の因緣を以ての故に　草もて繫がれ動轉せざる』　汝等豈に　身自らに力あるを知らざるや　呪の爲に迷惑せられて　是の苦行を爲すなるや　自ら身を厭患する爲なりや　願くは速く其の意を說けよ』

---

* 三本に依る、麗本は「狩」。
【一〇】 釋師子(Sākya-siṃha)。釋迦牟尼佛のこと、師子は佛の異名なり、佛は諸外道の中にあつて巍然たること百獸中の師子王の如し。
【一一】 有部目得迦には跋蹉國王の烏陀延とせり。
【一二】 前に「尼乾」(卷二、註一二參照)とせるに同じ。
【一三】 釋子(Sākya-putra)。釋尊の弟子、婆羅門が梵の子といふに對し、佛弟子は釋尊の子と稱す(長阿第五經小緣經に佛婆悉吒に對し、人若し汝の種姓を問はば「我是沙門釋種子也」と答へよとあるを參看)。
【一四】 佛徒の作法、上衣を左肩に搭けて左臂に繞らすを正儀とし(今の習俗之に反せるは支那の風に化せるなり)、而して長上に對しては偏袒右肩合掌して拜するを禮とす、依つて右肩は日に曝けて黑色となるなり。
【一五】 外道の神のために供犧する羊のこと。
【一六】 犛牛。尾の長き牛に似たる動物にて頗る其の尾を愛し尾を損ずることを恐れて死に至ることありといはる。

若し智慧あらば　能く禁戒を堅持して　人天の涅槃を求め　意に稱ひて而も獲得せん』
名稱普く聞知し　一切咸な供養せん　必ず人天の樂を得　亦解脫の果を獲ん』
[六]伊羅鉢(Erāpattra)龍王は其の禁戒を毀つて　樹葉を掐傷するを以ての故に　命終つて龍中に墮し　諸佛は悉く　彼れの龍を出づるを得る時を記さず』　能く禁戒を堅持する斯の事甚難と爲す　[七]戒相極めて衆多なり　分別して曉了すること難し』　劍林棘聚の如きは　中に處するに多く傷毀す　愚劣は堪任せざらんも　是の如くに戒を護持せよ』

是の諸比丘苦の爲に逼らるるも、屈伸及以び動轉することを得ず、恐らくは草を絕して禁戒を傷犯せん。自ら相謂ひて言く。「我等の修行も亦、彼の[八]秤の均平の處所を增減せしめざるが如し、今、怖難恐懼の處に在りて志を執じて虧かさず、始めて儜健を別てり、斯の賤しき命を以て當に貴き法に貿ゆべし、人天の樂及び涅槃の樂あらん、我等今は更に趣く所なし、唯だ當に戒を護りて死に至るも犯さざるべし」と。*時に老比丘、即ち偈を說いて言く。

我等往昔より來た　衆の惡業を造作せり　或は人道に生を得ては　竊盜し他の妻を婬す』
王法もて刑戮を受けしこと　計算もて數ふる能はず　復た地獄の苦を受けたる　是の如きも亦計り難し』　或は畜生の身を受けて　牛羊及び雞犬　[九]麞鹿禽獸等となり他の爲に殺害せらる』　身を喪ふこと涯限なく　未だ曾て少利あらず　我等今に於ては　聖戒を護らんが爲の故に　是の微命を分捨して　必ず大利益を獲ん』　我等今危厄なり　必ず定んで軀命を捨てん　若ち當に命終して後　天に生れて快樂を受くべし』
若し禁戒を毀犯すれば　現在には惡名聞え　人の爲には輕賤せられ　命終つて惡道に墮せん　今當に共に要を立てて　此に於て沒命に至るべし』　§假使此の日の光の我を曝して身命乾びんも　我要つて佛の戒を持ち　終に中にて毀犯せず』　假使諸の

【六】伊羅鉢龍王のこと、「佛本行集經」卷三十一、「五分律」卷十五、「四分律卷一」等に出で、巴利法句經註卷三の二三〇頁の傳今に同じ。

【七】戒相、戒行の表顯するところ、即ち、在家の五戒、出家の二百五十戒の如きをいふ。

【八】三本に依る、麗本は「稱」。

＊以下の偈、後の長行に反照するに老比丘の說なり、よつて今私に「時に老比丘」の一句を加ふ。

【九】三本に依る、麗本「狩」。

§「假使」以下「毀犯せず」に至る四句、三本に無し。

巻の第三

二、* 比丘劫賊の爲に草に繫がれし緣

復た次に若し弟子あり、能く堅く戒を持して人の宗仰と爲り、一切の世の人幷びに其の師を敬はん。

我昔曾て聞く。[一]諸の比丘あり、曠野の中を行きて賊の爲に剽掠せられ衣裳を剝脫せらる。時に此の群賊、諸比丘の往いて聚落に告げんことを懼れて盡く殺害せんと欲す。賊の中に一人の先に曾て出家せるあり、同伴に語げて言く。「今は何の爲にか盡く殺害せんと欲する、[二]比丘の法として草を傷ふを得ず、今若し草を以て諸比丘を繫がんに、彼れ傷ふを畏るる故に終に四向して馳告する能はず」と。賊卽ち草を以て而も之を繫縛し、之を捨てゝ去りたり。諸比丘等既に草縛を被り、禁戒を犯さんことを恐れて挽絕するを得ず。身に衣服なくして日に炙られ蚊虻蠅蚤の唼ひ嬈す所と爲る。旦より縛せられて日中に至り、轉た日沒に到つて晦冥大いに闇し。夜行の禽[三]獸交も橫さまに馳走す。野狐は群つて鳴き鵄梟は鳴いて呼ぶ。惡聲もて啼叫すること甚だ怖畏すべし。老比丘あり、諸の年少に語ぐらく。「汝等善く聽け、人命の促短なること河の駛流する如し、設ひ天堂に處するとも久しからずして磨滅せん、況んや人間の命にして保つべけんや、命、既に久しからず、云何か命の爲に而も禁戒を毀たんや、諸人當に知るべし、人身得難く佛法値ひ難し、諸根の具するは難く信心の生ずも難し、此の一一の事の皆値遇し難きは、譬へば[四]盲龜の浮木の孔に値はんが如し、佛の正道は彼の九十五種の邪見にして倒惑し果報あることなきに同じからず、佛道を修行すれば必ず正果を獲ん、云何か此の如き危脆にして不定なる命を悋惜し佛の聖教を毀たんや、若し佛の語を護らんに、現世には名聞ありて功德を具足し、後世には快樂を受けん、佛の[五]偈を說きたまふが如し。

* 梵本紙本斷簡。第二葉。

【一】 此の物語は草繫(kuśa-vandhana) 比丘因緣と稱し、「根本說一切有部目得迦」巻六にも詳說せられ、「大般涅槃經」巻二十六、「梵網經」巻下等に引用さる、共に佛世のことゝせるも恐らく本經の如く後世の制作なるべし、或は寧ろ右揭有部目得迦の如きも本經より引用せしに非ずやとも思はるる節あり、古經には見えず。

【二】 律、波逸提第十一條に衆草木を斫るを禁ずることあり(諸律條目一致す)。

【三】 三本依る、麗本「狩」とす。

【四】 盲龜(kāṇa-kacchapa)の喩は諸經に見ゆるも雜阿含第十五巻の終經並に中阿含第一一九經「癡慧地經」の中に出づるを以て源流とすべし。

【五】 此の偈の出所不明。

じ、晝夜に憂懼して他の劫掠を畏れんも然も[六一]八危り、貪著を以ての故に世を累ねて苦を受けん。信あるを以ての故に能く[六二]戒財・施財・定財・慧財を得、若し信なければ云何か是の如き等の財あるを得ん、是れを以て信財を最第一と爲す、我に是の財あるの故に、人の前にして自ら大富なりと言ふ、我往昔に於て深く善業を積めり、是れを以ての故に今は、信心に因つて足るを知るなり」と。而も偈を說いて言く。

信心あるに因つての故に　則ち諸の惡を造らず　一切諸の功德は　信を以て使命と爲ん』
信は亦河箭の如し　駛流甚だ迅速にして　能く心意をして　速く疾かに善法に至らしむ』　誰か多くの財寶あるも　能く信の巨富に勝へん　財に富む者ありと雖も　財を失へば則ち貧窮ならん』　若し其れ命終の時には　之れを捨てゝ而も獨り逝き　隨つて後世に至るものなし　信財は喪失せず　恒に常に自ら隨逐し　劫を累ねて快樂を受けん』　世の人財寶を積んで　能く彼の貪欲を生ぜり　信の財は則ち爾らず　見ては則ち歡喜を生ぜん』　諸の財寶の中に於て　信の財を最も上と爲す　此の義を顯示する者牟尼の說きたまふ所なり』　是の故に我貧しきに非ず　信財最も勝れりと爲し　餘の者は財と名けず　唯信のみ是れ實の財なり』　信を以て布施すれば　財物は增長することを得ん　不信もて彼に施さば　果報は轉た尠少ならん』

信ぜらる、而してマハーブハーラタに至つては財寶の神とせられ、密敎を經て我が國に傳つては七福神の一として俗信さるるに至る、此に財寶神として出づるは本經の成立の時マハーブハーラタの完成せることを證するものなり。

【五九】　七寶、第一卷註四五を見よ。

【六〇】　結文より反照するに恐らく此より以下優婆塞の言なるべし、原文前句に一連して衆人の語と混絡する故に今私に「時に優婆塞言く」の語を加へて兩者の語を區劃す。

【六一】　八危とは、水難・火難・刀兵難・惡王難等の世の八害なり。

【六二】　信財――慧財の五は、これを以て聖道建立の資財となす故に財となすなり、然るに漢巴の所傳共に七聖財(Sapta-vidhārya-dhana)となし、慚・愧若しくは聞を之に加ふるを常とする、從つて本經作者の敎義が一般のそれと異りたるものの存せしを知らる。

時に優婆塞、偈を說き已つて彼の人に語げて言く。「佛の說きたまふ所の如し、足るを知るは則ち富なり、汝今何の故に我を貧窮と稱するや」と。復た偈を說いて言く。

諸の珍寶ありて　資生の具に豐饒すと雖も　三寶を信ぜずば　彼を最も貧窮なりと說く』

諸の珍寶　及以び資生の具なしと雖も　能く三寶を信ずれば　是れを第一の富と名く』　我今三寶を敬ひ　信を以て珍玩と爲す　汝何の因緣を以てか　我を說いて貧窮とは爲る』　帝釋（Śakra-indra）[五七]毘沙門（Vaiśramaṇa）[五八]は　衆の珍寶に富むと雖も　共の布施する時の如きは　一切を捨する能はず』　我が心知足を愛でて　諸の財寶物に於て　貪著の意あるなく　一切悉く能く捨するなり』　富貴なる者庫藏に　多く衆の珍寶を有てるも　水火及び盜賊は　悉く皆能く侵奪するなり』　彼れ若し喪失するの時則ち大なる苦惱を生ぜん　良醫及び妙藥も　彼の苦を治する能はざるなり』　我れ信を以て寶と爲す　能く侵奪する者無く　心意坦然として樂しみ　諸の憂患の苦ぞなき』

是の偈を說き已つて復た是の言を作さく。「是の故に當に知るべし、庫藏象馬[五九]七寶資生の具を有すと雖も、足るを知らざれば猶名けて貧と爲ん、是れを以て佛は知足は最も富めりと說きたまふ』と。

衆人是の語を聞き已つて皆善き哉と歎じ、眞に是れ正しき說なり、大なる智慧あり、大丈夫と名けんと。各相語げて言く。「自今已後財寶なしと雖も但だ信心あらんに、我等之を見るに稱して富者と爲ん、苦しんで錢財を集むる、皆樂の爲の故なり、室家眷屬を供給して乏くること無からしめんと欲するが爲の故なり、斯の如きの樂は、正に現身の爲なるも、信心の寶は累世の爲とし、人天の中に於て財寶自恣なり、是の故に知んぬ、信を第一の財寶と爲すことを」と。[六〇]時に優婆塞言く。「此の如きの信の財は、生死の中に於て極めて快樂を受け、諸の苦惱なし、金銀珍寶は能く災患を生

酥を更に精製したるものにてクリームの如し。

【五三】聖種（ārya-vaṃśa）佛となるの種姓。この佛語は長阿衆集經（D. 33 Saṅgīti S.）等に出づ。

【五四】渇愛（Tṛṣṇā）渇して水を欲するが如き切實なる欲求、卽ち貪欲の本なり。

＊梵粲斷簡、第四十九葉。

【五五】法相（Dharma-nimitta）萬物の表面に表れたる特色、卽ち萬物の流轉變化する狀態のこと。

【五六】この偈法句經中に出づ、巴利傳原文は左の如し。

Ārogyaparamā lābhā, santuṭṭhi paramaṃ dhanaṃ, vissāsaparamā ñāti, nibbānaṃ paramaṃ sukhaṃ.

—Dhp. v. 204—

猶「中阿含第一五三經、鬚閑提經」の中には左の類偈あり。

無病第一利　涅槃第一樂　諸道八正道　住安穩甘露

【五七】註四六を見よ。

【五八】毘沙門天、多聞天と譯し四天王の隨一、もと金毗羅と同身にて暗黒の屬性たりしが次第に進化して光明神となり、佛時代には帝釋の屬神として四天王の一となり天下の良民を保護し佛法を擁護すと

法の利を得んと欲せば　應に當に小欲を解すべし　此の如き少欲の法は　聖莊嚴の瓔珞なり』　今世に重擔[四九]を除かば　憂なくして而も快樂に　乃ち是れ大涅槃の　宅室[五〇]の初門なり』　魔(Māra)[五一]の軍衆を關制する　要防の隘路たり　魔の境界を度る　無上の印封なれや』　戒を持すること巨海の如く　少欲なること海潮の如くば　能く衆の功徳の爲に　密緻せる覆蓋となり　貪求して疲勞する者の　憩の駕　止息の處となん』　少欲の者に親近するは　牛乳を搾るに如似たり　酪酥醍醐等[五二]　之に因つて而も出すを得　少欲も亦是の如し　諸の功徳を出生す』　能く手を展べて施す者　此の手を嚴勝と名く　受くる者能く手を縮めんに　嚴勝なること復た彼にも過ぎたり』　若し人施與を言はんに　是の語の價量り難し　受くる者我が足ることを言はんに　量り難きこと復た彼にも過ぎん』　若し法を得んと欲すれば　應に少欲に親近すべし　十力は少欲を說いて卽ち是れ聖種[五三]の法としたまへり』　少欲にして財物無く　戒と聞と慧とを增長する　此の如きの少欲の法は　出家の法の食なり』　渇愛等有り[五四]と雖も　終に擾惱すること能はず　且らく後世の樂を置くも　現在に安穩を得ん』

一〇、*貧優婆塞、信財を第一の富と說く緣

復た次に、夫れ足るを知れば、貧しと雖も富めりと名け、足るを知らざれば、富むと雖も是れ貧し。若し聖智の滿てるを、乃ち大富と名く。

我昔曾て聞く。優婆塞あり、人あつて譏呵して云く、最も貧窮なりと。而も優婆塞、佛の讃じたまふ所の知足の法を樂しみ、卽ち法相[五五]に順へり。而して偈を說いて言く。

[五六]無病は第一の利　知足は第一の富　善友は第一の親にして　涅槃は第一の樂にこそ

財と平和の守護神として信ぜられたようである、佛教にては一般に護法神として表れ特に求道の試練を爲す者として各種の文學に使用されて居る、梵天には自ら聽法求道する記事なきも帝釋にはその物語頗る多し、此にも佛時代に於ける兩神格の位置が知られる。

【四七】色力(Rūpa-bala)肉體の相貌の整へること。

【四八】教戒(Dharma-vinaya)佛の教化施設の一切を此の二に攝す。

【四九】重擔(Bhāra)煩惱の異名。

【五〇】宅室、涅槃が一切有情の休息處たることを形容したるもの。

【五一】魔は元來「殺者」を意味する語にて凡て善事を破壞し障碍する惡神に與へられた名稱であるが、佛教にては聖道の妨害となるものに名けこれを客觀化して第六天の魔王等とするも、實は聖道に反せんとする自己の心的傾向に對して呼びかくるのが本義である。

【五二】何れも牛乳より精製せるもの、酪(Dadhi)は凝りて酸味を帶びたるもの、練乳なり、酥はこれを煮詰めて精製せるものにて生酥(Takra)と熟酥(Navanīta)とあり、醍醐(Sarpis)はバタの如し。

想を生じて　貪利して極まりあるなきは　[四一]摩竭魚(Makara)の口の如し』　而して彼の少欲なる人は　貪求の苦のなき故に心恒に悦豫を懐き　歡慶すること節會に同じ』

時に彼の優婆塞、少欲知足の法を讃歎するや、彼の比丘希有の想を生じ、而も之を讃じて言く。「善き哉、善き哉、眞に是れ丈夫なり、法服なしと雖も心已に出家せり、能く佛語に順ひて少欲の法を知れり、而して此れ少欲は諸佛の讃じたまふ所なり」。更に比丘言く。「汝の說く所總じて之を言ひ、深く譏呵を見して、我をして愧踖せしめぬ。汝今家に處して妻子・眷屬・僮僕・使人あり、正に應に貪求して以用て自營すべきに、能く佛語に隨つて少欲を讃歎せり。假使人あつて鐵を以て舌と爲すとも、能く少欲知足を呵すること有る無らん。我今復た鬚髮を剃除し身に法衣を服して、相は沙門に同ずと雖も、然も實には沙門の法を知らずして、方に多欲の事を敎へぬ。[四二]法王の讃めたまふ所の少欲の法を稱述すること能はず。是れ諸善の源なり。佛の　[四三]修多羅(Sūtra)の中にも亦少欲を說いて沙門の本と爲せるが如し。[四四]如來昔日乞食し訖りて、若し餘食あれば、或る時は諸の比丘等に施與し、或は復た水中に置いて用て諸蟲に與ふ。爾の時一比丘あり、乞食して足らず、而も飢色あり、外より來入す。佛既に見已つて而も之に語げて言く。『今餘食あり、汝能く食ふや不や』と。一比丘言く。『如來世尊は少欲に大功德あるを說きたまふ、我今云何か此の食を食つて而も之を噉はんや』と。一比丘言く。『如來世尊の有らゆる餘事は値遇すべきこと難し、[四五]梵(Brahman)[四六]釋天王(Śakra-indra-deva-rāja)等皆悉く頂戴して之を恭敬するなり、我今若し食せんに、當に　[四七]色力と安樂と辯才とを益すべし、是の如きの食は甚だ値遇し難し、云何ぞ食はざらんや』と。時に於て世尊、不食者を讃じたまはく。『善き哉、比丘よ、能く佛の敎を修め、少欲の法を行へり』と。此の一比丘、佛の語に順ひて佛の餘食を食すと雖も、佛は讃歎したまはず。是の故に當に知るべし、少欲の法は佛の印可したまふ所の　[四八]敎戒の本なることを」と。卽ち偈を說いて言く。

【四一】摩竭魚、神話的に信ぜられたる怪魚であるが、漢譯には巨鼇とせるあり、玄應音義には鯨魚のこととしてある。

【四二】法王(Dharma-rāja)佛の異名。

【四三】修多羅、原義「線」の意味にて婆羅門文學の一様式なるも、佛敎にては散文體の簡潔なる聖典の稱に用う、但し後には總じて律に對する敎の方面を述べたる聖典の總稱となつた。

【四四】此の記事は中阿含第八十八經「求法經」(M. 3 Dhammadāyāda-S.)に見ゆ、されど漢巴兩傳共に「無蟲の水中に捨つ」として今經の如く「水中に捨てて蟲に與ふ」とすると反對し、又今經に一比丘言とする「梵釋天王等皆頂戴する云云」の記事は見えない、由つて以て今論作者の所依とせる阿含が現流の漢巴兩傳と異るを知る。

【四五】梵天は印度民族信仰の最高神格の一にて宇宙の司宰神とされ、佛敎にては正法神として主に請法者として知らる。

【四六】帝釋のこと、吠陀以來の古神で吠陀にては因陀羅と呼ばれ宇宙の最高神として信奉せられてゐるが、佛時代にはその信仰稍衰へ主に民間に

復た次に欲は、肉搏を衆鳥の競ひ逐ふが如し。有智の人は深く財患を知つて而も貪着せず。

我昔曾て聞く。修婆多(Suvastu)國、時に比丘あり、壞れたる垣壁に於て[三八]伏藏あるを見る。大銅瓮ありて中に金錢を滿せり、一の貧しき優婆塞を將ゐて而して之の處を示し、卽ち之に語げて言く。「是の寶を取つて以て資生と爲すべし」と。時に優婆塞比丘に問ひて言く。「何の時此れを見るや」。比丘答へて言く。「今日始めて見る」。優婆塞言く。「我れ是の寶を見ること適ま今日なるに非ず、久しき來た之を見る、然れども我用ひず、爾れば今善く聽かれよ、我當に寶の有する所の過患を說くべし、若し是の寶を取らんに、王の聞く所と爲つて或は死に至り、或は謫罸せられ或は復た繫閉されん、斯くの如き等の苦は稱數すべからず」と。卽ち偈を說いて言く。

我れ是の寶を見て來た　年を經ること甚だ久遠なり　此の寶の毒の螫害すること　彼の黑毒蛇よりも劇し』　是の故に此の寶に於て　都て貪心を有することなし　之を觀ること毒蛇の如く　財寶の想を生ぜざるなり』　繫閉して謫罸を被り　或は時に死亡に至らん　一切諸の災害は　皆是の寶に由つて生ず』　能く種々の苦を招き　害と爲ること甚だ怖るべし　故に我寶の所に於て　貪近の想を生ぜず』　[三九]群生は迷つて寶に著し　之を謂ひて珍玩と爲せり　寶は是れ危害の物たるを　妄りに安善の想を生むなり　斯の如きの過患あり　何ぞや用て寶と爲ん』　是の如きは膿汚の身なり　趣みて自ら軀命を支ふも　會らず當に捨てて敗滅すべし　何ぞや用て珍寶と爲ん』　譬へば火を薪に投ずる如し　厭足時有る無けん　人心も亦是の如し　希求するに厭足するなし』　汝若し我を憐愍せば　我に少欲の法を敎へかし　云何か財寶を以てして　而して以て見示し語る』

夫れ少欲知足は　能く大利樂を生ずなれ　若し其れ多欲なれば　[四〇]諸根恒に散亂し貪求して厭足するなく　希望して苦惱を增さん』　然るに此の多欲なる人　常に欲の

【三八】伏藏（Nidhi）、埋伏されたる財寶。

【三九】群生（Bahujana）、多くの生類、一切の生物、此には一切の人間。

【四〇】諸根（Sarva-indryāni）一切の感官、卽ち眼・耳・鼻・舌・身・意の六根のこと。

ば　汝の今此の　苦行の事を爲すも　亦應に天上の樂報を　得べからず』　汝今何の故に　身心迴轉して　苦行を以て　天樂を得んと欲する』　我が佛法中に　斯くの如きの　五熱もて身を炙り　苦行を受くる法にて　彼の天樂を得ること有るなし』　天樂を得んと欲せば　實語等の　諸の善き功德を修めんに　復た貪怖すると雖も　天樂を生ずるを得』　譬へば服藥する如し　或は貪り或は怖るるも　旣に之を服し已るに　藥力必ず行らむ』　若し實語と　諸の功德とに住すれば　或は貪り或は怖るるも　必ず天樂を得ん』

*時に婆羅門、辭窮り理屈して、加報する能はず、默然として住しぬ。時に左右の人、佛法中に於て、淸淨の信を生じ、深く正法を樂ひ、各相謂ひて言く。

善き哉や佛法　大智力あり　甚深にして測り難し　外道の智は　極めて淺薄と爲す　譬へば爆火の如し　若し人身に觸るれば　人として畏れざるなし』　佛法の爆火も　亦復た是の如し　婆羅門に觸れては　能く其をして怖れしむ』　我等今は佛法の　善勝の論を聞くを得ぬ　咸應に　佛涅槃の處に歸向して　恭敬し禮拜すべし』　世尊に　[三六]南無したてまつる　音聲善く柔かに　敷演して法を說きたまふ　女人の智淺きも　佛の甘露を飮んで　能く大衆の中にして　法を說くに畏れなし　誰れか佛語に於て　而も恭敬せざらん』　斯の比丘尼　智慧微淺なるも　能く用て結を滅せり　[三七]牟尼の　尊語は　猶故に能く　此の婆羅門をして　加報する能はずして　默然として住せしめたり』

九、*貧優婆塞、伏藏を見て少欲知足を讃ふる縁

※以下九句の長行は原本に於て偈頌となれるも、今私に勘校して長行とせり。句讀點を施せるところが、偈句の切點である。

【三六】　南無（Namah）、信仰告白の一標語で、普通「歸命」と譯するも根本佛敎に依用さるる歸依（Sarana）に比して多少神祕的傾向を帶ぶるものあり、由つて原音のままに流用するを普通とした、邦語にては蓮如上人の「たすけたまへとたのむこころ」と解せるもの當れり。

【三七】　牟尼（Muni）、原義「寂默者」の意なるも内外通じて聖者の異稱とせらる、今は釋迦牟尼佛を指す。

※梵筴斷簡、第四十六―四十九葉。

べからず』　又汝以て此に　五熱もて身を炙り　苦行と以爲へり　而も道を得とせば
　地獄の衆生の　苦を受くること無量に　種々に楚毒あるも　亦應に道を得べけん』

*婆羅門曰く。

此の苦行を爲して　發心して造作するを　修道と名くるを得ん　地獄の衆生は　逼迫して苦を受く　是の故に　說いて修道と言ふべからず』

*比丘尼曰く。

若し自ら發心して　而も福を得とせば　小兒の火を把るも　亦應に福を得るべし　然るに實に得ず　是れを以て之れを推すに　汝の所作する　五熱に身を炙ることも　亦福有る無けん』

*婆羅門曰く。

嬰孩なる小兒に　智慧あることなし　是を以て福なし　我は智慧あり　造作すること此の如く　五熱もて身を炙れり　是の故に福あり』

*比丘尼言く。

若し有智を以て　苦行を修むるに　便ち福ありとせば　眞珠を採る人の　身を刺して血を出し　珠乃し得べけんも　亦應に福あるべし』

*婆羅門曰く。

貪心を以ての故に　復た血を出すと雖も　名けて福と爲ず』

*比丘尼言く。

汝苦行を爲して　天上の樂を貪るも　亦應に福なかるべし』　若し貪求を以て　果報無からば　遊獵の人は　應に報を得べからず』　若し魚獵をして　報を得ざらしむれ

---

*偈外の語とすべし。

*偈外の句とすべし。倣上。

*偈外の句とすべし。倣上。

*偈外の句とすべし。倣上。

*偈外の句とすべし。倣上。

*偈外の句とすべし。倣上。

「惡剃髮者よ、何者か炙るべきなる」。比丘尼言く。「汝若し炙るべき處を知らんと欲さば、汝但だ、汝の瞋恚の心を炙れよ、若し能く心を炙れば是を眞の炙と名く、牛の車を駕するが如し、車若し行かずば乃ち須く牛を策つべく、車を策つべからず、身は猶車の如く、心は彼の牛の如し、是の義を以ての故に、汝應に心を炙るべし、云何か身を暴せん、又復た身は*材の如く牆の如し、復た燒炙すと雖も何を將てか補はるるぞ」と。卽ち偈を説いて言く。

心は城主の如し　城主瞋恚して　乃ち城を求めんと欲するも　增益する所無からん』

譬へば師子の如し　人あつて或は　弓箭瓦石を以て　而も之を打射せんに　而も彼の師子　彼の人を*逐逮せん』　譬へば癡犬の如し　人あつて打擲せんに　便ち瓦石を逐ひて　本を尋ぬるを知らず』　師子と言ふは　智慧人に喩ふ　能く其の本を求めて　而も煩惱を滅ぼす』　癡犬と言ふは　卽ち是れ外道なり　五熱に身を炙つて　心の本を識らず』

*婆羅門言く。

何をか炙心と名くる

*比丘尼言く。

[三五]四諦の智は　四つの火聚の如く　修道は日の如し』　夫れ智慧の者は　四諦の火と修道の淨日とを以て　此の五法を以て　而も其の心を炙る』　而も此の身は　自在なるを得ず　何の故に身を苦しむる　若し苦しめんと欲すれば　當に彼を苦しむべし　能く身本を苦しめん』　行來坐臥は　身の所爲に非ず　但だ心の使たるのみ　若し身の作に非ざれば　過は心に在らん　何の故に身を苦しむる』　心若し身を離れんに　身は木石の如からん　是れを以て智者は　宜しく其の心を責むべし　應に身を苦しむ

*三本に依る、麗本「林」に作れり。

*二本に依る、麗本「逐逐」に作る。

*この一句、原本偈中に挿入するも、今偈外とすべし、以下同。

*同上。

【三五】四諦(Catvāri aryāṇi satyāni)、苦・集・滅・道の四眞理、佛教々義の綱格にして又出離の要諦とす。詳しくは本國譯「中阿含第三十經、分別聖諦經」等を參看。

如し汝、慈心を起さんに　必ずしも能く利益ありて　而も大果報を得るとせず　自ら餓えて睡眠するも　其の事も亦是の如し　彼を益する無しと雖も　亦善き果報を得らめ』

[三二]優婆塞答へて言く

慈心もて瞋害を除き　瞋害を除くを以ての故に　能く善き果報を獲　汝の法は苦行を作して　瞋を增長する故に　便ち身口の惡を起すなり　云何か善果を得るならむ』　慈心は則ち爾ならず　若し慈心を起すの時には　能く瞋害を除滅し　瞋害無きを以ての故に　則ち身口の善を起さん　無益にして而も苦行する　云何か慈と善と同じからん』

譬へば師子の吼えたらんに　諸獸の前に在ること無き如く　如來の[三三]無礙辯も　其の事も亦是の如し　一切諸の外道は　敢て抗對する者無からん　說法して外道を摧くに　默然として詶答する無からん』

八、*比丘尼縷褐炙婆羅門を度する緣

復た次に、夫れ身口の業は自在なる能はず、要らず意に由る。

我昔曾て聞く。[三四]比丘尼(Bhikṣuṇī)あり、賒伽羅國(Śakara)に至る。彼の國の中に於て婆羅門あり、五熱に身を炙り、額上に水を流し、胸腋懷中悉く皆汗を流し、咽喉乾燥し脣舌燋然す。涎唾あることなく四面に火を置けり。猶し融金の如く、亦黃髮の如くにて、紅赤熾然たり。夏日の盛熱は以て其の上に炙す。展轉反側するも避くべきの處なく、身體の燋爛すること餅の鐺に在るが如し。此の婆羅門、常に縷褐を著け、五熱に身を炙る。時人因つて名けて縷褐炙と號く。時に比丘尼、是の事を見已つて而も之に語げて言く。「汝、炙るべき者は而も之を炙らず、炙るべからざる者は而も便ち之を炙れり」と。爾の時縷褐、是の語を聞き已つて極めて瞋恚を生じ、而も是の言を作さく。

【三二】 偈外の語とすべし。

【三三】 無礙辯(Pratisaṃvid)佛及菩薩は義(artha)法(dharma)詞(nirukti)辯(pratibhāna)の四に於て障礙さることなく利他敎化の事業に於て自由なり。四無礙辯のこと本國譯「增一阿含卷二一・第五經」「仁王經下」「涅槃經卷一七」「智度論卷二五」「俱舍論卷二七」等に出づ、參看。

*梵本斷簡、第四十二—四十六葉。

【三四】 女の佛弟子なり、比丘の註(前出、註一七)を參照。

此の苦甚だ長遠に　深廣にして崖限なし』　譬へば惡子を有ちて　其の孝養なるを得ず　諸の罪果を作して　彼に由つて衆苦を受くるが如し』

[28] 是の時、彼の外道　而も是の如き言を作さく　「諸仙の苦行を修むるも　亦復た天に生るるを得」と』　優婆塞偈を說いて　而も彼に答へて言く

諸仙の天上に生ずるは　棘刺に臥するに因るに非ず　施と戒と實語とに由り　而も天上に生るるを得るなり』　汝苦行を作すと雖も　都て利益有ること無し　猶し春に農夫の種子を下さざらんに　秋に至つて果實として　而も收穫し得べきこと無きが如し

[29]「但だ諸の苦行を修むるのみにて」　畢竟じて獲る所無し』　夫れ道を修せんと欲する者は當に此の身を資くべし　美味なる飲食を以て　軀命を充足し　氣力既に充溢し能く戒定慧を修むなり』　斷食して甚だ飢渴し　身心倶に擾惱せんに　心をして專定ならしめず　云何が聖果を獲られんや』　復た餚饍を食すと雖も　美味に貪著せず　但だ戒と實語と　施と忍と及び禪定との爲にせよ　斯等を種子とせんに　能く善き果報を獲るならむ』　身は飢渴を受くると雖も　而も心美味を望めば　時に因つて倘甘んぜず況んや美果を獲るに當つておや』　若し殘害の心を有てば　他をして畏怖を生ぜしめん　若し殘害の心を除らば　能く[30]施無畏者たらん　是れを則ち行法と名け　若し復た殘害を生ぜんに　之を稱して非法と爲す』　美味充足すれば　終に他を害するの意なし　無害の心を以ての故に　彼を損ずること有る無し』　設ひ大慈心を起さんに然も大善果を得ん　汝自餓を行ずと雖も　飢渴して而も睡眠するなり　亦復た無益の事なれや』

[31] 外道、是の言を作さく、

雜念を止息して心を一境に集注すること、卽ち禪定を意味す、觀（Vipaśyanā）は法性を諦觀することにて卽ち智慧のことである、支那佛教にてはこれによつて教門の分別を立つるまでに形而上化せる解說行はれたるも、今は上述の原義にて充分なり。

【二八】以下「優婆塞……答言」に至る二句六偈は、本來長行（散文）たるべき性質のものなり。

【二九】「……」の一句三本に缺け唯麗本のみにあり、但し偈數より見て存するを正しとす。

【三〇】施無畏者(abhaya-dāta) 佛、又は菩薩の畏名、よく生老病死等一切の人生の怖畏を除くの故に。

【三一】此の一句、又偈外の文と見るべし。

貪瞋の刺苦は無量身に及ばん、刺を以て身を刺す、此の瘡は滅し易きも、貪瞋の刺瘡は[二一]歷劫に差えず、是の故に宜しく速かに深毒の刺を除くべし」と。卽ち偈を說いて言く。

『汝今應に勤めて　心中の深毒の刺を拔くべし　宜しく利智の刀を以て　貪瞋の刺を割斷すべし』　貪瞋は深く人に著して　世世に祛るべからず　愚小なる諸の邪見は　正眞の道をば識らず』　身を苦しめて棘刺に臥し　苦を以て苦を離るを欲す　人棘刺に臥するを見て　遠ざけ逃避せざるなし』　唯だ汝斯の苦に於て　抱持して放捨せず　我此の如きの事を見て　乃ち邪正有るを知る』　是の故に重ねて自ら　十力の[二二]世尊　大悲ありて衆苦を拔き　正道を開示したまふ者に歸するなり』　彼の邪徑を涉るの衆を導くに[二三]八正道を以てしたまふ』　外道邪見等は　苦のために欺誑せられ　極めて信と爲て苦に著し　流轉して窮り已るなし　諸の有智慧者は　此れを見て倍す信を增す』　外道は甚だ愚惑にて　苦盡に解脫を得とするも　[二四]出世の大仙の說にては　衆具悉く備足して　八正道を修するを得　修道の故に解脫すと』　是れを以ての故に當に知るべし　安樂にして解脫を獲ること　汝、外道の　苦を受けて　[二五]涅槃(Nirvāna)を得るが如からず』　心に依る故に　善惡等の諸業を造作す　汝當に心意を伏すべし　何の故にか橫まに身を苦しむる』　身は諸の結使爲り　妄りに種々の苦を修めんに　是の苦修道は地獄ぞ應に是の道なるべし』　然るに此の地獄の中には　斬截及び糞屎の　熾燃として燒炙する等　具さに衆の苦毒を受けん　彼に諸の苦を受くると雖も　苦行と名くるを得ず』　智慧もて　[二六]三業を祛ち　垢穢皆消除する　[二七]釋迦文(Śakya-muni)佛の敎は諸の一切の人を敎ふ』　應に天の甘露を求むべく　又　止觀を宣說し　亦智慧を莊飾する　是を眞の苦行と名く』　何ぞ徒らに身を勞するを用て　無益の苦をば造作する

【二一】　歷劫とは生死輪廻を無限に重ぬること。

【二二】　世尊は婆伽梵（Bhagavat）の譯、有德者の意にて一般に佛陀を呼びかくる場合の尊稱として用ひらる。

【二三】　八正道（ārya-aṣṭa-aṅgika-mārga）、正見・正思・正語・正業・正命・正勤・正念・正定の八支の正道にて佛は是を以て兩端に墮せざる中道となし、轉迷開悟の直道として四諦中の道諦に配せり。本國譯中の「中阿含第三十一經、分別聖諦經」に詳說さる。

【二四】　出世（Lokôttara）、世俗の範疇を出でたる、卽ち佛法のこと。

【二五】　涅槃は語義としては寂滅の意あるも、佛敎にては之を以て煩熱の消滅せる理想境を表象しようとして居る、もと印度諸宗敎に通ずる理想であつたが、佛敎にては特にこの語に於て理想の完現を示そうとしたので、後世の大乘經典中には積極的に宇宙的大實在としての解釋を施すものも生ずるに至つた、本國譯中の「大般涅槃經」の中に說かるる佛性論涅槃論等を參看すべし。

【二六】　三業（Trīṇi karmāṇi）身・口・意の三作用、主として道德的立場に於て使はるる語。

【二七】　止觀、止(Samatha)は

苦患は甚だ多し　是の故に應に苦を念ずべし』　貴の自在を求むる莫れ　汝の願求の心を捨てよ　唯だ解脫のみ求むるありて　衆苦悉く消除せん』

婆羅門、是の偈を聞き已つて默然として答へず、合掌して比丘に向ひ、白して言さく。「尊者よ、善く辯才を有ちて我が心を開悟せり、設使、彼の〔二〇〕*三十三天王を得たらんも、亦甘樂とせず」と。即ち偈を說いて言く。

善き意巧方便と　明智もて能く觀察し　我が爲めに邪願を除き　正眞の路に示導せり』

善友は當に是の如くなるべし　世間の稱讃する所　常に應に是の友に近づくべし　諍惱恚を有つこと無からん』　善く我が心意を導き　邪を迴らして正道に入れ　我に善惡の相を示して　解脫を得せしめぬ』

七、*優婆塞棘刺苦行者を化する緣

復た次に邪道に依れば衆の苦患を得、正道を修むれば信心及以び名稱を增長す。有智の人、應に邪正を觀ずべし。

我昔曾て聞く。一の人あり、行路の側に於て小苦行を作し、若し人ある時には棘刺の上に臥し、若し人なき時には別に餘處に居す。人あり、見已つて而も之に語げて言く。「汝、今も亦徐ろに刺上に臥すべし、何ぞ必ずしも濃を縱にして傷毀すること甚だ多からんや」と。此の人聞き已つて深く瞋忿を生じ、身を放ち體を縱にして棘刺上に投ずること轉た前よりも劇し。時に一優婆塞あり、其の傍らに在つて立つ。是の苦行者見已つて自ら擺轉すること復た增す劇し。優婆塞即ち之に語げて言く。「汝、前に於ては但だ小刺を以てし、今復た乃ち瞋恚の棘を用ひ、而も以て自ら刺せり、先に刺す所は傷毀甚だ淺きも、貪瞋の刺苦は乃ち*深刺と爲す、棘刺に臥するは苦は一世に止まるも、

*麗本「二」に作り、今は三本に依りて訂す。

【二〇】三十三天は忉利天(Trāyastriṃśa)の譯にて吠陀期には三界の神神を總稱すること猶我が八百萬神の稱の如くであつたが、佛時代に至りては帝釋天を中心とする一世界として信ぜられ須彌山の頂上に存するものと考へられた。印度の神話的世界の一である。

*梵莢斷簡。第三十九・四十・四十一葉。

*三本に依る(麗本「利」とす)。

を供す　汝若し瞋恚する時　當に言ふべし、彼れの頭を斬らんと』　或は言はん、手足を截らんと　又時に目を挑らしめなん』　汝今一羊を憐れんで　方に多殺害を欲へり　若し實に悲心あらんに　宜しく王を求むる意を捨つべし』　人の刑戮に臨んで　苦を畏れて多く酒を飲み　或は華林の極めて敷榮し　猛火の將に焚えんと欲するが如し　又金鎖に著くに　好なりと雖も能く繫縛するが如し』　王の位も亦是の如し　恒に恐懼の心を有ち　威力と諸の侍從とあり　莊嚴するに珍寶を以てす』　後の過患を見ずして　凡夫は貪り願つて求め　既に諸の惡を造るを得て　[一八]三惡道に墜墮すること　蛾の火色を貪つて　中に投じて自ら燋滅するが如し』　五欲の樂あり　名稱普く聞知すと雖も　恒に多く恐懼を懷き　憂苦の患極めて深し』　猶し毒蛇を捉へ　或は、風に逆つて炬火を持するが如し　捨てざれば危害の至ること　亦臨死の苦の如けん』　王者の遊出するの時　頂上に天冠を戴き　衆寶もて自ら瓔珞し　上妙莊嚴に服して』　名馬衆寶の車もて之に乘じて出でて遊巡す　道に從ふもの數百千　威勢極めて熾盛ならん』　若し冠敵あるの時には　寶鎧もて自ら身を嚴ひ　勝てば則ち多く殺害し　負くれば則ち身命を失う』　妙香を以て身に塗り　上服も香を以て薰らし　食む所の諸の餚饍は　百味其の口を恣にせん』　所須皆意に隨ひ　違逆する者有ること無く　行來若しは座臥に擧動悉く疑畏あり』　親友も信ぜず　復た親友と爲ると雖も　恒に危懼の心あり　云何名けて樂と爲ん』　魚の鉤餌を呑む如く　蜜を利刀に塗る如く　亦[一九]網羅罻の如し　魚獸は其の味を貪つて　後の過患を見ず』　貴富も亦是の如し　終に地獄の苦を受けん　地獄の垣墻壁　屋地皆熾然たり　罪人其の中に在り　火出でて自ら身を燒く　苦を受くること量りあるなし』　汝、當に自ら思惟すべし　爲す所の樂既に少く　衆の

依によつて生活すべきを命ぜらる、その第一は「食は乞食に依るべし」といふのであつて、これによつて比丘の稱が起つたもののようである、

【一八】三惡道（Trayōpāyāḥ）六道中の地獄・餓鬼・畜生の三。この三は惡業に報ゐて現ずる苦道なる故に。

【一九】網羅罻、三字共網のこと、即ち魚鳥獸を捕ふる各種の網を擧げたのである。

婆羅の所に往返し、其れと事を共にして親と疏に存らず、正に其の中に處す。所以は何ん。若し親昵を與ふれば恐らくは其れ憍慢を生ぜん。若し其れと疎ならば憎惡すと謂爲はん。即ち偈を說いて言く。

杖を以て日中に置かんに　竪つるも臥するも倶に影なし　杖を執つて倚亞すれば　其の影則ち脩長なり』　彼の人も亦是の如し　親疏宜しく中を得るべく　漸に通泰ならしめ已つて　然る後にて說法爲ん』

此の婆羅門、智慧あることなし。賢愚を別たず、供事極めて苦しめり。是れを以ての故に我今、宜しく親昵すべからず、亦、應に疎なるべからず。何を以ての故に。事は愚人の苦にして供事を解せざるも亦名けて苦と爲す。種々に方便して共に相ひ習近し、漸に體を相し得を信じて與に言語す。爾の時【一七】比丘(Bhikṣu)婆羅門に問ふらく。「汝今何の故に、手を擧げ、日に向ひ、灰土の上に臥し、裸形にして草を噉ひ、晝夜臥せず、足を翹げて而も立てるや、此の苦行を行じて何の所求とは爲すぞ」と。婆羅門答へて曰く。「我れ國王を求む」と。此の婆羅門、後少時にして身に病患に遇ひ、往いて醫師に療疾の方を問ふ。醫師報へて言く。「宜しく須らく肉を食むべし」と。是に於て婆羅門、比丘に語げて言く。「汝、我が爲に檀越の家に至りて少肉を乞索し、以て我が疾を療すべし」と。時に比丘、是の思惟を作さく。「我今彼を化する、正に是れ其の時なり」と。是の念を作し已つて化して一羊と爲り、其の邊に繫著す。婆羅門、比丘に問ひて言く。「汝、肉を索めんとして今何處にか在る」。比丘答へて言く。「羊即ち是れ肉なり」。婆羅門、大いに瞋恚を生じて而も是の言を作さく。「我寧んぞ羊を殺して而も肉を食はんや」と。是に於て比丘、偈を說いて答へて言く。

汝今一羊を憐れみ　猶尙ひて殺すを欲せず　後に若し國王と爲らんに　牛羊と猪豕と雞犬と及び野獸と　殺害して量りある無からん』　汝は座上に在御し　厨宰は汝の食

いへば「死後の存在」即ち生れ變りのことである。

※梵筴斷簡、第三十五・六・七葉。

【一五】沙門、語義よりすれば休息せる人、又は疲れたる人などと解され、社會生活、又は欲望生活より遁れて平安を無欲の境に求むる人であり、生活様式よりすれば家を捨てて一定の住所を持たないで乞食する人である、從つて遊行者、隱遁者、出家などともいひ得るが、印度にては佛時代の稍前に起つた非教權主義(吠陀に反すること)の新興宗教で、佛教も亦形式的には此の一派に屬するものであるから、佛弟子も亦沙門と稱された。今は佛教の出家である。

【一六】夏坐安居(Varṣa-vāsa)印度にては一年を寒季・雨季・暑季に三分し、この中雨季四ケ月乃至五ケ月(陽曆六月十六日—十一月十五日)の間は一定の住所なき沙門は遊行不可能なり、よつて佛成道の第六年(異說あり)に、この期間は專ら屋内に止住して修禪すべきを制せらる、正しくは雨安居と呼ぶべきも、支那の風候に從つて夏坐安居と譯す。

【一七】比丘、乞士と譯す。佛弟子の一般的稱呼であつて、佛弟子は入門の其の日より四

聖の行じたまふ所の少分もあるなし、是の故に當に知るべし、夫れ少欲とは錢財と多くの諸寶物に在らざることを。何を以てか之を知る。[一一]頻婆娑羅王(Bimbisāra)の如きは富みて國土、象馬、七珍を有するも、猶ほ少欲と名く。所以は何ん。財寶ありと雖も心貪着せずして聖道を樂しむ、是れを以ての故に、復た富みて七珍盈溢する有りと雖も心希求なきを名けて少欲と爲るなり。財寶なしと雖も希求厭くことなきは、名けて少欲知足と爲すを得ず」と。卽ち偈を說いて言く。

若し、衣食なきを以て　[一二]倮形尼乾(Acela Nir-gantha)等　諸の勤苦を造作するを　以て苦行と爲さば』
[一三]餓鬼及び畜生の　貧窮にして諸の衰惱せる　斯等艱難に處せるも　亦應に苦行と名くべし』
此の人も亦是の如し　徒らに自ら疲勞爲り　形は苦行を作すと雖も　而も心は貪著を懷けり　希求するに厭き足ることなき　名けて少欲とは爲ず』
復た衆物を具ふと雖も　心に染着する所なくして　修行して聖道を樂しむ　是れを乃ち少欲と名く』
譬へば諸の農夫の如し　穀を以て田中に種ゑ　多くの果實を貪り收むる　名けて少欲とは爲さず』
身は惡癰瘡の如し　將て適ま衆具を須ゐんも　意道を求むる故に　是れを少欲者と名く』
惡癰瘡を治さん爲に　少かに資生の具をば受け　心[一四]後有を貪らず　是れを眞に少欲と名く』
心意諂曲ならず　亦名利を求めず　資生の具ありと雖も　名聞もて實德を具ふ　能く斯の如きの事あるは　是れぞ乃ち眞の少欲』

六、*沙門羊となりて苦行婆羅門を化する緣

復た次に、復た持戒すると雖も人天の樂に爲すは、是れ破戒と名く。

我昔曾て聞く。[一五]一沙門(Śramaṇa)あり、婆羅門と空林の中に於て[一六]夏坐安居す。時に沙門、數々

【一一】摩竭陀の王にて阿闍世王の父、國王中最初の歸佛者にして生涯忠實なる信徒として護法に力め、竹林精舍を寄せたると佛に布薩を設けんことを勸めたるを以て有名、晚年は愛兒の叛逆に遭ひて牢死せり。

【一二】佛時代に同世して起つた苦行主義の宗教で耆那教のことである。苦行によつて解脫を得と信ずるので、無衣惡食がその特色として外見され、よつて人々倮形梵士と呼ぶを普通とした。六師外道(卷一の註四一、參照)の隨一とす。

【一三】餓鬼(Preta)、六道の一。本來は死者の靈を意味したるも、輪廻說の進化すると共に、神界・人界・畜生界若くは懲罰界(地獄)に趣かざる死靈を豫想して(後世の中有の如し)、別に一道を立て此の名を冠した。從つて餓鬼には定住の處なく、食物の如きも確定せられてなかつたのであるが、後世は此の點より種々なる解釋と其の種類を豫想せられるに到つた。佛教にては之を倫理的意義に止揚して用ふるを本義とす。

【一四】後有(Aññatha-bhāva, pāli)別の存在、異りたる存在の意味、卽ち空間的にいへば「他の境遇」であり、時間的に

五、*優婆塞、外道を信ずる親友を化する緣

復た次に、夫れ少欲とは、財物ありと雖も心に愛着せざれば、猶ほ之を稱して、名けて少欲と爲すを得。

我昔曾て聞く。優婆塞あり、彼の優婆塞、時に親友ありて婆羅門の法を信ず。時に彼の親友、善く、婆羅門の弊衣して、苦行し、〔九〕五熱に身を炙り、常に惡食して糞穢中に臥するを信じ、即ち優婆塞を呼んで言く。「汝、此に就て婆羅門を見るべし、汝頗し、曾て清身自ら苦しむる高行の士にして、少欲知足なること此の如き人を見たるや不や」と。優婆塞言く。「此の如き高行は汝を誑かすべし」と。即ち親友と共に婆羅門に問ふらく。「汝、今の苦行するは何の求むる所と爲すや」。婆羅門言く。「我今苦行して王爲るを求めんと欲す」。時に優婆塞、親友に語げて言く。「此の人今は、方に大地庫藏の珍寶を求め、宰割自恣して美味を貪嗜し、宮人侍御して女色を好樂し、種々の音樂にて而も以て自ら娛しみ、大臣長者と作りて諸の財寶を有すと雖も、其の意に適せず、乃し一切大地の人民の珍寶を希求せんと欲せん、何ぞ以て之を稱して少欲とは爲る、汝は但だ其の身行に苦行するを見て便ち少欲といふのみ、此の人の求むる所に厭くなきを知らずして、少欲とは謂爲へり」と。

即ち偈を說いて言く。

所謂少欲とは　必ずしも惡なる衣食に非ず　諸の資生の具のなき　之を以て少欲とは爲る』
此の人今に於ては　心、大河海の如し　貪求して厭き足ることなく　云何か少欲とは名けん』
今、此の苦行を修めて　〔一〇〕五欲を貪渇する故に　此の人實は虛僞にして
詐りて少欲の相を現せるのみ　貪たる故に自ら苦しむ　實は少欲の者に非ず』

是の偈を說き已りて、優婆塞復た是の言を作さく。「今は此の人、諸の貪欲・瞋恚・愚癡を具し、仙

*梵、缺。

【九】五熱 Pañcatapās とは婆羅門の苦行にして織田氏辭典には五體を苦しむることとあり。

【一〇】五欲 (Pañca-kāmaguṇa) 一般には色・聲・香・味・觸の五種の感覺對象のことをいひ、別に財・色・飲食・名・睡眠の五つをいふことあり、こは支那佛教の立說にて今は前者を取るべし。

せしむべし』　共れをして、將來の大苦難より　免離するを得しめかし　我當に錢財を與へて　彼をして佛を供養しまつらしむべし』　若し彼れ佛に向はずば　罪過は終に滅びざらん　人の地に因つて跌くに　還つて扶として起つを得る如く　佛に因つて過罪を獲　亦佛に因つて而も滅びん』

時に王、即便に錢財を賜ひ、教へて佛の邊に諸の功德を作さしむ。爾の時偸者、即ち是の念を作さく。「今は大王、若し佛法の中に調順せる人に非ずんば、我が愆罪を計つて應に斬害を被すべし、此の王、能く容たり、實に是れ大人、我が重罪を赦せり、釋迦如來は甚だ奇特たり、乃ち能く、邪見の國王を調化して斯の如きの事を作したまふ」と。是の語を說き已つて還つて塔所に到り、匍匐して寺に向ひ、合掌歸命して而も是の言を作さく。「大悲の世尊、世間の眞濟、涅槃に入りたまふと雖も猶ほ能く命を以て我を賑賜したまへり、世間咸な皆號して眞濟となす、名稱普く聞えて諸の世界に遍し、今に及んでは我が生命を濟ひたまへり、是の故に眞濟の名は虛設ならず」と。即ち偈を說いて言く。

世間に眞濟と稱ふる　此の名實にて虛ならず　我今救拔を蒙り　實の眞濟の義を知りぬ』
世間皆熾然たり[六]　諸の欝蒸せる惱多し　慈悲淸涼の月　熱惱の苦を照除したまふ』
如來世に在せしの時　曠野鬼[七]（Āḷavika yakkha[*Pali*]）の所に於て　首長者 Hatthaka[*Pali*]を拔濟ませしかど　是の事未だ難とせず』　今涅槃の後に於て　遺法もて危厄を濟ひたまひ　我をして苦惱を免れしめす　是ぞ乃ち甚難と爲す』　云何か世の工匠の奇巧もて聖心と合ひ　圖像に[八]、右手を擧げて　安慰の相を示作したまへり』　怖ある者之を覩て已に　尙ほ能く恐懼を除くなり　況して佛の世に在せし時に　濟はせらるるは甚だ弘多なり　今大いなる苦厄に遭ひて　形像もて我を免濟したまへり』

【六】熾然とは煩惱の盛なるにいふ。

【七】雜阿含卷五十第二經に出づる阿䳥鬼敎化なり。但し首長者救濟の事は巴利相應部註（Sāratthappakāsinī PP. 217 f. 錫崙本）に出でゐる。

【八】當時圖像佛の禮拜されしを示す珍資料なり。「右手を擧げて」云云は佛像の標幟にて印像と呼び、その佛が如何なる精神若しくは佛行をなせるかを表象するものである、今は一切衆生に怖畏なき位を與へんとの本願を示す「施無畏印」とす。又當時既にかかる印象までも發達しゐたることを認むべき好文献なり。

をして看せむるに、既に彼に至り已つて寶珠を見ず。但だ、根下に血流れて地を汚せるを見る。血跡を尋逐して[三]迦陀羅(Khadiraの)林に至るに、未だ彼の林に到らずして已に偸珠人の樹間に竄伏するを見る。偸珠の人、珠を取る時に當つて棖を墮して脛を折くの故に、是の血あり。卽ち此の人を執へて將ゐて王の邊に詣る。王初め見るの時甚だ忿恚を懷きしも、其の傷毀せるを見て復た悲愍を生じ、慈心にて之を視、而も之に語げて言く。「咄なる哉男子よ、汝甚だ愚癡にして佛の寶珠を偸めり、將來の世、必ず惡趣に墮せん」と。卽ち偈を說いて言く。

怪しき哉や甚だ愚癡しく　無智にて大惡を造りたり　人の杖捶を畏れて　返つて斬害を受くるが如し　貧窮の苦を畏れて　此の狂愚の意を興しぬ　少かの貧乏を安んぜずして　長く無窮の厄を受けし

爾の時一の臣、是の偈を聞き已つて卽ち王に白して言さく。「王の說きたまふ所の如し、眞實にして虛りならず」と。卽ち偈を說いて言く。

[四]塔は人中の寶爲り　愚癡なれば輙ち盜竊したり　斯の人無量劫に　三寶に値ふを得ず　如昔一の人ありて　信心歡喜する故に　耳上の[五]須曼花(Sumana)以用て佛塔に奉り　人天に百億劫のあいだ　極めて大快樂を受けたりき』　十力の世尊の塔に　寶を盜みて自ら營む　是の業報を以ての故に　地獄にこそは沈沒せん』

復た有る一臣あり、忿を懷いて而して言く。「此の如く愚人の罪咎已に彰る、何ぞ呵責を須ゐんや、宜しく刑戮を加ふべし」と。王、臣に告げて言く。「此の語を出す莫れ、彼の人已に死せり、何ぞ更に殺を須ゐん、人の地に倒れしが如し、宜しく應に扶け起すべし」と。時に王、卽ち偈を說いて言く。

此の人已に行を毀てり　宜しく速かに之を拔濟すべし　我當に財寶を賜ひて　懺悔修福

【三】學名 Acacia catechu, 苦楝木、毒樹刺、薊毬花屬の植物。

【四】塔は率塔婆(Stūpa)の略音にて、佛敎にては支提(Caitya)より進化したる建築である。原義は塚にて死屍の葬處たること日本の古儀と一致す。而して後に之に廟堂建築の進化を見たることも、我が神社建築の例に類す。佛敎にては塔を建てて崇敬するに足るものとして、佛、辟支佛、聲聞(阿羅漢)、轉輪王の四人を擧ぐ例なり(本國譯「長阿含」卷三遊行經參照)、これによつて此に「塔は人中の寶」といふ。

【五】大輪の花咲く素馨の一種。

卷の第二

四、*師子國王偸人を化して歸佛せしむる縁

復た次に法を聽くとは、大いなる利益あり、智慧を增廣し、心意をして悉く皆調順ならしむ。

我昔曾て聞く。[一]師子(Siṃhapura?)諸國のこと。爾の時、人あつて[二]摩尼(Maṇi)寶を得、大いさ人の膝頭の如し。其の珠、殊妙にして世に希有とせらる。以て王に奉獻するに、王、珠を得已つて此の珠を諦視して而も偈を說いて言く。

『往古の諸王等　寶を積んで名稱を求め　諸の賓客を衆會して　寶を出して自矜高らけし』

『位を捨て命終るの時　寶を捐てて而も獨り往く　唯だ善惡の業のみありて　身に隨ひて捨て離れず』

『譬へば蜂の蜜を作るが如く　他得て自らは獲られず　財寶も亦た是の如し　他を資くも己に隨ふなし』

『往昔諸の國王ありて　寶の爲に誑され　儲積し已つて他に待ち　一とし己れに隨ふ者なし』

『吾今當に自らの爲に、必ず寶をして己に隨はしむべし　唯だ佛福田の中にのみ　諸の功德を造作せん　己に隨ひて後世に至り　善報あつて朽滅せず』

『當に命終の時に臨んで　一切は皆捨て離れん　宮室、親愛　大臣、諸の猛將を擧げて　悲戀して亡者を送らんも　塚に至れば則ち家に還る　象馬と寶の輦輿、　珍玩と及び庫藏　人民と諸の城郭　園苑なる快樂の處　飄然として獨り捨て逝き　都て隨從する者なし』

王、偈を說き已つて卽ち塔所に詣で、此の寶珠を以て塔の棖上に置きたり。其の明の顯照することと猶し大星の如し。若し日出づるの時には王の宮殿を照して暉曜相映ずること常明に倍せん。珠の光明も日日常に爾り。然るに、一日の中に於て卒かに光色なし。王、其の爾るを怪しみ、卽ち人

*梵筴斷簡第三十、三十一葉。及び同紙本斷簡、第一葉。

[一] 西域記に僧訶補羅と記すものならん。

[二] 寶玉の總稱、これを如意寶とするは Cintāmaṇi (神祕なる寶) と混ずるなり。

十四葉表二行目)に Catvāraś-c'amro = pumāḥ pudgalāḥ (四種菴摩羅喩人)とあり、增一阿含二五品第七經(四果喩)に相當す。

【九〇】 和合衆(Sangha)。僧伽の譯にて佛弟子教團のこと。

【九一】 僧伽は三寶(tri-ratna)中の第三位なり、三寶とは佛と法と僧伽の三、この三佛教の宗教としての構成要素にして信仰對象としての敎權たるべきものなれば敬して三寶といふ。

【九二】 學名 Michelia Champaka, 黃又は白の叢花をつけ、香氣の高きを以て有名。

【九三】 不明の草なるも、佛典中には花好にして而も臭氣極めて惡しきものとして上の薝蔔又は栴檀と比較して出ださる、

【九四】 迦葉を名告るもの數人あるも今は摩訶迦葉なり、マハーチッタ村の大富豪の子、出家の事は「雜阿含四一卷」等に出づるも「本行集經四六卷」最も詳し。

【九五】 佛制の律、特に殺盗淫妄の四重禁を破れるもの。

【九六】 凡夫(Pṛthagjana)。佛敎的思想に理解なきもの、卽ち何等かの意味にて現實に執ずるもの、かの哲學者等、形而上的實在を考へるもの、或は創造神を信ずるものなど、すべて世間的智識に基くが故に凡夫の列に入るものとす。

【九七】 懺悔(Kṣamayati)。罪を告白して他に寬恕を請ふこと。

【九八】 梵本(第二十六片裏二行)前後を缺いて唯 Bharadvāja の一語のみなるも、恐らく突羅闍は是に當るべし、雜阿含四十二卷十三經之に當る、相當本たる別雜四・一八には婆羅突邏闍とありて今に一致し、雜阿は火與とし巴利(S. 7. 2. 2)は udaya とす、今經と別雜が其の傳一なるを知る。

【九九】 瞿曇彌(Gautami)。名は摩訶波闍波提(Mahā-prajapati)、佛の養母なり、今の記事は「中阿含第百八十經瞿曇彌經」に出づ。猶梵本には Gauta = mi-sūtra とせり。

【一〇〇】 見諦道とは佛の教法たる四聖諦を如實に見るを得る境地。

【一〇一】 果は四果、向は四向。註六(八輩衆)參照。

【一〇二】 中阿含第百八十五經牛角娑羅林經(下)に出づ。

【一〇三】 族姓子(kula-putra)は元來婆羅―及び富豪の子弟を呼ぶ稱なるも、此には佛弟子が諸階級中の優者として呼ばる。

【一〇四】 右揭中阿含には長鬼天とあり、巴利中部三一經には Digha とありて一致す、今の伽扶は恐らく提伽扶(Dirgāvu 長壽)の略なるべく、從つて本經所依の中阿含が現存漢巴兩傳の何れとも少異ありしものと思はる、因みに鬼神大將とは巴利には鬼神夜叉(Pārajana yakkha)とあり。

【一〇五】 現存漢巴兩傳共次下の語なし、或は今造者が所論の必要に應じて加語轉義したるものか。

【一〇六】 僧伽は廣義に解すれば佛教的社會にして理想化して淨土の觀念に至る、而して狹義に解さるる場合は出家比丘が修道の便宜のために結ぶ自治團體にして、その單位は巴利律(大品九・一)にては四人、五人、十人、二十人、二十人以上の五種あり、支那傳諸部派の制には少異を見るも、大體四人を以て最小單位とすることと一致す(新譯時代には三人說を傳へしも後の進化とす)、よつて此に、三人にては僧伽を成ぜずといつたものである。

【一〇七】 卽ち四人以上の比丘を念ずるなり。

【一〇八】 須陀洹は預流又は入流と譯し、佛法の流に入る義、卽ち佛法に信をおいて理解を得たる心境である。

衆僧の所に於て若しくは老若しくは少に等心にして恭敬し、分別を生ぜざらん」と。沙彌答へて言く。「汝若し是の如くば、久しからずして當に[一〇〇]見諦の道を得べし」と。即ち偈を說いて言く。

多聞と持戒と　禪定と及び智慧もて　三乘に趣向する人　[一〇一]果と幷與に向を得ん』　譬へば辛頭(Sindhu)河の　流注して大海に入るが如し　是れ等諸の賢聖　悉く僧の大海に入る』　譬へば雪山の中に　諸の妙藥を具足せるが如く　亦好良田に　種子を增長するが如し　賢善の諸智人　悉く僧中より出でん』

是の偈を說き已つて而も是の言を作さく。「檀越よ、寧ぞ聞かざる、[一〇二]經中に阿尼盧頭(Aniruddha)難提(Nandiya)黔毘羅(Kimbila)此の三[一〇三]族姓子あり、鬼神大將あり、名を[一〇四]伽扶と曰ふ。佛に白して言さく。「世尊、一切の世界、若しくは天、若しくは人、若しくは魔、若しくは梵にして、若し能く心に此の三族姓子を念ずれば、皆能く其をして利樂安樂を得しめん、[一〇五]僧中の三人すら尙ほ能く利益す、況んや復た大衆をや」と。時に沙彌更に即ち偈を說いて言く。

三人[一〇六]僧伽を成ぜざるも　念ずれば則ち利益を得　彼の鬼將の言の如し　未だ念僧と名くるを得ざれど　尙ほ是の大利を獲たり　況んや復た[一〇七]念僧する者をや』　是の故に當に知るべし　功德ある諸の善事は　皆僧の中より出づるを　譬へば大龍の雨らすに　唯海のみ能く堪受するが如し』　衆僧も亦是の如し　能く大法雨を受けん　是の故に汝當に　心を專らにして衆僧を念ずべし』　是の如きの衆僧とは　是れ衆善の群なり　解脫の大衆ぞ　僧は猶し勇健軍のごとく　能く魔の怨敵を摧く』　是の如きの衆僧とは　勝智の叢林にして　一切諸の善行は　運集して其の中に在り　三乘の解脫に趣く　大勝の伴黨なれや』

爾の時、沙彌偈讃を說き已るに、檀越眷屬心に大いに歡喜して、[一〇八]皆須陀洹(Srotāpanna)果を得たり。

佛を讃ずるもの少しとせず、「雜阿含」四十九卷の終部、五十卷の初部等參照。

【八六】羅刹も亦同樣魔神なれども其の起原は最も古くリク・ベーダに於て表る、佛時代にはその存在は夜叉ほどにも、盛視されなかつたようであるが、その獰猛さは一層甚だしく、歸佛等のことも餘り云はれてゐない、但し西紀前後の頃よりはその信仰を再燃したものと見え、大乘佛典や密經等に屢々表れて來る、語義又殺毒者、暴虐者等を意味し、食人鬼と譯すべきかと思ふ。

【八七】結は前出註三一參照。漏(āsrava or āśrava)も亦煩惱の異名にしてその不淨行を漏らし出す點を形容したるものとす。

【八八】「雜阿含四十六卷第五經」「本經梵本に catvāro dahanā n'āvajñeyā(四小不可輕)とあり。

【八九】學名 Mangifera Indica マンゴーのこと、佛教文學中には好んで種々なる譬喩に用ひらる、玄弉は二種ありて小種のものは生に青く熟して黃なるも大種は生熟共に靑し(西域記四)といふ、これによつて正邪判斷しがたき場合によく菴羅の生と熟との如しといはる。今の經句梵本(第二

能く大いなる果報を獲ん』　是の故に衆僧の　耆老と及び少年なるとに於て　等心にして供養なし　應に分別を生ずべからず』

爾の時、檀越是の語を聞き已つて身毛爲に竪ち、五體を地に投じて求哀懺悔すらく。「凡夫愚人多く愆咎あり、願はくは懺悔を聽したまへ、有らゆる疑惑、幸にして解釋爲たり」と、卽ち偈を說いて言く。

汝に大なる智慧あり　以て諸の疑網を斷てり　我若し諸問せずんば　則ち有智者に非ず

爾の時、沙彌卽ち之に告げて曰く。「汝の所問を恣にせよ、當に汝が爲に說くべし」。檀越問ひて曰く。「大德よ、佛と僧とを敬信せんに、何れかは勝ると爲ん」。沙彌答へて曰く。「汝寧ぞ三寶あるを知らざるか」。檀越言く。「我今、復た三寶あるを知ると雖も、然も三寶の中、豈に一の最勝あることなかるべけんや」。沙彌答へて曰く。「我佛と僧とに於て增減を見ず」と。卽ち偈を說いて言く。

大姓婆羅門あり　厥の名は　突羅闍(Bharadvāja)　毀譽佛と異ならず　食を以て如來に施すに』　如來旣に受けたまはず　三界に能く消するものなし　水中に擲置するに烟炎同時に起れり』　瞿曇彌衣を奉ずるに　佛勅して衆僧に施したまふ　是の因緣を以ての故に　三寶等しうして異ることなし』

爾の時、檀越是の語を聞き已つて卽ち是の言を作さく。「其の如く佛と僧と等しくして異なくんば、何の故に食を以て水中に置いて衆僧に與へざる」。沙彌答へて言く。「如來は食に於て都て恪惜なし、衆僧の德力を顯示せんと欲する爲の故に、是れを爲すのみ、所以は何ん、佛、此の食を見るに三界に能く消する者なし、水中に置くに水卽ち炎起せるなり。然るに瞿曇彌は故らに衣を以て佛に奉る、佛は僧に廻與したまふに衆僧受け已つて變異あることなし。是の故に當に知るべし、僧に大德あり、大名稱を得、佛と僧と異ることなし」。時に彼の檀越卽ち是の言を作さく。「自今以後、

【八二】　神通力(Rddhi-bala)。本來は超自然的なる仙聖の意志力を意味するも、佛教にては三明得達によつて得る智的能力、若しくはその智慧によつて動かさるゝ場合の情意の自在性を指していふことになつてゐる、これを他の宗教に於ける神々の神祕力と混視する傾向を生ぜしは正しく佛教の墮落に始まる。

【八三】　三本に依る、麗本「服」に作る。

【八四】　甘露は前揭註五を見よ、無生無死の涅槃に浴する者にはもはや老なく衰なし、今その點を神々の飲物としての甘露に比して表象的に描出したるもの、佛教文學、特に大乘にありてはこの種の描寫法によつて超言說の體驗境を表現せんとすること常事なり、徒らなる荒唐文學といふ勿れ。

【八五】　印度民族の畏信せる一種の魔神にして語義よりすれば「疾捷するもの」の意、古くはウパニシャットに見えてクベーラ神の眷屬とされ、佛時代には多く曠野墓地等に住みて人畜に危害を加ふるものと信ぜられたり。佛教にてはかかる魔神と雖も佛に歸して善心に歸るべしとの信仰古くよりあり、旣に滅後百年內外の資料たる阿含中に、夜叉の歸

相を觀ぜず、唯だ、智慧あらんに幼稚なりと雖も、諸の[八七]結漏を斷じて聖道を得ん、老いたりと雖も放逸なる、是れを幼小と名く。汝の爲作する所、甚だ是ならずと爲す、若し爪指を以て海底を盡さんと欲するに、是の處あることなし、汝も亦是の如し、汝の智を以て福田を測量せんと欲して而も高下を知れり、亦是の處なし。汝寧ろ聞かざるや、如來の說きたまふ所の[八八]四不輕經を。王子と蛇と火と沙彌等、都て輕んずべからず。世尊說きたまふ所の[八九]菴羅(Āmra)果喩あり、內生にして外熟るあり、外生にして內熟るありと。妄りに前人の長短を稱量すること忽れ、一念の中にも亦道を得べければ。汝今にしては極めて大過あり、汝若し疑あらんに今悉く問ふべし、今より已後、更に是の如きの僧福田に於ける分別の想を生ずること莫れ」と。卽ち偈を說いて言く。

衆の僧の功德の海　能く測量する者なし　佛尙ほ欣敬を生じて　自ら百偈を以て讚じたまへり　況んや餘の一切人　而も當に稱歎せざるべけんや』　廣大なる良福田　種少うして大利を獲ん　釋迦(Śakya)の[九〇]和合衆　是れを[九一]第三寶と名く』　諸の大衆の中にして　貌を以て人を取る勿れ　種族と威儀と巧みなる言說とを以てし　未だ其の內德を測らずして　形を觀て宗仰を生ずべからず』　形を觀るに幼弱と雖も　聰慧にして高德を有てるあり　內心の行を知らずして　乃ち更に輕蔑を生ぜんは』　譬へば大叢林の[九二]薝蔔(Campaka)に[九三]伊蘭(Elaṇḍa)を雜ゆるが如し　衆樹參差たりと雖も　語と林とは則ち異ならず』　僧に長幼ありと雖も　應に分別を生ずべからず　[九四]迦葉(Kaśyapa[mahā])は出家せんと欲して　身上の妙服を捨て　庫に最下の衣を取るも　猶し直は十萬金たり』　衆僧の福田　其事も亦是の如し　最下の者に供養するとも　報として十力の身を獲ん』　譬えば大海水の　死屍を宿めざるが如くにて　僧の海亦是の如く　[九五]毀禁の者を容めず』　諸の[九六]凡夫僧の　最下にして少戒を持するに於て　恭敬して供養を加ふるも

無學の二、「中阿含第百二十七經」には悲田、敬田の二、「優婆塞戒經卷二」には報恩、功德、貧窮の三福田、「俱舍論一八」には趣田、苦田、恩田、德田の四、「梵網經」に八福田(目見えず、天台戒疏下に註考す)を擧ぐ、何れも本國譯に出づべければ就て考究さるべし。

【七五】僧伽藍。衆園と譯す、僧坊のこと。

【七六】沙彌、沙門(遊行生活する出家)たらんとする者、卽ち出家の見習である、新發意、今道心等に類す、佛教にては定年(滿二十歲)に滿たざる者の出家を許さざる故に未定年の發心者を見習として入團を許し十戒を嚴守せしむ、又定年を過ぎたる者と雖も此に準ぜしむることあり、これを沙彌といふ、而して未定年者の入團には必ず保護者の許諾を要する制なり。

【七七】檀越。施主と譯す。

【七八】羅漢。阿羅漢の略、前出、註七三を見よ。

【七九】三本に依る、麗本は腰字に作る。

【八〇】梵行(Brahma-cariya)、神聖なる行、卽ち煩惱に汚されざる行なり。

【八一】以下、本來散文とすべきを如何なる理由によりてか偈とせるものなり。

時に寺中に諸の沙彌あり、盡く是れ[七八]羅漢なり。譬へば人ありて師子に觸惱し、其の[七九]要脈を振つて其をして瞋恚せしむるが如し。諸の沙彌等皆是の語を作さく。「彼の檀越愚かにして智慧なし、有德を樂はずして唯だ耆老を貪る」と。時に諸の沙彌卽ち偈を說いて言く。

所謂長老とは　必ずしも白髮にして　面皺み牙齒落ちたる　愚癡無智慧に、在らず』
貴ばるるは、能く福を修め　煩惱を除滅して衆惡を去り　[八〇]梵行を淨修する者　是れぞ名けて長老と爲ん』　我等毀譽に於て　增減の心を生ぜず　但し彼の檀越をして　罪過を獲得せしめ』　又僧福田に於て　誹謗して增減を生ぜしめたり　我等應に速かに往いて　彼の檀越を起發し　惡趣に墮せしむること莫るべし』
[八一]彼の諸の沙彌等　尋で[八二]神通力を以て　老人の像を化作し　髮白くして面皺み　秀眉にして牙齒落ち　傴背にして杖を柱とし　彼の檀越の家に詣りぬ』　檀越既に見已りて　心に大歡慶を生じ　香を燒き名花を散じて　速かに請じて坐に就かしむ』　既に至つて須臾の頃にして　還つて沙彌の形に[八三]復するに　檀越は驚愕を生じぬ　變化乃ち是の如し　[八四]天の甘露を飲めるが爲に　容色忽ち鮮かに變れり』

爾の時、沙彌卽ち是の言を作さく。「我[八五]夜叉 yakṣa に非ず、亦[八六]羅刹(Rakṣasa)に非ず、先に檀越の耆老を選擇せるを見るに、僧福田に於て高下の想を生ぜり、汝の善根を懷ふの故に是の化を作して汝をして改悔せしむるなり」と。卽ち偈を說いて言く。

譬へば蚊子の嘴もて　大海の底を盡さんと欲するが如し　世間に能く　衆僧の功德を測る者なし』　一切皆能く　僧の功德を籌量するなし　況んや汝獨一已にて　而も彼れを測量せんを欲はんや』

沙彌復た言く。「汝今、應に衆僧の耆し少きの形相を校量すべからず。夫れ、法を求むる者は形

て聖者の稱號とせられた言葉である、佛敎にては恐らく、婆羅門族が自ら神の子と名告つて獨り社會の供養を享受する權利ありとせるに對して、佛敎的悟道者こそ眞にその資格ありとしてこの稱號を採用したるものと思はる、そは佛が成道間もなき日或る婆羅門の問に答へて說きたりといふ眞婆羅門とは何ぞの歌に徵しても考へられる、故に一般的には佛敎的聖者と解して可なり、後にこの聖者を分類して四果とするの日にはその最高とせられ、滅後佛と弟子聖者を區別するためには弟子は阿羅漢たり得るも師佛たり得ずとの說生じ、やがて三乘思想を生み、大乘に入つては聲聞の悟道として卑下さるるに至りたり、されど初期にあつては何人も法眼を生ずるの日に直ちに阿羅漢にして師と弟子とに理論的區別を見なかつたものである。

※ 梵筴斷簡第二十二、三、四、六、七葉。

【七四】 福田(Puṇya-kṣetra)。善根を種子に喩へ、これを植ゆる田地となるべき對象を福田といふ、阿含にありては主として僧伽を指示するも時には病者を指すこともあり「雜阿含卷三十五」の経經には學

に人皆之を思念するが如し、外道の諸論も亦復た是の如し、誠に應に捨離すべきこと、夏時の日の如かれ、然るに此の論に由て信心を生ずるを得たり、亦宜しく思念すべきこと、猶し寒時に彼の日を思念する如かれ」と。時に親友憍尸迦に問ふ。「我等今は當に何事をか作すべき」。憍尸迦言く。「今は宜しく一切の邪論を捨棄して佛法中に於て出家學道すべし、所以は何ん、夜闇中に大炬火を然さんに、一切の鵂鳥皆悉く墮落するが如し、佛の智慧燈既に世に出で、一切の外道悉く應に顚墮すべし、是の故に今、出家學道せんと欲す」と。是に於て憍尸迦、親友の家より卽ち僧坊に詣で、出家を求索す。出家し已つて後[七三]阿羅漢(Arhat)を得たり。

造者曰く。何の因緣の故に是の事を説くや。諸の外道、常に邪論の幻惑する所と爲るを以ての故に。十二因緣經の論を説いて、而して之を破析するなり。

三、* 沙彌僧福田の功德を説いて檀越を化する緣

復た次に夫れ[七四]福田を取らんに、當に其の德を取るべく應に少壯なると老弊なるとを簡擇すべからず。

我昔曾て聞く。檀越(Dānapati)あり、知識の道人を遣はして[七五]僧伽藍(Saṃghārāma)に詣でて諸の衆僧を請ぜしむ。但し老大を求めて年少を用いずと。後にして知識の道人諸の衆僧を請ずるに、次で[七六]沙彌(Śrāmaṇera)を到せり。然れども其を用いず。沙彌語げて言く。「何の故に我等沙彌を用いざる」と。答へて言く。[七七]「檀越の用いざるもの、是の我には非ざるなり」と。勸化の道人卽ち偈を説いて言く。

耆年にして宿德あり　髮白くして面皺み　秀眉にして齒缺け落ち　背僂にして支節緩める
檀越是の如きを樂ひて　幼小なるを見るを喜ばず

して用ひらる。

【六八】　津膩。うるほひて滑かなること。

【六九】　佛の身は父母所生を以て眞とせず、戒定慧の三學より生れたりとすべし。

【七〇】　聖跡(ārya-pada)。垂れ遺されたる教法のこと。

【七一】　象の足跡(hasti-pada)を以て佛の聖跡の偉大さに喩ふることは佛教文學の一の定型なり、「中阿含第一四六經、第三〇經」の二個の象跡喩經最も有名。

【七二】　大人(mahā-pūrsa)。印度の理想的人格にして三十二相を具し、家に在れば轉輪聖王となり、出家すれば佛陀となると信ぜらるるもの、本國譯「中阿含第五九經三十二相經」「同第七〇經轉輪王經」「長阿含第六經轉輪聖王修行經」等に詳説せらる。

【七三】　阿羅漢。種々の釋あり、殺賊(ari 敵、hant 殺す)と解して煩惱の賊を殺除せる人とし、不生(a 不、ruhan 生)と解して再び迷の生を受けざる人とし、淨浴(arhan 淨者)と解して涅槃界に入れる人とする説などは何れも語源學を利用して教義的解釋を下せるものとす、原義は應供、卽ち供養を受くる價値ある人の意にて、廣く佛教以外にも用い

したまふ』　言ふ所の如來とは　眞實にして虛ならず　逆に順に[六五]諸法を觀じて　名聞は普く遍滿したまふ』　佛の[六六]涅槃したまへる方に向ひて　恭敬合掌して禮したてまつり　歎言すらく、佛世尊は　實に大悲心あり』　諸仙の中に最勝　世間にして倫疋なし　我今、彼の　無等の[六七]戒定慧に、歸依したてまつる』

憍尸迦言く。「汝今、云何か乃ち爾く深く佛の功德を解しまつるや』と。親友答へて言く。「我此の法を聞きぬ、是の故に佛の無量の功德を知れり、沈水香の黑重にして[六八]津膩たり、是の因緣を以ての故に、之を燒くに甚だ香ひて遠近皆聞ゆるが如し、是の如く、我れ如來の[六九]定慧の身を見るが故に、便ちに世尊に大功德あるを知りたり。我今よりは佛を覩たてまつらずと雖も、佛の[七〇]聖跡を見たてまつれば則ち最勝を知らん。亦人ありて蓮花池の邊りに於て[七一]象の足跡を見て則ち其の大いさを知るが如し、因緣の論を視るに、佛を見たてまつらずと雖も佛の聖跡の功德最大なるを知る」と。時に憍尸迦、其の親友の深く信解を生ぜるを見て未曾有なりと歎じ、而も是の言を作さく。「汝昔より來た、外典を讀誦すること亦甚だ衆多なり、今佛經を聞くに須臾の頃にして其の義趣を解し、悉く外典を捨つること極めて希有と爲す」と。卽ち偈を說いて言く。

邪見の論を除去して　正眞の法を信解す　是の如きの人得ること難し　是の故に希有と歎ぜん』　但に汝を歎ずるのみならず　亦外の諸論をも歎ず　其の理の鄙淺なるに因りて　我等悉く捨離せり』

更に言く。「彼の諸論に過咎あるを以ての故に、我等の輩をして厭離を生ずるを得て信解の心を生ぜしめき。佛實に[七二]大人にして與に等しき者なし、名稱普く聞えて十方の刹に遍したまふ。外の諸の邪論は前後に過あり、猶し諂語の辯了すべからざるが如し。彼に過あるに由て我をして棄捨して佛に入るを得しめぬ、猶し春夏の時、人日熱を患ひて皆之を離れんと欲するも、既に冬寒に至る

喩ふることも佛教文學としては古いことである、巴利增支部三・七五等に出で、大乘佛典にては華嚴經十地品等に出づ。

【六二】　陰(skandha)。原義は積聚せるものの意なるも轉じて萬物構成の要素の意味に用ひ、人間を以て五陰より成るとせり、これより再轉して直ちにこの身心より成る個體を呼ぶ代名詞となれり、日本語としては「からだ」とすべきか、從つて前陰は前生に持つてゐた「からだ」、後陰は次生のそれを意味する。

【六三】　「して」は三本に令字に作るに依る、麗本今字なり。

【六三】　前出「我見」に同じ、註三八を見よ。

【六四】　十二因緣を無明、行、識の順序に觀ずるを順觀といひ、老死等、生、有の逆序に觀ずるを逆觀といふ。

【六五】　諸法に十二因緣を觀ずるなり、佛之によって成道すと傳ふ、前註參照。

【六六】　佛は中印度拘尸那竭羅 Kuśinagara に入涅槃せり、今華氏城よりすれば北北西の方となる。

【六七】　戒と禪定と智慧の三學(tisraḥ śikṣāḥ)にして佛敎のあらゆる修道はこの三つに收まる、ここにては三學所成の佛格、卽ち佛陀の代用語と

六〇 識を種子と爲て母胎の田に入り、愛水潤漬して身樹に生を得るなり。胡桃子の、類に從つて生ずる如し、此の 六一 陰の造業は能く後陰を感ず、然れども此の前陰は後陰を生ぜず、業の因縁を以ての故に便ちに後陰を受くるなり。生滅異なると雖も相續して斷ぜざること、嬰兒の病めるに乳母藥を與へて兒の患の愈ゆるを得るに、母は兒に非ずと雖も藥の力勢の能く兒に及ぶが如し。陰も亦是の如し、業力あるを以て便ちに後陰を受け、憶念して忘れざるなり」。

諸婆羅門復た是の言を作さく。「汝の讀む所の經中、但だ無我法を說くのみにて、汝を 六二 して解悟して歡喜を生ぜしむるや」と。時に憍尸迦、爲に十二緣經を誦して而も之に語げて曰く。「無明の緣にて行あり、行の緣にて識あり、乃至、生の緣にて老死憂悲苦惱あり、無明滅すれば則ち行滅す、乃至老死滅する故に憂悲苦惱滅す、衆緣に從ふを以て宰主あることとなし、便ちに中に於て無我を解悟せり、經文の中に但に無我を說くのみに非ず。復た次に身あるを以ての故に則便ち心あり、身心あるを以て諸根に用ありて識解分別するなり、我此の事を悟りて便ちに無我を解せり」と。又問ふ。「若し汝の言の如くんば、生死と受身と相續して斷ぜず、設ひ 六三 身見あるも何の過咎かあらん」。答へて言く。「身見を以ての故に諸業を造作し、五趣中に於て善惡の身形を受く、惡形を得るの時は諸の苦惱を受く、若し身見を斷ずれば諸業を起さず、諸業を起さざるの故に則ち身を受けず、身を受けざるの故に衆患永く息まん、云何ぞ說いて身見は過に非ずと言はんや。復た次に若し身見が過咎に非ずんば、應に生死なかるべく、三有に於て生死の苦を受けざらん、是の故に過あり」と。

時に婆羅門、六四 逆に順に十二緣の義を觀察し、深く信解を生じて心慶幸を懷き、略して佛法を讃じて而も偈を說いて言く。

如來世に在せしの時　說法して諸論を摧きたまひ　佛日世間を照して　群邪皆隱蔽したりき』

我今遺法に遇ひ　世尊の前に在るが如し　釋種中の勝妙　深く諸法の相に達

とあり、この非變易が今の鉢羅陀那、卽ち自性であるから、自性は無因（不生）如常、遍一切處等とせらるるのである。

【五五】 以上破邪を已りて以下顯正に入り、諸教中佛法獨り正眞道なるを明す。

【五六】 解脫（mokṣa）は煩惱を迷に止める繫縛と見て、それより解き脫れることを意味するが、これを以て佛教の悟道を積極的に說明するのである、卽ち涅槃（註二八參照）の消極的表詮に對する積極的表詮で、悟達者の自由境を語る語である。但し佛教以前より印度聖者の理想語として使用されてゐたもので佛教特有の語でない。

【五七】 以下、無我と輪廻との關係を明す、而して無我を說く佛教にては輪廻の主體として業を立てて因果論を完了する。

【五八】 諸根（sarva-indriya）。人體に備はる諸の機能器官。

【五九】 一芽は種子のみにて生ぜず、土壤、水分、肥料、日光、雨露、風候等無盡の因緣（條件）備はるによつて發生す（故に其因緣の一の異なる每に變化あり）、これを今「衆緣和合」といふ。

【六〇】 識（vijñāna）を種子（bija）に、愛（tṛṣṇā）を水（sneha）に

はず、若し無我を知れば則ち貪欲なし、貪欲なきの故に便ちに解脱を得、若し有我を計さば則ち貪愛あり、既に貪愛あり、生死を遍くせん、云何か能く解脱の道を得んや。復た次に若し生死に初始ありと言はば、此の初身は善惡に從つて而も此の身を得と爲んや、善惡に從はずして自然に有りしと爲んや。若し善惡に從つて而も此の身を得るならば、則ち初始有身と名くるを得ず、若し善惡に從はずして此の身を得ば、此の善惡の法は如何してかある、若し是の如くんば汝の法は、則ち半ば因より生じ、半ば因より生ぜずと爲す、是の如く說かば大なる過失あらん、我が佛法は無始の故に罪咎なし」と。時に親友憍尸迦に語ぐらく。「縛あれば則ち解あり、汝無我を說かば則ち縛あることなし、若し縛あることなからんに、誰か解脱を得ん」と。憍尸迦言く。「我あることなしと雖も、猶縛と解とあり。何を以ての故に。煩惱覆ふの故に縛せらると爲す、若し煩惱を斷ずれば則ち解脱を得ん、是の故に復た無我なりと雖も、猶縛と解とあるなり」と。

[五七]諸婆羅門復た是の言を作さく。「若し無我なれば誰か後世に至る」と。時に憍尸迦諸人に語げて言く。「汝等善く聽け、過去の煩惱諸業より、現在の身及以[五八]諸根を得たり、今現在より復た諸業を造る、是の因緣を以て未來の身及以諸根を得ん。我今よりは譬喩を樂說して以て斯の義を明さん。譬へば穀子の如し、[五九]衆緣和合の故に芽を生ずるを得、然も此の種子、實には芽を生ぜず、種子滅するの故に芽便ちに增長するなり、子滅するの故に常住ならず、芽生ずるの故に斷滅ならず、佛の受身を說くことも亦復た是の如し、復た無我なりと雖も業報失せず」と。諸婆羅門言く。「我汝の無我の法を說くを聞くに我が心垢を洗ひぬ、猶少疑あり、今諮問せんと欲す、若し無我ならば先の所作の事云何の故にか憶して而も忘失せざる」。答へて曰く。「念覺あるを以て心と相應し、便ちに能く三世の事を憶念して而も忘失せざるなり」。又問ふ。「若し無我ならば過去已に滅して現在の心生ぜり、生と滅と既に異なる、云何してか而も憶念して忘れざるを得るや」。答へて曰く。「一切の受生は

の譬を用ひたものとすれば實に巧妙なる修辭といはねばならぬ。

【五三】 以下數論派の謬を破す。五分(pañcāṅga)とは立論に際して取る五段の進め方、五支と譯するが普通である、第一の言誓とは (pratijñā)とも譯し、或る問題に就て自己の主張を立言すること、第二の因(hetu)はその立言の理由、第三の喩(udāharaṇam)は譬喩を以てその立言の正當を立證すること、第四の等同は普通に合(upanaya)と譯し宗因の所立の連鎖せることを明し、第五の決定は結(nigamana)で、上來四支の所立に決擇を取つて所論を結ぶのである。

【五四】 鉢羅陀那は自性と譯し數論派に立つる二元中の一元で各個體の本質とせらるるものであり、此に出づるその說明は現存僧佉頌(一〇)にもその思想見ゆ、卽ち變異(現象)と自性(本體)との別を論じて、「變異 vyakta は有因 hetumat 無常 anityam 不遍 avyāpi 有事 sakriyam 多 anekam 依 āśritam 沒 liṅgam 有分 sāvayavam 屬他 paratantram なり、非變異 avyakta は之に反す」(木村博士印度六派哲學一五〇頁)

皆無明の覆蔽する所と爲り、盲いて目なきの故に、毘世師論に於て明の想を生じき、佛日既に出でて慧明照し了んぬ、毘世師論に知曉する所なく、都て應に棄捨すべし、譬へば[五二]鵄鵂の夜則ち遊行するに、能く有力なり、晝なれば則ち藏竄して力用あることなきが如し、毘世師も亦復た是の如し、佛日既に出でて彼論用なし」と。

親友復た言く。「若し汝の言の如くんば、毘世師論は佛教に如かず、然れども此の佛經は寧ろ僧佉論に比するを得べきや」と。憍尸迦言く。[五三]「僧佉論の說の如くんば五分ありて論義盡すことを得と、第一言誓、第二因、第三喩、第四等同、第五決定なり。汝の僧佉經(Saṅkhya-sūtra)中、譬喩として明了なること牛犎の如くなるを得べき者あることなし、況んや法相を辯じて而も能く明了ならんや。何を以ての故に。汝の僧佉經中に、[五四]『鉢羅陀那(Pradhāna)は不生、如常、遍一切處、亦、處處去』と說けり、僧佉經中の說の如くんば、鉢羅陀那は、他より生ぜず、而も體是れ常住にして能く一切を生じ、一切處に遍くして去きて處々に至ると、是の如き事を說けるは多く愆過あり。何を以ての故に。三有の中に於て、一法として但だ能く物を生じつ而も他より生ぜざることあるなし、是の故に過あり。復た次に、一切處に遍くして能く處々に至るとは、此も亦過あり。何を以ての故に。若し先に遍ければ去きて何の所にか至る、若し去至あらば遍は則ち遍ならず、二理相違して其の義自ら破せん、若し是の如くんば是は則ち無常、其の所言の如き、他より生ぜずして而も能く物を生じ、一切處に遍くして去きて處々に至るとは、是の語非なり」と。

[五五]親友婆羅門是の語を聞き已つて憍尸迦に語げて言く。「汝は釋種と便ち朋黨たり、故に是の說を作なり、然るに佛經中にも亦大過あり、說言すらく、『生死に本際あることなし』と、又復た說言すらく、『一切法中悉く我あることなし』と」。時に憍尸迦親友に語げて言く。「我、佛法の生死無際と一切無我とを見るの故に、吾れ今は敬信の情篤し。若し人、我を計さば終に[五八]解脫の道を得ること能

【四八】三本に依る、麗本頌に作る、以下同じ。
【四九】破瓦(kapāla)は瓶の割れたる破片のこと、故に假りに瓶が二分したとすれば二個の破瓦あり、從つて瓶は二個の破瓦を和合因(samavāyi-kāraṇam)として成る、今本論に「破瓦を說いて瓶因とす」といふはこの意味であるが、佛教の時間的因果說より見れば寧ろ瓶が因で破瓦は果となる、仍つて今此時間的因果說の立場よりその謬を破してゐるのである。
【五〇】以下は空間的因果說の立場より謬を破す、有用(sa-kriyā)は有功用、有執受とも譯す。
【五一】十力(daśabala)。常に佛十力又は如來十力といひ、古く阿含中に見るも元來十種の力といふよりも完全なる能力者たるを意味したるものの如し、これに十の力名を附したる後の事と思はる、その名目等に就ては本國譯「雜阿含第二十六卷」「智度論第二十五卷」「俱舍論」第二十九卷」等に詳說せられてゐるから參照されたい。
【五二】鵄鵂は梟に同じ、原語ulūka であるが、それは實に勝論派の開祖の異名であるから、若しそれを知つてゐてこ

設ひ我財寶あるとも　[四四]眞金を以て塔を造り　[四五]七珍用て厠填し　寶案は妙巾もて褁み
莊嚴極めて殊妙に　而も用以て供養したてまつる　是の如きの事を作すと雖も　尚
我が意に稱はず

時に其の親友斯の語を聞き已つて、甚だ忿恚を懷き、而も是の言を作さく。「今此の經中、何の深妙未曾有の事やある、何ぞ必ずしも彼の毘世師經に勝れんや、眞金種々珍寶を以て而も供養爲んと欲するや」と。時に憍尸迦是の語を聞き已つて愁然として色を作し、而も是の言を作さく。「汝今何の故に佛經を輕蔑すること是に至るや、彼の毘世師論には極めて過患あり、云何か乃ち用て佛語に比せん、毗世師論の如きは法相を知らず、因果を錯亂して、瓶の因果淺近の法に於て尚慧解し分別し能知するなし、況んや人身、身根、覺慧、因果の義を解せんや」と。爾の時其の親友、憍尸迦に語げて言く。「汝今何の故に、毘世師論は因果を解せずといふや、彼の論中、破瓦を說いて以て瓶因と爲せり、云何してか言はん、因果を解せずと」と。憍尸迦言く。[四六]「汝の毘世師論には實に是の語あり、然れども道理なし、汝今且らく觀ぜよ、縷を因として以て經緯と爲んに、然る後に[四七]疑あるが如し、[四八]瓶瓮も亦爾り、先に瓶あるの故に然れば後に[四九]破瓦あり、若し先に瓶無くして云何か破瓦あらんや、[五〇]復た次に破瓦は無用、瓶瓮は有用、是れを以て破瓦は因爲るを得ず、現に陶師を見るに泥を取つて瓶を成し、破瓦を用ひず、又、瓶壞しての後に破瓦あるを見る、瓶若し未だ壞せざるに云何か破瓦あらん」と。時に親友言く。「汝意謂へよ、若し毘世師論に都て道理なくんば、我等寧ろ、徒らに其の功を勞して而も自ら辛苦すべけんや」と。時に親友徒黨の諸婆羅門、是の語を聞き已つて心愁惱を生じ、言く。「若し其の言の如くんば、毘世師論は即ち今日於り信ずべからざるや」と。憍尸迦言く。「毘世師論は但に今となりて信を取るべからざるのみに非ず、昔於り已來、善く觀察する者は久しく信ずべからず、然る所以は、昔佛[五一]十力の未だ出世したまはざる時、一切衆生は

【四四】塔婆崇拜の文獻。
【四五】七寶(sapta-ratna)に同じ、卑見の限り阿含類古文學中に未だ見えず、巴利註釋書類、大乘佛典等に至りて始めて現はる、以て其の文學史的地位を想見すべし、七寶の名目は傳によつて少異あり、巴利註釋文學中には、金(suvaṇṇa)、銀(rajata)、眞珠(muttā)、摩尼(maṇi 水珠)、瑠璃(veḷuriya)、金剛(vajira)、珊瑚(pavāla)を揭げ、阿彌陀經には金、銀、琉璃、玻瓈(sphaṭika)、硨磲(musāragalva)、赤珠(rohita-muktā)、碼碯(aśmagarbha)を揭げ、其他法華經、授記品、無量壽經上、智度論十等に出づるもの皆少異あり、以て七寶とは單に珍寶を總稱したる雅語に過ぎず、之に實物を配することは後のことなるを知らる。
【四六】此は勝論派の因果說を破する一段である、此派の因果說は和合句義(samavāya-padārtha)に於て說かるるが、此に說かるる瓶喩は現存の勝論經中には見えないけれども、その義意一致する點より見て、この思想の當時既に成立してゐたことが知らるる。
【四七】明本に依る、他は疊に作る。

見るに當に隨順して行じて生死を出づるを得べし。外道の經論は愚かしき狂語の如く、[三九]九十六種の[四〇]外道は悉く皆虛僞たり、唯佛道ありて至眞至正たるのみ、[四一]六師の徒及び餘の智者、咸自ら稱して一切智人と爲すも、斯れ皆妄語たり、唯佛世尊のみ、是れ一切智、誠實にして虛ならず」と。時に憍尸迦、卽ち偈を說いて言く。

外道の爲作する所　虛妄にして眞實ならず　猶し小兒の戲の如し　土を聚めて城郭を作し　醉象をして之を踐蹈せしめんに　散壞して遺餘なからん　佛の諸の外論を破する其の事も亦是の如し

時に憍尸迦婆羅門、深く佛法に於て信敬心を生じ、外道法を捨てて邪見を除去し、晝夜常に十二緣經を讀みぬ。時に其の所親[四二]眷、諸の婆羅門と其の家に歸還し、其の婦に問ひて言く。「我聞く、憍尸迦此に來至すと、今何所にか在る」。婦夫に語げて言く。「彼の婆羅門、向きに經書を借り、我取つて之を與ふ、何の經かを識らず、然るに其れを得已つて披攬翻覆するや、彈指して讚歎し熙怡常に異る」と。夫其の言を聞いて卽ち其の所に往き、憍尸迦の端坐思惟せるを見て卽ち之に問ひて言く。「汝今に於けるは何の思惟する所ぞ」と。時に憍尸迦偈を說いて答へて曰く。

愚癡にして智慧なく　三有の中を周廻すること　彼の[四三]陶家の輪の如く　輪轉窮り已るなし　我思ふに十二緣は　これ解脫の方所なり

爾時、親友卽ち之に語げて言く。「汝是の經に於て乃ち能く深く希有の想を生ぜり、我れ釋種の邊にして此經を得、將に其の字を洗却して以用て彼の毘〔衞〕世師經 Vaiśeṣika-Sūtra を書かんと欲しき」と。憍尸迦婆羅門是の語を聞き已つて親友を呵責すらく。「汝愚癡人、云何か乃ち水もて斯の經を洗はんと欲せる、是の如きの妙法は、宜しく眞金を用ひて以て書寫し、盛るに寶函を以てし、種々に供養すべし」と卽ち偈を說いて言く。

の思想の何れかに偏するものをいふ、從つて此に我見と邊見を擧げて二見とするは妥當を缺く感なきには非ず、或は我見は人間に就て、邊見は萬有に就て說くものとして二法二面の邪見を揭げたるものと見るべきか、普通には二見とは、斷常二見（有見無見ともいふ）を指す。

【三九】佛時代の諸種の外道を總稱して九十六種ありとするもその何なりやは確實ならず、大體、長部梵網經に說かるるものを取つて可ならん、本國譯「長阿含、梵動經」を檢さるべし。

【四〇】外字三本によりて補ふ。

【四一】佛在世の沙門教團にして傳統教權に反して立ちたる新興宗教の中より、佛典にはある六派を一群に擧ぐるを例とし以て六師外道と呼べり。六師の名目、思想に就ては、本國譯の「長阿含、沙門果經」「大乘大般涅槃經一九卷」「增一阿含四三品七經」等に說さる。

【四二】三本に依る、麗本「方」に作る。

【四三】轆轤のこと。

と。時に所親の婦、卽ち爲に書を取りて偶ま[三七]十二緣經を得、而して以て之を與ふ。既に經を得已つて林樹間の閑靜の處に至り、而して此の經を讀むに、「無明の緣にて行あり、行の緣にて識あり、識の緣にて名色あり、名色の緣にて六入あり、六入の緣にて觸あり、觸の緣にて受あり、受の緣にて愛あり、愛の緣にて取あり、取の緣にて有あり、有の緣にて生あり、生の緣にて老病死憂悲苦惱あり、是を集諦と名く。無明滅すれば則ち行滅し、行滅すれば則ち識滅し、識滅すれば則ち名色滅し、名色滅すれば則ち六入滅し、六入滅すれば則ち觸滅し、觸滅すれば則ち受滅し、受滅すれば則ち愛滅し、愛滅すれば則ち取滅し、取滅すれば則ち有滅し、有滅すれば則ち生滅し、生滅すれば則ち老病死憂悲苦惱、衆苦の集聚滅す」といへるを聞き、初讀一遍にして猶未だ解了せず。第二遍に至り、卽ち無我を解し、外道の法は[三八]二見――我見と邊見とに著し、一切法に於て深く生滅ありて常者あることなきを知り、而も自ら念言すらく。「一切外論は皆悉く生死を出づる法あることなし、唯此の經中にのみ出生死解脫之法あり」と。心歡喜を生じ、尋で兩手を擧げて而も此の言を作さく。「我今に於ては始めて實論を得たり、始めて實論を得たり」と。端坐して思惟し、深く其の義を解して容貌の熙怡たる、花の開敷せるが如し。復た是の言を作さく。「我今始めて生死の繫縛の解くる出世の法を知りたり、乃ち外道所說の諸論の甚だ欺誑僞り、生死を離れざるを悟りぬ」と。歎言すらく。「佛法は至眞至實にして因果あり、因滅すれば則ち果滅す」と說けり、外道の法中甚だ虛妄僞り、說いて果あり而も其の因なしと言ひ、因果を解せず、解脫を識らず。自ら觀ずるに、我昔深く怪笑を生じき、云何乃ち外道法中に生死の河を度らんとは欲せる。我昔外道に度生死を求めしは、譬へば人あつて恒河 Gaṅgā の波浪の中に沒溺し身命を失はんを懼るるが如し、値へば則ち攀緣、既に難を免れず、水に沒して死せん。我亦是の如し、彼の外道に遇ひて度生死を求め、然も其の法中都て解脫出世の法なし、生死の河に沒して善の身命を喪ひ、三惡道に墮しなん。今此の論を

派哲學の一派にして Kapila を祖とす、その思想は吠陀にまでも淵源せしめ得ようが獨立して一學派となりたるは佛以後と見るべし、馬鳴の他の作「佛所行讃」の中にも記錄せらるゝより見て、西紀二三世紀の交には頗る盛行してゐたものと推定せらる。

【三四】　同じく後世の六派哲學の一とせらるる勝論（カツロン）のこと、Kaṇāda を祖とす。

【三五】若提碎摩論とは耆那教を指すらしいとのこと。佛典中に倮形外道又は尼犍子等として出るものに同じ、本國譯卷二の註一二を參照。（宇井伯壽博士著、印度哲學研究卷一、二一三頁に負ふ）。

【三六】　中印度摩竭陀の邊防都市として築かれ、後、阿育王の首都として繁榮す。

【三七】　十二因緣を說ける佛典、阿含の單本なりしならん。類經多し。十二因緣の各目に就ては本國譯の雜阿含卷十二等に詳說さるべければ其に就かるべし。

【三八】　我見(Satkāya-dṛṣṭi) は自我の自由性と常住性を主張する主義にして、邊見(Anta-dṛṣṭi) は萬物の常住性を主張する常見(Śāśvat-dṛṣṭi)と萬物の假存性を主張する斷見(Uccheda-dṛṣṭi)の兩極端

佛の功德を觀察するに　一見して皆滿足す　戒と聞及び定と慧　佛と等しき者はなし』
諸山に須彌 Sumeru は最たり　衆流に海ぞ第一　世間天人の中　佛に及ぶ者の有るなし』　能く諸の衆生の爲に　具さに一切の苦を受け　必ず解脫を得せしめつ　終に放捨離したまはず』　誰か佛に歸依して　利益を得ざる者ありや　誰か佛に歸依して解脫せざる者ありや　誰か佛敎の旨に隨ひて　而も煩惱を斷ぜざる』　佛、神足力を以て　諸の外道を降伏し　名聲普く遠く聞え　遍く十方の刹に滿ちたまふ』　唯佛は師子吼して　諸行の無我を說き　所說は恒に[30]中に處して　二邊に著したまはず』
天上及び人の中に　皆是の如きの說を作して　善く、[31]結使と諸の業の報を　分別すること能はざらん』　如來涅槃の後に　諸の國に[32]塔廟を造りて　世間をば莊嚴すること猶し虛空の星宿のごとし　是れを以ての故に、當に知べし　佛の最勝尊爲ることを
諸の婆羅門是の語を聞き已りて、信心を生ずる者あり、出家する者、得道するものありき。

二、*憍尸迦婆羅門十二因緣經を讀みて佛道に歸する緣

復た次に應に論を分別すべし。所謂論とは、卽ち是れ法なり。夫れ、法の所に於て宜しく能く思惟すべし。若し能く思惟すれば則ち其の義を解す。
我昔曾て聞く。婆羅門あり、憍尸迦 Kausika と名く。善く[33]僧佉論 Sāṅkhya [34]衞世師論 Vaiśesika [35]若提碎摩論 Ñāti-suma(= Jñāti-saumya)を知り、是の如き等の論解了分別せり。彼の婆羅門、[36]華氏城 Pāṭaliputra の中に住まる。其の城外に於て一聚落あり、彼の婆羅門少因緣ありて彼の聚落に詣り、所親の家に到る。時に其の親友緣事を以ての故に餘行して在らず。時に憍尸迦婆羅門其の家人に語ぐらく。「汝の家頗し經書あらんや以不や、吾れ並讀を欲す、彼れの行還を待たん」

【三〇】中道を取るは佛敎の根本態度にして佛にありては鹿野苑の初轉法輪に於て早くもその宣言を見、自來小乘に於てこの態度失はれんとせしを大乘に於て尊重復興し、その思想次第に形而上化しつゝ進化したるも、親鸞聖人に至りて實踐化を見る、かくて古來一貫して佛道の標幟となれる重要なる敎理とす。

【三一】結（Saṃyojana）も使（Anuśaya）も共に煩惱の異名、迷界に結びつくる力用より結といはれ、人人を驅使して煩勞せしむる點より使と呼ばる、されど後世の煩鎖哲學にてはこの語を分けて種々なる分類をなすに至れり、七結、七使、九結、十使といふが如し、

【三二】佛入滅の日遺骨を八大國に分配しこれに灰と容器(瓶)を加へて十塔の造られしことは長部涅槃經の古傳にして、更に滅後阿育王が百萬の佛塔を造りしことは有名なる傳說なり、而して阿育王以後の二三世期の間は熱烈なる佛塔崇拜を生じたる期間にして、大乘にては般若以下之を以て劣れる功德として新信仰を皷吹しておる。

※ 梵葉斷簡第十、十三、十五、十七葉。

【三三】譯して數論といふ、六

の故にか言ふや　　佛に大いなる勢力なしと』

時に諸の婆羅門、是の偈を聞き已りて瞋恚の心息み、優婆塞に語げて言く。「我今は少事を問はんと欲す、瞋を見すこと勿れ、咄、優婆塞よ、佛若し惡呪なくんば、云何してか他の供養を受くるを得ん、既に損を爲さず又益を爲さず、云何してか稱して大仙と爲すを得んや」と。優婆塞言く。「如來の大慈悲なる、終に惡呪もて衆生を損減するなし、亦復た利養の事を爲さず、但だ饒益の爲の故に供養を受くのみ」と。而も偈を説いて言く。

大悲もて群生を愍れみ　　常に拔苦を爲さんと欲す　　諸の惱を受くる者を見ては　　己自の處にも過ぎたまふ　　云何惡呪を結んで　　而も惱害の事を作さん』　　衆生の體性は苦にして　　生老病死は逼れり　　癰に燥灰を著くるが如く　　云何か更に惡をば加へん　　常に[二八]清涼の法を以て　　諸の熱惱を休息したまふ』

諸の婆羅門是の語を聞き已り、即便に低頭して斯の語を思惟す。「此は是れ好事、心信を生ぜんと欲す、汝健陀羅善く勝れし處を別てり、汝の能く此を信ぜるは甚だ希有爲り、是の故に汝を歎ず、[二九]健陀羅の名は虛設とせず、健陀と言ふは名けて持と爲すなり、善を持して惡を去るの故に斯の號を得たり」と。而も偈を説いて言く。

能く此の地を持すれば　　是を善丈夫と名く　　善丈夫の中の勝れしは　　實に是の健陀羅なれや

時に優婆塞、是の思惟を作さく。「此の婆羅門の心信解を欲せり、皆器を成ずべし、我今當に更に爲に分別して佛の功德を説くべし」と。時に優婆塞顏貌熙怡して是の言を作す。「汝の佛を信ぜんとせらるるは我甚だ歡喜し、汝今幸に少しく我が語を聽かるべし、功德と過惡と、汝宜しく觀察すべし」と。而も偈を説いて言く。

特に大乘以後にありては佛陀の稱號中最も此の語を愛し、眞如より來生せるもの等の解を附するを常とするに至つた。

【二八】煩惱を熱惱に喩ふるに對して、それを去りたる涅槃を清涼に喩え、轉じて涅槃の異名となせり。

【二九】語源學上 Gandhāra を解するに古來二途あり、一は持地と解し、二は香遍（香行、香淨、香潔等）と解す、今は前者を取つたものである。

時に諸の婆羅門、復た偈を説いて言く。

汝の言ふ佛大仙とは　應に逼惱の事を作すべし　此の[二二]閻浮提 Jambu-dvipa の中　[二三]贍默、監持陀　婆塞 Vyāsa 婆私吒 Vasiṣṭha　提釋、阿坻耶 ātreya』　是の如きの諸の大仙は　名稱の世に聞ゆる所　能く大神呪を結んで　諸の國土を殘滅す』　汝の佛[二四]大仙と名くるも　亦應に斯の呪を作すべし　汝の佛に大德有らんに　應に逼惱の事を作すべし　若し呪害を作さざれば　云何か大仙と名けん』

時に優婆塞、彼の誹謗の言を聞くに忍びず、手を以て耳を掩ひ、而も偈を説いて言く。

咄、惡語を出す莫れ　謗言すらく、佛に[二五]呪ありと　最勝尊を毀謗せば　後に大苦報を獲ん

時に婆羅門、復偈を説いて言く。

佛若し呪術無くんば　大力ありと名けず　若し惱害なくんば　云何か大仙と名けん　我但だ實語を說けり　何の故にか誹謗と稱せん

[二六]時に諸の婆羅門、掌を撫して大いに笑つて言く。「是の故に汝癡人、定んで負處に墮しなん」と。時に優婆塞婆羅門に語げて言く。「汝怪笑する勿れ、汝の言ふ、[二七]如來に大功德なく亦大力なしとは、斯は是れ妄語なり、如來は實に大功德力ありて永く呪根を斷ち、終に復た惱害の事を作したまはず、汝今諦かに聽け、當に汝が爲に說くべし」と。即ち偈を說いて言く。

貪瞋癡を以ての故に　則ち大惡呪をば作す　惡呪を結ぶの時に當りて　惡鬼其の語を取りて　諸の罪ある衆生に於て　而も惱害の事を行ぜん　佛は貪瞋癡を斷ち　慈悲にして廣く饒益し　永く惡呪の根を除き　但だ衆の善事のみ有り』　是の故に佛世尊に都て惱害有ることなし　大なる功德の力を以て　無量の苦をば拔濟したまふ　汝今何

【二二】原本「彼時」とあるも「時彼」の寫誤と見て書き下せり。

【二三】此には印度大陸のこと。

【二三】以下印度の古仙の名にして聖呪の作者。

【二四】大仙(Maharṣi)も亦佛の德號、佛は諸の聖者の中に於て最も勝る故に。

【二五】巴利律大品五・三・二。長部三明經二。經集有八品一四等に阿闥婆吠陀の呪法を禁ずる外、佛は一般に呪術を禁じて出離に要なきものとせり。その佛典中に混ぜるは遙か後世の事とす。

【二六】以下「負處に墮しなん」まで、原本には五言四句の頌に作りて前偈に接續せしむるも、その寫傳の誤りなること明かなるべし。仍て今私に訂して長行とせり。

【二七】如來(Tathāgata)も亦佛の異稱なるも、而も形而上的用語を以て形容することは唯此の一語のみである。佛教以前には一般に「靈性あるもの」即ち「人間の主體」に就て呼んだ語の如く思はるゝも、佛陀の異稱とせしは果して如何なる意味に於てであるか明かでない。後世佛身論の發達に伴ひ此の語に種々なる教義學的轉釋を行ひ如來、如去、如住等の語義をも伴生せしめ、

を受く』　云何か過惡に於て　反つて功德の想を生じ　邪見旣に增長し　惡を數じて
以て善と爲すや　是の惡業を以ての故に　後に大いなる苦報を獲』
諸の婆羅門是の語を聞き已り、目を竪て手を擧げ　[一九]懍厲攘袂瞋忿顫動して而も是の言を作す。「汝甚だ愚癡不吉の人なり、此等の諸天に恭敬を加へずして而も誰をか恭敬せん」と。時に優婆塞、意志閑裕にして之に語げて言く。「吾れ單獨なりと雖も貴しんで道理を申べん、應に力を以て朋黨競說すべからず」と。時に優婆塞偈を說いて言く。

汝等の供養する所は　兇惡にして殘害を好めり　汝若し彼に奉事して　以て功德と爲さ
ば』　亦應に、師子及び虎狼の　觸惱して殘害を生ずるにも　恭敬を生ずべく　惡鬼
羅刹Rakṣa等の　愚人の畏るゝを以ての故に　彼に於ても恭敬を生ぜん』　諸の智慧有
る者　宜しく應に深く觀察すべし　若し殘害せざれば　乃ち恭敬を生ずべきを　諸の
功德有る者　終に殘害の心なし』　諸の惡を修め行ずれば　[二〇]殘害を　懷かざるなく
善く、功德及び過惡を　分別すること能はざらん』　功德に惡心を起し　過に功德の想を
生じ　殘害逼迫すれば　凡愚增し敬順す』　善功德者に於て　反つて輕賤の心を生
じ　世間皆顚倒して　敬ふべき者を別たず』　乾陀羅に生れたる者　解知して善と惡
とを別てり　是の故に如來を信じ　自在天を敬せず』

三　時に彼の婆羅門是の語を聞き已つて卽ち是の言を作さく。「咄、乾陀羅生者よ、何の種姓より出で、何の道德有りて、而も佛と名くるか」と。時に優婆塞、偈を說いて答へて言く。

釋氏の宮より出でて　一切智を具足し　衆の過を悉く耘除し　諸の善皆普く備はる』
諸の衆生の中に於て　未だ始めより饒益せざるなく　諸法の相を覺了りて　一切悉
く明かに解す　是の如きの大仙　故に稱號して佛と爲す』

師」は僧寶、而して「我今當次說」以下が造論意趣。
【一三】　印度カシュミールの西北、パンジヤップの北に在りし國、アレキサンダー大王の東征以來希臘文明の影響を受けて特殊の文化を發生し佛教にても特に造像美術に於て劃期的發展をなしたり、所謂ガンダーラ佛として知らるゝ西紀前後の佛像を發見せらるるものこれである、本經に表はるる佛像崇拜の思想に對應して注意すべく、佛教經典にては本論と時代を同じうする般若經中にこの地を理想化して描寫せると併せて興味ある文化資料といふべし。
參　焚筴斷簡第六、七葉。
【一四】　中印度の一國、西域記には文殊師利の塔ありしことを記せば大乘の流行せしことのあるを知り得る。
【一五】　男の佛教信者。
【一六】　大自在天のこと、次の毗紐天と共に、古來印度の民族神の有力なるものの一とす。
【一七】　麗本には「識知」とするも今は宋元明三本に從ふ。
【一八】　印度の惡神、常に善神と鬪ふと傳ふ。
【一九】　麗本「懍癘攘袂瞋忿戰動」に作る、今は三本に依る。
【二〇】　麗本「壞」に作るも今は三本に從ふ。

放散す。或は路中に在り、或は門側に立ち、洗浴する者あり、塗香する者あり、或は行き或は坐せり。時に優婆塞塔を禮して迴り還る。諸の婆羅門見已つて喚んで言く。「來れ優婆塞、此の坐に就け」と。卽ち優婆塞に語げて言く。「爾今云何、彼の[一六]摩醯首羅 Maheśvara 毘紐天 Viṣṇu 等の而も致敬たることを[一七]識らずして、乃ち佛塔を禮するや、以て煩無きを得るや」と。時に優婆塞卽ち之に答へて曰く。「我、世尊の功德の少分を知れり、是の故に欽仰恭敬して禮を爲すなり、未だ汝の天に何の道德あるやを知らず、而も我をして彼に向つて禮せしめんと欲するや」と。諸の婆羅門、是の語を聞き已つて目を瞋して呵叱すらく。「愚癡の人、汝云何か我が天所有の神德を知らずして而も是の言を作すや」と。諸の婆羅門卽ち偈を說いて言く。

[一八]『阿修羅 Asura の城郭　高く顯れ周る三重　虛空に懸處りて　男女悉く充滿するも』
我が天の弓矢を彎くに　遠く彼の城郭に當りて　一念の間に盡く燒滅すること　火の乾草を焚くが如し』

時に優婆塞是の偈を聞き已りて大いに笑つて言く。「斯の如きの事、吾の鄙薄なるも敬尙せざるところ」と、偈を以て答へて言く。

『命は葉の上の露の如く　生あれば會ず當に滅すべし　云何か有智者　弓矢もて殘害を加へん』

時に諸の婆羅門等、是偈を聞き已りて咸共に聲を同じうして優婆塞を呵して言く。『是の癡人、彼の阿修羅大勢力あり、好んで惡事を爲すを、我が天の神德の力もて能く殺害するなり、云何か乃ち智あるに非ずと言ふや」と。時に優婆塞、呵責を被り已つて喟然として長歎し、而も偈を說いて言く。

『美と惡と諦かに觀察し　智者は善業を修めて　能く大いなる果報を獲　後に則ち轉た樂

脇比丘の說として十二分敎の方廣を「般若の說の事用大なるを方廣とす」といふものあり、その般若を大乘經とすれば經中の十二分敎は化地部法藏部の傳に一致す、而して本經は次註の如く脇比丘を化地部の人とする如くであるから從來の有部學者とする說に反することゝなり、付法藏傳の資料性までも覆へすことゝなる、誠に學界の珍資料となすべきであり、敢て學界の研鑽を乞うておきたい。

【九】普通に彌沙塞と寫し、譯して化地部といふ、小乘部派の一、詳しくは本國譯の異部宗輪論に說かるべし。

【一〇】說一切有部と譯し、略して、有部といひ小乘諸部中最も有力なる一派、宗義等は本國譯異部宗輪論に就て檢さるべし。

【一一】佛の德號、牛王（Gavāṃpati）の衆牛に超然たる如く佛の一切人天に超然たるを讚へていふ。

【一二】以上「歸敬偈」終る、歸敬偈とは、著作者が三寶の加被力を得てその著を作すの意趣を表白するもので、佛敎徒の著作には古來皆この敬虔なる態度がとられた。今「最勝尊」は佛寶、「一切智甘露妙法」は法寶、「八輩衆乃至是等諸論

大*莊嚴〔經〕論

馬*鳴菩薩造

後*秦三藏　鳩*摩羅什譯

卷の第一

〔歸敬偈〕[一]

前んで、最勝尊[二]　離欲して　三有[三]を過ぎたまへるを禮し　亦一切智[四]の　甘露[五]微妙の法　並及に　八輩衆[六]　無垢清淨の僧　富那[七] Puṇyayaśas と　脇[八](Pārśva)比丘　彌織[九](Mahīśāsaka)の諸の論師』　薩婆室婆[一〇] Sarvāstivādin の衆　牛王[一一]の正道者　是等の諸論師　我等しく皆敬順したてまつる』　我今當に、次に說いて　莊嚴の論を顯示すべし　聞く者滿足を得　衆の善是より生ぜん』　歸依すべきと歸依すべからざると　供養すべきと供養すべからざると　中に於て善惡の相　宜しく應に分別して說くべし』[一二]

一、§乾陀羅商賈婆羅門を化する緣

說いて曰く。我昔曾て聞く。乾陀羅[一三] Gandhāra 國に商賈客あり、摩突羅[一四] Mathurā 國に到る。彼の國に至り已るに、時に彼の國の中に一佛塔あり、衆の賈客中に一の優婆塞[一五] Upāsaka ありて日ごと彼の塔に至り恭敬禮拜す。塔に向ふ中路に諸の婆羅門 Brāhmaṇa あり、優婆塞の佛塔を禮拜するを見て皆共に嗤笑す。更に餘日に於て天甚だ炁熱す。此諸の婆羅門等、食訖り遊行して自ら

＊　解題の下見よ。

【一】　歸敬偈、梵筴缺。以下各節の標題は今私に國譯者の附するところとす。

【二】　佛の德號、佛は三界の導師にてその德人天に比倫なきを以て最勝尊（Anuttārya or Jina）といふ。

【三】　欲・色・無色の三有(Trayo bhavāḥ)。

【四】　これ又佛の德號の一、佛陀は一切の問題を解決し得る完全なる智慧の鍵であるから一切智(Sarvajña)といふ、知らざることなしの意味に非ず。

【五】　甘露(Amṛta)。又不死とも譯す、涅槃の異名。

【六】　佛教學者をその悟によつて八階に分てるもの(aṣṭa-puruṣa-pudgala)。預流向、預流果、一來向、一來果、不還向、不還果、阿羅漢向、阿羅漢果。

【七】　富那は付法藏傳五に馬鳴の師とする富那奢のことなるべし。脇比丘の弟子と傳ふ。

【八】　脇比丘の傳は付法藏傳五、西域記二等に出づ、迦膩式迦王時(西紀二世紀初頭)の人、迦王に勸めて婆沙論を結集せしめたりといふは誤傳なるべきも、その學說は廣く同論中に引かれて重きをなせり。然るに大毗婆沙論一二六卷に

巴の阿含本文と、本論引用のそれとの比較研究の事業であるが、概括的にいつても、その間に劃然たる差異の存することは、本文の註記に於て屢々注意しておいた如くである（第三、九、三一、六一、六四、六八等の各章の註參照）。

次に本論著者の佛滅年代は阿育王前百年說なる……とも注意すべく（五四、五五章）、六派哲學中の僧佉、衞世師、若提碎摩の三派の學說に就て重要なる資料を提出してゐる（二章）ことも感謝すべき問題に屬する。或は四五章（漢地）、九〇章（大秦國）の兩章に支那との交易資料を殘すあり、而も原梵語には漢、大秦が Cīna と記されてゐることなども、注意さるべき問題である。數へ來れば本經に關する研究題目は豐富に、その資料價値は往時に比して頗る高まつて來たといはねばならない。今は餘白を持たざる憾みを殘して總てを他の機會に割愛し、最後に讀者の便にまで、本經研究の五三の研究資料を摘記しておくことゝする。

○Bruchstücke des Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta von Heinlich Lüders. 1926, Berlin,
○Açvaghoṣa—Sūtrālaṃkāra, traduit en Français sur la Version chinoise de Kumārajīva, par Édouard Huber. 1908, Paris.
○Açvaghoṣa, Le Sūtrālaṃkāra et ses sources, Journal Asiatique, Juillet-Août. 1908. Paris.
○La Dṛṣṭāntapaṅkti et son auteur, Journal Asiatique, Juillet-Sept. 1927. Paris.
○佛教年代考 小野玄妙著 大正十五再刷 京都刊
*本書一六一頁には漢譯藏經中の重要なる資料を悉く記せるを以てそを略す。
○印度哲學研究 第三卷（第五篇）第五卷（第四、五篇）宇井伯壽著 大正十五、昭和四、東京刊
○譬喩者、大德法救、童受、喩鬘論の研究（日本佛教學協會年報第一年所收）宮本正尊著 昭和四、京都刊
○印度佛教固有名辭典第三分冊赤沼智善著 昭和五、名古屋刊

昭和五年十月一日

譯者 美濃晃順 識

二、阿含經傳の粉飾（佛世の傳說を含む）　（十七）
三、譬喩話　（十）
四、*因緣譚（草繫比丘）　（一）
五、本生譚　（七又八五）
六、寓話奇譚　（五又八四）

更に之を思想的に見る時は、異教徒に對するもの（一、二、五、六、七、八、二四、六七等諸章）、俗信に關する記述あるもの（二三、五九、八〇章等）、塔婆崇拜に關する文獻（一、二、四、二八、三一、三九、六六、七九、八〇章等）、持戒に關するもの（一二、六三、七六、七七章等）、布施を勸むるもの（一四、一五、一八、二一、二三、二五、二七、三九、六九、七〇、七一、七五章等）、善友親近を勸むるもの（二三、二四、二五章等）を始めとし、聞法求道、忍辱精進、少欲知足、禪思見諦、供養尊長等各方面に亘つてゐるが、全體としては實踐を主とする三寶尊信の宗教を說くもの多く、理談に墮せるは僅かに第二十九章の一と見ることを得よう。而してその思想的特色とも見るべきは、在家佛教の規範を示す點にあるは勿論ながら、特に布施多聞の行を重しとすると、念佛の功德に關說することの多くして、從つて佛身論に於て他の諸部派に比し著しき發達あるを見ることは、頗る注意すべき問題に屬する。我等は本書の思想信仰を精細に檢覈することに於て、出家佛教に對する在家佛教、學問佛教に對する傳道佛教の特色と淵源を探索する重要なる鍵鑰を摑み得ると同時に、大乘佛教の社會的教團的淵源が奈邊に存したるかの問題、並に大乘佛教に於ける信仰心理の基點等に就ても、學び得る點の頗る豐富なるべきを豫想するものである。

七

本論は經部の祖師の撰とせらるゝだけに、その引用せらるゝ阿含藏の經句は頗る繁く、譯者は可能的にその原出據を註記するに努めておいたが、猶零細なるもの、又は隨處に出づると思はるゝものに就ては、註記を略したものも可なりある。而してその引用範圍より見る時は、所謂四阿含以外に屬する傳說にして、現に巴利傳にては本生經若しは法句經の註釋等に見ゆるもの、梵傳にては Divyāvadāna に記さるゝもの、漢譯にては菩薩本緣經、賢愚經、阿育王經、十誦律、有部律等に保存せらるゝものが少からず存する。固より記事としては互に出沒を見るは當然なるも、その間原始型と發展型の區劃立て難きには非ず、若し夫れ、これが比較研究に成功するを得るならば、本論の如く著者年代の分明に近きものを基準とするを得る點で、聖典史學上に發明し得る所の頗る多かるべきを信ずるのである。更に注意すべきは、現流漢

五

本論は九十章より成り、各章「我昔曾聞」(Tadyathānuśrūyate) なる頭飾語にて始まり、次に訓語を安置して序分とし、本論に入つて史傳、寓話等を素材として喩說顯彰し、最後に「以何因緣而說此事」等として造論の意趣を述ぶるが通型となつて居る。而し、第八十一章以後は些か形式を異にして序分中の訓語を缺き、內容も亦一般的な譬喩話(Upamā)となり、先づ喩說を揭げて次にこれを法義に合せしむる形式となつてゐる。從つて本論は、大體に於て前八十章と後十章との兩樣を持つてゐることになるが、梵筴に於てもその章次章節を漢譯に一致せしめてゐるから(百十一葉に第三十章完結 tritiyā daśati samāptā 第百九十二葉に第六十章完結 ṣaṣṭhi daśati samāptā なる語あり、該章の章次內容共に漢に一致す)、原作以來のものと見てよからう。而して、佛典中是の如き形式を有するものは、是の他に菩薩本緣經三卷あるのみなるも、支那日本の文學に影響したることは意外のものあり、冥報記、靈異記等の撰述には必ずや範となりたるべく、「今は昔」に始まる今昔物語に至つては、明かにその模倣を示すのみでなく、本論第三十五章の如きはその引用を偲ばしむるものである。されば支那日本の靈驗文學の先行としては遠く德川文學の母型の一とも見るべく、平安朝以來の唱導文學に比しては、現代までも傳道上の規範となつてゐると考へてよい。

六

內容は全篇譬喩因緣本生史譚等で盛られてゐるが、これを概括して分類する時は、

一、史譚(傳說を含めて)

イ、國王に關するもの

師子國王	一
罽尼吒王	三
難陀王	一
阿育王	四
*薩多浮王	一
婆須王	一
*阿越提國王	一
光明王	一
烏越蒻王	一
*憂悅伽王	一
拘沙陀那王	一
盧頭陀那王	一

(計十六又八十三)

ロ、其の他の階級に屬するもの

沙門及沙彌(億耳、迦旃延、瞿沙優婆掬多の四は知名)	二一
比丘尼	一
優婆塞	五
婆羅門	二
其他(*商賈、貧女、囚人、田夫、輔相子、劫賊、旃陀羅、王子、幻士、畫師)	一二又八一〇

(計四十一又八四十)

竺〔德〕叉尸羅國	三六、四五、八〇、九〇
石室國（譯名）	二一、七三
花〔華〕氏城	二、七三
阿育〔輸迦〕王	一六、二七、三〇、五五
優婆毱多	五四
乾陀羅國	一
弗羯羅衞城	二一
迦膩〔罽尼〕吒王	一四、三一
難陀王	一五
須和〔修婆〕多國	九、三九
罽賓國	七五
阿越提國	五〇
迦旃延？	六〇
釋〔賒〕伽羅國	八、七七
師子諸國	四
末投〔摩突〕羅國	一、七三、七八
難提拔提城？	七六
阿梨車毘伽國？	七八
支那交通　漢地	四五
大秦	九〇

四

鳩摩羅邏多は、或は薩婆多部の人とし、或は曇無德部に配し、或は單に罽賓小乘の學徒とするなどの異說を傳ふるも、西域記等に經部の師と傳ふる玄奘傳が、最も信頼し得るものゝようである。而して彼を以て成實論の著者訶梨跋摩の師と唱ふることに於て諸傳一致し、本論の佛身論の傾向が、權大乘といはるゝ成實論の著者の思想系統に先行せしむることも不合理ではない。從つて彼が一世の大學匠として認められてゐたことや、その著書の多かりしことを傳ふるものも虛傳ではなからうし、朅盤陀國の無憂王が深く彼に歸依したと傳ふるものも事實であらう。生れは呾叉始羅、幼にして頴悟、早く俗塵を離れて志を學に樹て、日に三萬二千言を誦し兼て三萬二千字を書したといはれ、五印度にその名知られて馬鳴、提婆、龍猛と共に四日世を照すとて、世に尊勝せられたとのこと、國內、無憂王（前揭と別人）所建の捨頭窣堵波の側に在る廢寺が、彼の諸論を造作したる舊蹟なりと傳へる（西域記三）。著書中名の知られたるものは結鬘論、日出論、喩鬘論、癡鬘論、顯了論等あり、有部に學んで一派を開いたものゝようであるが、彼自身としては一派獨立の意志が存したかどうかは疑はしい。本論序偈に各部の高師に歸敬するが如きそれである。恐らく彼を以て經部の祖師とすることは、後世の第三者の評名だらうと思考せられる。

著書中に漢土に傳來したものゝ從來皆無とせられたことは前述の通りであるが、その片言の引用は、入大乘論卷下、俱舍論二初に各一偈、坐禪三昧經の中に四十三偈（僧叡、關中出禪經序參看）あり、今論を彼の著作に歸すれば完本の一を加へることゝなり、童受並に經部研究上に一大資料を得たことゝなる。

因みに童受論師の在世年代に就ては、訶梨跋摩の師にして迦尼色迦王以後の人たることに於て決定すべく、粗々西紀三世紀初頭の人にして龍樹とは同時先輩、若しは纔出年代に入る人と見てよいと信ずる。

故國たる龜茲（Qyzyl）の廢墟中から發見し、これを篤學なる Heinrich Lüders 氏が剋明に精研して一九二六年に發表して居る。その題號が二種となり居り、且つ別稱も有してゐることは前述の通りであるが、著者を Ārya-Ku(Kau)-māralāta（阿梨耶鳩摩羅邏多、聖童受）としてゐるために、漢譯が馬鳴（Aśvaghoṣa）造とするものと一致を缺き、こゝに著者に就て學徒の間に論爭を生ずることゝなつたが（右リューダース氏は梵本に贊し、[一]佛の S. Lévi 博士はこれに對して反駁を加へて漢譯を支持す）、今國譯者種々なる點より考察して梵傳を支持し、本論を以て童受の[二]喩鬘論に比定しようとするのであるが、その詳細なる理論をこゝに掲出する餘白を持たざるを遺憾とする。大體に於て、馬鳴の詩人にして出家に非ざること、童受を經部の祖師の一人とする時、[三]序偈に明す思想傳統が肯定し得らるゝこと。內容に於て[四]北方特に竺叉尸羅健陀羅に地方的資料の多きは、南印に人となりし馬鳴に味方せずして童受にふさふこと。引用さるゝ阿含藏の諸文献が、現流漢巴の何れにも少異ありて有部、分別部、大衆部、法藏部、化地部等のそれとは異りたる部派なるを示すこと。思想的にも特に佛身論上に注意すべきものあること。五十八章（轉法輪緣）に阿毘曇型の文學を見るが、三藏中の論藏を貶して經藏に教權を認識しようとする經部の特色と比考する時、本論の如き形式に於て佛語の詮顯に努めようとしたのが、或は經部の必然的な傾向ではなかつたかと思はるゝこと（事實本論は、一種の物語體の文學ではありながら、而も終始して經句の引用を自在にし、經句の實際的認識と顯彰に努めて居ることとが、その最も著しい構想的出色であるといつてよい）。猶ほ日出論、喩鬘論等數十部の著書ありしといはるゝ童受に、一部の東傳すら見なかつたことの奇蹟的なること等。――以上の諸點より考察して、本論を以て童受の喩鬘論に比定するものである。

註一。La Dṛṣṭāntapaṃkti et son auteur, Journal Asiatique, Juil.–Sept. 1927.

註二。成唯識論述記四本に喩鬘論を評して「集諸奇事」といひ、又同人の結鬘論なる書を出して「廣說譬喩」と稱す。二書の同異は明かならぬも、此の評語が移して以て大莊嚴經論にも充て得ることは、喩鬘莊嚴二論の同異を考ふる上に重大な役目をなすであらう。

註三。序偈云。富那脇比丘、彌織諸論師、薩婆室婆衆……我等皆敬順。

註四。全卷九十章中佛世記事、本生本緣寓話の類と見るべきもの、嚴密には三十四（又は三十一）章なるも見ようにては大半を占め、その餘が地方的若しは歷史的傳說性を多少とも存すと見るべきか。而して其の中適確に地名を推定し得べきもの二十六章あり、中に就て北印より、中印へ移住したる者の物語を除いて餘は、悉く北印に關するものと思考せられる。今その地域表を揭ぐるに左の如し。

「大莊嚴論」となつてゐたものとせねばならない（この古題に經字なきことは開元錄の注記も認む、且つ經字を附することは歷代三寶紀によるかの如くにもいつてゐる、しかし三寶紀も現流本では古題に一致するから、やはり開元錄を以て始めと見てよかるべく、假りに三寶紀の古本に爾かあつたとしても、三寶紀の資料價値より見て信憑さるべきものではないであらう）。兎も角正しき題號を「大莊嚴論」として經字を除ることは、本論の序偈に「顯示莊嚴論」とあるにも一致し、更に次下いふ如く梵題にも適ふのである。學者の中には、「經」字に惹かれて肯て好奇の題釋を與へやうとする人もあるのであるが、顧慮するまでもない說である。然るに本經の梵題に就て、至元錄には蘇怛囉阿浪迦囉沙悉特囉とあり、明かに「經」字を認めてゐるが、しかし本論には西藏譯を缺く點より眺めても、この梵題は、元版流の題號を直譯的に推定したものであることを知らるゝ。殊に「論」を「沙悉特囉」と呼ぶことは、佛敎にては密敎期に入りての後に屬して、それ以前の文學には絕えて用ひられざる稱呼に屬する。從つて本論の題號に於ける「經」字の存否を、これによつて權威づけようとすることも無理だし、又梵題も、この亞流で還梵を試みられた、南條錄依用の二名（Sūtrālaṃkāra śāstra & Mahālaṃkāra-sūtra-śāstra）は、共に改めらるべきものである。幸にして近時斷片ながら梵筴の發見に接し、それによつて本論の梵題も確し得るのであるが、それには

(1)　Kalpanā-maṇḍitikā　(Bl. 111, v. 4)

(2)　Kalpanā-laṃkṛtikā　(Bl. 192. v. 3)

の二樣になつて居り、語義は二者共に「施設莊嚴」若しは「譬喩莊嚴」の意で、「大莊嚴」はその麗譯と見るべく「論」は原題になき補語と見られる。然るに、右梵筴の末葉に(1)の梵題に續けて dṛṣṭānta ……なる缺句の別題を示してゐるが、これを他の場合（Bl. 111. v. 4）に就て檢べて見ると、恐らく Paṃkti の一語を缺くもので、卽ち本論には、上記の梵題以外に猶 Dṛṣṭānta paṃkti なる別號があつたものと思はれる。而してこの別號は「喩鬘」の意で、正しく支那に鳩摩羅邏多撰の「喩鬘論」なるものゝ傳へらるゝと、その稱を一つにするのであつて、これ、本論の著者を決定するに就ての、極めて重要なる資料となるべきものである。

三

本經の梵筴は斷簡ではあるが、全九十章中の七十五章にまで亘つて、その片鱗を遺して居るので有名なる Le Coq 博士の中央探檢に際して、奇しくも羅什の

大莊嚴〔經〕論解題

一

龜茲國の生、舊譯の大家たる鳩摩羅什(Kumārajīva)の譯とせらるゝも、現存經錄中の古錄にして最も信憑せらるゝ僧祐の出三藏記集(道安錄をも含む)の中に收載せられざるを遺憾とするも、法經錄以下皆此れを收むれば、什譯とするには疑義なきものゝやうである。譯風又什譯としては粗拙なるものあり、恐らく渡支匆々の飜出とすべきか。傳によれば、苻秦建元十九年に前秦主に迎へられて涼土に入りしも、時既に前秦の滅亡に會したれば、そのまゝ涼土に止まりしも、十八年の後、即ち姚秦弘始三年十二月二十日に、再び後秦主に迎へられて姚都長安に入りたりとあり、而して爾後半ケ月にして(弘始四年正月五日)に早くも坐禪三昧經を譯出し、次で翌二月八日には阿彌陀經を譯出してゐる。坐禪三昧經は後に(弘始九年閏五月)重校してゐるが、阿彌陀經は現今の存本で、その譯風の莊重麗達なること、正に彼が譯經中の代表的位置にあるものである。今これを本論と比較する時は、その間に存する逕程實に驚くべきものがある。今これらの事情を綜考する時は、彼の譯業は既に涼土滯留の十八年間に培はれたるものとなすべく、本論を以て彼の功に歸すべくんば、或はその涼土滯留期の譯出には非るか。若し然りとすれば、羅什と同世にありたる道安並に彼の滅後半世紀を經て活躍したる僧祐の目錄中に漏れたる事情も解せらるべく、又譯風に粗拙の存する所以も通ずると信ずる。よつて本論の譯出年代を以て假りに、予は建元十九——弘始三(西紀三八四——四〇一)と想定するものである。たとへ長安後の譯出とするも、その初期、即ち弘始四、五年の間のことであらう。

二

次に本論の題號に就ては異傳あり、現流本にては麗本は大莊嚴論經とし、宋元明三本は大莊嚴經論とす。然るに法經錄以下の現存諸經錄を檢するに、凡て單に大莊嚴論とし一部十五卷或は十卷に編することを傳へ、現流本の如くにするは僅かに開元錄のみであり、而もそれには、麗本と宋元明三本とによつて經論とすると論經とするの異傳まで持つてゐる。これによつて見る時は、源流本の如く「經」字を有する題稱は、開元錄以後のことゝ見てよく、古題は「經」字を缺いて單に

菩薩本縁經解題……(一—二)……二九九

菩薩本縁經……(一—六四)……三〇一

卷の上……(一—二三)……三〇一

毘羅摩品第一……三〇一

一切施品第二……三一〇

一切持王子品第三……三一九

卷の中……(二三—四五)……三二三

善吉、生品第四……三三三

月光王品第五……三三八

卷の下……(四五—六四)……三四五

兎品第六……三四五

鹿品第七……三五一

龍品第八……三五八

◇　◇

索引……卷末

七三、憂悅伽王の二內官道理を諍ふ緣……二七二
七四、婆羅門奸詐を被り反つて佛に歸する緣……二七四
七五、罽賓國の夫婦自らを賣りて設會し現報を獲るの緣……二七六
七六、不飮酒戒を守りて病治する緣……二七九
七七、法師盧頭陀摩王の爲に飮酒狂癡を說く緣……二八一
七八、花氏城の二王子法に歸する緣……二八三
七九、毘伽城の佛塔自ら居處を移す緣……二八五
八〇、塔帳の材の爲に比丘と婆羅門と諍論する緣……二八六
八一、老母倒想もて水を飮める喩……二八八
八二、婢倒想して己の面貌を誇る緣……二八九
八三、猫母その兒に食を敎ふる緣……二九〇
八四、石匠石柱より下る喩……二九一
八五、敷臥具人王を諭す緣……二九二
八六、國王養馬の喩……二九二
八七、一國王醫師の爲に恩を報ゆる喩……二九三
八八、二女菴羅果を食ふ緣……二九五
八九、須彌羅比丘財を貪る喩……二九五
九〇、稱伽拔吒得賊の喩……二九六

巻の第十一 ……［一八八――二〇二］…… 一九六

六一、佛放牛喩を以て放牛人を化度したまふ縁 …… 一九六

六二、福梨伽佛を勸請したてまつる縁 …… 一九九

六三、比丘鵝を救はんとして穿珠師に打捧せらるゝ縁 …… 二〇四

巻の第十二 ……［二〇三――二一九］…… 二一一

六四、尸毘王鴿命を救ふ縁 …… 二一一

六五、迦旃延尊者娑羅那比丘の巴樹提王に忿恚せるを度せる縁 …… 二一八

巻の第十三 ……［二二〇――二四〇］…… 二二八

六六、香身辟支佛の舍利芳香を放つ縁 …… 二二八

六七、尸利毱多歸佛の縁 …… 二三一

巻の第十四 ……［二四一――二五九］…… 二四九

六八、佛姨母般涅槃の縁 …… 二四九

六九、六牙白象本生 …… 二五八

七〇、鹿王本生 …… 二六四

巻の第十五 ……［二六〇――二九〇］…… 二六八

七一、一切施王本生 …… 二六八

七二、鳥越鞘王意と業を説く縁 …… 二七一

卷の第八……〔一三九——一四八〕……一三七
四五、瞿沙尊者漢地の王子の疾眼を治する縁……一三七
四六、旃陀羅の六子佛戒を守りて遂に刑殺さるゝ縁……一三九
四七、優波離出家縁……一四二
四八、佛慳貪の周羅居士を度したまふ縁……一四七
四九、婆須王の侍人多翅那迦王の爲に殺されんとして定心を求むる縁……一五一
五〇、阿越提國因王提拔摩、旃陀羅母を禮さる縁……一五一
卷の第九……〔一四九——一六五〕……一五七
五一、佛拘睒彌鬪諍比丘を化したまふ縁……一五七
五二、佛一食戒を制したまひ婆多梨敎勅に違して悔ゆる縁……一六〇
五三、光明王乘象牸象を追ふ難にあひて貪欲の斷つべきを知る縁……一六四
五四、優波毱多尊者魔生を化する縁……一六七
卷の第十……〔一六六——一八七〕……一七四
五五、阿輸迦王法師の異香の因縁を問ふ縁……一七四
五六、摩訶迦葉貧母を度する縁……一七七
五七、一南無佛と稱して救拔せらるゝ縁……一八〇
五八、佛五比丘の爲に法輪を轉じたまふ縁……一八二
五九、天神貧人を化度する縁……一九〇
六〇、比丘檀越の爲に呪力の無効なるを説く縁……一九一

二八、貧優婆塞賣花の故事を說く緣……九五
二九、幻師幻女と欲事を作すを現じて諸法の如幻なるを說く緣……九七
三〇、阿育王の宮女聽法して須陀洹を證する緣……九九

卷の第六……〔九六——一一三〕……一〇四

三一、迦膩吒王尼犍陀の塔を拜せしにその塔の碎壞せし緣……一〇四
三二、罷道賣因比丘再び厭離發心する緣……一〇七
三三、聰慧の田夫福德の人を見て修善の心を發する緣……一一〇
三四、田夫伏藏を得て王に捉へられ財寶の惡毒蛇なるを解悟する緣……一一一
三五、輔相子王宮を犯し灰水を飮みて頓悟する緣……一一三
三六、師弟子に斷結せざれば再び煩惱の生ずることを說く緣……一一五
三七、上座比丘檀越に施食は解脫の爲にすべきを說く緣……一一六
三八、小兒盲龜浮木に會ふの佛說に感じて發心する緣……一一七
三九、劫賊薩多浮王の布施するを見て詠嘆する緣……一一八
四〇、比丘方便して盜賊を改悟出家せしむる緣……一一九

卷の第七……〔一一三——一三八〕……一二一

四一、和上誹謗者を喚んで善言もて慰諭し衣を與ふる緣……一二一
四二、目連、舍利弗より二弟子の敎育を聞く緣……一二三
四三、佛尼提を度したまふ緣……一二四
四四、魔化して比丘となり說法し法師に看破せらるゝ緣……一二五

一一、比丘劫賊の爲めに草に繫がれし緣……四七

一二、年少比丘上座に板を與へて溺死を救ふ緣……五〇

一三、多聞比丘禪思を怠りて地獄に墮する緣……五三

一四、罽尼吒王、乞兒を見て布施心を發せる緣……五七

一五、難吒王後世の安穩を計る緣……五九

一六、阿育王大臣耶賒の無信を化する緣……六三

巻の第四……〔五九――七四〕……六七

一七、國王、三羅漢を生める老母を恭敬する緣……六七

一八、億耳比丘餓鬼道に至りて布施道を聞く緣……六八

一九、少年比丘倮形婆羅門より呵せらるゝ緣……七〇

二〇、法師淫女を化して骸骨と作し衆人を化する緣……七一

二一、弗羯羅衞城の畫師罽那設食して報を獲る緣……七六

二二、貧女兩錢を捨施して現報に王妃となる緣……八〇

巻の第五……〔七五――九五〕……八三

二三、比丘婆羅門家に至るに屋棟摧折し、此の因緣に依て法に入る緣……八三

二四、婆迦利聚落主婆羅門に欺かれて火に投ぜんとして却つて佛道に入る緣……八四

二五、一商賈所施を牒して己財と稱し國王より讃へらるゝ緣……八八

二六、德叉尸羅の人僧坊に繫閉されて聽法し解脫を得る緣……九〇

二七、阿育王衆僧に半果を施す緣……九一

目次

大莊嚴〔經〕論解題 ……（本丁）〔一――七〕……（通頁）一

大莊嚴〔經〕論（全十五卷）……〔一――二九〇〕…… 九

卷の第一 ……〔一――一九〕…… 九

一、乾陀羅商賈婆羅門を化する縁 …… 九

二、憍尸迦婆羅門十二因緣を讀みて佛道に歸する縁 …… 一四

三、沙彌僧福田の功德を說いて檀越を化する縁 …… 二三

卷の第二 ……〔二〇――三八〕…… 二八

四、師子國王偸人を化して歸佛せしむる縁 …… 二八

五、優婆塞、外道を信ずる親友を化する縁 …… 三一

六、沙門羊となりて苦行婆羅門を化する縁 …… 三三

七、優婆塞棘刺苦行者を化する縁 …… 三五

八、比丘尼褸褐炙婆羅門を度する縁 …… 三八

九、貧優婆塞、伏藏を見て少欲知足を讃ふる縁 …… 四一

一〇、貧優婆塞、信財を第一の富と說く縁 …… 四四

卷の第三 ……〔三九――五八〕…… 四七

本縁部 八

美濃晃順譯

國譯一切經

大東出版社藏版